

下芝五反田遺跡

——古墳時代編——

北陸新幹線地域埋蔵文化財
発掘調査報告書第6集

1998

群馬県教育委員会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本鉄道建設公団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第230集

しも しば ご たん だ
下 芝 五 反 田 遺 跡
——古墳時代編——

北陸新幹線地域埋蔵文化財
発掘調査報告書第6集

1998

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
日 本 鉄 道 建 設 公 団



Hr-F A (VI) 層下全景 (北から)



灰白色シルト (VII) 層上面全景 (西から)



遺跡地土層断面



122号住居出土遺物



五反田地区1号土器集積出土遺物

序

北陸新幹線建設事業は、本年10月1日長野行新幹線として東京－長野間に開通し、冬季オリンピック関連のニュースも、毎日のようにテレビ、新聞紙上を賑わせております。この建設工事に伴う事前の埋蔵文化財調査は35カ所におよび、平成3年～7年の間、県教育委員会から委託を受け、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が調査しました。このうち、下芝五反田遺跡は、箕郷町の南部、高崎市との境界近くに位置し、平成4年～7年にわたって調査を実施いたしました。

今回報告される古墳時代編の特筆すべき遺跡調査の特徴は、地表下4～4.5mまでおよぶ、榛名二ツ岳泥流層下の深所調査であったことによります。榛名山の南麓に厚く堆積する泥流層という地理的条件から、発掘前に先んずる遺跡の認定に困難がともない、発掘に入ってから、安全対策で専門的なコンサルタントが必要であり、湧水対策、H鋼による掘削面までの崩落対策など、当事業団としてもかつてない万全の安全体制で望みました。

このように発掘技術、安全対策上の新技術に裏打ちされ、調査で明らかになった古墳時代の遺構、遺物には、極めて保存状態のよい古墳時代の竪穴住居、畠、とりわけ集落祭祀に関する土器集積があり、めざましい成果を上げることが出来ました。

お世話になった日本鉄道建設公団、県教育委員会文化財保護課、箕郷町教育委員会には深甚の謝意を表し、本書の刊行が地域の歴史理解の一助となることを念じつつ序の言葉といたします。

平成9年12月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長

小寺弘之

例 言

1. 本報告書は、北陸新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施した「下芝五反田遺跡」の古墳時代編の報告である。なお、事業名称は下芝清水遺跡、下芝五反田Ⅰ遺跡である。
2. 遺跡は、群馬県群馬郡箕郷町大字下芝字清水・五反田に所在する。発掘調査区は、清水地区が箕郷町下芝字清水459-1～3・460-1、五反田地区が箕郷町下芝字五反田704・705・706・708・720-1・720-3、717-1～5である。
3. 事業主体 日本鉄道建設公団
4. 調査主体 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
5. 調査期間 清水地区 平成4年度 1992年10月1日～1993年3月31日
平成5年度 1993年4月1日～5月31日
五反田地区 平成5年度 1993年9月1日～1994年3月31日
平成6年度 1994年4月1日～7月31日、9月14日～11月30日
平成7年度 1995年8月17日～10月13日
6. 調査組織 事務担当
常務理事 中村英一、菅野 清 事務局長 近藤 功、原田恒弘
調査研究部長 神保侑史 管理部長 佐藤 勉、蜂巢 実
調査研究第1課長 真下高幸 総務課長 斎藤俊一、小淵 淳
事務担当 国定 均、笠原秀樹、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、船津 茂、高橋定義、
松下 登、大沢友治、吉田恵子、並木綾子、今井とも子、角田みづほ、松井
美智子、塩浦ひろみ、内山佳子、星野美智子、羽鳥京子、菅原淑子、若田 誠
調査担当(清水地区)飯塚卓二、松井龍彦、井川達雄、麻生敏隆
(五反田地区)中東耕志、相京健史、小島敦子、松田 猛、神谷佳明、関根慎二、
高島英之、桜井美枝、池田政志、平方 篤、橋本 淳、大竹正隆、横山千晶
7. 整理主体 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
8. 整理期間 平成8年度・9年度 1996年4月1日～1997年7月31日
9. 整理組織 事務担当
常務理事 菅野 清 事務局長 原田恒弘
副事務局長兼調査研究第1部長 赤山容造 管理部長 蜂巢 実、渡辺 健
調査研究第3課長 真下高幸 総務課長 小淵 淳
事務担当 国定 均、笠原秀樹、井上 剛、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、宮崎忠司、
岡嶋伸昌、大沢友治、吉田恵子、並木綾子、今井とも子、松井美智代、内山
佳子、星野美智子、羽鳥京子、菅原淑子、若田 誠、山口陽子、佐藤美佐子、
本間久美子、北原かおり、安藤友美、狩野真子
整理担当 神谷佳明
整理補助 山崎由紀枝、今井サチ子、土田三代子、大塚とし子、長谷川公子、荻野恵子、
早部洋子、新井千恵子 (機械実測)田所順子、木原幸子

10. 本報告書作成の担当

編集・本文執筆・観察表 神谷佳明

遺構写真撮影 (清水地区)平成5年度の調査担当者(五反田地区)平成6年度の調査担当者

アドバルーン撮影 (株)技研測量設計

遺物写真撮影 佐藤元彦

分析・委託 石材鑑定 群馬地質研究会 飯島静男

地質調査、テフラ同定、植物珪酸体分析、花粉分析 (株)古環境研究所

樹種同定、赤色物質分析 (株)パレオ・ラボ

DNA分析 国立遺伝学研究所 佐藤洋一郎

遺構・遺物図トレース (株)測研

11. 出土遺物及び記録図・写真などの記録類は、すべて群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

12. 発掘調査にあたっては、地元箕郷町をはじめとして高崎市、安中市、群馬町、前橋市等から多くの方々に発掘作業に従事していただいた。

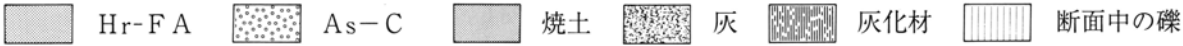
13. 発掘調査・整理作業を行うにあたっては、次の機関・諸氏から貴重な御教示や御指導をいただいた。記して感謝の意を表したい。(敬称省略、五十音順)

箕郷町教育委員会 高崎市教育委員会 群馬町教育委員会 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

石井克己、大塚昌彦、黒田 晃、坂本和俊、清水 豊、志村 哲、関 和彦、田口一郎、堤 隆、

津野 仁、細野高伯、若狭 徹、渡辺 一、綿貫鋭次郎、当事業団職員

凡 例

1. 挿図中に使用した方位は、座標北を表示している。
2. 本報告書で使用したテフラの略号は、浅間B軽石 As-B、浅間C軽石 As-C、榛名二ッ岳噴出軽石 Hr-F P、榛名二ッ岳噴出火山灰 Hr-F Aである。
3. 挿図中の遺構図の縮尺については、全体図1/200、住居・竪穴遺構1/100・1/60、カマド・炉1/30、掘立柱建物・平地建物1/60、土坑1/40、溝1/100・1/50、土器集積1/20、畠1/100である。
なお、これ以外の縮尺を使用するときには、明記してあるので参照されたい。
4. 挿図中の遺物図の縮尺については、土器 1 : 3、石器 1 : 3、石製模造品 1 : 2・1 : 1である。
また、これ以外の縮尺を使用するときには、明記してあるので参照されたい。
5. 図版中の遺物の縮尺は、概ね1/1~1/4である。
6. 遺構番号は、各調査面を通しての番号である。調査範囲内には、五反田地区と清水地区が存在するが、清水地区のものについては遺構番号の前に「清水地区」を付してある。また、遺構番号の前に特に調査区名を付していないものは五反田地区の遺構を表す。
7. 本報告書で使用した地形図は、以下のとおりである。
国土地理院 地勢図 1/200,000 「長野」・「宇都宮」
地形図 1/25,000 「下室田」
箕郷町都市計画図
8. 遺構の面積は、デジタルプランメーターで3回計測した平均値を採用した。
9. 本報告書中で使用したスクリーンパターンは下記のとおりである。
 Hr-F A As-C 焼土 灰 灰化材 断面中の礫
10. 本報告書で掲載した「古墳時代」は、榛名二ッ岳噴火の際に起きたHr-F A・Hr-F Pによる泥流層下面まをを対象としている。

目 次

序	i		
例言	iii		
凡例	v		
目次	vi		
挿図目次	vii		
表 目次	viii		
図版目次	viii		
I 発掘調査の経過		VI 古墳時代の成果と問題点	
1. 発掘調査の経過	3	1. 出土土器について	155
II 調査の方法		2. 遺構について	171
1. 調査の手順	6	VII 科学分析・同定	
2. 基本層序	7	1. 五反田地区地質調査	179
3. 調査区の設定	8	2. 清水地区1号住居のテフラ調査	182
III 周辺の環境		3. 清水地区のテフラ調査	186
1. 地理的環境	10	4. 清水地区畠出土	
2. 歴史的環境	12	植物遺体珪酸体分析	189
IV 五反田地区の遺構と遺物		5. 清水地区1号住居出土	
1. 概 要	15	植物遺体珪酸体分析	193
2. 住 居	18	6. 清水地区出土	
3. 竪穴遺構	95	植物遺体のDNA分析	196
4. 掘立柱建物	96	7. 清水地区の花粉分析	197
5. 平地建物	98	8. 五反田地区出土樹種同定	198
6. 土 坑	103	9. 五反田地区出土赤色物質について	204
7. 土器集積	105		
8. 畠	114	遺物観察表	
9. 遺構外出土遺物	126	五反田地区	209
V 清水地区の遺構と遺物		清水地区	242
1. 概 要	129	図 版	
2. 住 居	132	明治13～14年測図陸軍迅速図	
3. 平地建物	145	昭和22年米軍撮影航空写真	
4. 土 坑	147	五反田地区	
5. 溝	148	清水地区	
6. 土器集積	151	分析・鑑定	
7. 畠	152		
8. 遺構外出土遺物	154		

挿 図 目 次

第 1 図	遺跡の位置(1/200,000)	2	第 60 図	128号住居遺物図(1)	61
第 2 図	発掘調査区の範囲(1/1,000)	4	第 61 図	128号住居遺物図(2)	62
第 3 図	古墳時代の発掘調査区(1/1,000)	5	第 62 図	128号住居遺物図(3)	63
第 4 図	遺跡の基本的な土層	7	第 63 図	128号住居遺物図(4)	64
第 5 図	調査区の設定(中・小区画)	8	第 64 図	128号住居遺物図(5)	65
第 6 図	調査区の設定(大区画)	9	第 65 図	128号住居遺物図(6)	66
第 7 図	遺跡周辺の地形図	11	第 66 図	128号住居遺物図(7)	67
第 8 図	周辺の遺跡	13	第 67 図	129号住居平面・断面図	68
第 9 図	五反田地区Hr-F A (VI)層下全体図	16	第 68 図	129号住居遺物図	69
第 10 図	五反田地区灰白色シルト(VIII)層上面全体図	17	第 69 図	130号住居平面・断面図	70
第 11 図	122号住居平面・断面図	18	第 70 図	131号住居平面・断面図	71
第 12 図	122号住居土層断面図	19	第 71 図	131号住居カマド図	72
第 13 図	122号住居竪穴部分平面図	20	第 72 図	131号住居遺物図(1)	72
第 14 図	122号住居カマド図	21	第 73 図	131号住居遺物図(2)	73
第 15 図	122号住居掘り方図	22	第 74 図	131号住居遺物図(3)	74
第 16 図	122号住居遺物図(1)	22	第 75 図	131号住居遺物図(4)	75
第 17 図	122号住居遺物図(2)	23	第 76 図	131号住居遺物図(5)	76
第 18 図	122号住居遺物図(3)	24	第 77 図	132号住居平面・断面図	77
第 19 図	122号住居遺物図(4)	25	第 78 図	132号住居カマド図	78
第 20 図	122号住居遺物図(5)	26	第 79 図	132号住居遺物図(1)	78
第 21 図	122号住居遺物図(6)	27	第 80 図	132号住居遺物図(2)	79
第 22 図	123号住居平面図	28	第 81 図	132号住居遺物図(3)	80
第 23 図	123号住居土層断面図	29	第 82 図	132号住居遺物図(4)	81
第 24 図	123号住居カマド図	30	第 83 図	133号住居平面・断面図	82
第 25 図	123号住居遺物図(1)	30	第 84 図	133号住居カマド図	82
第 26 図	123号住居遺物図(2)	31	第 85 図	133号住居遺物図	83
第 27 図	123号住居遺物図(3)	32	第 86 図	134号住居平面・断面図	84
第 28 図	123号住居遺物図(4)	33	第 87 図	134号住居カマド図	84
第 29 図	123号住居遺物図(5)	34	第 88 図	134号住居遺物図	85
第 30 図	124号住居平面図	35	第 89 図	135号住居平面・断面図	86
第 31 図	124号住居土層断面図	36	第 90 図	135号住居掘り方図	87
第 32 図	124号住居竪穴部分平面図	37	第 91 図	135号住居遺物図	87
第 33 図	124号住居カマド図	37	第 92 図	136号住居平面・断面図	88
第 34 図	124号住居遺物図(1)	38	第 93 図	136号住居カマド図	89
第 35 図	124号住居遺物図(2)	39	第 94 図	136号住居遺物図	89
第 36 図	124号住居遺物図(3)	40	第 95 図	137号住居平面・断面・炉図	90
第 37 図	125号住居平面図	40	第 96 図	137号住居掘り方図	91
第 38 図	125号住居土層断面図	41	第 97 図	137号住居遺物図(1)	91
第 39 図	125号住居竪穴部分	42	第 98 図	137号住居遺物図(2)	92
第 40 図	125号住居カマド図	43	第 99 図	138号住居平面・断面・炉図	93
第 41 図	125号住居遺物図(1)	43	第100図	138号住居掘り方図	93
第 42 図	125号住居遺物図(2)	44	第101図	138号住居遺物図(1)	93
第 43 図	125号住居遺物図(3)	45	第102図	138号住居遺物図(2)	94
第 44 図	125号住居遺物図(4)	46	第103図	1号竪穴遺構平面・断面図	95
第 45 図	126号住居平面・土層断面図	47	第104図	1号竪穴遺構遺物図	95
第 46 図	126号住居竪穴部分	48	第105図	4号掘立柱建物平面・断面図	96
第 47 図	126号住居周堤帯下遺物出土図	48	第106図	5号掘立柱建物平面・断面図	97
第 48 図	126号住居遺物図(1)	49	第107図	5号掘立柱建物遺物図	97
第 49 図	126号住居遺物図(2)	50	第108図	1号平地建物平面・断面図	98
第 50 図	126号住居遺物図(3)	51	第109図	2・3号平地建物平面・断面図	98
第 51 図	126号住居遺物図(4)	52	第110図	4・5号平地建物平面・断面図	99
第 52 図	126号住居遺物図(5)	53	第111図	6・7・8・9号平地建物平面・断面・遺物図	100
第 53 図	126号住居遺物図(6)	54	第112図	10・11号平地建物平面・断面図	101
第 54 図	127号住居平面・断面図	55	第113図	12・13号平地建物平面・断面図	102
第 55 図	127号住居カマド図	56	第114図	14号平地建物平面・断面図	102
第 56 図	127号住居遺物図	57	第115図	土坑平面・断面図・遺物図	104
第 57 図	128号住居平面・断面図	58	第116図	1号土器集積平面・断面図	105
第 58 図	128号住居遺物出土図	59	第117図	1号土器集積遺物図(1)	106
第 59 図	128号住居カマド図	60	第118図	1号土器集積遺物図(2)	107

第119図	1号土器集積遺物図(3)	108
第120図	1号土器集積遺物図(4)	109
第121図	1号土器集積遺物図(5)	110
第122図	2号土器集積平面・断面図	111
第123図	2号土器集積遺物図(1)	111
第124図	2号土器集積遺物図(2)	112
第125図	2号土器集積遺物図(3)	113
第126図	Hr-F A (VI)層下畠全体図	114
第127図	Ⅷ層上面畠サク跡図	115
第128図	畠区画1・畠区画2平面図	116
第129図	畠区画1・畠区画2断面図	117
第130図	畠区画1遺物図(1)	118
第131図	畠区画1遺物図(2)	119
第132図	畠区画2遺物図(1)	119
第133図	畠区画2遺物図(2)	120
第134図	畠区画3平面・断面図	121
第135図	畠区画3遺物図	122
第136図	畠区画4・7平面・断面図	123
第137図	畠区画4遺物図	123
第138図	畠区画5平面・断面図・遺物図	124
第139図	畠区画6平面・断面図	125
第140図	畠区画6遺物図	126
第141図	遺構外出土遺物図(1)	127
第142図	遺構外出土遺物図(2)	128
第143図	清水地区Hr-F A層下全体図	130
第144図	清水地区古墳時代全体図	131
第145図	1号住居平面・断面図	132
第146図	1号住居土層断面図	133
第147図	1号住居竪穴部分・カマド・炉図	134
第148図	1号住居掘り方平面・断面図	135
第149図	1号住居遺物図(1)	135
第150図	1号住居遺物図(2)	136
第151図	1号住居遺物図(3)	137
第152図	1号住居遺物図(4)	138
第153図	1号住居遺物図(5)	139
第154図	1号住居遺物図(6)	140
第155図	2号住居平面・断面図	141
第156図	2号住居土層断面・炉断面図	142
第157図	2号住居竪穴部分・周堤帯下遺物出土状態図	143
第158図	2号住居遺物図(1)	143
第159図	2号住居遺物図(2)	144
第160図	1号平地建物平面・断面・遺物図	145

第161図	2号平地建物平面・断面・遺物図	146
第162図	3号平地建物平面・断面・カマド・遺物図	147
第163図	1号土坑平面・断面図	147
第164図	10号溝平面図	148
第165図	10号溝土層断面図	149
第166図	10号溝遺物図(1)	149
第167図	10号溝遺物図(2)	150
第168図	1号土器集積平面・断面図	151
第169図	1号土器集積遺物図(1)	151
第170図	1号土器集積遺物図(2)	152
第171図	Hr-F A層下畠平面・断面図	153
第172図	遺構外出土遺物図	154
第173図	杯A分類図	155
第174図	杯B分類図	156
第175図	杯C分類図	157
第176図	高杯A分類図	157
第177図	高杯B～F分類図	158
第178図	埴分類図	159
第179図	甗分類図	160
第180図	小型甕・台付甕分類図	161
第181図	甕分類図	162
第182図	壺分類図	163
第183図	I期の土器	165
第184図	II期の土器	166
第185図	III期の土器	166
第186図	IV期の土器	167
第187図	V期の土器	168
第188図	行力春名社遺跡1号・3号住居の土器	169
第189図	五反田地区遺構配置図	172
第190図	五反田地区住居変遷図	174
第191図	遺跡地周辺の古墳時代様相図	176
第192図	五反田地区土層柱状図	181
第193図	清水地区1号住居土層柱状図	185
第194図	清水地区1号住居重鉱物組成ダイアグラム	185
第195図	清水地区1号住居の粒度分布曲線	185
第196図	清水地区の地質柱状図	188
第197図	清水地区畠断面における植物珪酸体分布結果	192
第198図	清水地区1号住居壁の植物珪酸体分布結果	195
第199図	清水地区1号住居周堤帯南東部の植物珪酸体分布結果	195
第200図	五反田地区122号住居の炭化材の産状とその樹種	202
第201図	赤色顔料蛍光X線スペクトル図	206

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧	14
第2表	住居出土土器頻度表	164
第3表	清水地区のテフラ検出分析結果	184
第4表	清水地区の重鉱物組成分析結果	184
第5表	清水地区1号住居壁の粒度分析結果	184
第6表	清水地区1号住居周堤帯の粒度分析結果	184
第7表	清水地区におけるテフラ検出分析結果	187

第8表	清水地区畠植物珪酸体分析結果	192
第9表	主な分類群の植物体量の推定値	192
第10表	清水地区の植物珪酸体分析結果	195
第11表	主な分類群の植物体量の推定値	195
第12表	下芝五反田遺跡出土炭化材の樹種	203
第13表	赤色物質分析試料一覧	204

図 版 目 次

中扉裏	陸軍参謀本部第一軍管地方迅速測図 金古駅(2万分の1)明治13~14年測図
P L 1	遺跡地周辺(1947年米軍撮影航空写真)
五反田地区	
P L 2	五反田地区Hr-F A (VI)層下全景(垂直)

	五反田地区Hr-F A (VI)層下全景(斜め 北から)
	五反田地区Hr-F A (VI)層下全景(斜め 西から)
P L 3	五反田地区シルト(Ⅷ)層上面全景(垂直)
	五反田地区シルト(Ⅷ)層上面全景(斜め 北から)
	五反田地区シルト(Ⅷ)層上面全景(斜め 西から)

P L 4	122号住居全景 122号住居土層断面(A~A') 122号住居土層断面(B~B') 122号住居炭化材出土状態(南東部) 122号住居炭化材出土状態(壁面)		
P L 5	122号住居カマド(調査前) 122号住居カマド及び周辺遺物出土状態 122号住居カマド土層断面(A~A') 122号住居カマド土層断面(B~B') 122号住居カマド煙道部土層断面 122号住居カマド 122号住居掘り方 122号住居掘り方		127号住居カマド 127号住居カマド掘り方 127号住居掘り方
P L 6	123号住居全景 123号住居泥流層下検出状態 123号住居土層断面(A~A') 123号住居土層断面(B~B') 123号住居カマド及び周辺遺物・炭化材出土状態		P L 14 128号住居全景(西から) 128号住居全景(北から) 128号住居土層断面(A~A') 128号住居土層断面(B~B') 128号住居遺物出土状態(投棄遺物)
P L 7	123号住居カマド土層断面 123号住居カマド 123号住居カマド掘り方 123号住居掘り方 123号住居掘り方 123号住居周堤帯下遺物出土状態 123号住居周堤帯下遺物出土状態 123号住居周堤帯下遺物出土状態		P L 15 128号住居遺物出土状態(投棄遺物) 128号住居南貯蔵穴 128号住居北貯蔵穴 128号住居カマド遺物出土状態 128号住居カマド 128号住居掘り方土層断面(A~A') 128号住居掘り方土層断面(B~B') 128号住居掘り方
P L 8	124号住居全景 124号住居全景(東から) 124号住居土層断面(A~A') 124号住居土層断面(B~B') 124号住居炭化材出土状態		P L 16 129号住居全景(東から) 129号住居全景(南から) 129号住居全景(調査区拡張後) 129号住居土層断面 130号住居全景(北から) 130号住居全景(西から) 130号住居土層断面(B~B') 130号住居土層断面(A~A')
P L 9	124号住居カマド断面 124号住居カマド 124号住居カマド及び周辺遺物出土状態 124号住居掘り方 125号住居全景		P L 17 131号住居全景 131号住居遺物出土状態(投棄遺物 西から) 131号住居遺物出土状態(投棄遺物 北から) 131号住居土層断面(A~A') 131号住居土層断面(B~B')
P L 10	125号住居遺物出土状態(南から) 125号住居遺物出土状態(西から) 125号住居土層断面(A~A') 125号住居土層断面(B~B') 125号住居カマド断面(A~A') 125号住居カマド断面(B~B') 125号住居カマド 125号住居掘り方		P L 18 131号住居カマド断面 131号住居カマド 131号住居カマド掘り方 131号住居掘り方 132号住居全景
P L 11	126号住居全景 126号住居全景(西から) 126号住居土層断面(A~A') 126号住居土層断面(B~B') 126号住居北壁断面		P L 19 132号住居遺物出土状態 132号住居カマド断面 132号住居カマド遺物出土状態 132号住居カマド 133号住居全景 133号住居土層断面(A~A') 133号住居土層断面(B~B') 133号住居カマド残存状態
P L 12	126号住居周堤帯土層断面 126号住居周堤帯土層断面 126号住居周堤帯下面 126号住居周堤帯下遺物出土状態 126号住居周堤帯下遺物出土状態 126号住居周堤帯下遺物出土状態 126号住居掘り方(西から) 126号住居掘り方(東から)		P L 20 134号住居全景 134号住居全景 134号住居土層断面 134号住居カマド 134号住居掘り方
P L 13	127号住居全景 127号住居土層断面 127号住居貯蔵穴 127号住居カマド断面(A~A') 127号住居カマド断面(B~B')		P L 21 135号住居全景 135号住居全景 135号住居土層断面(A~A') 135号住居土層断面(B~B') 135号住居掘り方
			P L 22 136号住居全景 136号住居遺物出土状態 136号住居カマド断面 136号住居カマド 136号住居掘り方
			P L 23 137号住居全景 137号住居土層断面(A~A') 137号住居土層断面(B~B') 137号住居遺物出土状態(全景) 137号住居遺物出土状態(部分)

P L 24	137号住居遺物出土状態(部分) 137号住居遺物出土状態(部分) 137号住居貯蔵穴 137号住居掘り方 138号住居全景	畠区画1(耕作土断面) 畠区画1(耕作土断面) 畠区画1(耕作土中遺物出土状態) 畠区画1(耕作土中遺物出土状態)
P L 25	138号住居土層断面(A~A') 138号住居土層断面(B~B') 138号住居遺物出土状態(全景) 138号住居遺物出土状態(部分) 138号住居炉 138号住居掘り方 1号竪穴遺構全景 4号・5号掘立柱建物全景	P L 35 畠区画3 畠区画3(126号住居付近) 畠区画3 畠区画3(耕作土断面) 畠区画4 畠区画4 畠区画5 畠区画5 畠区画6 畠区画6
P L 26	4号掘立柱建物全景 4号掘立柱建物柱穴土層断面 4号掘立柱建物柱穴土層断面 4号掘立柱建物柱穴土層断面 5号掘立柱建物全景 5号掘立柱建物柱穴土層断面 5号掘立柱建物柱穴土層断面 5号掘立柱建物柱穴土層断面	P L 36 シルト面畠サク跡残存状態(86区A-7付近) シルト面畠サク跡残存状態(86区T-7付近) シルト面畠サク跡残存状態(調査区北西部)
P L 27	1号~4号平地建物全景 1号~3号平地建物全景 1号平地建物全景 2号・3号平地建物全景 4号平地建物	P L 37 122号住居出土遺物(1) P L 38 122号住居出土遺物(2) P L 39 122号住居出土遺物(3) P L 40 122号住居出土遺物(4) P L 41 122号住居出土遺物(5) 123号住居出土遺物(1)
P L 28	5号・6号平地建物全景 5号平地建物全景 6号平地建物全景 7号平地建物全景 8号・9号平地建物 8号・9号平地建物 10号平地建物全景 10号平地建物全景	P L 42 123号住居出土遺物(2) P L 43 123号住居出土遺物(3) P L 44 124号住居出土遺物(1) P L 45 124号住居出土遺物(2) P L 46 124号住居出土遺物(3) 125号住居出土遺物(1) P L 47 125号住居出土遺物(2) P L 48 125号住居出土遺物(3) 126号住居出土遺物(1)
P L 29	11号平地建物全景 11号平地建物全景 12号平地建物全景 12号平地建物全景 13号平地建物 13号平地建物 14号平地建物全景 14号平地建物全景	P L 49 126号住居出土遺物(2) P L 50 126号住居出土遺物(3) P L 51 126号住居出土遺物(4) P L 52 127号住居出土遺物 P L 53 128号住居出土遺物(1) P L 54 128号住居出土遺物(2) P L 55 128号住居出土遺物(3) P L 56 128号住居出土遺物(4) P L 57 128号住居出土遺物(5) P L 58 128号住居出土遺物(6) 129号住居出土遺物
P L 30	84号土坑 86号土坑 100号土坑 100号土坑 1号土器集積全景	P L 59 131号住居出土遺物(1) P L 60 131号住居出土遺物(2) P L 61 131号住居出土遺物(3) P L 62 131号住居出土遺物(4) 132号住居出土遺物(1)
P L 31	1号土器集積全景 1号土器集積(近接) 1号土器集積(近接) 1号土器集積(石製模造品出土状態)	P L 63 132号住居出土遺物(2) P L 64 132号住居出土遺物(3) 133号住居出土遺物
P L 32	2号土器集積全景 2号土器集積(近接) 2号土器集積(近接) 2号土器集積(近接) 2号土器集積(近接)	P L 65 134号住居出土遺物 135号住居出土遺物 P L 66 136号住居出土遺物 137号住居出土遺物(1)
P L 33	畠区画1・2 畠区画1・2	P L 67 137号住居出土遺物(2) 138号住居出土遺物(1)
P L 34	畠区画1 畠区画1 畠区画1 畠区画1(125号住居付近)	P L 68 138号住居出土遺物(2) P L 69 1号竪穴遺構出土遺物 5号掘立柱建物出土遺物 8号平地建物出土遺物 100号土坑出土遺物

- 1号土器集積出土遺物(1)
- P L 70 1号土器集積出土遺物(2)
- P L 71 1号土器集積出土遺物(3)
- P L 72 1号土器集積出土遺物(4)
- P L 73 1号土器集積出土遺物(5)
- P L 74 1号土器集積出土遺物(6)
- P L 75 2号土器集積出土遺物(1)
- P L 76 2号土器集積出土遺物(2)
- P L 77 畠 区画1 出土遺物(1)
- P L 78 畠 区画1 出土遺物(2)
- 畠 区画2 出土遺物
- P L 79 畠 区画3 出土遺物
- 畠 区画4 出土遺物
- P L 80 畠 区画5 出土遺物
- 畠 区画6 出土遺物
- 遺構外出土遺物(1)
- P L 81 遺構外出土遺物(2)
- P L 82 遺構外出土遺物(3)
- 清水地区**
- P L 83 清水地区Hr-F A層下面全景(北から)
- 清水地区Hr-F A層下面全景(東から)
- P L 84 清水地区古墳時代遺構全景(北から)
- 清水地区古墳時代遺構全景(東南から)
- P L 85 1号住居全景
- 1号住居調査前
- 1号住居土層断面
- 1号住居遺物出土状態(全景)
- 1号住居遺物出土状態(部分)
- P L 86 1号住居遺物出土状態(部分)
- 1号住居遺物出土状態(部分)
- 1号住居周堤帯遺物残存状態
- 1号住居植物遺体残存状態
- 1号住居植物遺体残存状態
- 1号住居カマド
- 1号住居炉
- 1号住居炉
- P L 87 2号住居全景
- 2号住居竪穴部分
- 2号住居遺物出土状態(全景)
- 2号住居遺物出土状態(部分)
- 2号住居土層断面
- P L 88 2号住居周堤帯下遺物出土状態
- 2号住居周堤帯下遺物出土状態
- P L 89 1号・2号・3号平地建物全景
- 1号・2号・3号平地建物全景
- 1号平地建物
- 1号平地建物(床下)
- 2号平地建物
- P L 90 2号平地建物(床下)
- 3号平地建物
- 3号平地建物カマド
- 3号平地建物カマド
- 1号土坑
- 10号溝
- 10号溝土層断面
- 10号溝土層断面
- P L 91 1号土器集積
- 1号土器集積
- P L 92 畠(北西から)
- 畠(東から)
- 畠 植物遺体残存状態
- 畠 植物遺体残存状態
- 畠 植物遺体残存状態
- P L 93 1号住居出土遺物(1)
- P L 94 1号住居出土遺物(2)
- P L 95 1号住居出土遺物(3)
- P L 96 1号住居出土遺物(4)
- P L 97 1号住居出土遺物(5)
- P L 98 1号住居出土遺物(6)
- 2号住居出土遺物(1)
- P L 99 2号住居出土遺物(2)
- P L 100 2号住居出土遺物(3)
- 1号平地建物出土遺物
- 2号平地建物出土遺物
- 3号平地建物出土遺物
- 10号溝出土遺物(1)
- P L 101 10号溝出土遺物(2)
- P L 102 10号溝出土遺物(3)
- 1号土器集積出土遺物(1)
- P L 103 1号土器集積出土遺物(2)
- P L 104 遺構外出土遺物
- 分析・鑑定**
- P L 105 清水地区1号住居残存植物遺体珪酸体顕微鏡写真(1)
- P L 106 清水地区1号住居残存植物遺体珪酸体顕微鏡写真(2)
- P L 107 清水地区畠残存植物遺体珪酸体顕微鏡写真(1)
- P L 108 清水地区畠残存植物遺体珪酸体顕微鏡写真(2)
- 清水地区花粉遺体顕微鏡写真
- P L 109 清水地区畠出土植物遺体DNAバンドパターン
- P L 110 五反田地区出土炭化材の樹種(1)
- P L 111 五反田地区出土炭化材の樹種(2)
- P L 112 五反田地区出土炭化材の樹種(3)
- P L 113 五反田地区出土炭化材の樹種(4)
- P L 114 五反田地区出土炭化材の樹種(5)
- P L 115 五反田地区出土炭化材の樹種(6)

発掘調査報告書抄録

ふりがな	しもしばごたんだいせき						
書名	下芝五反田遺跡						
副書名	北陸新幹線地域埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次	第6集						
シリーズ名	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告						
シリーズ番号	第230集						
編著者	神谷佳明						
編集機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団						
所在地	〒377 群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2 TEL 0279-52-2511						
発行年月日	1998年3月25日						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号				
しもしばごたんだ 下芝五反田	ぐんまけんぐんまぐん 群馬県群馬郡 みぎとまちおおあざしもしば 箕郷町大字下芝	10323	00359	36°22'22"	19921001	9,050	鉄道(北陸新幹線)建 設に伴う事前調査
			00371	138°56'06"	19951013		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
	集落	古墳時代	竪穴住居・掘立柱建物 平地建物	土師器・須恵器 石器・石製模造品		Hr-F A・F P 泥流堆積物によって周堤帯が残存する良好な状態、平地建物円形と長方形の2形態	
	生産	古墳時代	畠	土師器・石製模造品		Hr-F A・F P 泥流堆積物による良好な残存	
	祭祀	古墳時代	土器集積	土師器・石製模造品		住居等では出土しない特殊な器形の土師器がある	

本 文

I 発掘調査の経過

1. 発掘調査の経過

北陸新幹線建設に伴う発掘調査の経緯については、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団報告第183集「行力榛名社遺跡 北陸新幹線地域埋蔵文化財発掘調査報告書第1集」1994年発行第1章(P 1～6)に詳しく記載されているので参照していただきたい。

下芝五反田遺跡は、箕郷町の南部、高崎市との境界近くに位置する。発掘調査範囲は、北陸新幹線高崎起点7,640m～7,700m(清水地区)、7,700m～7,820mの本線用地とその北側に位置する箕郷変電所用地(五反田地区)である。発掘調査を行った面積は、清水地区が1,000㎡、五反田地区が8,050㎡の合計9,050㎡である。

発掘調査の期間は、清水地区が1992年10月1日から1993年5月31日までの8ヶ月で実施した。五反田地区は、用地買収の進捗状況や変電所建設変更の影響により1993年9月1日から1994年7月31日、9月14日から11月30日、1995年8月18日から10月13日にかけての3次にわたる15.5ヶ月で実施した。

発掘調査地は、黄褐色砂層下、浅間山B軽石(A_s-B)層下、Hr-F A・Hr-F P泥流層上面、Hr-F A層下面、黒褐色土(Hr-F A層下畠耕作土)層下の各面より遺構を検出した。なお、黄褐色砂層下の遺構は、変電所用地の北東部の450㎡だけで水田遺構が確認された。Hr-F A・Hr-F P泥流層及びHr-F A層下面については変電所用地西側から本線用地にかけてはトレンチ調査で埋没河川が存在が確認され遺構が存在しないことが確認されたことからHr-F A層下の調査は清水地区と五反田地区の変電所用地で行った。また、Hr-F A層下の発掘調査は、地表下4～4.5mと深所になるため安全対策を行って実施した。安全対策は、遺構確認面が地表面より4～4.5m下の深所に及び泥流層がφ1mの礫を含むため掘削すると崩落しやすいため調査区周囲にH鋼を打設し、地表面から約1m下より45度ほどの傾

斜をとって遺構確認面までの掘削をおこない、傾斜下には湧水排出用の溝を配置した。

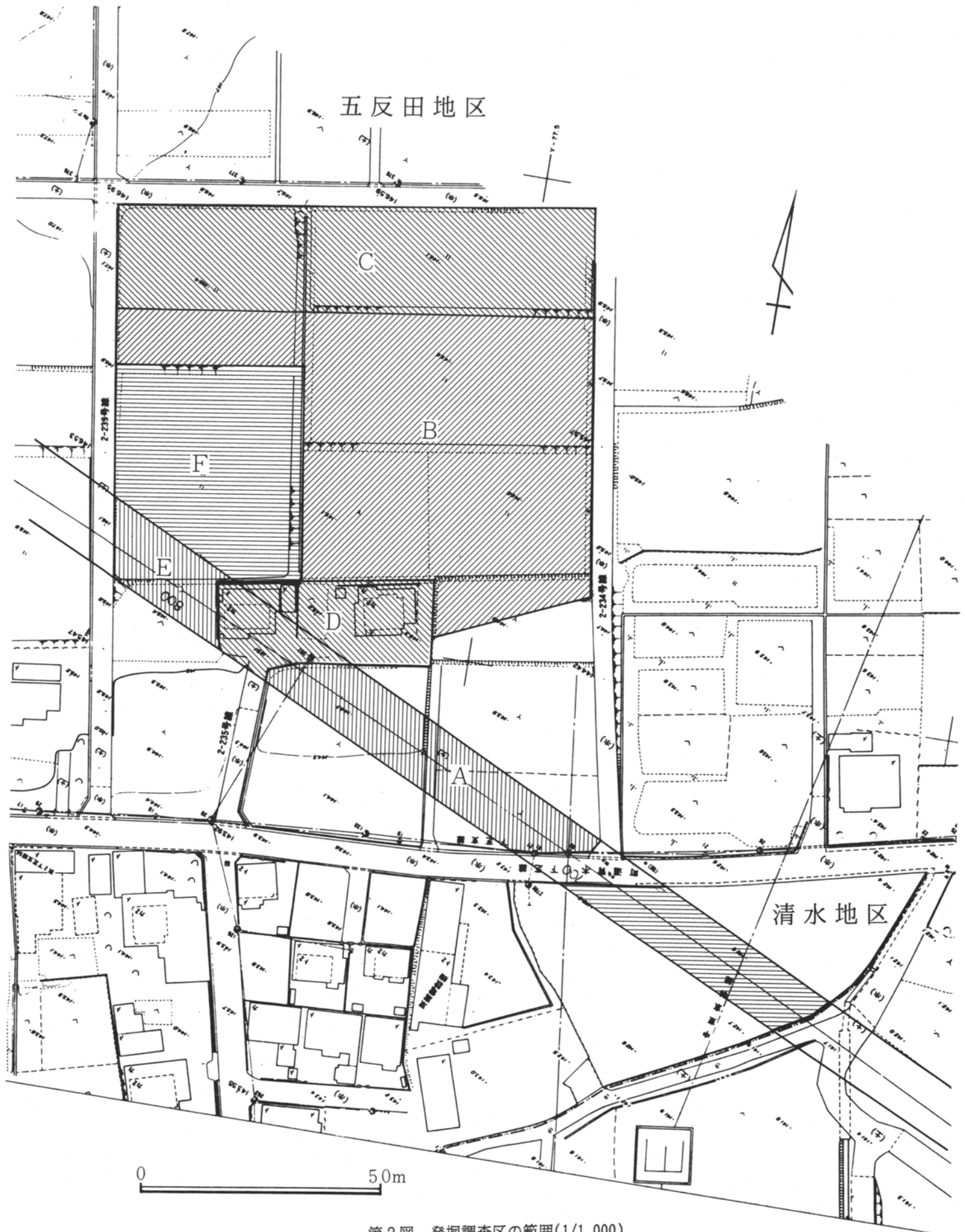
発掘調査は、清水地区では各遺構確認面ごとに実施したが、箕郷町教育委員会が担当する東京電力の送電用鉄塔移設工事に伴う発掘調査地と隣接し工期が同じことから鉄塔用地と同一に掘削、調査、安全対策を実施した。

五反田地区では、用地買収済の箇所ごとに順次実施した。93年度は、本線用地の東側(第3図のA)と変電所用地東側・北側(第3図のB)について着手したが、変電所用地の未買収地は交渉に難航が予想されたため発掘調査中に設計が変更になり当初予定地の北側部分(第3図のC)が追加になった。なお、93年度は、A・B・C部分のHr-F A・Hr-F P泥流層上面までについて調査を実施し、B・C部分はHr-F A・Hr-F P泥流層の掘削及び下面調査のための安全対策についても行った。

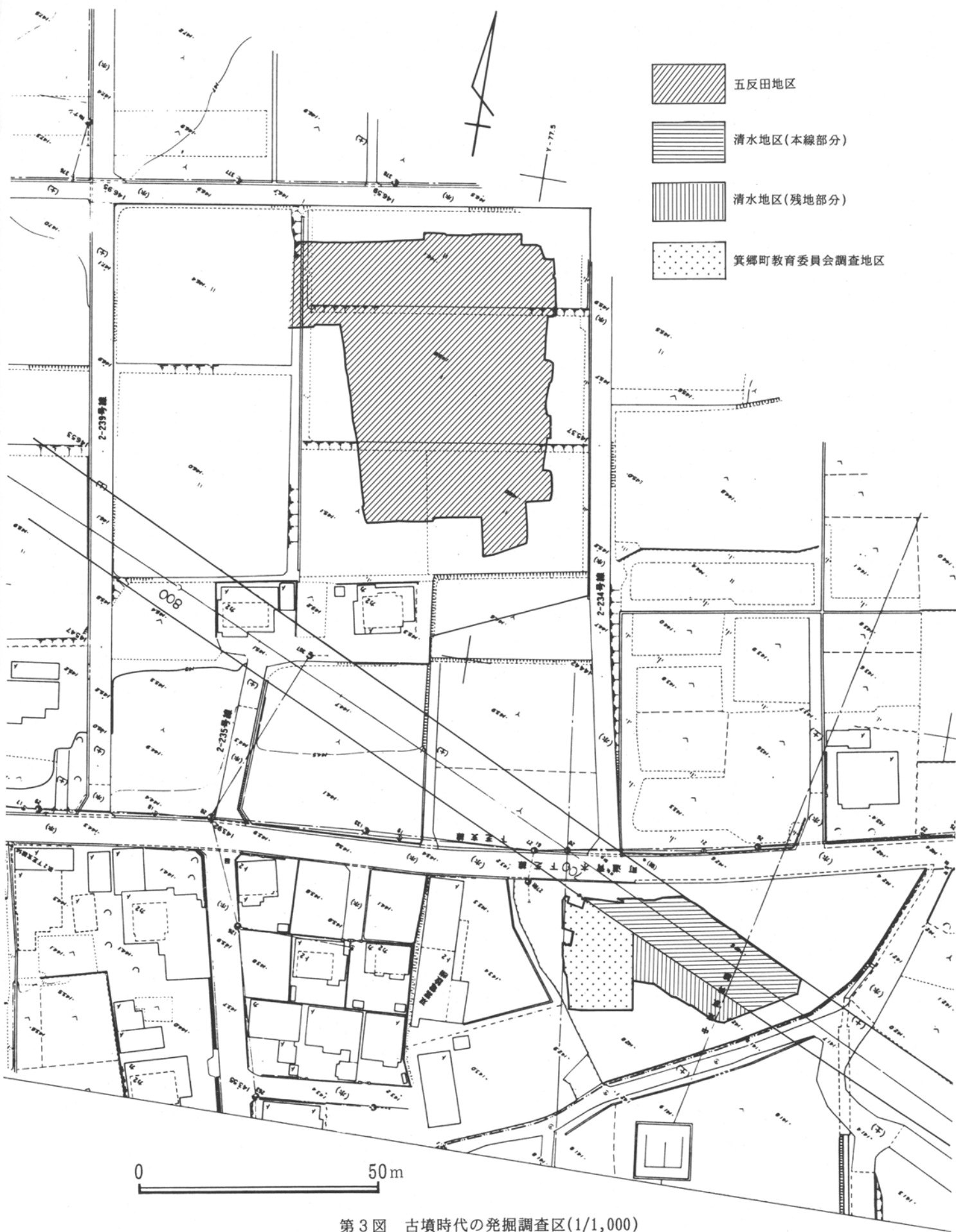
94年度は、前年度調査した変電所部分(B・C)のHr-F A・Hr-F P泥流層、Hr-F A層下の古墳時代の遺構について調査を実施した。また、9月より調査が可能になった本線・起電区分所部分の残り(第3図のD)について調査を実施し、さらにその後、用地買収が完了した本線用地(第2図のE)について調査を実施した。

95年度は、新たに追加して用地買収を行った地点に建設される「コ」の字状の構造物建築部分(第3図のF)について調査を実施した。

古墳時代の遺構面の調査は、1994年4月よりHr-F A・Hr-F P泥流層の下層に存在するHr-F A層を人力で掘削を行いHr-F A降下前の古墳時代の地表面を検出し、住居・畠等を調査した。さらにHr-F A層下面の住居を調査しつつシルト層までの掘削を行いこの面での遺構検出・調査を行った。さらにシルト面での遺構調査後下層の遺構確認のための試掘を行い7月20日に古墳時代面の調査を終了した。



第2図 発掘調査区の範囲(1/1,000)



第3図 古墳時代の発掘調査区(1/1,000)

II 調査の方法

1. 調査の手順

清水地区の発掘調査は、1992年度に安全対策工事を施工し、Hr-F A層より若干上位まで重機で掘削を行った。遺構の調査は、1993年度当初より実施し同年5月31日まで実施した。

Hr-F A層下では、畠を検出した他、住居の存在を確認した。調査手順は、Hr-F A層下の地形測量、畠・住居埋土の掘削、記録を行い調査区東側を精査したところ平地建物を検出した。そして遺構調査後下層の試掘調査を行い調査を終了した。

五反田地区の発掘調査は、1993年度に安全対策工事を施工し、Hr-F A層より若干上位まで重機で掘削を行った。遺構の調査は、1994年度当初より実施したが住居などの窪地に残った泥流層の掘削に多少の時間を要したが東南部より若干残した泥流層及びその下層のHr-F A層を掘削し、Hr-F A降下前の古墳時代後期初頭の地表面を検出しつつ調査区への搬入路である調査区北西部へ進行した。

Hr-F A層下では住居、平地建物、畠、土器集積などの遺構を確認した。住居は、一般的な調査と同様に十文字状に埋没土観察用のセクションベルトを設置し床面まで掘削した。床面までの掘削にさいして多くの遺物出土や炭化材の残存、壁面の崩落により本来の壁面と埋没土との確認などで多少の時間を要した。その後カマドを調査し、床下に掘り方が存在するか否かの調査を行った。記録写真・記録図は、土層断面・全体・カマドなどを中心に撮影・測量をおこなった。また、必要に応じて詳細部の写真・図をとった。

畠は、耕作方向に直交する位置で数本の埋没状況観察のセクションベルトを設置し、記録図・写真を測量・撮影した。全体図や全景写真の測量・撮影は、株式会社技研測量に依頼した。

その下層の白色シルト面での遺構確認は、まずHr-F A層下で検出した畠の調査が終了したグリッド

を数カ所人力で掘削して遺構確認を行い白色シルト面で住居の他に掘立柱建物、平地建物、土坑、畠が確認されたこととHr-F A層下での住居の調査に多少の時間を有するため122号住居～124号住居を周堤帯を含んだ範囲をそのまま残存させながら他の部分を白色シルト面まで人力で掘削した。

白色シルト面での遺構調査は、基本的にはHr-F A層下と同様であるが、畠の調査は、確認面での掘り込みが浅すぎるため確認面での記録図測量と写真撮影に止めた。

さらにその下層の遺構の存在について確認するために数本の試掘坑を設定して調査を行った。試掘坑の観察では、下層にAs-Cの存在は確認したが調査区西で確認した旧河川の氾濫源であったのか砂層や礫層が観察され遺構の存在は確認されなかった。

また、遺跡・遺構の解明に必要なテフラ同定、珪酸体分析花粉分析などを行った。(本報告書Ⅶ章掲載)

なお、出土した遺物や記録した図・写真の基礎的な整理は、発掘現場で実施した。遺物は、洗浄・注記を行い整理期間算出のために遺物量のカウントを行った。記録図は、平面と断面の齟齬の修正、写真は、検索台紙の作成までを行った。発掘調査にあたっての遺跡名称・遺跡略号などの付け方については、北陸新幹線建設に伴う発掘調査を開始するときに同一事業内の統一をはかった。詳細については、「行力榛名社遺跡」1994(P 7～9)を参照されたい。

整理作業は、五反田地区では1996年度より1997年度にかけて接合、復元、遺物写真撮影、遺物実測、遺構図修正、遺構図・遺物図トレース(委託)、版下作成、印刷の手順で実施した。

清水地区1号住居については、箕郷町教育委員会で遺物の接合、復元、実測を行ったものを(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団でトレース、写真撮影し掲載した。

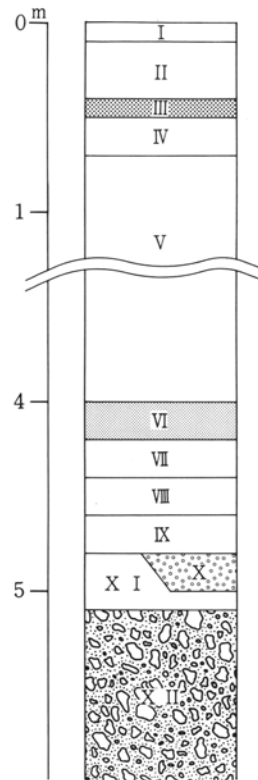
2. 基本層序

下芝五反田遺跡は、白川扇状地の標高143m～146.5mに位置するが、遺跡地は、行力春名社遺跡や下芝天神前遺跡のように奈良・平安時代と古墳時代の遺構確認面の間に厚さ3～3.5mの泥流層が存在している。遺跡地の基本的な土層の堆積状態は、周辺の遺跡とは大きな違いは見られない。

遺跡地の基本土層の様相は、第4図のように(I)地表面より現在の耕作土である表土層、(II)浅間B軽石(As-B)を含む黒褐色土層、(III)浅間B軽石(As-B)、(IV)礫や軽石を含む暗褐色土、(V)榛名二ッ岳Hr-F A・Hr-F P噴火による泥流層、(VI)榛名二ッ岳火山灰(Hr-F A)層、(VII)若干の浅間C軽石(As-C)を含む黒色土層、(VIII)若干の浅間C軽石(As-C)を含む灰褐色砂質土層、(IX)多少のAs-Cを含む灰白色シルト層、(X)浅間C軽石層(As-C)この層は、部分的に存在しない箇所や堆積の厚さに差が見られる。また、一部の堆積層は、2次的な堆積の可能性もみられる、(XI)粒子の荒い灰褐色砂層、(XII)砂礫層、この層は起伏がみられ一部ではVII層上部まで起伏している。

上記の土層が遺跡地で確認される基本的な堆積であるが、調査区の東北部分ではII層のなかに洪水堆積によると想定される灰黄色砂層が確認される。また、VIII層のなかには、砂礫層が存在しておりVIII層堆積中に数回の洪水による氾濫が確認された。

遺構の確認面は、II層中の灰黄色砂層下より中世の水田を検出し、その下層のIII層(As-B)下より平安時代後期の水田(As-B層下水田)を検出した。この水田の耕作土であるIV層下、V層上面で奈良・平安時代の集落を検出した。そして今回の報告である古墳時代の遺構面は、VI層下、VII層上面とVII層下、VIII層上面で検出した。なお、テフラ等については、VI章自然科学分析「地質調査」・「テフラ同定」を参照されたい。



第4図 基本土層柱状図



遺跡地土層堆積状態

II 調査の方法

3. 調査区の設定

北陸新幹線地域埋蔵文化財発掘調査では、これに伴う遺跡発掘調査での調査区の設定を全域が網羅するように設定した。

調査区の設定は、「国家座標」に基づき北陸新幹線地域の全域を網羅する1km四方の大区画を設定した。大区画は、北陸新幹線の起点である高崎駅東南の国家座標値 $X=+35,000.0m$ ・ $Y=-73,000.0m$ を起点とし、北陸新幹線の路線に沿って高崎から安中方面に向けて25の区画を設定した。(第6図)これを「地区」(大区画)と呼称した。

次にこの1km四方の各地区(大区画)の中を一辺100m四方の区画で100等分に区画し、この100四方の区画を「区」(中区画)と呼称した。この「区」では、東から西へそして南から北にかけて1~100区までを設定した。(第5図)

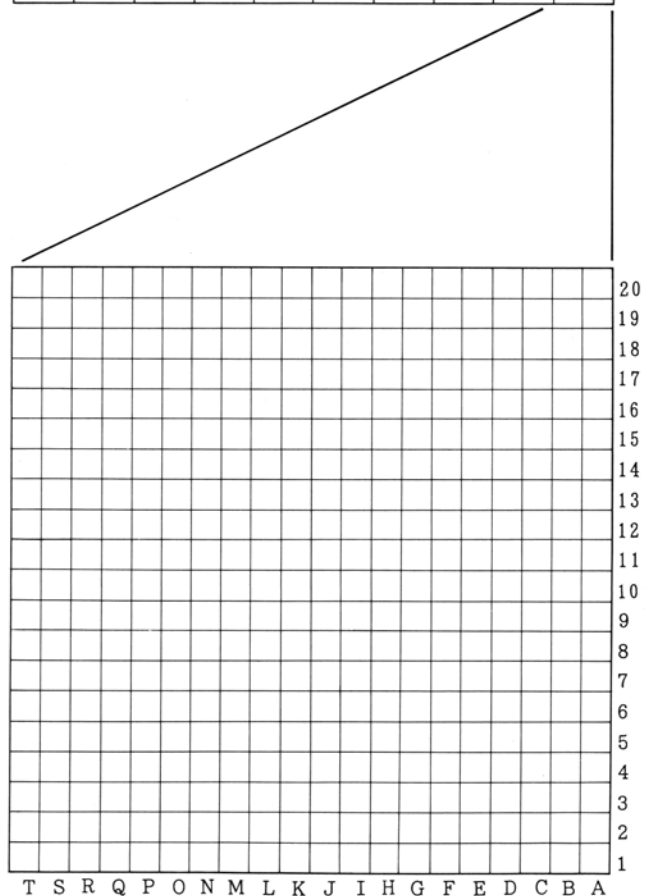
さらに「区」と呼称した100m四方の中区画の内部を一辺5mの小区画で400等分し、この小区画を「グリッド」と呼称した。「区」内部の呼称方法は、東南隅を起点としてX軸(西方向)にアルファベットをそしてY軸(北方向)に数字を用いた。すなわち1つの中区画内部は、X軸がAから始まりTまでY軸が1から20まで進んだ後次の「区」に移ることになる。

下芝五反田遺跡は、清水地区が大区画12地区、中区画75区に相当し、五反田地区が大区画が12地区、中区画は75区、76区、85区、86区に相当する。

なお、発掘調査範囲にかかる各中区画のA-1の座標値は、以下のとおりである。

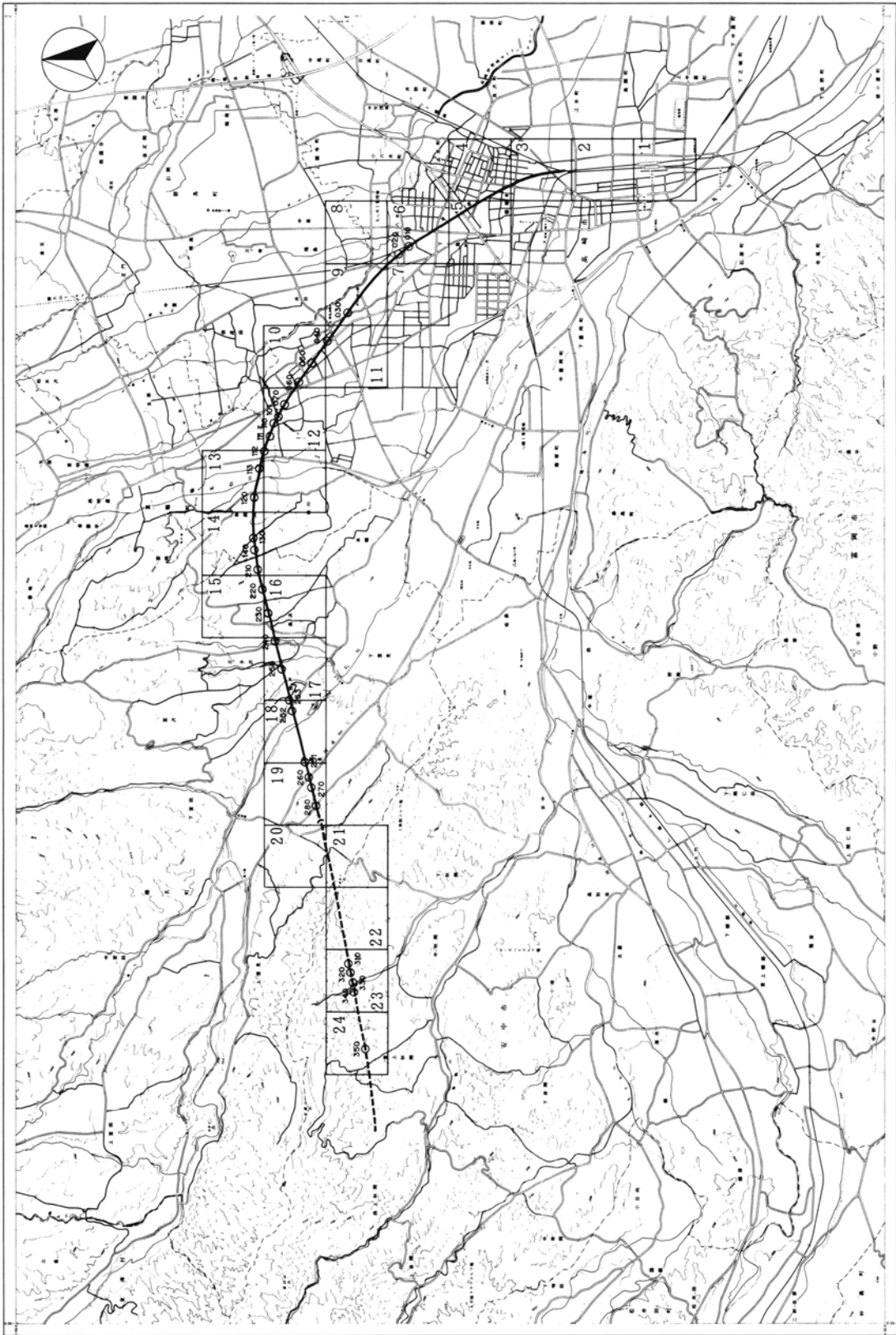
- 75区 $X=+41,700.0m$ 、 $Y=-77,400.0m$
- 76区 $X=+41,700.0m$ 、 $Y=-77,500.0m$
- 85区 $X=+41,800.0m$ 、 $Y=-77,400.0m$
- 86区 $X=+41,800.0m$ 、 $Y=-77,500.0m$

100	99	98	97	96	95	94	93	92	91
90	89	88	87	86	85	84	83	82	81
80	79	78	77	76	75	74	73	72	71
70	69	68	67	66	65	64	63	62	61
60	59	58	57	56	55	54	53	52	51
50	49	48	47	46	45	44	43	42	41
40	39	38	37	36	35	34	33	32	31
30	29	28	27	26	25	24	23	22	21
20	19	18	17	16	15	14	13	12	11
10	9	8	7	6	5	4	3	2	1



第5図 調査区の設定(中・小区画)

北陸新幹線ルート図Ⅱ



第6図 調査区の設定(大区画)

0 5 km

Ⅲ 周辺の環境

1. 地理的環境

下芝五反田遺跡は、群馬県群馬郡箕郷町大字下芝五反田に所在する。箕郷町は、群馬県の中央よりやや西よりに位置し、榛名天目山から南南東におよそ幅3～4kmで長さ12kmの範囲の町である。町域の大部分は、榛名山東南麓に立地する。下芝五反田遺跡は、箕郷町でももっとも南部の高崎市に近い位置にあり、山麓から平野部への変換部分に立地する。北陸新幹線の起点である高崎駅からは、北西へ直線距離で7.2kmほどである。遺跡地の現在の標高は、142.6～147.0mである。

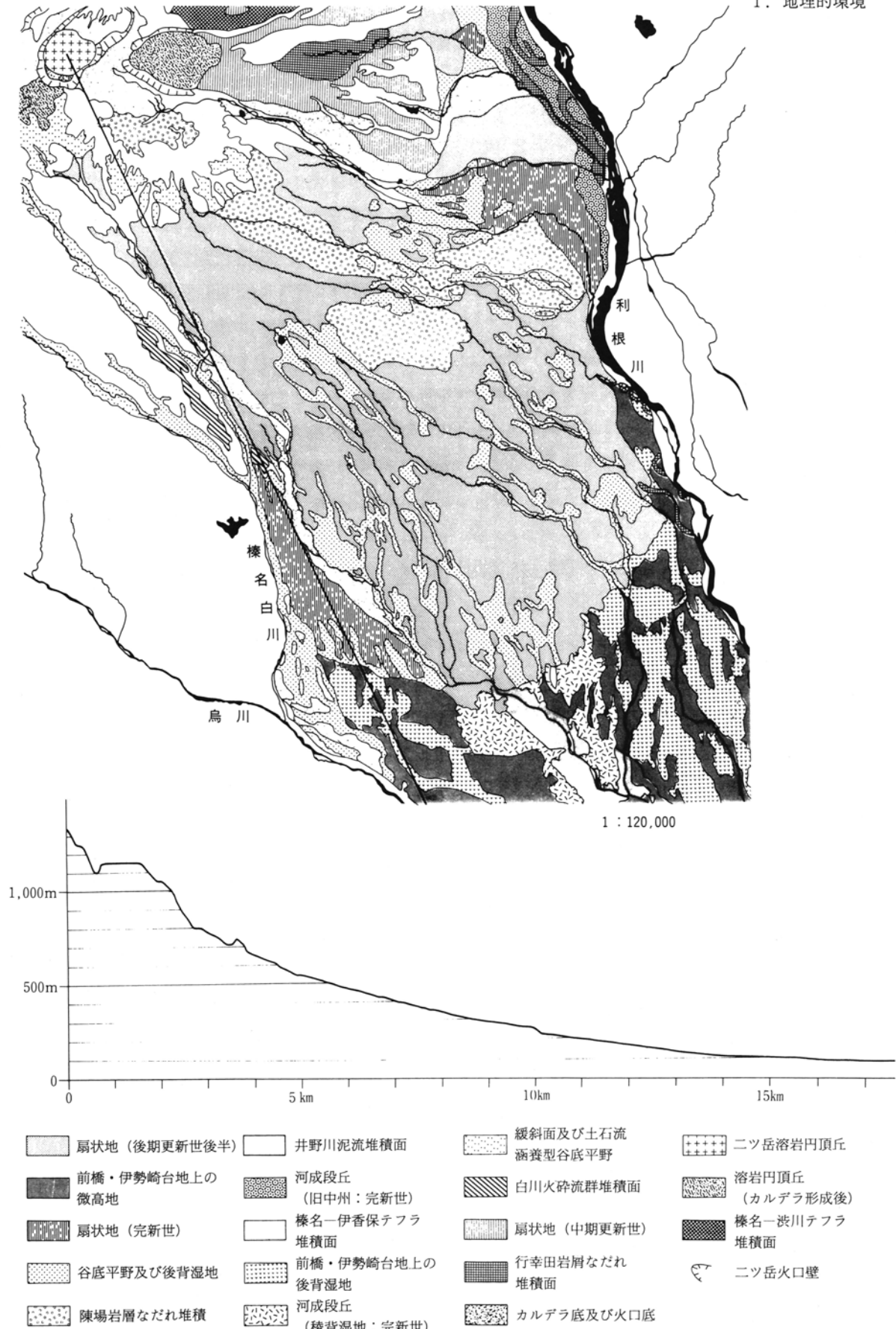
下芝五反田遺跡は、地勢的には榛名山(標高1,448m)東南麓の一部に小規模に発達した「白川扇状地」(下の写真参照)に立地する。榛名山東南麓には、渋川市から榛東村、箕郷町の東部にかけて広範囲に「相馬ヶ原扇状地」が占める。南麓は、箕郷町の西部に流れる榛名白川から西側で発達した開析谷が存在する古期扇状地面である「十文字面」が占めている。「白川扇状地」は、この「相馬ヶ原扇状地」と「十文字面」の間に位置する。その範囲は、概ね榛名白川と井野川に挟まれた範囲である。扇頂は、箕郷町西明屋付近で扇端部は不明であるとの見解が示されている。

「白川扇状地」のその主たる形成要因は、北から南へ流れる榛名白川と北西から南東へ流れる井野川に挟まれた地域への古墳時代後期初頭に起きた榛名

二ツ岳の噴火に伴う二次的洪水堆積物の流入である。この洪水堆積物は、古墳時代後期初頭、6世紀初頭と前半の2度にわたって起きた火山噴火によって発生したものである。この火山噴火の6世紀初頭に起きた際のテフラは、本遺跡の基本層序VI層である火山灰(Hr-F A)を噴出したものであり、この噴火に伴う洪水堆積物をHr-F A泥流と呼称している。6世紀前半に起きた噴火に伴うものは、子持村黒井峰遺跡や白井遺跡群を埋没させた火山軽石で有名なHr-F Pであるが、本遺跡の存在する榛名東南麓ではほとんど堆積していない。そしてこの噴火に伴う洪水堆積物をHr-F P泥流と呼称している。このHr-F A泥流層とHr-F P泥流層の間には、僅かに5～10cmの黒色土が堆積しており火山活動の休止が窺えるが、Hr-F A泥流による被害が甚大であったため井野川左岸に位置する同道遺跡にみられるような災害復旧は行われなかった。この2度にわたる泥流堆積層は、本遺跡付近では、約4～5m、南に位置する浜川遺跡群では2.5～3m、御布呂遺跡では1～1.5mほどの厚さが見られる。本遺跡の北側については、発掘調査が行われていないためデータがないため不明である。なお、この地域の泥流層下の旧地形については、「行力春名社遺跡」の報告書中で考察しているので参照されたい。



上空から見た白川扇状地



第7図 遺跡周辺の地形図

Ⅲ 周辺環境

2. 歴史的環境

下芝五反田遺跡の周辺遺跡としては、東2.3kmに位置する豪族居館として三ッ寺Ⅰ遺跡、その西側に三ッ寺Ⅰ遺跡の奥津城として愛宕塚古墳、八幡塚古墳、薬師塚古墳の全長100m前後の3基の大型前方後円墳を中心とする保渡田古墳群等が存在し、古墳時代中期から後期初頭にかけて一大勢力を誇っていた地域として知られている。この地域の遺跡については、「三ッ寺Ⅰ遺跡」、「保渡田Ⅶ遺跡」、「行力春名社遺跡」などの多くの報告書で記述されているので本項では本編で扱う古墳時代中期後半から後期初頭の遺跡が立地する白川扇状地から榛名白川と井野川に挟まれた地域を中心に記述することとする。

下芝五反田遺跡の位置する白川扇状地上では、榛名二ッ岳の噴火に伴う泥流層が厚く堆積しているため以前は調査例も少なくこの地域の古墳時代後期以前については解明されていなかったが、近年の調査により若干の様相が明らかになりつつある。泥流層下の調査は、下芝五反田遺跡をはじめとする北陸新幹線に伴う発掘調査が行われた芦田貝戸遺跡、御布呂遺跡、西下井出遺跡、餅井貝戸遺跡、浜川遺跡群（浜川館遺跡、高田屋敷遺跡、浜川長町遺跡）、行力春名社遺跡、下芝天神遺跡、箕郷町教育委員会で行った下芝谷ツ遺跡、下芝五反田遺跡（本報告書の下芝五反田遺跡の東側に建てられた東京電力送電用鉄塔に伴う発掘調査）、高崎市教育委員会で行った芦田貝戸遺跡、御布呂遺跡、道場遺跡群などが調査されている。これらの遺跡では、集落・生産・墓域等各種の遺跡、遺構を検出している。

集落遺跡には、下芝天神遺跡や行力春名社遺跡がある。下芝天神遺跡は、下芝五反田遺跡とは埋没河川を挟んで対岸に位置しており、泥流による埋没状況などは下芝五反田遺跡と同様である。検出された遺構には、住居とともに祭祀、畠、道路等がある。住居は、Hr-F A降下より以前に廃棄されている。この住居の周堤帯には、土師器を主体に若干の須恵器と石製模造品を約2,500点ほど集積した祭祀遺構がある。このような土器集積による祭祀は、下芝五反

田遺跡、群馬町上井出遺跡、高崎市寺尾Ⅱ遺跡等でも見つかっているが下芝天神遺跡の祭祀遺構は規模や土器量の面からも大規模のものである。道路は、祭祀と同様にHr-F A層下で検出した。畠は、Hr-F A層下とAs-C層下の2面で検出されており下芝五反田遺跡より古くから開発され一部ではHr-F A降下後の耕作も確認されている。行力春名社遺跡では、住居を3軒検出しているが、3軒とも下芝五反田遺跡の住居より古い中期前半代のものである。集落遺跡は、現在のところ下芝五反田遺跡を含めて3遺跡だけであるが周辺の地形からこの3遺跡の北側に集落が展開すると考えられる。

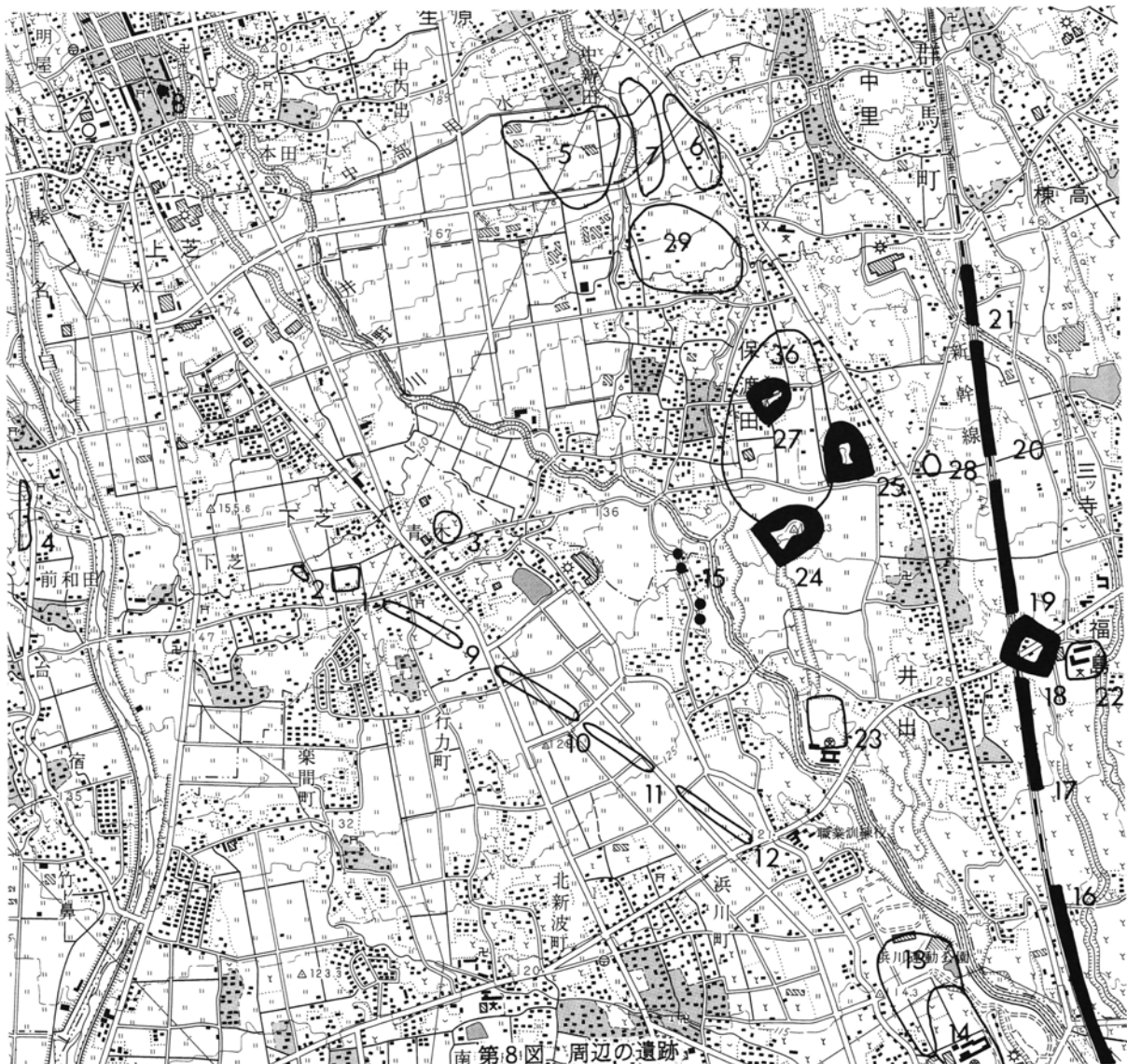
生産遺跡には、浜川遺跡群、餅井貝戸遺跡、西下井出遺跡、御布呂遺跡、浜川芦田貝戸遺跡がある。これらの遺跡は、井野川右岸に広がる低地帯に立地している。浜川遺跡群では、館遺跡と高田屋敷遺跡でHr-F A層下、Hr-F P層下で水田が見つかるが、北側の長町遺跡ではHr-F A層下からは水田が検出されたがHr-F P層下では検出されていない。御布呂遺跡では、As-C層下、Hr-F A層下で水田を検出している。浜川芦田貝戸遺跡では、Hr-F A層下、Hr-F P層下で水田を検出しているが、井野川の対岸に位置する同道遺跡で見られたHr-F Aで埋没した水田をアゼがトレースしたような復旧とは異なる復旧の様子が窺える。このように井野川右岸の低地帯では、4世紀頃より水田開発が行われ数回にわたる災害をも克服して水田耕作が行われた地域である。

墓域には、下芝谷ツ遺跡、道場遺跡群谷津遺跡、上芝古墳、四ッ谷古墳がある。下芝谷ツ遺跡は、下芝五反田遺跡の東0.5kmに位置し、Hr-F A泥流で埋没していたため良好な残存状態を呈していた。この古墳は、一辺20mほどの二段築成の方墳で削り出しと盛土の下段の上に「積石塚」上段がのる他に例をみない墳丘構造をもつ。出土した副葬品には、馬具類、甲冑類、装飾品類と共に朝鮮半島で出土している金銅製飾履を出土している。また、下芝五反田遺跡（東電鉄塔調査区）や海行A遺跡では朝鮮半島系の

土器が出土している。こうしたことから下芝谷ツ遺跡に葬られた首長層は、三ッ寺I遺跡居館の配下で大陸との対外交渉に携わったか渡来系の人物と推測されている。この下芝谷ツ遺跡周辺では、発掘調査された古墳のほかにも積石塚古墳が存在することが確認されている。井野川右岸には、道場遺跡群谷津遺跡で2基の古墳が検出されている。この古墳もHr-F A泥流により埋没している。2基のうち全体が調査されたS Z01は、径7 mほどの円墳であるが北側に幅3 mほどの造り出しをもつ特異な形態である。上芝古墳は、北約2 kmに位置する帆立貝式古墳で良好な状態で埴輪列や形象埴輪が出土している。四ッ谷古墳は、北0.5 kmに位置し道路工事中の

発見であるため詳細は不明であるが、環鈴、鈴杏葉、玉類、銅鏡、直刀等良好な副葬品が出土しており下芝谷ツ遺跡との関係が想定されている。

以上のように下芝五反田遺跡周辺では、地形にあわせて集落域、稲作を中心とした生産域、墓域として利用されているが、榛名二ッ岳の噴火による降灰と泥流により荒廃した地域になってしまっている。また、下芝五反田遺跡後の集落としては、北2 kmの標高200 m前後に位置する海行A遺跡、生原遺跡群善龍寺前遺跡や榛名白川の右岸で同じく標高200 mほどに位置する和田山天神前遺跡(旧名称 和田山古墳群)で検出されているが、3遺跡とも6世紀代での存続で7世紀代には継続していない。



Ⅲ 周辺の環境

第1表 周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	遺跡の主な内容	文献
1	下芝五反田遺跡	群馬郡箕郷町下芝字五反田		
2	下芝天神遺跡	群馬郡箕郷町下芝字天神他	古墳時代中期住居、祭祀、前期～後期初頭畠	注1
3	下芝谷ツ遺跡	群馬郡箕郷町下芝谷ツ	古墳時代中期方墳、墳丘は泥流で埋没のため良好な状態で残存。堅穴石室は盗掘を受けているが金銅製飾履、直刀等の武具、馬具、装身具等の副葬品が出土している。また、この付近には数基の埋没古墳が存在している。	1
4	和田山天神前遺跡	群馬郡箕郷町天神前	古墳時代後期の集落(6C.後半)と群集墳(6C.後半～7C.前)	注2
5	生原善龍寺前遺跡	群馬郡箕郷町生原	古墳時代後期の集落(6C.第2・3四半期)、群集墳(7C.代)	2
6	海行A遺跡	群馬郡箕郷町生原	古墳時代後期の集落(6C.中頃)、韓式系土器出土	3
7	海行B遺跡	群馬郡箕郷町生原	古墳時代後期の集落(7C.前後)	3
8	上芝古墳	群馬郡箕郷町上芝	古墳時代後期初頭(6C.初頭)の小型帆立貝形古墳	20
9	行力春名社遺跡	高崎市行力町	古墳時代中期の集落(5C.前半)	4
10	浜川遺跡群(浜川長町遺跡)	高崎市浜川町	古墳時代後期の水田(Hr-F A層下)	注1
11	浜川遺跡群(高田屋敷跡)	高崎市浜川町	古墳時代後期の水田(Hr-F A層下・Hr-F P層下)	注1
12	浜川遺跡群(浜川館遺跡)	高崎市浜川町	古墳時代後期の水田(Hr-F A層下・Hr-F P層下)	注1
13	御布呂遺跡	高崎市浜川町	古墳時代前期・後期の水田(As-C層下・Hr-F A層下)	6
14	芦田貝戸遺跡	高崎市浜川町	古墳時代後期の水田(Hr-F A層下・Hr-F P層下)水田から馬蹄跡、祭祀、大溝を検出	5
15	道場遺跡群道場遺跡	高崎市浜川町	Hr-F A埋没古墳2基調査	7
16	熊野堂遺跡	群馬郡群馬町井出・福島	古墳時代後期の集落(5C.後半～6C.前半)と水田・畠(Hr-F A層下)	8
17	井出村東遺跡	群馬郡群馬町井出	古墳時代後期の集落(5C.後半～6C.代)と畠(Hr-F A層下)	9
18	三ッ寺I遺跡	群馬郡群馬町三ッ寺	古墳時代中期後半～後期初頭にかけての豪族居館	10
19	三ッ寺II遺跡	群馬郡群馬町三ッ寺	古墳時代中期後半～後期(5C.後半～7C.)にかけての集落と畠(Hr-F A)	11
20	三ッ寺III遺跡	群馬郡群馬町三ッ寺	古墳時代中期後半～後期(5C.後半～7C.)にかけての集落	12
21	保渡田遺跡	群馬郡群馬町保渡田	古墳時代後期(6C.後半～7C.)にかけての集落	12
22	中林遺跡	群馬郡群馬町三ッ寺	古墳時代中期後半～後期(5C.後半～7C.)にかけての集落	13
23	同道遺跡	群馬郡群馬町井出	古墳時代前期～後期の水田(As-C、Hr-F A、Hr-F P層)	14
24	井出二子山古墳	群馬郡群馬町保渡田	保渡田3墳のなかでは最初の構築(5C.Ⅲ)、全長200m幅175m	16
25	保渡田八幡塚古墳	群馬郡群馬町保渡田	二番目の構築、全長176m幅138m	15・16
26	保渡田薬師塚古墳	群馬郡群馬町保渡田	5C.末～6C.初頭(Hr-F A降下前)、船型石棺出土	16
27	保渡田遺跡群Ⅶ次	群馬郡群馬町保渡田	保渡田3墳に囲まれた内側の調査、古墳時代初頭からの集落二子山古墳北側では小円墳群を検出	17
28	上井出遺跡	群馬郡群馬町井出	古墳時代後期のHr-F Aで埋没した土器集積による祭祀遺構	18
29	保渡田荒神前遺跡	群馬郡群馬町保渡田	古墳時代後期の集落と古墳群	19

引用・参考文献

- 田口一郎「群馬県下芝・谷ツ古墳」『日本考古学年報』39日本考古学協会1998
- 「生原・善龍寺遺跡」箕郷町教育委員会1986
- 「海行A・海行B遺跡」箕郷町教育委員会1988
- 「行力春名社遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1994
- 「芦田貝戸遺跡」高崎市教育委員会1979、「芦田貝戸遺跡Ⅱ」高崎市教育委員会1980、「浜川芦田貝戸遺跡Ⅲ」高崎市教育委員会1984
- 「矢鳥・御布呂遺跡」高崎市教育委員会1979、「御布呂遺跡」高崎市教育委員会1980
- 「道場遺跡群」高崎市教育委員会1989
- 「熊野堂遺跡(1)」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1984、「熊野堂遺跡(2)」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1990、「熊野堂遺跡第三地区・雨壺遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1984
- 「井出村東遺跡」井出村東遺跡調査会1983
- 「三ッ寺I遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1988
- 「三ッ寺II遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1991
- 「三ッ寺III遺跡・保渡田遺跡・中里天神塚古墳」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1984
- 「中林遺跡」群馬町教育委員会1985
- 「同道遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1983
- 「群馬県史」資料編3(原始古代3古墳)群馬県史編さん委員会1981
- 右島和夫「東国古墳時代の研究」学生社1994
- 「保渡田Ⅶ遺跡(1)」群馬町教育委員会1989、「保渡田Ⅶ遺跡(2)」群馬町教育委員会1990
- 清水 豊「群馬町上井出遺跡出土の祭祀遺物」『群馬考古学手帳』Vol. 3 群馬土器観会1992
- 「保渡田荒神前遺跡・皿掛遺跡」群馬町教育委員会1989
- 「群馬県史」通史編1(原始古代1)群馬県史編さん委員会1990

注1. 本年度(1997年度)報告書刊行予定

注2. 次年度(1998年度)報告書刊行予定

IV 五反田地区の遺構と遺物

1. 概要

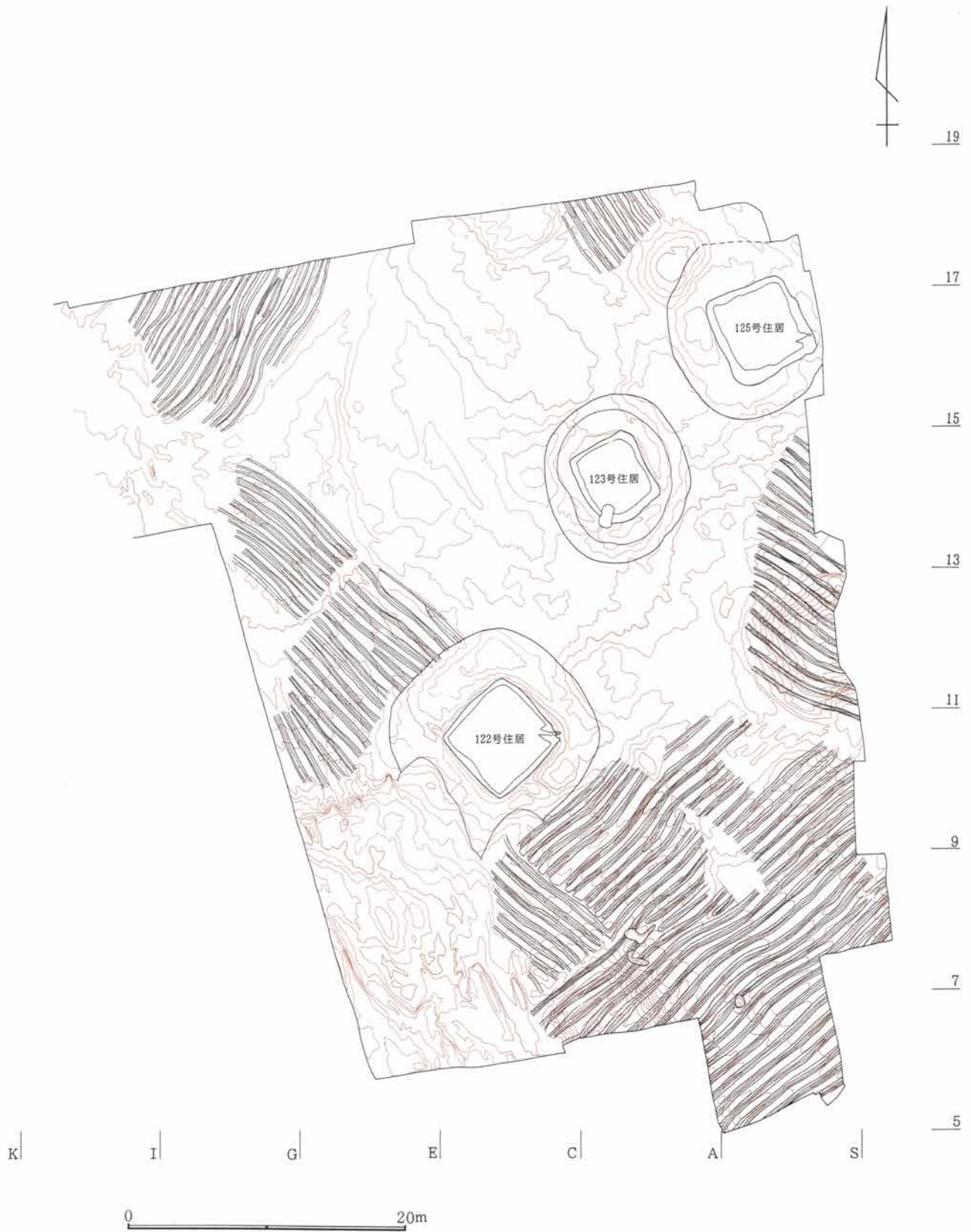
古墳時代の遺構は、約4mほど堆積したHr-F A・Hr-F P泥流層および約10cmほど堆積したHr-F A層下から住居、掘立柱建物、平地建物、土坑、土器集積、畠などの遺構を検出した。

遺構の確認面は、6世紀初頭当時の地表面であるHr-F A層下の黒褐色土上面とその下層約10~15cmの白色シルト層である。Hr-F A層下では、住居、土器集積、畠を検出し、調査区の西側部分で埋没河川を確認した。遺構の配置は、調査区の東側にまとまりを確認した。各遺構の配置は、住居を取り囲むように畠が存在している。また、畠・住居が存在しない空間の1ヶ所では土師器杯・鉢・甕・壺、石製模造品を集積し祭祀遺構的な様相を呈する遺構を検出した。住居は、Hr-F Aの降下時または直前まで存在していたと想定される住居を3軒検出した。これらの住居は、Hr-F A層や泥流層によって上部からの攪乱を受けることなく周堤帯などが良好な状態で残存していた。特に124号住居では、床面の一部にHr-F Aが直接堆積しておりその上部にも約5cmほどの間層を置いて存在しており噴火時点には住居の屋根がまだ崩落せずに入り口などの空間から吹き込んだと想定される。畠は、ウネ・サクが明確に残存して住居同様にHr-F A降下直前まで耕作を行っていたかHr-F A降下直前に耕作を終えた区画とウネ・サクがやや崩れた状態で耕作を休止していたと想定される区画を検出した。また、畠の耕作は、高低差が1m近く残っている埋没途中の住居跡も耕地として利用されている。

白色シルト層面では、住居、竪穴遺構、掘立柱建物、平地建物、土坑、畠などを検出した。遺構の配置は、Hr-F A層下と同様に調査区の東側特に東南部にまとまっているが北西部分で円形平地建物を4基検出した。住居は、14軒を検出したが、埋没状況は1m近い窪みから10~20cmの平坦に近い状況のも

のなど廃棄段階や位置により差が見られた。掘立柱建物は、東南隅から2軒×2軒のものを2棟検出した。平地建物は、径2~4mの円形を呈し、幅20~30cmの溝が巡るものを15棟検出した。畠は、Hr-F A層下の畠耕作土を掘り下げた段階でHr-F A層下畠のサクと方向を違えるサクを確認したが、区画や範囲は明確ではなかった。シルト層面で確認した畠のサクは、2~3とおりの方向を示しており、畠の区画は住居やその他の遺構の立て替えによって設定に伴い変更が行われたと想定される。

遺物は、土師器、須恵器、土製品、石器、石製品などが出土したが、その破片総数は約10,000点であるが、そのうち95%は土師器でまたそのうち80%強は甕・壺類の破片である。須恵器は、僅か4点が出土しただけで、そのうち杯が2点、甕小片が2点である。石器は、砥石、打製石斧などである。石製模造品は、大部分が石製模造品白玉でその他若干の石製模造品の剣形・円形がある。これらの石製模造品の中でも126号住居の周堤帯下からは土師器甕とともに120点ほどの石製模造品が出土しており住居構築の際に現在の地鎮祭的な祭祀を行ったと想定される出土状況を確認した。その他では、炭化材が出土している。そのなかでも122号住居からは、住居構築部材や壁面に使用されて網代などの炭化材が多量に出土している。これらの炭化材の樹種についてはⅦ章「樹種同定」で同定しているので参照されたい。



第9図 五反田地区Hr-F A (VI)層下全体図



19

17

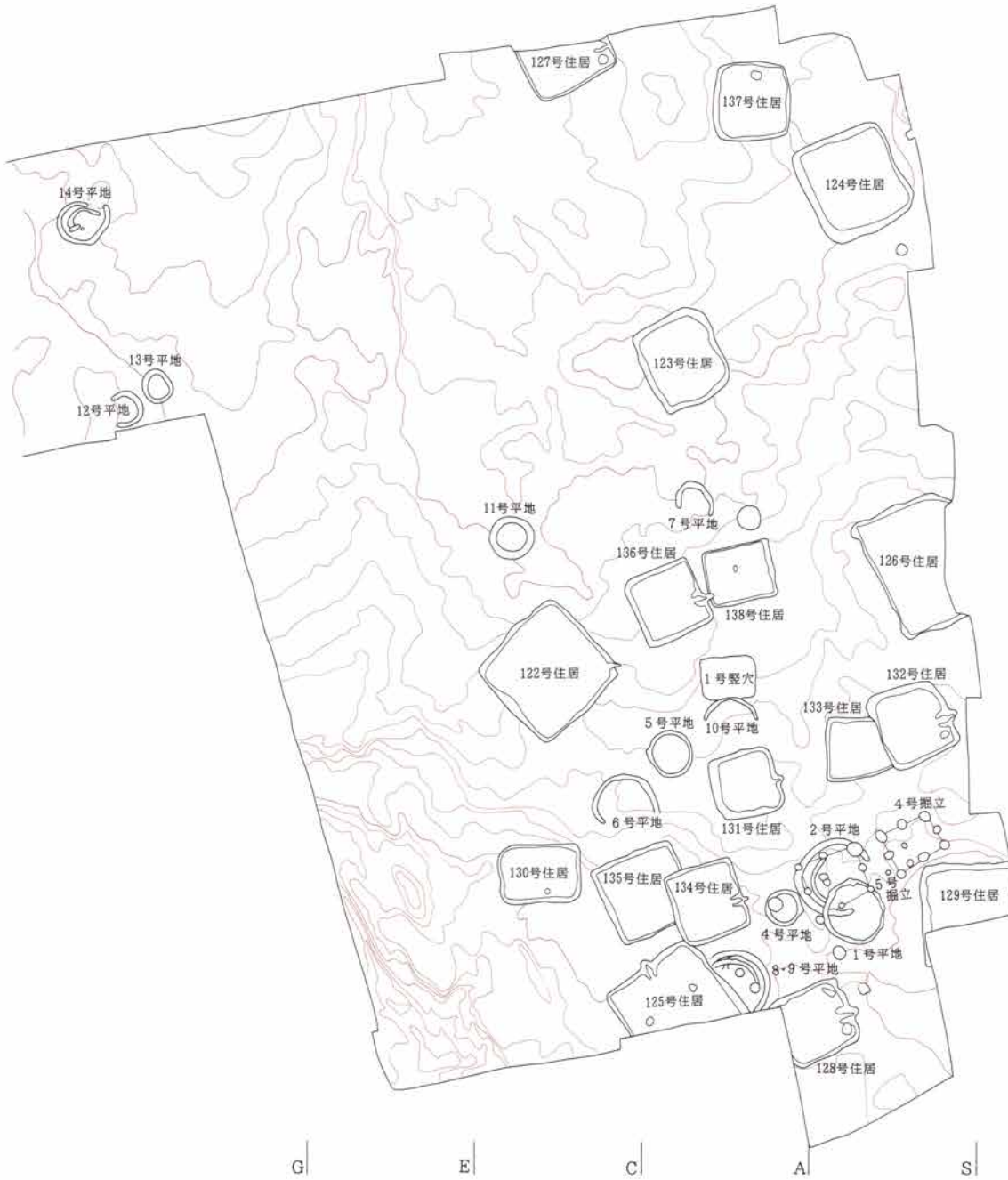
15

13

11

9

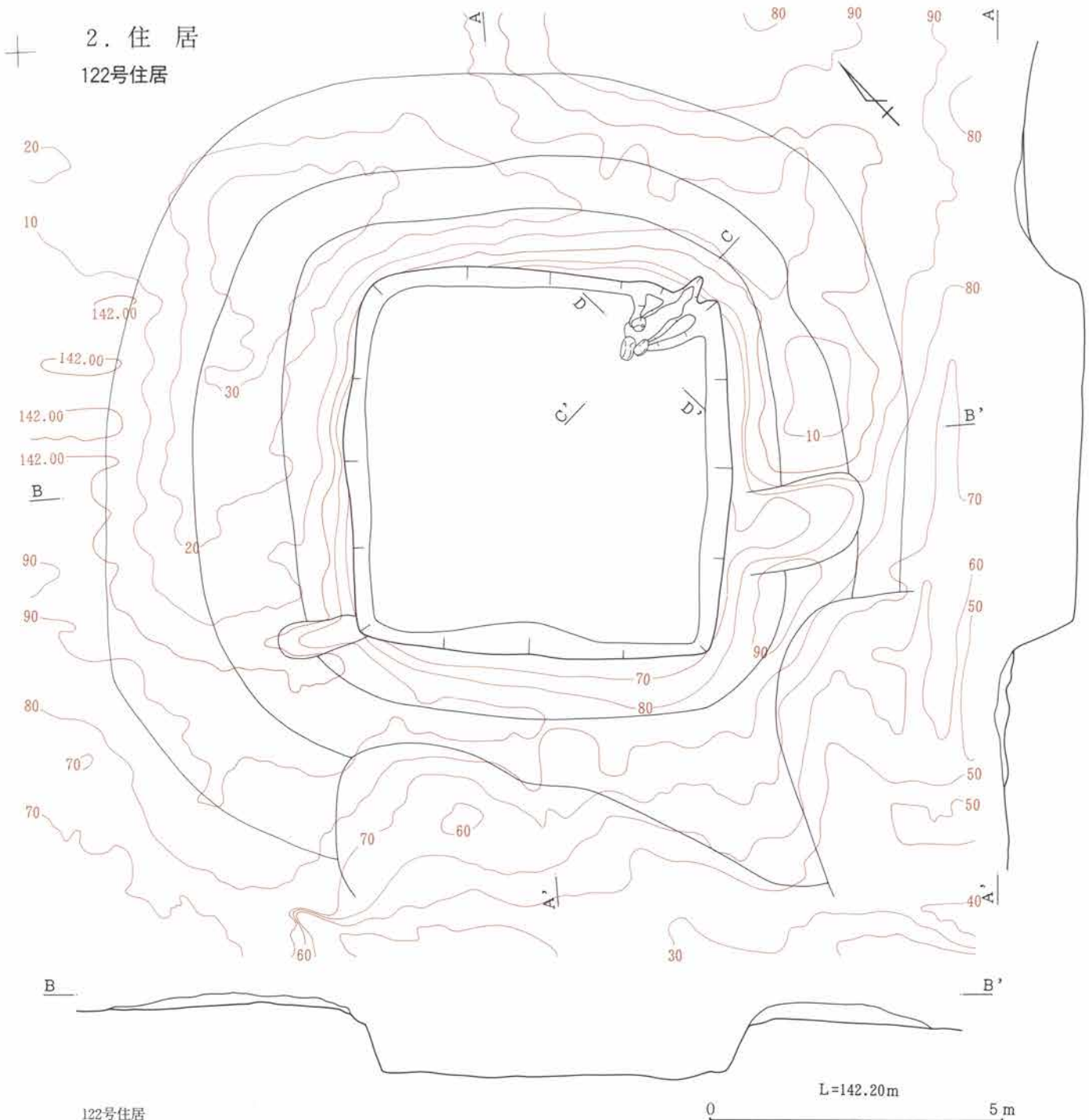
7



第10図 五反田地区灰白色シルト(VIII)層上面全体図

2. 住居

122号住居



122号住居

竪穴部分埋没土

1. 黒灰色土 Hr-F Aブロックを多量とAs-Cを若干と黒色土ブロックを含む
2. 灰白色土 VII・VIIIの混入した土
3. 灰白色土 2に類似、2より黒色土の割合が多い
4. 灰白色土 2・3に類似、3より黒色土の割合が多い
5. VIII層の崩落土
6. 黒色土ブロック
7. 灰白色土 VIIIと同様、As-Cをやや多く含む
8. 黒色土 炭化物を多く含む

9. 黄褐色土 砂質土、As-Cを多少含む掘り方
10. 黄灰色土 砂質土、As-Cを含む黒色土をブロック状に含む
下面が波状になるのはスキの痕跡か?

周堤帯

11. 黒色土 VIII層・IX層を带状に含む
12. 黄灰色土 砂質土、As-Cを多量に含む
13. 灰褐色土 VIII層に類似、As-Cをほとんど含まない
14. 灰褐色土 VIII層に類似、灰白色砂を带状に含む

第11図 122号住居平面・断面図

2. 住居

本住居は、調査区のほぼ中央、86区B～E-9～11グリッドに位置する。他の遺構との重複関係は、堅穴部分ではみられないが周堤帯下に136号住居、5号・6号・11号平地建物が存在する。新旧関係は、当然本住居の方が後出である。残存状態は、周堤帯の一部がHr-F A・Hr-F P泥流により押し流されているが良好な状態で検出した。住居の形態は、堅穴部分ではほぼ正方形を呈するが、周堤帯の外周は隅円方形を呈する。

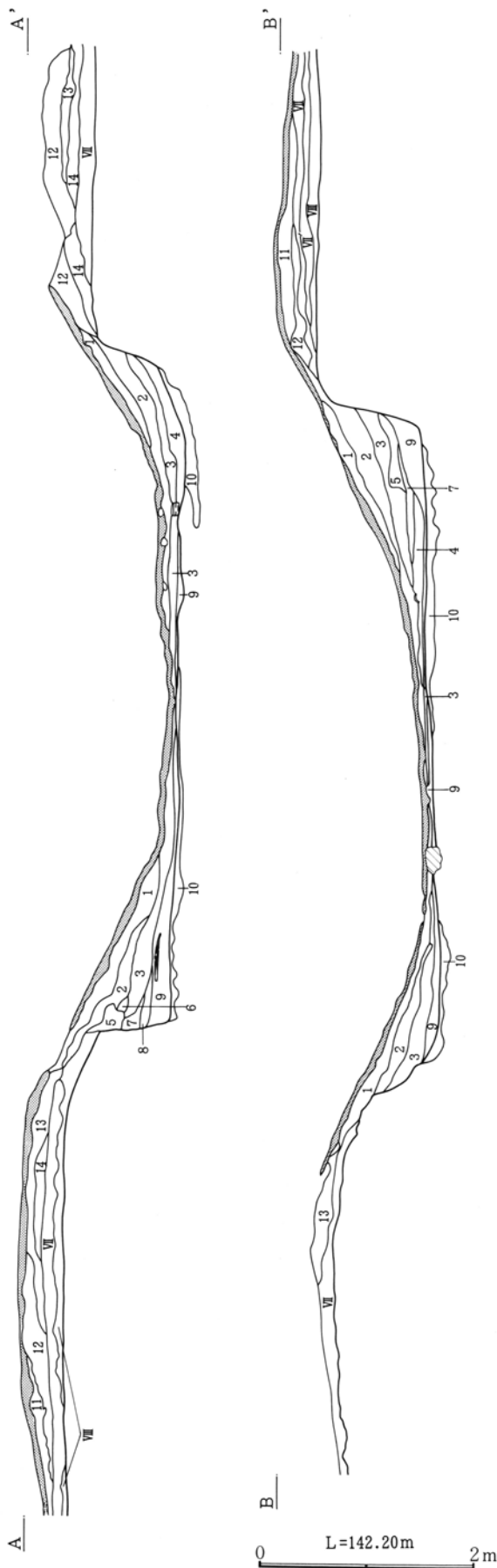
規模は、長軸6.60m、短軸6.55mで各辺の長さは北辺6.10m、東辺6.07m、南辺6.05m、西辺6.00mを測る。床面積は、32.66㎡で周堤帯を含んだ面積は166.26㎡である。主軸方位は、N-45.5°-Eを指す。

壁高は、北壁1.06m、東壁0.98m、南壁0.84m、西壁0.92m、平均0.95mである。また、貯蔵穴・柱穴・壁溝などの内部施設は、検出されなかったが、北壁一部には、炭化材が壁面に貼り付いた状態で検出された。この炭化材は、網代状に編みこまれたもので壁面の土砂の崩落を防止するためのものと考えられる。

床面は、中央部が地山をそのまま踏み固めているのに対して周辺部は若干掘り窪めて新たに土砂を入れて踏み固めている。

周堤帯は、一部をHr-F A泥流により削られているが、ほぼ良好な状態で残存していた。周堤帯は、堅穴周囲に幅3.5～4m、高さ20～30cmで巡り、その土は堅穴部分を掘削した際の土砂である。

カマドは、東壁の東南隅に構築されている。残存状態は、天井部が崩落しているが、他は割合良好な状態であった。規模は、焚口～煙道間が1.76m、両袖間の幅1.43m、焚口幅1.18mを測る。焚口は、両側に円礫を配置し、その上に長さ42cmほどの細長い円礫を乗せて天井部の補強を行っている。袖は、両袖とも残存しているがやや小規模である。天井部は崩落しており状態については不明であった。煙道は、堅穴部分より約30cmほど外へ延びるが上部の構造は存在しなかった。なお、燃烧部は、火床面の位置が



第12図 122号住居土層断面図



第13図 122号住居竪穴部分平面図

床面より約20cmほど高い位置に構築されていた。

掘り方は、竪穴部分内部の周囲では床面より若干掘り込まれているが、床下土坑のような施設は確認されなかった。

Hr-F A層より下の埋没土の状態は、土層断面図が示すように壁際から1.5m前後は三角堆積を示しているが、中央部分では床面より5～10cmほど黒色土が堆積しているだけで堆積が進んでいない。また、壁際の三角堆積の箇所でも若干の周堤帯からの流入は見られるが、ほとんどは壁の崩落による白色シルト層である。このことから本住居は、123号住居と同様にHr-F A噴火の直前に廃棄されたと考えられる。

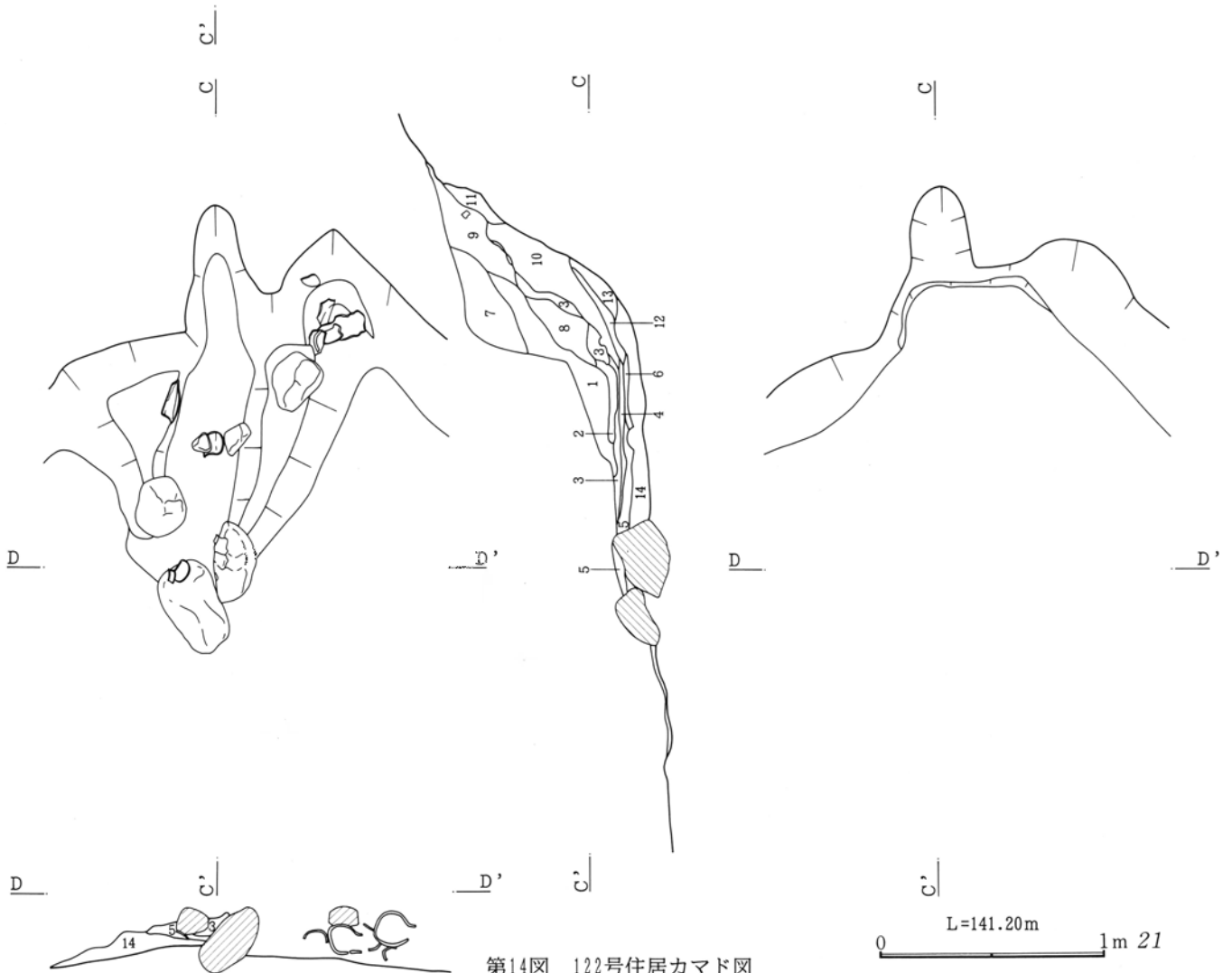
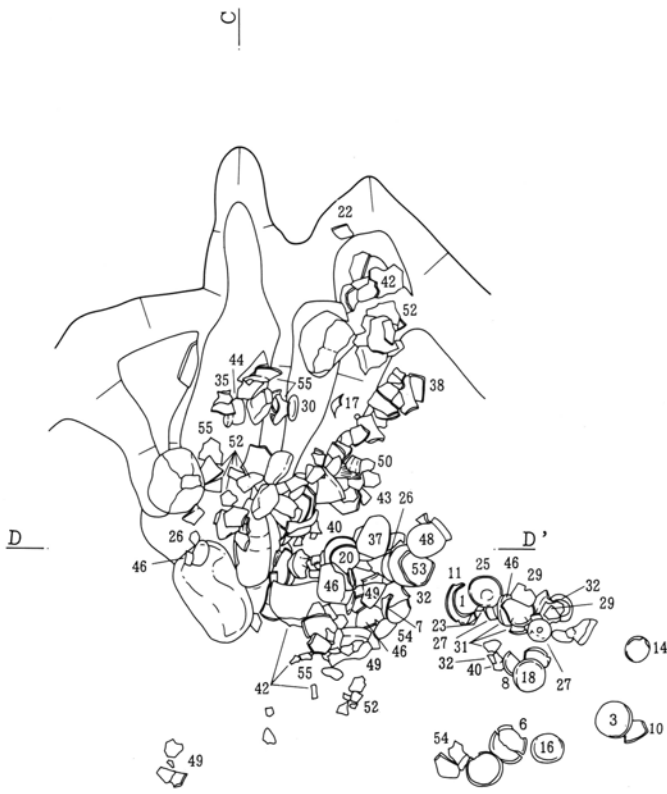
遺物は、土師器杯、高杯、柑、鉢、甕、壺、土製玉、石製模造品などが出土している。その出土破片

数は、2,606点であるが、そのうち甕・壺類が85%を占めている。出土状態は、土器の大半がカマド右側に集中して出土しておりこの場所が食器・煮炊具の置き場であったようである。また、竪穴内部からは、多くの炭化材が出土しているが、その中では前述の北壁の網代や南壁際の長さ2.5mの建築部材が目にとまるが他はカヤ状の屋根材と想定される。

2. 住居

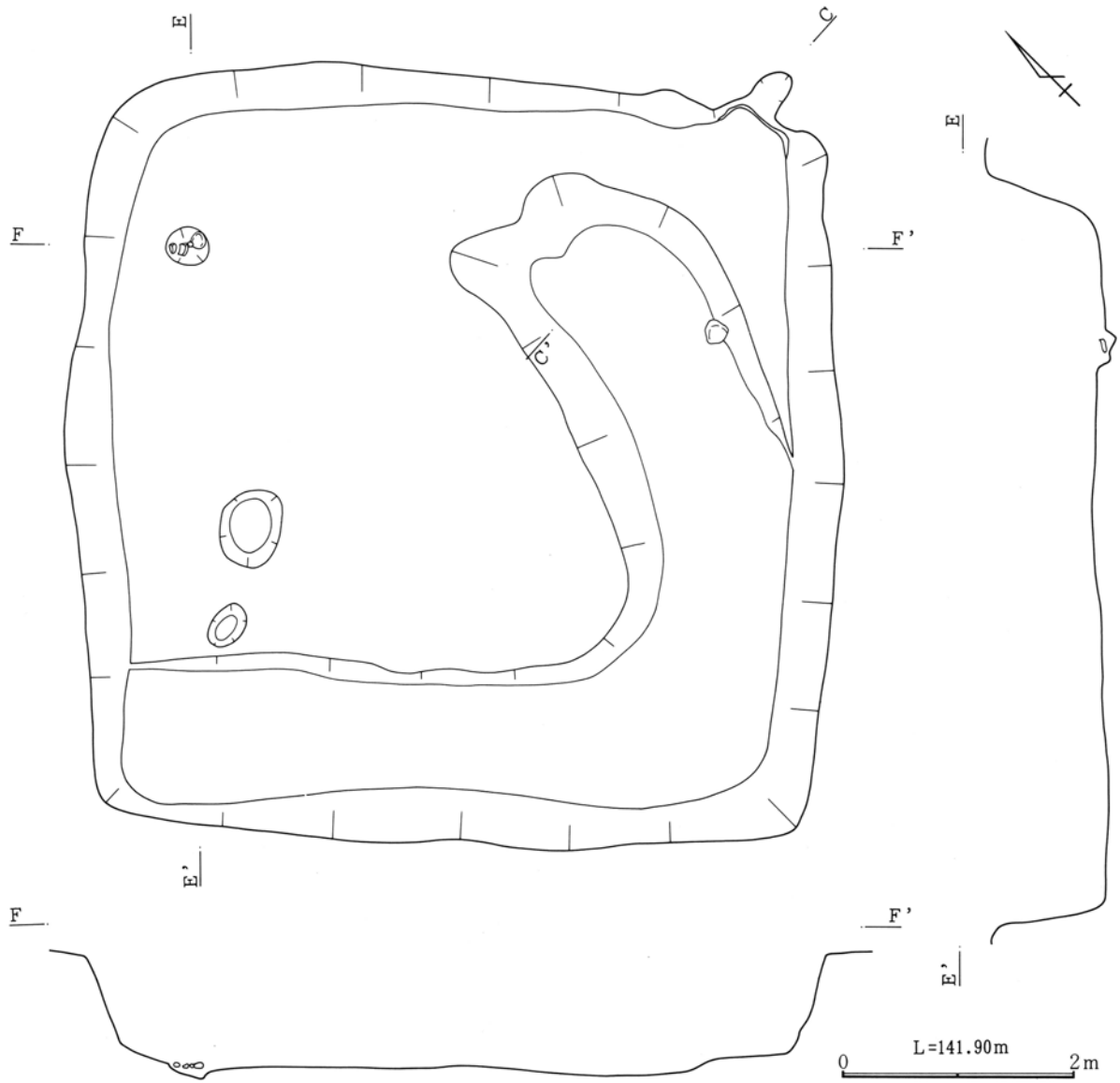
カマド

1. 灰黄褐色土 砂質土、焼土粒・黄褐色粘土ブロックを少量含む
2. にぶい黄橙色土 粘質土、焼土粒を若干含む
3. 赤褐色土 焼土
4. 黒色土 灰
5. 灰黒色土 灰・焼土
6. 赤褐色土 焼土
7. 暗褐色土 炭化物を少しとAs-Cを若干含む
8. 黒褐色土 炭化物を少しとAs-Cを若干含む
9. 褐灰色土 焼土粒、炭化物を若干含む
10. 灰色土 砂質土、焼土粒、炭化物を若干含む
11. 暗褐色土 砂質土、焼土粒、炭化物をごく僅かに含む
12. 暗褐色土 焼土ブロック、灰を多量に含む
13. 褐色土 焼土粒を若干含む
14. 褐灰色土 As-Cを僅かに含む

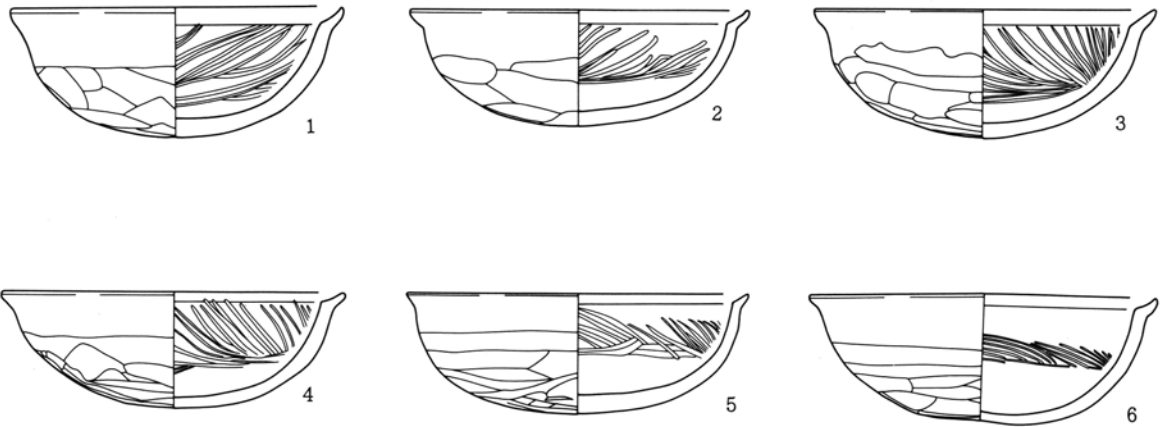


第14図 122号住居カマド図

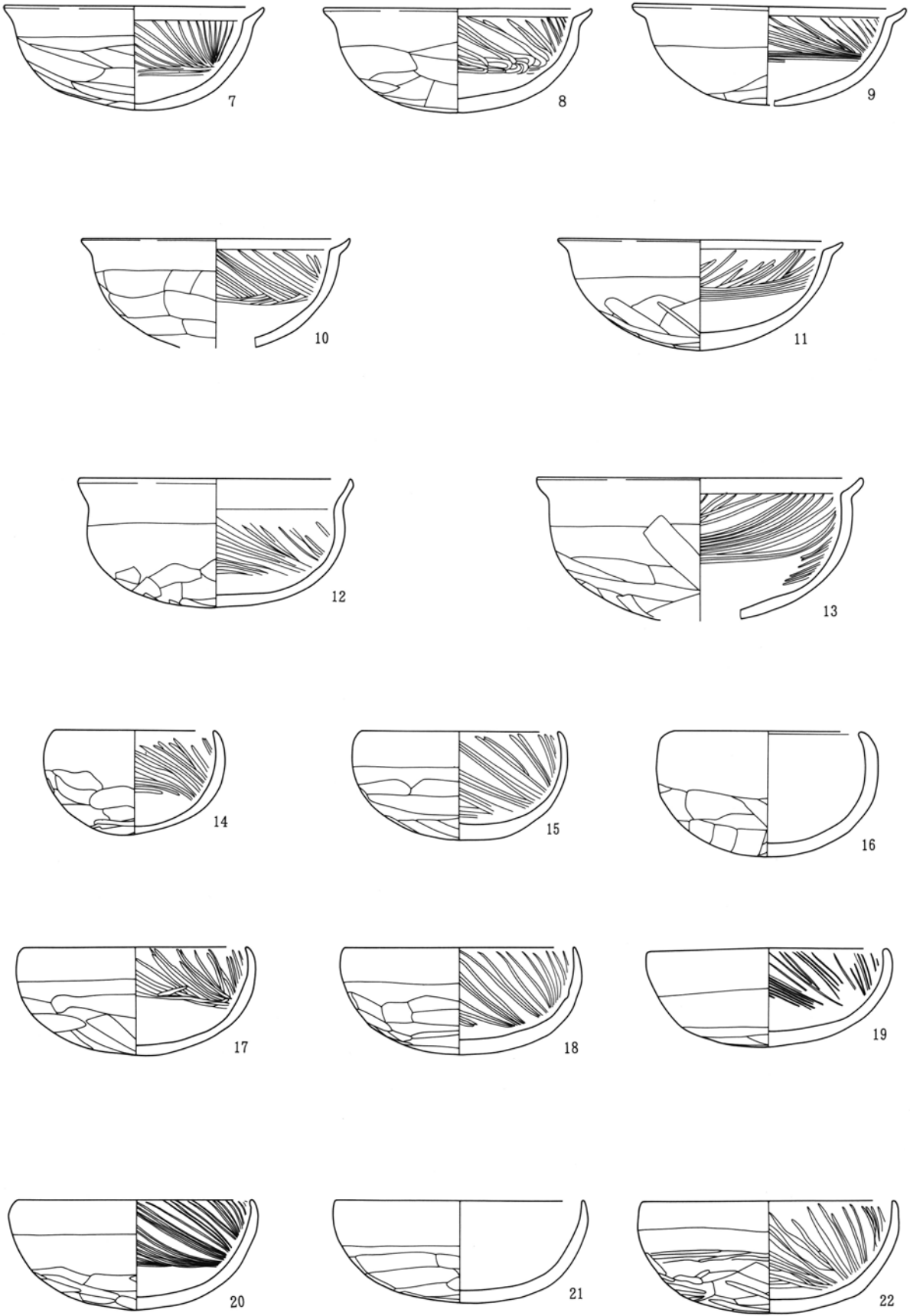
IV 五反田地区の遺構と遺物



第15図 122号住居掘り方図

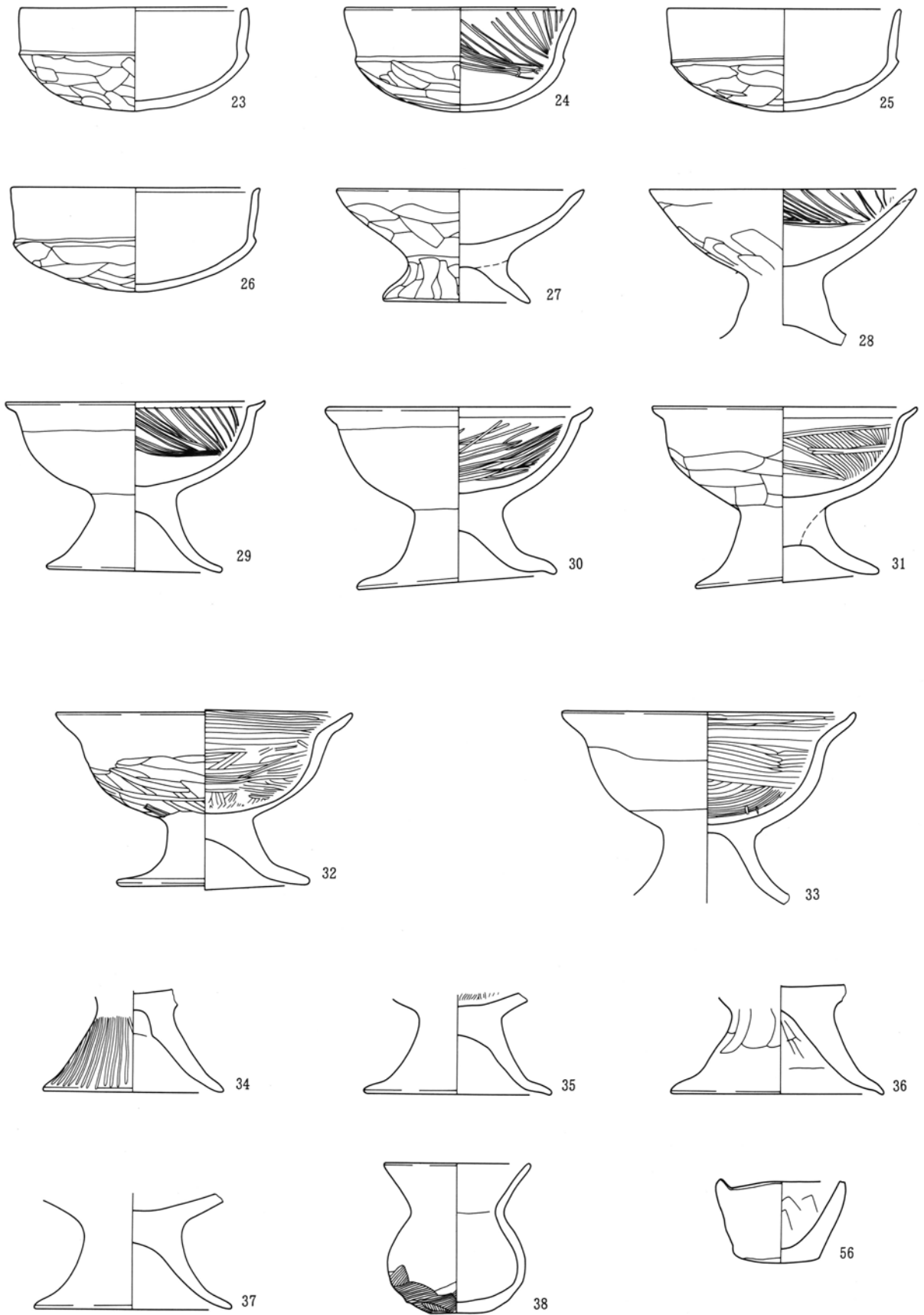


第16図 122号住居遺物図(1)

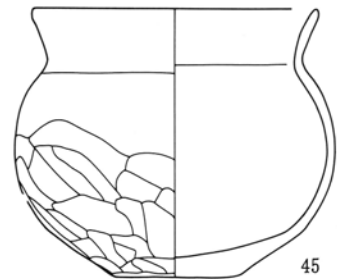
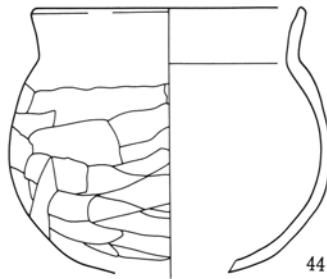
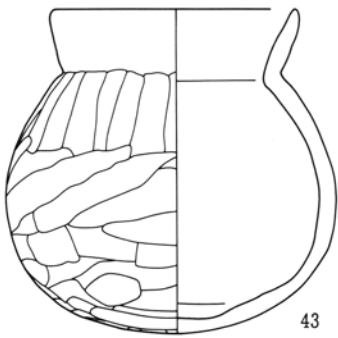
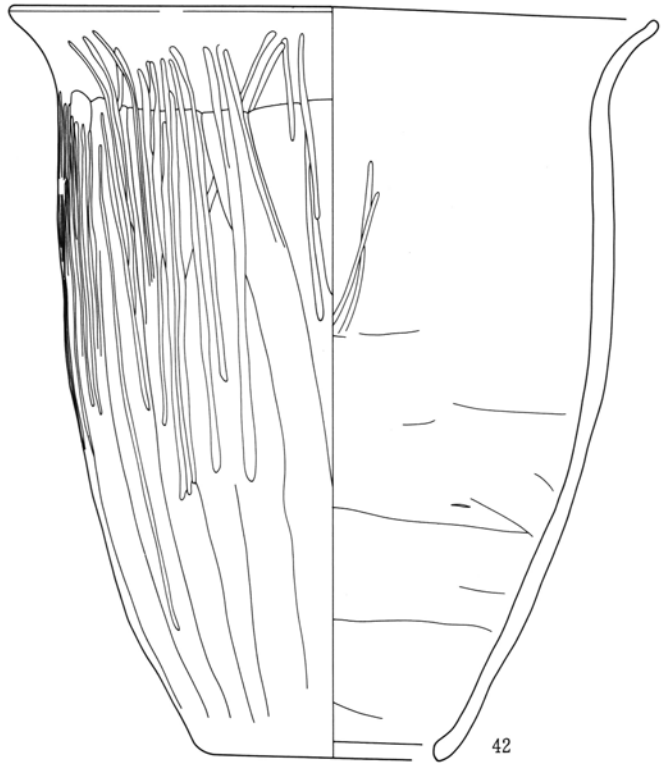
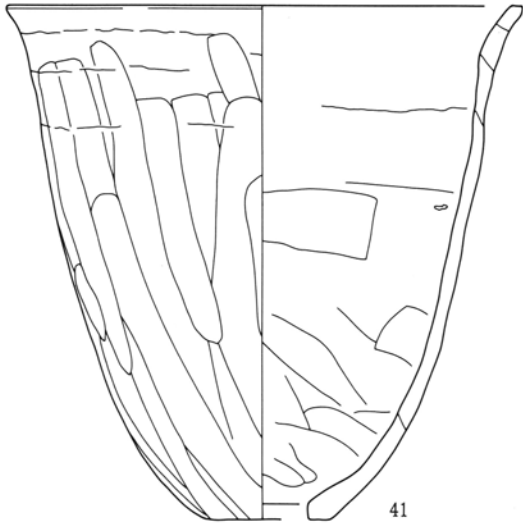
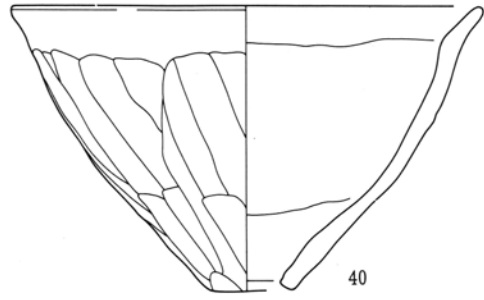
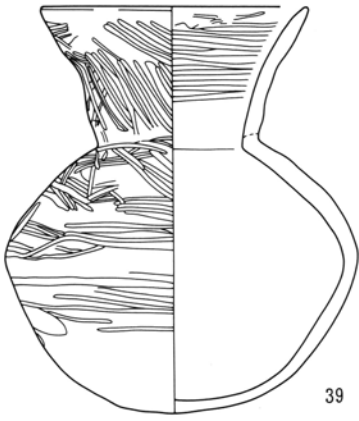


第17图 122号住居遺物图(2)

IV 五反田地区の遺構と遺物

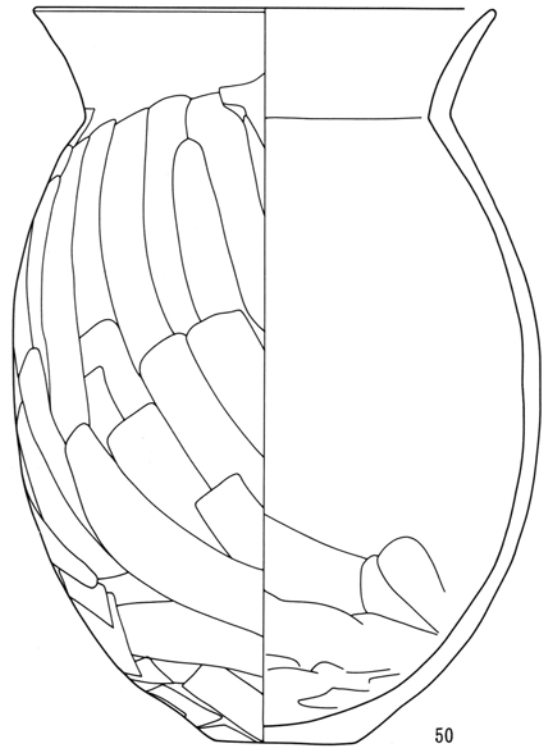
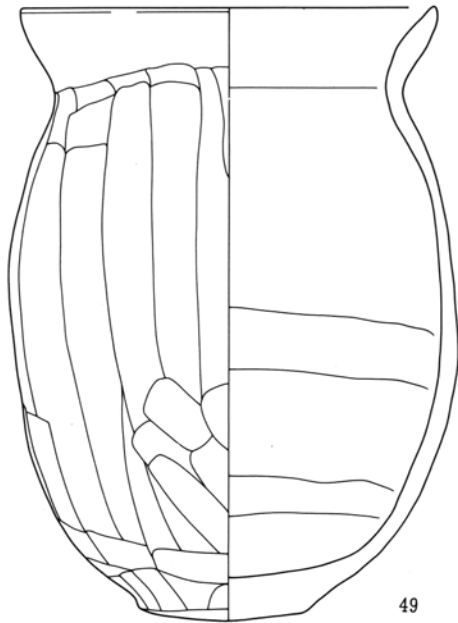
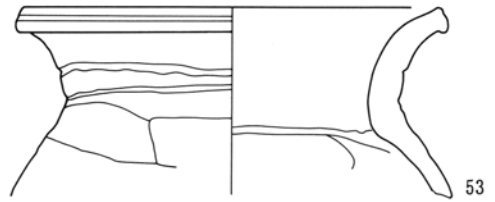
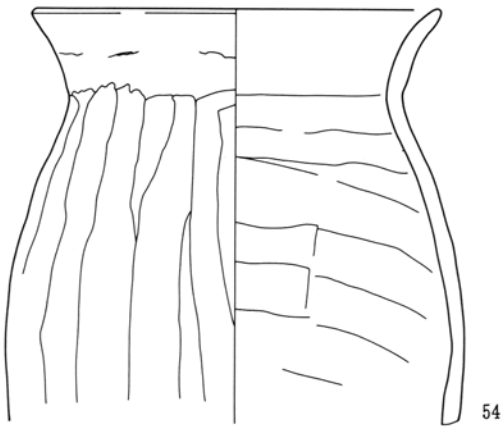
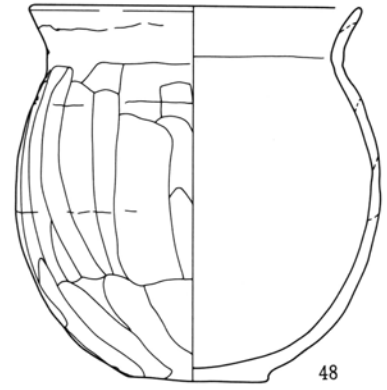
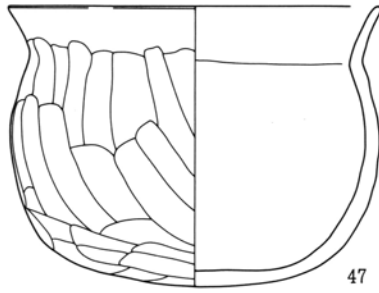
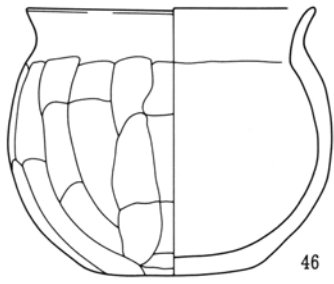


第18図 122号住居遺物図(3)

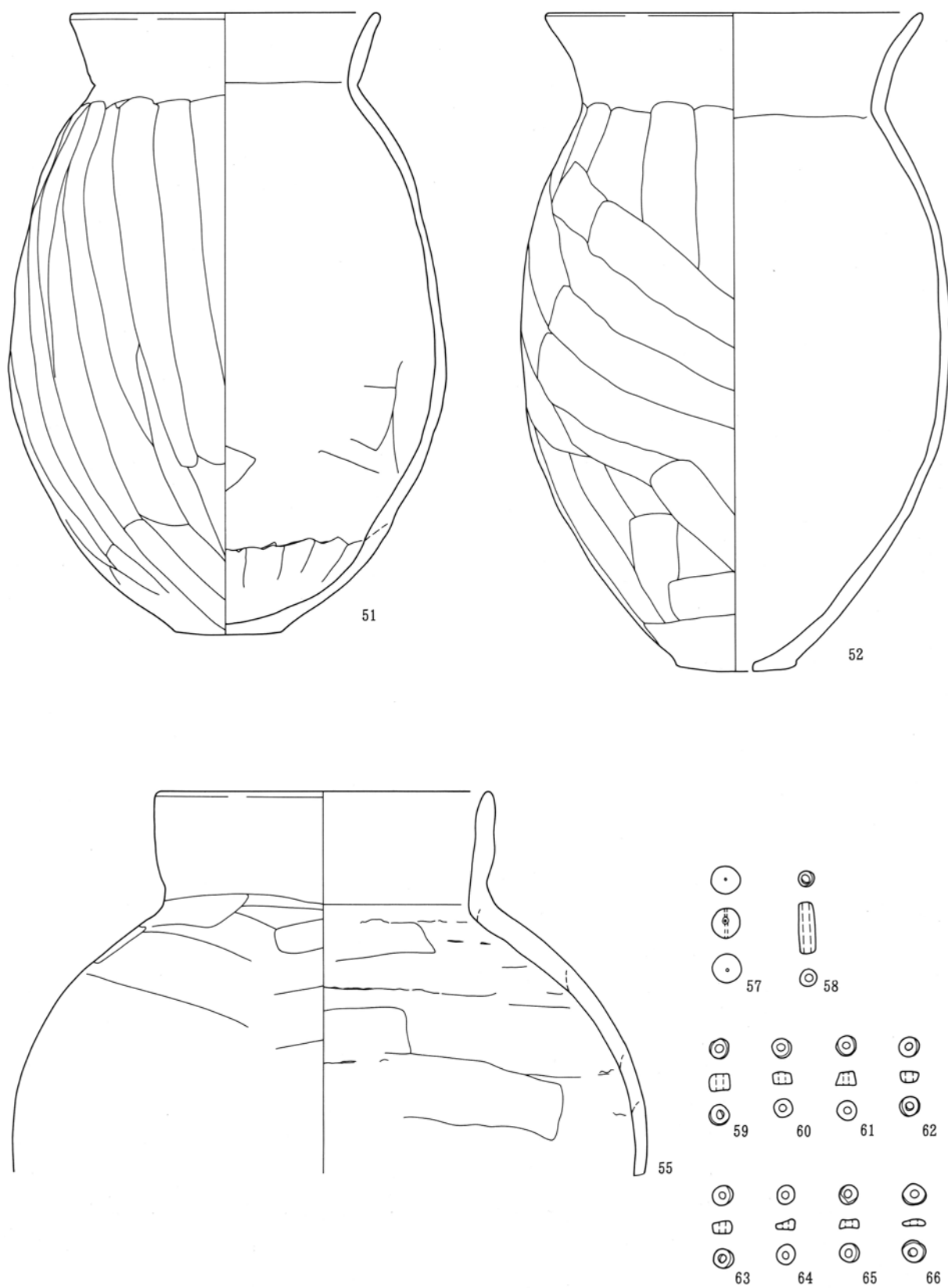


第19図 122号住居遺物図(4)

IV 五反田地区の遺構と遺物

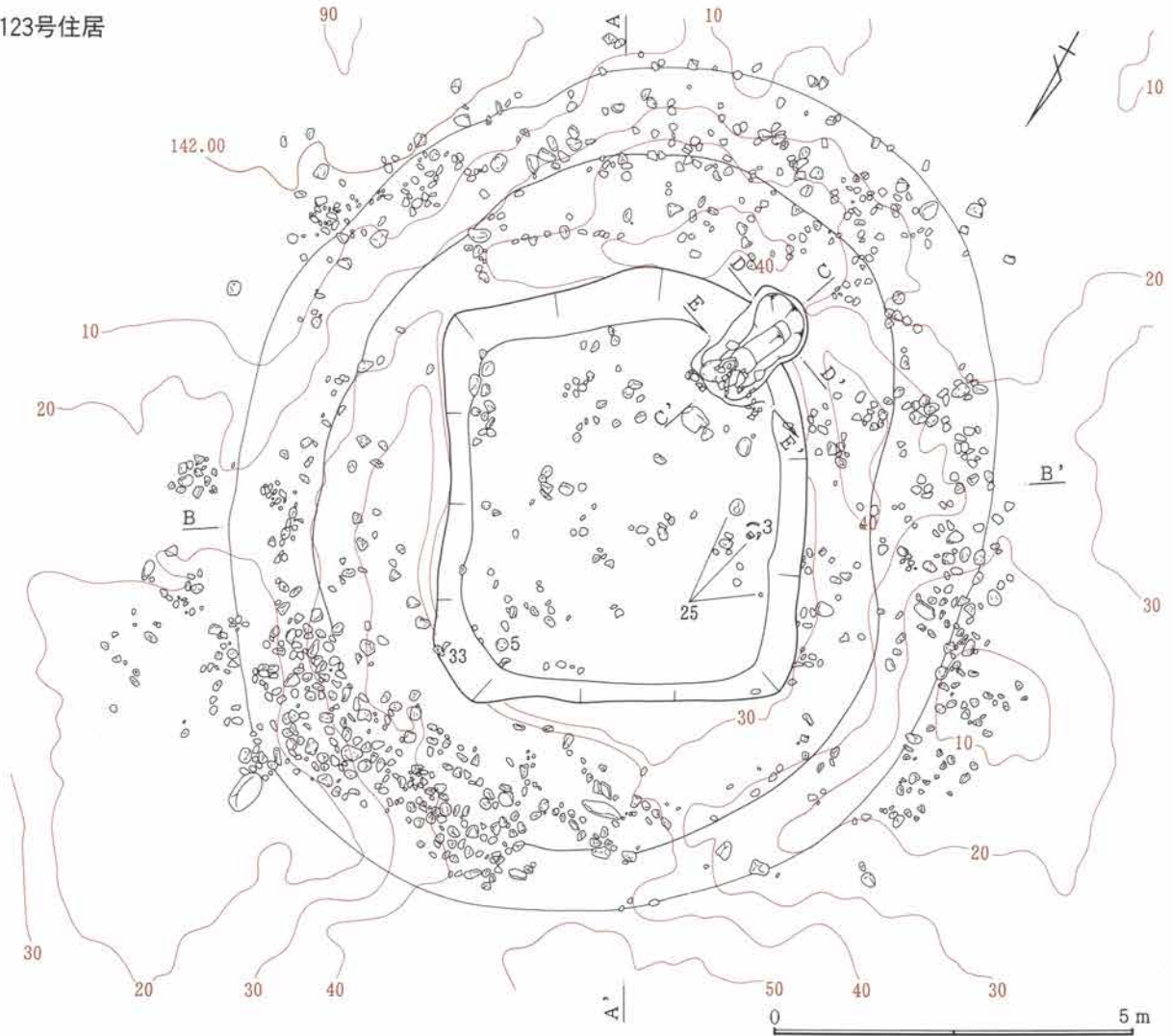


第20図 122号住居遺物図(5)



第21图 122号住居遺物图(6)

123号住居



第22図 123号住居平面図

本住居跡は、調査区中央よりやや北側の86区A～D-13～15グリッドに位置する。他の遺構との重複関係は、竪穴部分および周堤帯下でも見られない。残存状態は、竪穴・周堤帯とも良好な状態で検出された。住居の形態は、竪穴部分では長方形を呈するが、周堤帯の外周は楕円形を呈する。

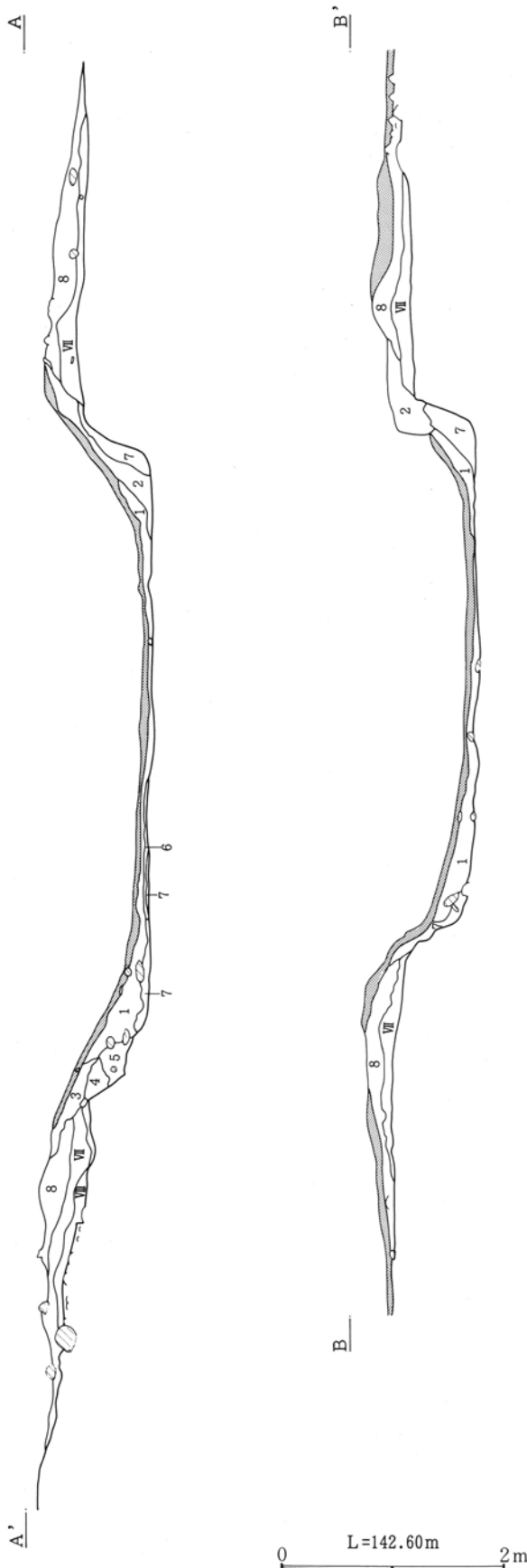
規模は、長軸5.95m、短軸4.95mで各辺の長さは北辺5.10m、東辺5.95m、南辺5.30m、西辺6.20mを測る。床面積は、19.53㎡で周堤帯を含んだ面積は91.5㎡である。主軸方位は、N-119°-Wを指す。

壁高は、北壁47～63cm、東壁50～62cm、南壁47～57cm、西壁45～65cm、平均53cmである。また、貯蔵穴・柱穴・壁溝などの内部施設は、検出されなかった。床面は、礫を多く含んだ地山をそのまま踏み固

めている。

周堤帯は、良好な状態で残存しており、竪穴周囲に幅2.60～3.05m、高さ20～30cmで巡る。本住居近辺の層序は、下層に位置する礫層が上昇しているため竪穴部分掘削のときに多量に出たためか周堤帯に多量の礫を含んでいる。

カマドは、西南隅に構築されている。残存状態は、天井部が崩落しており袖部も多少の流出が推定される。規模は、焚口～煙道間が1.74m、両袖間の幅1.14m、焚口幅0.30mを測る。焚口の上には、天井部の補強のための円礫が置かれている。袖にも芯に円礫を入れて補強している。煙道は、竪穴部分より124cm外へ延びるが上部の構造は残存していなかった。燃焼部には、第28図31・32の土師器甕が並



第23図 123号住居土層断面図

列して据えつけられていたように出土している。

Hr-F A層下の埋没土は、122号住居と同様に壁際から竪穴中央に向けての自然堆積である。壁際より1m前後では、三角堆積が見られるがその内側は10cm程度の堆積しか観察されなかった。また、壁際の埋没土も外部からも土砂が流入したものでなく壁の地山の崩落土であった。このことから本住居は、Hr-F A噴火の直前に廃棄されたと推定される。

出土遺物は、土師器杯、高杯、埴、甕、壺と石製模造品白玉などが出土している。その総量は、破片数で602点を数えるがそのうち3分の2は甕、壺が占めている。遺物の出土位置は、竪穴内部のカマドや床面からの出土も見られるが、周堤帯内部からも多く出土している。

123号住居

竪穴部分

1. 黒色土 灰白色砂、 ϕ 1~5cmの円礫を多く含む
2. 黒色土 8の崩落土
3. 黒色土 As-Cを少し含む
4. 黒色土 灰色砂を少量含む
5. 灰白色土 VIII層の崩落土
6. 灰褐色土 As-Cを僅かに含む、硬く踏みしめられて床面に使用している
7. 灰白色土 砂質土、VIII層と同様

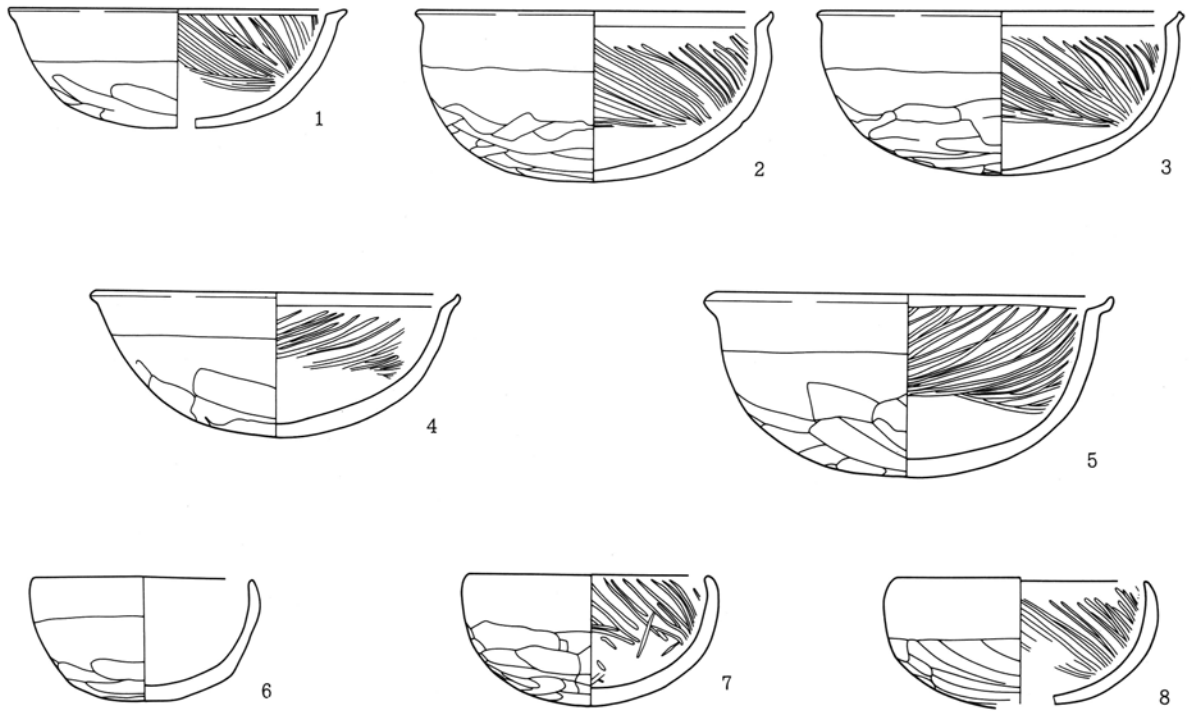
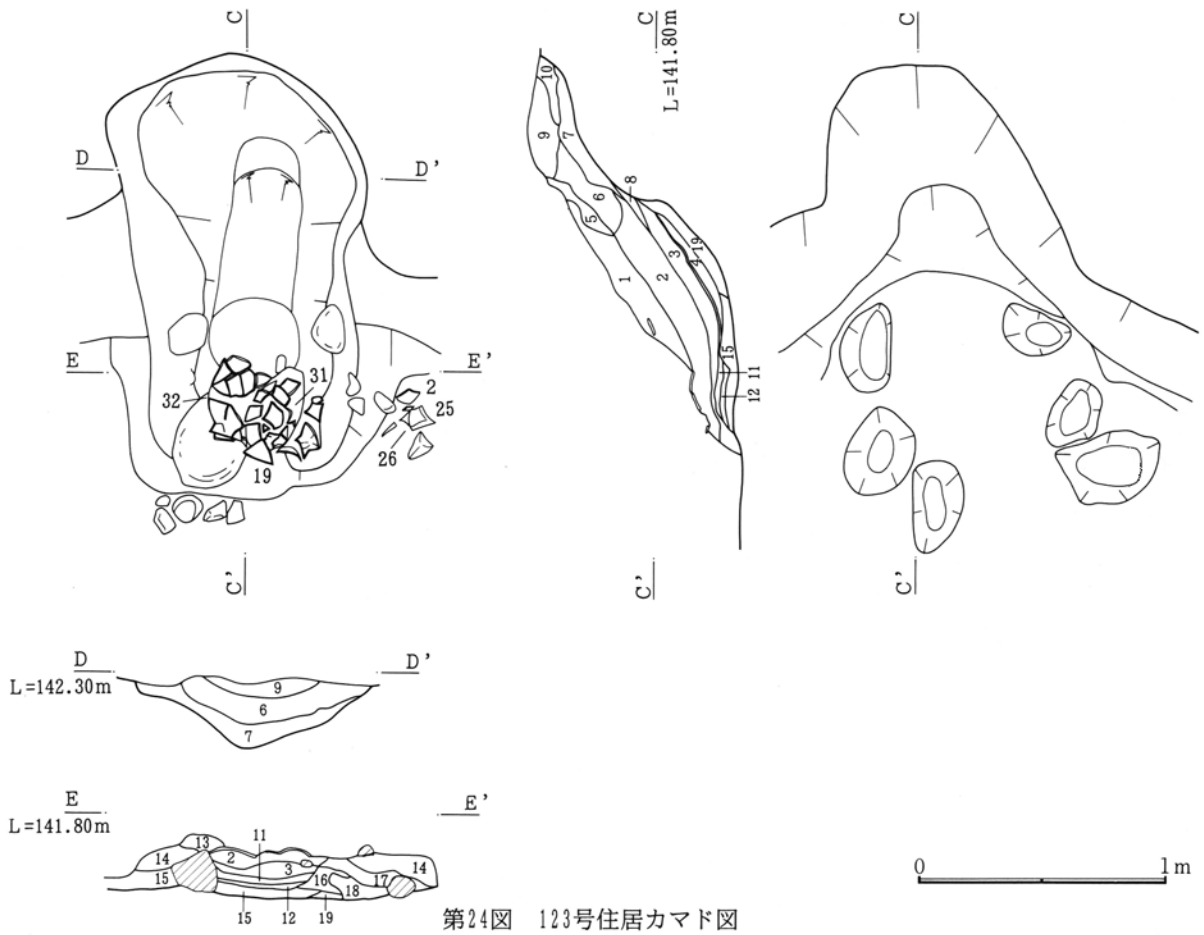
周堤帯

8. 灰褐色土 ϕ 1~10cmの円礫と黒色土ブロックを多く含む

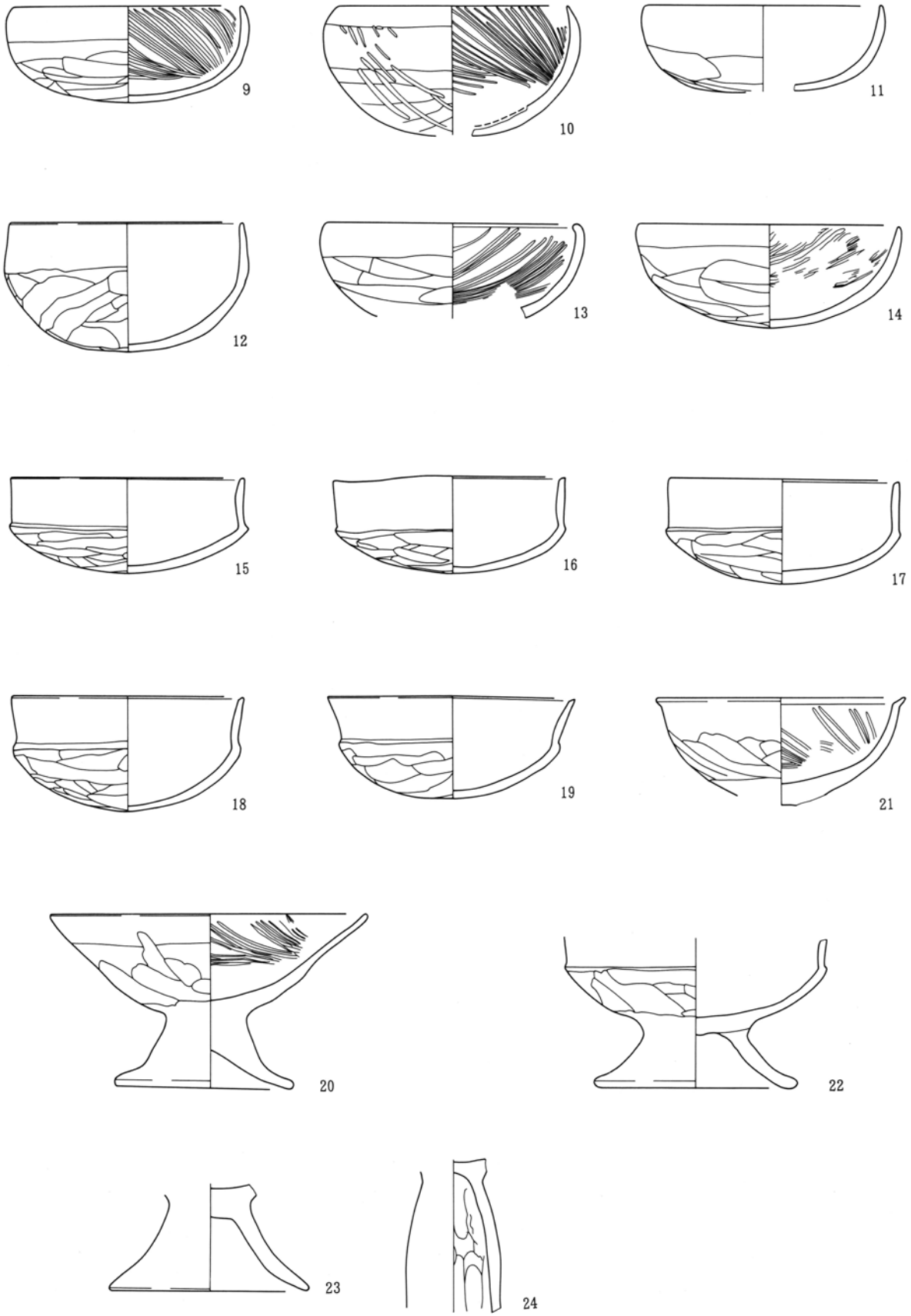
カマド

1. 黄灰色土 砂質土、焼土粒、As-Cを僅かに含む
2. にぶい黄色土 焼土を多くと炭化物を若干含む
3. 赤褐色土 焼土
4. 褐灰色土 焼土と灰色砂を含む
5. 浅黄色土 砂質土
6. 灰黄褐色土 砂質土、焼土とAs-Cを僅かに含む
7. 褐灰色土 焼土と灰色砂を含む
8. 黄灰色土 焼土を多く含む
9. 褐灰色土 砂質土、焼土とAs-Cを若干含む
10. にぶい黄色土 焼土を若干含む
11. 黄色土 粘質土
12. 黒色土 灰
13. にぶい黄色土 粘質土、焼土を含む
14. にぶい黄色土 粘質土
15. 黒褐色土 砂質土、As-Cを少し含む
16. 褐色土 焼土を少し含む
17. にぶい黄色土 粘質土、ブロック状
18. 褐色土 焼土を僅かに含む
19. 明黄褐色土 黄褐色粘土ブロックを多く含む

IV 五反田地区の遺構と遺物

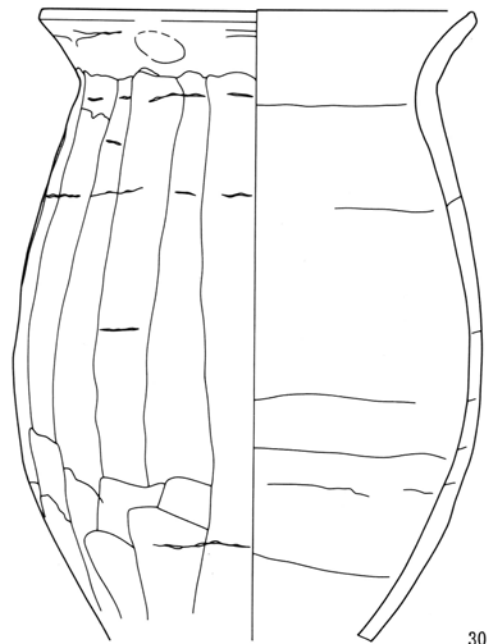
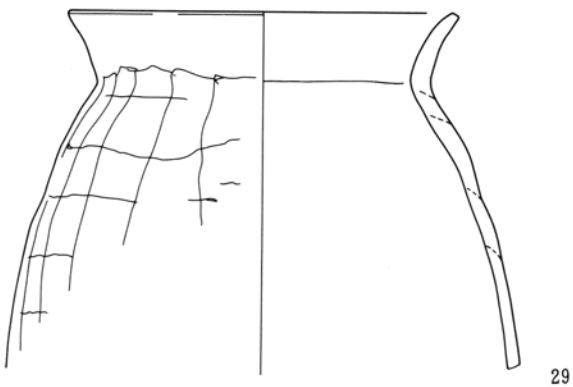
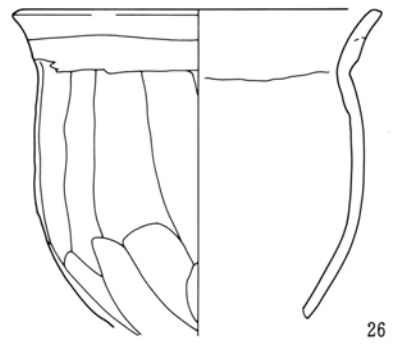
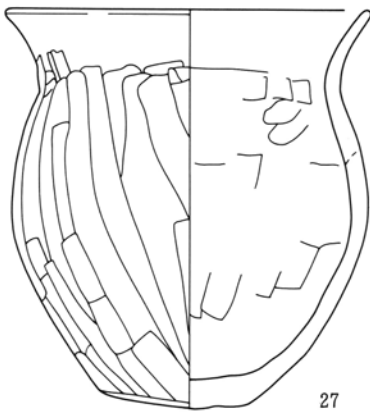
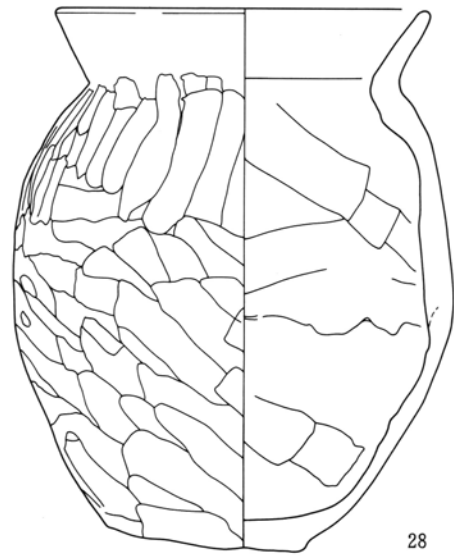
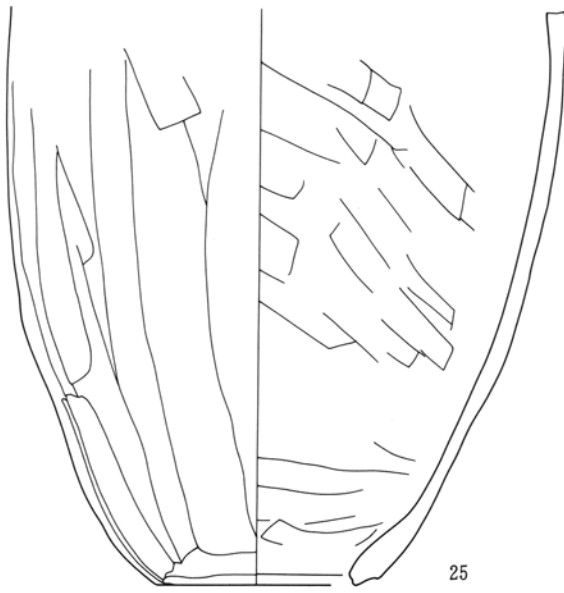


2. 住居

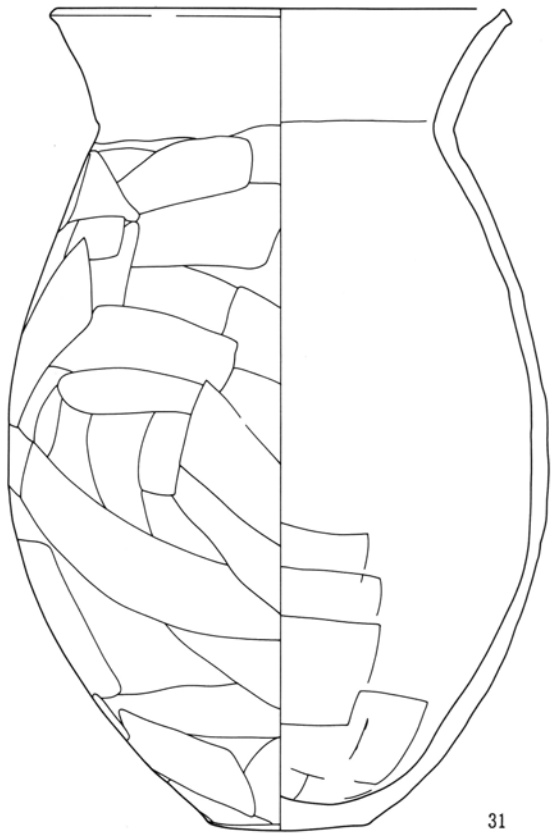


第26图 123号住居遺物图(2)

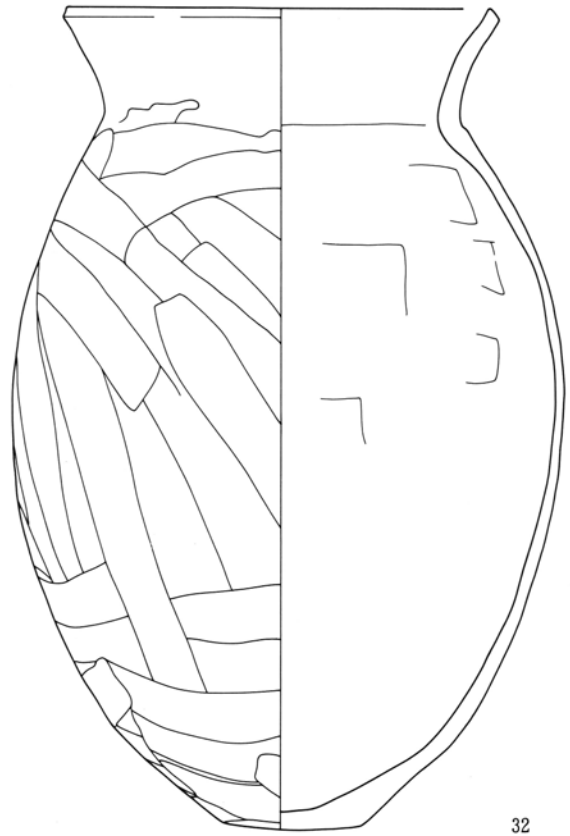
IV 五反田地区の遺構と遺物



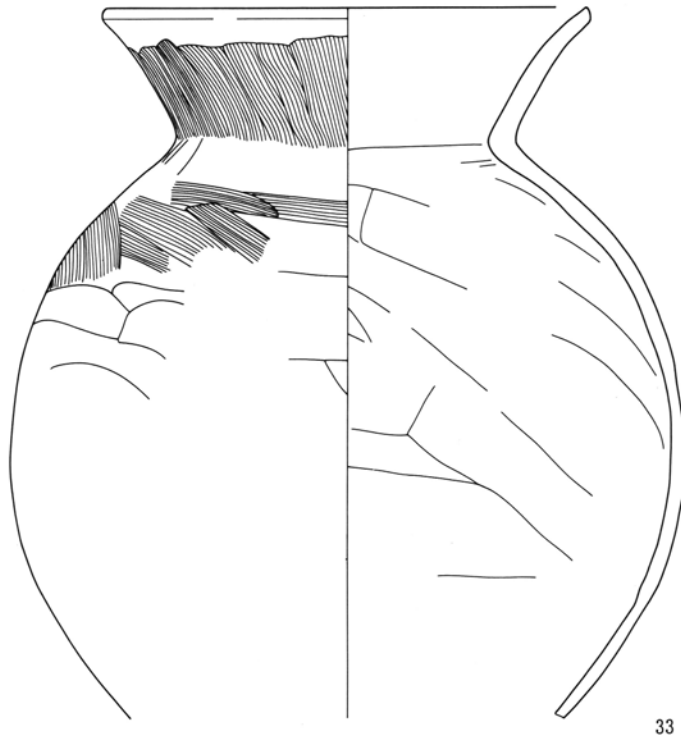
第27図 123号住居遺物図(3)



31



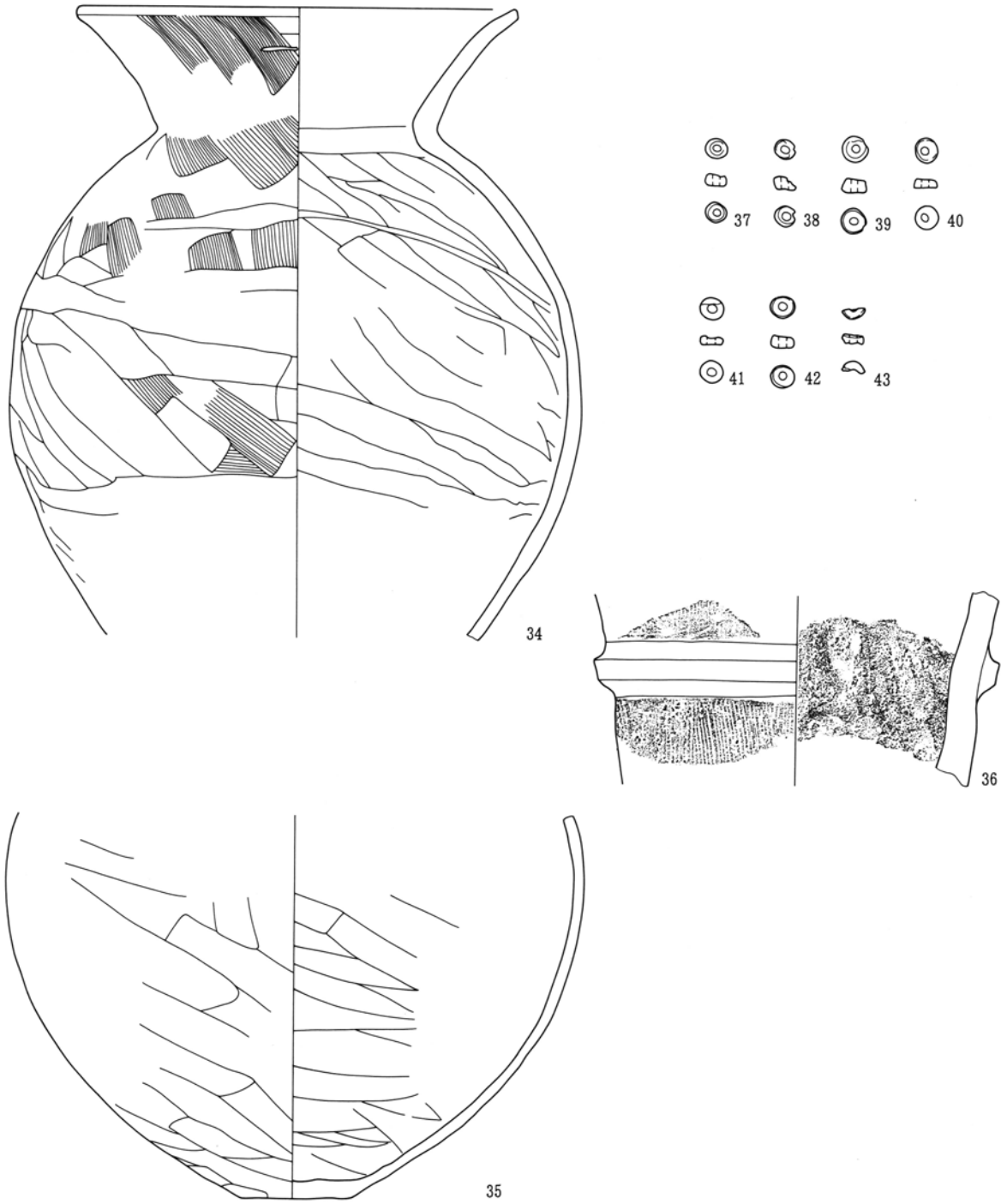
32



33

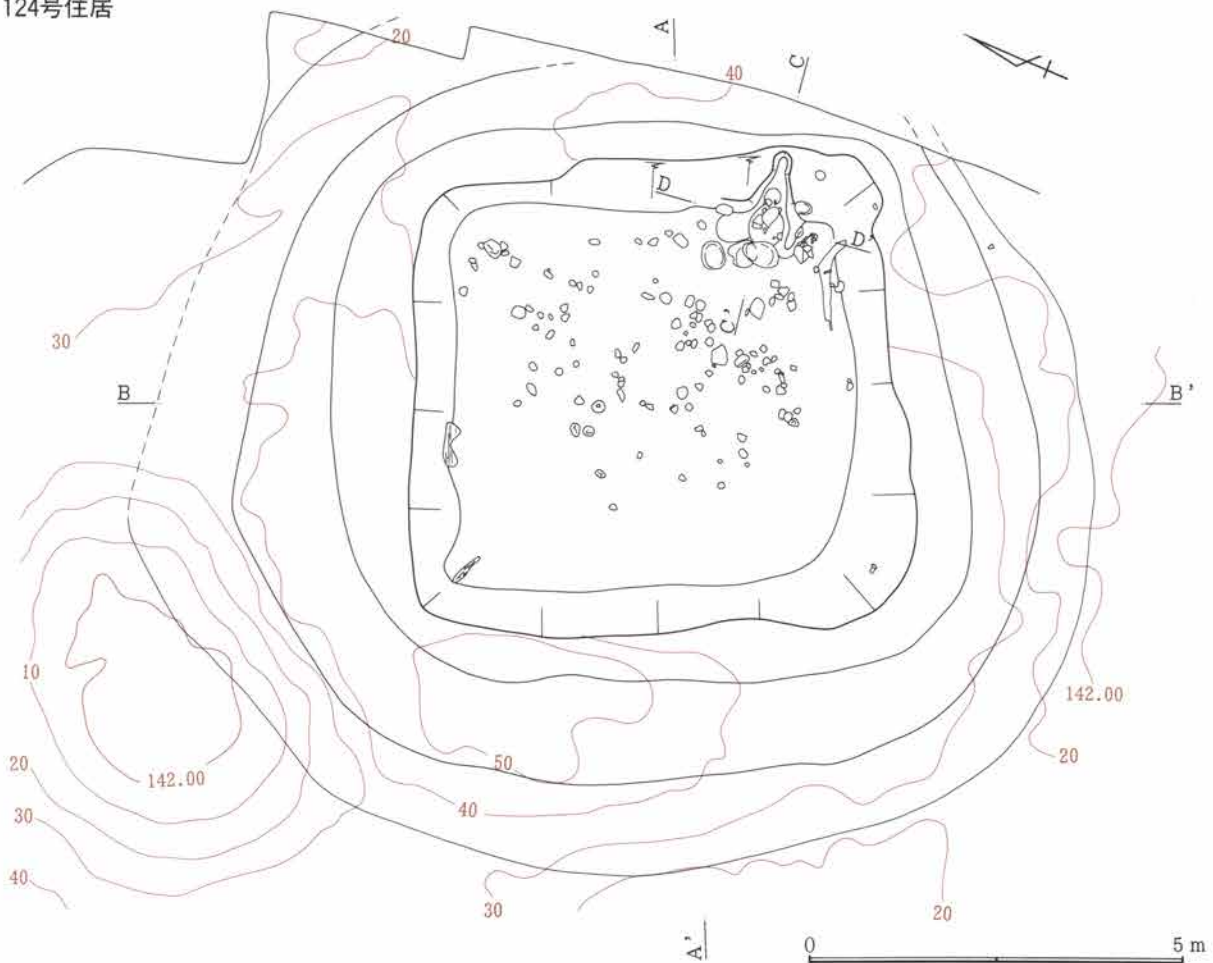
第28图 123号住居遺物図(4)

IV 五反田地区の遺構と遺物



第29図 123号住居遺物図(5)

124号住居



第30図 124号住居平面図

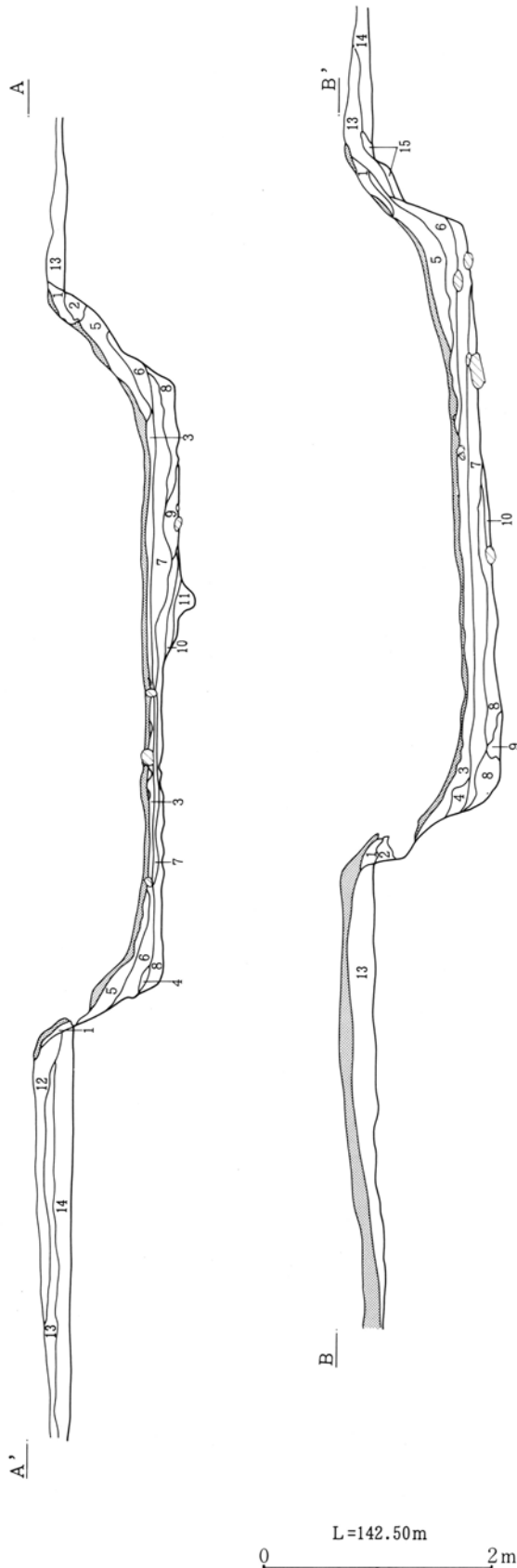
本住居跡は、調査区の北東部分の85区S～T-15～17、86区A-15～17グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、竪穴部分では見られないが周堤帯下に137号住居が存在する。新旧関係は、当然本住居の方が後出である。残存状態は、周堤帯の東側部分の一部が調査区外に存在するが竪穴部分と残りの周堤帯部分は良好な状態である。住居の形態は、竪穴部分では正方形を呈するが、周堤帯の外周は隅円方形を呈すると想定される。

規模は、長軸6.74m、短軸6.28mで各辺の長さは北辺6.02m、東辺6.06m、南辺6.26m、西辺6.56mを測る。床面積は、26.45㎡で周堤帯外周まで含めた面積は約125㎡と推定される。主軸方位は、N-66.5°-Eを指す。壁高は、北壁1.04～1.16m、東壁1.04～1.15m、南壁1.05～1.22m、西壁1.02～

1.08m、平均1.10m前後である。また、貯蔵穴、柱穴、壁溝などの内部施設は、検出されなかった。

床面は、地山をそのまま利用するのではなく、10～20cmほど灰色シルト質土を入れて踏み固めている。周堤帯は、良好な状態で残存しており、竪穴周辺に幅2.50～3.20m、高さ20～30cmで巡る。

カマドは、東壁の南隅よりに構築されている。残存状態は、天井部は崩落しているが、他は割合良好な状態である。規模は、焚口～煙道間が1.53m、両袖間の幅1.06m、焚口幅0.35mを測る。袖は両袖とも粘質土を使い、天井部には補強のために45×30×20cm程度の円礫を使用している。また、燃焼部からは、カマドに掛けられていたと想定される第35図-19の土師器甕が出土している。煙道は、竪穴部分より66cm外へ延びるが上部の構造は残存していなかつ



第31図 124号住居土層断面図

た。

住居の掘り方は、床面より10~20cmほど掘り込まれているが、西側3分の1が東側より深く掘り込まれていた。また、楕円形状の掘り込みも2カ所で検出したが明確な床下土坑とは確認できなかった。

Hr-F A層下の埋没土の状態は、122号・123号住居と同様に壁際で三角堆積をしているが、その堆積量は122号・123号住居に比べると少なく、この部分の堆積土はほとんど壁面の地山が崩落したものである。また、中央部分のHr-F A層下の堆積は、概ね10cm前後であるが、西北部分の床面には厚さ3cm前後のHr-F Aが直接堆積していた。このことから本住居は、Hr-F A噴火時には住居が建っており、西北部分の入り口などの空間からHr-F Aが直接吹き込み堆積し、さらに噴火の最中に住居が崩壊したと考えられる。また、中央部分の堆積は、屋根に積もった土砂の量と推定される。

遺物は、土師器杯、高杯、柑、甕、壺、石製紡錘車、土製玉、石製模造品白玉が出土している。その総量は、破片数で455点を数え、そのうち土師器甕の破片が8割を占めている。遺物の出土状態は、カマドの右袖と南東隅の間に第34・35図-3、15、16、20が置かれた状態で出土している。また、5の土師器杯は、壁に密着して出土しており、壁の上に置かれていたものが崩落のさいにやや落下したと考えられる。

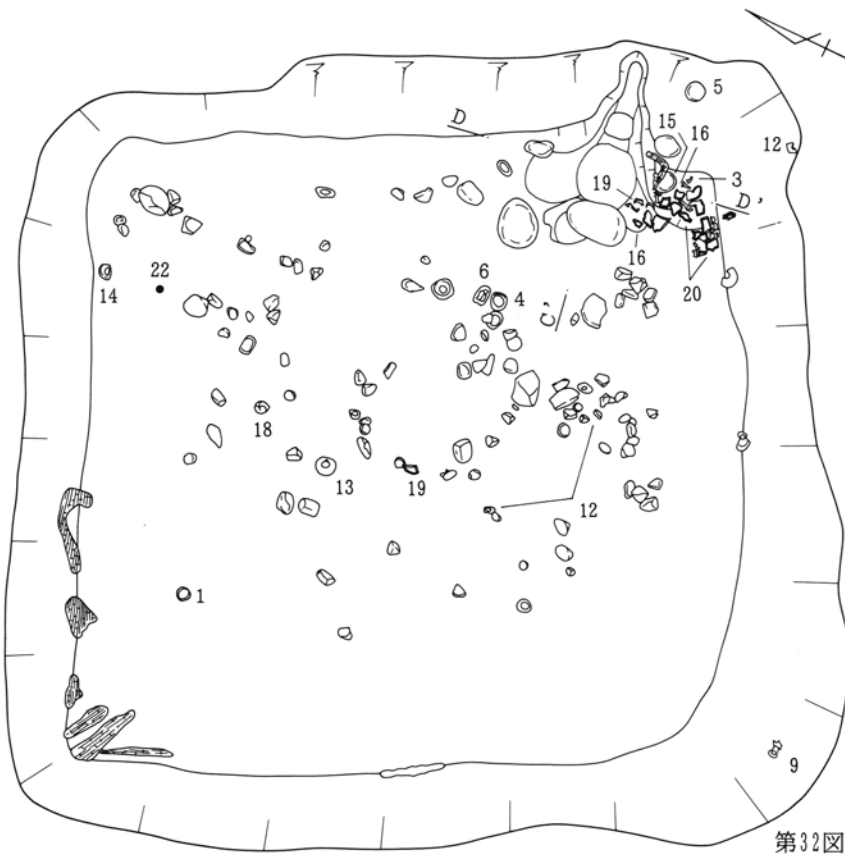
124号住居
 竪穴部分

1. 灰褐色土 砂質土、周堤帯上部の崩落土
2. 灰黒色土 砂質土、周堤帯からの崩落土
3. 褐灰色土 砂質土、繊維状の炭化物を多く含む
4. 褐灰色土 砂質土、3と同様、3より炭化物が少ない
5. 灰黄色土 砂質土、As-Cを少量含む
6. 灰黄色土 砂質土、As-Cをほとんど含まない
7. 灰黄褐色土 砂質土、黒色土ブロックとAs-Cを少し含む
8. にぶい黄橙色土 粘土ブロックとAs-Cを少し含む
9. 黒色土と黄橙色土がブロック状に混在したもの
10. 黒色土 VII層と同様、炭化物を僅かに含む
11. 褐灰色土 砂質土、As-Cを僅かに含む

周堤帯

12. 灰黄褐色土 砂質土、As-Cを少量含む
13. にぶい黄橙色土 砂質土、黒色土ブロックを多く含む
14. 明黄褐色土 砂質土、黒色土ブロックとAs-Cを多く含む

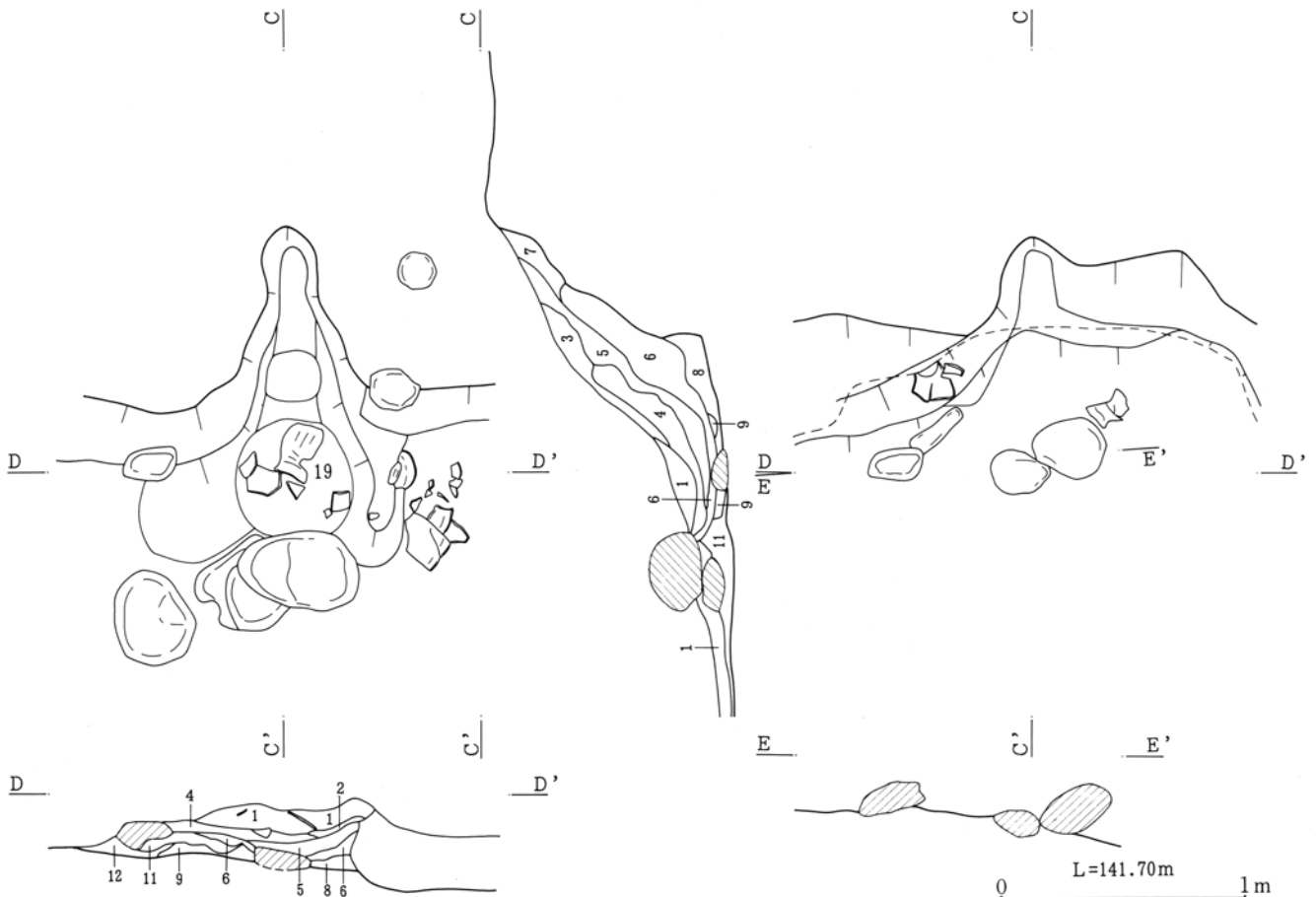
2. 住居



カマド

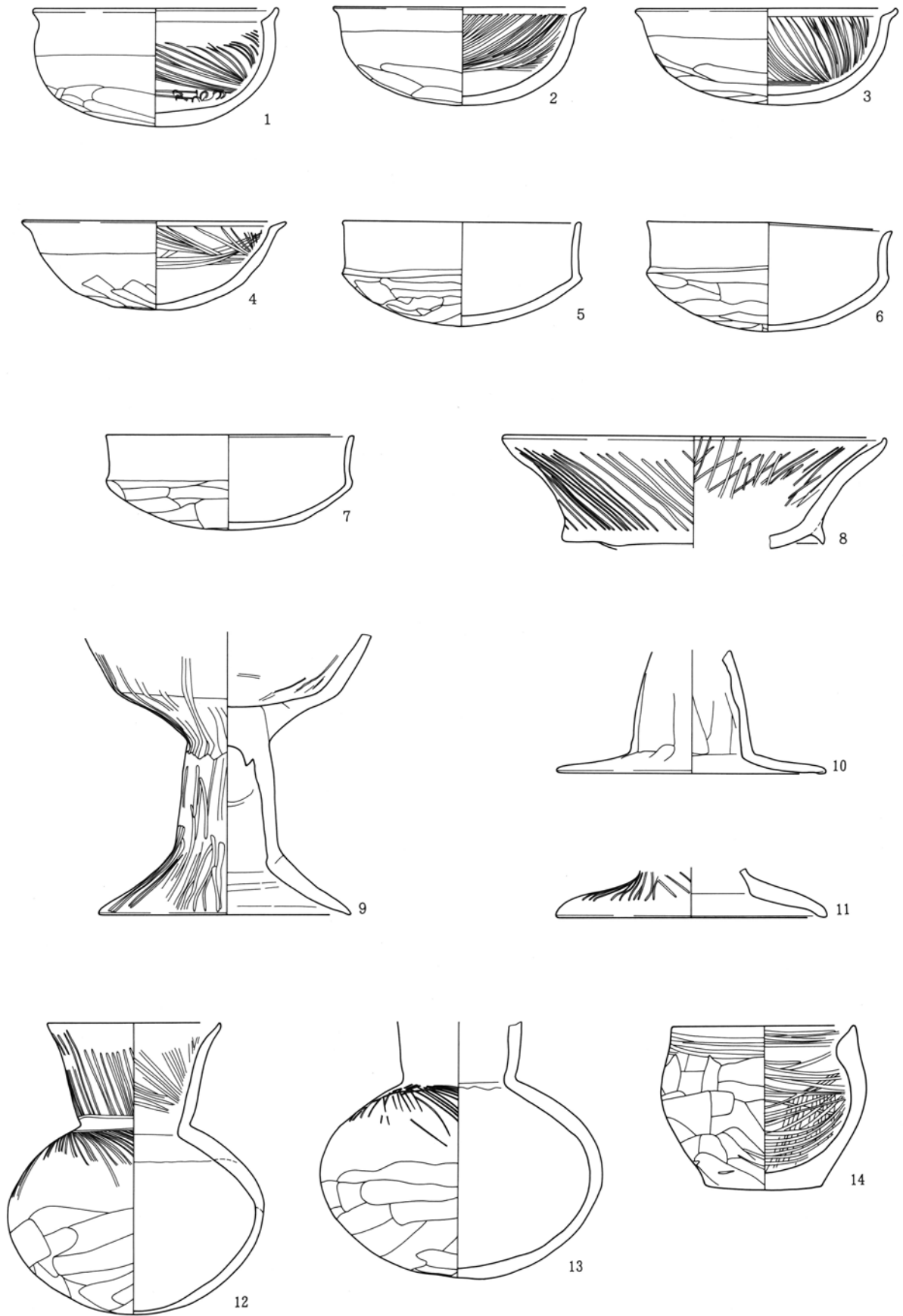
1. 灰色土 砂質土、黄褐色粘土ブロックを少し含む
2. 赤褐色土 天井部の焼土化したもの
3. にぶい黄色土 焼土粒を若干含む
4. 褐灰色土 粘土質、下半は焼土化
5. 灰褐色土 砂質土、煙道への流入土
6. 赤褐色土 火床面の焼土化したもの
7. 灰褐色土 焼土粒を多量に含む
8. にぶい黄橙色土 砂質土、焼土粒を僅かに含む
9. 灰黄色土 灰を多量に含む
10. 黒褐色土 灰を多量に含む
11. 黒色土 灰
12. にぶい黄橙色土 砂質土、As-Cを僅かに含む

第32図 124号住居竪穴部分平面図

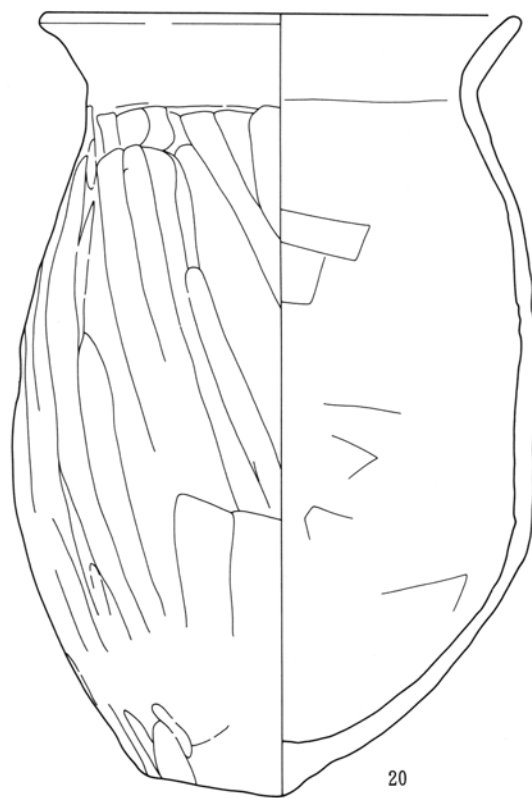
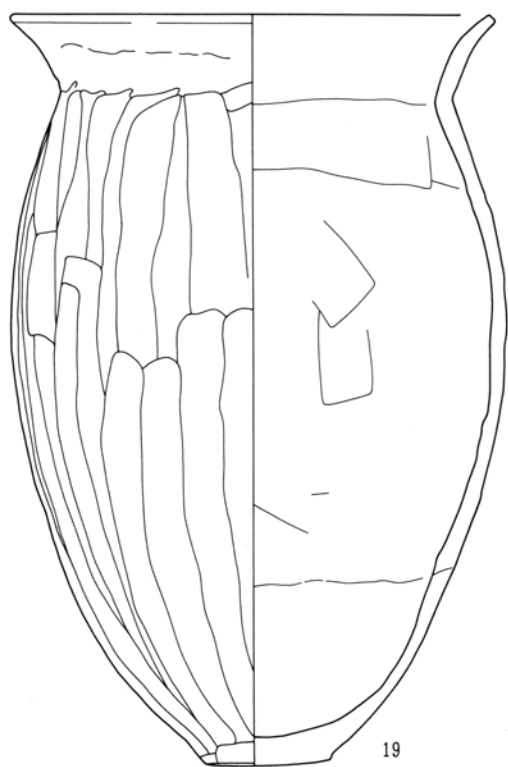
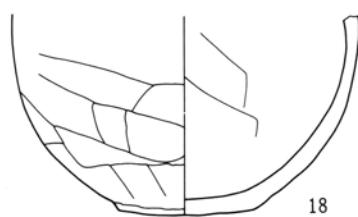
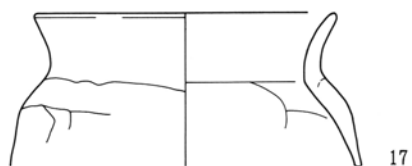
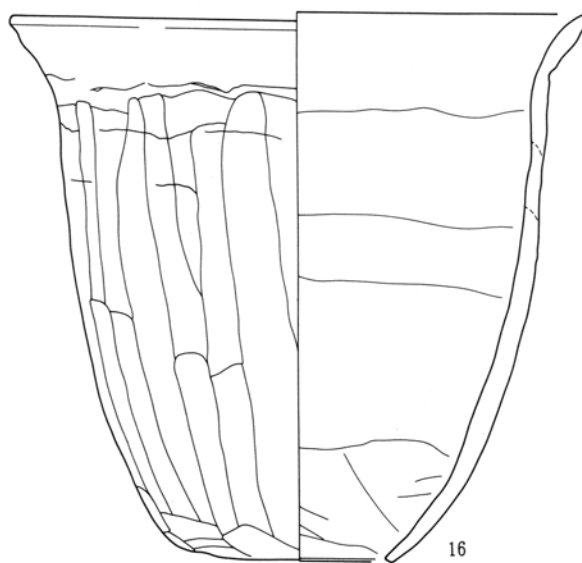
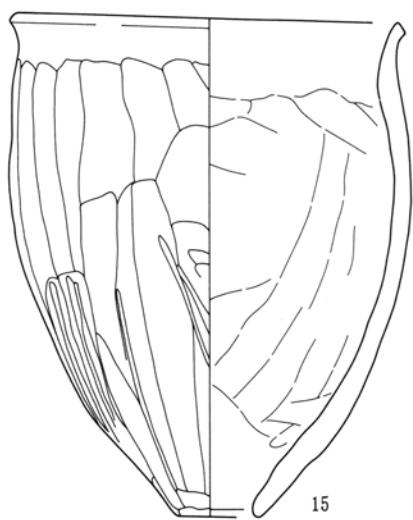


第33図 124号住居カマド図

IV 五反田地区の遺構と遺物

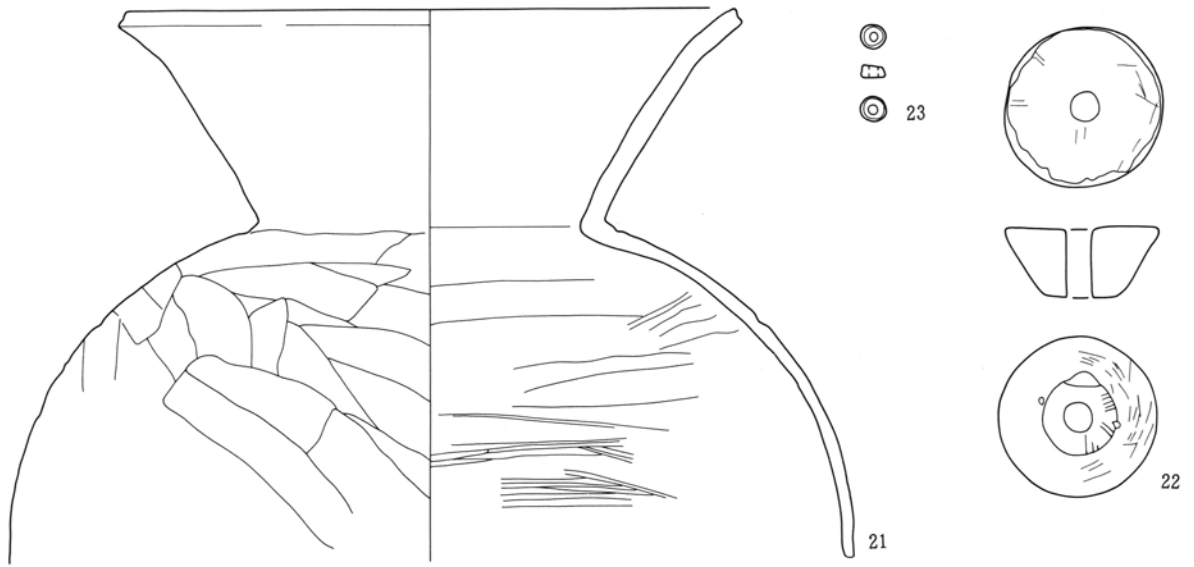


第34図 124号住居遺物図(1)



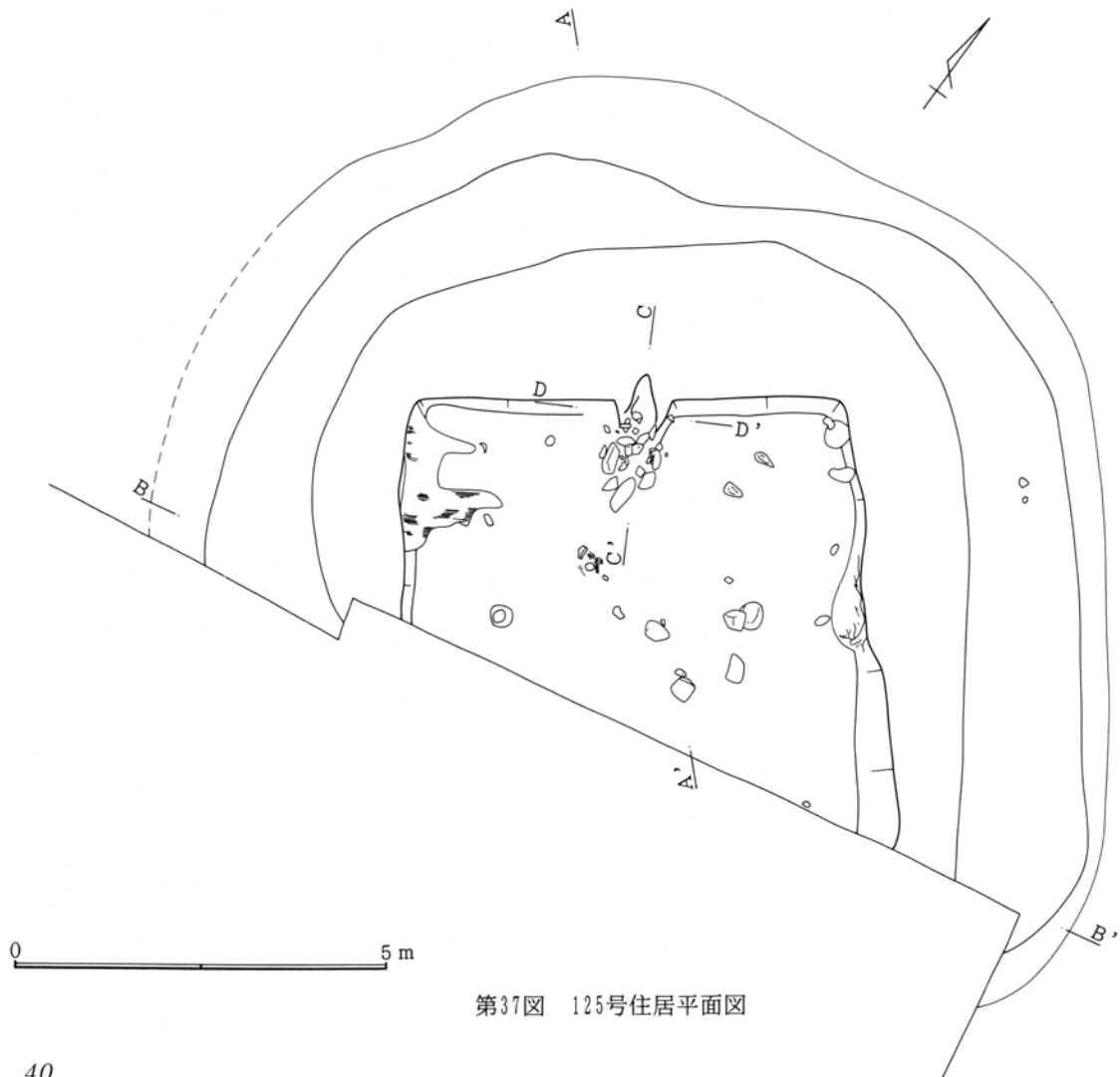
第35図 124号住居遺物図(2)

IV 五反田地区の遺構と遺物

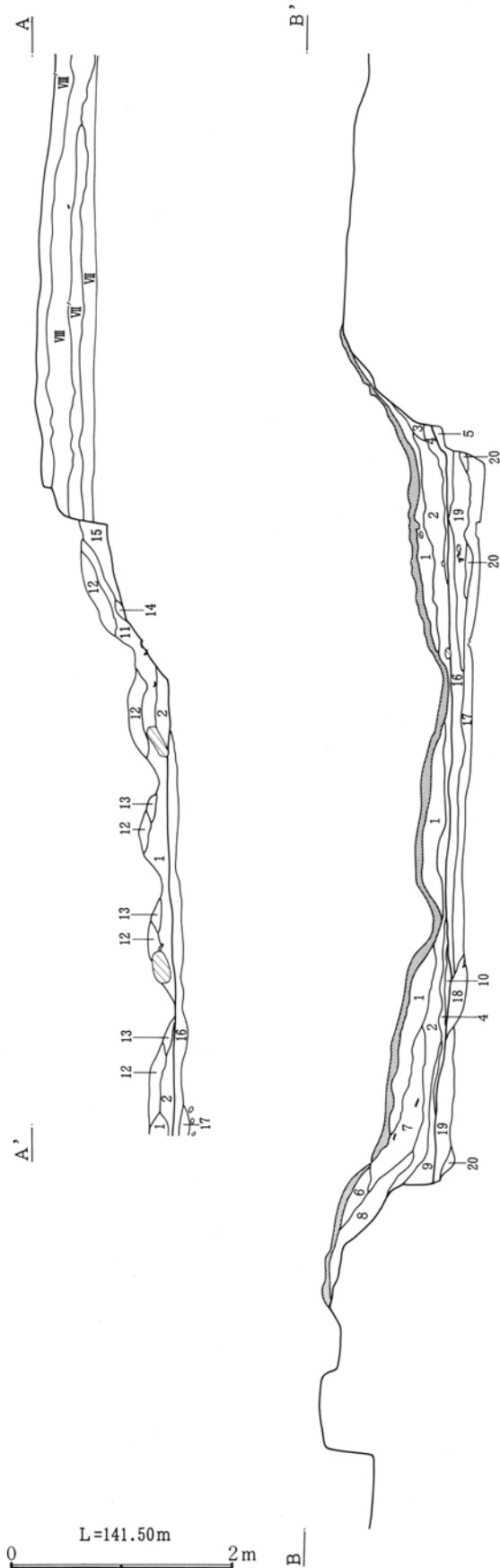


第36図 124号住居遺物図(3)

125号住居



第37図 125号住居平面図



第38図 125号住居土層断面図

本住居跡は、調査区の南端部、A～D-6～7グリッドに位置する。住居の南側3分の1程度が調査区外に位置するため全貌は不明である。他遺構との重複関係は、竪穴部分で8号・9号平地建物、周堤帯下に128号、134号、135号住居が存在するが、いずれの遺構より本住居の方が新しい。残存状態は、本住居が3分の1程度埋没し、深さ1m程度の窪みの状態で畠として耕作が行われているためカマドの袖の上部や周堤帯の一部は掘削を受けている。住居の形態は、ほぼ正方形に近い形態と推定され、周堤帯の外周の形態は隅円方形を呈すると推定される。

規模は、長軸6.20m、短軸は調査区内で5.95m。各辺の長さは北辺5.80mを測るが、東辺・南辺・西辺については調査区外に一部または全部が存在するため測定不能である。床面積は、調査区内で23.2 m^2 である。主軸方位は、N-32°-Wを指す。壁高は、北壁40.5～89cm、東壁78～89cm、西壁37～45cm、平均63cmである。内部施設は、竪穴中程で柱穴が2本検出された。それぞれの規模は、P1は径30×32cm、深度26cm、P2は径32×36cm、深度40cmを測る。その他の貯蔵穴や壁溝などは、検出されなかった。

周堤帯は、東側が幅2.50m前後、北側から西側は3.20～4.10mである。高さは、概ね30cm前後である。

カマドは、北壁の中央に構築されている。残存状態は、天井部が崩落しているが割合と良好な状態である。規模は、焚口～煙道間が1.10m、両袖間の幅0.83m、焚口幅0.26mを測る。袖には、補強のために芯に円礫を使用している。天井部は、崩落しているが補強のために円礫を使用していたようでその円礫がカマド前部の床面に散乱している。煙道は、竪穴部分より27cm外へ延びるが上部の構造は残存していなかった。

住居の掘り方は、床面より15cm前後掘り込まれているが床下土坑などの施設は設けられていない。

Hr-F A層下の埋没土の状態は、畠の耕作によりウネ・サクが作られ多少の変化は見られるが、壁際から竪穴部分の中程へ向けての自然堆積で中程は概ね20cm前後の堆積が見られる。壁際は、壁の崩落や

IV 五反田地区の遺構と遺物

周堤帯からのながれ込みによる堆積が観察された。

遺物は、土師器杯、高杯、鉢、甌、甕、壺、土製品玉などが出土している。その総量は、破片数で792点を数え、そのうち土師器甕の破片が8割を占めている。また、杯類では、内斜口縁をもつものが8割を占めている。遺物の出土状態は、カマド内より第41～44図-5、15、23～25、26～29が、左袖の横から19・29が、床面より7が、そして周堤帯内より4、14、22が出土している。

125号住居

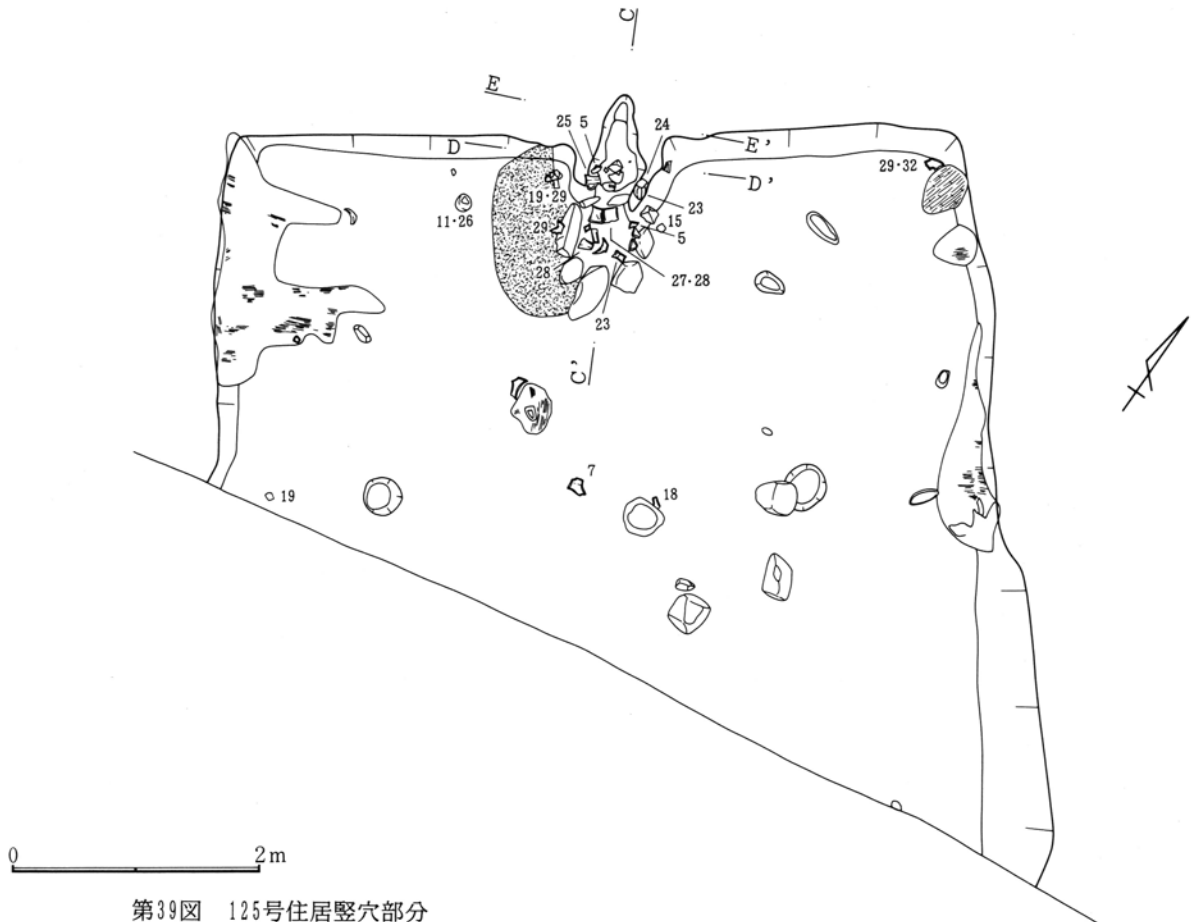
竪穴部分

1. 褐灰色土 黄橙色土ブロックを多量とAs-Cを少量含む
2. にぶい黄橙色土 砂質土褐灰色土ブロックを含む
3. 浅黄色土 砂質土、As-Cを若干含む
4. 灰黄色土 砂質土、褐色土粒とAs-Cを若干含む
5. にぶい黄色土 砂質土
6. 灰黄褐色土 灰色砂を多くとAs-Cを僅かに含む
7. 灰黄褐色土 6に類似、焼土粒を僅かに含む
8. 灰黄褐色土 3をブロック状に多く含む
9. 褐灰色土 砂質土、As-Cを僅かに含む
10. にぶい黄褐色土 砂質土、As-Cを僅かに含む

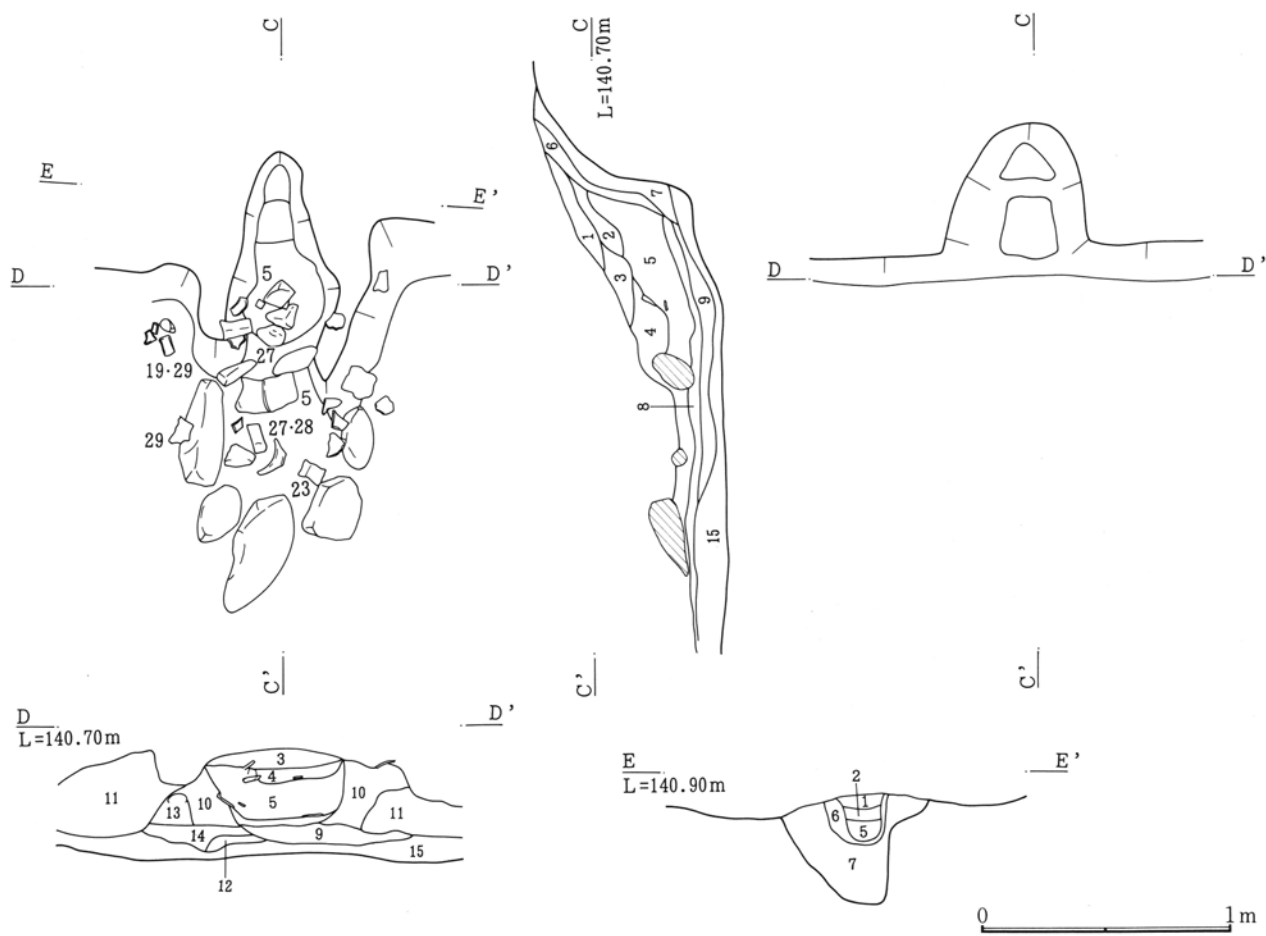
11. にぶい黄褐色土 10に類似、焼土粒を少し含む
12. 褐灰色土 As-Cを少し含む
13. にぶい黄褐色土 12に類似
14. にぶい黄色土 砂質土、黒色土ブロックとAs-Cを若干含む
15. 明黄褐色土 砂質土、黄橙色土ブロックを少量含む
16. にぶい黄橙色土 砂質土、黒色土ブロックを少し含む
17. 明黄橙色土 15に類似、黒色土ブロックを少し含む
18. 褐色土 黒色土ブロックを少量とAs-Cを僅かに含む

カマド

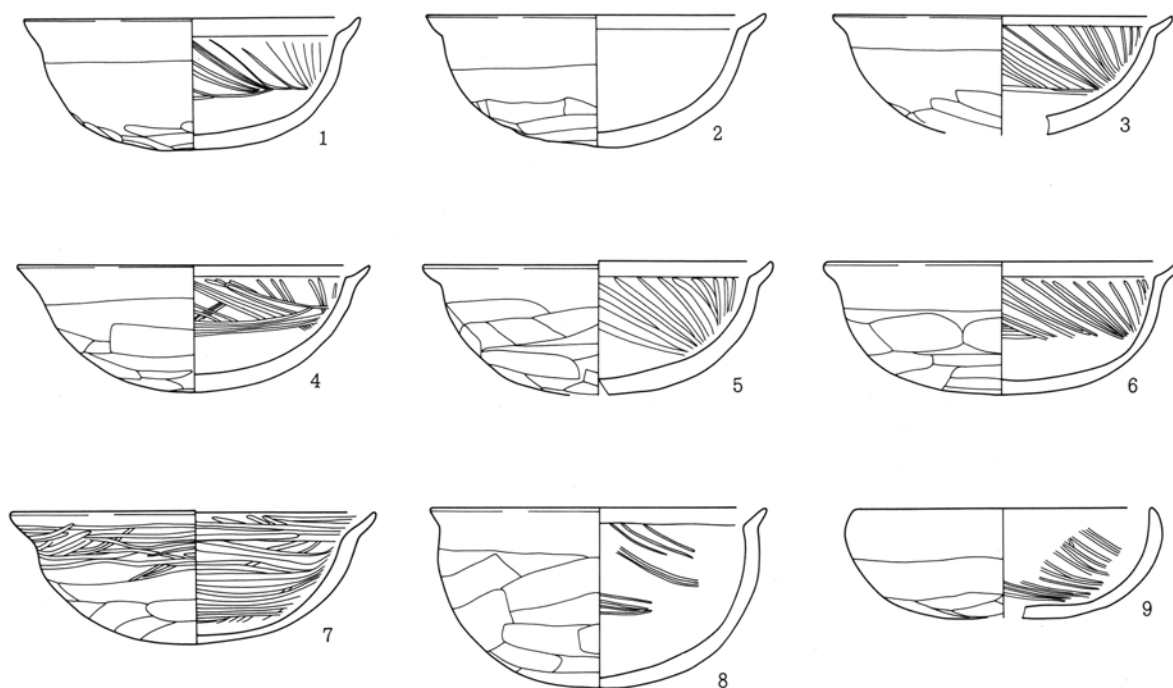
1. 黒褐色土 焼土ブロックを少量含む
2. 赤褐色土 天井部の焼土化したもの
3. 灰褐色土 粘土質、黒色土ブロック、焼土ブロック、炭化物を含む
4. 灰白色粘土 焼土、炭化物を含む
5. 黒褐色土 灰、灰白色粘土ブロック、焼土ブロックを含む
6. 赤褐色土 9の焼土化したもの
7. にぶい黄橙色土 砂質土、焼土粒を若干含む
8. 黒色土 灰、焼土を若干含む
9. にぶい黄褐色土 7に類似
10. 灰黄褐色土 灰白色粘土ブロックを含む
11. にぶい黄色土 砂質土、As-Cを若干含む
12. 黒色土 灰
13. 黄褐色土 灰白色粘土ブロックを少し含む
14. にぶい黄褐色土 7・9に類似、焼土粒を僅かに含む
15. にぶい黄褐色土 7・9に類似、As-Cを若干含む



第39図 125号住居竪穴部分

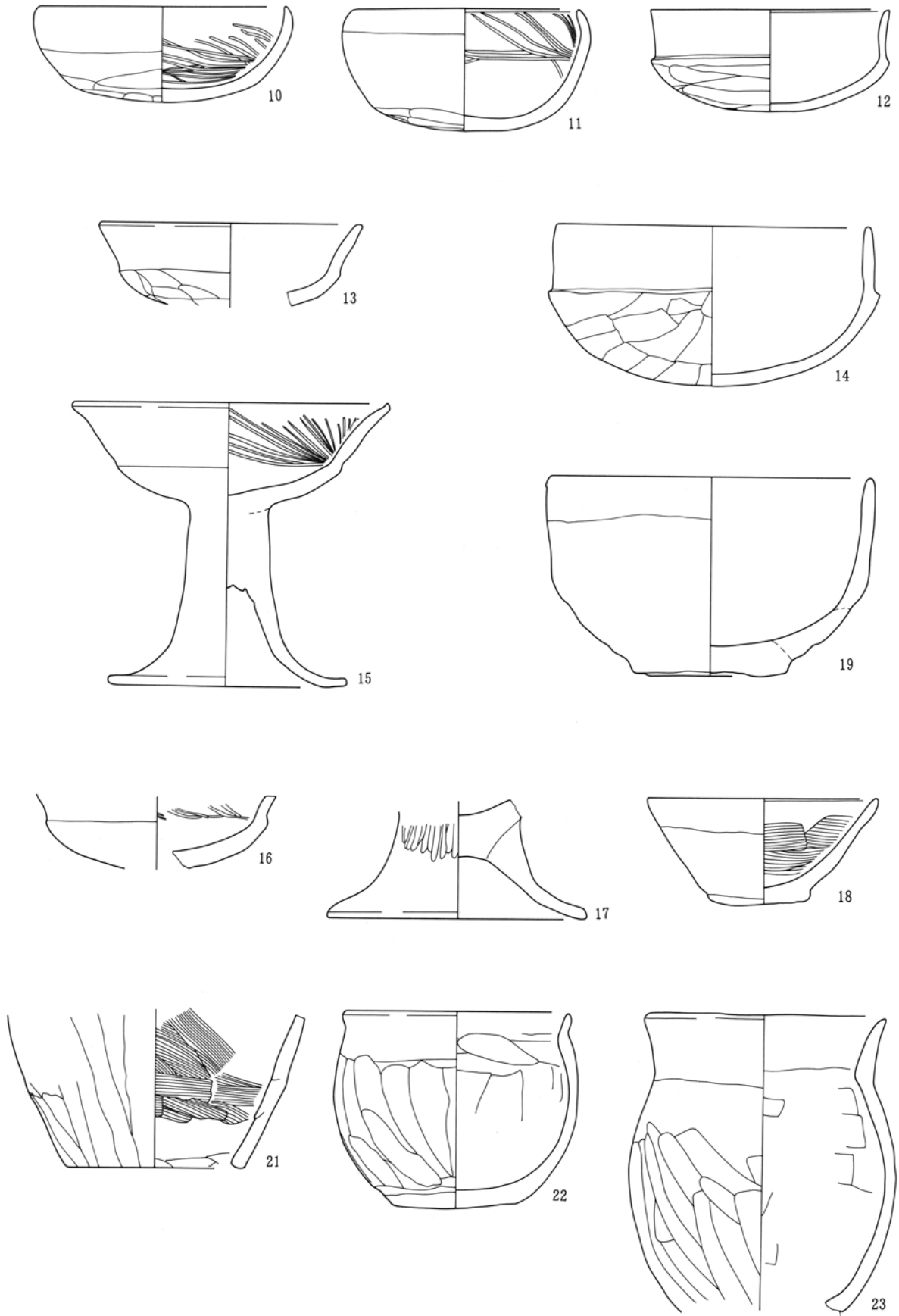


第40図 125号住居カマド図

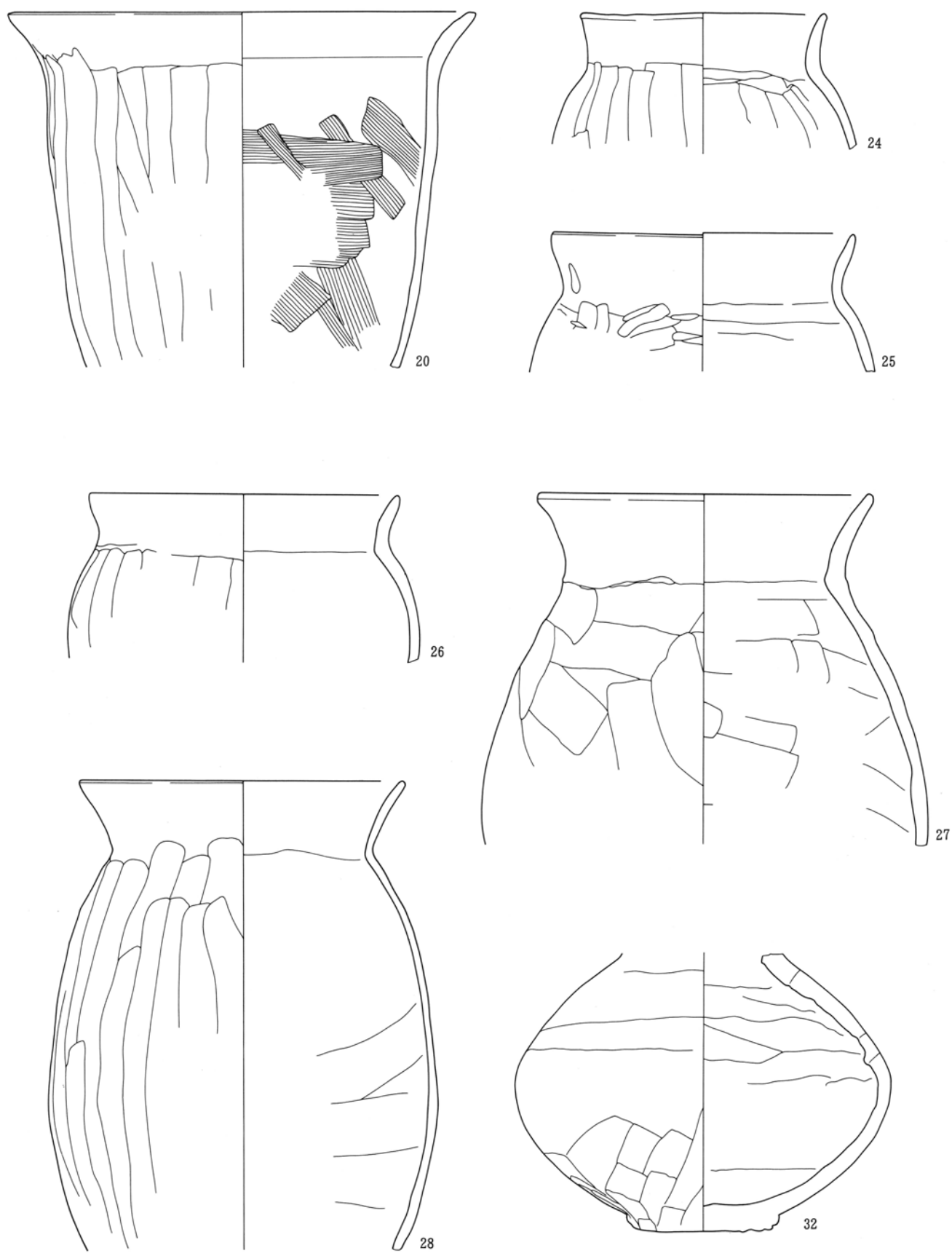


第41図 125号住居遺物図(1)

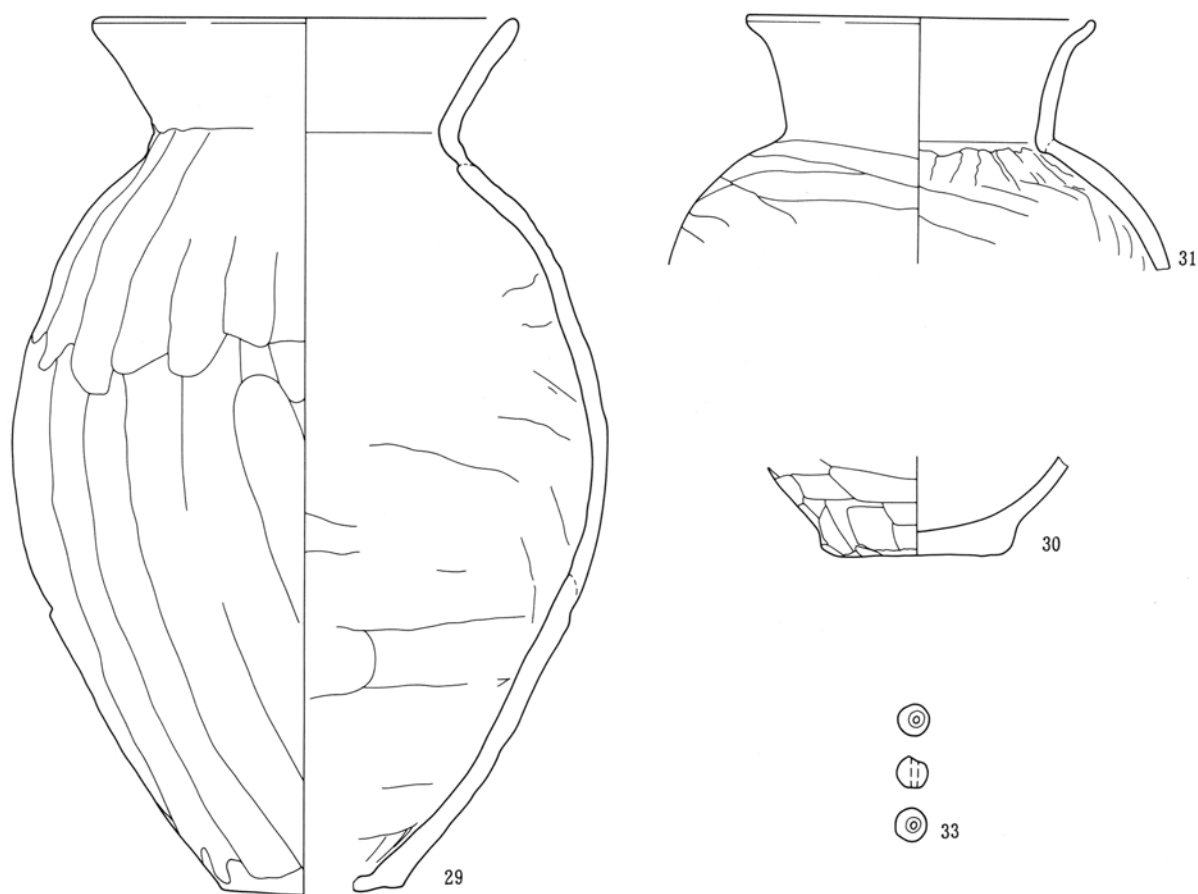
IV 五反田地区の遺構と遺物



第42図 125号住居遺物図(2)



第43图 125号住居遺物图(3)



第44図 125号住居遺物図(4)

126号住居

本住居跡は、調査区の東端中程、85区S～T-10～13グリッドに位置する。住居の東側4分の1程度は、調査区外に位置するため全貌は不明である。他遺構との重複関係は、竪穴部分では見られないが、周堤帯下に132号住居が存在する。132号住居との新旧関係は本住居のほうが新しい。残存状態は、本住居が3分の1程度埋没し、深さ1m程度の窪みの状態で畠として耕作が行われているため周堤帯の一部や埋没土は掘削を受け竪穴中央付近では一部床面まで達している。住居の形態は、竪穴部分はほぼ長方形を呈すると推定され、周堤帯外周は円形に近い形態を呈すると推定される。

規模は、長軸7.95m、短軸5.92mで各辺の長さは北辺5.93m、南辺は調査区内で3.85m、西辺7.65mを測る。床面積は、調査区内30.15㎡、周堤帯外周面積は137.8㎡である。主軸方位は、N-65°-Eを

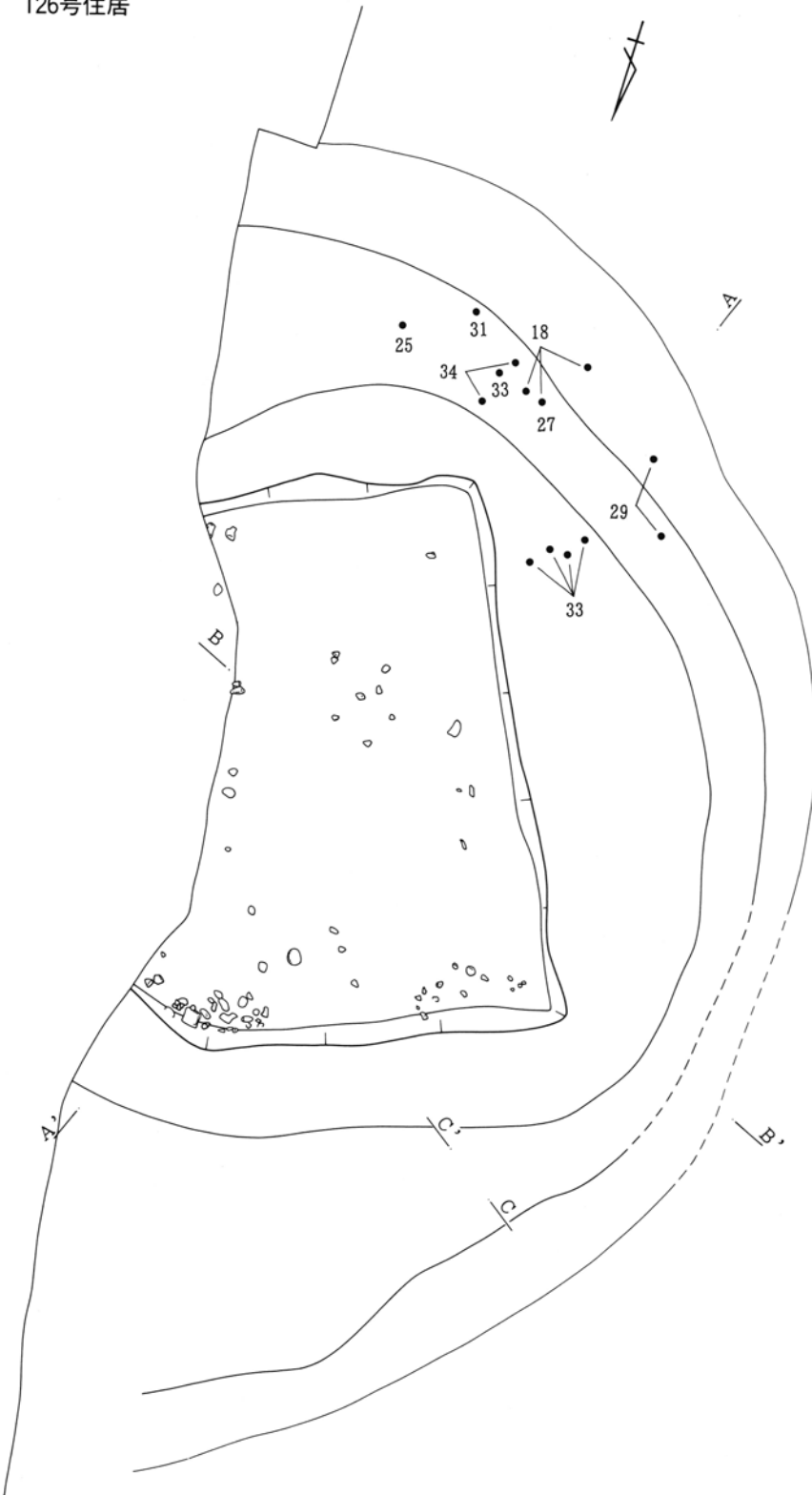
指す。壁高は、北壁81～89cm、南壁67～104cm、西壁73～76cm、平均83cmである。また、貯蔵穴・柱穴・壁溝などの内部施設は、検出されなかった。床面は、掘り方より5cm程度の厚さで灰黄褐色及び黒褐色砂質土を入れて踏み固めている。

カマドは、南壁の調査区境で焼土、灰、粘土が多量に見られることから南壁の東寄りに構築されていると想定されるが、調査区外に位置するため詳細に付いては不明である。

住居の掘り方は、床面より5cm前後掘り込まれているが、床下の施設などは検出されなかった。

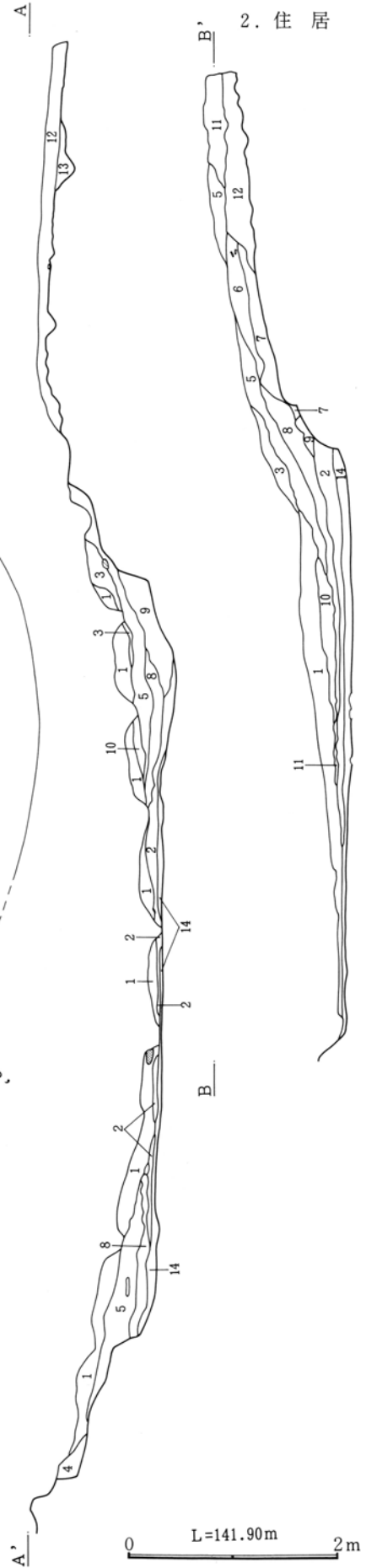
Hr-F A層下の埋没土の状態は、壁際から竪穴中央部に向けての緩いレンズ状堆積を示している。埋没土はAs-Cを含んだ灰黄褐色砂質土や褐灰色砂質土が主体である。

126号住居



0 5 m

第45图 126号住居平面・土層断面图



2. 住居

0 L=141.90m 2m

IV 五反田地区の遺構と遺物

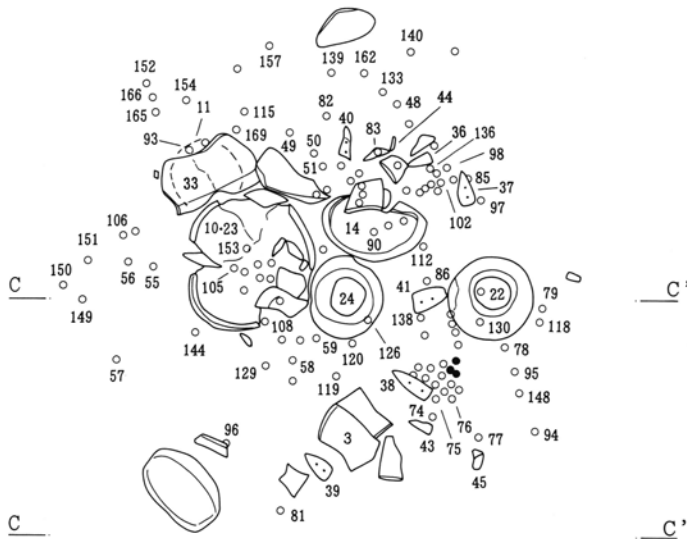


126号住居

1. 灰黄褐色土 砂質土、As-Cを少量含む
2. 黒褐色土 砂質土、As-Cを若干含む
3. にぶい黄橙色土 砂質土、炭化物とAs-Cを若干含む
4. にぶい黄橙色土 砂質土、As-Cを僅かに含む
5. 灰黄褐色土 1に類似、1よりAs-Cが多い
6. 黒褐色土 砂質土、As-Cを少量含む
7. 褐灰色土 砂質土、As-Cを少量含む
8. 黒褐色土 灰色砂を多くとAs-Cを若干含む
9. 灰黄褐色土 砂質土、As-Cを少量含む
10. 灰黄褐色土 1に類似、1~5cmの円礫を若干含む
11. にぶい黄褐色土 砂質土
12. 褐灰色土 灰色砂を多量に含む
13. にぶい黄橙色土 砂質土、As-Cを少し含む
14. 灰黄褐色土 砂質土、黒褐色砂質土ブロックを多く含む

0 2m

第46図 126号住居縦穴部分



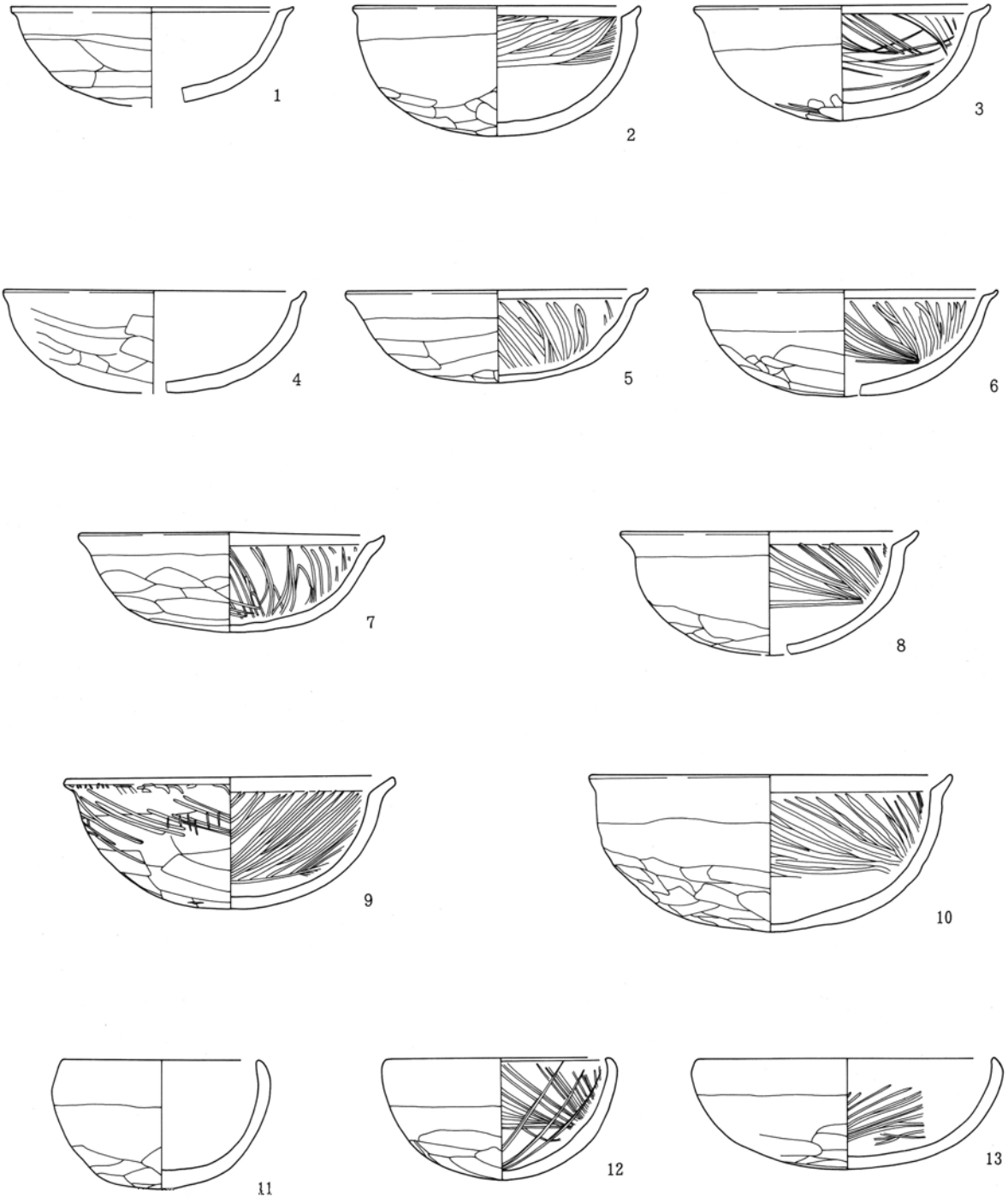
0 L=141.90m 1m

第47図 126号住居周堤帯下遺物出土図

2. 住居

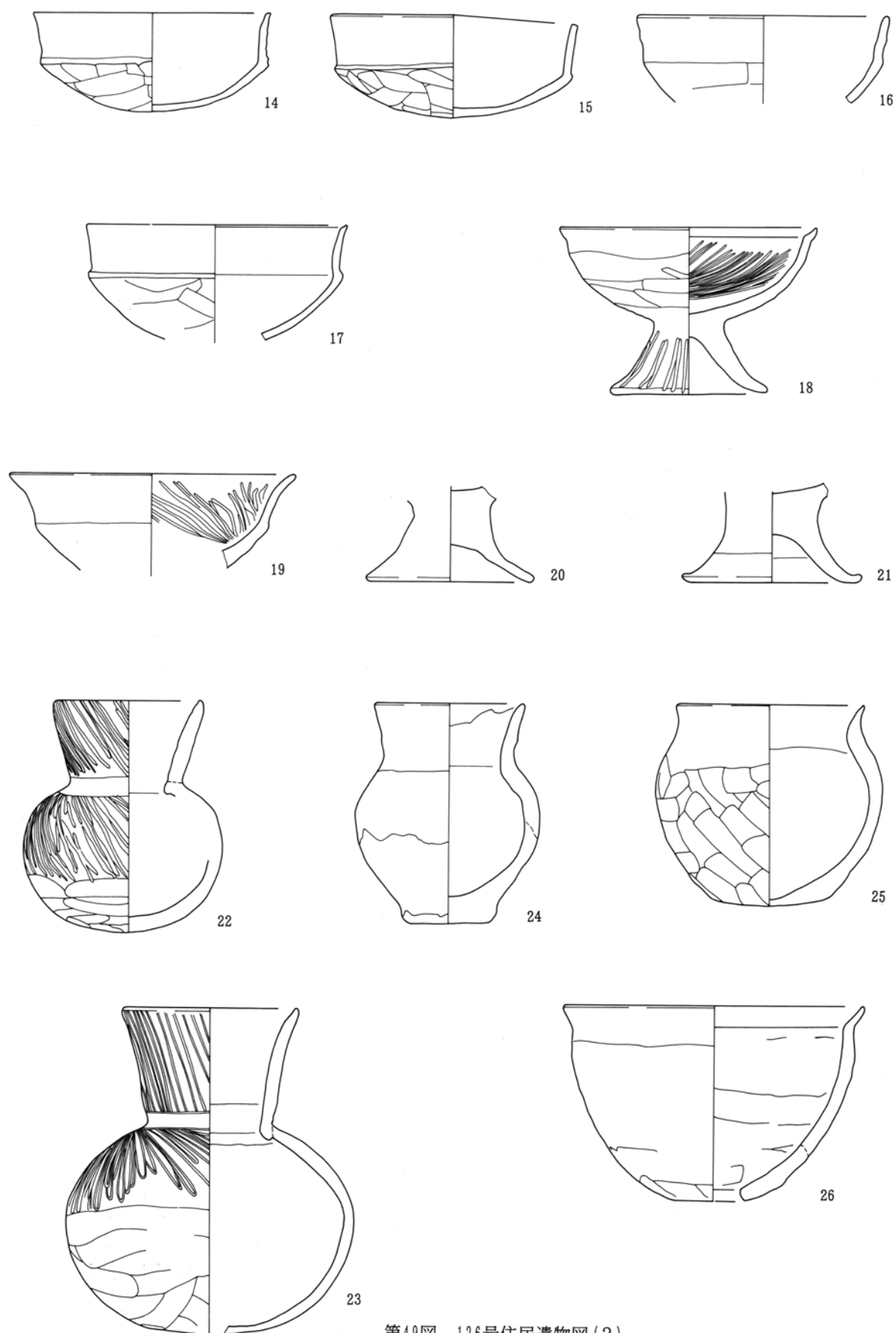
遺物は、土師器杯、高杯、柑、甑、甕、壺、砥石、石製模造品剣形・円形・白玉が出土している。その総量は、破片数で1,270点を数えるが、そのうち甕が約8割を占めている。また、石製模造品白玉が166点出土している。出土状態は、竪穴内部では27の甑がカマドわきの床面、9の杯が北壁際の床面、

6・7・12の杯、20・21の高杯、35の砥石が埋没土内の他は周堤帯からの出土が大部分を占めている。特に周堤帯北側では、3・5・10・11・14の杯、22の柑、24の小型壺と石製模造品を据えるように配置してあり、住居構築の際の祭祀の様相を呈している。

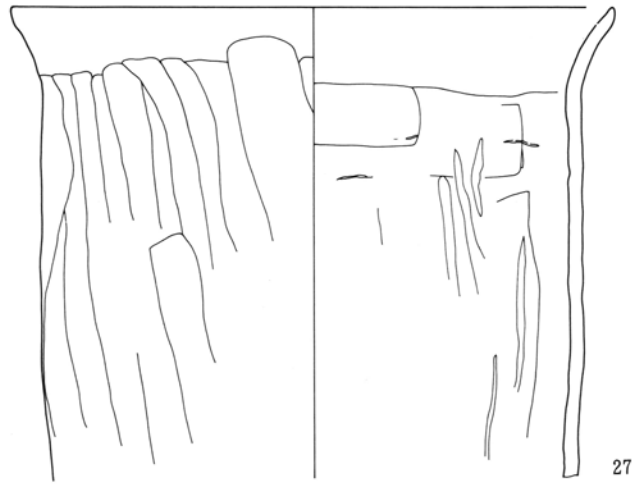


第43図 126号住居遺物図(1)

IV 五反田地区の遺構と遺物



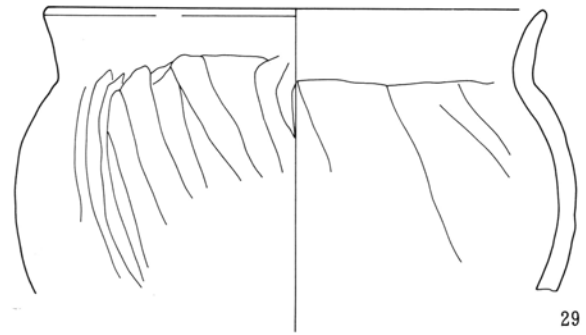
第49図 126号住居遺物図(2)



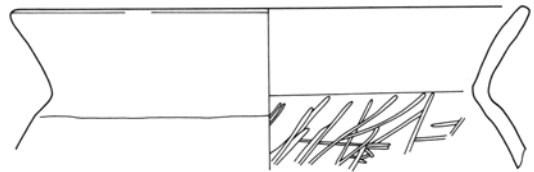
27



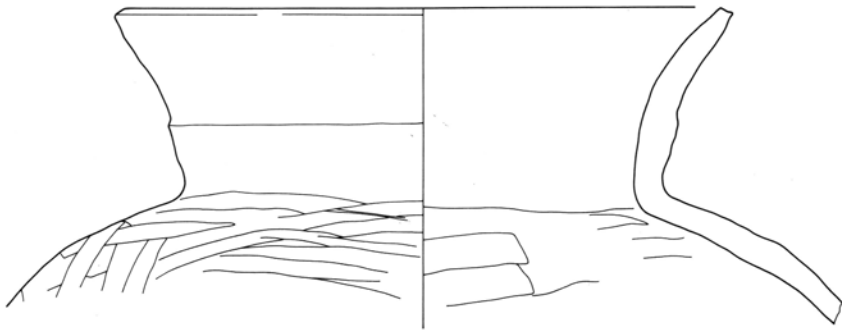
28



29



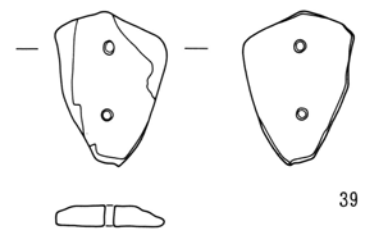
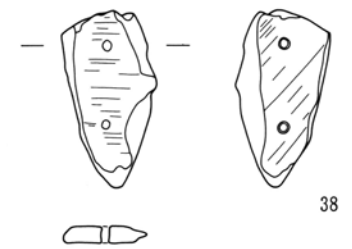
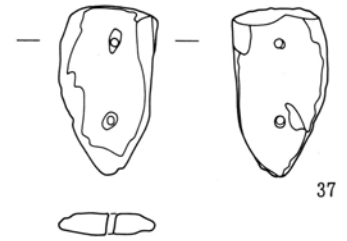
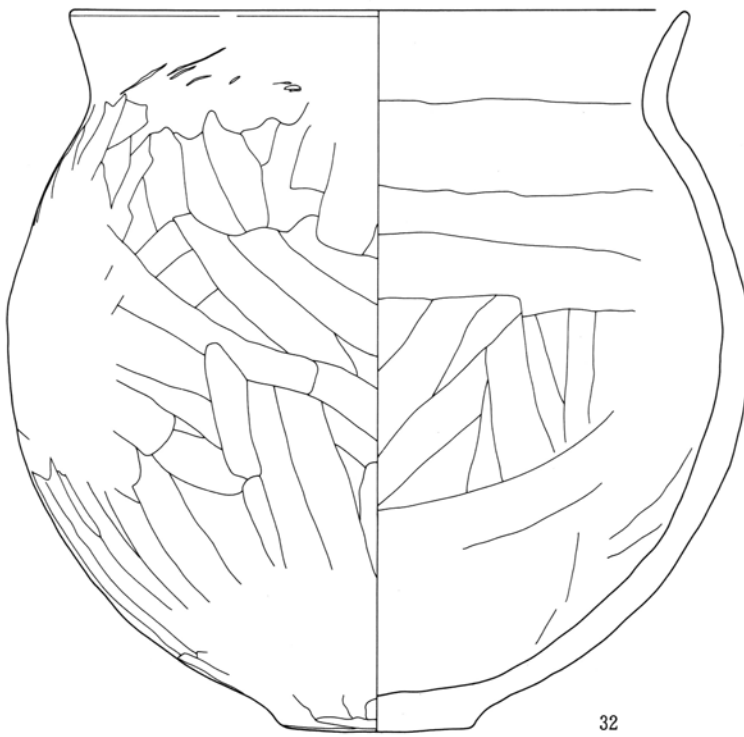
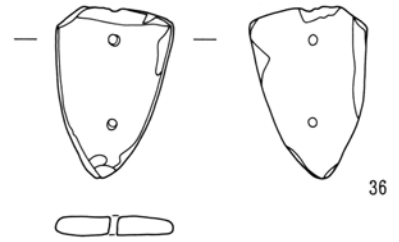
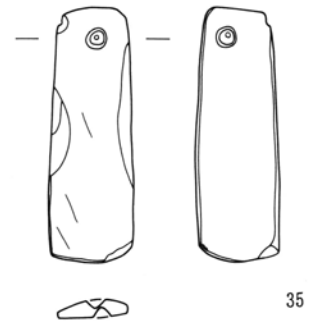
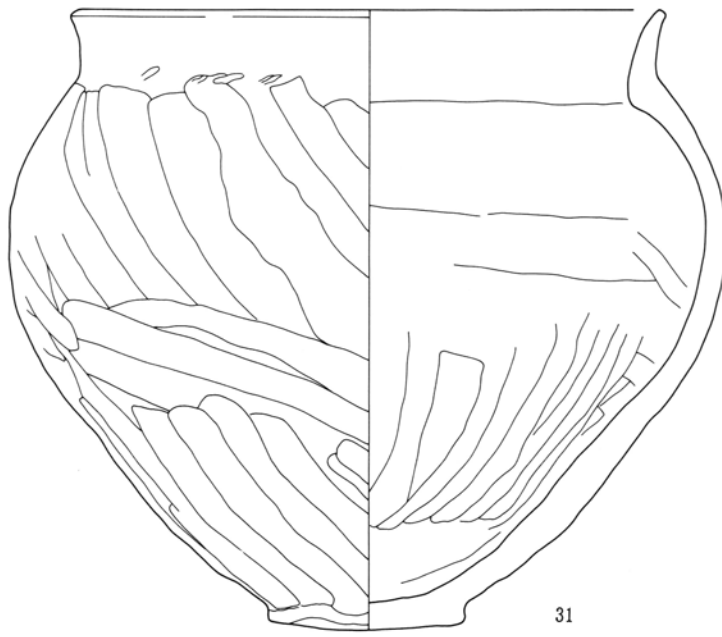
30



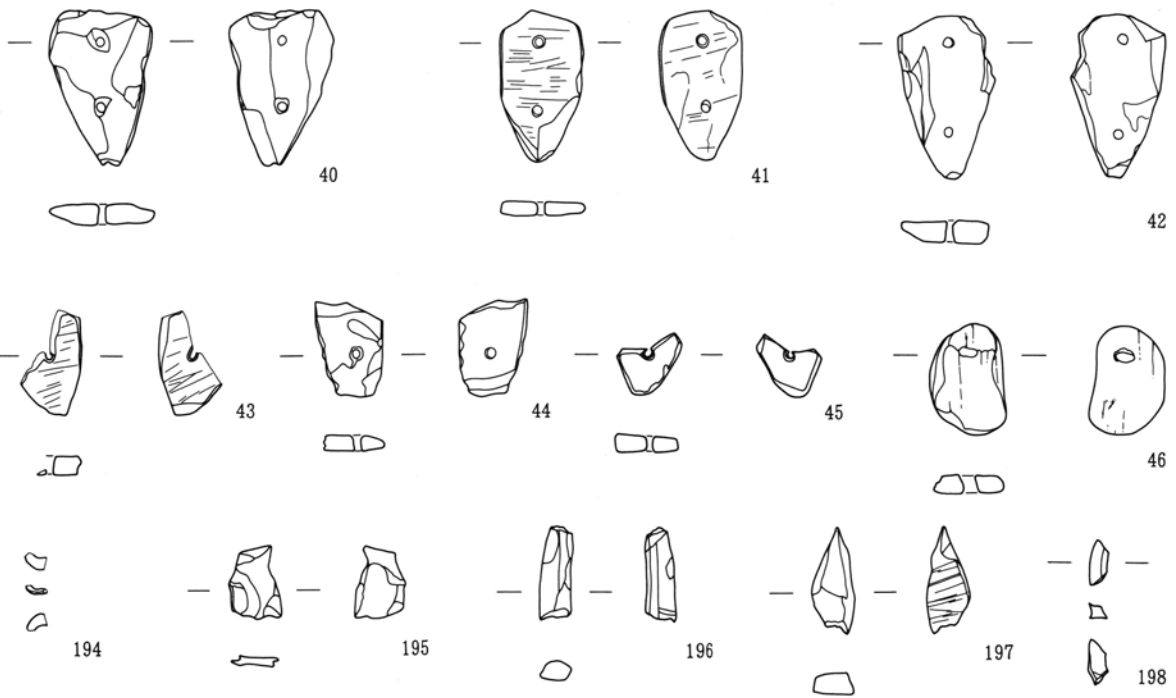
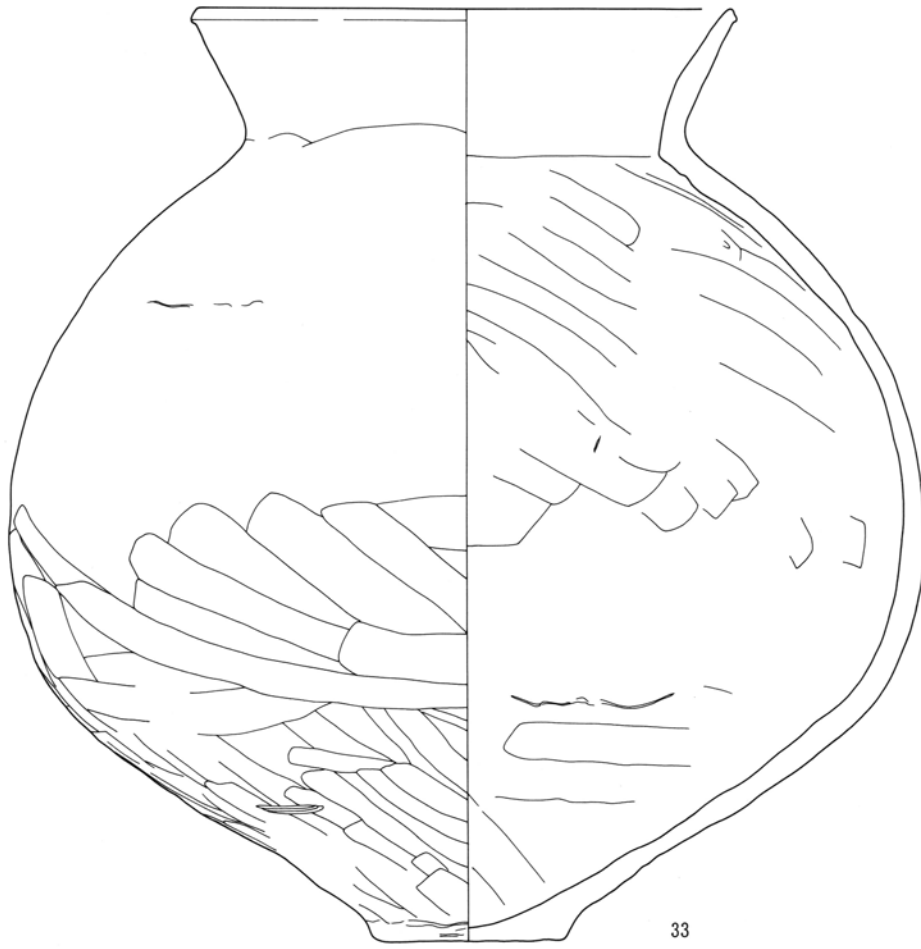
34

第50図 126号住居遺物図(3)

IV 五反田地区の遺構と遺物

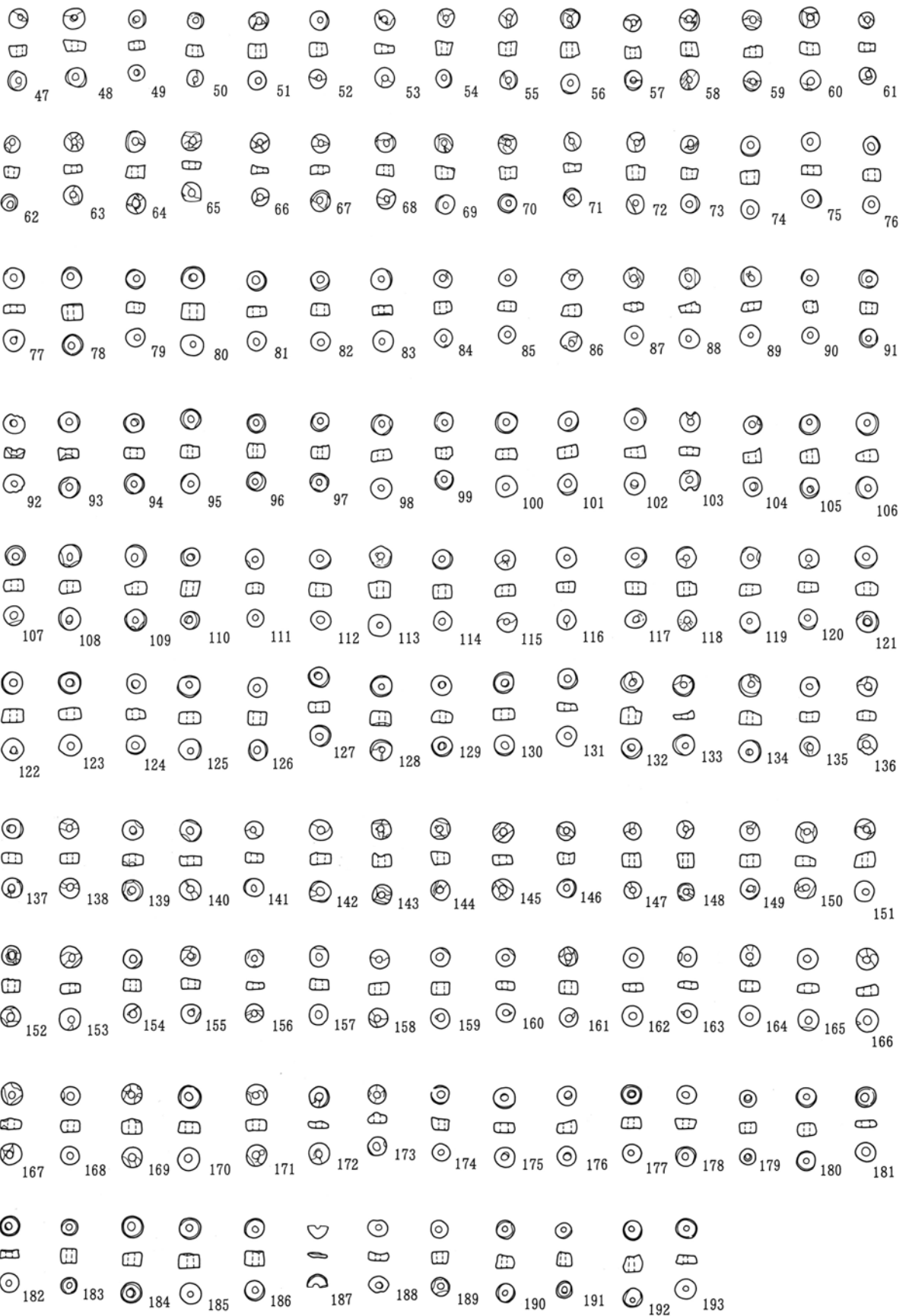


第51図 126号住居遺物図(4)

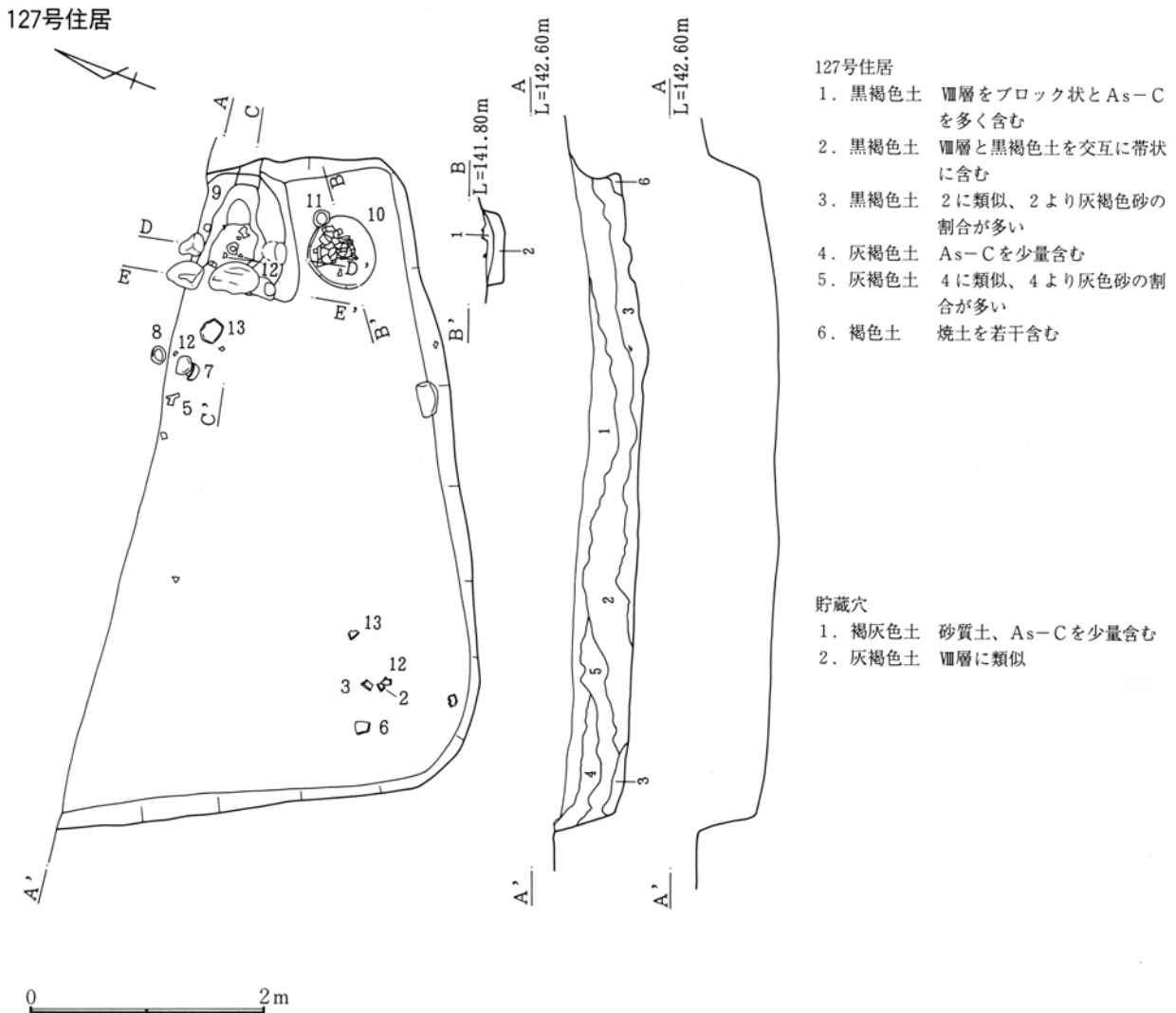


第52图 126号住居遺物图(5)

IV 五反田地区の遺構と遺物



第53図 126号住居遺物図(6)



第54図 127号住居平面・断面図

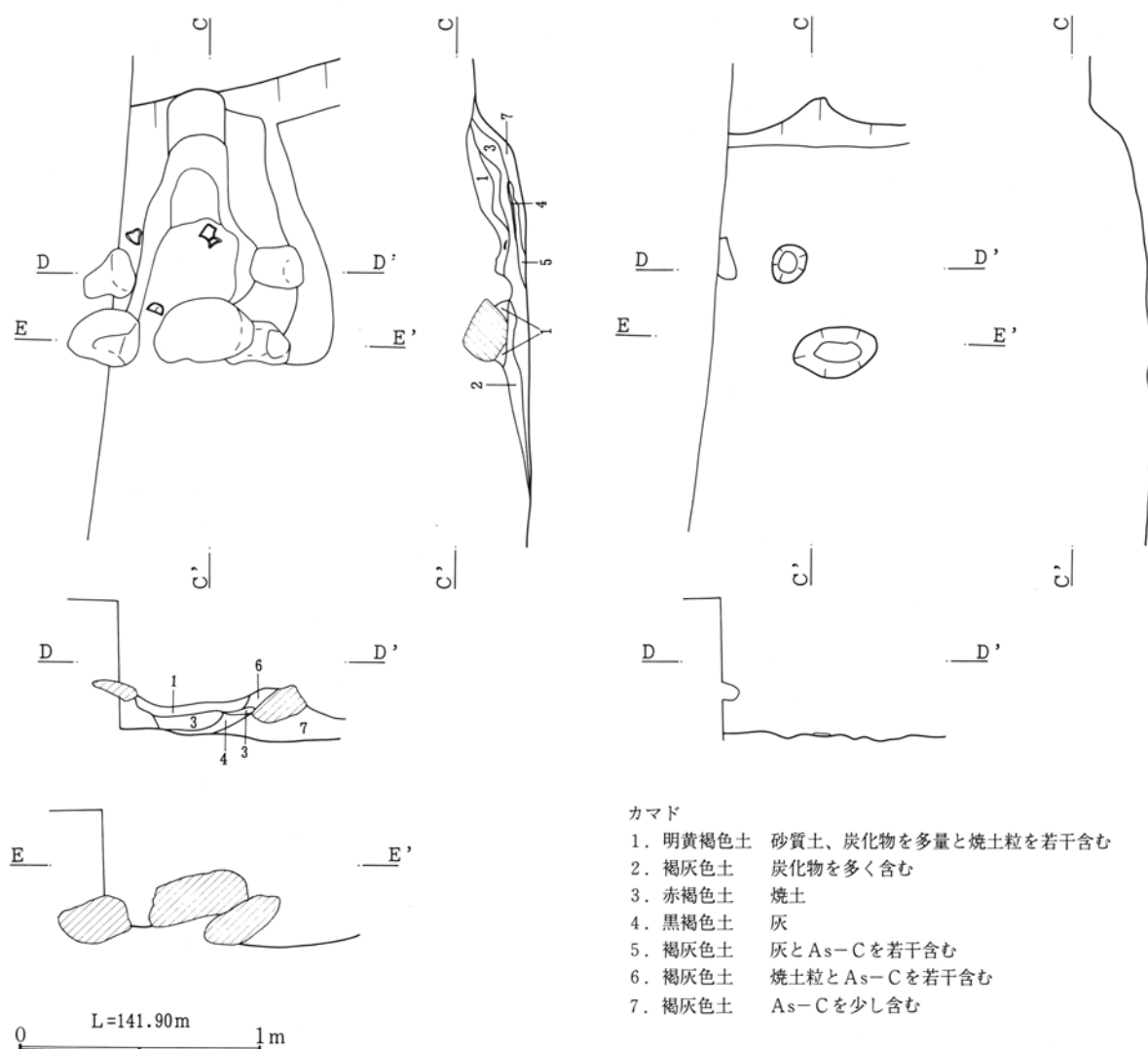
本住居跡は、調査区北端中程、86区C・D-16グリッドに位置する。住居の北半分は調査区外に存在するため全貌は不明である。他遺構との重複関係は、調査区内では確認されない。住居の形態は、方形または長方形を呈すると想定される。残存状態は、住居廃絶後畠として利用されているため周堤帯は削平されているが、竪穴部分は良好な状態である。

規模は、長軸5.28m、短軸3.72mで調査範囲内の南辺の長さは5.24mを測る。床面積は、調査範囲内で12.25㎡、全体では約20㎡ほどであると推定される。主軸方位は、N-62°-Eを指す。壁高は、東壁42~51cm、南壁53~57cm、西壁49~60cm、平均52cmである。内部施設は、東南角、カマドの南側に貯蔵

穴を検出した。形態はほぼ円形で規模は径60×56cm、深度20cmを測る。また、貯蔵穴内部からは、10の土師器甑が出土している。

カマドは、東壁の中央よりやや南よりと想定される位置に構築されている。残存状態は、天井部は崩落しているが袖などは良好な状態である。規模は、焚口~煙道間が1.10m、両袖間の幅1.08m、焚口幅0.38mを測る。焚口の天井部には、42×27×17cmの円礫を袖の補強に配置した円礫(左袖側29×24×18cm、右袖側35×17×14cm)に渡して補強に使用している。また、袖には前列の円礫の他にその後部に手前の円礫よりやや小規模の円礫を補強に使用している。煙道は、竪穴部分よりごく僅かに外へ延びる

IV 五反田地区の遺構と遺物



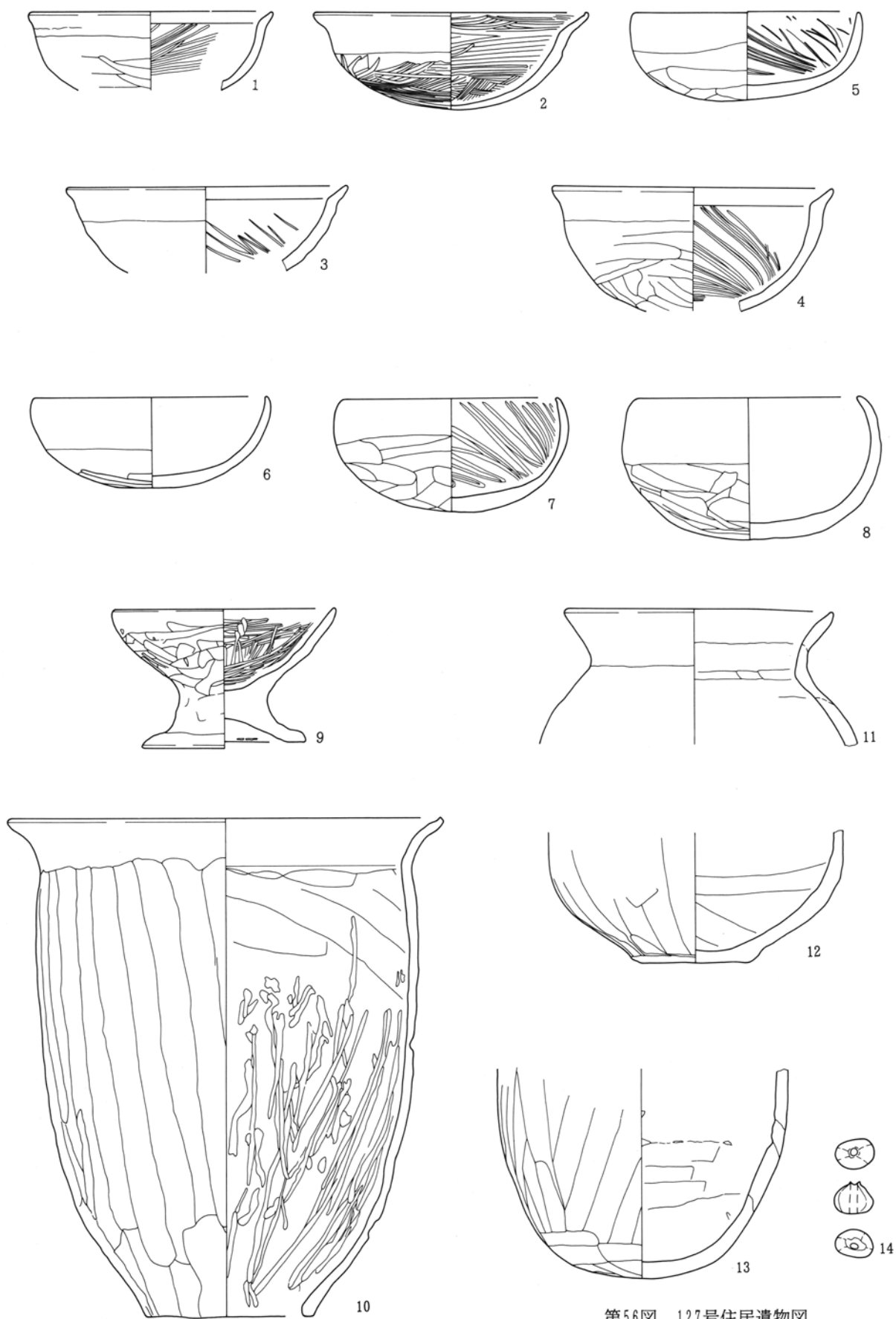
第55図 127号住居カマド図

が上部の構造は残存していなかった。

Hr-F A層下畠耕作土下の埋没土の状態は、Hr-F A層下畠面で若干の窪みがみられる程度まで埋没している。竪穴内部の堆積は、東側よりやや多い土砂が流入した様相が土層断面より観察できる。流入した土は、黒褐色の砂質土である。

遺物は、土師器杯、高杯、甗、甕、壺と土製品玉が出土している。その破片総数は、230個でそのうち8割強が土師器甕・壺・甗である。また、本住居からの遺物は、他住居の出土量に比べて少なく、器種のなかでも、土師器埴の破片は出土していない。出土状態は、9の杯、12甕がカマド、10の甗が貯蔵穴内部、11の甕が貯蔵穴際、5・7・8の杯、13の

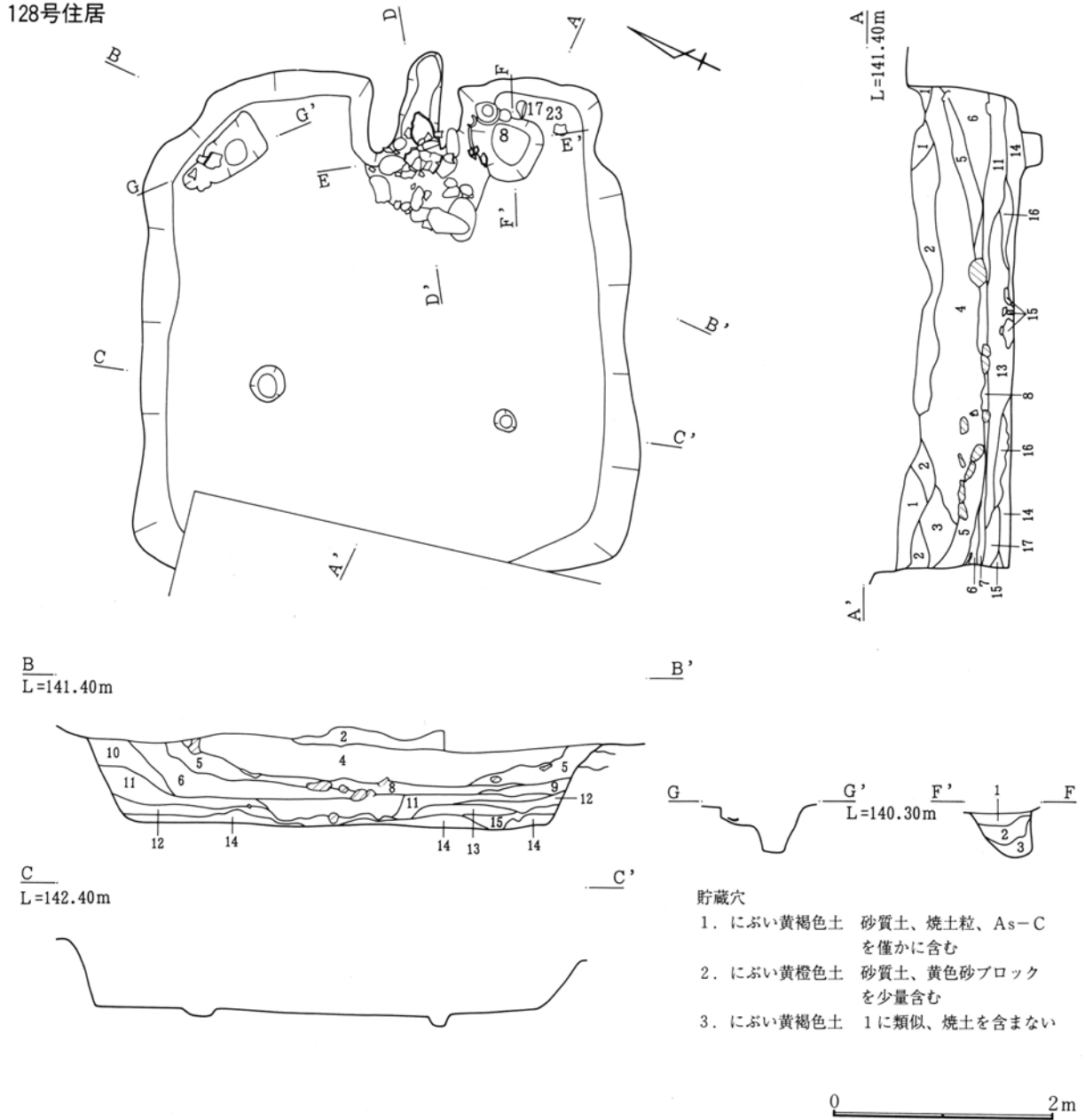
壺がカマド前部の床面、2・3・6の杯が南西角よりの床面から出土している。なお、2の杯は、125号住居から出土した破片と接合した。



第56图 127号住居遺物図

IV 五反田地区の遺構と遺物

128号住居



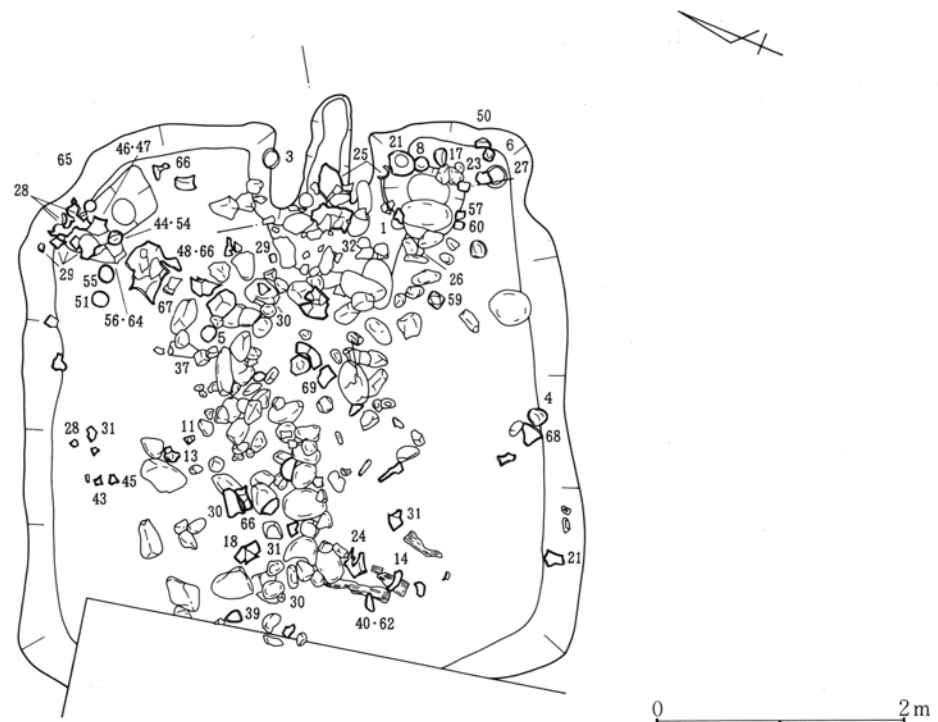
貯蔵穴

1. にぶい黄褐色土 砂質土、焼土粒、As-Cを僅かに含む
2. にぶい黄橙色土 砂質土、黄色砂ブロックを少量含む
3. にぶい黄褐色土 1に類似、焼土を含まない

128号住居

1. 褐灰色土 砂質土、炭化物とAs-Cを若干含む
2. 灰褐色土 砂質土、炭化物とAs-Cを僅かに含む
3. 褐灰色土 砂質土、As-Cを僅かに含む
4. にぶい黄褐色土 黒色土・黄褐色砂を帯状と焼土・炭化物を若干含む
5. 褐灰色土 砂質土、As-Cを少量含む
6. 褐灰色土 5に類似、5よりAs-Cが少ない
7. 黒褐色土 砂質土、As-Cをほとんど含まない
8. 黄灰色土 砂質土、As-Cをほとんど含まない
9. 灰黄褐色土 砂質土、As-Cを若干含む
10. にぶい黄橙色土 砂質土、As-Cを僅かに含む
11. 褐灰色土 砂質土、As-Cを僅かに含む
12. 褐灰色土 11に類似、炭化物を含む
13. 灰黄色土 砂質土、炭化物とAs-Cを若干含む
14. 褐灰色土 砂質土、炭化物とAs-Cを少し含む
15. 褐灰色土 砂質土、黄色砂ブロックと焼土・炭化物を僅かに含む
16. 褐灰色土 砂質土、黄色砂ブロックを若干含む
17. 黒褐色土 砂質土、As-Cを僅かに含む

第57図 128号住居平面・断面図



第58図 128号住居遺物出土図

本住居跡は、調査区の東南部分、85区T-6、86区A-6グリッドに位置する。住居の西辺部分は、調査区外に位置するため全貌は不明である。竪穴部分での他遺構との重複関係は、見られないが、北西部分は125号住居の周堤帯下に位置する。125号住居との新旧関係は、本住居のほうが前出である。住居の形態は、ほぼ方形を呈する。残存状態は、住居廃絶後畠として利用されているため周堤帯は削平されているが、竪穴部分は良好な状態である。

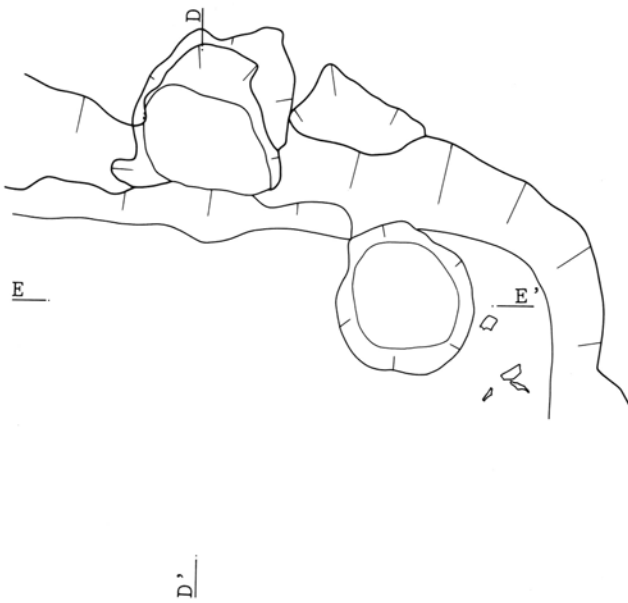
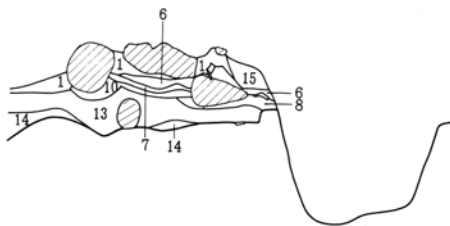
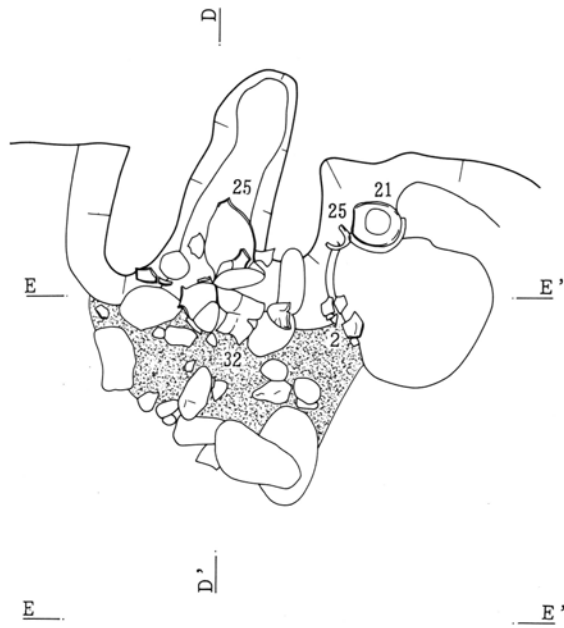
規模は、長軸4.40m、短軸4.32mで各辺の長さは北辺4.12m、東辺4.08m、南辺4.36m、西辺4.52mを測る。床面積は、15.22㎡である。主軸方位は、N-65°-Eを指す。壁高は、北壁58~63cm、東壁49~63cm、南壁39~44cm、平均53cmである。内部施設は、東南角(南貯蔵穴)と北東角(北貯蔵穴)で貯蔵穴と2本の柱穴を検出した。それぞれの形態・規模は、南貯蔵穴が三角形に近い形態で長軸68cm、短軸56cm、深度42cmである。北貯蔵穴は、細長い三角形の形態で長軸80cm、短軸36cm、深度45cmである。

柱穴は、ともに円形を呈し、規模はP1が径34×30cm、深度7cm、P2が径19×18cm、深度10cmである。

カマドは、東壁のほぼ中央に構築されている。残存状態は、天井部が崩落し、焚口上部の補強に使用していた円礫がカマド前部の床面に転落しているが、袖の残存状態は良好である。規模は、焚口~煙道間が1.11m、両袖間の幅1.09m、焚口幅0.30mを測る。焚口は、やや細長い円礫を両側に設置し、その上に38×23×20cmほどの円礫を据えている。燃焼部には、25と32の土師器甕を縦列に据えられた状態で出土している。煙道は、竪穴部分より33cm外へ延びるが上部の構造は残存していなかった。

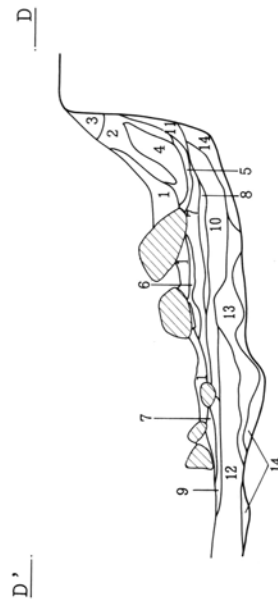
Hr-FA層下の埋没土の状態は、Hr-FA層下畠面で若干の窪みがみられる程度まで埋没している。竪穴内部の堆積は、床面から中程まではレンズ状の自然堆積が観察されるが、その上部では、北西角方向から焼土ブロック、炭化材、黄褐色粘土ブロックとともに多量の土器や礫が投棄されている。

IV 五反田地区の遺構と遺物



0 L=141.00m 1m

第59図 128号住居カマド図

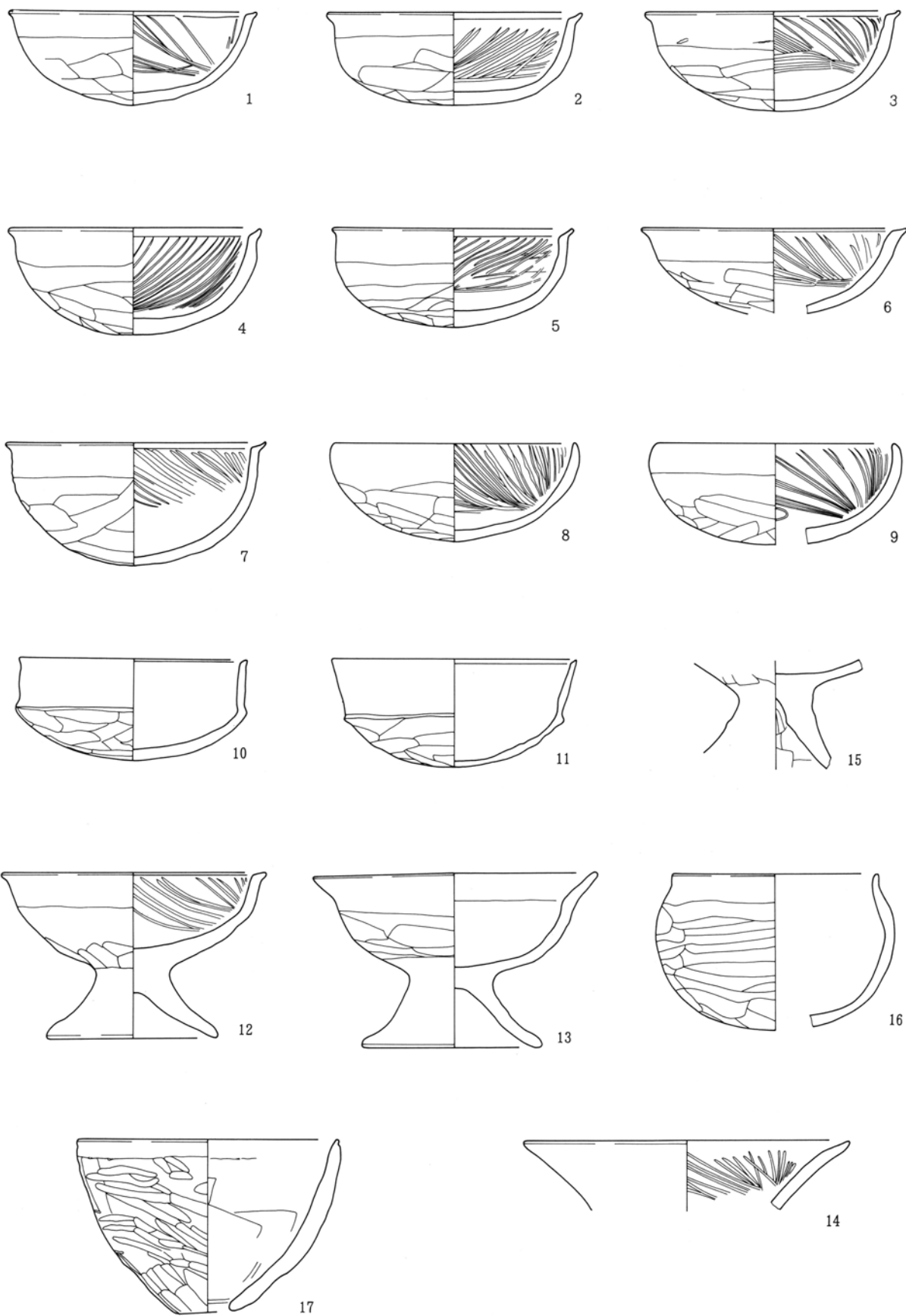


カマド

1. 暗褐色土 焼土ブロック、黄褐色粘土ブロックを多量に含む
2. 赤褐色土 煙道部の焼土化
3. 黒褐色土 黄褐色粘土粒、焼土粒を若干と灰褐色砂少量含む
4. にぶい黄褐色土 黄褐色粘土ブロック、焼土ブロック、炭化物を少し含む
5. 黒色土 灰
6. 赤褐色土 天井部の焼土化
7. 褐灰色土 灰
8. にぶい黄褐色土 灰を多量に含む
9. 焼土と灰の混土
10. 褐色土 焼土を多く含む
11. 黒褐色土 炭化物を多量に含む
12. 黄褐色土 黄褐色粘土ブロックを多量に含む
13. 黄褐色土 黄褐色粘土ブロック、焼土ブロックを多く含む
14. 黄色土 砂質土、焼土を僅かに含む
15. 黄褐色粘土

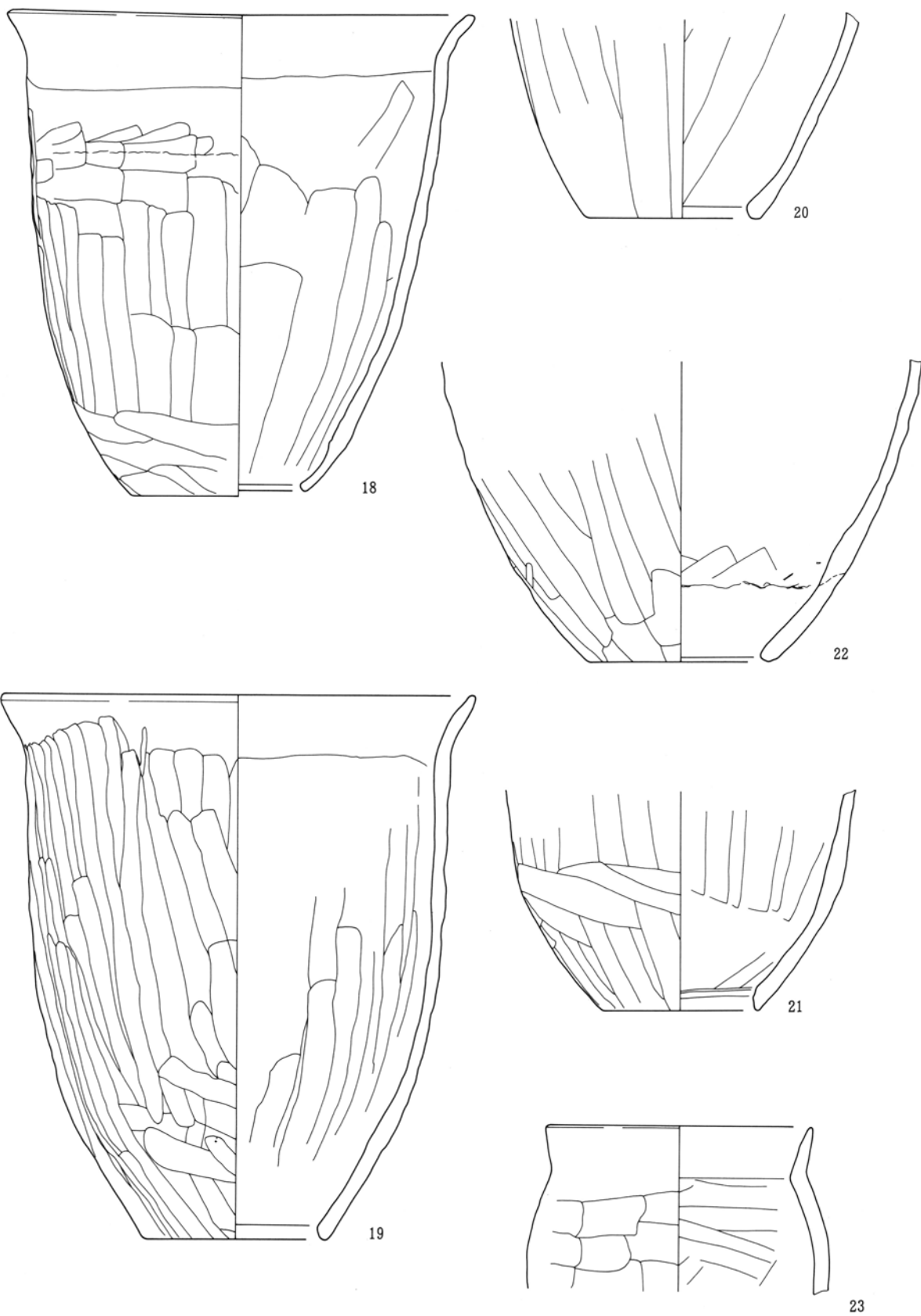
遺物は、土師器杯、椀、高杯、柑、甗、甕、壺と石製模造品白玉が出土している。出土した土器総数は、1,060点であるが、そのうち8割強は土師器甕、壺などである。出土状態は、埋没状況で記述したように多量の土器の投棄を確認した。本住居の中で実測可能な土器は、69点であるが、遺物番号1から34まではカマド内、貯蔵穴内、床面から出土したもので本住居に伴う遺物である。35から69は、住居廃絶後に投棄された遺物である。本住居に伴う遺物は、カマドと南貯蔵穴から多く出土しているが、北貯蔵穴からは9・19の2点と少ない。投棄された遺物のうち64・66は129号住居出土の土器片、58は125号住居出土の土器片と接合した。

2. 住居

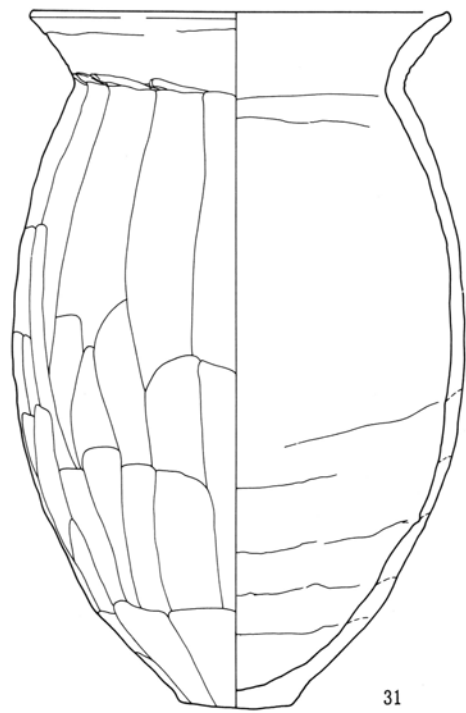
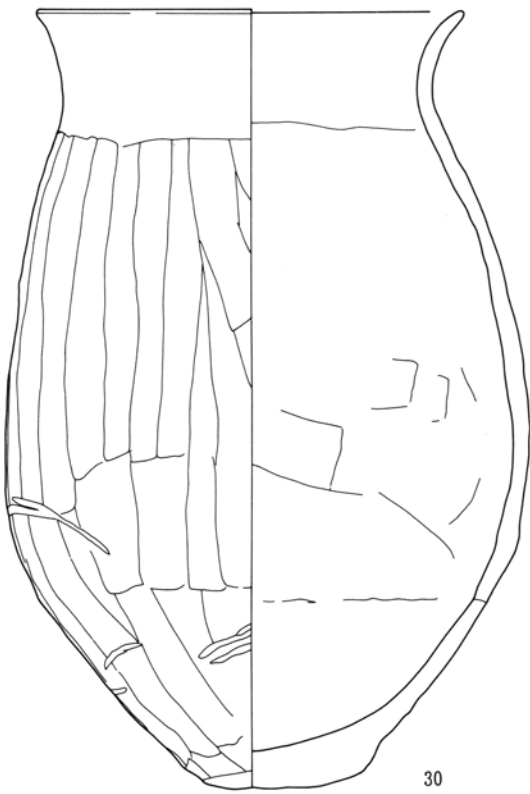
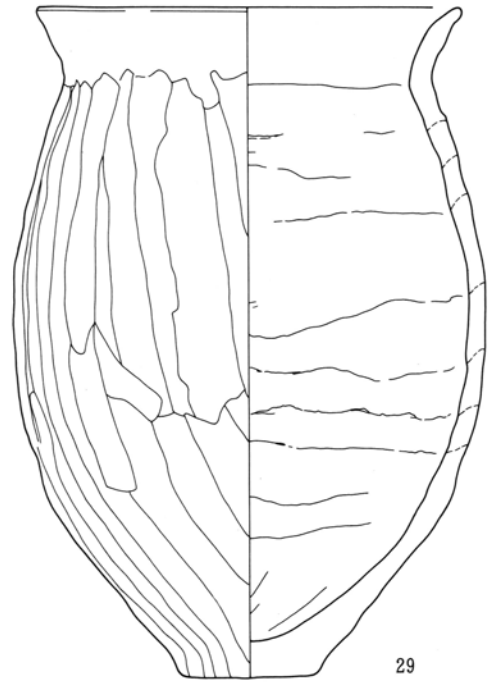
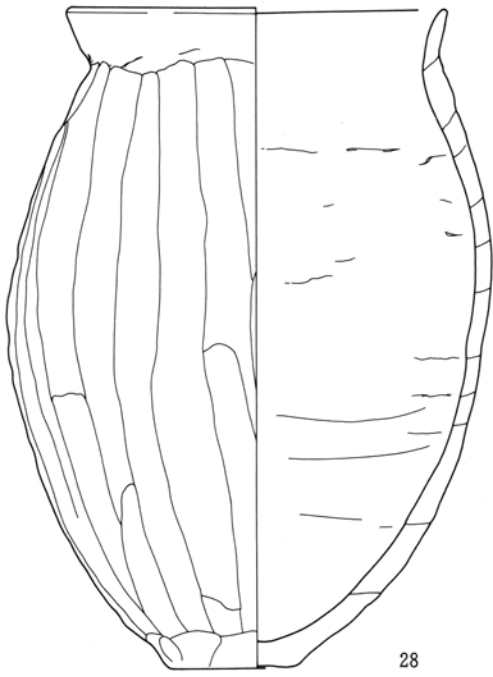


第60图 128号住居遺物図(1)

IV 五反田地区の遺構と遺物

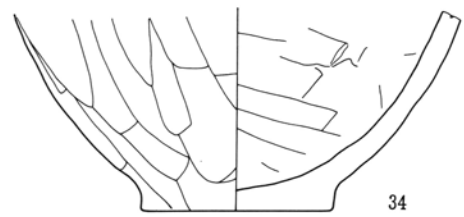
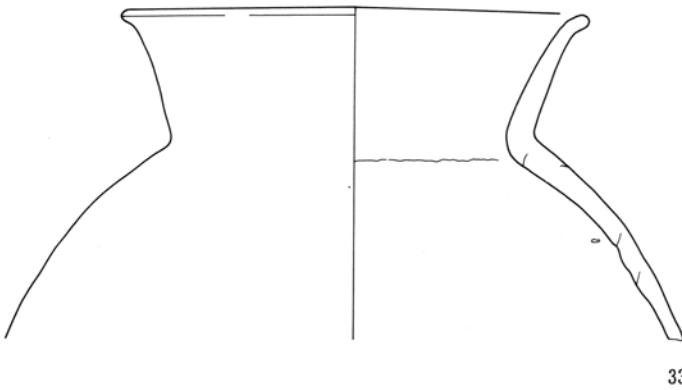
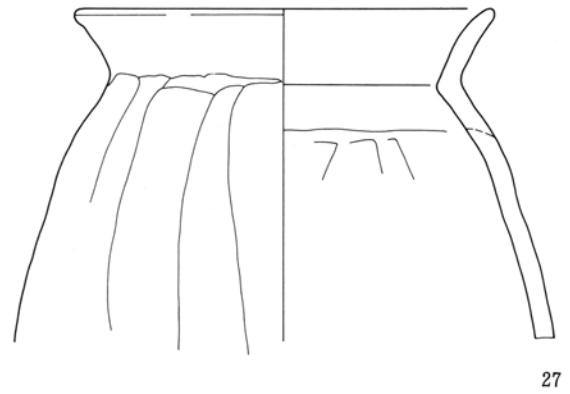
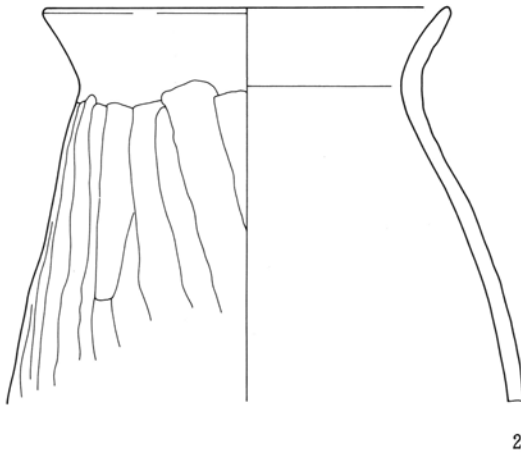
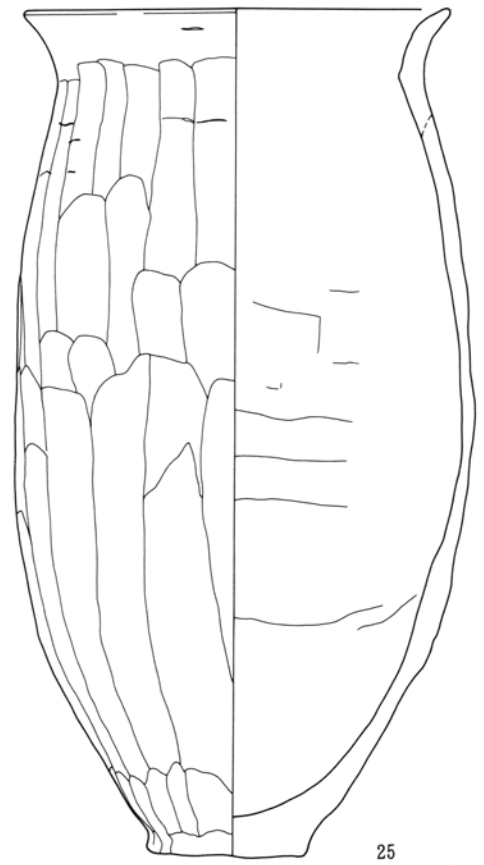
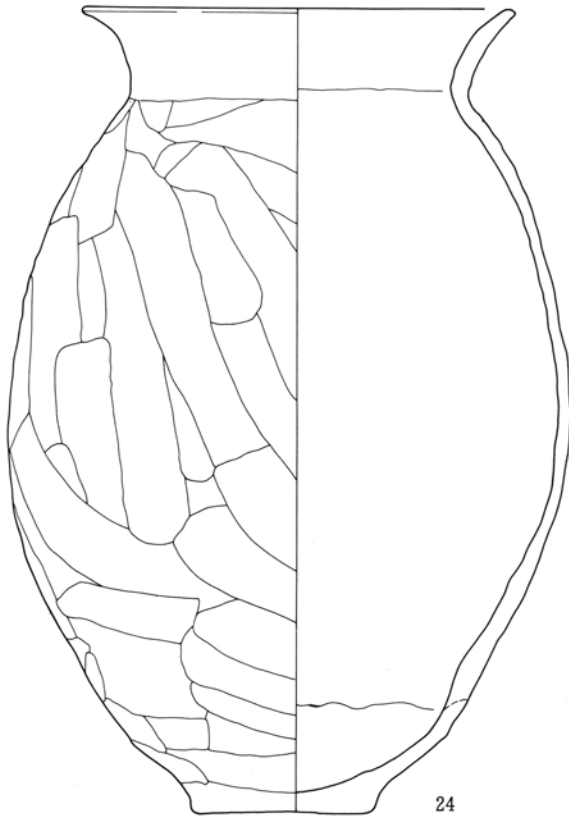


第61図 128号住居遺物図(2)

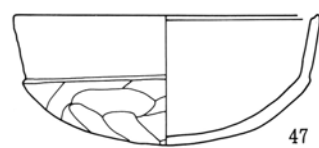
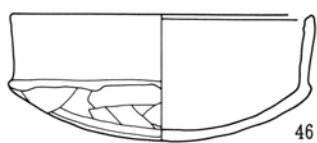
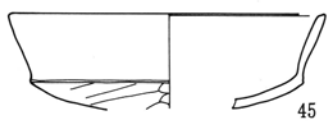
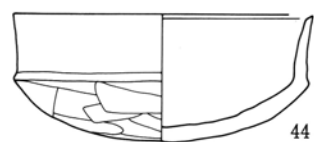
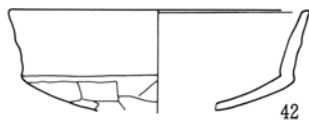
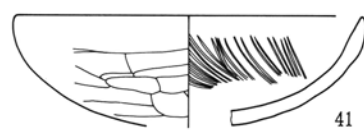
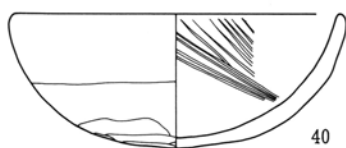
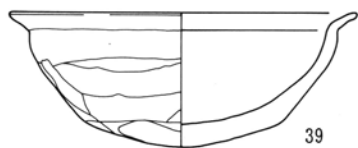
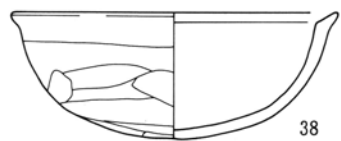
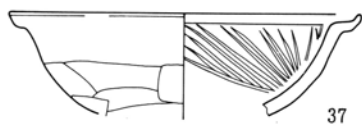
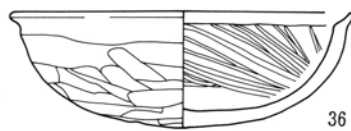
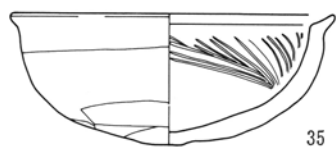
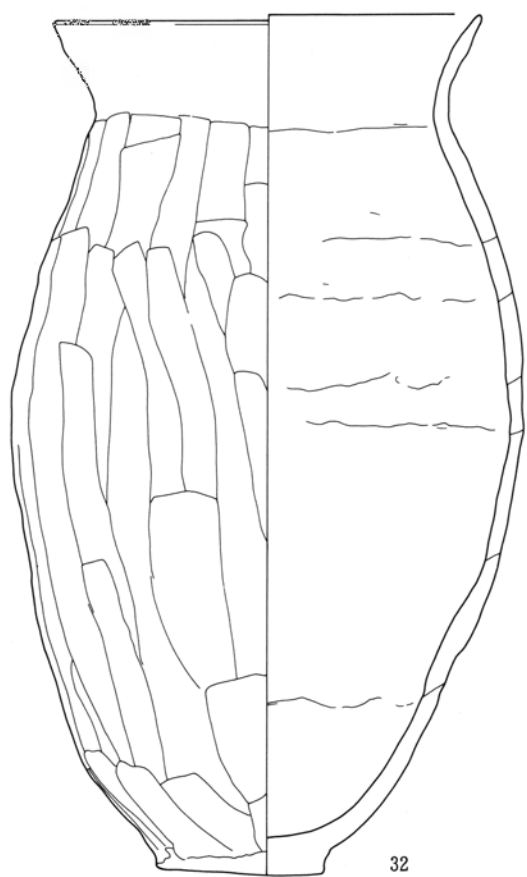


第62図 128号住居遺物図(3)

IV 五反田地区の遺構と遺物

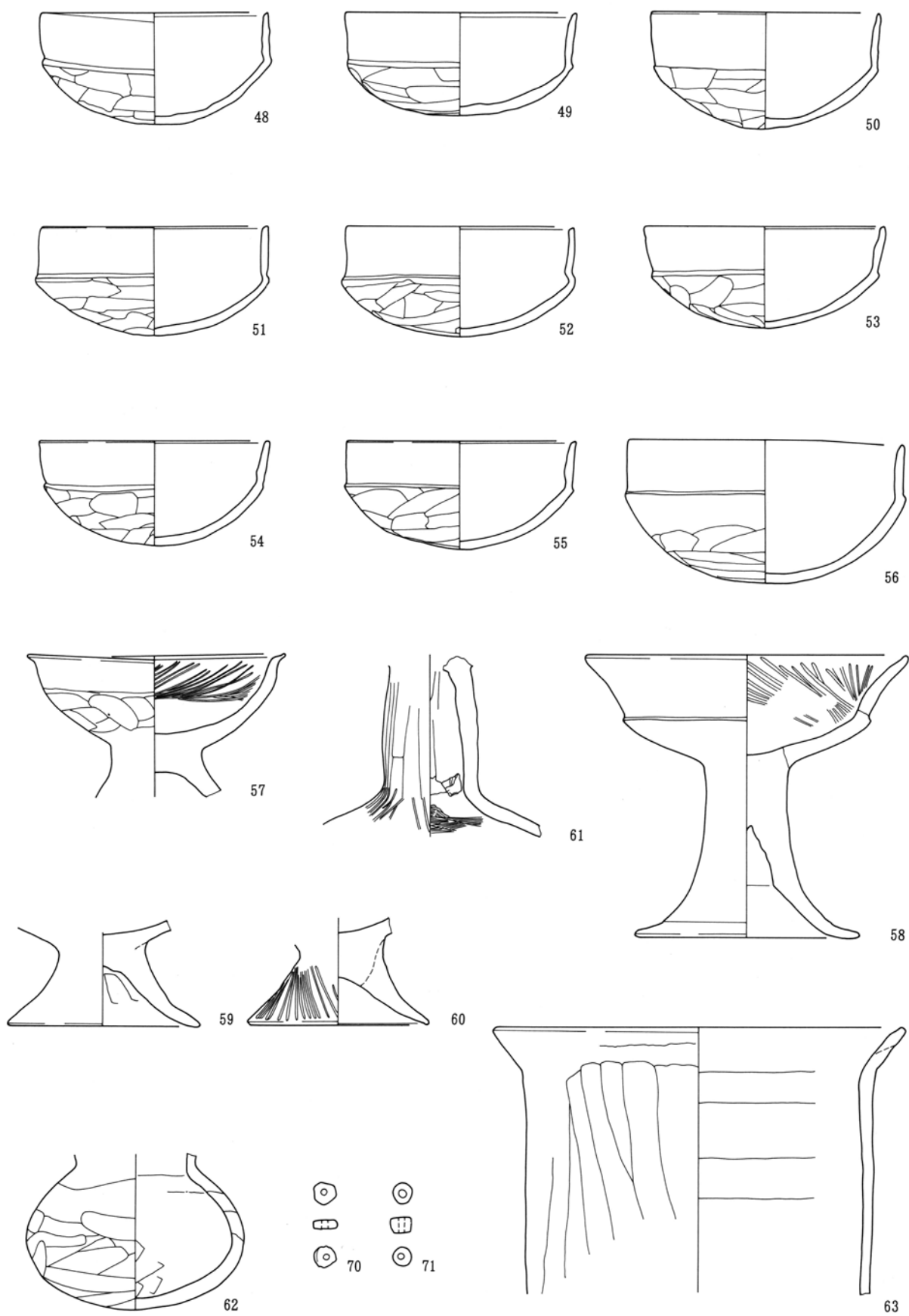


第63図 128号住居遺物図(4)

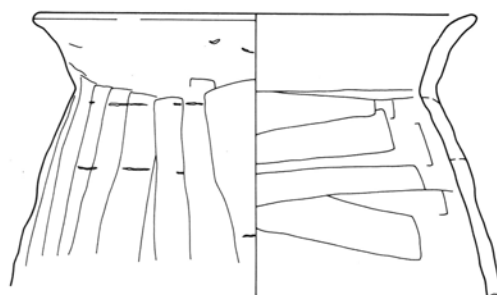
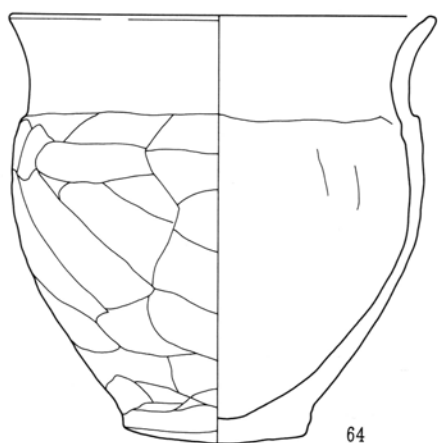


第64图 128号住居遺物図(5)

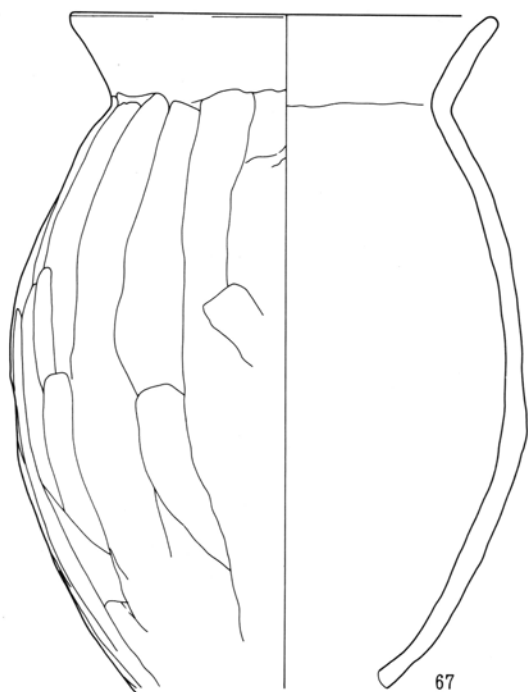
IV 五反田地区の遺構と遺物



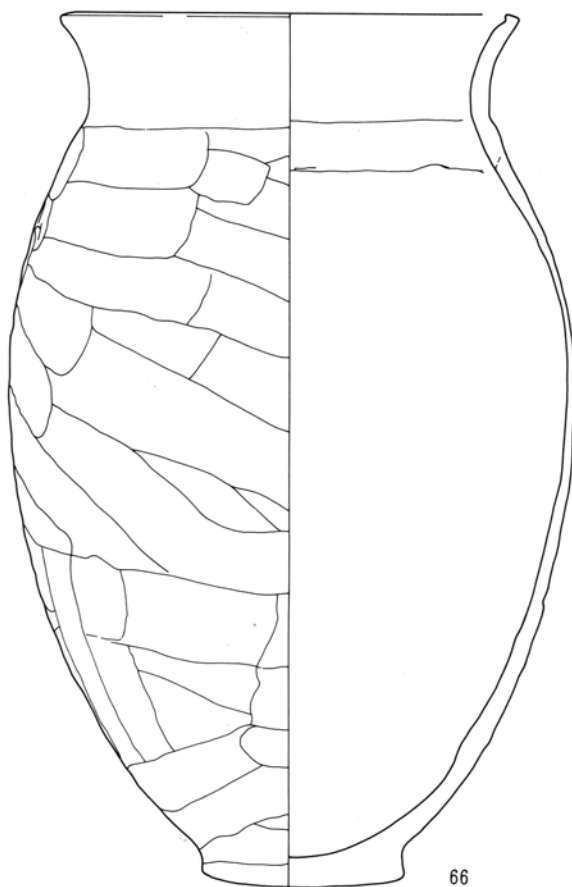
第65図 128号住居遺物図(6)



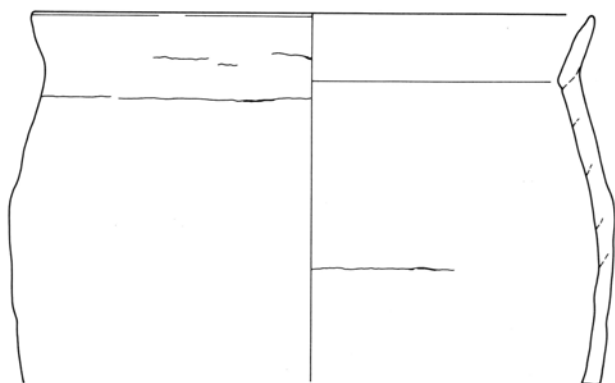
65



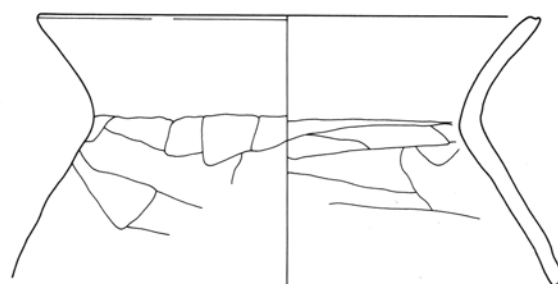
67



66



69



68

第66图 128号住居遺物図(7)

129号住居

本住居跡は、調査区の東南部、85区S～T-7～8グリッドに位置する。住居の東・南側にかけての3分の2程度は、調査区外に位置するため全貌については不明である。他遺構との重複関係は、確認されなかったが、4号掘立柱建物とは北西角で近接して位置する。住居の形態は、東南側が未調査のため不明であるが方形または長方形を呈すると推定される。残存状態は、住居廃絶後畝として利用されているため周堤帯は削平されているが、竪穴部分は良好な状態である。

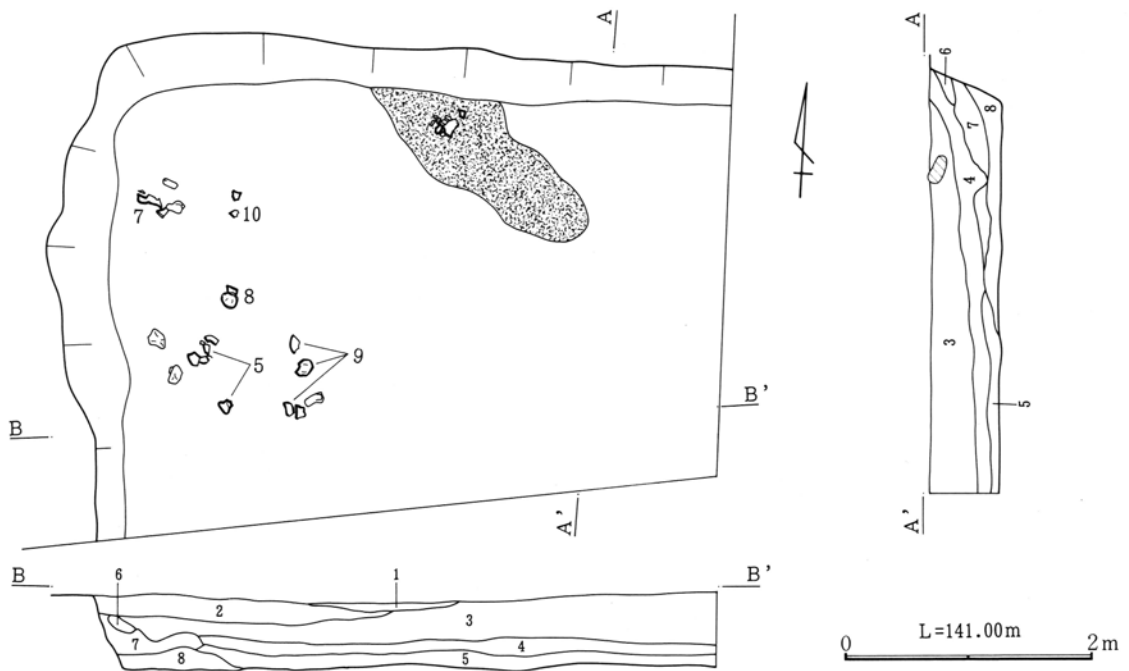
規模は、長軸約6.40m、短軸5.40+αmで各辺の長さは北辺、東辺、南辺は不明、西辺5.38mを測る。床面積は、調査区内で15.77㎡で全体では25㎡前後と推定される。主軸方位は、N-89°-Eを指す。壁高は、北壁44～63cm、西壁54～71cm、平均58cmである。内部施設は、確認されなかった。床面は、地山をそのまま踏み固めて使用している。また、北辺

中よりに灰の散布が確認された。

本住居では、調査区内でカマドや炉は確認されなかったが、本住居では出土土器の様相からまだカマドが構築される時期より古いと考えられ炉を使用したと想定される。

Hr-F A層下の埋没土の状態は、Hr-F A層下畝面でごく僅かな窪み程度まで埋没している。竪穴部分の堆積は、各辺からの土砂の流入が確認される自然堆積で堆積土は下部が灰黄色砂質土、上部が黒褐色土である。

遺物は、土師器杯、高杯、罌、甕、壺、磨製石斧などが出土しているが、炉の周辺が未調査のため出土遺物は少ない。その破片総数は、504点でそのうち8割強が甕・壺の破片であるが胴部小片が多く実測可能な破片はごく僅かであった。出土状態は、5の杯、8・9の罌、10の鉢が床面から出土している。

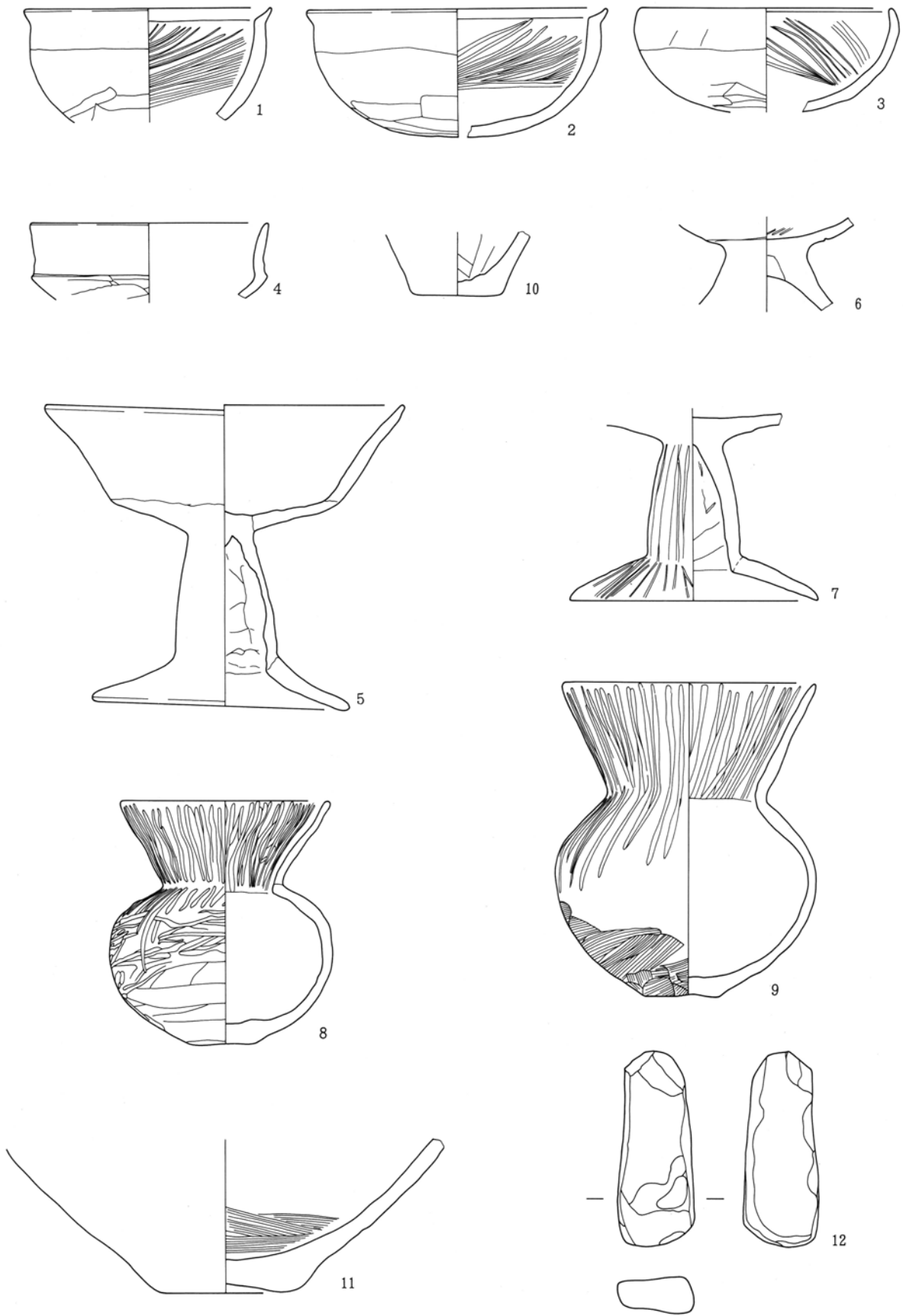


129号住居

- | | |
|-------------------------------|----------------------------|
| 1. にぶい黄色土 砂質土、As-Cを僅かに含む | 5. 灰黄色土 砂質土、灰色砂ブロックを少量含む |
| 2. 黒褐色土 砂質土、黄色砂ブロックを多量に含む | 6. 褐灰色土 砂質土、灰色砂を多く含む |
| 3. 黒褐色土 砂質土、黄色砂ブロックとAs-Cを若干含む | 7. 灰黄褐色土 砂質土、灰色砂ブロックを多量に含む |
| 4. にぶい黄橙色土 砂質土、As-Cを僅かに含む | 8. 灰黄色土 砂質土、灰色砂を多量に含む |

第67図 129号住居平面・断面図

2. 住居



第68图 129号住居遺物図

IV 五反田地区の遺構と遺物

130号住居

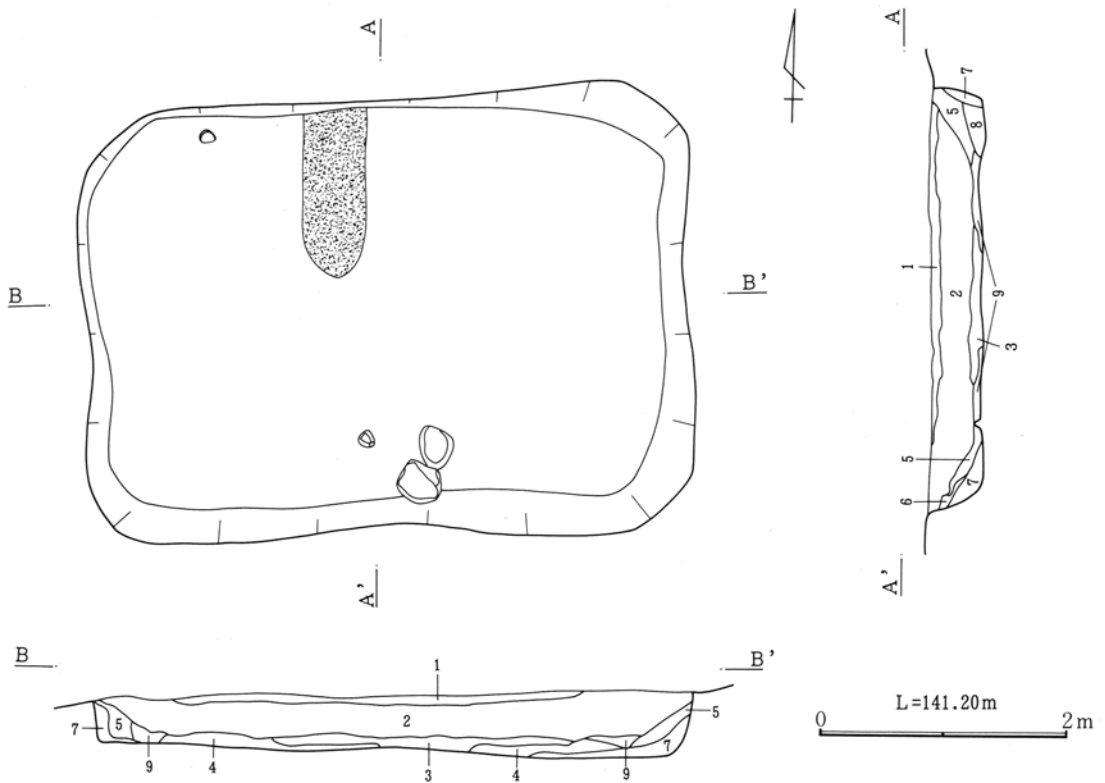
本住居跡は、調査区の南より86区C～D-7～8グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、確認されなかった。住居の形態は、東西に長軸をとる長方形を呈する。残存状態は、住居廃絶後畠として利用されているため周堤帯は削平されているが、竪穴部分は良好な状態である。

規模は、長軸4.84m、短軸3.56mで各辺の長さは北辺4.86m、東辺3.56m、南辺5.00m、西辺3.34mを測る。床面積は、13.47m²である。主軸方位は、N-88.5°-Eを指す。壁高は、北壁35～51cm、東壁48～51cm、南壁43～50cm、西壁31～38cm、平均43cmである。内部施設は、確認されなかった。床面は、

地山をそのまま踏み固めて使用している。また、北辺中よりで壁際から中央へ向けての1.5×0.5mの範囲に灰・炭化物の散布が確認された。カマド及び炉などの施設は、確認されなかった。

Hr-F A層下の埋没土の状態は、Hr-F A層下畠面でごく僅かな窪み程度まで埋没している。竪穴部分の堆積は、各辺からの土砂の流入が確認される自然堆積である。

遺物の出土状態は、土師器甕、壺、甗等の小片が19点と円礫が出土したが、実測に至るような個体は存在しない。



130号住居

1. 黒褐色土 炭化物とAs-Cを僅かに含む
2. 褐灰色土 砂質土、As-Cを若干含む
3. 褐灰色土 砂質土、As-Cを僅かに含む
4. にぶい黄橙色土 砂質土、As-Cを若干含む

5. 灰黄色土 砂質土、As-Cを若干含む
6. 褐灰色土 砂質土、As-Cを少し含む
7. 灰黄褐色土 砂質土、灰色砂ブロックを多く含む
8. 灰黄色土 砂質土、灰色砂を多量に含む
9. 黒褐色土 少量のAs-Cを含む

第69図 130号住居平面・断面図

131号住居

本住居跡は、調査区の南半中ほど86区A～B-8～9グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、確認されなかった。住居の形態は、ほぼ方形を呈する。残存状態は、住居廃絶後畠として利用されているため周堤帯は削平されているが、竪穴部分は良好な状態である。

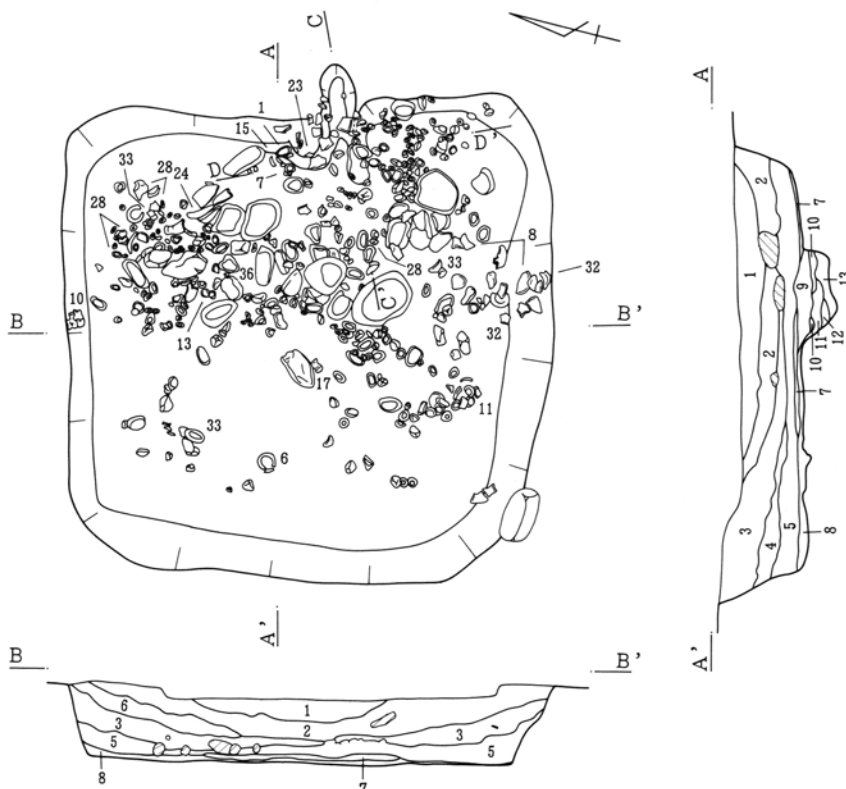
規模は、長軸3.88m、短軸3.64mで各辺の長さは北辺3.60m、東辺3.92m、南辺3.92m、西辺3.48mを測る。床面積は、10.42m²である。主軸方位は、N-73°-Eを指す。壁高は、北壁78cm、東壁52cm、南壁62cm、西壁68cm、平均65cmである。内部施設は、確認されなかった。床面は、掘り方より3cm前後灰白色砂質土を新たに入れて踏み固めている。

カマドは、東壁のほぼ中央に構築されている。残存状態は、天井部は崩落しているが、火床面の灰層と天井部崩落土の間に黄灰色砂が流れ込んでいることから住居廃棄後ある程度の期間カマドが崩落しないで残存していたと想定される。規模は、焚口～煙

道間が1.13m、両袖間の幅0.72m、焚口幅0.20mを測る。焚口は、長さ45cm、幅25cm、厚さ25cmの細長い円礫を両袖の間に渡して補強を行っている。煙道は、竪穴部分より35cm外へ延びるが上部の構造は残存していなかった。

住居の掘り方は、床面より3cm前後掘り込まれており、カマド前部で小規模の床下土坑を確認した。床下土坑の形態は楕円形で規模は径80×70cm、深度20cmである。

Hr-F A層下の埋没土の状態は、Hr-F A層下畠面でごく僅かな窪み程度まで埋没している。竪穴部分の堆積は、レンズ状の自然堆積が確認されるが、西辺からの土砂の流入が他の各辺からの流入より早期に始まったのか土砂の量が多く確認される。また、4・5層の上部には本住居がある程度埋没している窪み状態の時に東側から多量の円礫を投棄している。



131号住居

1. におい黄褐色土 砂質土、明黄褐色砂ブロックを多量とAs-Cを若干含む
2. 灰褐色土 砂質土、As-Cを僅かに含む
3. 暗褐色土 砂質土、焼土粒とAs-Cを僅かに含む
4. 暗褐色土 3に類似、3より焼土を多く含む
5. におい褐色土 3に類似、焼土粒を含まない
6. におい黄褐色土 砂質土、焼土粒を僅かに含む
7. 明黄褐色土 砂質土、黄色砂を多く含む
8. 灰白色土 砂質土、炭化物粒を若干含む
9. 灰黄褐色土 7を帯状に含む
10. 灰黄褐色土 灰色砂・黄色砂ブロックを多量に含む
11. 灰白色土 砂質土、灰色砂を多量に含む
12. 黒褐色土 砂質土、灰色砂ブロックを多量に含む
13. 浅黄色土 砂質土、灰色砂ブロックを少し含む

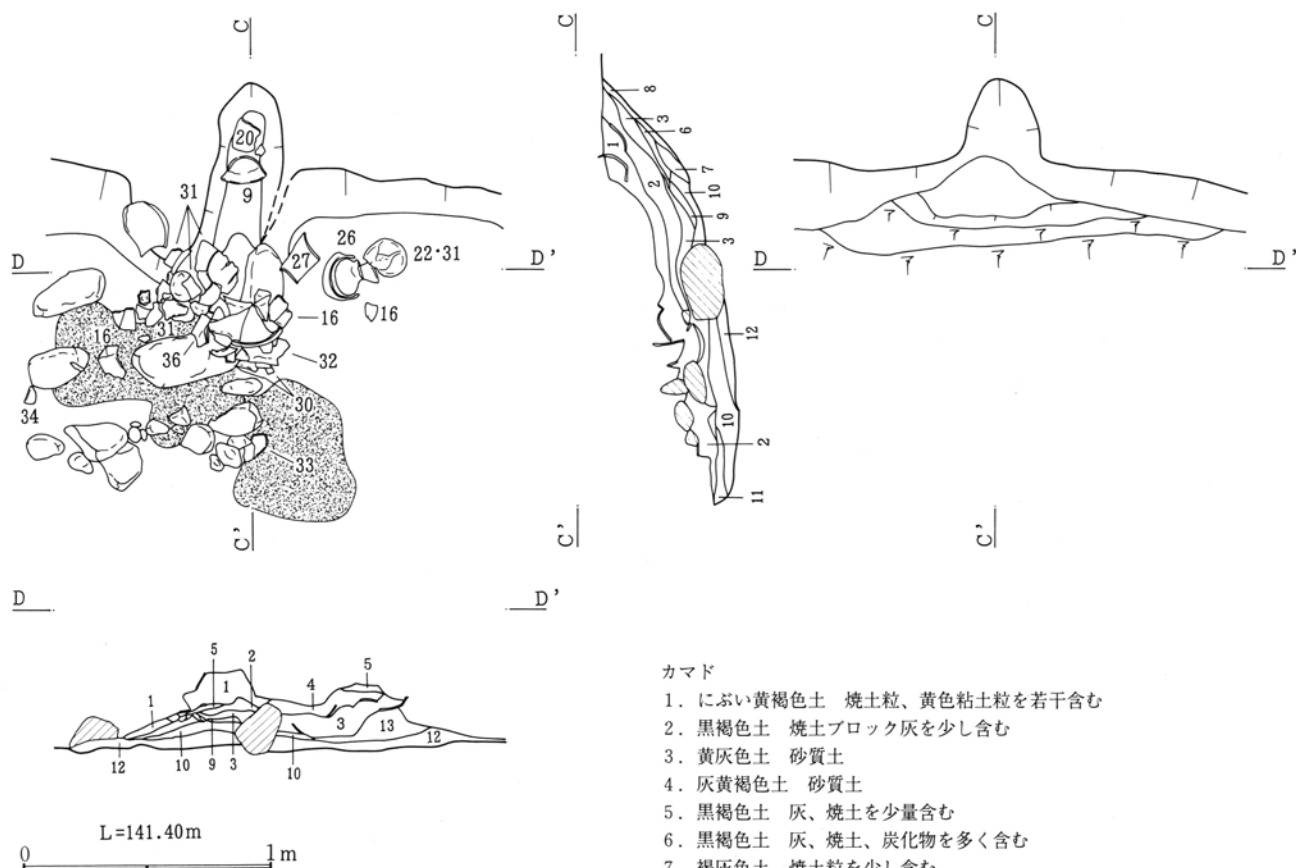
L=141.50m
0 2m

第70図 131号住居平面・断面図

IV 五反田地区の遺構と遺物

遺物は、土師器杯、高杯、柑、甕、鉢、甑、甕、壺、石製模造品白玉などが出土している。その出土時の破片総数は、529点出土しているが他住居と同様に甕・壺などが9割を占めている。出土状態は、

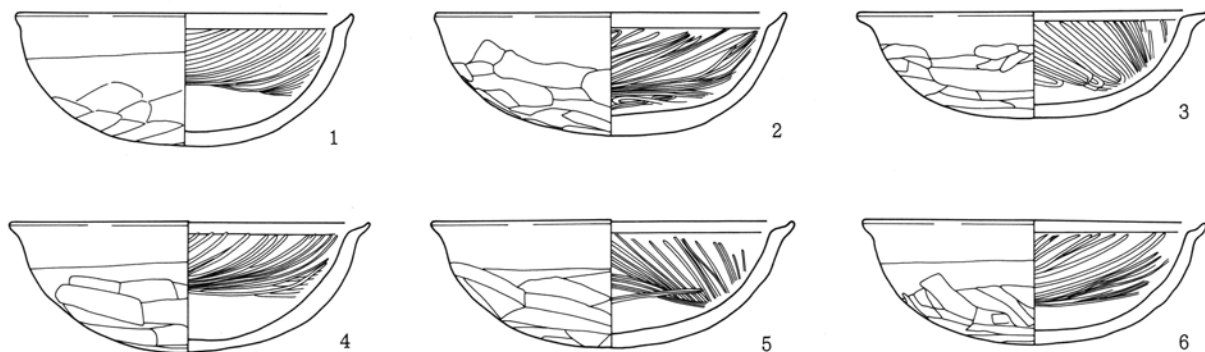
5・7・9の杯、16の高杯、18の柑、20の鉢、22・24の甑、25～27・29～34の甕がカマドからと6・14の杯が床面から出土している。他の土器は、床面よりやや上部か埋没土中からの出土である。



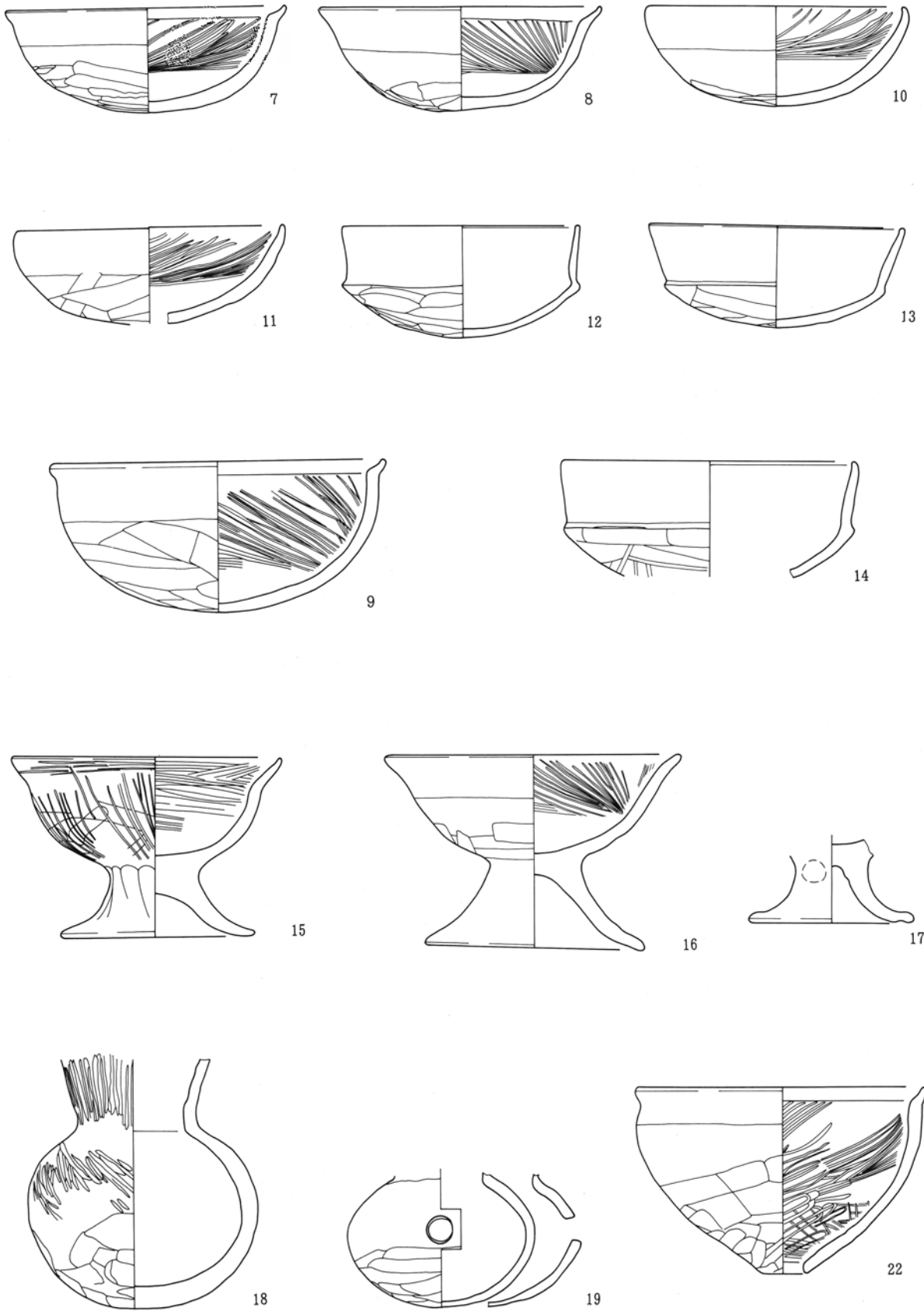
第71図 131号住居カマド図

カマド

1. にぶい黄褐色土 焼土粒、黄色粘土粒を若干含む
2. 黒褐色土 焼土ブロック灰を少し含む
3. 黄灰色土 砂質土
4. 灰黄褐色土 砂質土
5. 黒褐色土 灰、焼土を少量含む
6. 黒褐色土 灰、焼土、炭化物を多く含む
7. 褐灰色土 焼土粒を少し含む
8. 褐灰色土 焼土粒を少量含む
9. にぶい黄橙色土 粘土質、焼土粒を少し含む
10. 褐灰色土 灰を多く含む
11. にぶい黄橙色土 砂質土、焼土粒を僅かに含む
12. にぶい黄褐色土 砂質土、焼土粒、炭化物を僅かに含む
13. にぶい黄褐色土 粘土質、焼土ブロック、灰、炭化物を多く含む

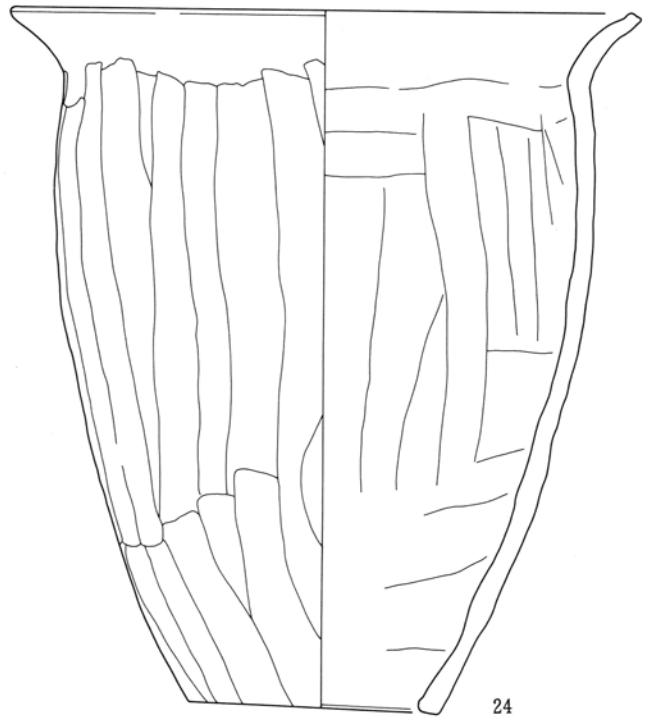
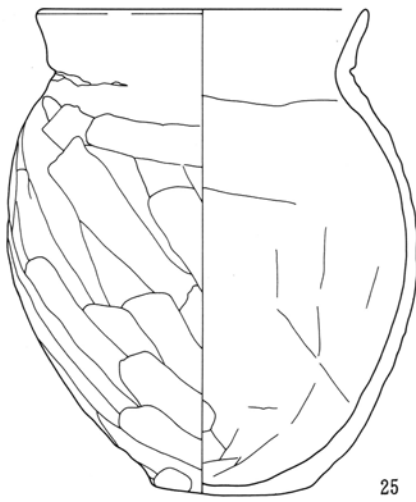
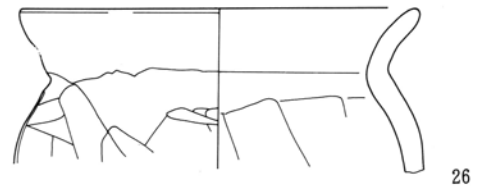
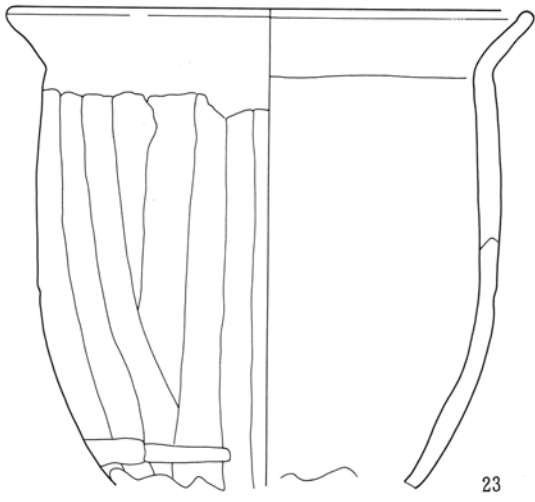
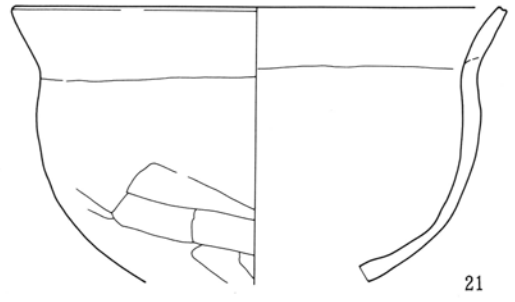
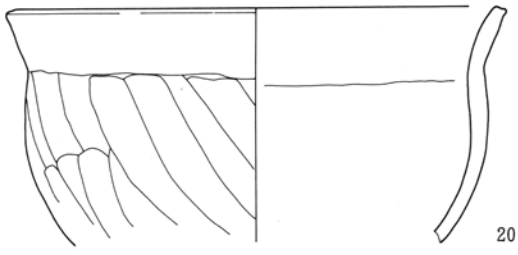


第72図 131号住居遺物図(1)

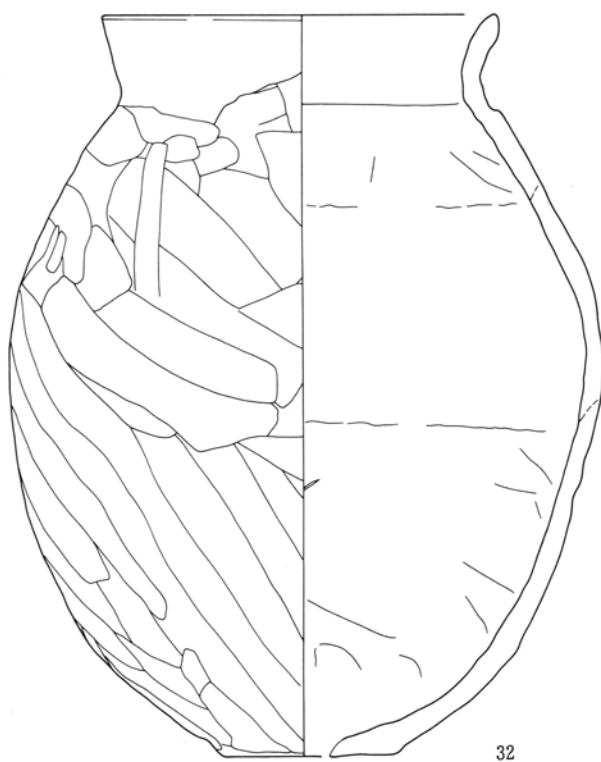
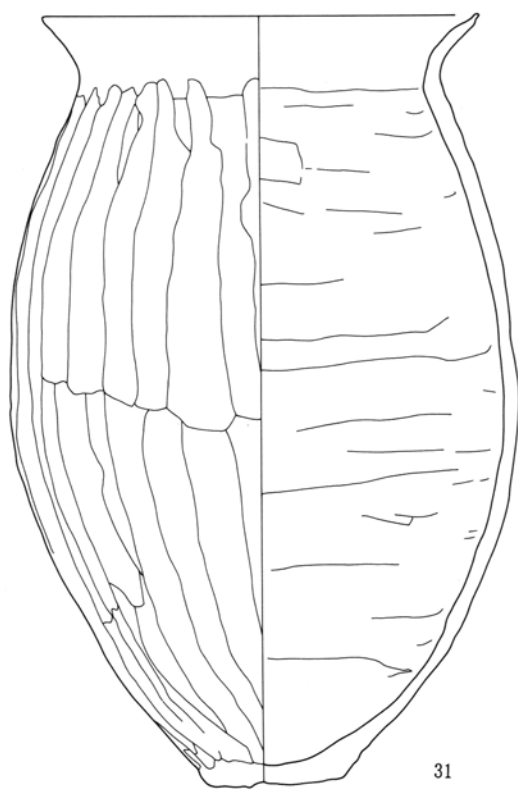
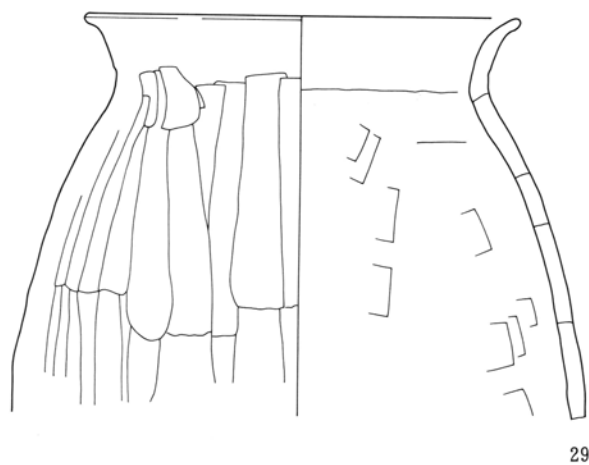
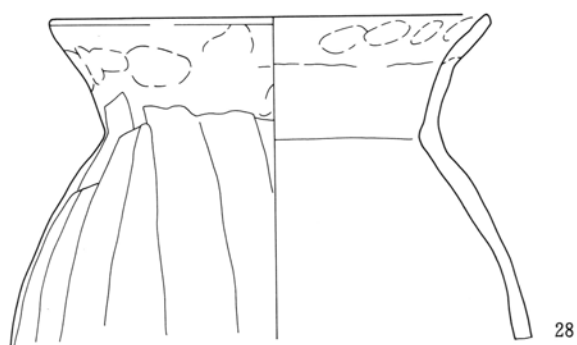
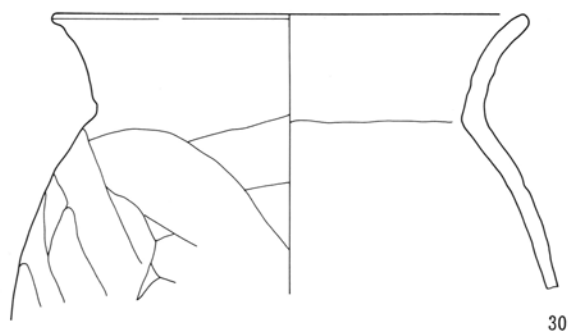
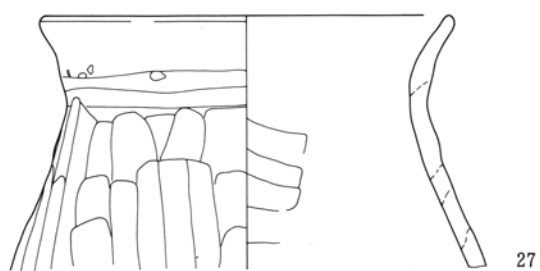


第73图 131号住居遺物图(2)

IV 五反田地区の遺構と遺物

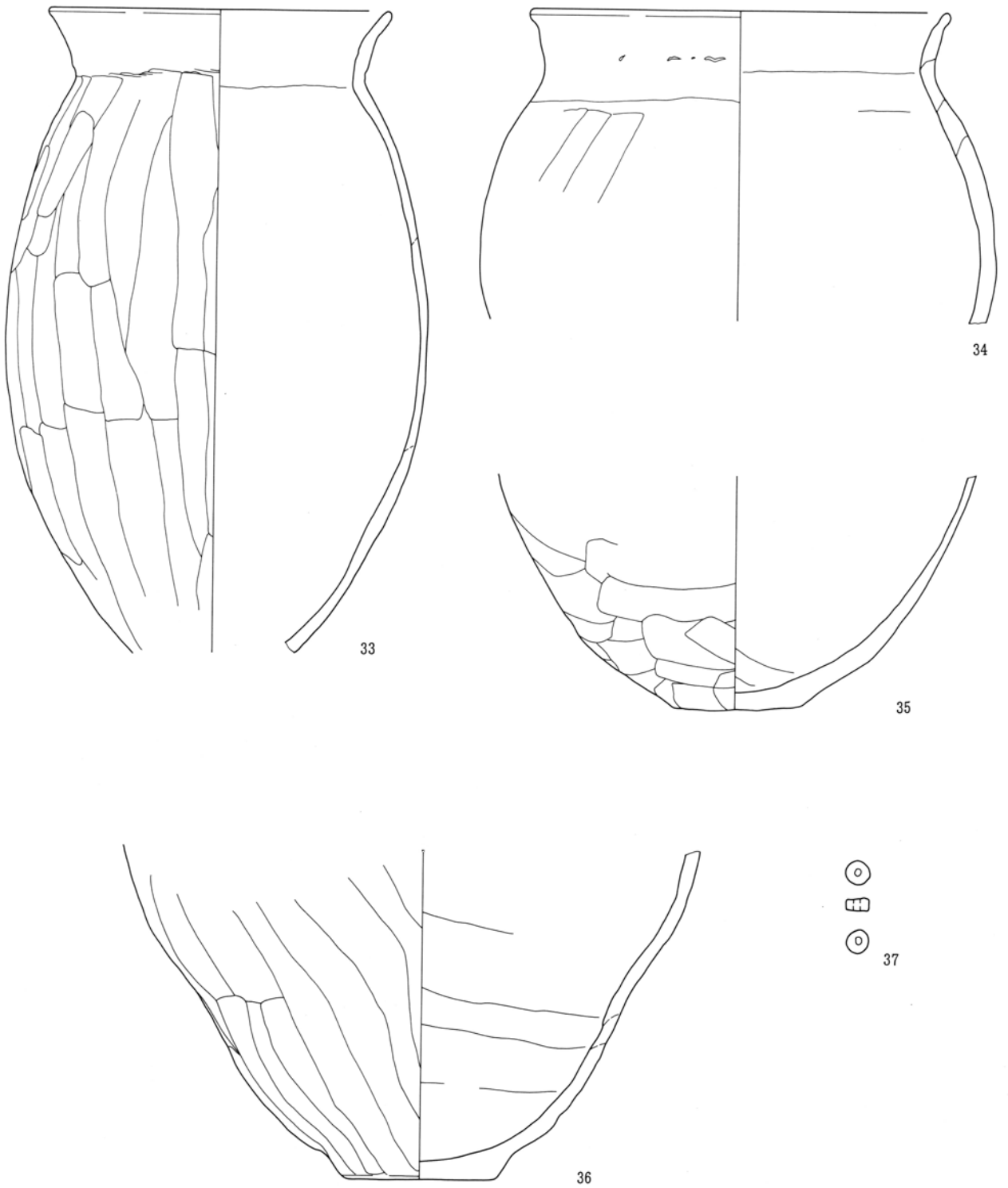


第74図 131号住居遺物図(3)



第75図 131号住居遺物図(4)

IV 五反田地区の遺構と遺物



第76図 131号住居遺物図(5)

132号住居

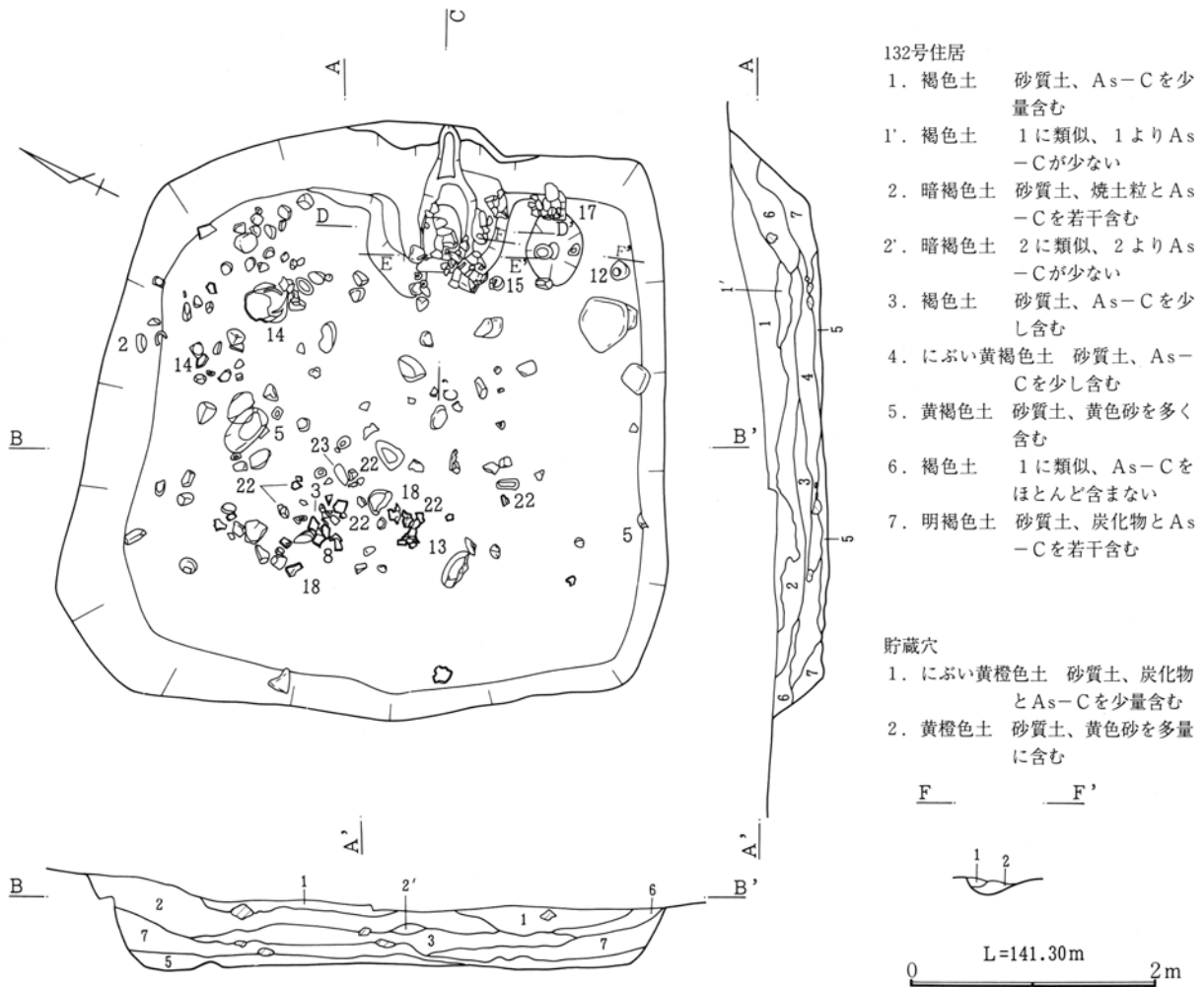
本住居跡は、調査区の東寄り、85区S～T-9～10グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、133号住居と重複しているが、新旧関係は本住居の方が後出である。また、126号住居とは、竪穴部分での重複関係はないが同住居の周堤帯の一部が本住居を覆っており、新旧関係は本住居の方が前出である。住居の形態は、ほぼ方形を呈する。残存状態は、住居廃絶後畠として利用されているため周堤帯は削平されているが、竪穴部分は良好な状態である。

規模は、長軸4.88m、短軸4.80mで各辺の長さは北辺4.92m、東辺4.72m、南辺4.84m、西辺4.92mを測る。床面積は、14.76㎡である。主軸方位は、N-65°-Eを指す。壁高は、北壁60～79cm、東壁54～77cm、南壁40～52cm、西壁38～47cm、平均56cm

である。内部施設は、カマドの右側、東南角で貯蔵穴を検出した。貯蔵穴は、楕円形を呈し、径66×44cm、深度14cmである。床面は、北側に黄褐色砂質土を入れ、南側は地山をそのまま踏み固めている。

カマドは、東壁のほぼ中ほどに構築されている。残存状態は、天井部が崩落しているが袖等は良好な状態である。規模は、焚口～煙道間が1.40m、両袖間の幅1.20m、焚口幅0.30mを測る。焚口や袖には扁平及び細長い円礫を使用して補強している。燃焼部には、20の土師器甕が残存し、左袖の上部には21の甕が出土しており、ともにカマドに据えられていたものと考えられる。煙道は、竪穴部分より外へは延びず、上部の構造も残存していない。

住居の掘り方は、北側では床面より3～5cmほど



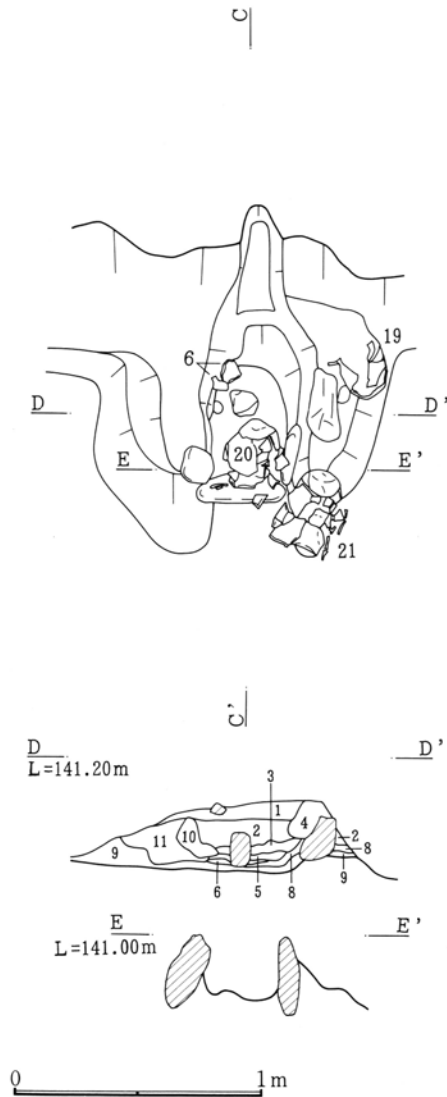
第77図 132号住居平面・断面図

IV 五反田地区の遺構と遺物

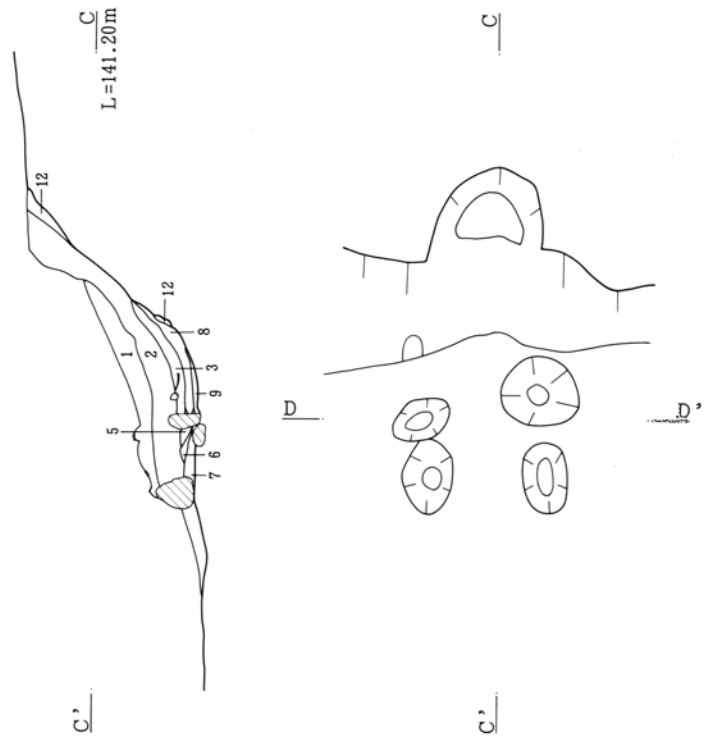
掘り込まれている。

Hr-F A層下の埋没土の状態は、下部が各辺からの土砂の流入が確認される自然堆積である。上部は、北東部(126号住居方向)から多量の土砂が流入した様子が観察され、隣接する126号住居の竪穴部分を掘削する時点では本住居はまだ半分程度の埋没状態であったと想定される。

遺物は、須恵器杯、土師器杯、高杯、柑、甌、甕等が出土している。その出土時の破片総数は、542点出土しているが他住居と同様に甕・壺などが8割を占めている。出土状態は、6・7の杯、16・20・21の甕がカマドから12の柑、14の甌、15・19・22の甕が床面から出土している。

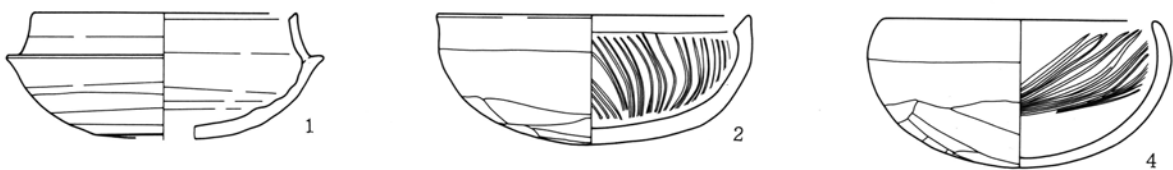


第78図 132号住居カマド図



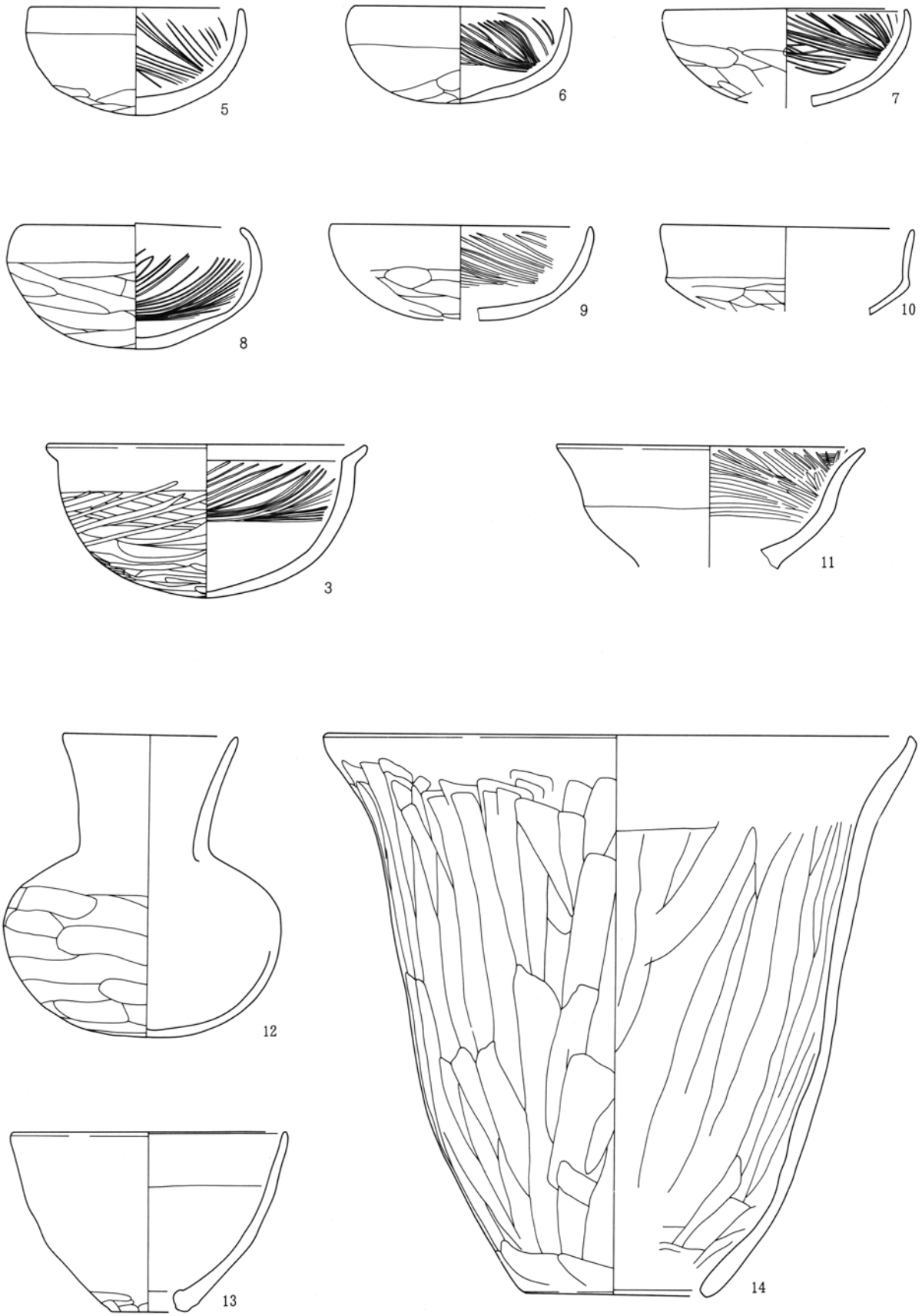
カマド

1. 灰黄褐色土 焼土粒と灰色砂を多く含む
2. にぶい黄褐色土 焼土粒と黄褐色砂を多く含む
3. にぶい黄褐色土 2に類似、焼土ブロックを多量に含む
4. 灰黄褐色土 焼土ブロック、炭化物を多く含む
5. 明黄褐色土 粘土質、焼土ブロックを少し含む
6. 赤褐色土 焼土
7. 黒色土 灰、灰色砂を含む
8. 黒色土 灰
9. 灰白色土 砂質土、灰色砂を多く含む
10. 暗褐色土 焼土と灰の混じり合ったもの
11. 暗褐色土 焼土粒とAs-Cを若干含む
12. 灰黄褐色土 焼土粒を僅かに含む



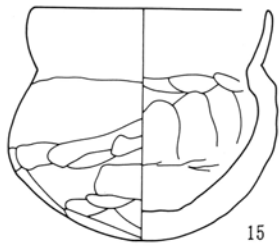
第79図 132号住居遺物図(1)

2. 住居

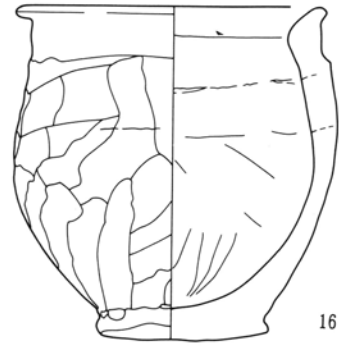


第80图 132号住居遺物图(2)

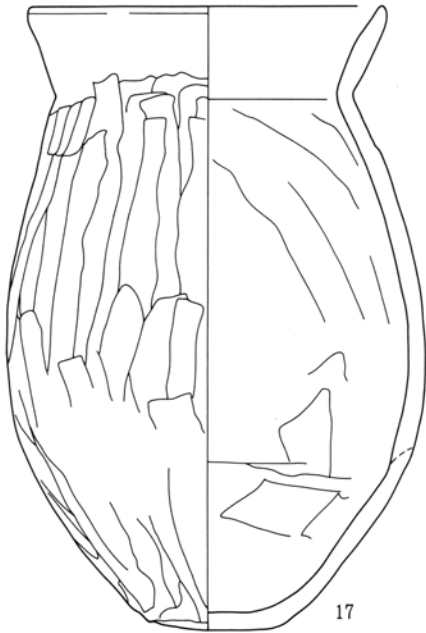
IV 五反田地区の遺構と遺物



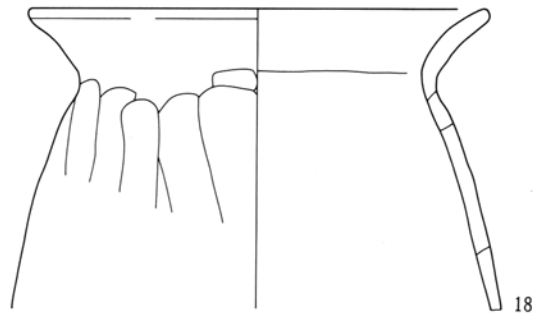
15



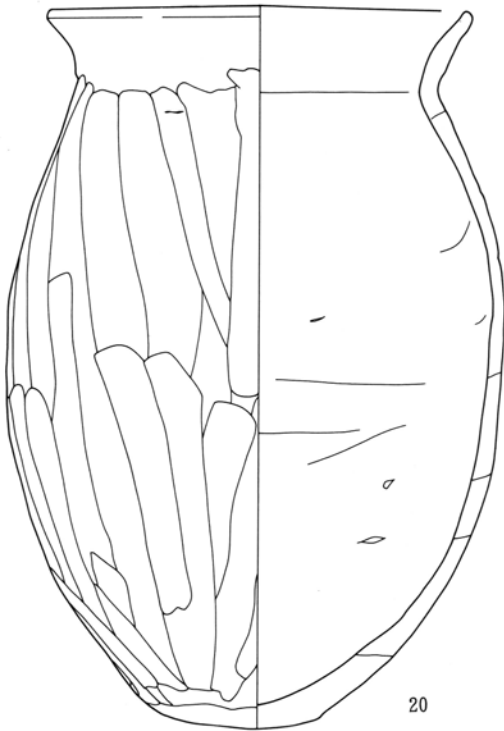
16



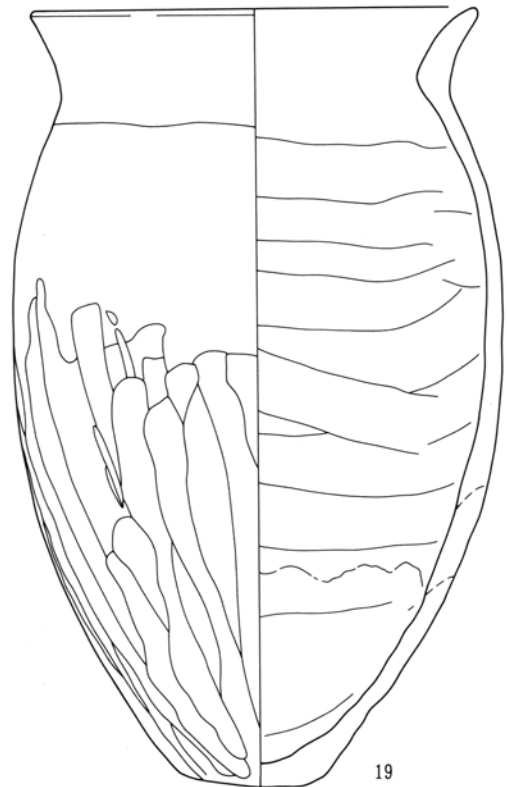
17



18

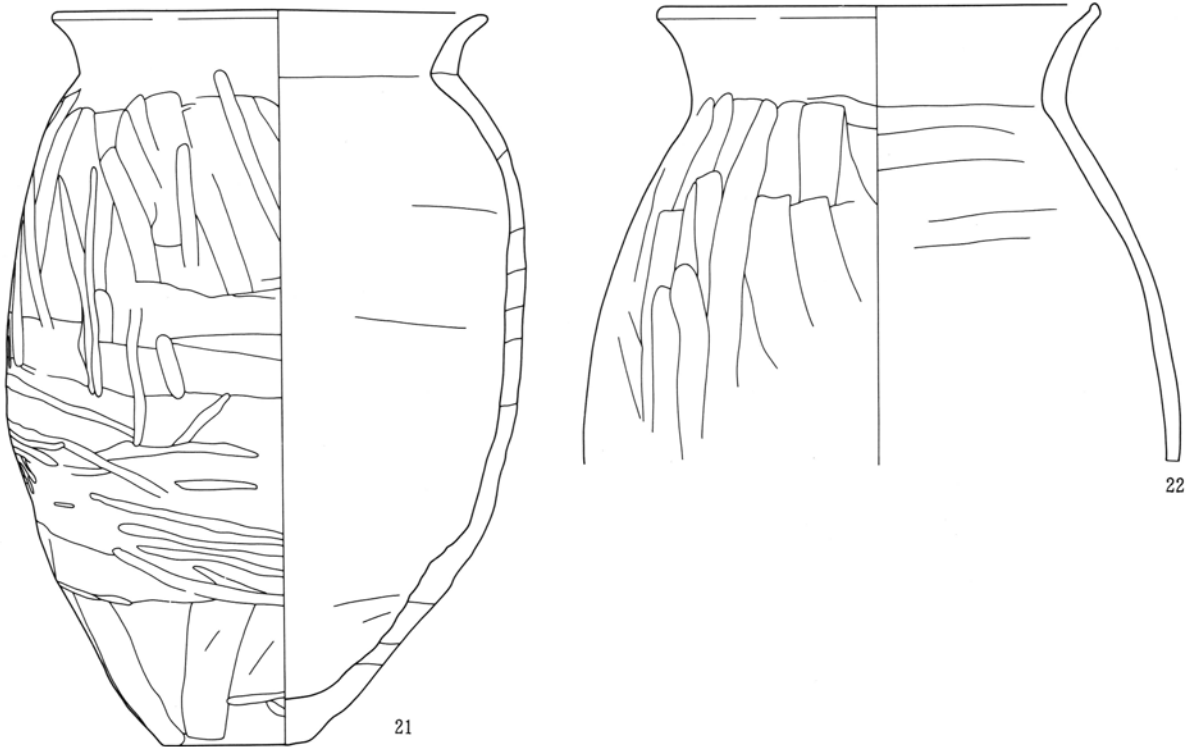


20



19

第81図 132号住居遺物図(3)



第82図 132号住居遺物図(4)

133号住居

本住居跡は、132号住居の西側、85区T-9・10グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、132号住居と重複するが、新旧関係は本住居の方が前出である。残存状況は、東辺を132号住居により壊されカマドなどの施設については不明である。住居の形態は、西辺がやや長い台形状を呈すると想定される。

規模は、長軸 $4.00 + \alpha$ m、短軸3.82 mで各辺の長さは北辺 $2.96 + \alpha$ m、南辺 $4.16 + \alpha$ m、西辺3.76 mを測る。床面積は、残存部分で 10.35m^2 で全体では 13m^2 前後と推定される。主軸方位は、 $N-90^\circ-E$ を指す。壁高は、北壁47~63 cm、南壁27~41 cm、西壁45~61 cm、平均47 cmである。内部施設は、確認されなかった。床面は、西辺よりは地山をそのまま踏み固めているが、大部分は掘り方より5 cm程度褐色砂質土を入れて踏み固めている。

カマドは、東壁の南よりに構築されていたと想定されるが、132号住居により壊されており僅かに住

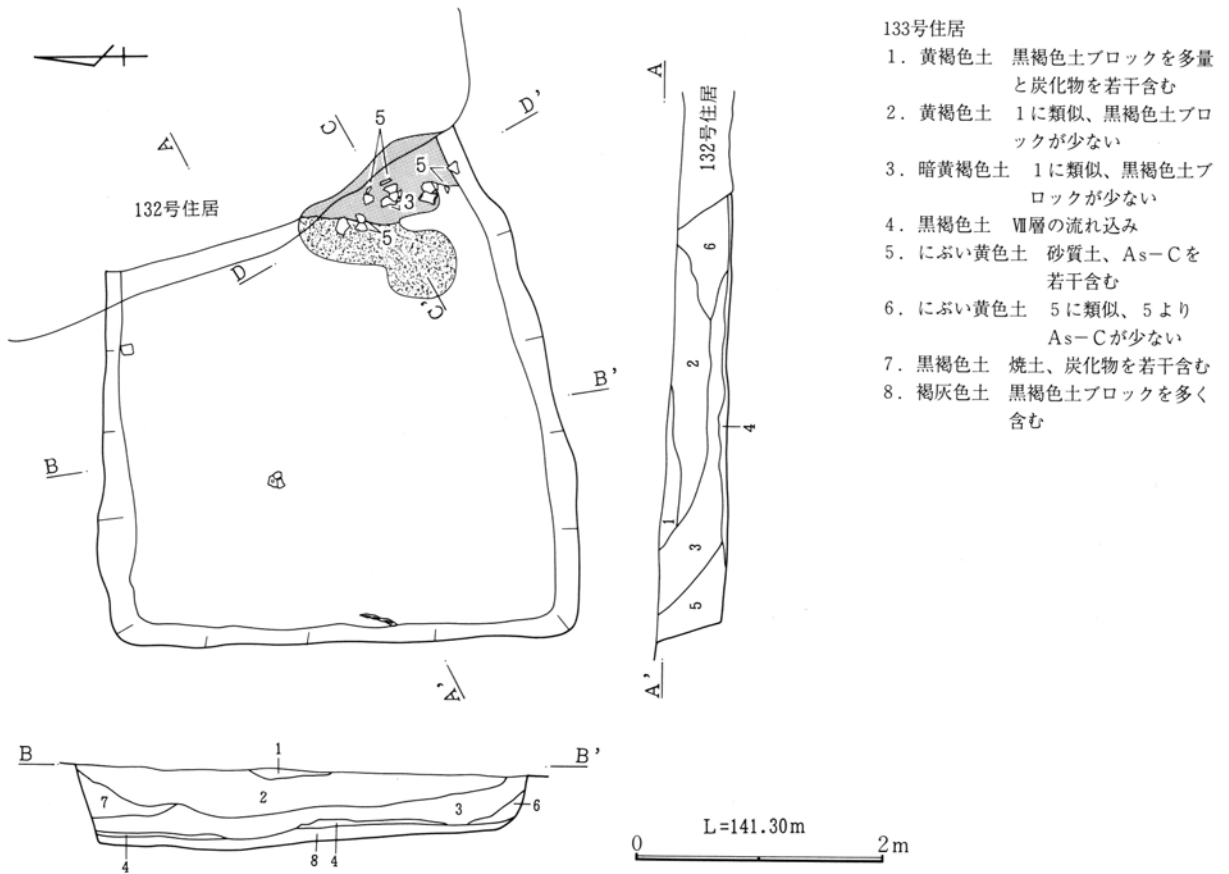
居東南部に灰と炭化物の散布範囲が確認された。

住居の掘り方は、西辺よりを除いて床面より5 cm前後下であるが、ほぼ平坦である。

Hr-F A層下の埋没土の状態は、各辺からの土砂の流入が確認される自然堆積である。

遺物は、土師器杯、高杯、甕、壺が出土している。その出土時の破片総数は、100点と他住居と比べて少ない出土であるが甕・壺などが7割を占めている。出土状態は、3の高杯、5の甕がカマドからの出土である。

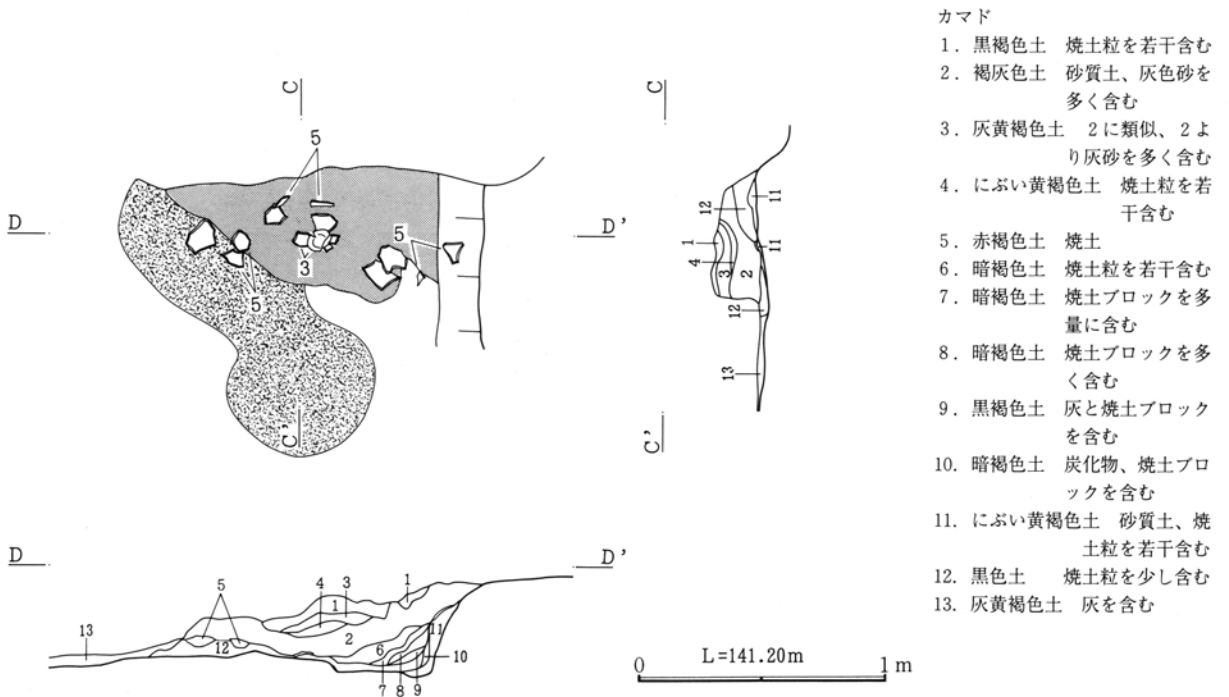
IV 五反田地区の遺構と遺物



133号住居

1. 黄褐色土 黒褐色土ブロックを多量と炭化物を若干含む
2. 黄褐色土 1に類似、黒褐色土ブロックが少ない
3. 暗黄褐色土 1に類似、黒褐色土ブロックが少ない
4. 黒褐色土 VII層の流れ込み
5. にぶい黄色土 砂質土、As-Cを若干含む
6. にぶい黄色土 5に類似、5よりAs-Cが少ない
7. 黒褐色土 焼土、炭化物を若干含む
8. 褐灰色土 黒褐色土ブロックを多く含む

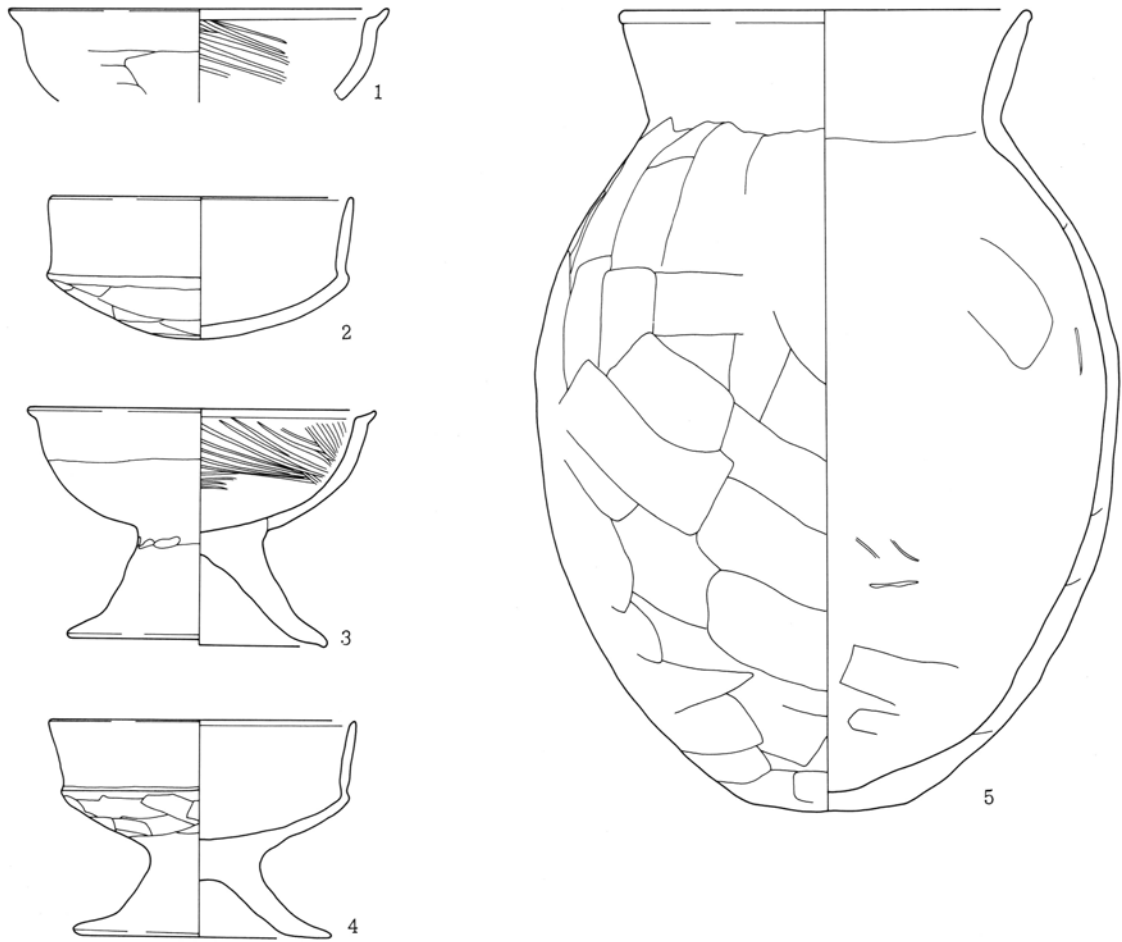
第83図 133号住居平面・断面図



カマド

1. 黒褐色土 焼土粒を若干含む
2. 褐灰色土 砂質土、灰色砂を多く含む
3. 灰黄褐色土 2に類似、2より灰砂を多く含む
4. にぶい黄褐色土 焼土粒を若干含む
5. 赤褐色土 焼土
6. 暗褐色土 焼土粒を若干含む
7. 暗褐色土 焼土ブロックを多量に含む
8. 暗褐色土 焼土ブロックを多く含む
9. 黒褐色土 灰と焼土ブロックを含む
10. 暗褐色土 炭化物、焼土ブロックを含む
11. にぶい黄褐色土 砂質土、焼土粒を若干含む
12. 黒色土 焼土粒を少し含む
13. 灰黄褐色土 灰を含む

第84図 133号住居カマド図



第85図 133号住居遺物図

134号住居

本住居跡は、調査区の南より86区A～B-7～8グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、125号住居の周堤帯と135号住居の竪穴部分と重複するが、新旧関係は125号住居より前出で135号住居より後出である。残存状態は、周堤帯は存在しないが、竪穴部分は良好な状態で残存していた。住居形態は、ほぼ方形を呈する。

規模は、長軸4.48m、短軸4.38mで各辺の長さは北辺4.20m、東辺4.28m、南辺4.16m、西辺4.68mを測る。床面積は、15.99 m^2 である。主軸方位は、N-69.5°-Eを指す。壁高は、北壁42～69cm、東壁39～66cm、南壁33～45cm、西壁44～50cm、平均48cmである。内部施設は、確認されなかった。床面は、地山を踏み固めている。

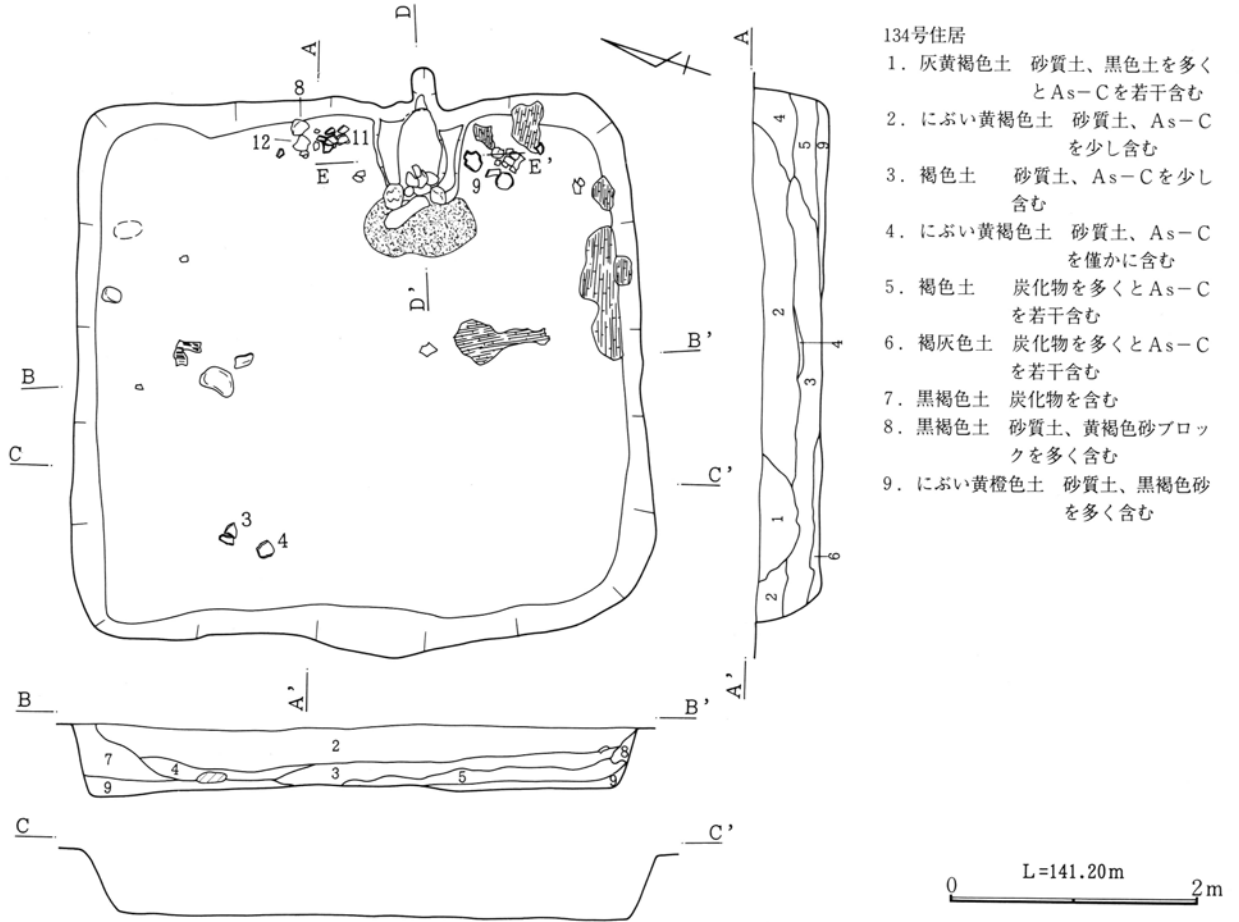
カマドは、東壁の中央よりやや南に構築されてい

る。残存状態は、天井部が崩落しているが両袖とも残存している。規模は、焚口～煙道間が1.10m、両袖間の幅0.69m、焚口幅0.24mを測る。袖は、両側に細長い円礫を補強に使用し、焚口は天井部に長さ41cm、幅13cm、12cmの細長い円礫を補強に使用している。煙道は、竪穴部分より30cmほど外へ延びるが上部の構造は残存していなかった。

Hr-F A層下の埋没土の状態は、各辺からの土砂の流入が確認される自然堆積である。

遺物は、土師器杯、高杯、鉢、埴、甕、壺等が出土している。その出土時の破片総数は、351点と少ない出土であるが甕・壺などが7割を占めている。出土状態は、5の杯がカマドから8・9・11の高杯と12の鉢がカマド周辺の床面、3・4の杯が北西部分の床面から出土している。

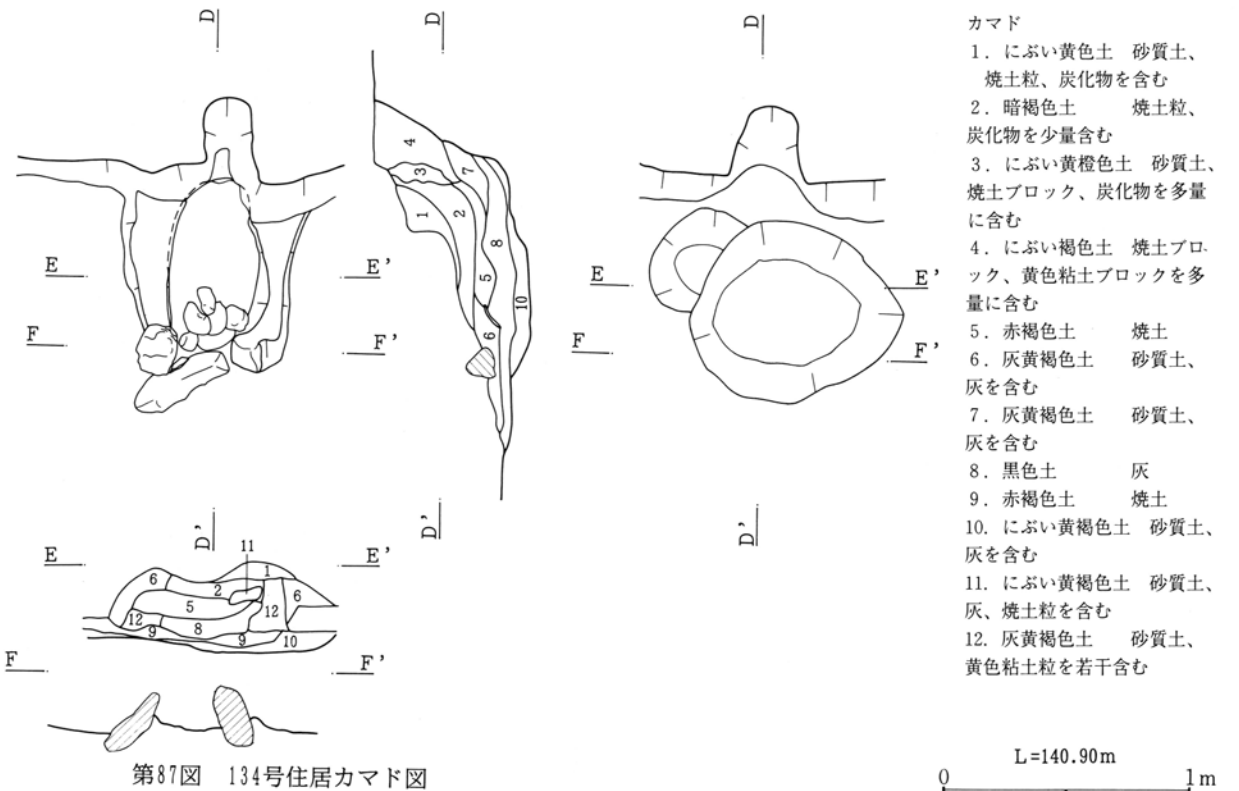
IV 五反田地区の遺構と遺物



134号住居

1. 灰黄褐色土 砂質土、黒色土を多くとAs-Cを若干含む
2. にぶい黄褐色土 砂質土、As-Cを少し含む
3. 褐色土 砂質土、As-Cを少し含む
4. にぶい黄褐色土 砂質土、As-Cを僅かに含む
5. 褐色土 炭化物を多くとAs-Cを若干含む
6. 褐灰色土 炭化物を多くとAs-Cを若干含む
7. 黒褐色土 炭化物を含む
8. 黒褐色土 砂質土、黄褐色砂ブロックを多く含む
9. にぶい黄褐色土 砂質土、黒褐色砂を多く含む

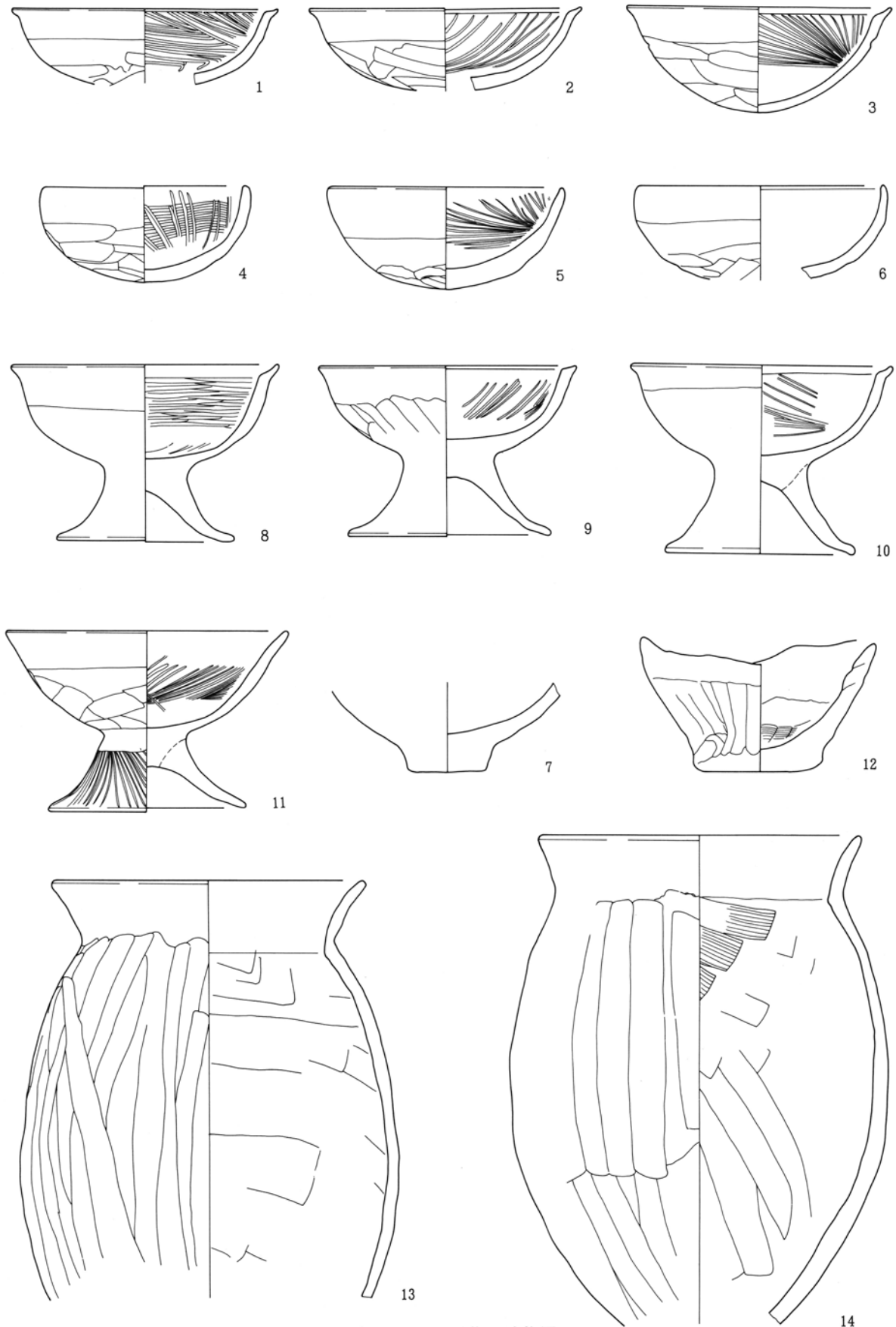
第86図 134号住居平面・断面図



カマド

1. にぶい黄色土 砂質土、焼土粒、炭化物を含む
2. 暗褐色土 焼土粒、炭化物を少量含む
3. にぶい黄褐色土 砂質土、焼土ブロック、炭化物を多量に含む
4. にぶい褐色土 焼土ブロック、黄色粘土ブロックを多量に含む
5. 赤褐色土 焼土
6. 灰黄褐色土 砂質土、灰を含む
7. 灰黄褐色土 砂質土、灰を含む
8. 黒色土 灰
9. 赤褐色土 焼土
10. にぶい黄褐色土 砂質土、灰を含む
11. にぶい黄褐色土 砂質土、灰、焼土粒を含む
12. 灰黄褐色土 砂質土、黄色粘土粒を若干含む

第87図 134号住居カマド図



第88图 134号住居遺物図

135号住居

本住居跡は、調査区の南より86区B~C-7~8グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、125号住居の周堤帯と134号住居の堅穴部分と重複するが、新旧関係は125号住居・134号住居より前出である。住居の形態は、ほぼ方形を呈する。残存状態は、東南部分の上半部を134号住居により壊されているがほぼ良好な状態である。

規模は、長軸5.04m、短軸5.02mで各辺の長さは北辺5.20m、東辺5.04m、南辺5.00m、西辺5.08mを測る。床面積は、21.90㎡である。主軸方位は、N-65°-Eを指す。壁高は、北壁69~79cm、東壁74cm前後、南壁75cm前後、西壁65~72cm、平均73cmである。内部施設は、確認されなかった。床面は、掘り方より5cmほど黄褐色砂質土を入れて踏み固めている。

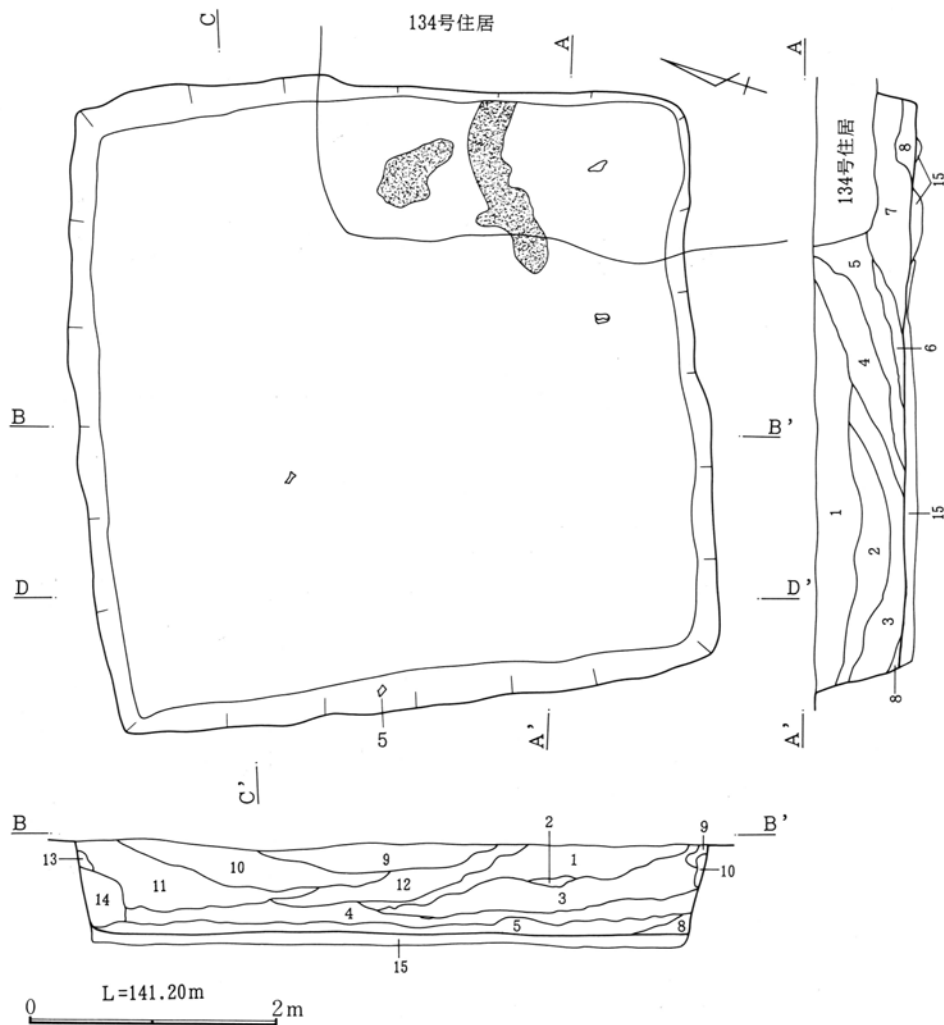
る。

カマド及び炉は、確認されなかったが、東南部で焼土や灰の散布範囲が確認された。

住居の掘り方は、床面より5cmほど掘り込まれているが、小規模な落ち込みを3基検出した。3基とも楕円形を呈し、規模は径50cm前後、深度10cm程度のものである。

Hr-F A層下の埋没土の状態は、各辺からの土砂の流入が確認される自然堆積である。

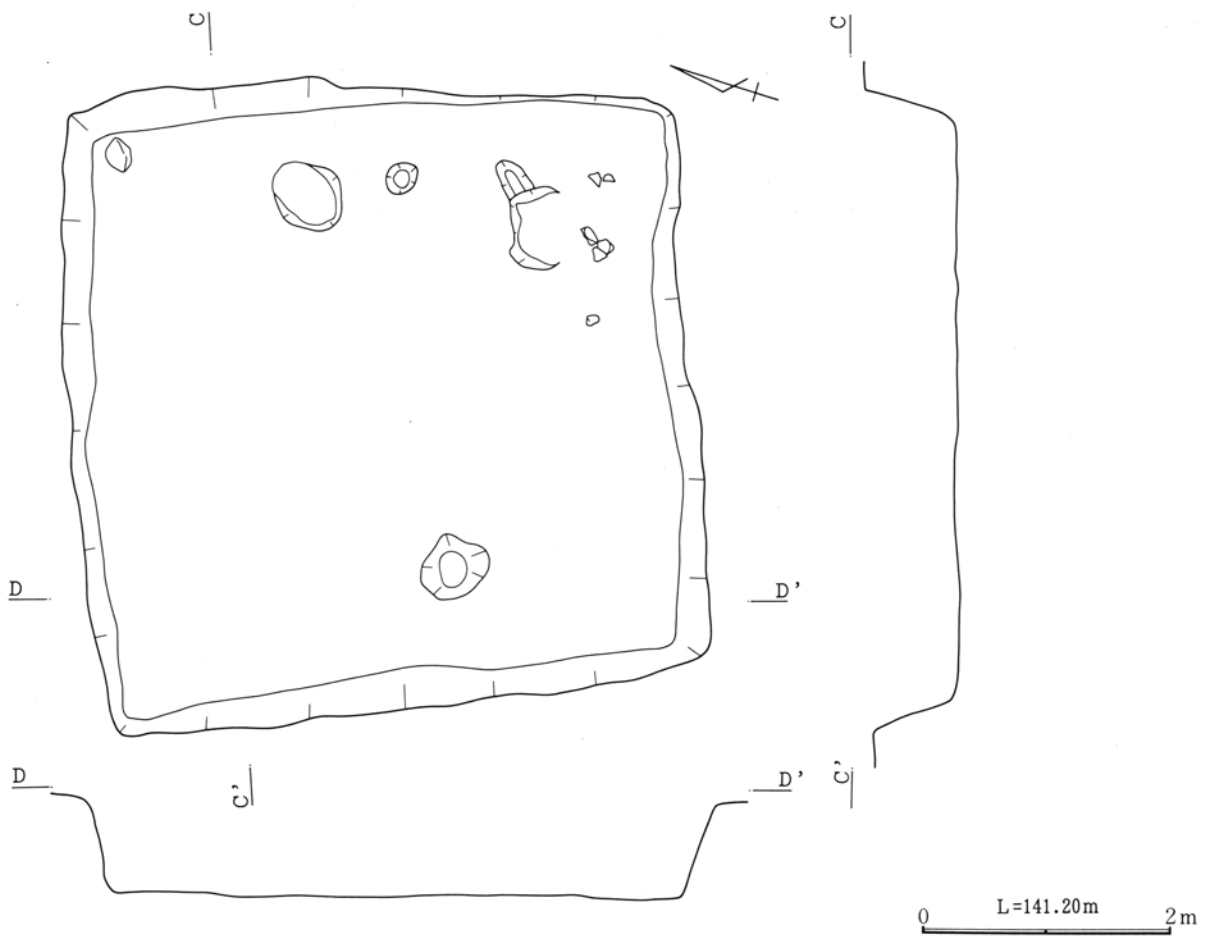
遺物は、土師器杯、高杯、埴、甕、壺等が出土しているが、その破片総数は、84点と他の住居と比べて少ない遺物出土量である。出土状態は、大部分が埋没土からであるが、2の杯は掘り方東南隅からの出土である。



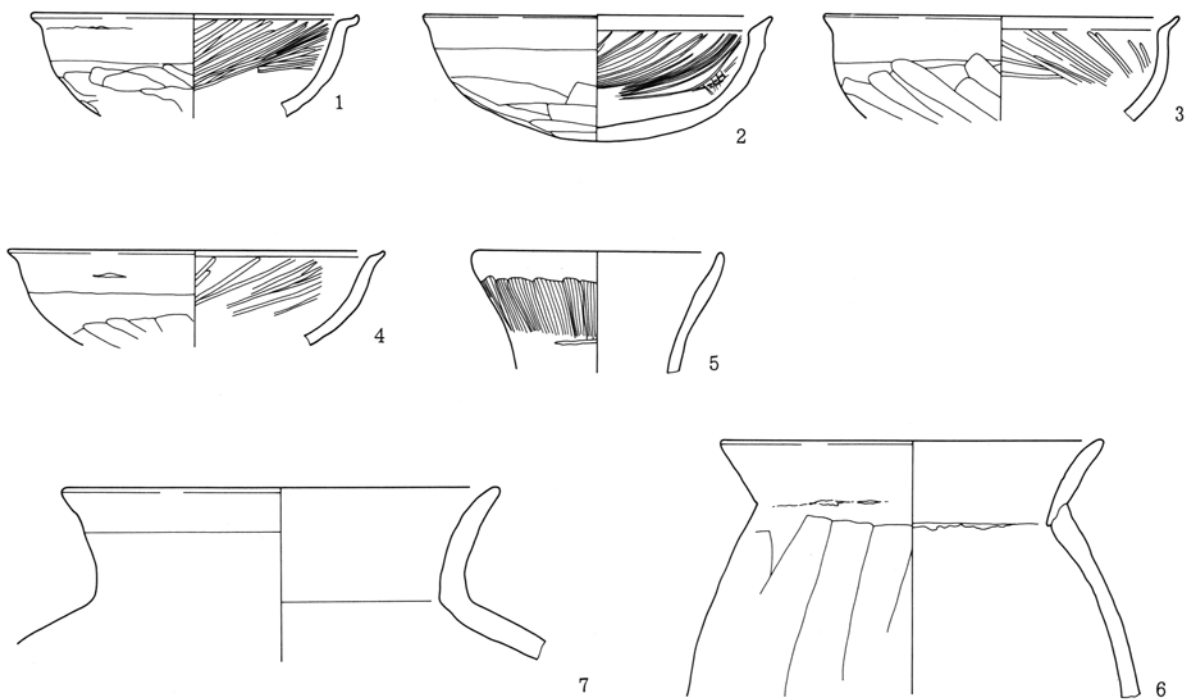
- 135号住居
1. にぶい黄褐色土 砂質土、黒色土を多くとAs-Cを少し含む
 2. にぶい黄褐色土 1に類似、1より黒色土が少量
 3. 黒褐色土 黄褐色砂を多量に含む
 4. 黄褐色土 砂質土、As-Cを少し含む
 5. にぶい黄褐色土 1に類似、黒色土をほとんど含まない
 6. 褐灰色土 砂質土、灰色砂ブロックを多く含む
 7. 褐灰色土 6に類似、灰色砂が6より少ない
 8. 浅黄色土 砂質土、黄色砂を多く含む
 9. 黒褐色土 黄褐色砂ブロックを多く含む
 10. 黄褐色土 砂質土、9に類似
 11. 黄褐色土 10に類似、As-Cを若干含む
 12. 黄褐色土 10に類似、As-Cを少し含む
 13. 黄褐色土 10に類似、As-Cを少量含む
 14. 褐色土 砂質土、炭化物とAs-Cを若干含む
 15. にぶい黄褐色土 砂質土、灰色砂、褐色土ブロックを多く含む

第89図 135号住居平面・断面図

2. 住居



第90図 135号住居掘り方図



第91図 135号住居遺物図

136号住居

本住居跡は、調査区のほぼ中央、86区B-11グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、122号住居周堤帯、138号住居と重複する。新旧関係は、122号住居より前出で138号住居より後出である。住居の形態は、主軸方向が15cmほど短いが、ほぼ方形を呈する。残存状態は、上部に122号住居周堤帯が存在するが、竪穴部分は良好な状態である。

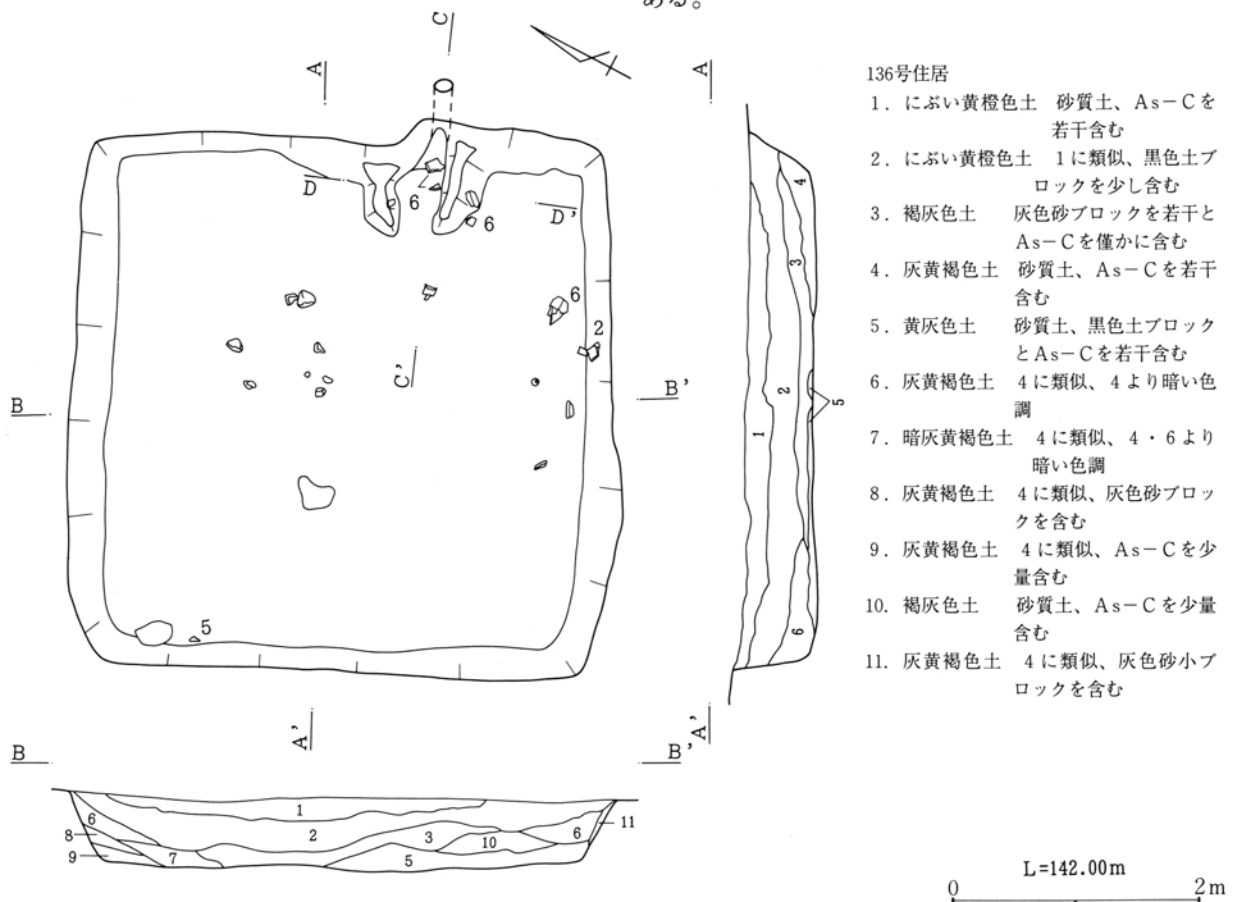
規模は、長軸4.25m、短軸4.40mで各辺の長さは北辺4.18m、東辺4.10m、南辺4.20m、西辺4.10mを測る。床面積は、14.30㎡である。主軸方位は、N-66°-Eを指す。壁高は、北壁52~62cm、東壁52~58cm、南壁52~62cm、西壁59~68cm、平均58cmである。内部施設は、確認されなかった。床面は、地山をそのまま踏み固めている。

カマドは、東壁の中央よりやや南寄りに構築されている。残存状態は、煙道部分は良好であるが焚口

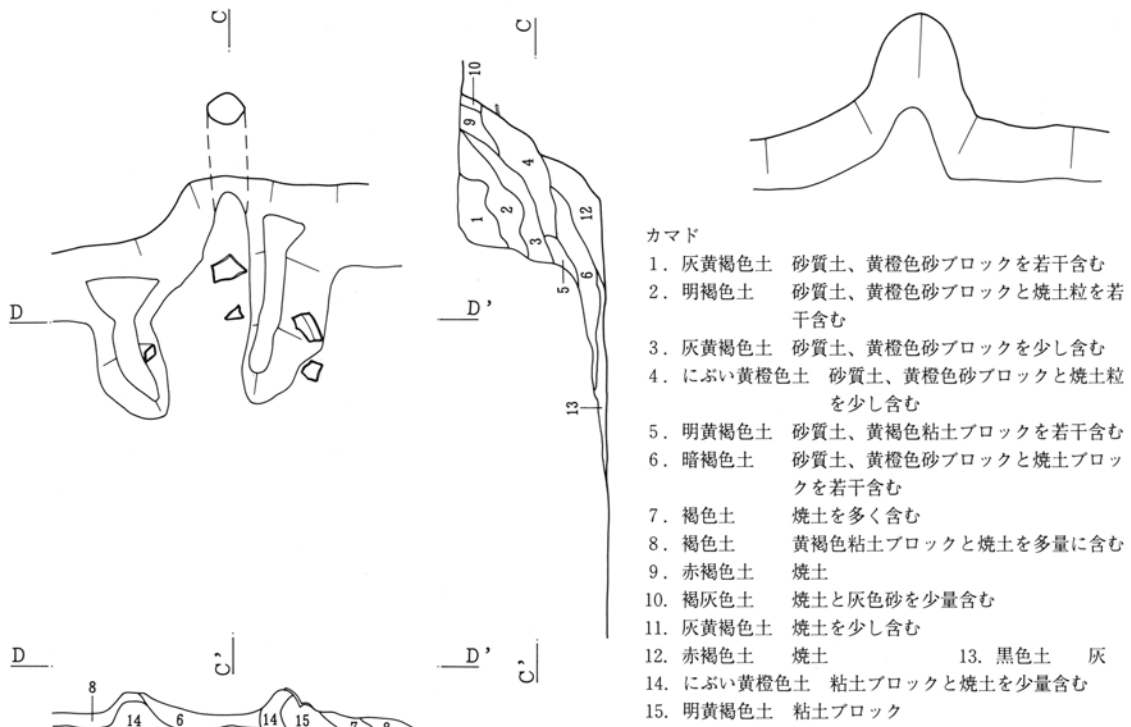
から燃焼部にかけては上部が崩落、流出して良好ではない。規模は、焚口~煙道間が1.30m、両袖間の幅0.98m、焚口幅0.30mを測る。焚口と袖は、煙道の残存状態から見ると上部の相当部分が崩壊・流出している。天井部は全く残存していない。煙道は、竪穴部分より30cm外へ延びるが上部の構造は残存していないが、住居廃棄後早い時期に黄褐色砂質土が流入したためか煙道トンネル部分が残存している。

Hr-F A層下の埋没土の状態は、各辺からの土砂の流入が確認される自然堆積である。

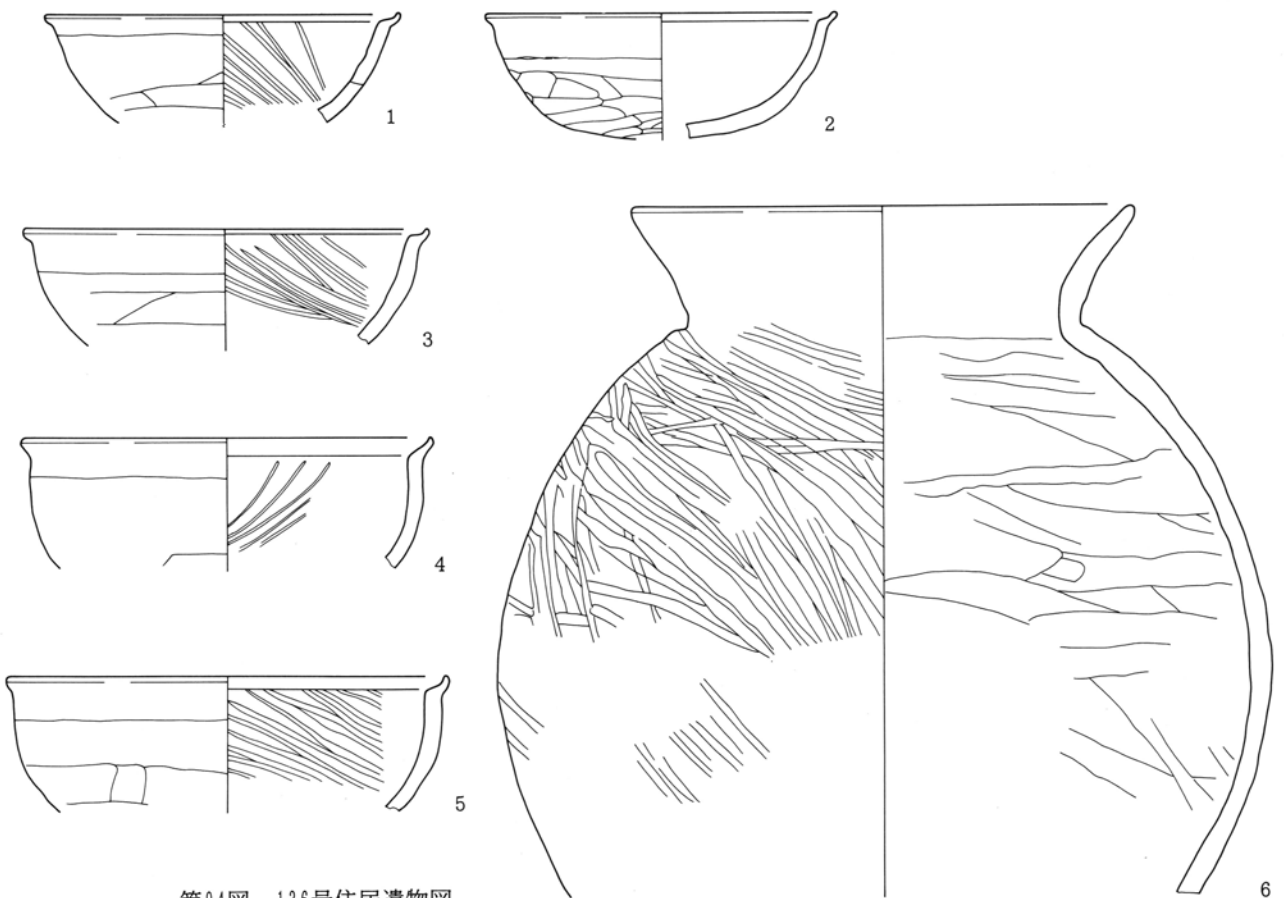
遺物は、土師器杯、高杯、甕、壺等が出土している。その出土状態は、その出土時の破片総数は、190点と少ない出土であるが甕・壺などが7割を占めている。また、土師器杯は、口縁部が内斜する形態のものだけであった。出土状態は、2・5の土師器杯が床面から6の甕がカマドと埋土からの出土である。



第92図 136号住居平面・断面図



第93図 136号住居カマド図



第94図 136号住居遺物図

137号住居

本住居跡は、調査区の北東、86区A-17グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、124号住居周堤帯が本住居の上部に存在する。新旧関係は、本住居の方が前出である。住居の形態は、南北方向がやや長い長方形を呈する。残存状態は、竪穴部分は良好である。

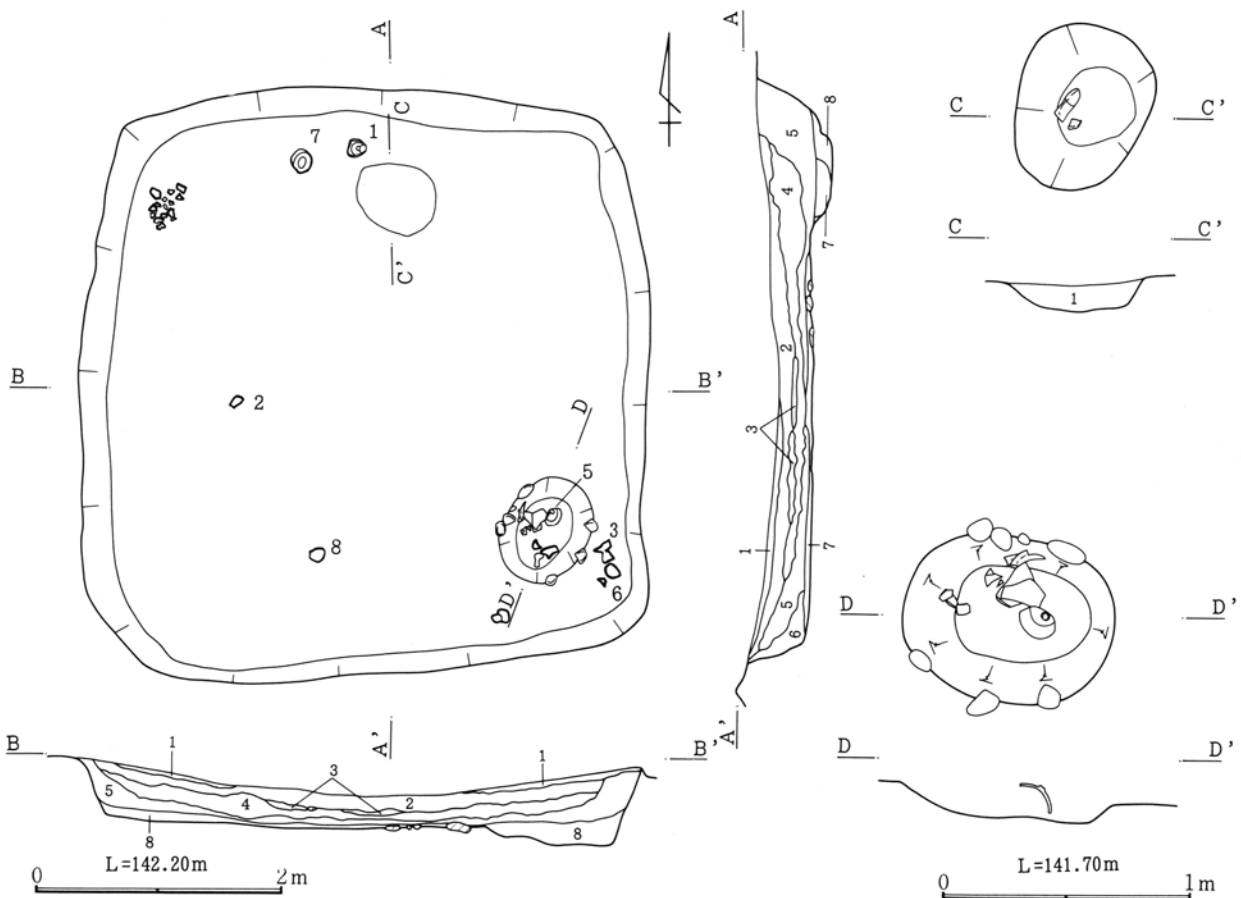
規模は、長軸4.68m、短軸4.44mで各辺の長さは北辺3.96m、東辺4.08m、南辺4.50m、西辺4.32mを測る。床面積は、16.24㎡である。主軸方位は、N-1.5°-Eを指す。壁高は、北壁42~44cm、東壁36~40cm、南壁36~49cm、西壁43~48cm、平均40cmである。内部施設は、東南隅で貯蔵穴を検出した。貯蔵穴は、楕円形で規模は径84×68cm、深度7cmである。内部からは5の土師器甕が出土し、周辺部の小円礫は地山に含まれているものである。床面は、掘り方に黒褐色土を入れて踏み固めている。

炉は、北辺の中ほどに位置する。形態は楕円形で規模は径68×54cmである。中央部には、長さ15cm、径4cmほどの細長い円礫を配している。

住居の掘り方は、北辺と東辺中ほどに20cmほどの窪みが存在するが明確な床下土坑等の施設は確認されなかった。

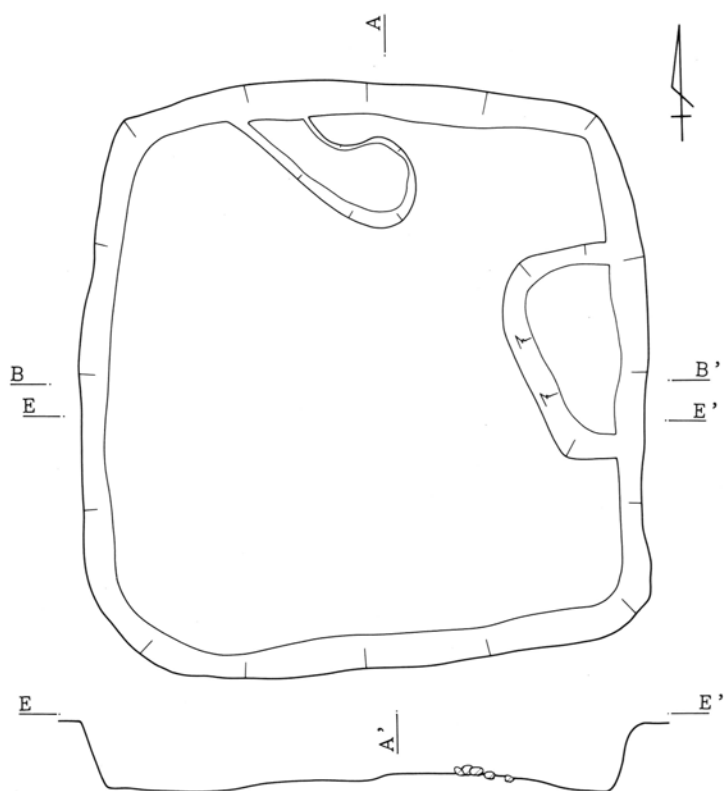
Hr-F A層下の埋没土の状態は、各辺からの土砂の流入が確認される自然堆積である。

遺物は、土師器高杯、埴、鉢、台付甕、甕、壺、石器磨製石斧が出土している。その出土時の破片総数は、64点と少ない出土であるが甕・壺などが9割を占めている。また、供膳具は、高杯だけで杯は出土していない。出土状態は、3の高杯、6の甕が貯蔵穴脇の床面、1の高杯、7の台付甕が炉脇の床面、2の高杯、8の甕が住居中ほどの床面からである。



第95図 137号住居平面・断面・炉図

2. 住居



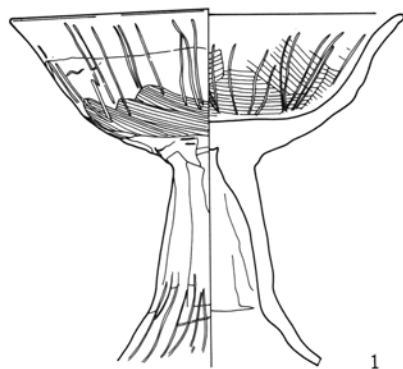
第96図 137号住居掘り方図

137号住居

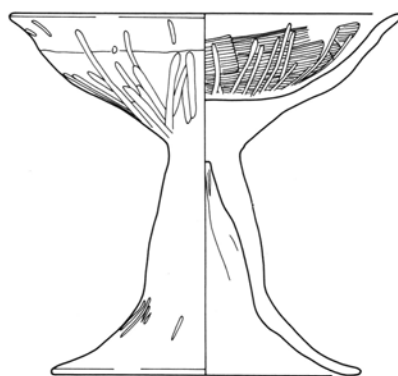
- 1. 黒褐色土 黄褐色砂ブロックとAs-Cを少量含む
- 2. 黒褐色土 1に類似、1よりAs-Cが少ない
- 3. 黒褐色土 1に類似、1・2よりAs-Cが少なく円礫を含む
- 4. 黒褐色土 1に類似、3よりAs-Cが少ない
- 5. 黒褐色土 1に類似、1よりAs-Cが多い
- 6. 灰黄褐色土 As-Cと円礫を僅かに含む
- 7. 黒褐色土 As-Cを少量含む
- 8. 暗褐色土 φ5~20mmの円礫とAs-Cを少し含む

貯蔵穴

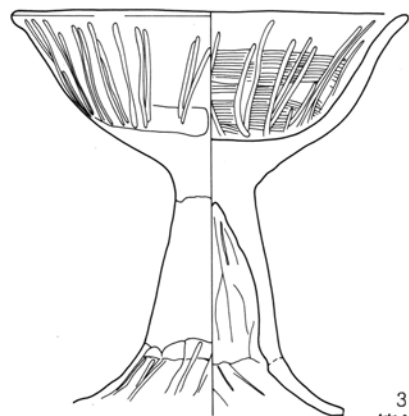
- 1. 黒褐色土 As-Cを少し含む



1



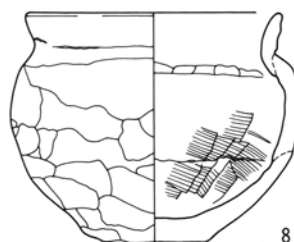
2



3



4



8

第97図 137号住居遺物図(1)

IV 五反田地区の遺構と遺物



第98図 137号住居遺物図(2)

138号住居

本住居跡は、調査区の中ほど、86区A～B-11～12グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、136号住居と南西角で重複する。新旧関係は、本住居の方が前出である。住居の形態は、東西方向に長い長方形を呈す。残存状態は、南西角の壁面の一部が136号住居カマドに壊されているが良好な状態である。

規模は、長軸4.08m、短軸3.40mで各辺の長さは北辺3.85m、東辺3.30m、南辺3.84m、西辺3.24mを測る。床面積は、11.74㎡である。主軸方位は、N-77°-Eを指す。壁高は、北壁18～24cm、東壁15～19cm、南壁18～23cm、西壁22～23cm、平均20cmである。内部施設は、確認されなかった。床面は、黄褐色砂質土を入れて踏み固めている。

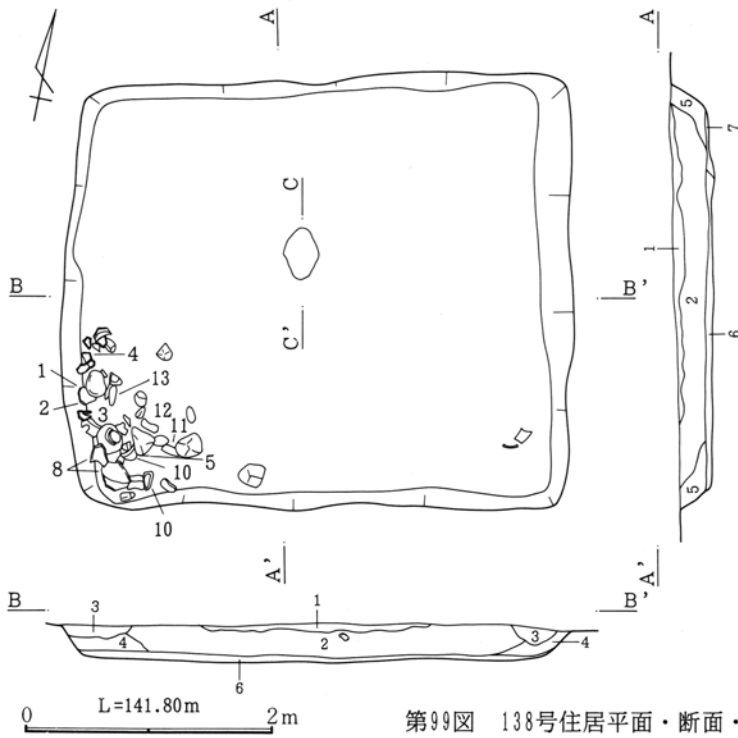
炉は、中央よりやや西側に位置する。形態は、楕円形を呈し、規模は径42×28cmである。

住居の掘り方は、床面より5～10cmほど掘り込まれており、北辺中ほどと南西隅で床下土坑を検出した。床下土坑1は、ほぼ円形を呈し、径65cm、深度13cm、床下土坑2は、楕円形を呈し、径65×45cm、深度8cmである。なお、床下土坑2は、床面で確認されなかったが、床面での遺物出土状態から貯蔵穴の可能性が考えられる。

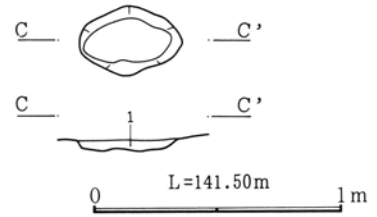
Hr-F A層下の埋没土の状態は、各辺からの土砂の流入が確認される自然堆積である。

遺物は、土師器杯、高杯、柑、甕、壺等が出土している。その出土時の破片総数は、97点と少ない出土であるが甕・壺などが9割を占めている。また、供膳具は、杯1点、高杯6点と僅かで小破片である。出土状態は、図示した1～8までが南西隅からまともって床面から出土している。

2. 住居



第99図 138号住居平面・断面・炉図

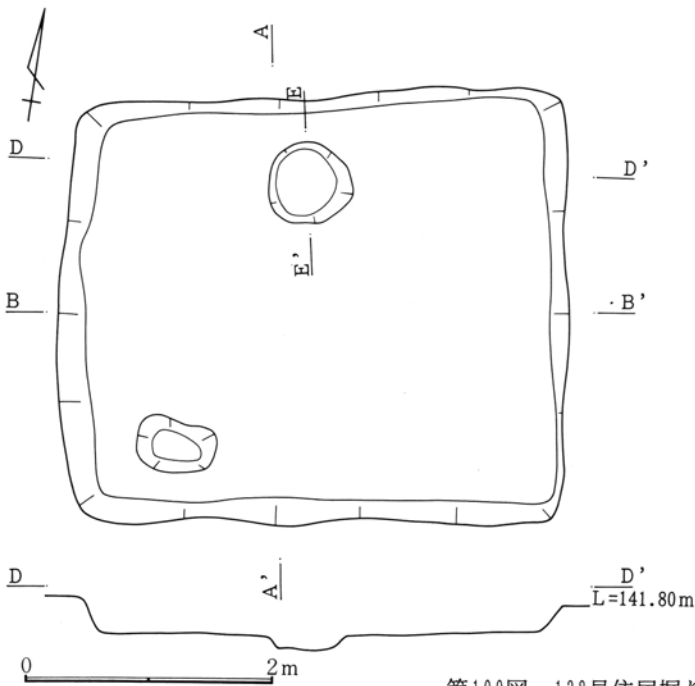


炉

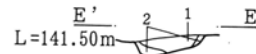
1. 暗灰黄褐色土 灰黄褐色土の焼土化

138号住居

1. 黒褐色土 炭化物を多くとAs-Cを少し含む
2. にぶい黄褐色土 As-Cとφ1~10cmの円礫を若干含む
3. 暗褐色土 As-Cを少量含む
4. 暗褐色土 As-Cを僅かに含む
5. にぶい黄褐色土 砂質土、As-Cを若干含む
6. にぶい黄褐色土 4に類似、4よりAs-Cを多く含む
7. 黄褐色土 砂質土、As-Cを多少含む

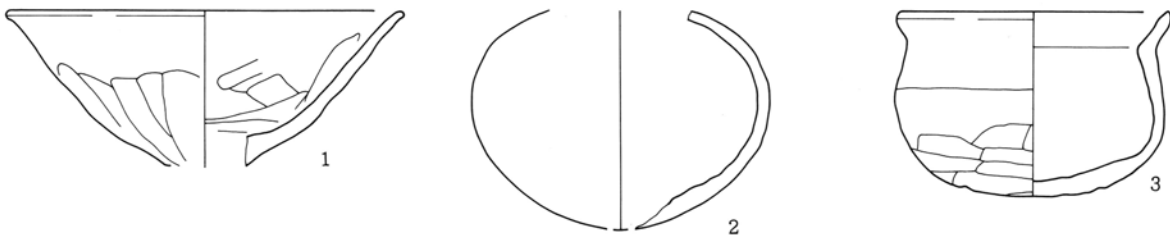


第100図 138号住居掘り方図



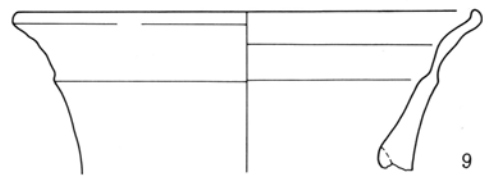
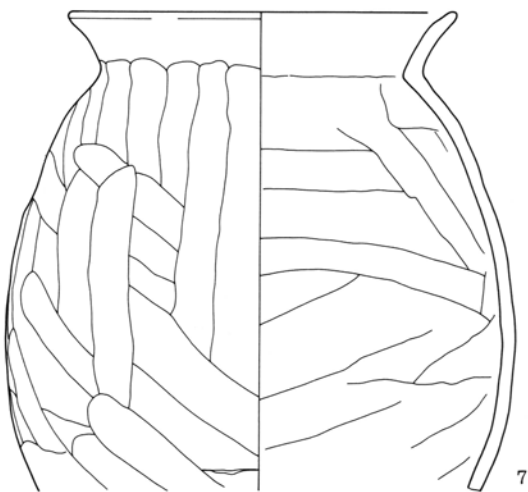
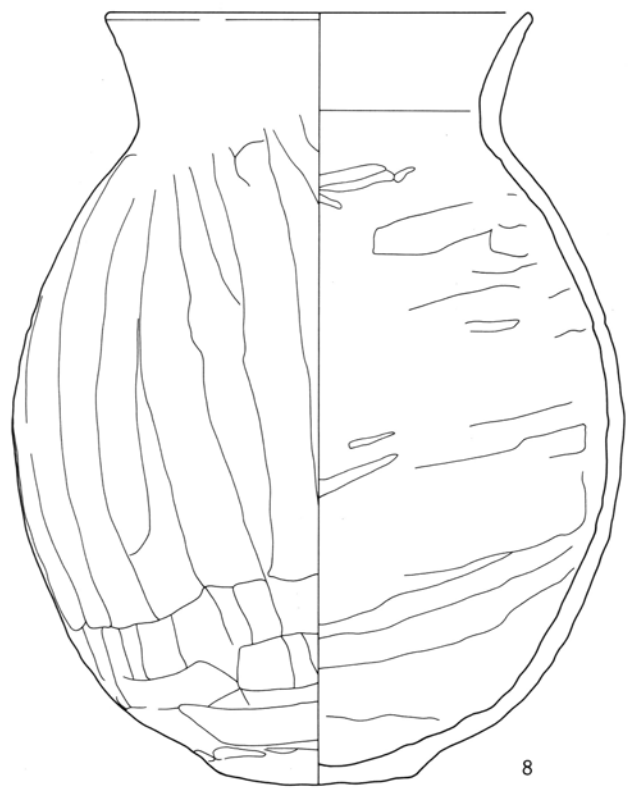
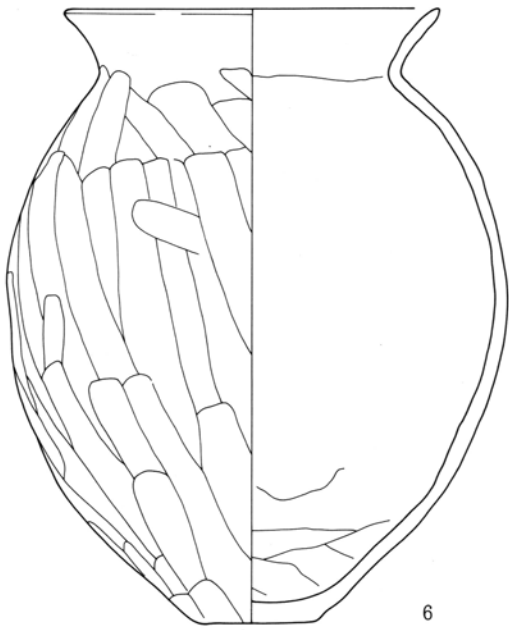
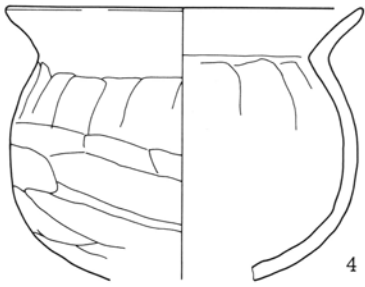
貯蔵穴

1. 黄褐色土 砂質土、灰色砂ブロックとAs-Cを若干含む
2. 黄褐色土 1に類似、黒褐色土ブロックを含む



第101図 138号住居遺物図(1)

IV 五反田地区の遺構と遺物



第102図 138号住居遺物図(2)

3. 竪穴遺構

1号竪穴遺構

本遺構は、調査区の中ほど86区A・B-10グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、10号平地建物と南辺で接するが、新旧関係は明らかではない。住居形態は、東西に長い長方形を呈す。残存状態は、確認面から25cm程度であるが割合と良好である。

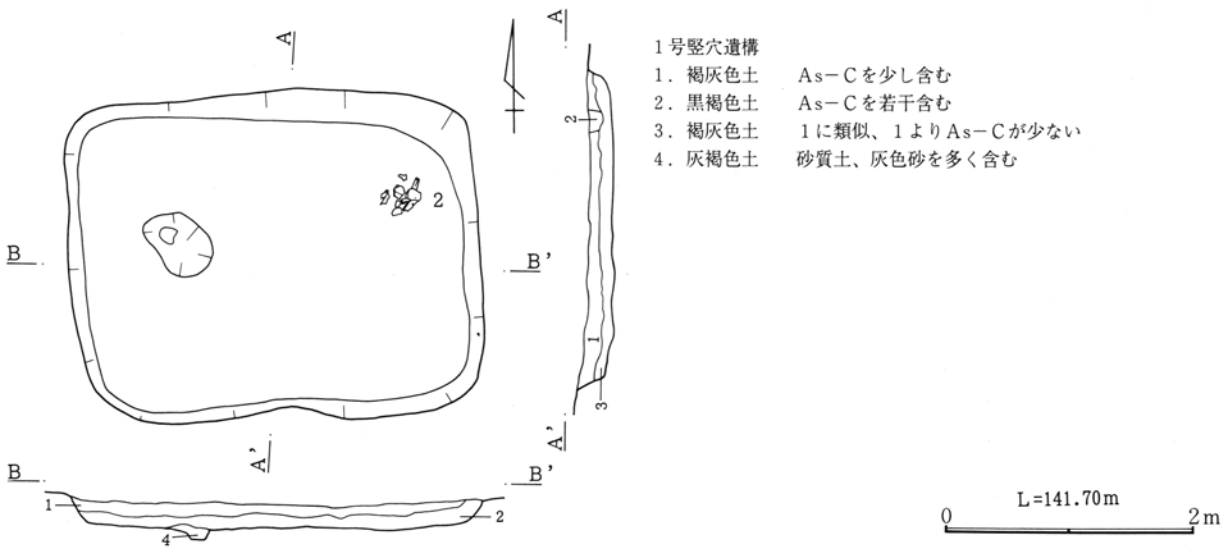
規模は、長軸3.27m、短軸2.59mで各辺の長さは北辺3.00m、東辺2.50m、南辺3.15m、西辺2.30mを測る。底部の面積は、6.5㎡である。長軸方向は、N-87°-Eを指す。壁高は、北壁18~29cm、東壁21~25cm、南壁26~28cm、西壁19~23cm、平均23cmである。内部施設は、中央やや東側に土坑状の落ち込みを検出した。この落ち込みは、楕円形を呈し、

規模が径60×44cm、深度15cmである。なお、この落ち込みは、位置・規模から柱穴的な要素が見られる。底面は、平坦であるが踏み固めたような硬化面は存在しない。

埋没土の状態は、各辺からの土砂の流入が確認される自然堆積である。

遺物は、土師器甕、甑が出土している。出土位置は、南西隅の底面からである。

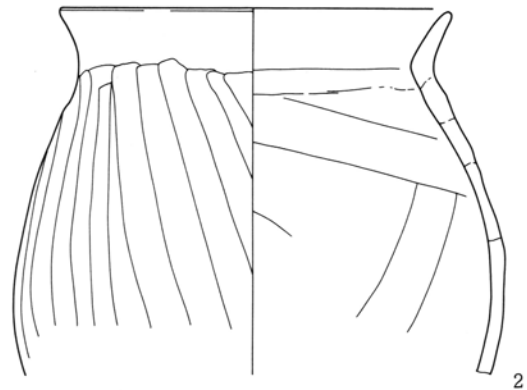
なお、本遺構は、形態や底面の状態から住居の可能性も考えられるが、規模が小規模であることや炉またはカマドなどの煮炊き施設が存在しないことから竪穴遺構とした。



第103図 1号竪穴遺構平面・断面図



第104図 1号竪穴遺構遺物図



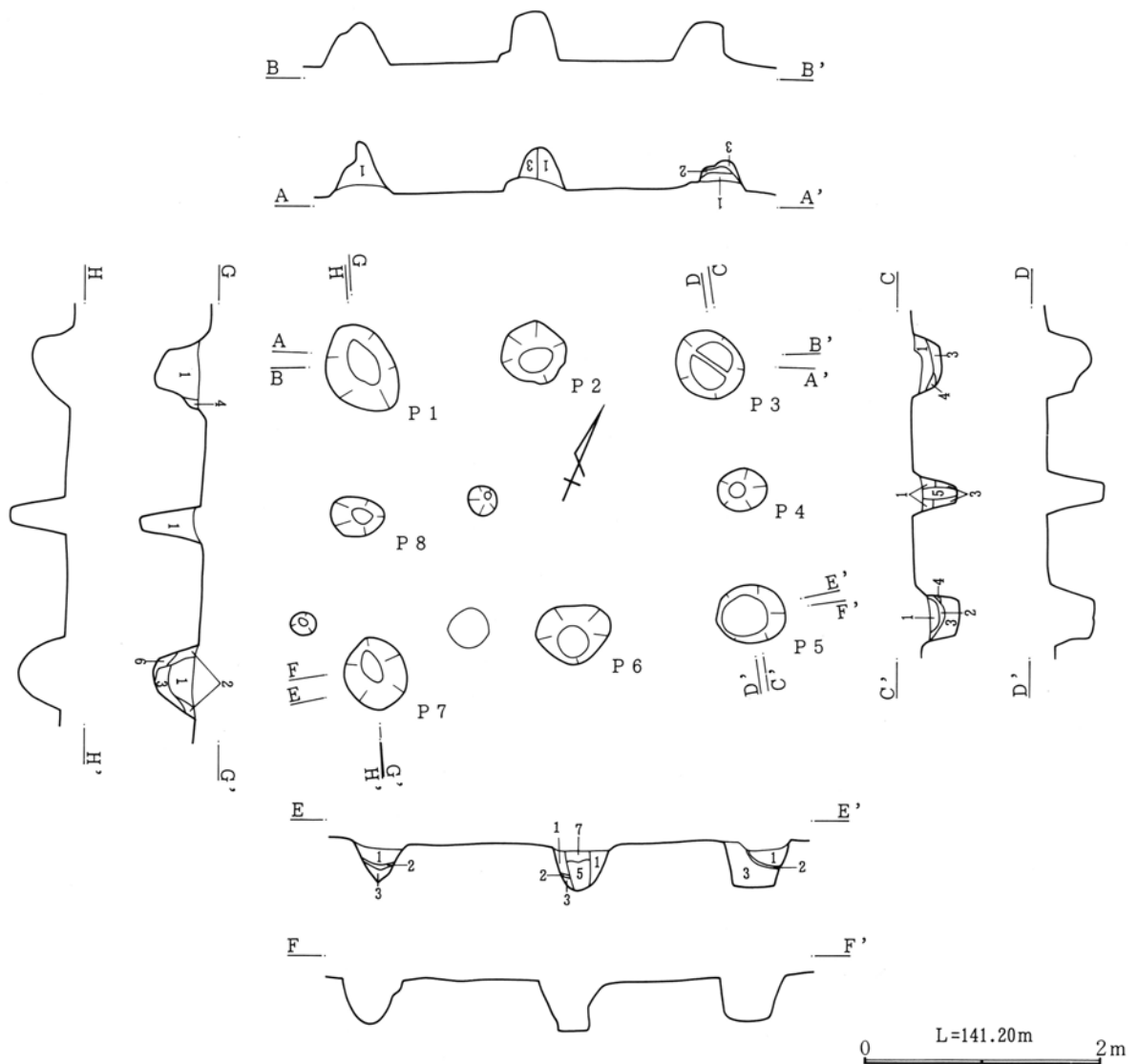
4. 掘立柱建物

4号掘立柱建物

本遺構は、調査区の東南部、85区S・T-8グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、確認されなかったが、129号住居、5号掘立柱建物、1号・2号平地建物と接する位置に存在する。形態は、東桁がやや短い長方形を呈す。規模は、梁行2間(3.08m)×桁行2間(2.36m)で北辺2.99m、東辺2.10m、南

辺3.10m、西辺2.36mを測る。柱間内部の面積は、6.86 m^2 である。長軸方向は、N-60°-Eを指す。

柱痕は、平面では検出できなかったが、P4とP6の断面での観察では柱径は10~15cm程度であったと想定される。



4号掘立柱建物

- | | | | |
|---------|-------------------|---------|------|
| 1. 黒褐色土 | 柱抜き取痕跡、黒色土を帯状に含む | 5. 黒色土 | 柱痕跡 |
| 2. 黒褐色土 | 砂質土、黄褐色土ブロックを少し含む | 6. 黄褐色土 | 砂質土 |
| 3. 暗灰色土 | 砂質土 | 7. 黒褐色土 | 1に類似 |
| 4. 黄褐色土 | 砂質土 | | |

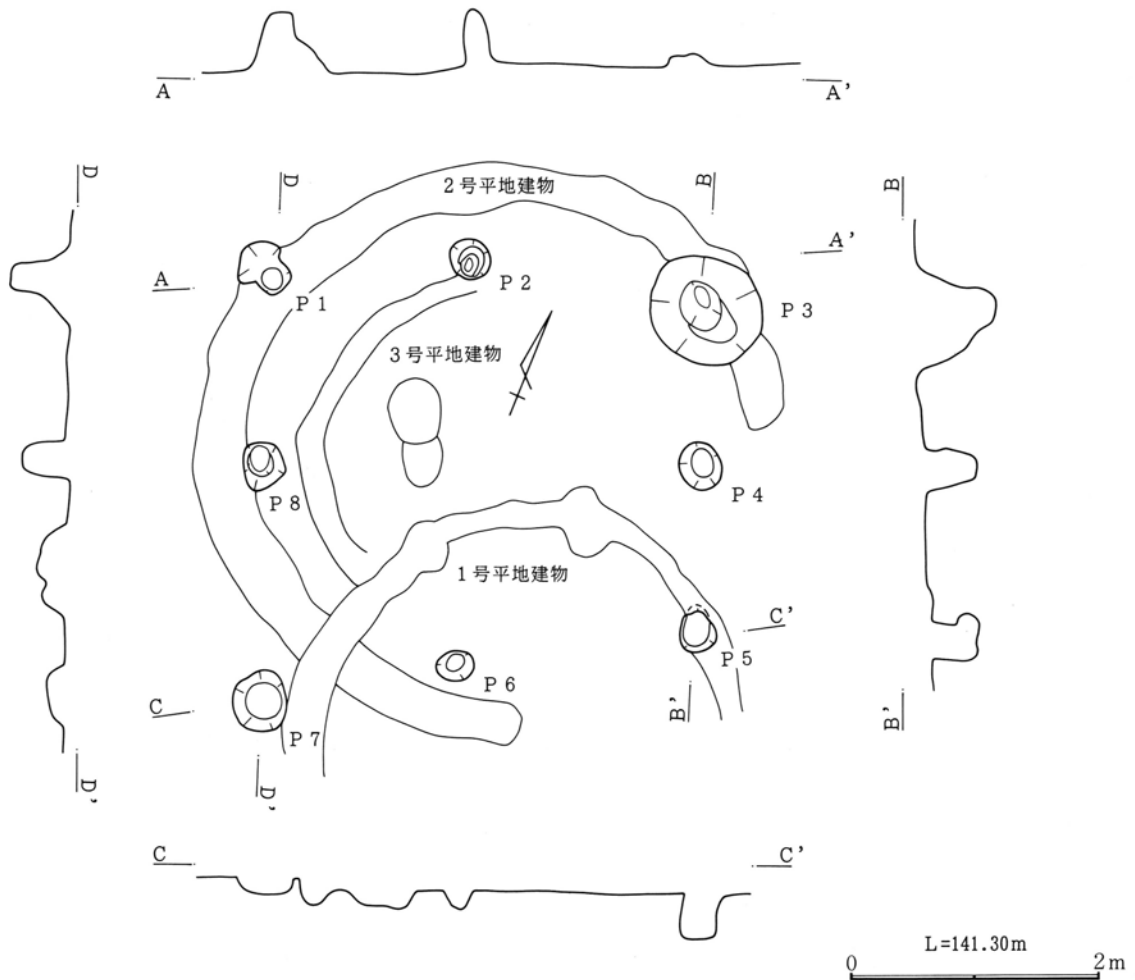
第105図 4号掘立柱建物平面・断面図

5号掘立柱建物

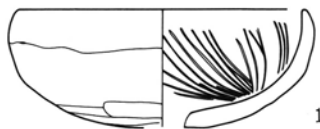
本遺構は、調査区の東南部、85区T-7・8グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、1号・2号・3号平地建物と重複するが、新旧関係については明確ではない。形態は、東桁がやや短い長方形を呈す。規模は、梁行2間(3.48m)×桁行2間(3.28m)で北辺3.40m、東辺2.62m、南辺3.50m、西辺3.28mを

測る。柱間内部の面積は、10.52m²である。長軸方向は、N-22°-Eを指す。

柱痕は、平面では検出できなかったが、P2の底面の観察では柱圧痕と想定される痕跡が残存しておりその径から柱径は10cm程度であったと想定される。



第106図 5号掘立柱建物平面・断面図



第107図 5号掘立柱建物遺物図

4号・5号掘立柱建物柱穴規模(単位:cm)

PNo.	長径	短径	深度	PNo.	長径	短径	深度
1	78	56	36	1	44	24	48
2	53	52	41	2	25	21	43
3	60	54	36	3	91	84	65
4	40	36	44	4	39	33	42
5	56	50	36	5	33	28	38
6	64	48	42	6	30	25	14
7	61	52	37	7	48	44	14
8	44	33	54	8	40	36	40

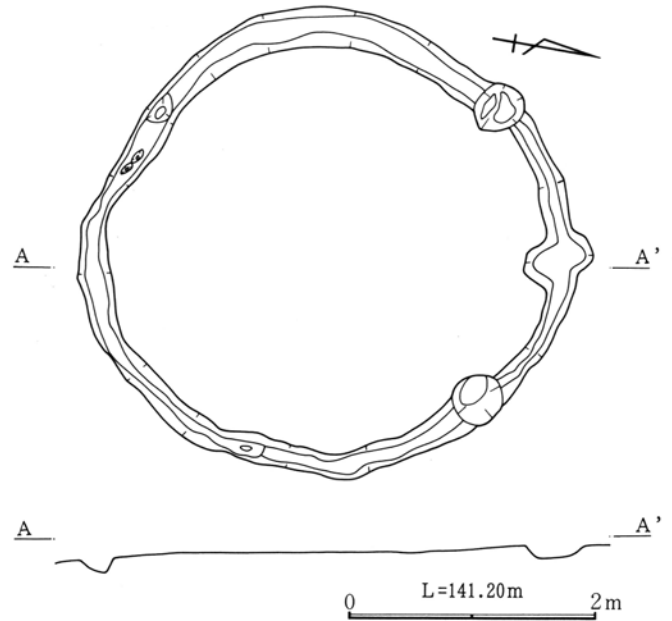
5. 平地建物

1号平地建物

本遺構は、調査区の東南部、85区T-7・8グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、5号掘立柱建物、2号・3号平地建物と重複する。新旧関係は、5号掘立柱建物との関係は不明であるが、2号・3号平地建物よりは後出である。形態は、溝が全周する円形を呈す。規模は、長軸4.00m、短軸3.72mを測り、溝の内側面積は8.524㎡である。長軸方位は、N-14°-Wを指す。

溝の幅は、16~32cm、深度は5~23cmである。溝の底面状態は、ほぼ平坦であるが北西部にピット状の落ち込みを2カ所検出した。ピットの規模は、径55×40cm、深度30cmと径42×35cm、深度6cmである。また、南側に小規模な窪みが2~3カ所見られる。内部施設は、確認されなかった。

遺物は、土師器甕の小破片が若干出土しているだけである。



第108図 1号平地建物平面・断面図

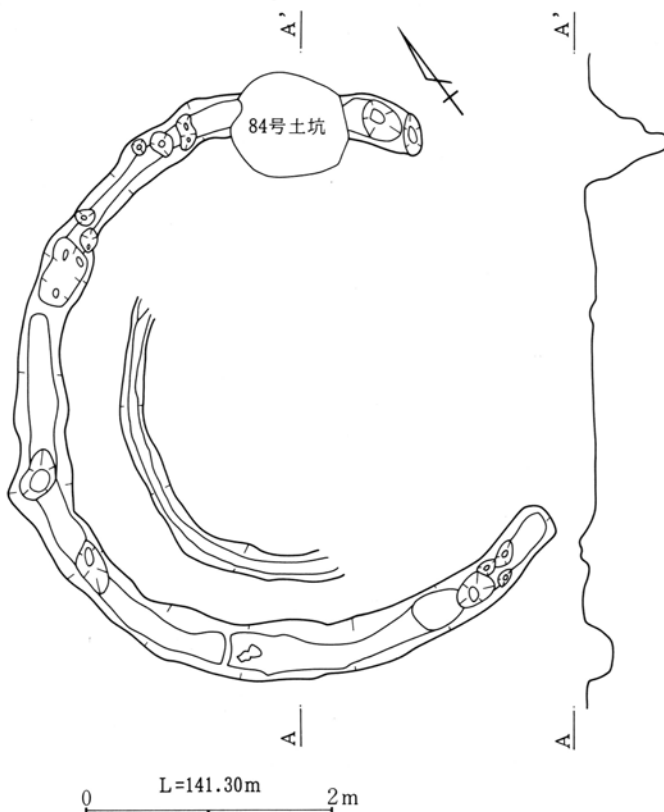
2号平地建物・3号平地建物

本遺構は、調査区の東南部、85区T-7・8、86区A-7・8グリッドに位置する。2号平地建物と3号平地建物の溝は、3号平地建物が2号平地建物の内側にほぼ並行して存在することから2条の溝で1棟の平地建物を構築するか3号平地建物から2号平地建物への拡張が想定される。他遺構との重複関係は、5号掘立柱建物、84号土坑と重複する。新旧関係は、5号掘立柱建物との関係は不明であるが、1号平地建物、84号土坑よりは前出である。形態は、東南部が3分の1ほど開口する楕円形を呈す。規模は、長軸4.64m、短軸4.10mを測り、溝の内側面積は11.928㎡である。長軸方位は、N-27°-Eを指す。

溝の幅は、25~44cm、深度は平坦面部分が10~25cmである。溝の底面状態は、ほぼ平坦であるが所々にピット状の落ち込みを検出した。小ピットの規模は、径10~30cm、深度は15~49cmである。内部施設は、確認されなかった。

なお、3号平地建物の溝は、2号平地建物の溝の西側部分にそって内側0.5mで全長3mほど確認された。溝の規模は幅15~20cm、深度5cm前後である。溝の底面状態は、ほぼ平坦である。

遺物は、土師器杯、甕の小破片が若干出土しているだけである。



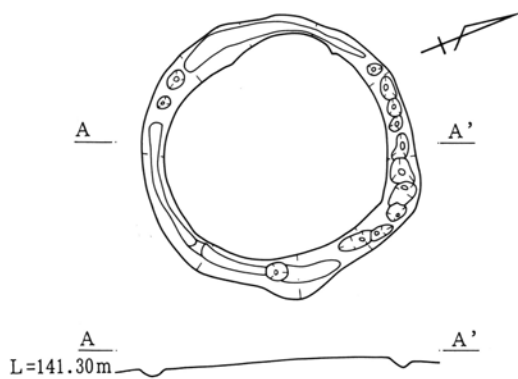
第109図 2号・3号平地建物平面・断面図

4号平地建物

本遺構は、調査区の東南部、86区A-7グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、88号土坑と重複する。新旧関係は、88号土坑よりは前出である。形態は、溝が全周する円形を呈す。規模は、長軸2.26m、短軸2.14mを測り、溝の内側面積は2.328 m^2 である。長軸方位は、N-42°-Eを指す。

溝の幅は、22~35cm、深度は平坦面部分が5cm前後である。溝の底面状態は、ほぼ平坦であるが北側部分に小ピット状の落ち込みを検出した。小ピットの規模は、径10~15cm、深度は8~10cmである。内部施設は、確認されなかった。

遺物は、土師器杯、甕の小破片が若干出土しているだけである。

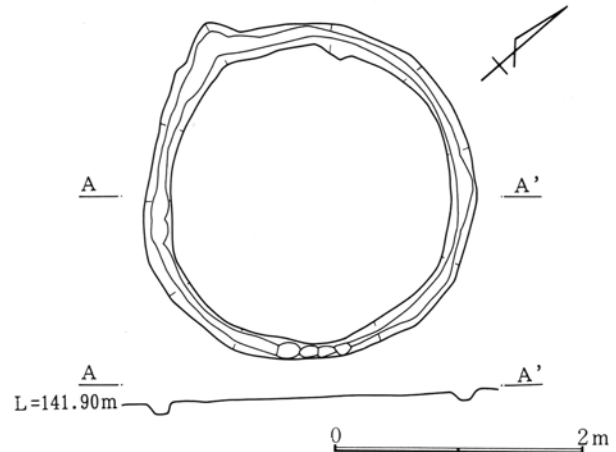


5号平地建物

本遺構は、調査区の東南部、86区B-9グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、確認されなかった。形態は、溝が全周する隅円方形を呈す。規模は、長軸・短軸とも2.64mを測り、溝の内側面積は4.164 m^2 である。長軸方位は、N-37°-Eを指す。

溝の幅は、16~20cm、深度は平坦面部分が7~10cmである。溝の底面状態は、ほぼ平坦であるが東南部分に小ピット状の落ち込みを検出した。小ピットの規模は、径20cm前後、深度は7~12cmである。内部施設は、確認されなかった。

遺物は、土師器杯、甕の小破片が若干出土しているだけである。



第110図 4号・5号平地建物平面・断面図

6号平地建物

本遺構は、調査区の東南部、86区B-C-8~9グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、確認されなかった。形態は、東南部分が残存していないため全貌が不明であるが、西南部分が開口する楕円形を呈すと推定される。規模は、長軸3.70m、短軸2.70+ α mを測り、溝の内側面積は6.676 m^2 である。長軸方位は、N-76°-Eを指す。

溝の幅は、18~27cm、深度は平坦面部分が8~14cmである。溝の底面状態は、ほぼ平坦であるが所々に小ピット状の落ち込みを検出した。小ピットの規模は、径10cm前後、深度は10cm前後である。内部施設は、確認されなかった。

遺物は、土師器杯、甕の小破片が若干出土してい

るだけである。

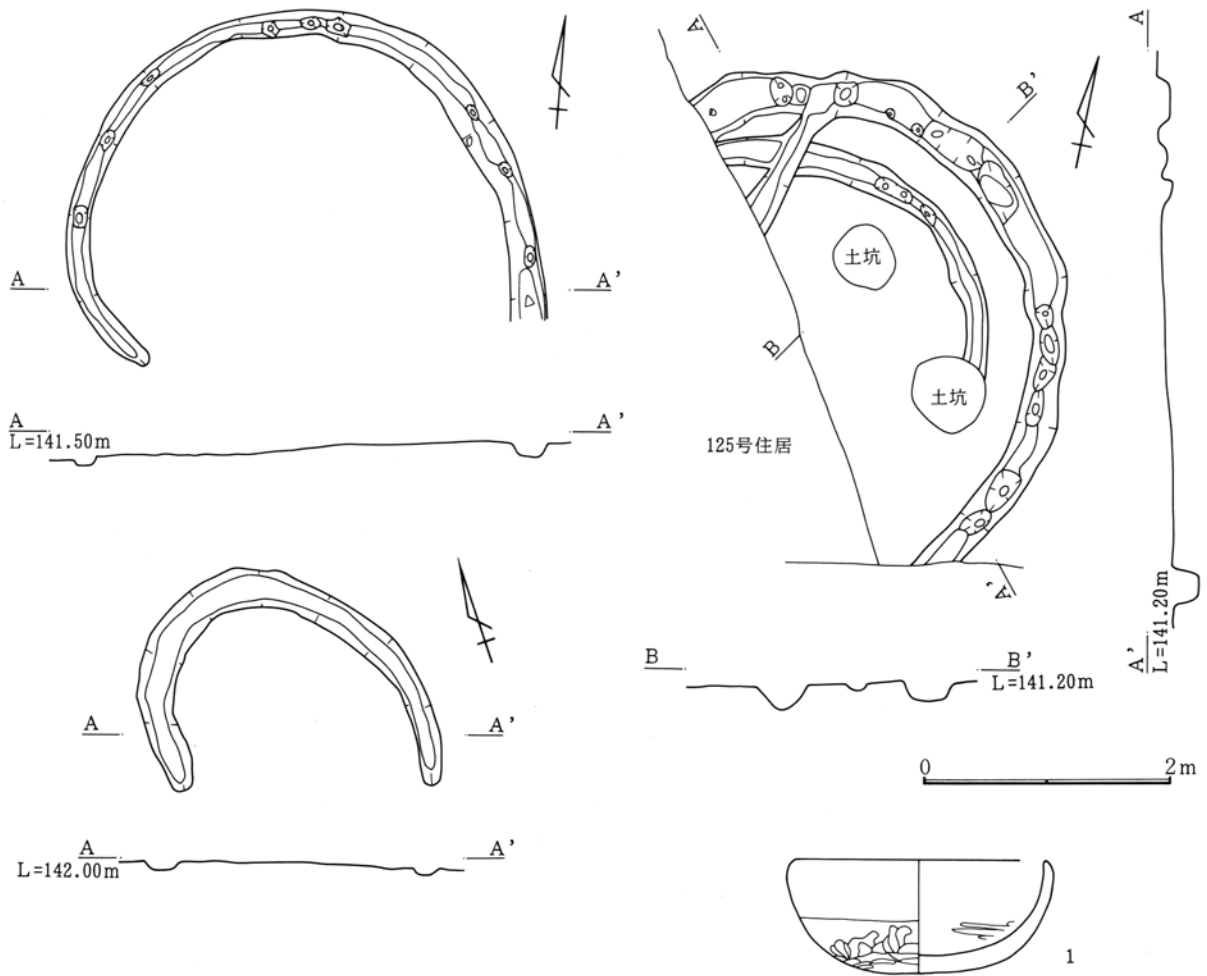
7号平地建物

本遺構は、調査区の東南部、86区B-12グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、確認されなかった。形態は、南側が開口する楕円形を呈すと推定される。規模は、長軸2.46m、短軸1.86mを測り、溝の内側面積は2.62 m^2 である。長軸方位は、N-56°-Eを指す。

溝の幅は、22~32cm、深度は3~7cmである。溝の底面状態は、ほぼ平坦である。内部施設は、確認されなかった。

遺物は、土師器杯、甕の小破片が若干出土しているだけである。

IV 五反田地区の遺構と遺物



第111図 6号・7号・8号・9号平地建物平面・断面・遺物図

8号・9号平地建物

本遺構は、調査区の南部、86区A・B-6・7グリッドに位置する。8号平地建物と9号平地建物の溝は、2号・3号平地建物と同様に9号平地建物が8号平地建物の内側にほぼ並行して存在することから2条の溝で1棟の平地建物を構築するか9号平地建物から8号平地建物への拡張が想定される。他遺構との重複関係は、125号住居、89号・90号土坑と重複する。新旧関係は、90号土坑とは不明であるが125号住居・89号土坑より本遺構の方が前出である。残存状態は、西側半分が125号住居堅穴部分により壊されているため全貌は不明である。

8号平地建物は、形態が円形を呈すと推定される。規模は、径約4.50mを測り、溝の内側面積は推定

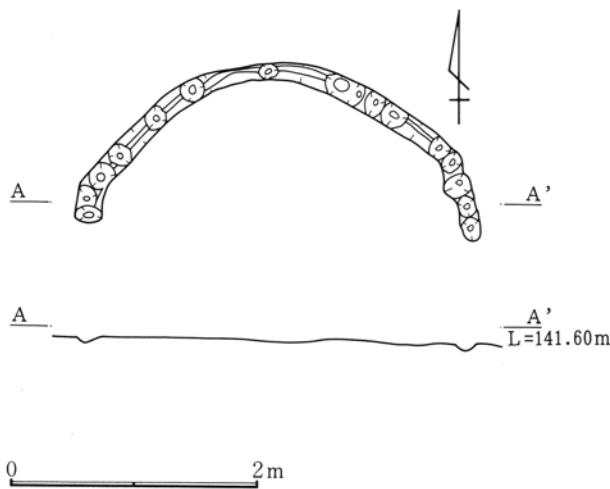
5.268 m^2 である。長軸方位は、不明である。

溝の幅は、28~40cm、深度は10~20cmである。溝の底面状態は、平坦と小規模な窪みが混在している。内部施設は、確認されなかった。

9号平地建物は、形態が東南部が開口する円形を呈すと推定される。規模は、径約3.20mを測り、溝の内側面積は推定2.748 m^2 である。

溝の幅は、17~24cm、深度は5~10cmである。溝の底面状態は、ほぼ平坦であるが、部分的に小規模な窪みが存在する。内部施設は、確認されなかった。

8号・9号平地建物から出土した遺物は、第111図-1の土師器杯の他は若干の土師器杯、甕の小破片だけである。



第112図 10号・11号平地建物平面・断面図

10号平地建物

本遺構は、調査区の中ほど86区A・B-10グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、確認されなかった。残存状態は、北側5分の2ほどしか残存していないため全貌は不明である。形態は、円形を呈すと推定される。規模は、径約3.5mほどと推測される。溝の内側面積は推定2.568 m^2 である。

溝の幅は、15~17cm、深度は3~10cmである。溝の底面状態は、小規模のピット状の落ち込みが多数存在する。内部施設は、確認されなかった。

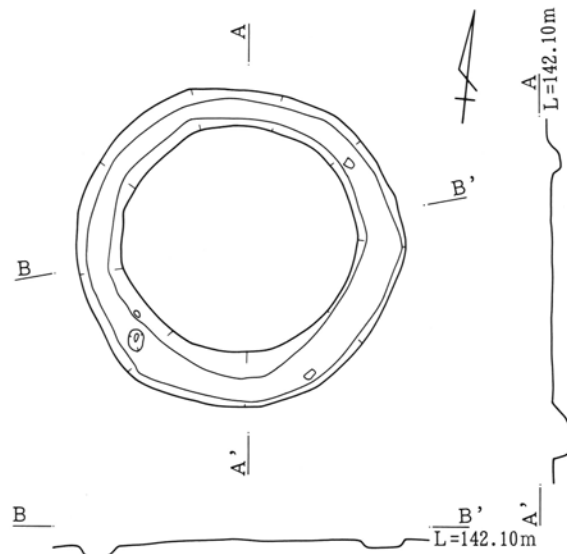
遺物は、土師器杯、甕の小破片が若干出土しているだけである。

11号平地建物

本遺構は、調査区の中ほど86区D・E-12グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、確認されなかった。形態は、周溝が全周する円形を呈す。規模は、長軸2.62m、短軸2.48mを測る。溝の内側面積は2.604 m^2 である。長軸方位は、N-6°-Wを指す。

溝の幅は、33~48cm、深度は11~16cmである。溝の底面状態は、平坦であるが、東南部に径17×12cm、深度17cmの小規模のピット状の落ち込みが1基存在する。内部施設は、確認されなかった。

遺物は、土師器杯、甕の小破片が若干出土しているだけである。



12号平地建物

本遺構は、調査区の西北部、86区I-13グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、確認されなかった。形態は、周溝の西側が開口する隅円長方形を呈す。規模は、長軸2.08m、短軸1.87mを測る。溝の内側面積は2.064 m^2 である。長軸方位は、N-17°-Wを指す。

溝の幅は、17~30cm、深度は7~16cmである。溝の底面状態は、多少の凹凸はあるがほぼ平坦である。内部施設は、確認されなかった。

遺物は、土師器杯、甕の小破片が若干出土しているだけである。

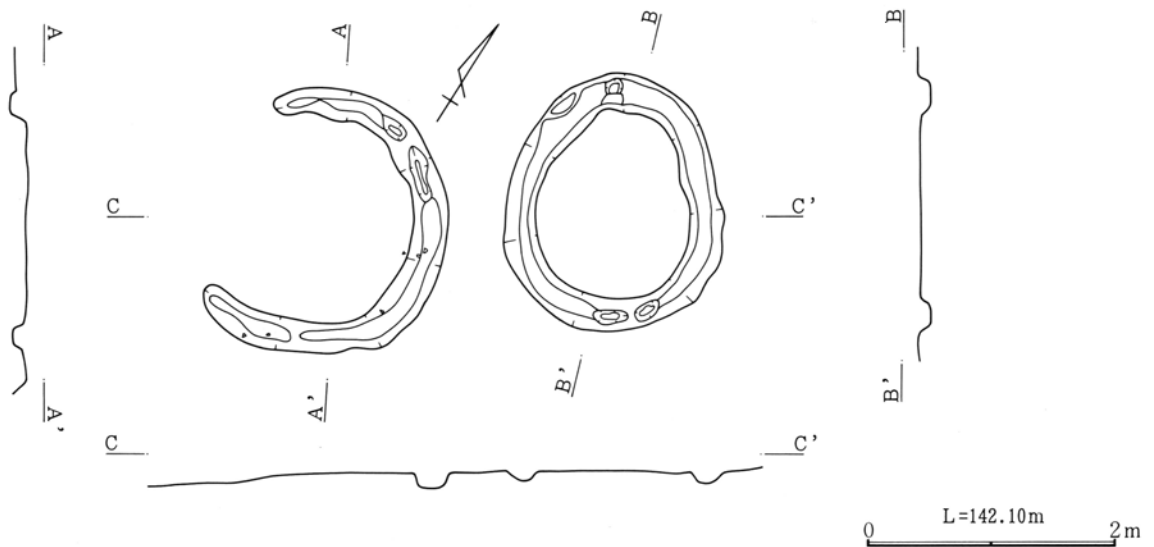
13号平地建物

本遺構は、調査区の西北部、86区H-13・14グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、確認されなかった。形態は、周溝が全周する楕円形を呈す。規模は、長軸2.04m、短軸1.74mを測る。溝の内側面積は1.448 m^2 である。長軸方位は、N-35°-Wを指す。

溝の幅は、23~30cm、深度は10~14cmである。溝の底面状態は、ほぼ平坦であるが南側と北側に小規模のピット状の落ち込みが各2カ所ずつ確認した。内部施設は、確認されなかった。

遺物は、土師器杯、甕の小破片が若干出土しているだけである。

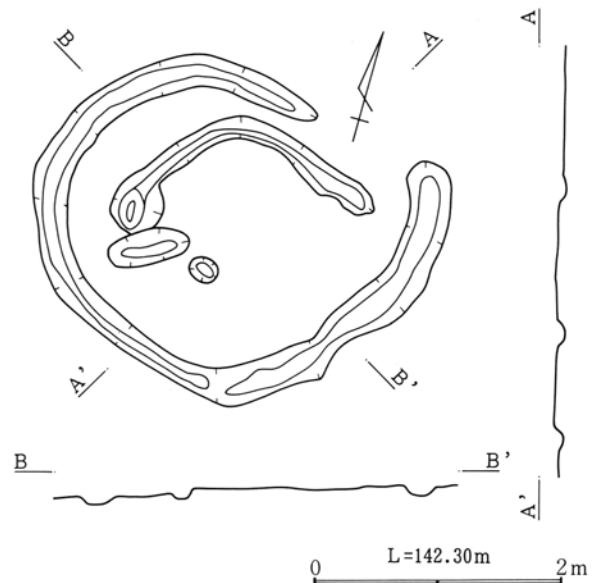
IV 五反田地区の遺構と遺物



第113図 12号・13号平地建物平面・断面図

14号平地建物

本遺構は、調査区の北西部、85区 I-15・16グリッドに位置する。14号平地建物の溝は、2条の溝を検出したことから2号・3号平地建物や9号・8号平地建物と同様に2条の溝で1棟の平地建物を構築するか内側の溝から外側の溝への拡張が想定されるが、14号平地建物では、溝の配置状況からして2条の溝で平地建物を構築したほうの可能性が高い。他遺構との重複関係は、確認されなかった。形態は、内部北西部分にL字状の内溝を持ち北側の東半分が開口し西辺に丸みをもつ隅円長方形を呈する。規模は、長軸2.86m、短軸2.77mを測る。外溝内面の面積は、4.292m²、内溝内側の面積は2.74m²である。長軸方向の方位は、N-55°-Wを指す。



第114図 14号平地建物平面・断面図

溝の幅は、外溝が18~37cm、深度は4~13cmである。溝の底面は、ほぼ平坦である。内溝は、幅17~22cm、深度3~7cmである。溝の底面は、ほぼ平坦である。内部施設は、内溝の南端(P1)とその東側(P2)と内部ほぼ中央(P3)にピットを検出した。P1は、円形で径50×41cm、深度13cm、P2は、楕円形で径64×37cm、深度8cm、P3は、円形で径22×20cm、深度7cmである。

遺物は、土師器杯、甕の小破片が若干出土しているだけである。

6. 土坑

83号土坑

本土坑は、調査区の中央やや東寄りの86区A-12グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、確認されない。遺構の確認面は、Hr-F A層上面である。形態は、楕円形を呈し、規模は径134×115cm、深度32cmを測る。埋没状況は、底面と壁面に黒色土が若干堆積した後に泥流で埋没している。土坑内部からの遺物は、出土しなかった。

84号土坑

本土坑は、調査区の東南部、85区T-8グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、確認されない。遺構の確認面は、Hr-F A層上面である。形態は、円形を呈し、規模は径94cm、深度48cmを測る。埋没状況は、3分の2ほど褐色砂質土が堆積した後に泥流で埋没している。土坑内部からの遺物は、出土しなかった。

87号土坑

本土坑は、調査区の東南部、85区T-7グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、確認されない。遺構の確認面は、白色シルト層上面である。形態は、隅円方形を呈し、規模は径68×64cm、深度28cmを測る。埋没状況は、灰黄褐色砂質土で埋没している。土坑内部からの遺物は、出土しなかった。

88号土坑

本土坑は、調査区の南寄りの86区A-7グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、4号平地建物と重複するが、新旧関係は本土坑の方が前出である。遺構の確認面は、白色シルト層上面である。形態は、楕円形を呈し、規模は径88×84cm、深度30cmを測る。埋没状況は、黄褐色砂質土で大部分が埋没した上に下部に炭化物粒を含む明黄褐色粘土の厚さ5cmほどの薄い堆積を確認した。土坑内部からの遺物は、出土しなかった。

89号土坑

本土坑は、調査区の南寄りの86区A-6グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、125号住居周堤帯と8・9号平地建物と重複する。新旧関係は、125号住居より本土坑の方が前出であるが、8・9号平地建物よりは後出である。遺構の確認面は、白色シルト層上面である。形態は、楕円形を呈し、規模は径52×46cm、深度21cmを測る。埋没状況は、上半が黒褐色土、下半が灰褐色砂質土で埋没している。土坑内部からの遺物は、出土しなかった。

90号土坑

本土坑は、調査区の南寄りの86区A-6グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、125号住居周堤帯と8・9号平地建物と重複する。新旧関係は、125号住居より本土坑の方が前出であるが、8・9号平地建物との関係は明確でない。遺構の確認面は、白色シルト層上面である。形態は、楕円形を呈し、規模は径52×46cm、深度21cmを測る。埋没状況は、灰褐色砂質土で埋没している。土坑内部からの遺物は、出土しなかった。

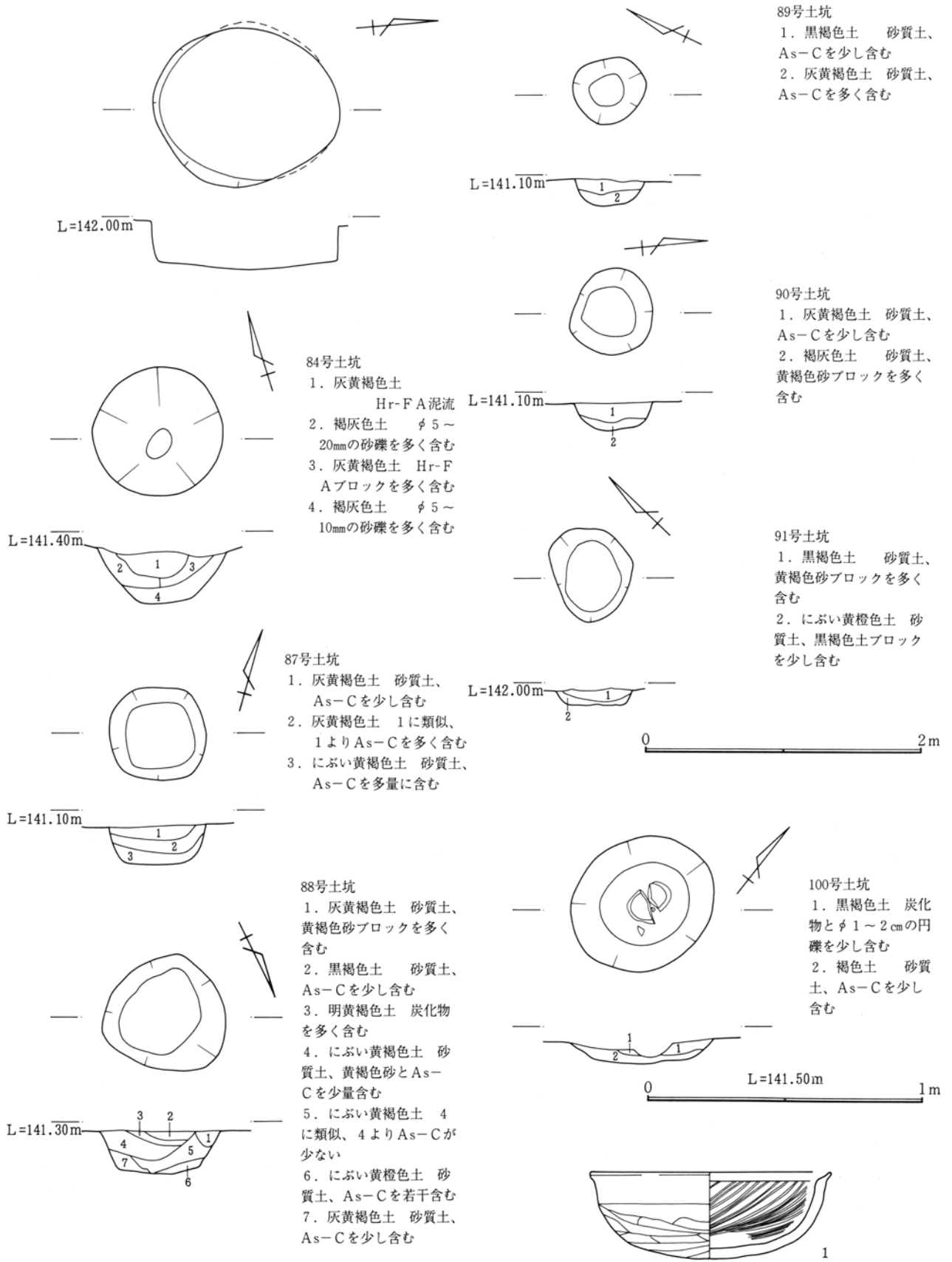
91号土坑

本土坑は、調査区の東北部、85区T-15グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、124号住居周堤帯と重複するが、新旧関係は124号住居より本土坑の方が前出である。遺構の確認面は、白色シルト層上面である。形態は、楕円形を呈し、規模は径67×55cm、深度11cmを測る。埋没状況は、灰褐色砂質土で埋没している。土坑内部からの遺物は、出土しなかった。

100号土坑

本土坑は、調査区の東北部、85区T-11グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、126号住居周堤帯と重複するが、新旧関係は126号住居より本土坑の方が前出である。遺構の確認面は、白色シルト層上面である。形態は、楕円形を呈し、規模は径54×46cm、深度9cmを測る。埋没状況は、黒褐色土で埋没している。土坑内部からは、底面中央より土師器杯(第115図)が出土している。

IV 五反田地区の遺構と遺物



第115図 土坑平面・断面図・遺物図

7. 土器集積

1号土器集積

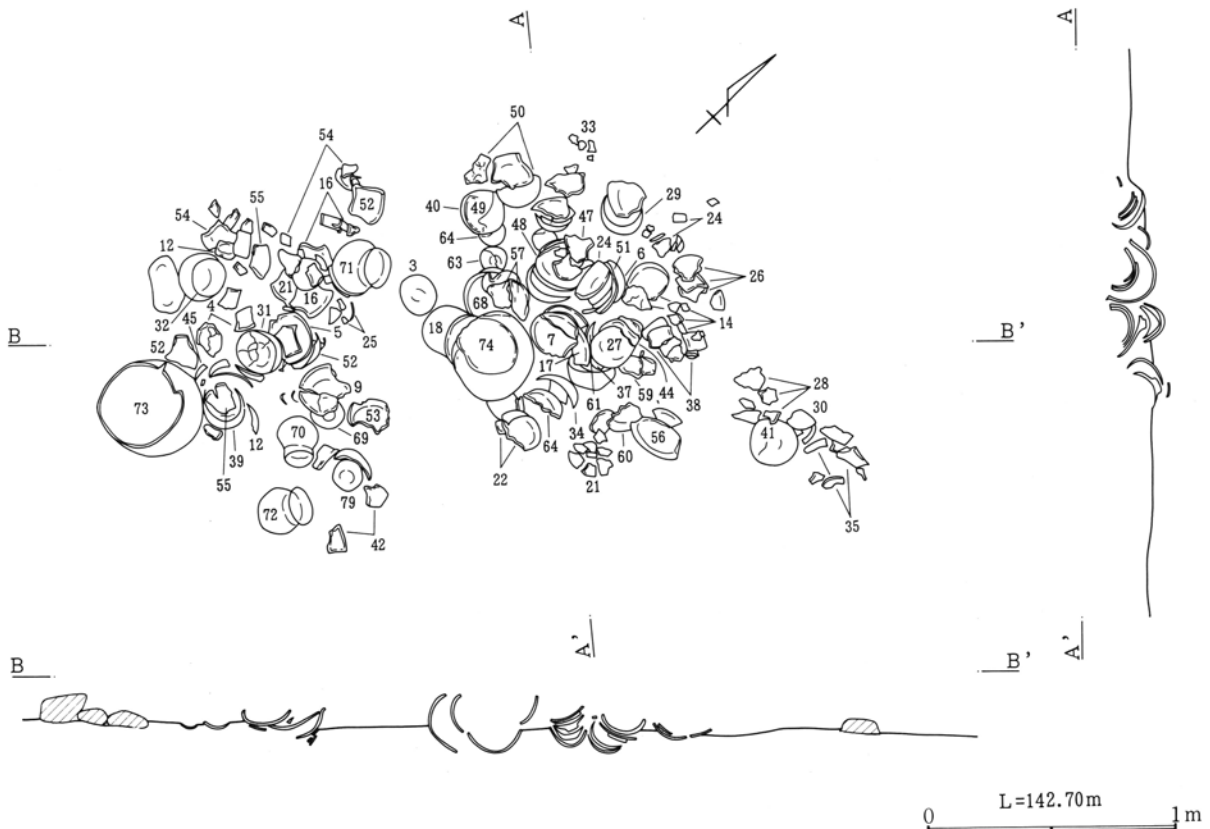
本遺構は、調査区の北側、C・D-16・17グリッドに位置する。遺構は、Hr-F A層下の1.8×1.1mの範囲に多量の土器を積み重ねて置いた状態で検出した。遺構の状態は、住居や畝として利用されていない平坦地で堅穴のような落ち込みや一般的な平地建物のような硬化面などは確認されなかった。

また、集積された土器の様相や土器内部に石製模造品白玉が埋納されている点などから今まで調査された同様な遺構と比較して規模は小規模であるが祭祀遺構と想定される。

集積された土器は、土師器杯、高杯、鉢、壺がある。また、土器の内部や周囲からは、石製模造品白玉が出土している。土器集積は、大別すると南北の二群に分けが可能である。北側の土器群(以後北群)は、74の大型壺、大型鉢、小型鉢、56・57高杯、内斜口縁杯、内湾口縁杯と64~67の鉢、74の壺内部

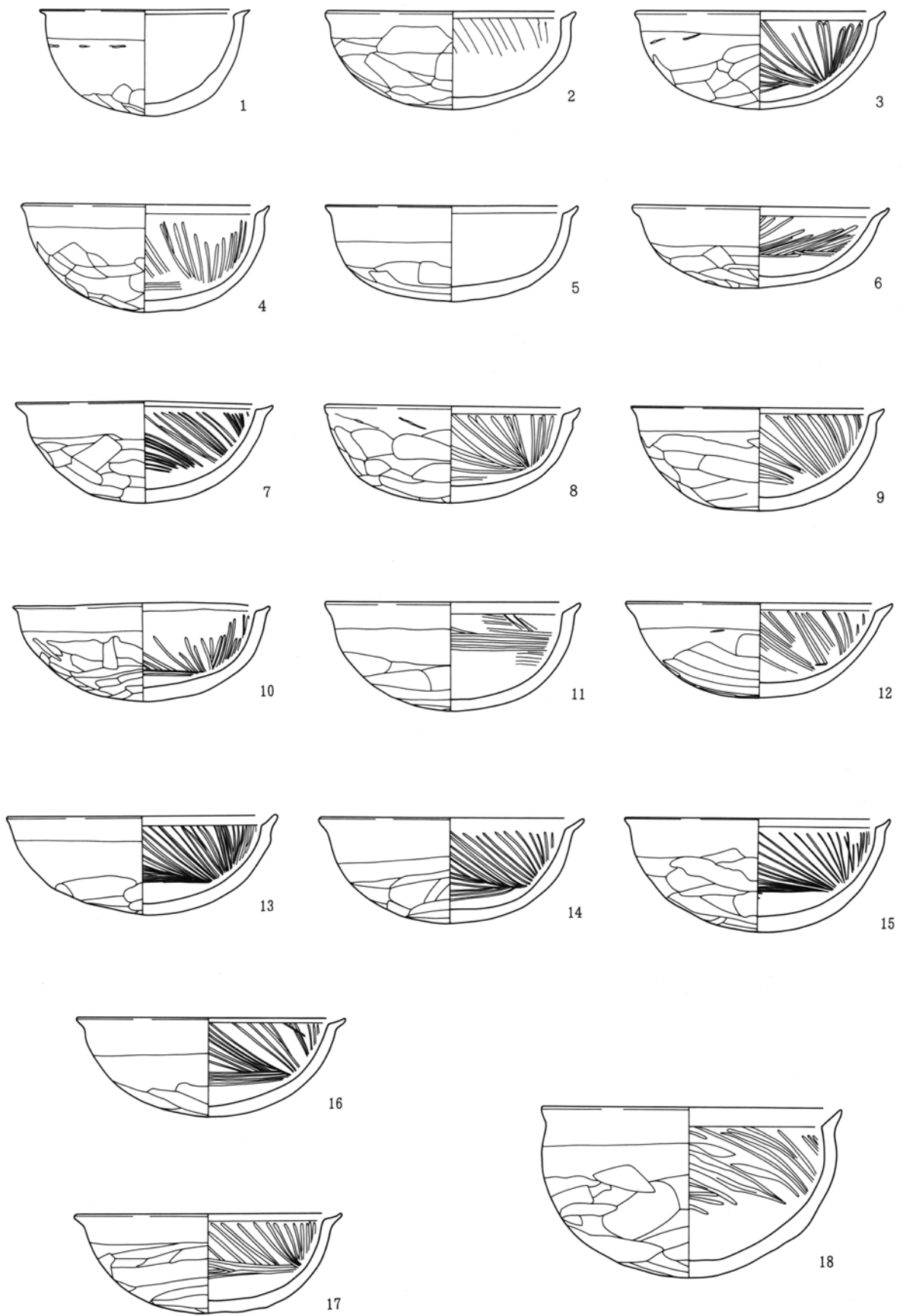
に石製模造品白玉が納められている。土器の配置は、ある程度の方角を意識して置かれているようで東南角に大型壺、そして南辺と東辺に鉢と高杯を配し、その内側に杯を数個積み重ねている。南側の土器群(以後南群)は、73の大型壺、小型壺、55の高杯、内斜口縁杯、内湾口縁杯、模倣杯と71の小型壺内部に石製模造品白玉、73の大型壺内部に滑石剥片が納められている。土器の配置は、土器量が少ないためか北群のような方角を形成していないが、南端に北群と同様に大型壺を配し、北側に小型壺を配し、その内部に杯・高杯を配している。

北群と南群の関係であるが、ともにHr-F Aで直接覆われており堆積状態からは新旧関係を見いだすことはできないが南群には模倣杯が置かれている点や土器量の違いに北群の祭祀が行われた後に南群の祭祀が開始されたと考えられる。

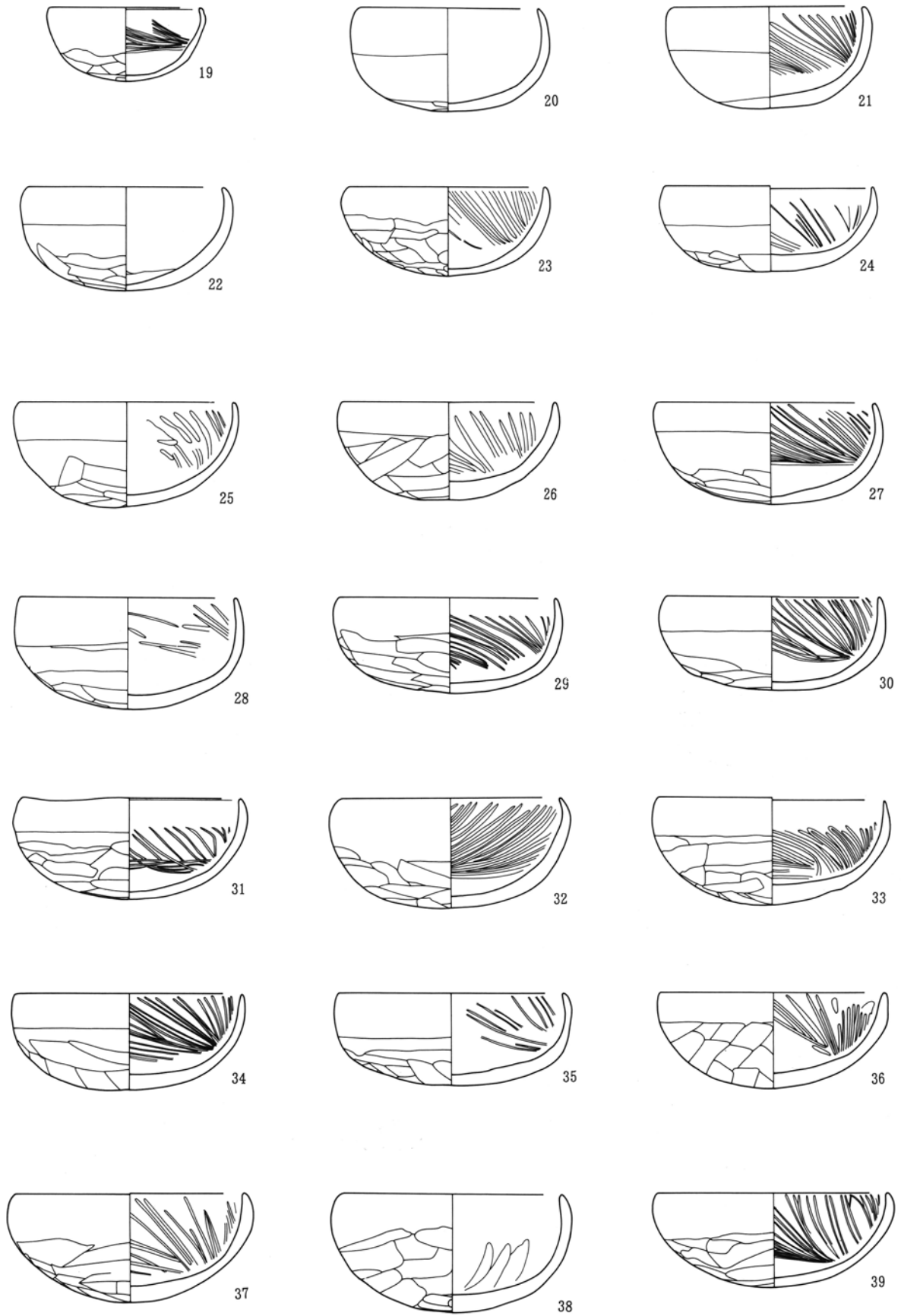


第116図 1号土器集積平面・断面図

IV 五反田地区の遺構と遺物

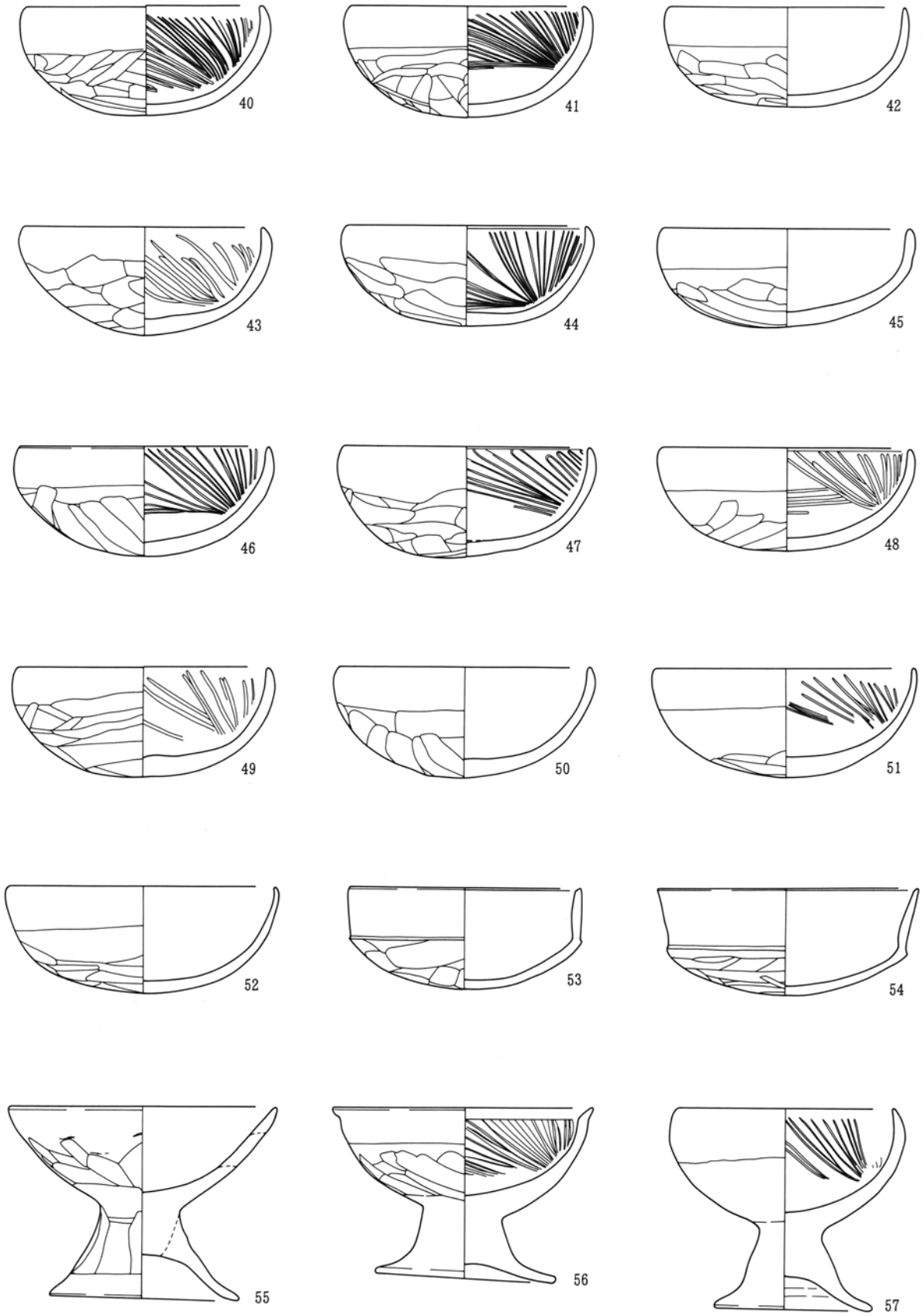


第117図 1号土器集積遺物図(1)

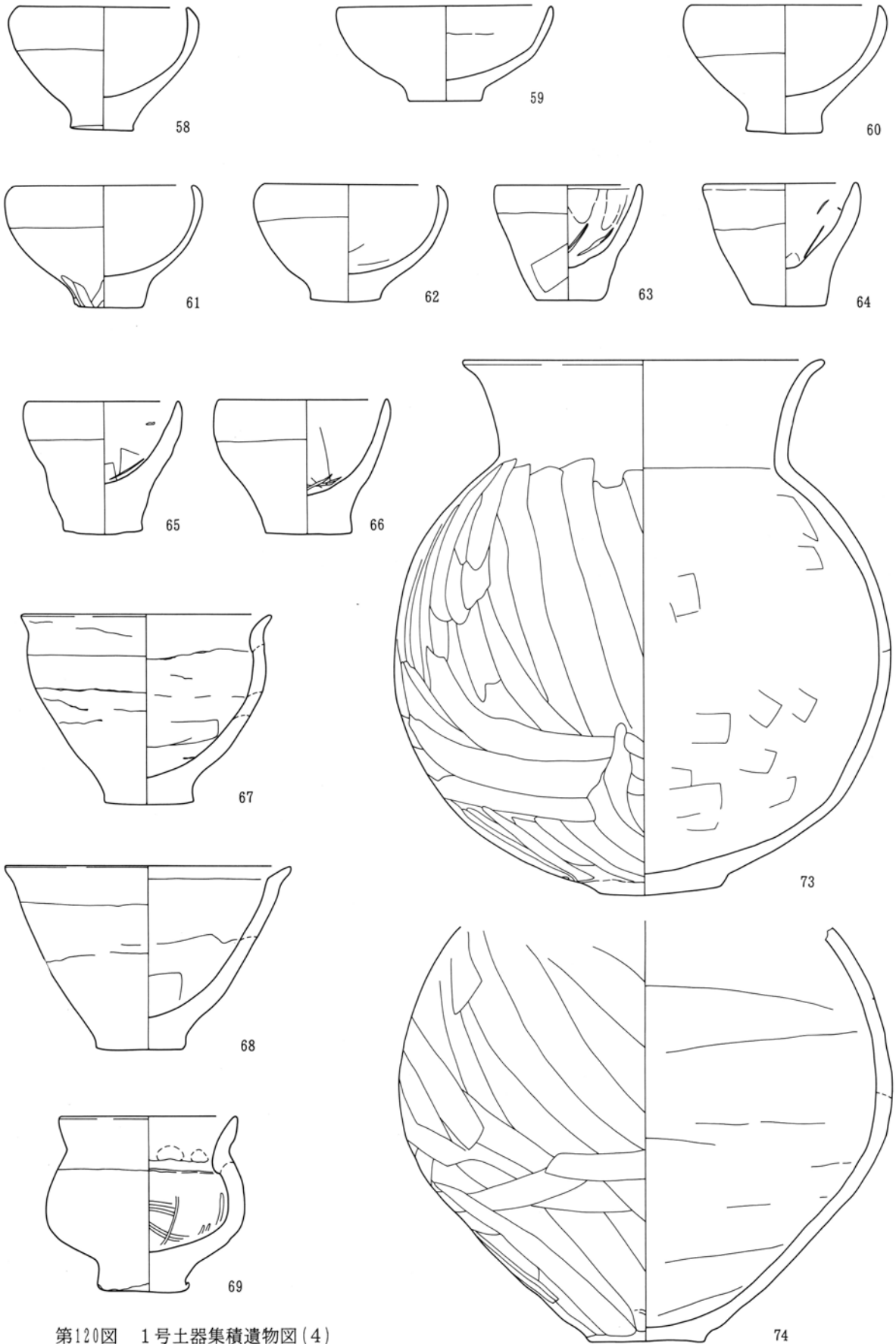


第118图 1号土器集積遺物图(2)

IV 五反田地区の遺構と遺物

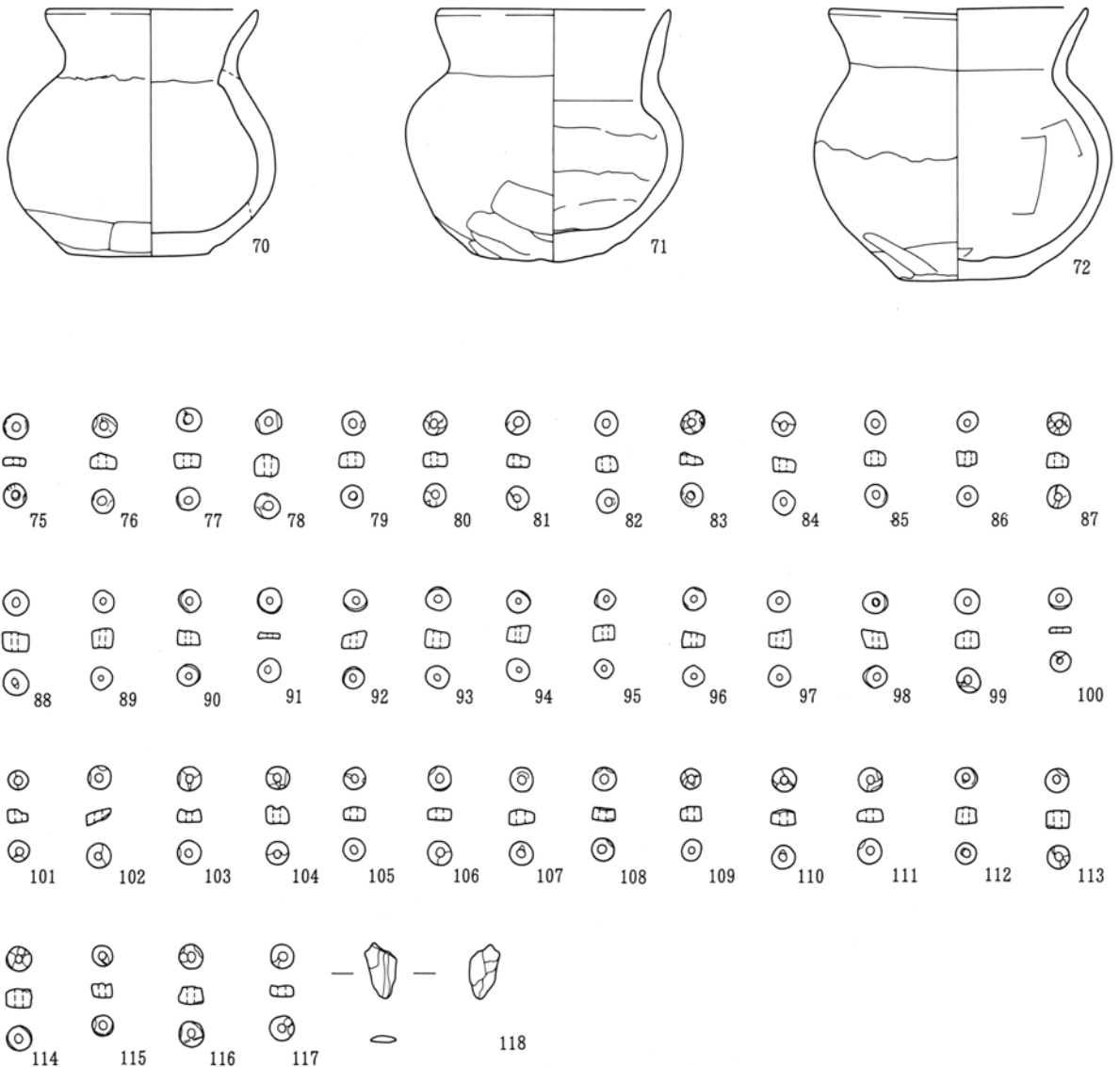


第119図 1号土器集積遺物図(3)



第120图 1号土器集積遺物图(4)

IV 五反田地区の遺構と遺物



第121図 1号土器集積遺物図(5)

2号土器集積

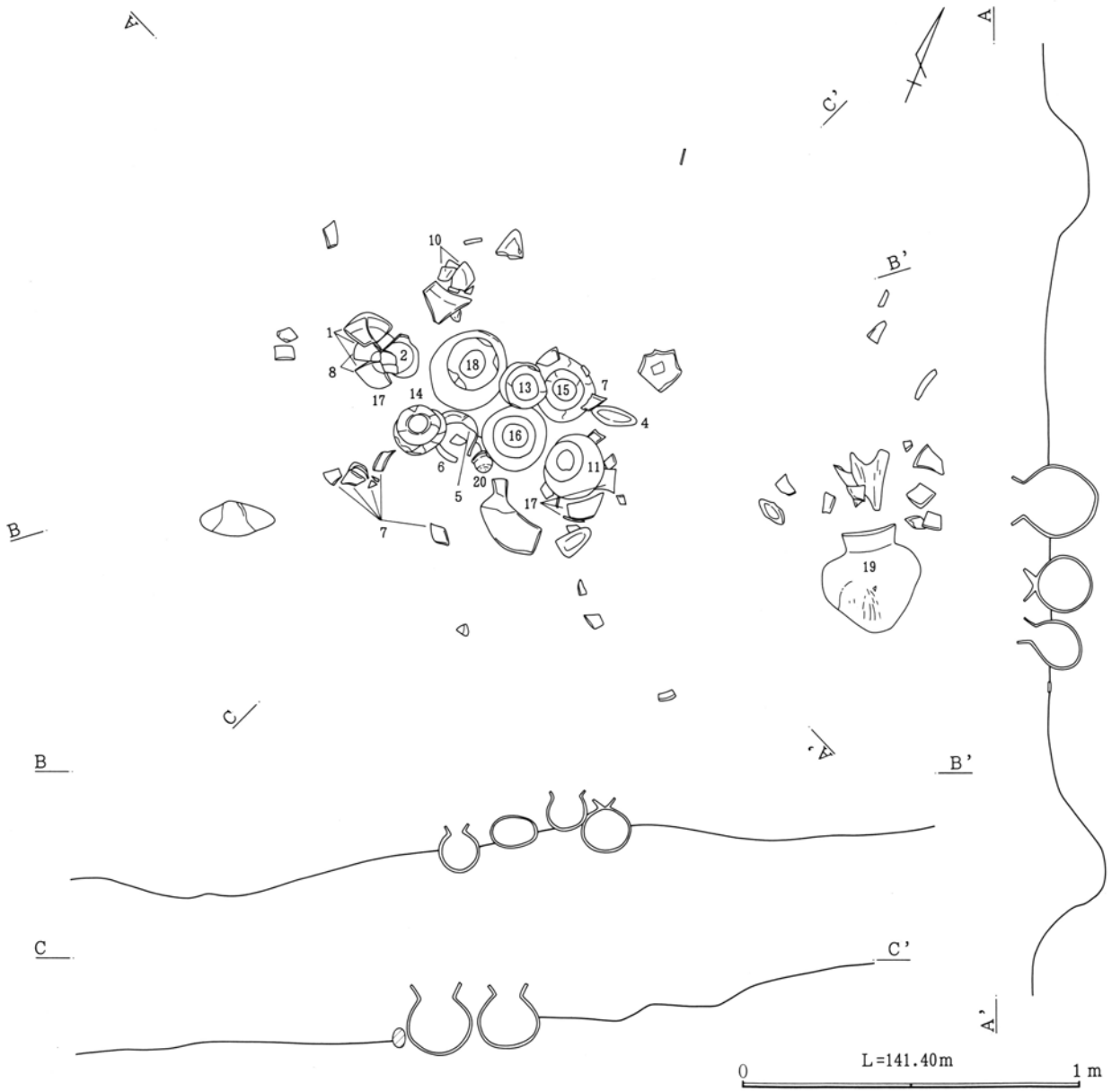
本遺構は、調査区の東南部、85区R-7グリッドに位置する。遺構は、Hr-F A層下の畠第1区画の北部で検出した。畠は、高低差15cmほどのウネ・サクに耕作されているサクに土器を集中して配置されている。本遺構と畠との関係については、土器の埋納状態からみると畠耕作後土器を設置したと想定される。規模は、東西約0.8m、南北0.6mの範囲に集中しているが、1点だけ約0.8mほど離れた地点より出土している。

この土器集積遺構は、耕作後の農作物の生産が行

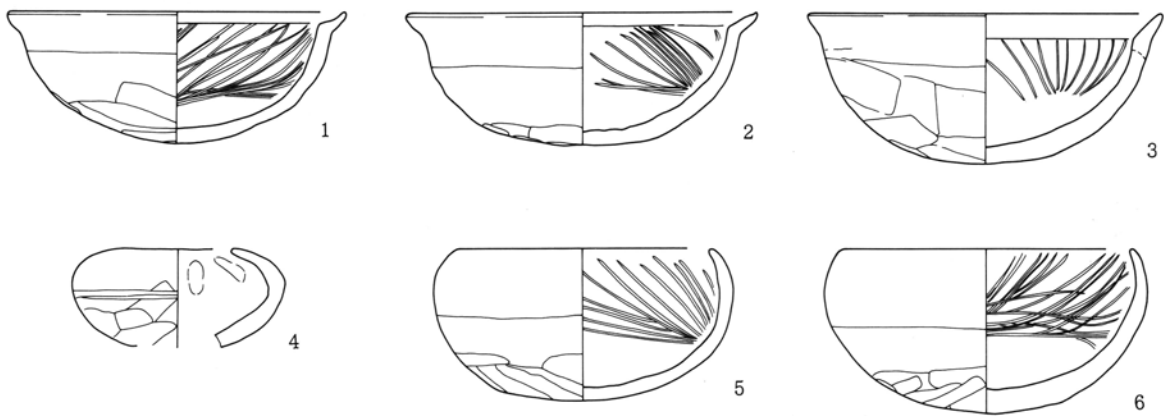
われている畠区画内部に存在することや土器の様相などの点から1号土器集積遺構とは性格を異なる祭祀遺構と想定される。

集積された土器は、土師器杯、高杯、埴、壺、手捏ね(甕形)がある。土器の配置は、15~18の壺を中心にその西側に杯、高杯を重ねて配置している。また、17の壺の上には11の埴、15と18の間には13の小型広口壺を配している。そして胴部中ほどと底部に焼成後の穿孔がある19の壺はやや離れて地点に配置されている。

7. 土器集積

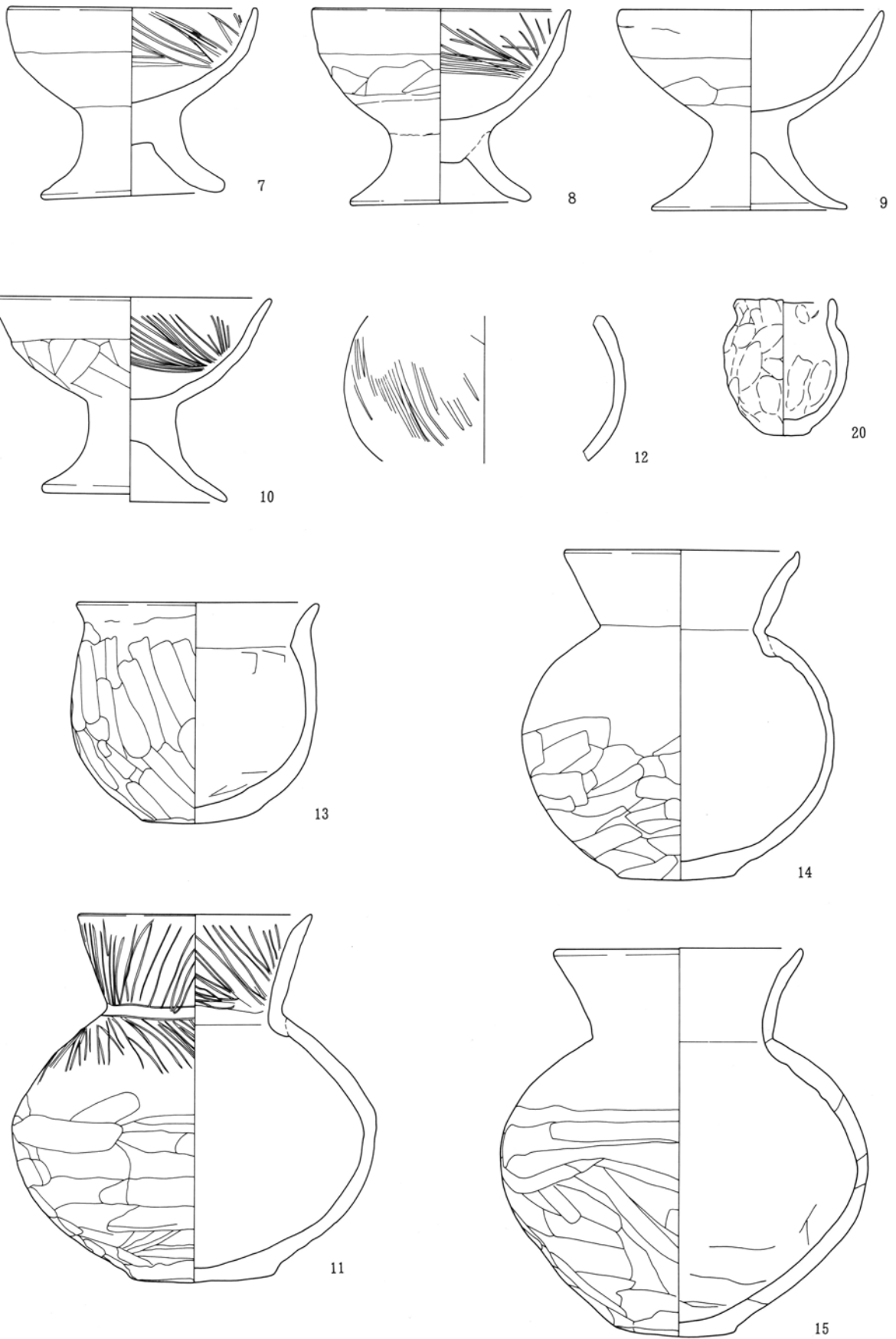


第122図 2号土器集積平面・断面図

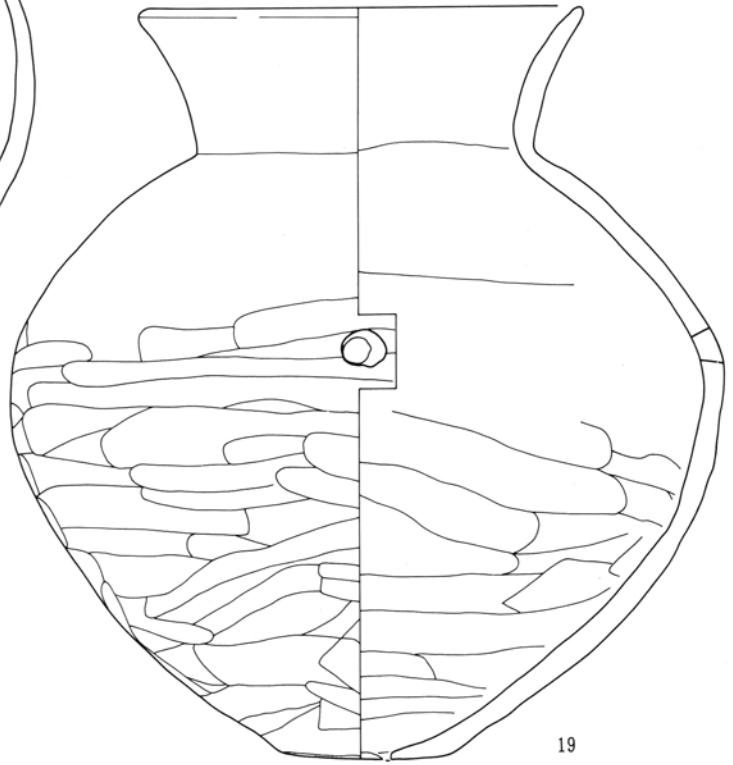
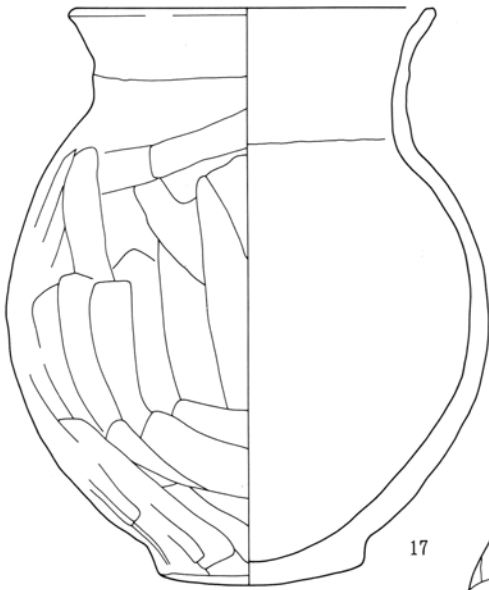
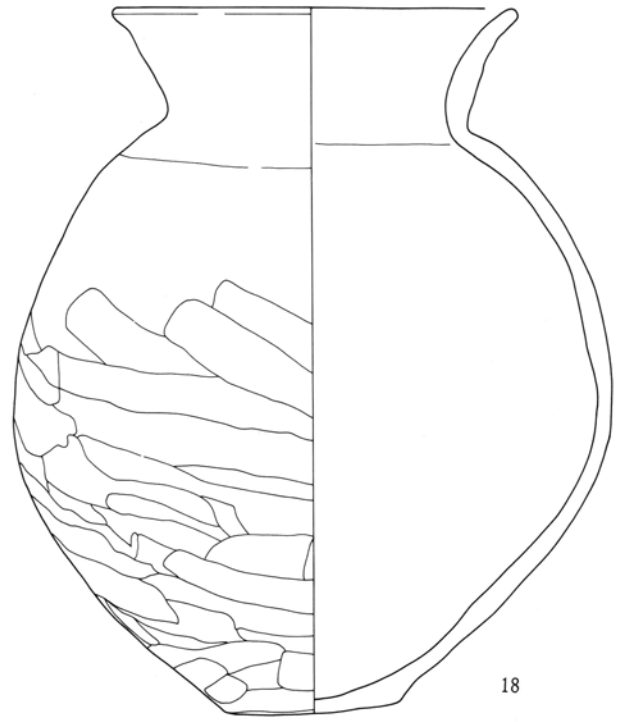
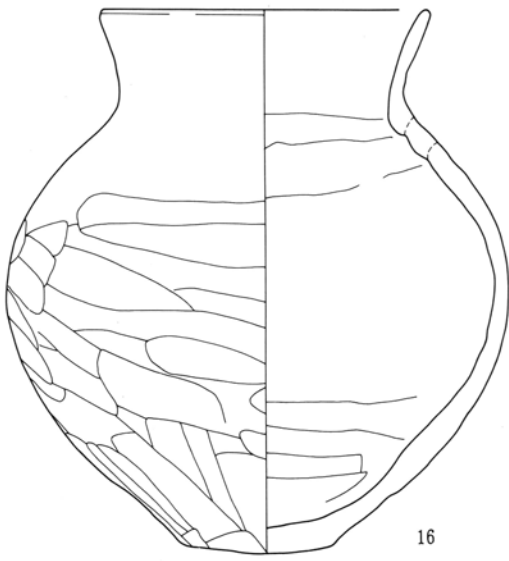


第123図 2号土器集積遺物図(1)

IV 五反田地区の遺構と遺物



第124図 2号土器集積遺物図(2)



第125図 2号土器集積遺物図(3)

8. 畠

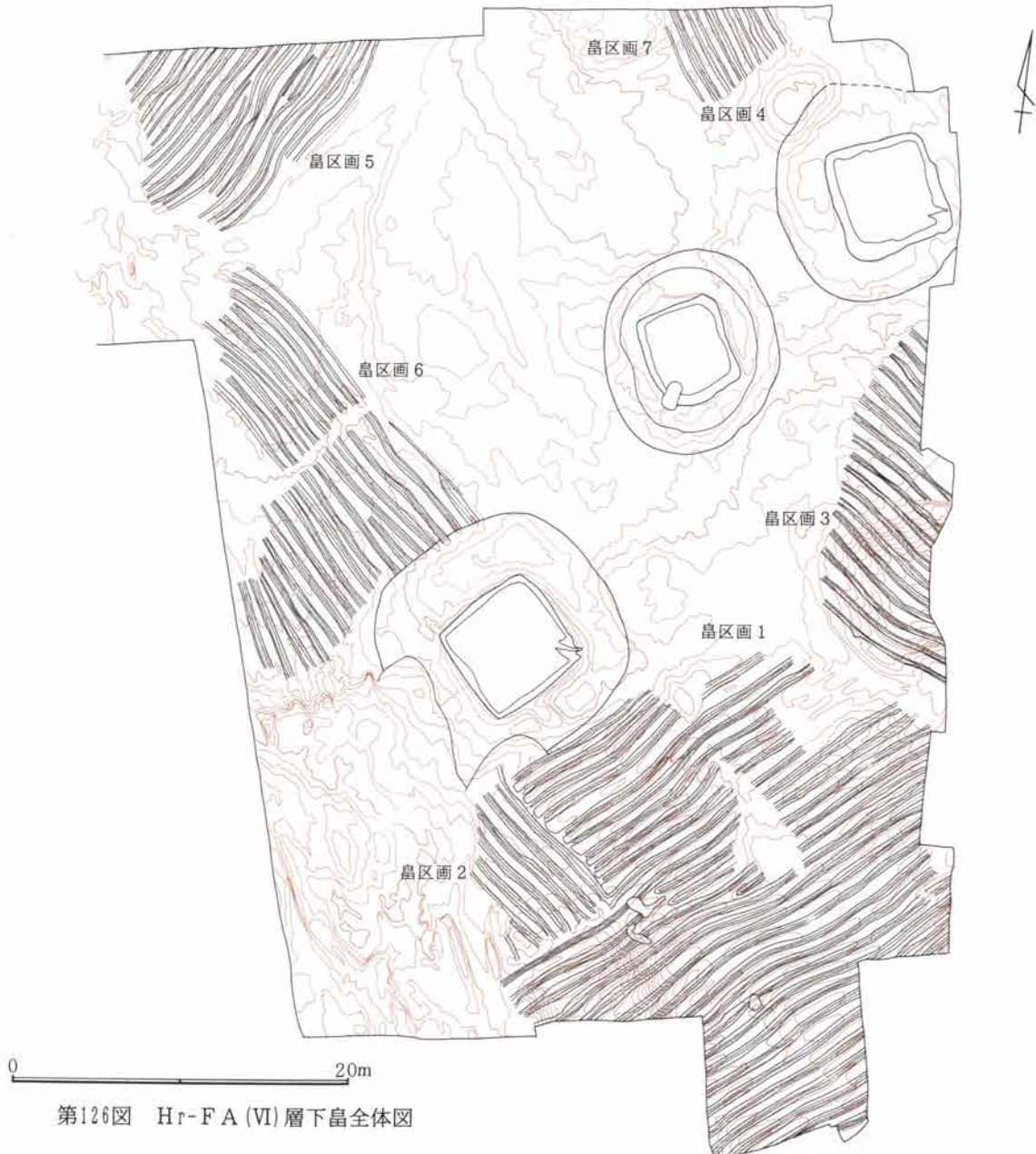
Hr-F A (VI)層下畠

畠は、調査区内部で122号・123号・124号住居を取り囲むように配置されている。調査区の地形は、全体的には北西から南東にかけての傾斜が見られるが西側で埋没河川が確認されるため河川付近では西側への傾斜が見られる。また、86区F-10付近から北側にかけては降雨の時だけ発生するような埋没河川に流れ込む小規模な谷津が見られる。

畠の区画は、耕作の方向などをみると7区画が確

認される。検出した7区画の畠については、区画2を除いてすべて調査区外に範囲が広がるため範囲・規模などの全貌については不明である。

サク・ウネの残存状態は、区画1、区画2と区画3がサク・ウネの高低差があり良好な残存状態であるのに対して区画4、区画5、区画6、区画7は、サク・ウネが崩れて高低差も明確でなかった。特に区画4の西側に位置する区画7は、写真では確認出来るもののサク・ウネの高低差がほとんどなく等高線は他の畠と同様な波を描くが遺構の線としては図上に表現が出来ないほどであった。サク・ウネの方



向は、傾斜に平行(等高線に直交)するように耕作された区画と傾斜に直交(等高線に平行)するように耕作された区画がある。耕作は、ほぼ直線的に行われ、区画の中に存在する125号住居や126号住居等の埋没途中で高低差1 mほどの窪みも無視して行われている。

畠の耕作跡は、灰白色シルト(Ⅷ)層上面でも確認された。この面でのサクの方向をみるとⅥ層下で確認したサクの方向と異なるものも確認された。

区画の範囲は、区画6の他はほぼ同一の範囲であるが、区画6は、北側部分のⅧ層上面では確認され

なかったが、その北側でサクの方向が多少異なるが区画の広がり確認される。また、区画1の北側では、Ⅵ層下のサクの方向と直交するサク列を確認した。区画4でも同様の状態を確認している。その他の区画でもⅥ層下のサク列間に位置するサクが確認されている。こうした状態は、Hr-F Aで埋没した畠の当初の耕作の状態を示していると考えられる。

畠の内部及び耕作土中からは、多くの遺物が出土している。特に区画1の北東部では、2号土器集積遺構が存在するほか耕作土中からの多くの土師器と若干の石製模造品が出土している。



第127図 Ⅷ層上面畠サク跡図

IV 五反田地区の遺構と遺物



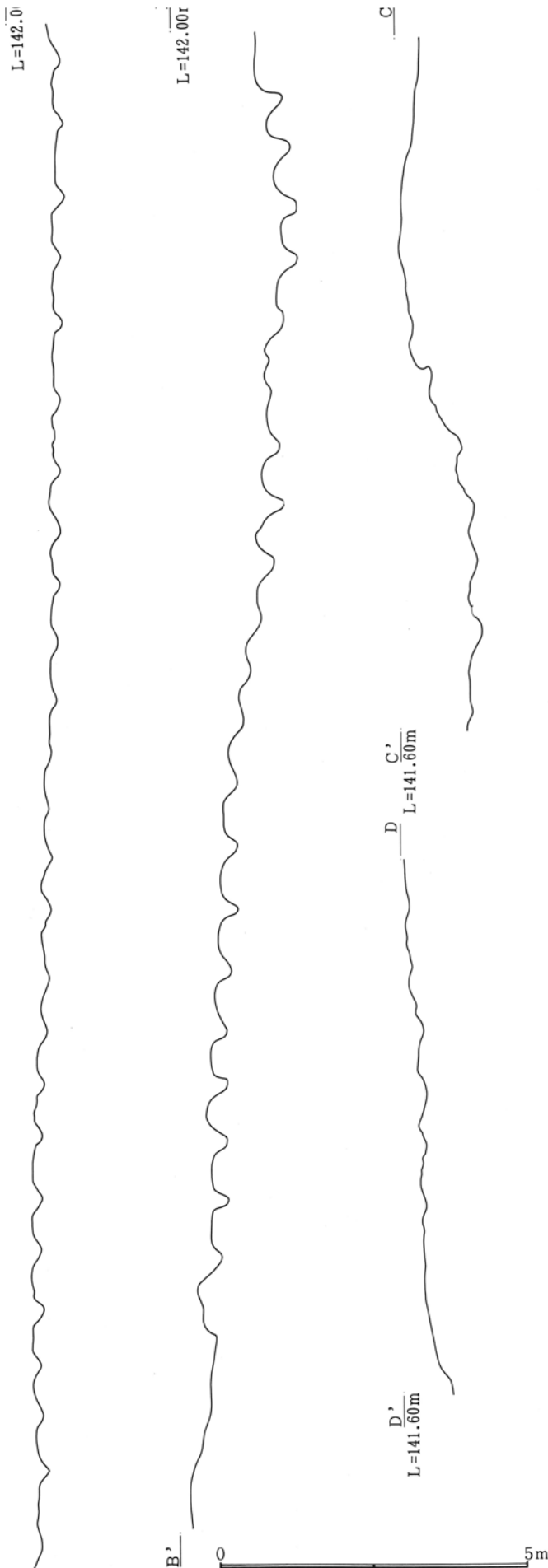
第128図 畠区画1・畠区画2平面図

畠区画1は、調査区の南東部、85区R～86区C-5～10グリッドを占地する。西側に埋没河川、北側に122号住居周堤帯、北西に区画1と直交する方向で鍵の手状に位置する区画2、北東に区画3と接する。この位置関係をみると区画3との新旧関係は、解らないが鍵の手状に区画2が位置することから区画2との新旧関係は、区画2が耕作された後に区画1が耕作されたか区画の拡張が行われたと推定される。

区画の規模は、調査区外に区画が広がるため全貌は不明であるが、東西方向約30m、南北方向25m + α である。区画内の地形は、調査区全体の地形と同様に北西から南東へかけての傾斜が見られる。調査

区内での比高差は、約0.8mである。また、区画内部には、125号住居がまだ埋没途中の窪みの状態で存在しておりその比高差は約50cmほどであるがその高低差を無視するように耕作が行われている。サク・ウネは、傾斜に直交(等高線に平行)するように北東～南西方向へ耕作されている。サクは、若干の蛇行は見られるもののほぼ直線的に等間隔に耕作されているが、85区T-8グリッドでは、途中でサクを止めてあるためその南側のサクが蛇行している箇所が見られる。86区B-7グリッドでは、2条のサクが止まり、その西側から1条のサクになっている箇所が見られる。

サクの心々距離は、最大132cm、最小76cm、概ね



第129図 畠区画1・畠区画2断面図

8. 畠

84~100cmである。サクとウネの高低差は、平均12cmで非常に良好な残存状態でサク・ウネの状態からみてHr-F A降下に近い時期に耕作されたと想定される。

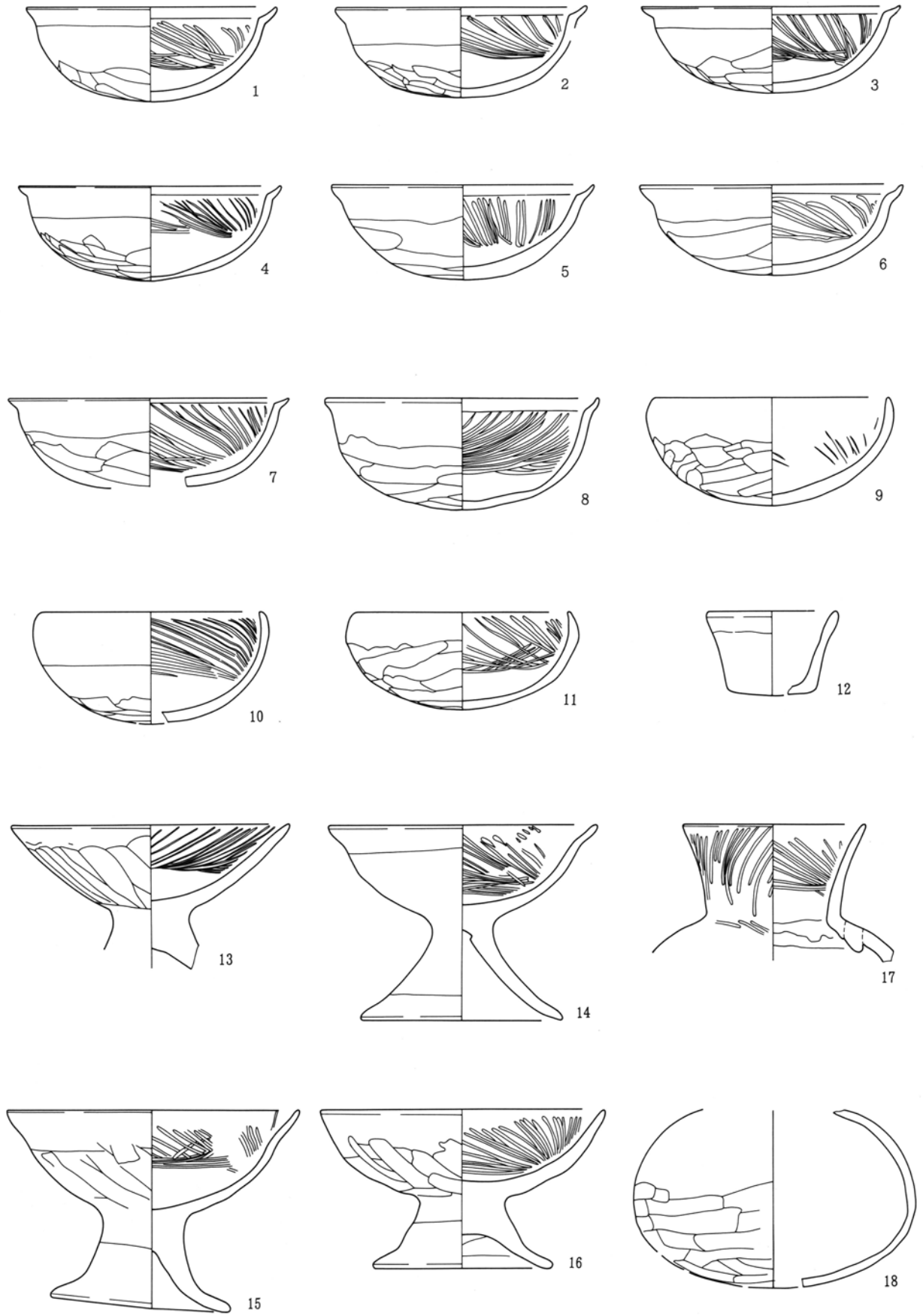
区画内部・耕作土中からの遺物は、85区R-7グリッドで2号土器集積遺構を検出した他に第130・131図のように土師器杯、高杯、埴、甕などが出土している。2号土器集積は、前述のように畠耕作後に土器を配置したと想定される。出土した土器のなかに底部と胴部に穿孔のあるものや手捏ねがみられることから祭祀的要素が強いと考えられるが畠区画端部ではなくサク・ウネが作られている耕作域に存在している点など今までの出土例に見られない要素がある。

畠区画2は、86区B~D-6~9グリッドの区画1の畠の北西角を欠くように占地する。区画の規模は、北西側が明確でないが南北方向が10m、東西方向は6mである。区画地の地形は、東側は北から南への傾斜であるが、河川よりは東から西への傾斜である。区画内部の比高差は、約0.3mほどである。サク・ウネは、傾斜に平行(等高線に直交)するように北北西~南南東にかけて耕作されている。サクの状態は、若干の蛇行はみられるもののほぼ直線的で等間隔に耕作されている。

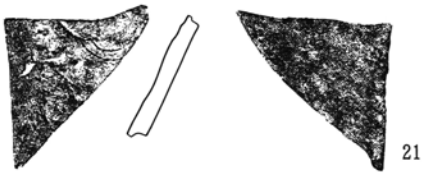
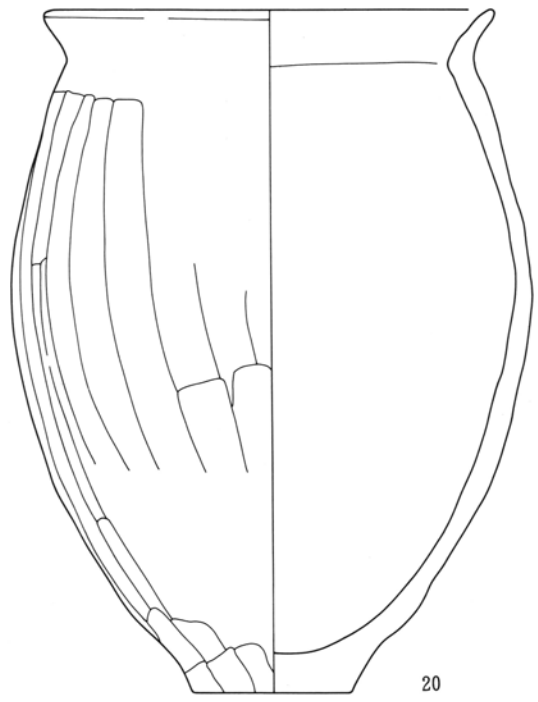
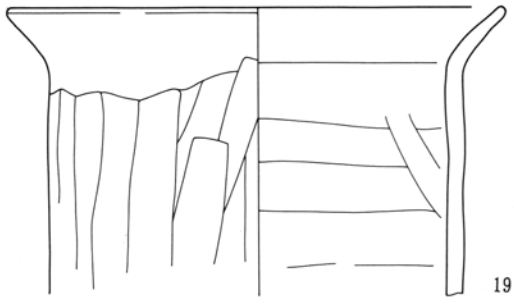
サクの心々距離は、最大105cm、最小80cm、概ね100cm前後である。サクとウネの高低差は、平均9cmで区画1の畠より若干崩れた様相であるが区画1と同様な時期かそれよりやや前の時期に耕作されたと想定される。

区画内部・耕作土中からの遺物は、第132・133図のように土師器杯、高杯、甕、壺と須恵器甕の胴部小片が出土している。また、7の土師器甕の内部からは、13~19の石製模造品が埋納されたように出土している。この石製模造品が埋納された甕は、耕作土のやや深い位置からの出土であることから畠に伴うものかそれとも126号住居の周堤帯下から出土した地鎮祭的な土器群のように区画2の東に位置する住居に伴うものかは明確でない。

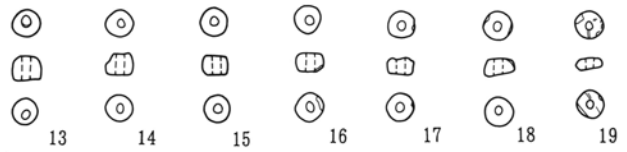
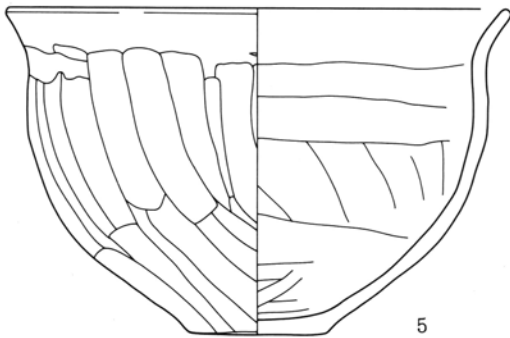
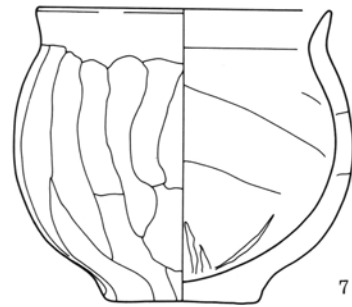
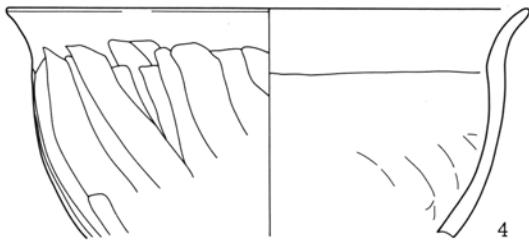
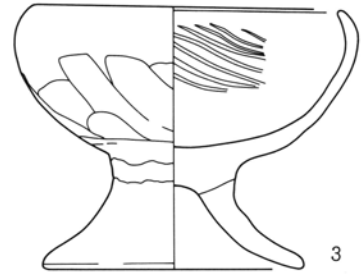
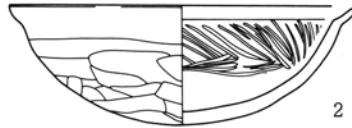
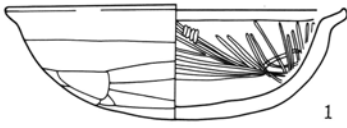
IV 五反田地区の遺構と遺物



第130図 畠区画1遺物図(1)

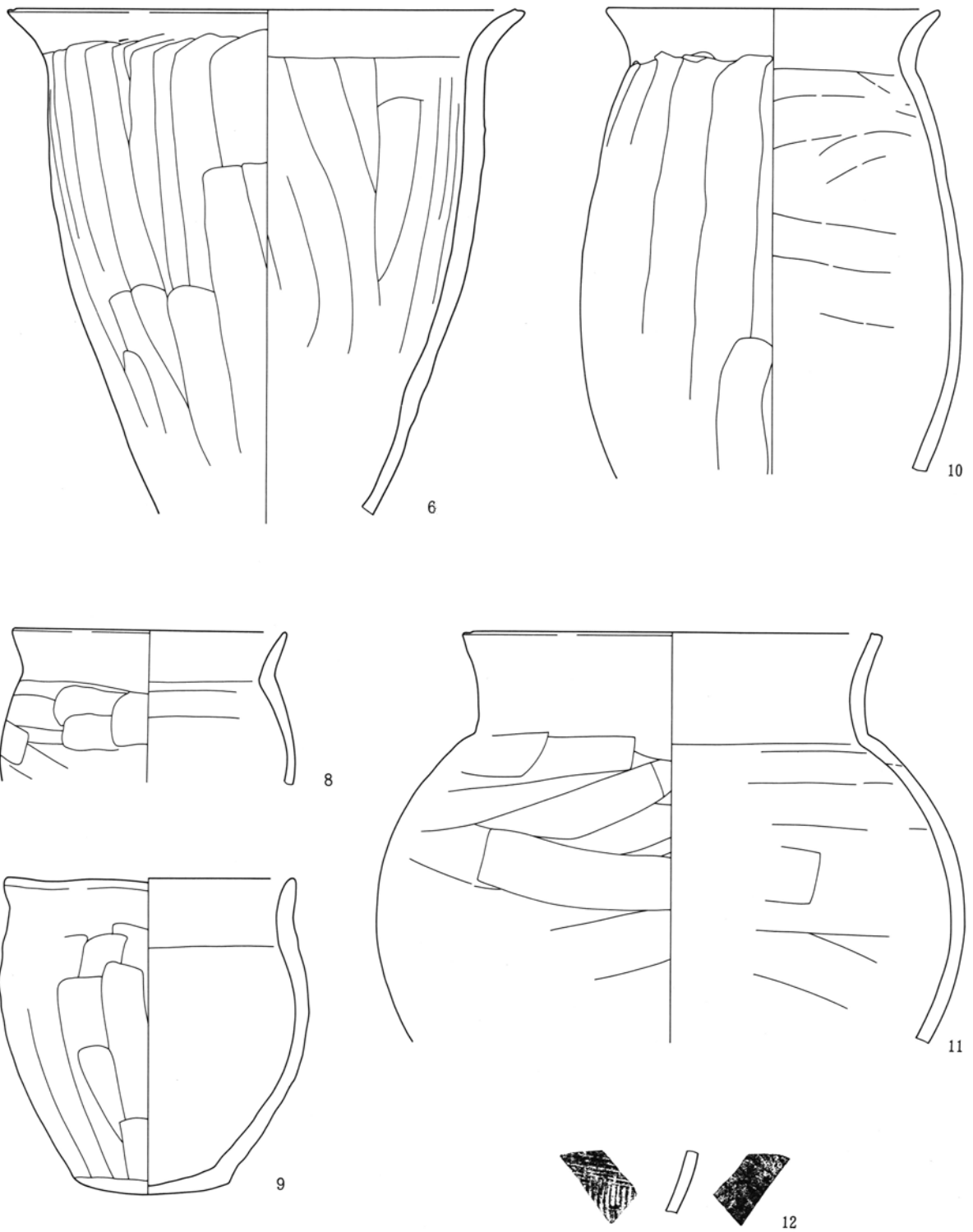


第131图 畠区画1 遺物图(2)



第132图 畠区画2 遺物图(1)

IV 五反田地区の遺構と遺物



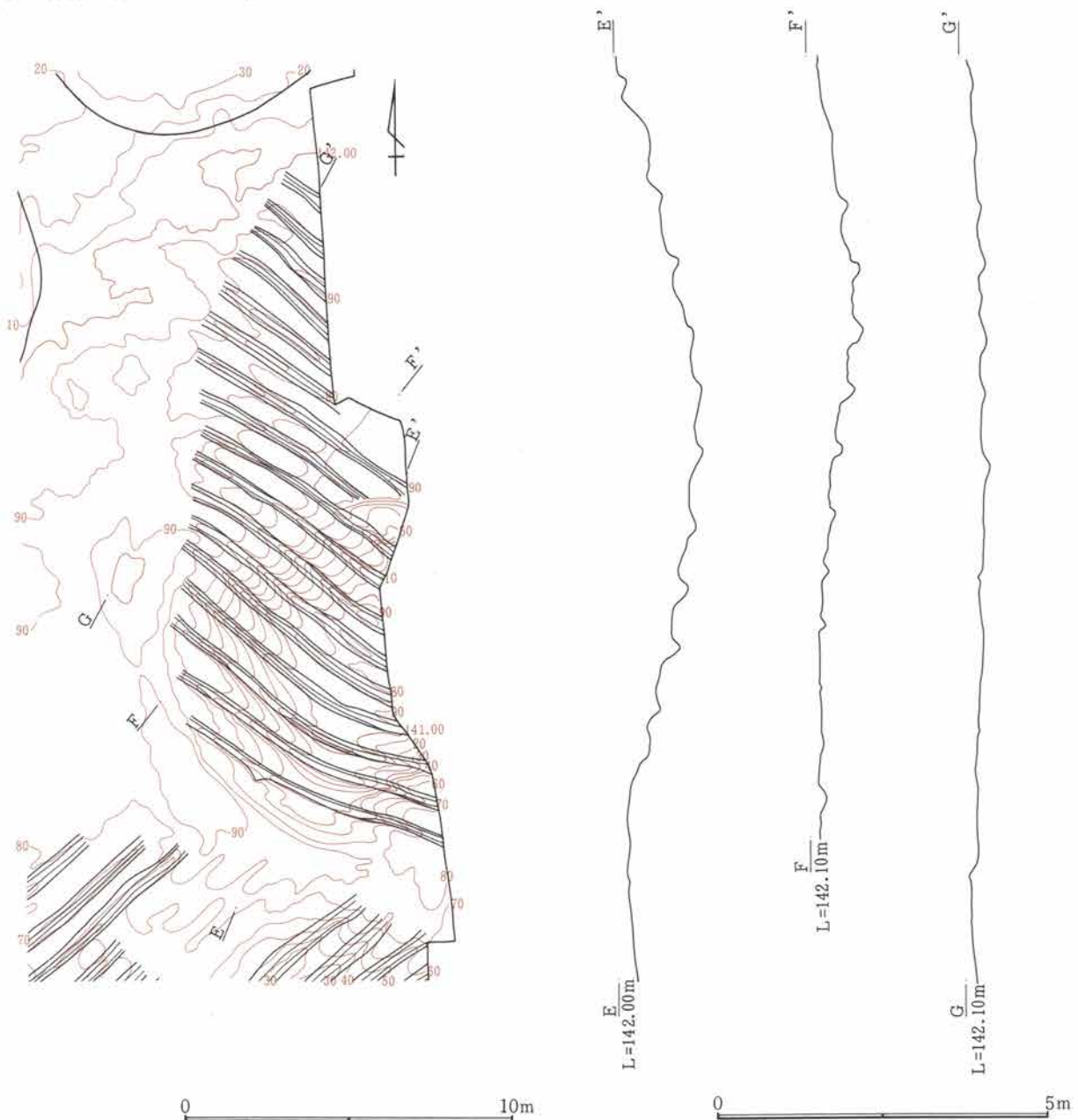
第133図 畠区画2遺物図(2)

畠区画3は、調査区の東より中ほどの85区S～T-11～15グリッドに占地する。区画の規模は、大部分が調査区外に存在するため不明であるが西辺の長さは最北と最南のサク間で17mである。区画地の地形は、調査区全体の地形と同様に北西から南東へかけての傾斜が見られる。調査区内での比高差は、約1mほどである。また、区画内部には、126号住居がまだ埋没途中の窪みの状態で存在しておりその比高差は約80cmほどであるがその高低差を無視するように耕作が行われている。サク・ウネは、傾斜に平

行(等高線に直交)北西～南東方向へ耕作されている。サクの状態は、若干の蛇行は見られるもののほぼ直線的で等間隔に耕作されている。

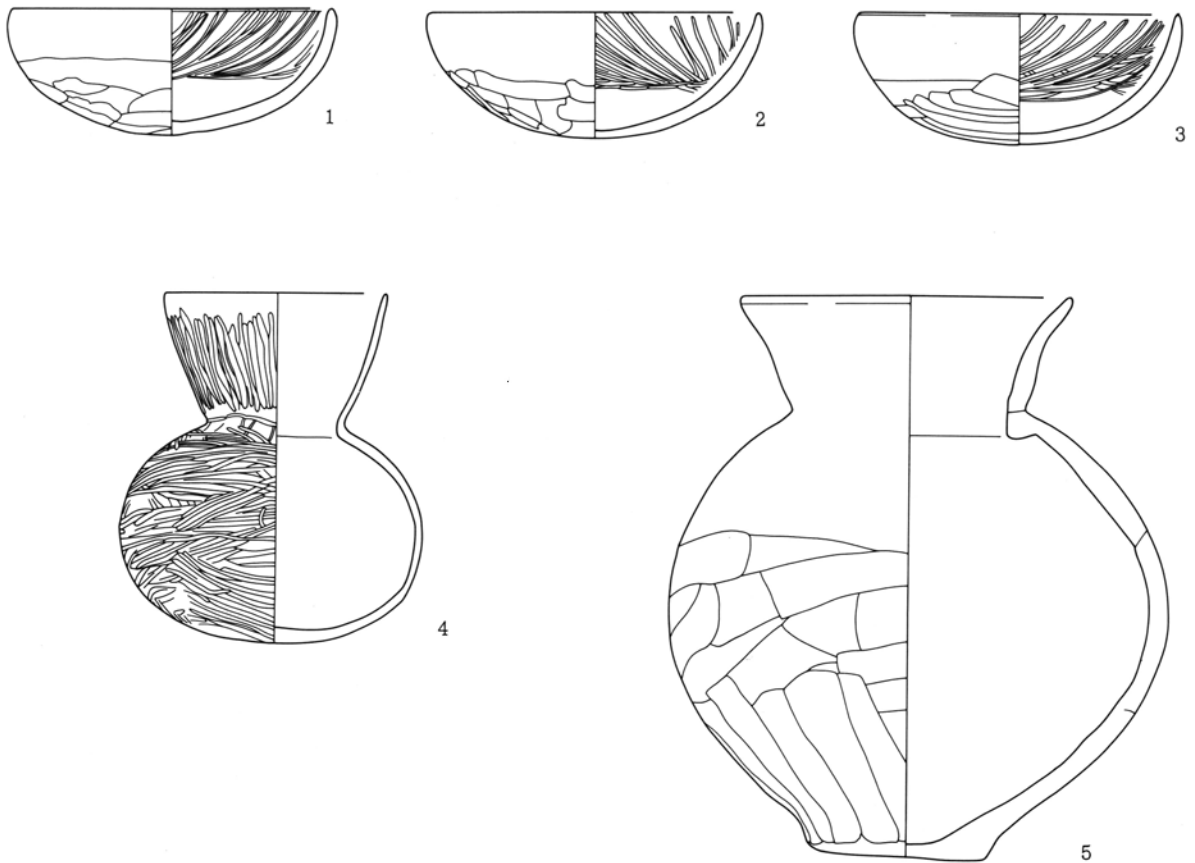
サクの心々距離は、最大110cm、最小75cm、概ね90cm前後である。サクとウネの高低差は、平均12cmで非常に良好な残存状態でサク・ウネの状態からみて区画1の畠と同様にHr-F A降下に近い時期に耕作されたと想定される。

区画内部・耕作土中からの遺物は、第135図のように土師器杯、埴、壺が出土している。



第134図 畠区画3平面・断面図

IV 五反田地区の遺構と遺物



第135図 畠区画3遺物図

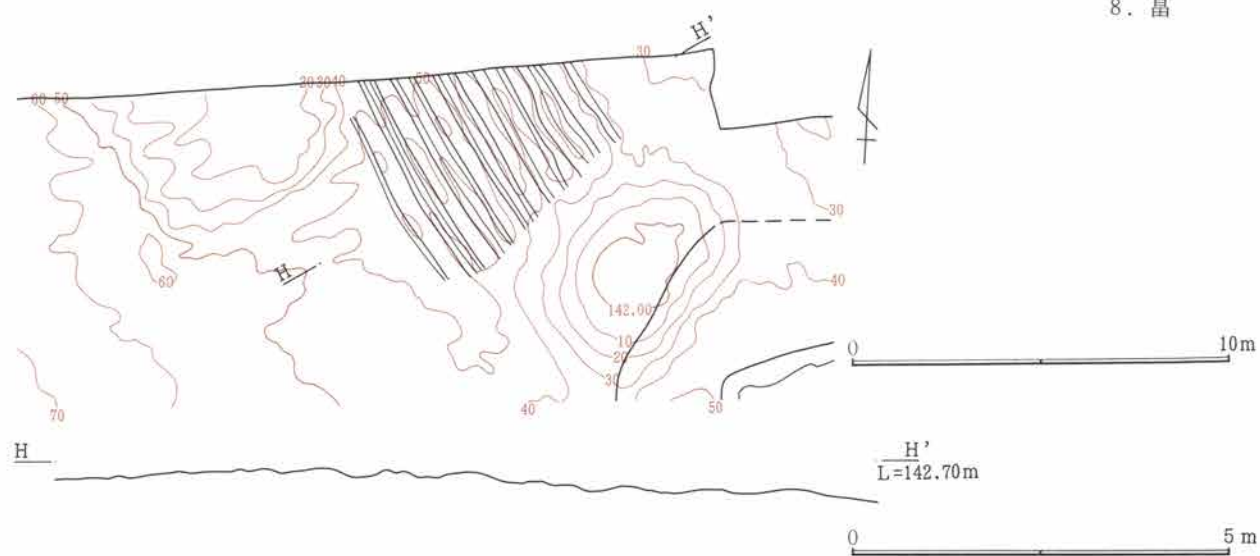
畠区画4は、調査区の北西部、86区B・C-17・18グリッドに占地する。区画の南側には、124号住居周堤帯が西側には区画7が存在する。区画の規模は、大部分が調査区外に存在するため不明であるが南辺の長さは $8.5\text{m} + a$ である。区画地の地形は、調査区全体の地形と同様に北西から南東へかけての傾斜が見られる。調査区内での比高差は、 0.2m ほどである。サク・ウネは、傾斜に平行(等高線に直交)北西～南東方向へ耕作されている。サクの状態は、若干の蛇行は見られるもののほぼ直線的で等間隔に耕作されている。

サクの心々距離は、最大 113cm 、最小 100cm 、概ね 100cm 前後である。サクとウネの高低差は、平均 8cm で区画1や区画3と比較するとやや崩れた状態である。

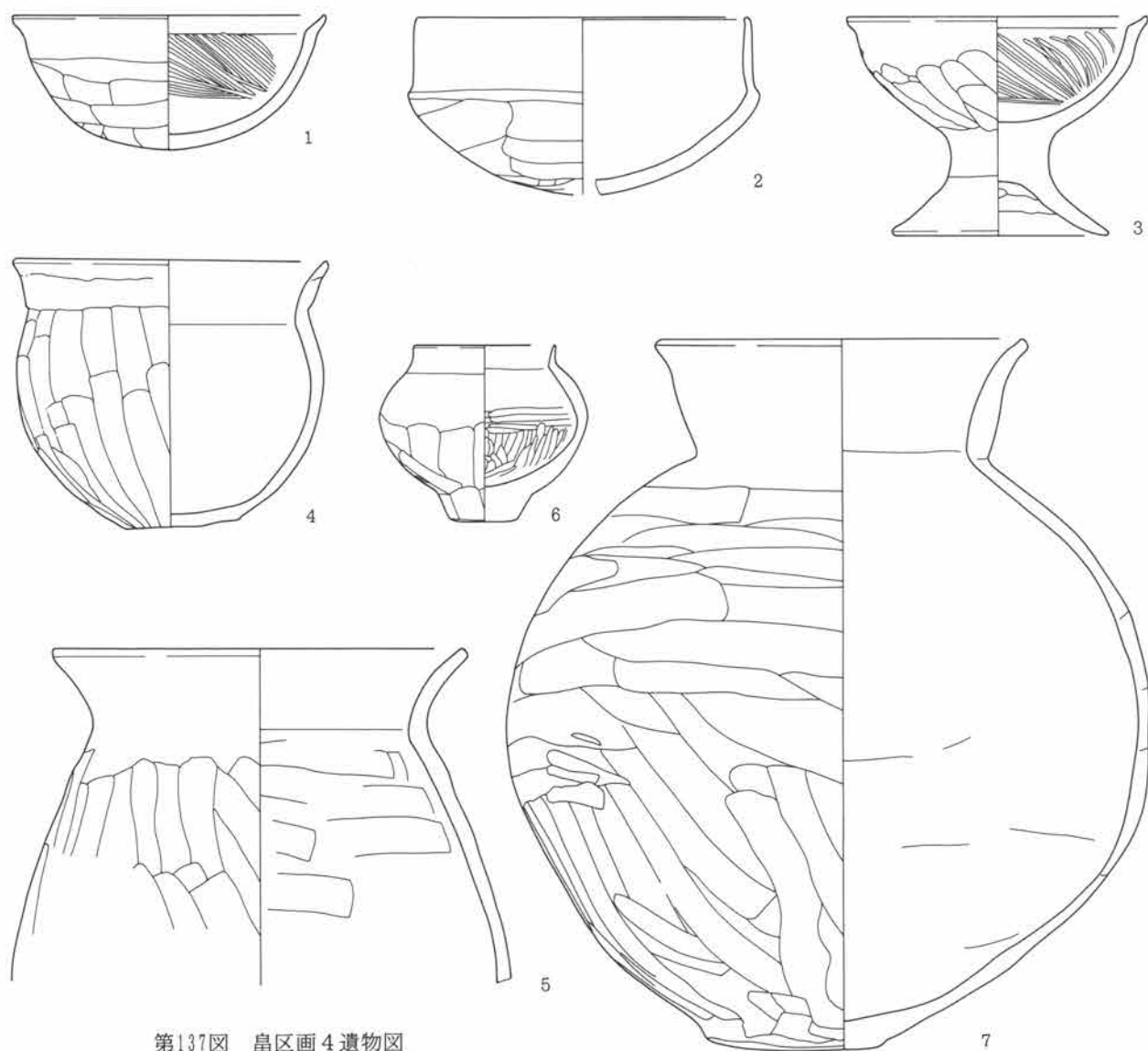
区画内部・耕作土中からの遺物は、第137図のように土師器杯、高杯、甕、壺が出土している。

畠区画7は、調査区の北側、86区C・D-17・18グリッドに位置する127号住居が僅かな窪みになった状態のところに占地する。区画の東側は、区画4が存在し、西側と南側は他の遺構が存在しない空間である。残存状態は、アドバルーンによる上空からの写真では確認できたが、サク・ウネなどは等高線は畠状の帯状に復元出来るがサクを表現する溝状に図上で表現できるような状態ではなかった。区画の規模は、北側が調査区外に存在するため不明であるが、南辺は 5m ほどである。区画地の地形は、127号住居の埋没過程の 20cm 程度の窪地のため明らかではない。サク・ウネは、東西方向に耕作されている。

サクの心々距離は、約 100cm ほどである。サクとウネの高低差は、最大でも 5cm 程度しかなく区画6よりもさらに崩れた状態で放置された状態で平坦地に近い状態である。



第136图 畠区画4・7平面・断面图



第137图 畠区画4遺物图

IV 五反田地区の遺構と遺物

畠区画5は、調査区の北西部、G～I-15～17グリッドに占地する。区画の西側には、埋没河川が存在し、東側は他の遺構が存在しない空間である。区画の規模は、北側が調査区外に存在するため不明であるが南西側の辺の長さは11m前後、南東側の辺は15m + α である。区画地の地形は、西側の埋没河川に向かっての傾斜が見られる。調査区内での比高差は、0.3mほどである。サク・ウネは、傾斜に平行(等高線に直交)北東～南西方向へ耕作されている。サクの状態は、途中で二股に分かれたり、中州状の箇所が見られるため大きく蛇行する箇所があるが、その他はほぼ直線的で等間隔に耕作されている。

サクの心々距離は、最大110cm、最小75cm、概ね80～100cmである。サクとウネの高低差は、平均3.5cmで区画1や区画3に比べてやや崩れた状態である。

区画内部・耕作土中からの遺物は、第138図のように土師器杯、高杯、甕と須恵器甕の胴部小片が出土している。



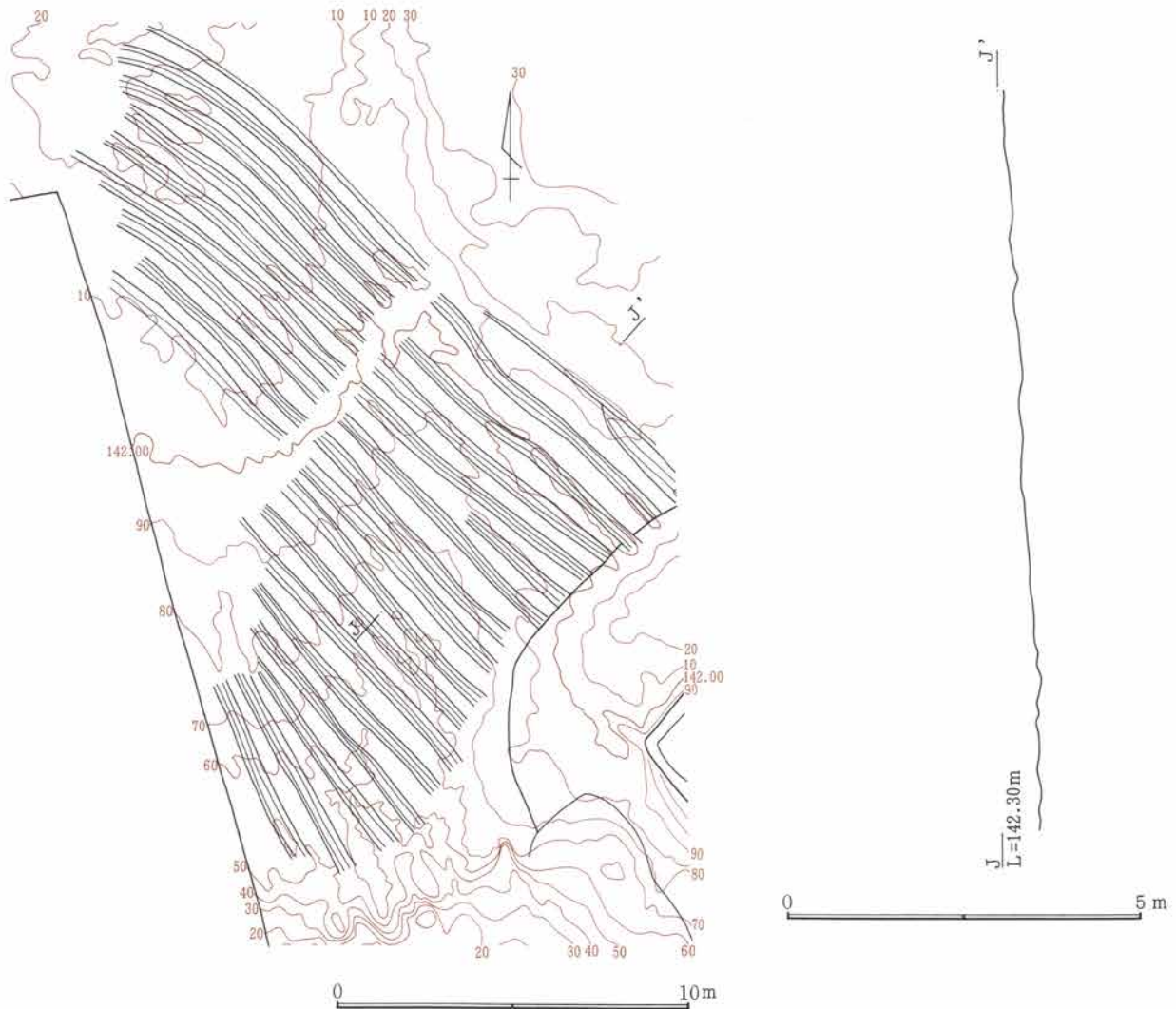
第138図 畠区画5平面・断面図・遺物図

畠区画6は、調査区の西側、D～H-9～14グリッドに占地する。区画の西側には、埋没河川が、東南には122号住居周堤帯が存在し、東北側は他の遺構が存在しない空間である。区画の規模は、一部調査区外に存在するため不明であるが南辺は15m、東辺は21mほどである。区画地の地形は、概ね北西から南東にかけての傾斜が見られるが、南西部分では西側に埋没河川が存在するためやや西側へかけての傾斜も見られる。調査区内での比高差は、0.8mほどである。サク・ウネは、傾斜に平行(等高線に直交)北西～南東方向へ耕作されている。また、北側では、やや西方向へサクの方向が緩いカーブを描いて収束している。サクの状態は、南部で途中から起こされ

ている箇所や西側の埋没河川への傾斜の影響のためか区画の形状が南側でやや広がる。サクの間隔は、概ね等間隔であるが、前述のように南側ではやや間隔が広がっている。区画中ほどに東西方向でサク列を止めて幅70～80cmほどの間隔をとって再開している箇所が存在する。

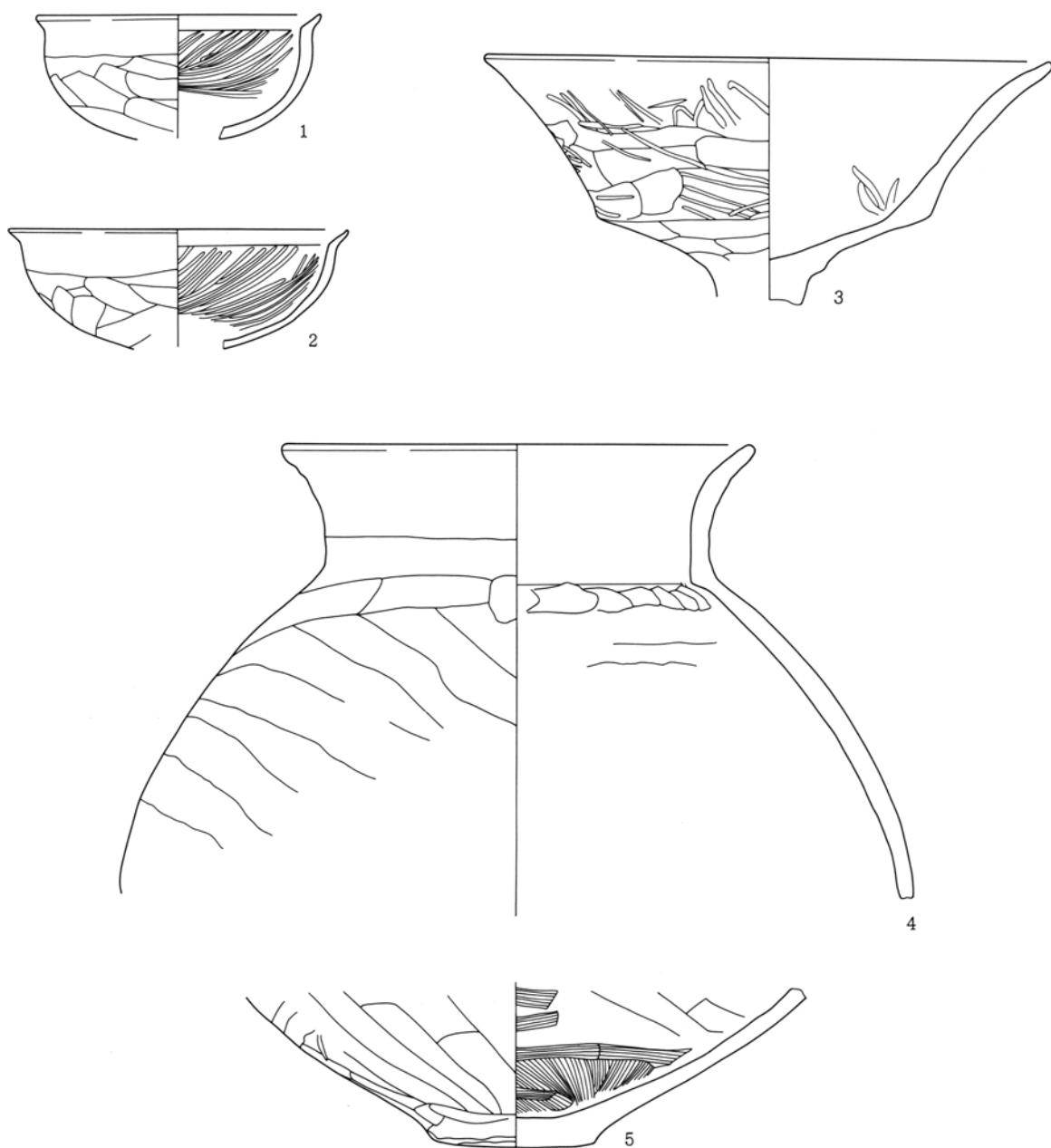
サクの心々距離は、最大150cm、最小65cm、概ね90cm前後である。サクとウネの高低差は、平均2.5cmで区画5よりもさらに崩れた状態で今季の耕作を開始する前の段階か収穫後ある程度放置されたような状態である。

区画内部・耕作土中からの遺物は、第140図のように土師器杯、高杯、壺が出土している。



第139図 畠区画6平面・断面図

IV 五反田地区の遺構と遺物



第140図 畠区画6 遺物図

9. 遺構外出土遺物

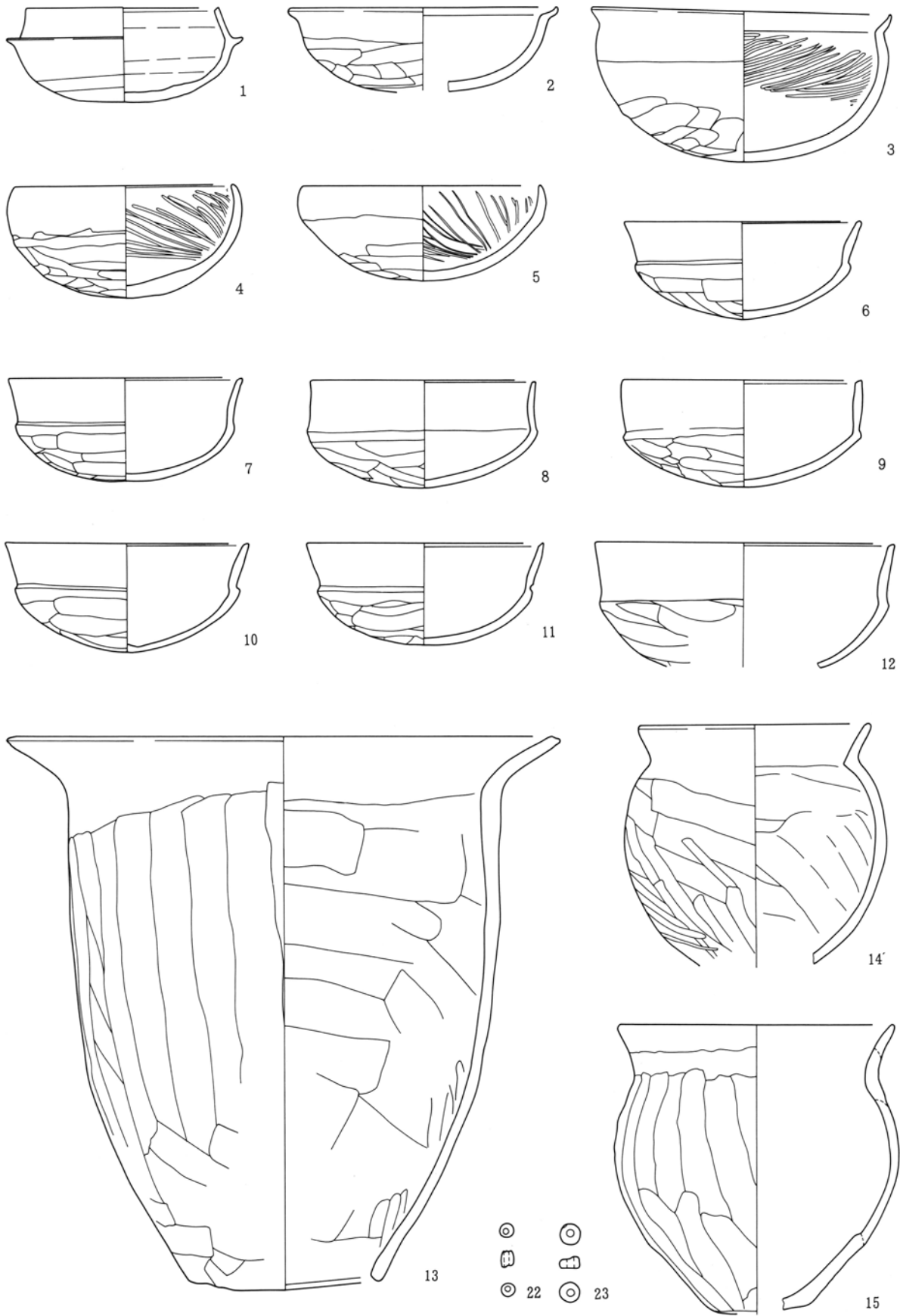
遺構外出土遺物とは、畠区画3・123号住居の北側、124号住居の西側、畠区画4の南側の間に広がる遺構が確認されない空間(東空間)と畠区画7と123号住居の西側から畠区画5と畠区画6の東側の間で1号土器集積の存在するC・D-16・17グリッドを除いた無遺構の空間(西空間)から出土した遺物である。

また、出土した遺物の大部分は、挿図中の掲載遺

物からも解るように東空間からで西空間からは僅かである。

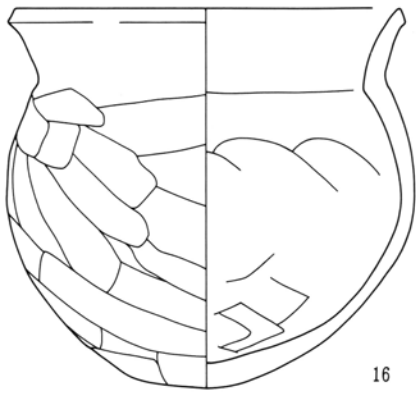
出土した遺物は、大部分が土師器でその内9割が甕・壺であるが、畠区画3の西側A-13グリッドからは須恵器杯身が出土している。出土遺物量は、パン箱で8箱ほどであるが、ここではある程度の形態が解り実測が可能である個体に限定して掲載した。

9. 遺構外出土遺物

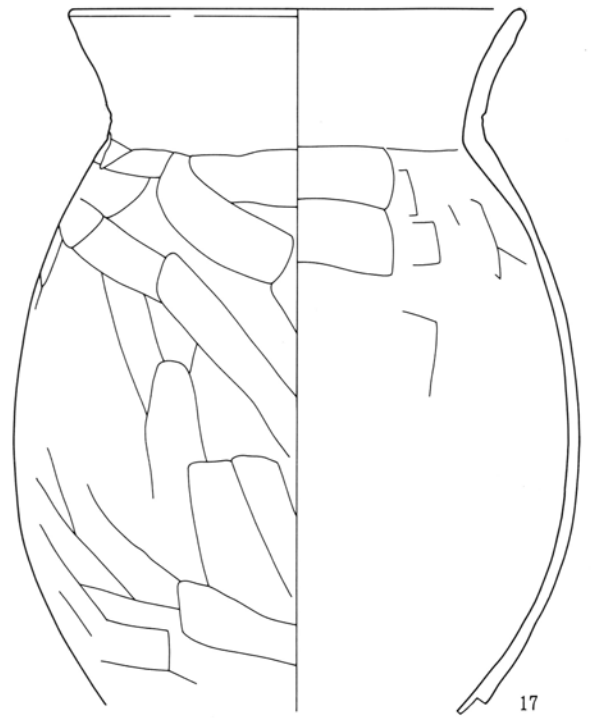


第141図 遺構外出土遺物図(1)

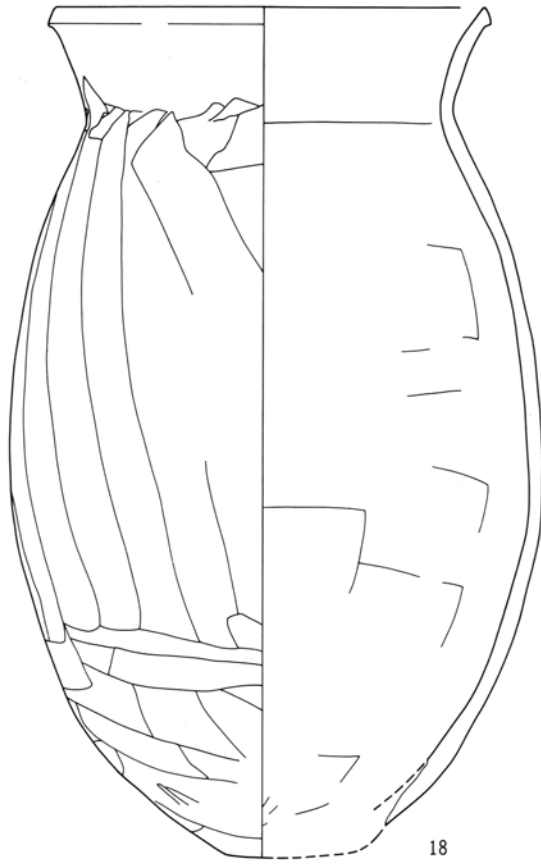
IV 五反田地区の遺構と遺物



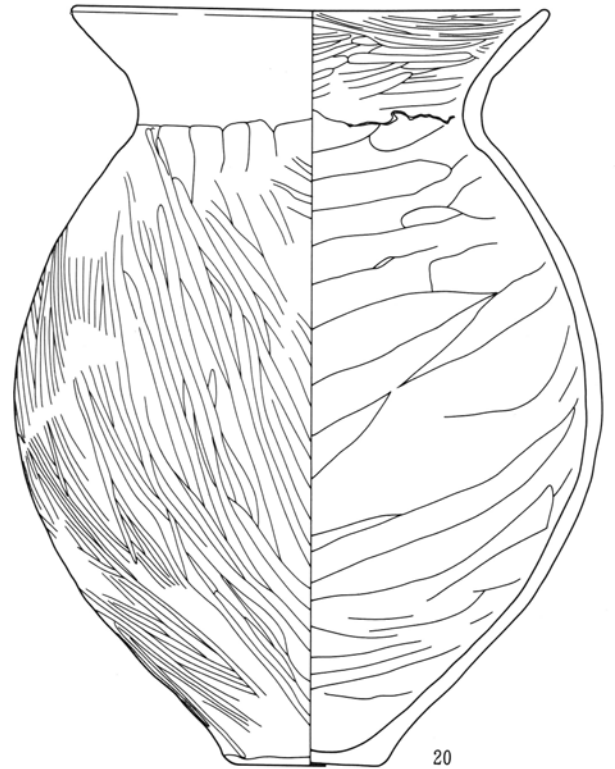
16



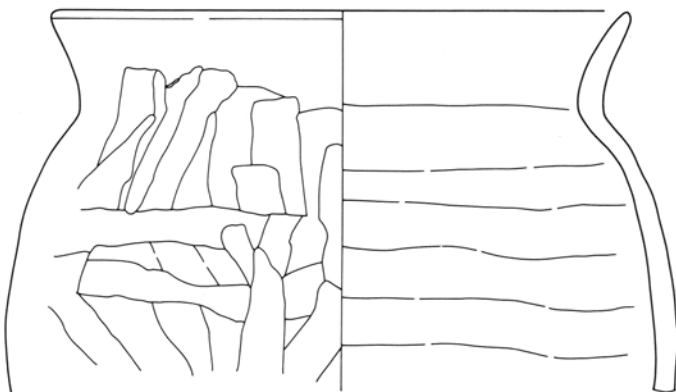
17



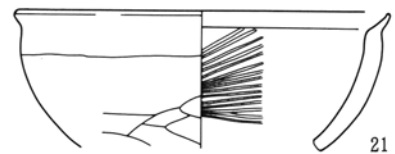
18



20



19



21

第142図 遺構外出土遺物図(2)

V 清水地区の遺構と遺物

1. 概要

清水地区の発掘調査は、五反田地区と同様に厚く堆積しているHr-F A・Hr-F P泥流層下に古墳時代の遺構が存在するため崩落防止及び湧水対策等の安全対策を講じて泥流層掘削し、遺構の発掘調査を行った。

発掘調査範囲は、1,000m²と狭い面積であったが、西側部分では隣接する東京電力の送電用鉄塔部分に伴う発掘調査と同時に実施したため東側の幅17mに比べてやや広い幅24mを調査することが可能であった。

Hr-F A・Hr-F P泥流層は、五反田地区に比べるとやや薄く約3mほどの厚さであった。泥流層は、上位より砂粒・礫を多量に含むHr-F P泥流層が約1.00m、上位と同様であるが軽石粒を含んだ泥流層が約1.00m、そしてHr-F AとHr-F Pの噴火活動の間の休止期間に堆積した黒色土が2から5cm、そしてHr-F Aに伴う泥流層が約1.00mほど堆積している。このHr-F A泥流層の中には、2層の植物遺体が観察可能な黒色土の堆積が確認された。

遺構の確認面は、五反田地区と同様にHr-F A層下とその下層上面で検出した。

検出した遺構は、Hr-F A層下では、土器集積と畠であったが、それ以前に廃棄された住居は五反田地区と異なり廃棄後の埋没過程の中では耕作が行われないでそのままの状態に残存しており農耕地として利用されていない範囲がやや広範囲に広がる。

また、Hr-F A層下の黒色土層上面では、無数の地割れ跡が確認された。この地割れ跡は、Hr-F A層やその上位の泥流層では確認されないことからHr-F Aの噴火による地割れの可能性が強い。

Hr-F A層下畠の下層からは、住居2軒、平地建物2棟、土坑1基、溝1条を検出した。

住居は、前述のように廃棄後の埋没過程の段階でもそのまま放棄されているため周堤帯がわりあい良

好な状態で残存していた。平地建物は、あまり明瞭な状態ではなかったが、周囲の旧地表面よりやや硬い面をしておりその周囲に小ピットが検出できることから平地建物と確定した。平地建物は、円形と長方形の形態のものを検出したが五反田地区の平地建物のような円形に溝を巡らす形態とは様相が異なる。

溝は、1号住居の周堤帯下から検出した遺構でほとんど埋没しかけた遺構である。

土器集積は、1カ所検出したが、集積された土器も8点と少なく石製模造品等も伴わない小規模のもので土器集積祭祀の初期的な段階の可能性がある。

遺物は、土師器、石製模造品等が出土しており五反田地区とほぼ同様な状態であるが、須恵器の出土はみられなかった。また、土器の形態は、五反田地区と比べると古い様相を呈している。

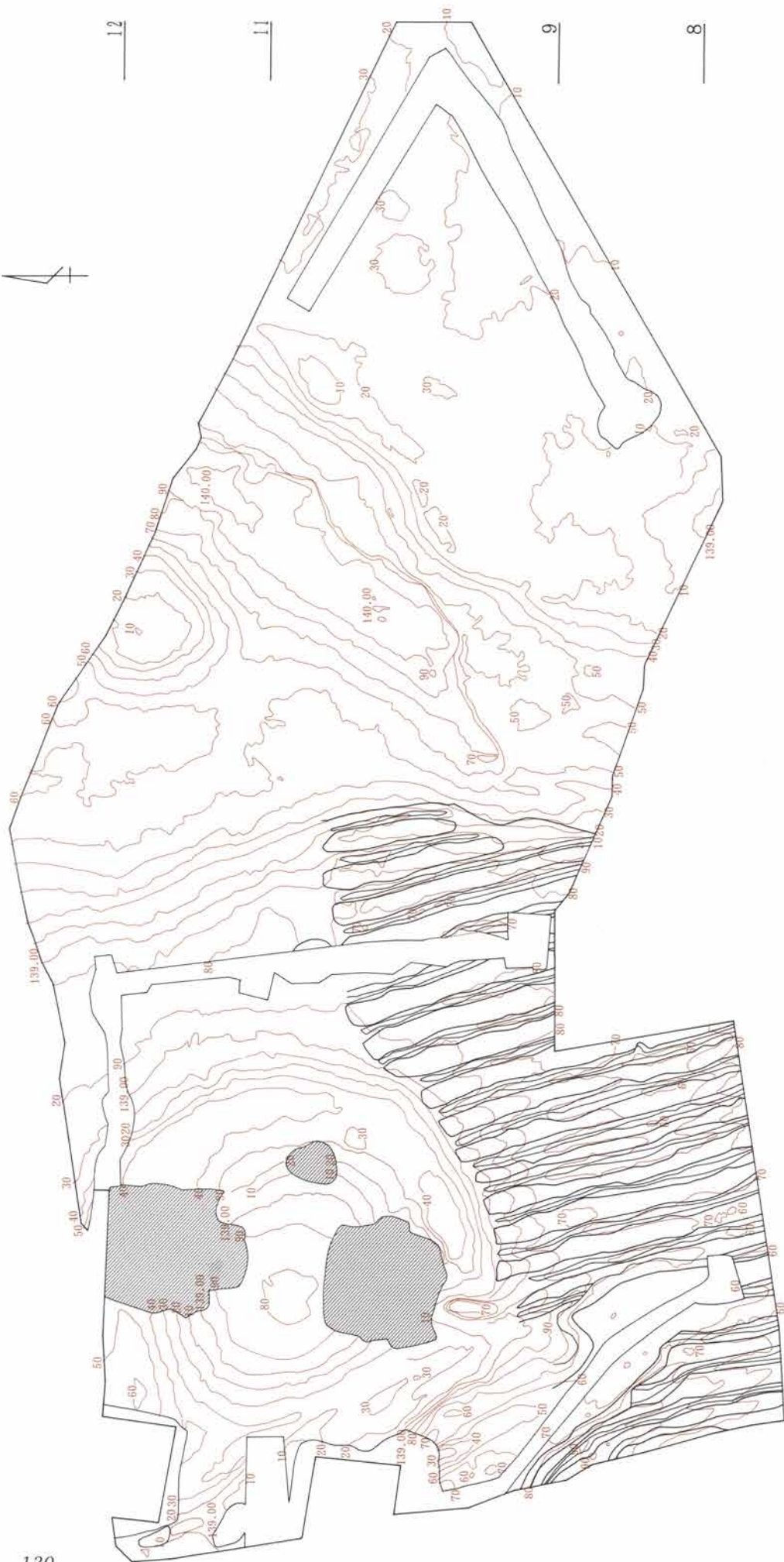
13

12

11

9

8



O | N | M | L | K | J | I | H | G | F | E



第143图 清水地区Hr-F A層下全体図

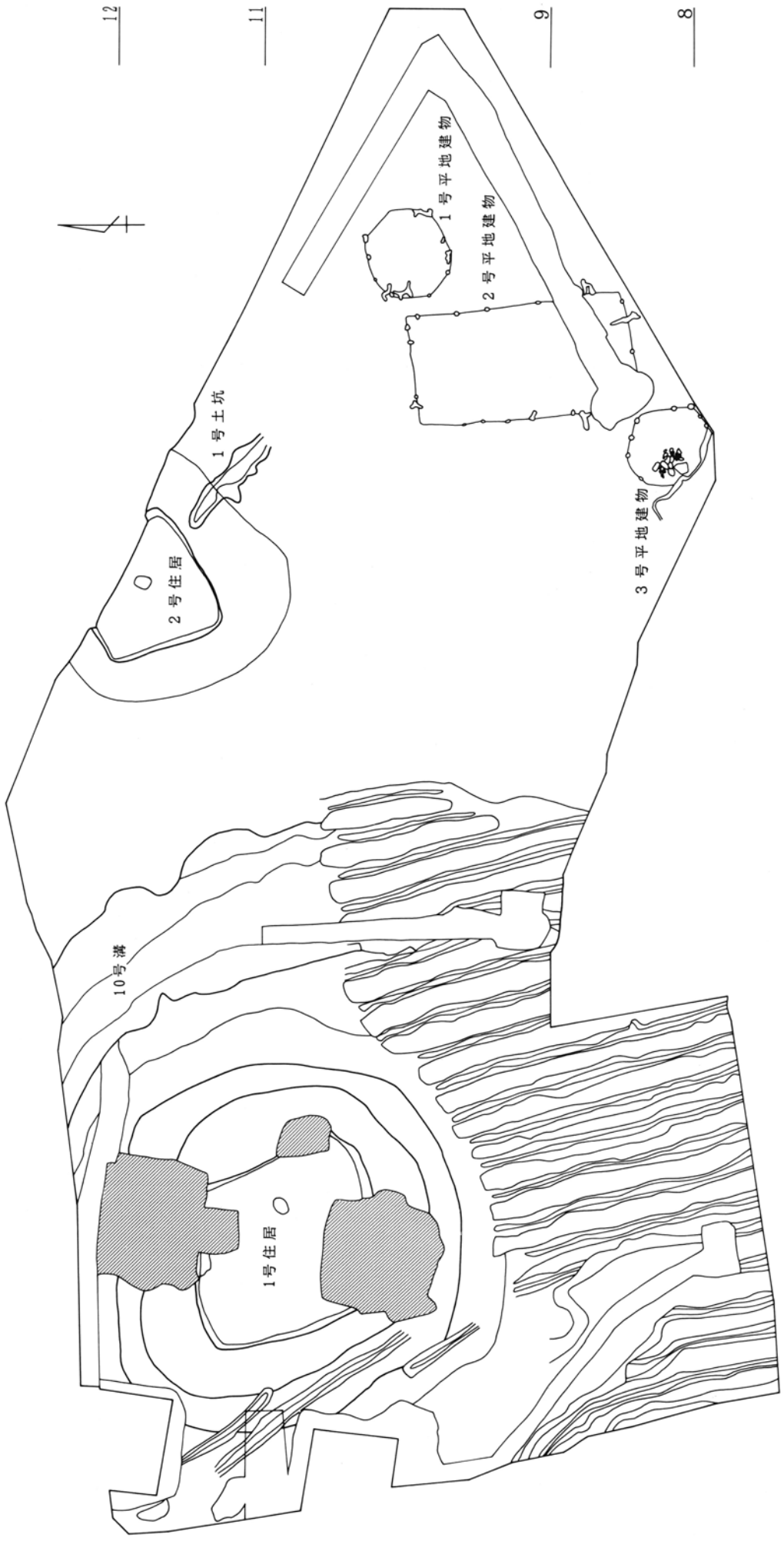
13

12

11

9

8



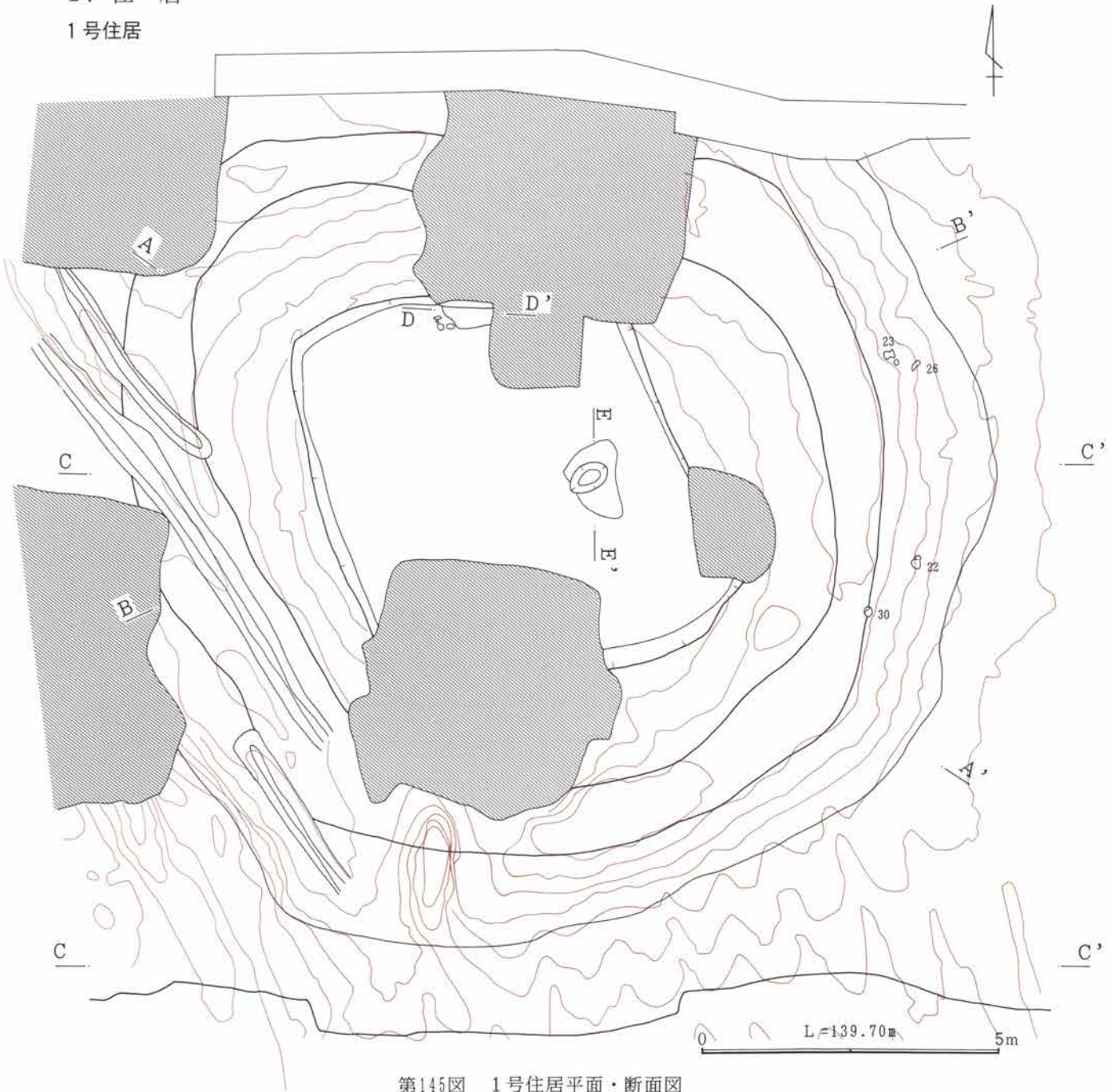
O | N | M | L | K | J | I | H | G | F | E



第144图 清水地区古墳時代全体図

2. 住居

1号住居



第145図 1号住居平面・断面図

1号住居

- | | |
|-----------------------------------|--------------------------------|
| 1. Hr-F A | 9. 黒色土 7に類似、As-Cを僅かに含む |
| 2. 褐灰色土 砂質土、As-Cを少し含む | 10. 暗灰褐色土 砂質土 |
| 3. 黒色土 VIIに類似、As-Cを若干含む | 11. 灰白色砂 As-Cを僅かと灰褐色土ブロックを少し含む |
| 4. 黒褐色土 3に類似、As-Cを少量含む | 12. 淡灰褐色 砂質土、As-Cを僅かに含む |
| 5. 灰黒色土 As-Cを少し含む、硬くしまっている (床面粘土) | 13. 灰白色砂 |
| 6. 灰褐色土 As-Cを僅かに含む | 14. 黒色土 砂質土、VIIに類似 |
| 7. 黒色土 砂質土、As-Cを少し含む | 15. 灰色土 砂質土、VIIに類似 |
| 8. 灰褐色土 6に類似、As-Cを少し含む | 16. 灰色砂 15に類似、15より暗い色調 |

2. 住居

本住居は、調査区の西側、75区L～N-9～12グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、南側に畠が隣接して存在し東側周堤帯下に10号溝を確認した。新旧関係は、溝より後出であるが、畠との新旧関係は明確ではないが、畠は本住居廃絶後も耕作が行われていた。残存状態は、周堤帯もある程度の高さが残存して良好であるが、竪穴部分の北東部分と南西部分には、東京電力送電用鉄塔基礎により壊されている。住居の形態は、竪穴部分では菱形に近い四角形を呈するが、周堤帯外周は隅円方形を呈する。

規模は、長軸6.35m、短軸6.10mで各辺の長さは北辺5.40m、東辺5.20m、南辺6.00m、西辺5.45mを測る。床面積は、32.33m²で周堤帯を含んだ面積は186.28m²である。主軸方位、N-13°-Wを指す。

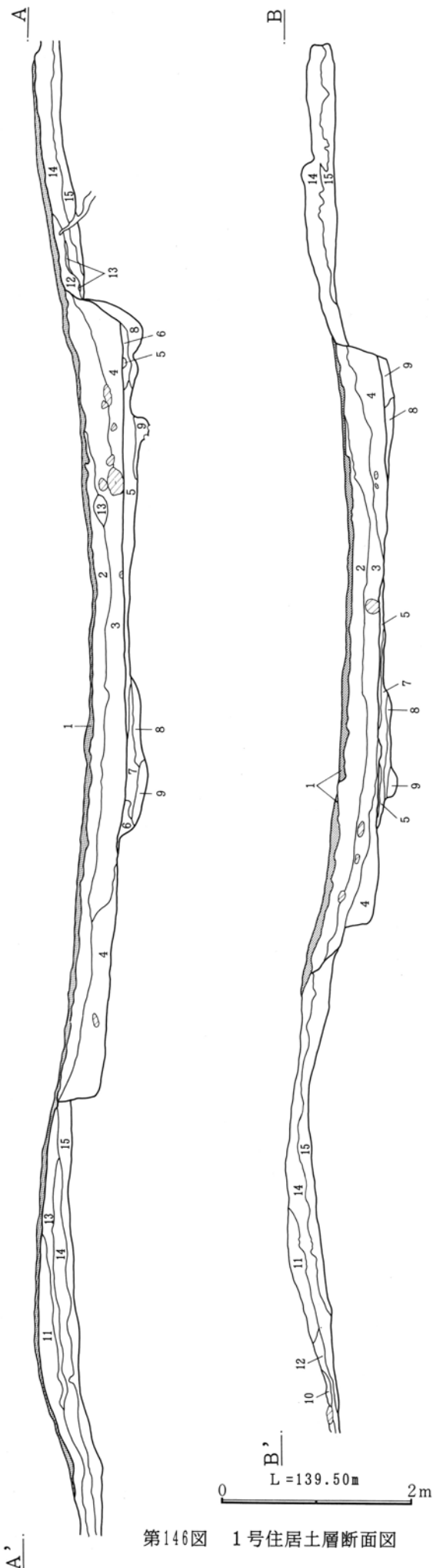
壁高は、北壁60cm、東壁45cm、南壁44cm、西壁48cm。平均50cmである。また、貯蔵穴・柱穴・壁溝などの内部施設は、検出されなかった。床面は、やや東側から西側への傾斜がみられ、掘り方より5～10cmほど黒色土を入れて踏み固めている。

周堤帯は、一部攪乱により壊され不明であるが竪穴部分の周囲に幅約3.80～4.80m、高さ30～40cmで巡り、その土は竪穴部分を掘削した際の土砂を盛り上げたものである。

カマドは、北壁の中ほどに構築されているが、その大部分を攪乱により壊され僅かにカマド構築に使用された数個の礫と焼土・粘土ブロックの存在する程度の非常に不良の残存状態であった。

本住居では、カマドとともに炉を確認した。炉は、竪穴部分の中央よりやや東側に位置している。形態は、楕円形を呈し、規模は長径60cm、短径45cmで10cmほどの掘り込みを呈している。

掘り方は、床面より概ね5～10cmほど掘り込まれているが、竪穴部分の中ほどではさらに15cmほど掘り込まれ、その中ほどには小規模の床下土坑を確認した。床下土坑は、形態が楕円形を呈し、規模は長径52cm、短径45cm、深度38cmで内部に第153図-40の土師器甕が埋納されていた。また、このほかに北西部分では、約10cmほどの掘り込みがみられた。

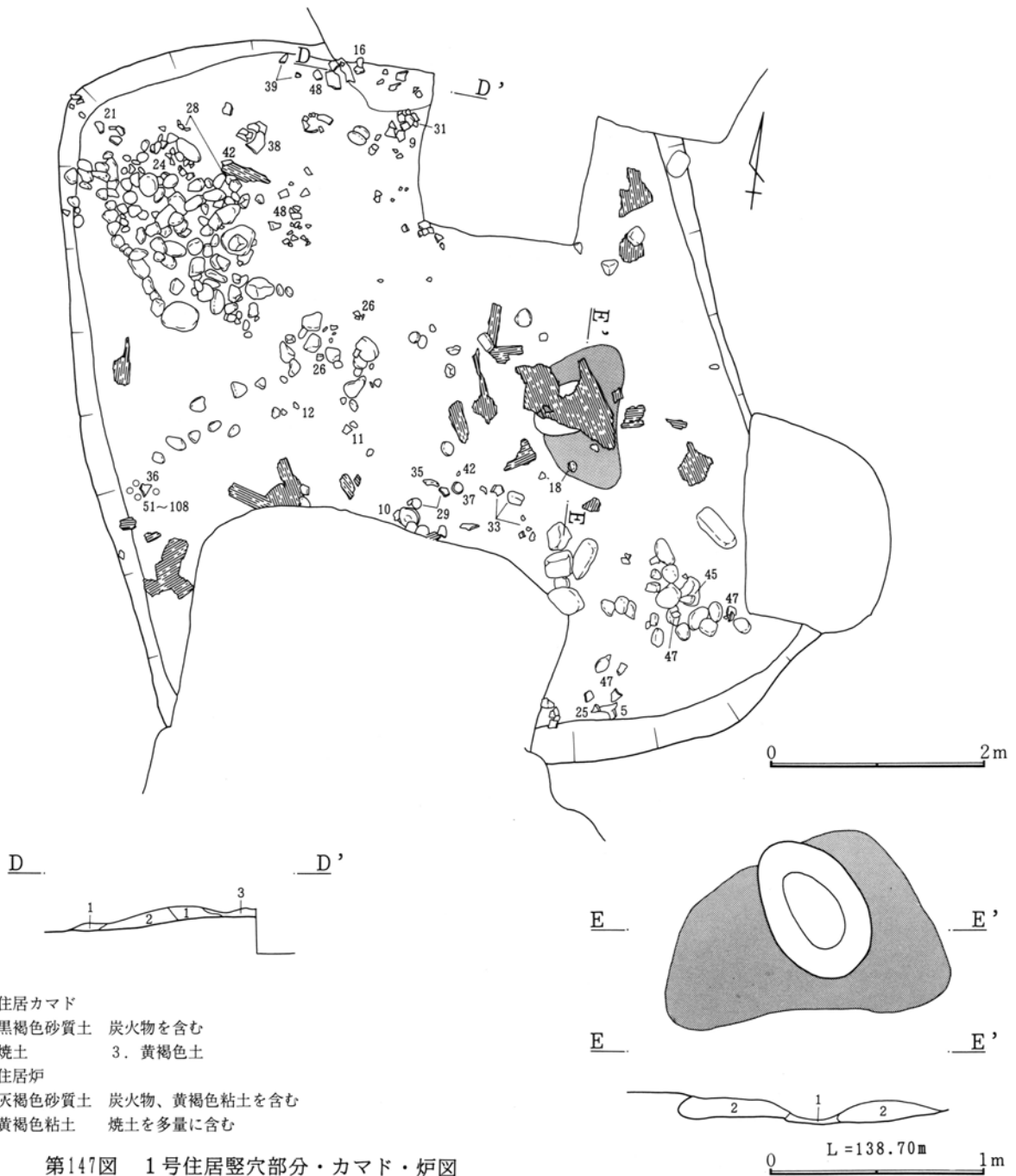


第146図 1号住居土層断面図

V 清水地区の遺構と遺物

Hr-F A層下の埋没土の状態は、土層断面図が示すように壁際から中央へ向けての三角堆積を示しているが、壁際で約40cm、中央部で約30cmと相当堆積が進行した状態であると想定される。住居北西部には、多量の円礫が出土しているが、これらの礫は壁際のものほど床面より高く、住居中央部に近いものほど床面に近い位置からの出土であることから住居廃棄後投棄されたと推定される。

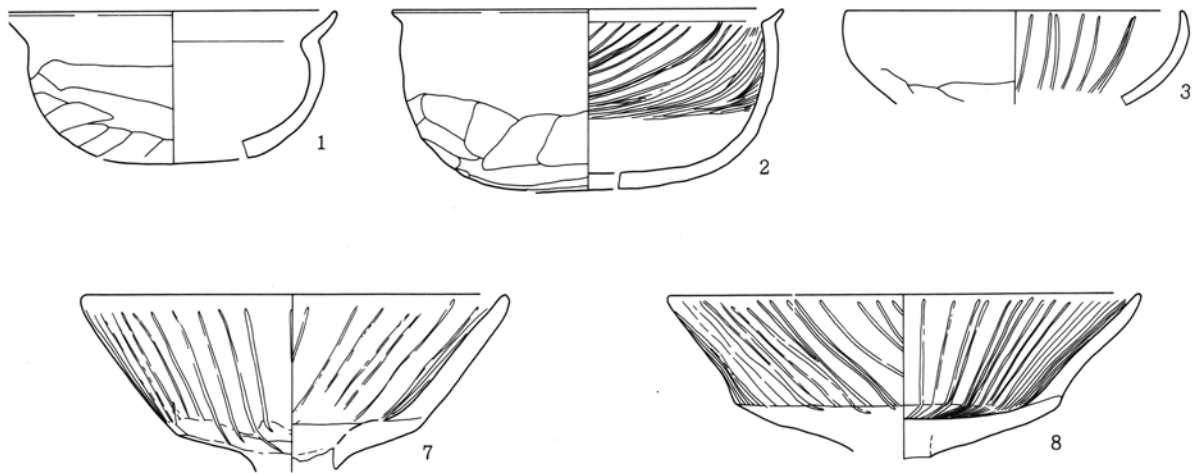
遺物は、土師器杯、高杯、柑、甑、甕、壺、円筒状土器、石製模造品勾玉、白玉が出土している。そして出土した遺物の出土位置は、床面、埋土、掘り方、周堤帯と住居にかかわる箇所から出土している。床面から出土した遺物は、北側のカマド周囲や炉の南側に多く見られる。また、石製模造品白玉は、西壁際の中ほど床面から多く出土している。



第147図 1号住居竪穴部分・カマド・炉図

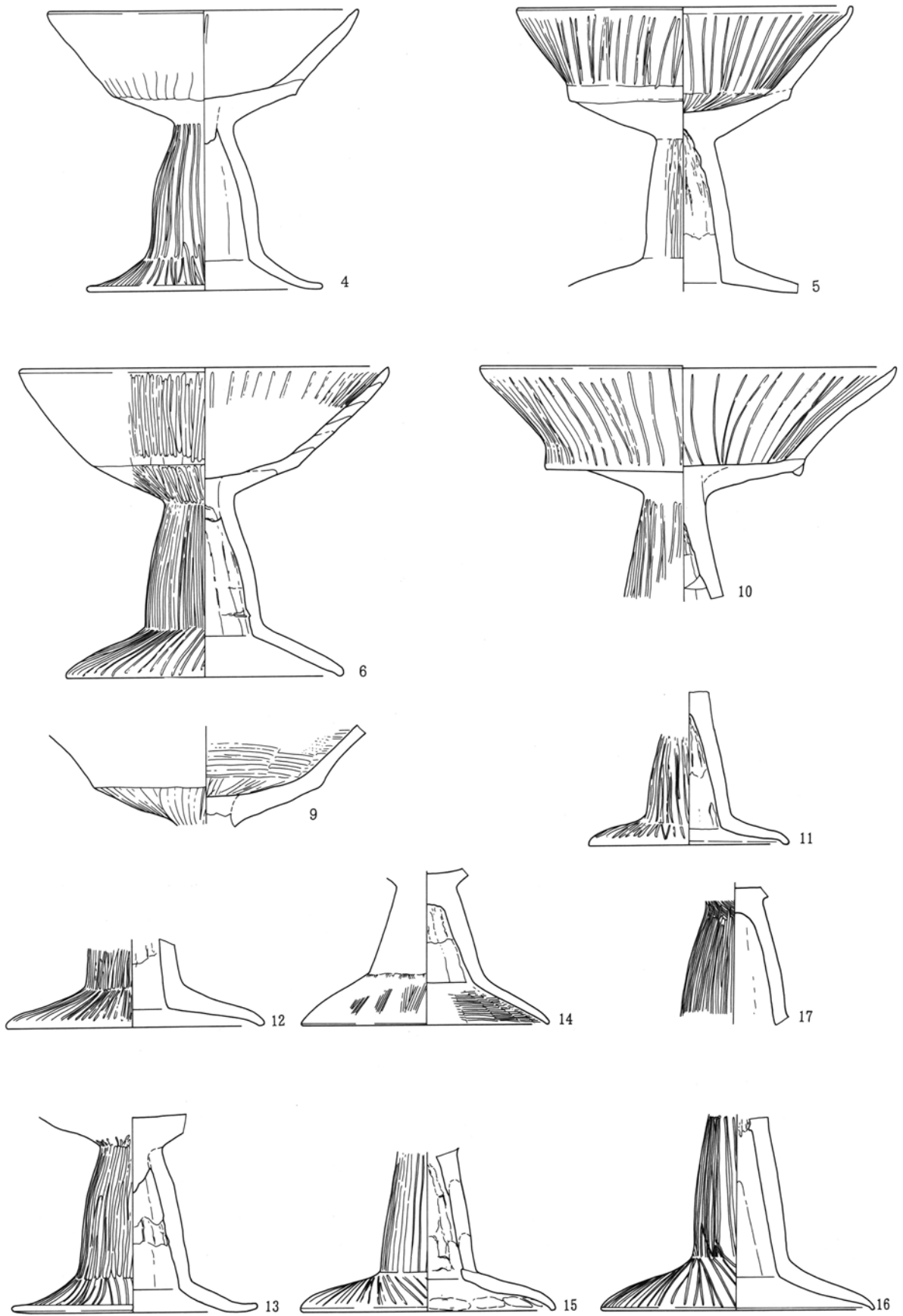


第148図 1号住居掘り方平面・断面図

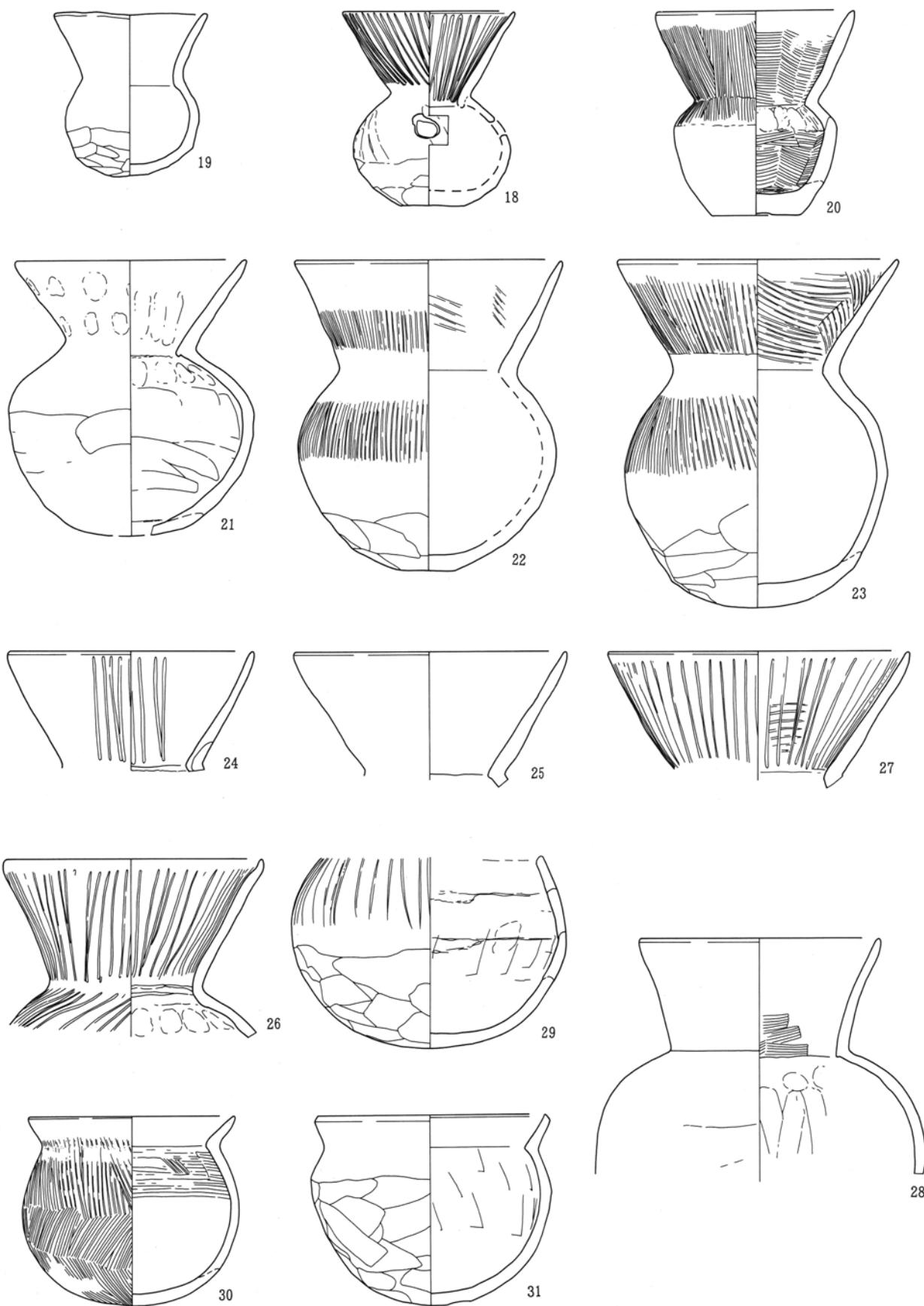


第149図 1号住居遺物図(1)

V 清水地区の遺構と遺物

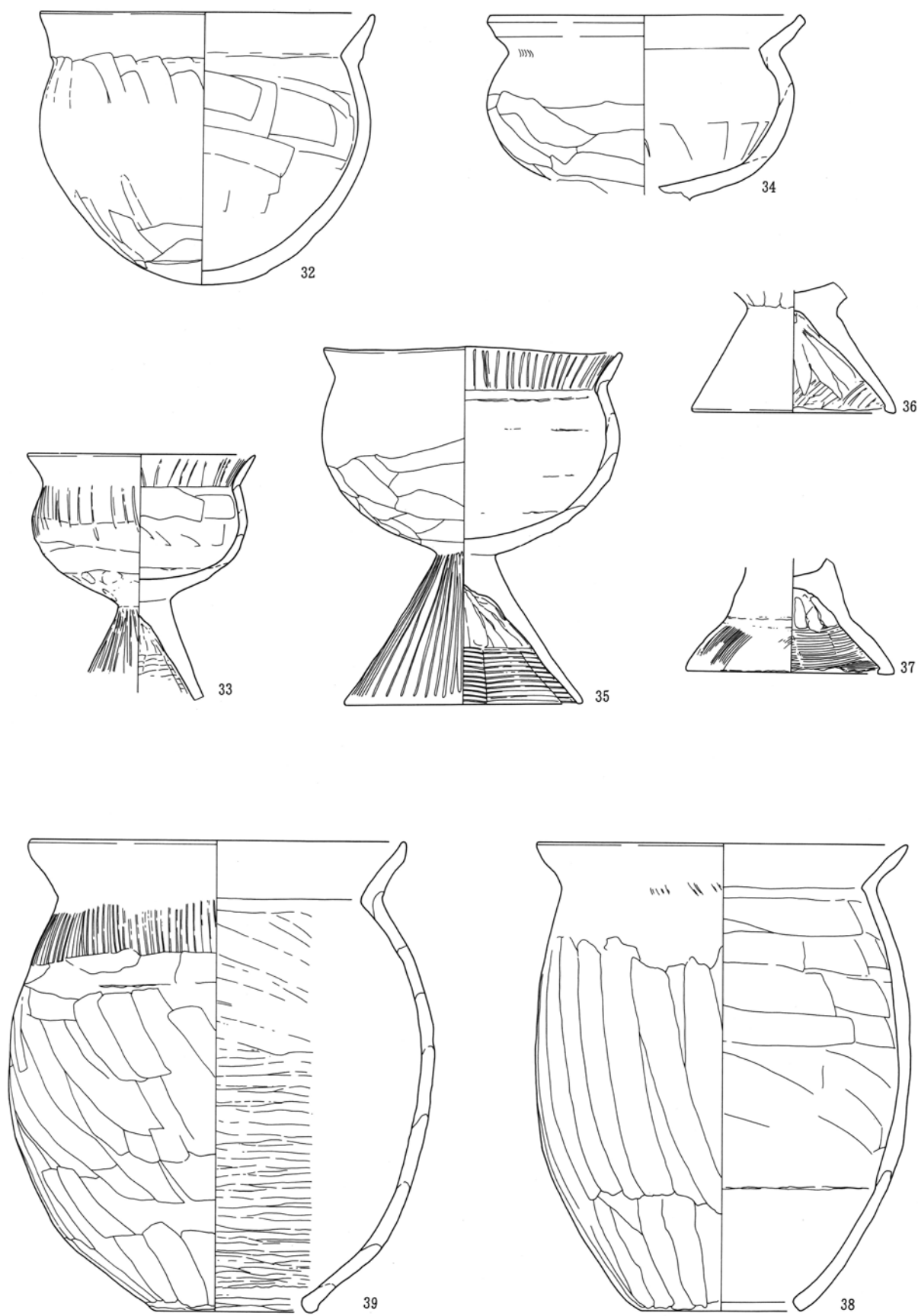


第150図 1号住居遺物図(2)

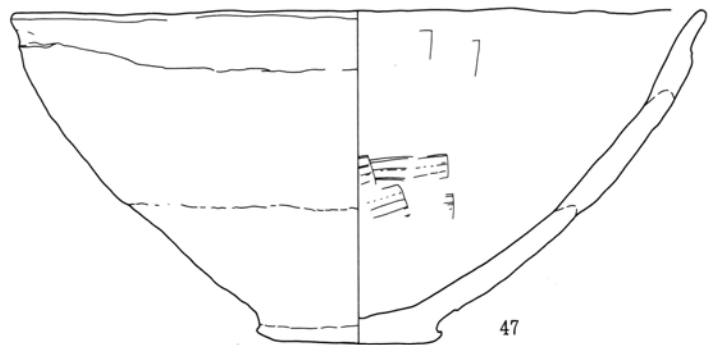
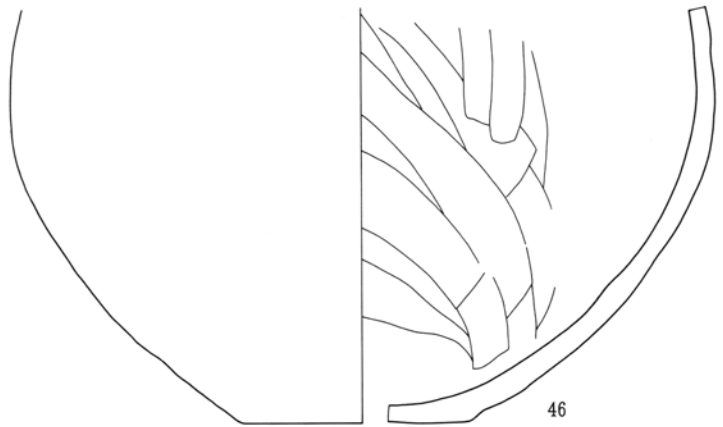
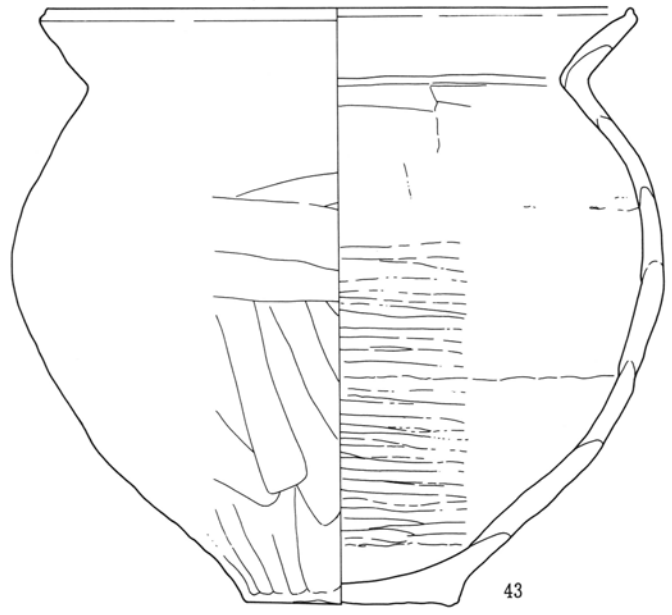
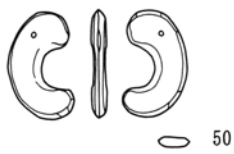
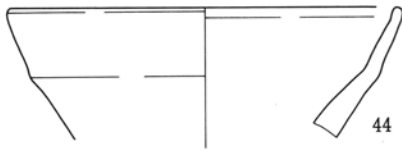
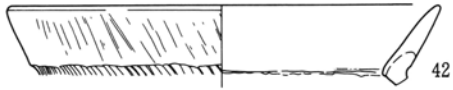
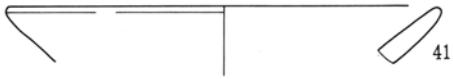
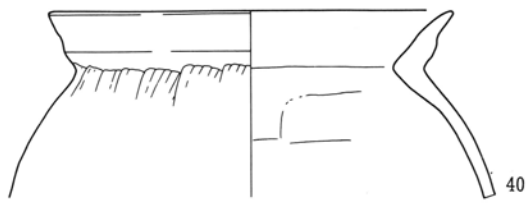


第151图 1号住居遺物图(3)

V 清水地区の遺構と遺物

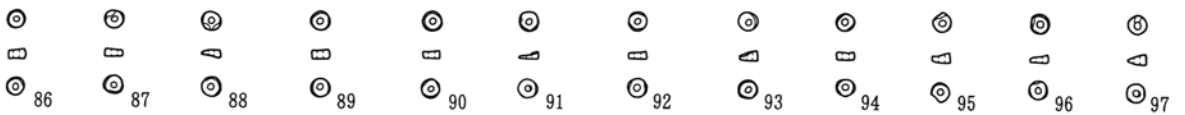
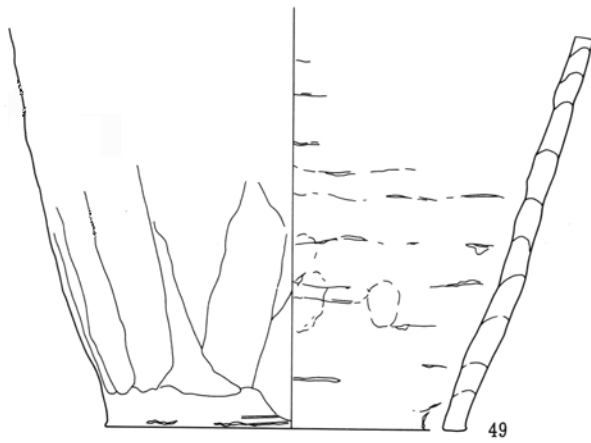
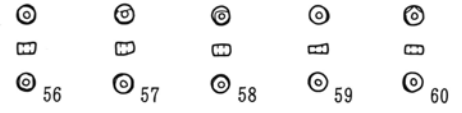
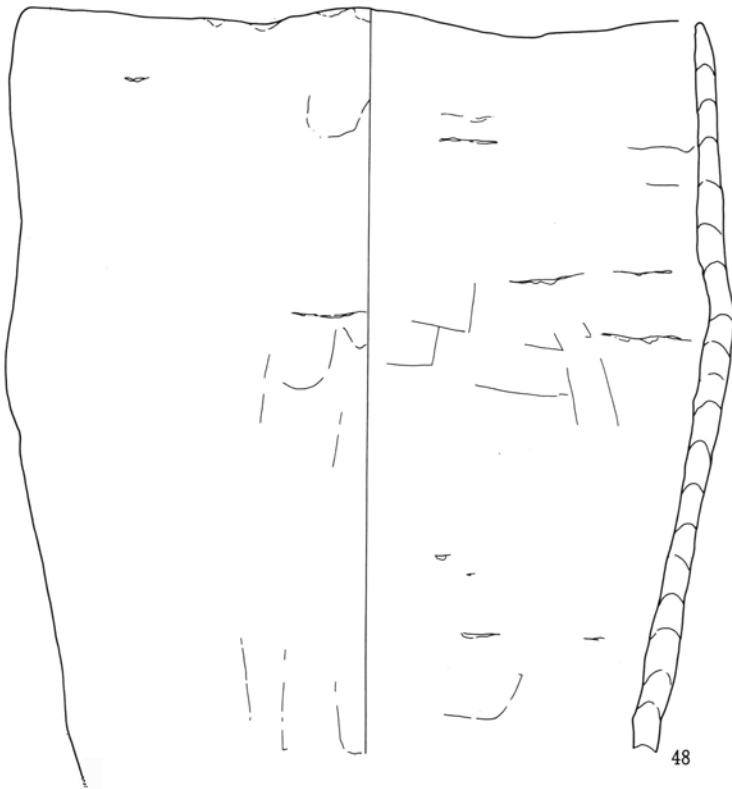


第152図 1号住居遺物図(4)

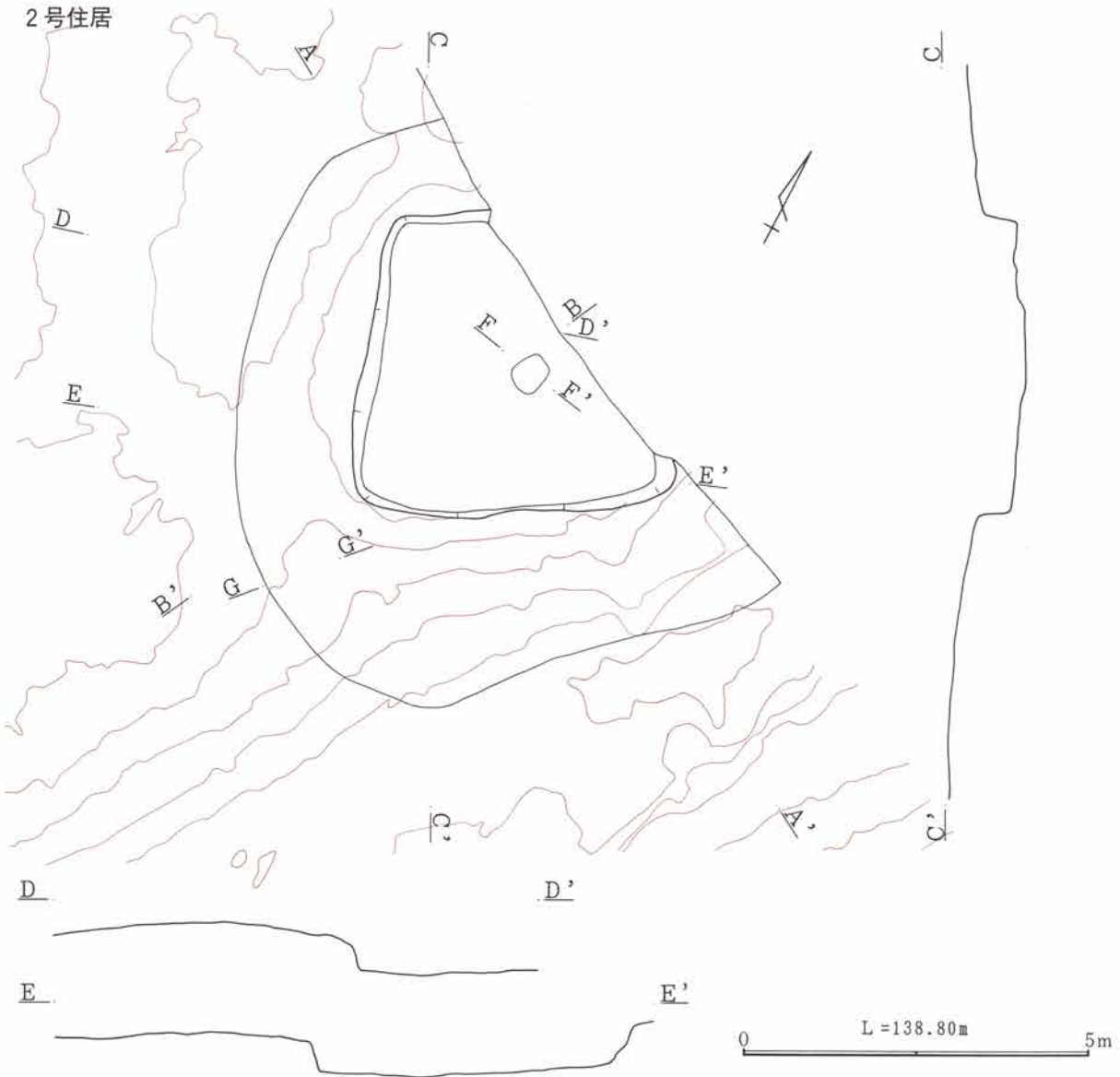


第153图 1号住居遺物图(5)

V 清水地区の遺構と遺物



第154図 1号住居遺物図(6)



第155図 2号住居平面・断面図

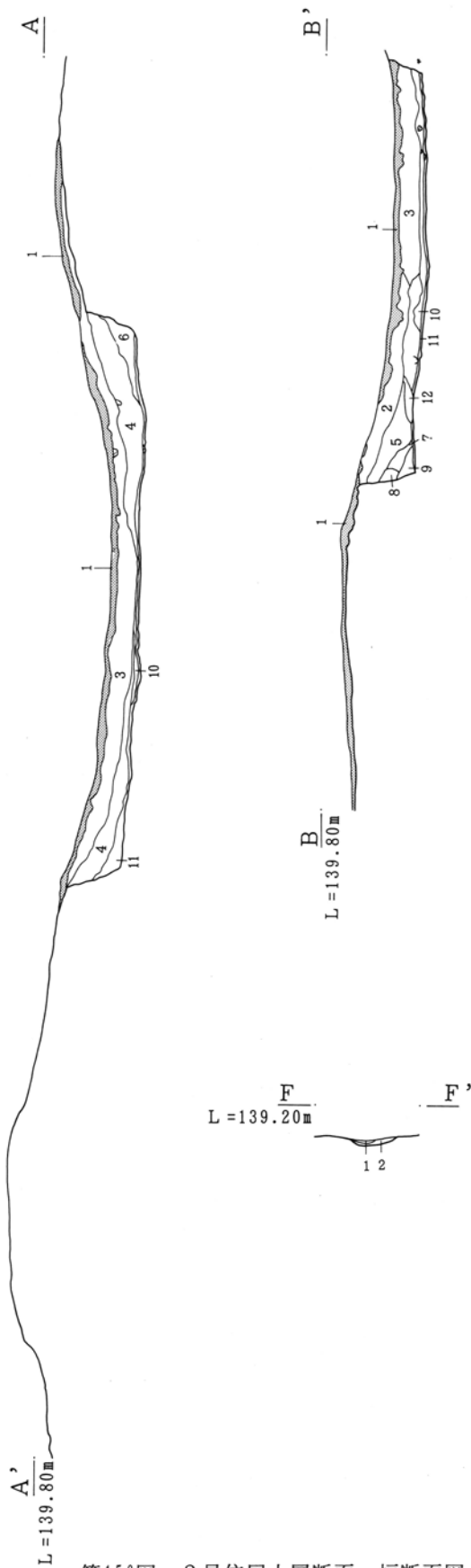
本住居は、調査区の中ほどの北側、75区H～I－10～12グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、東側周堤帯下で1号土坑を検出した。新旧関係は、本住居のほうが後出である。残存状態は、竪穴部分・周堤帯の3分の1が調査区外に存在するが、周堤帯もある程度の高さが残存しており割合と良好な状態である。住居の形態は、竪穴部分では東西方向がやや長い長方形を呈し、周堤帯外周は隅円長方形を呈すると想定される。

規模は、長軸4.70m、短軸4.26mで計測可能な各辺の長さは南辺4.50m、西辺4.20mを測る。床面積

は、推定で16.3㎡で周堤帯を含んだ面積も推定62.6㎡である。主軸方位は、N-65°-Eを指す。

壁高は、北壁44cm、東壁54cm、南壁49cm、西壁47cm、平均49cmである。また、貯蔵穴・柱穴・壁溝などの内部施設は、検出されなかった。床面は、地山をそのまま踏み固めている。

周堤帯は、一部調査区外に存在するため不明であるが、竪穴部分の周囲に幅約1.30～2.00m、高さ20～30cmで巡る。その土は、竪穴部分を掘削した際の土砂を盛り上げたものである。また、南西部分の周堤帯下には、第159図-15・16の土師器甑、壺など



第156図 2号住居土層断面・炉断面図

が出土した。このような土器の出土から五反田地区126号住居の周堤帯下の土器集積と同様に住居構築の際の祭祀が想定される。

炉は、竪穴部分のほぼ中央に位置する。形態は、楕円形を呈し、規模は長径56cm、短径47cm、深さ3cmほどの窪みがみられる。

Hr-F A層下の埋没土の状態は、土層断面図が示すように壁際から中央へ向けての三角堆積を示しているが、壁際で約50cm、中央部で約30cmと相当堆積が進行した状態であると想定される。

遺物は、土師器杯、高杯、埴、甑、壺、弧も編み石等が出土している。出土遺物は、住居東側にわりあい多く見られるがこちら側の遺物は床面より10~20cmほど上位で出土している。住居西側からは13の壺が床面から出土しているがこの壺の中央には30cm大の円礫があり壺がわりあいと小破片の状態であることから礫を上から落として壊した可能性がみられる。また、南西角の床面からは、弧も編み石と使用された30×10cm大の細長い円礫がまとめて出土している。

2号住居

1. Hr-F A (Hr-SのS-1)
- 1'. Hr-F Aの火砕流ブロック (Hr-SのS-5)
2. 黒褐色土 砂質土、As-Cを少量含む
3. 黒色土 As-Cを少量含む
- 3'. 黒色土 3に類似するが、鉄分の付着が激しい
4. 黒褐色土 3に類似するが、全体に茶色をおびている(鉄分のためか)
5. 黒褐色土 4に類似(2層に似るが鉄分多い) As-Cを少量含む
6. 灰白色砂 VIIと同様、壁の崩壊土
7. 灰褐色砂質土 VIIIに類似、As-Cを僅かに含む
8. 灰褐色砂 7と9が混在したもの、As-Cを僅かに含む
9. 灰白色砂 VIIと同様、壁の崩壊土、As-Cを僅かに含む
10. 暗茶褐色土 砂質土、As-Cをほとんど含まない(掘り方)
11. 暗灰褐色砂質土
12. 灰褐色粘質土

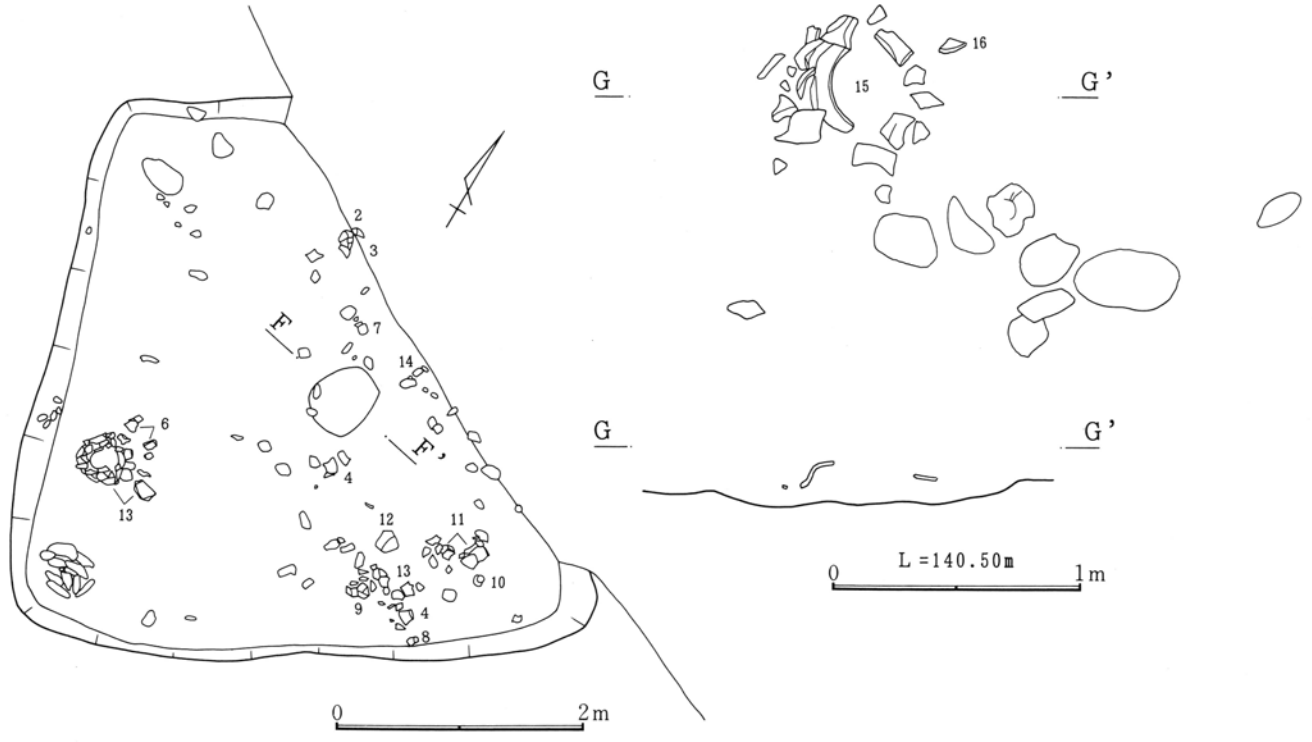
2号住居炉

1. 黒褐色土 少量の炭火物を含む
2. 灰褐色砂質土

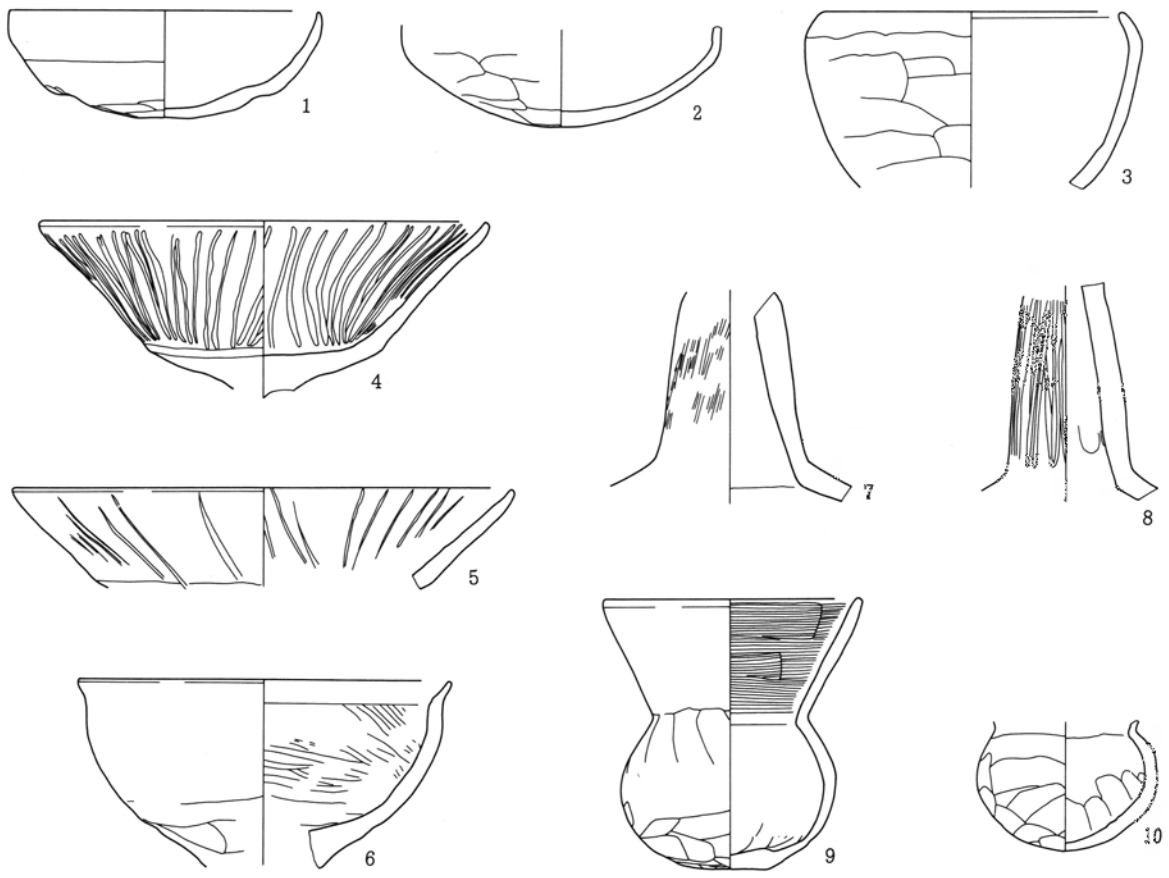
2号土器集中

1. Hr-F A
2. 黒褐色土 鉄分の沈着が見られる

2. 住居

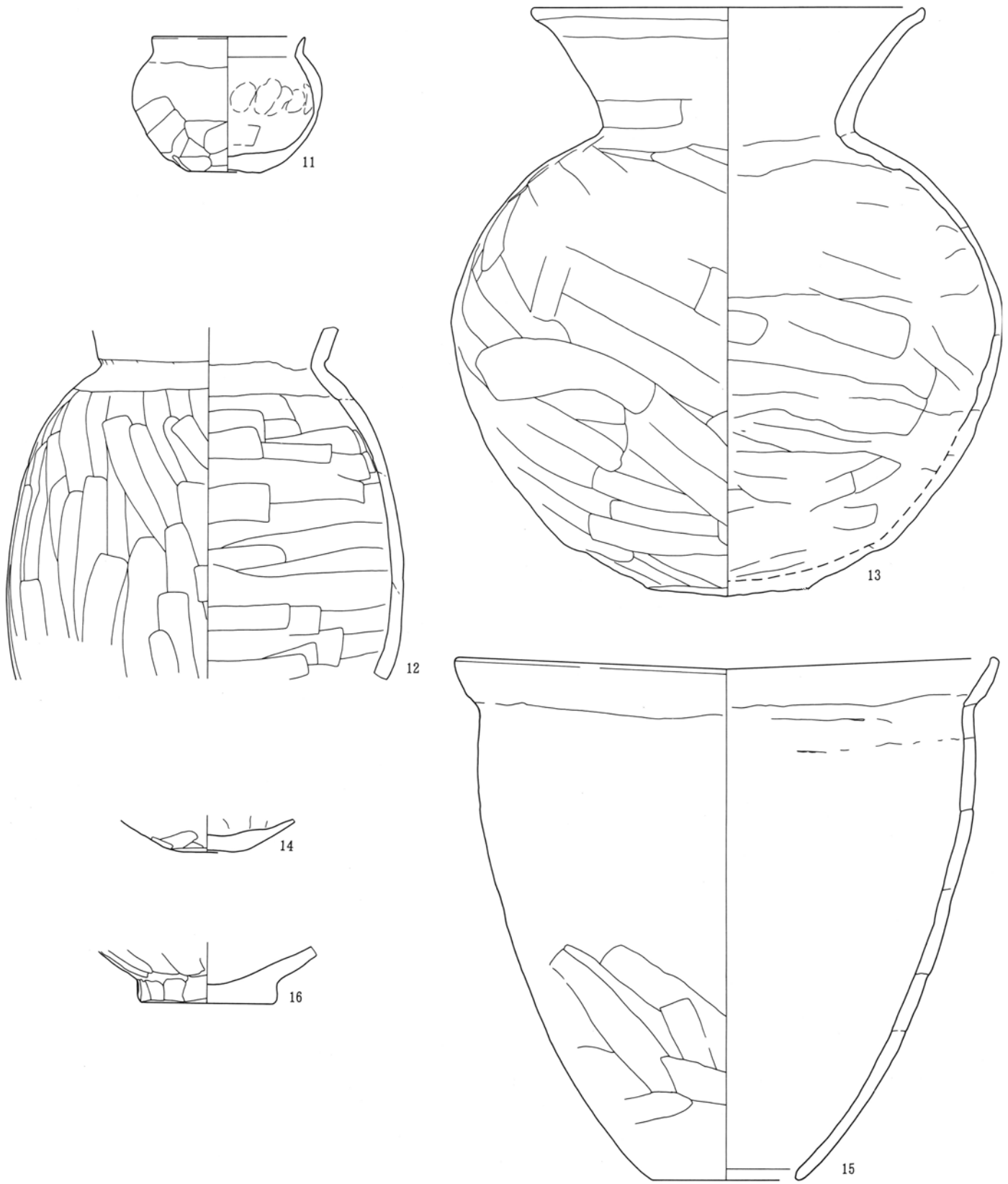


第157图 2号住居竖穴部分・周堤带下遺物出土状態図



第158图 2号住居遺物図(1)

V 清水地区の遺構と遺物



第159図 2号住居遺物図(2)

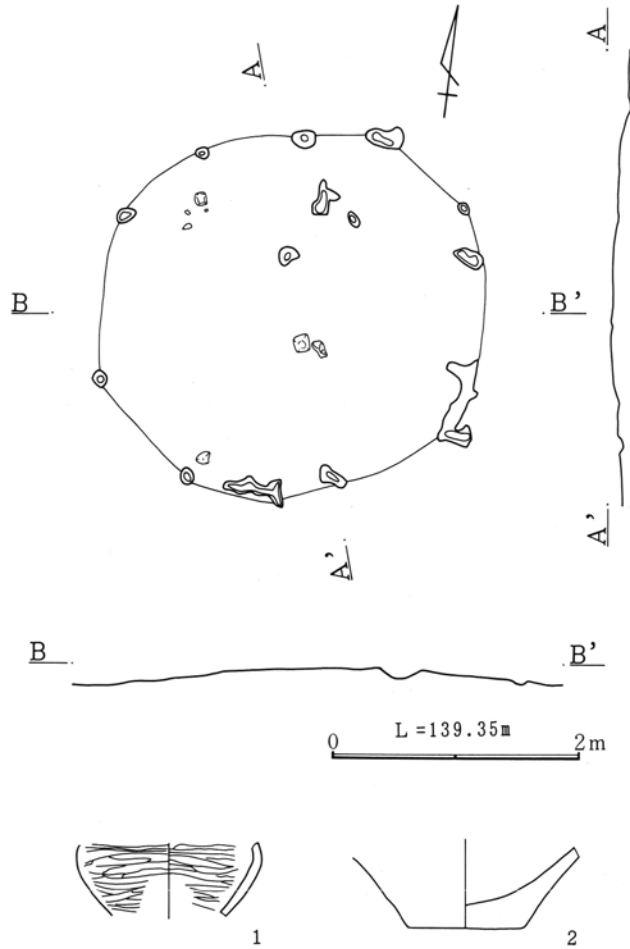
3. 平地建物

1号平地建物

本遺構は、調査区の東南部、F-9~10グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、確認されなかった。残存状態は、周囲や床面の一部に短い溝状の落ち込みがみられるがほぼ良好な状態で検出した。検出に際しては、2号・3号平地建物も同様であったが遺構上部に堆積していたHr-F A層を削平した段階では明確に確認できなかったが、床面が周囲に比べて硬化していた点や硬化面の周囲に小ピットが存在し、削平後時間の経過とともに平地建物部分の土壌の色彩が淡色化するなどの変化が見られたことから確認した。平面形態は、楕円形を呈している。

規模は、長軸3.13m、短軸2.81mを測る。遺構の面積は、7.23m²である。主軸方位は、N-67°-Eを指す。遺構周囲には、0.70~1.30mの間隔で径15~20cm、深度5cm前後の小ピットが配置されている。遺構内部は、周囲より硬くなって床面状を呈している。床面は、中央部が周辺部に比べて約10cmほど高くなっている。遺構内部からは、柱穴、貯蔵穴などの施設はみられなかった。

遺物は、第160図に図示した土師器埴・壺のような小片が出土している。



第160図 1号平地建物平面・断面・遺物図

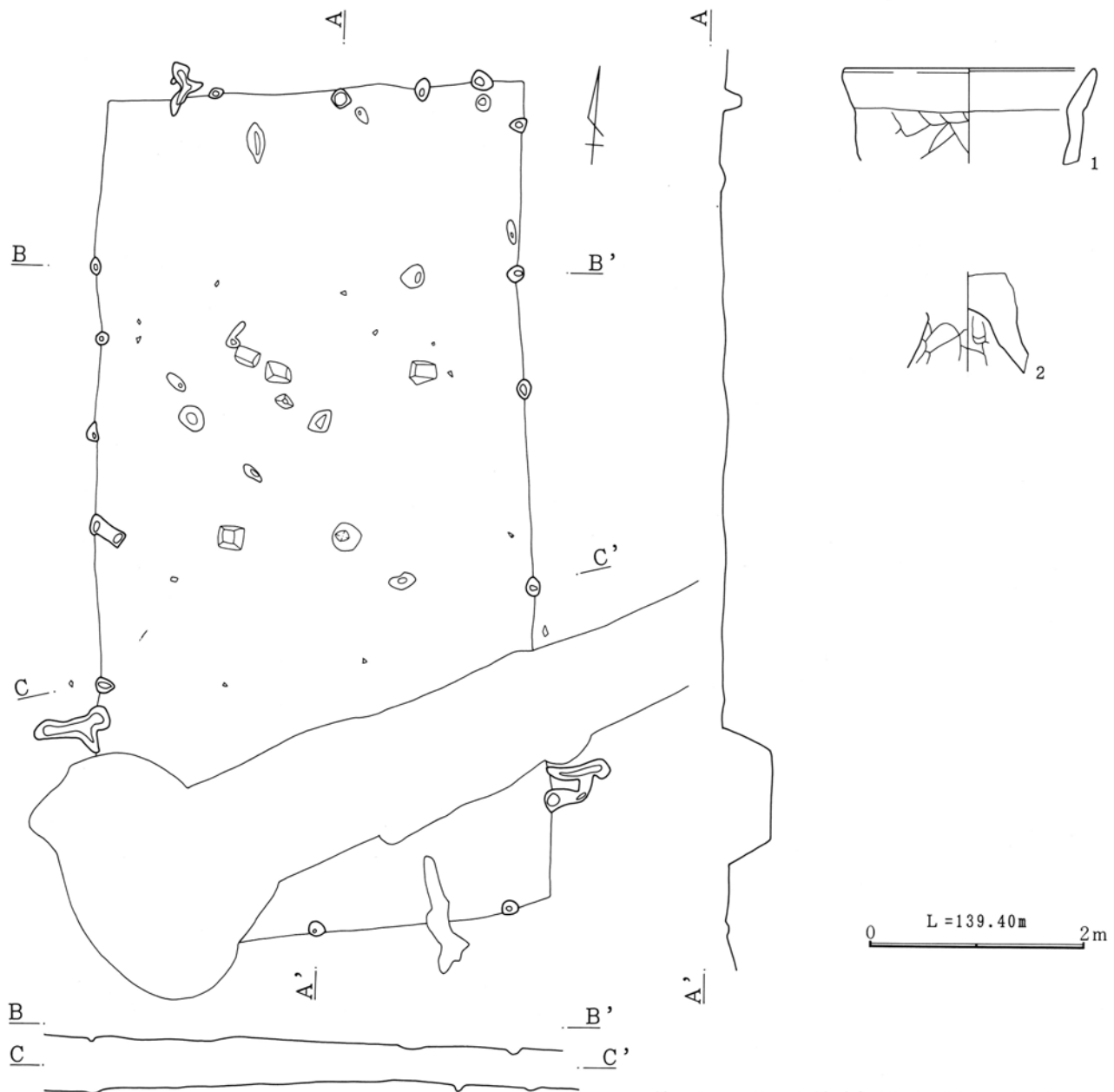
2号平地建物

本遺構は、調査区の東南部、F-8、G-8~9グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、確認されなかった。残存状態は、南側の一部を調査用排水溝により壊したが、他は良好な状態である。平面形態は、北辺がやや短いほぼ長方形を呈す。

規模は、長軸7.70m、短軸3.96mで各辺の長さは北辺3.82m、東辺7.50m、南辺4.07m、西辺7.78mを測る。遺構の面積は、30.65m²である。主軸方位は、

N-6°-Wを指す。遺構周囲には、0.50~1.80mの間隔で径15~20cm、深度5cm前後の小ピットが配置されている。遺構内部は、1号平地建物と同様に床面状を呈している。床面の状態は、ほぼ平坦で硬く踏み固められている。遺構内部からは、柱穴、貯蔵穴などの施設はみられなかった。

遺物は、第161図で図示した土師器杯・高杯等の小片が出土している。



第161図 2号平地建物平面・断面・遺物図

り約10cmほど高い状態で硬く踏み固められている。遺構内部からは、柱穴、貯蔵穴などの施設はみられなかったが、西側にカマドと想定される石組を検出した。

カマドは、 $\phi 20\sim 40\text{cm}$ の円礫を東西方向に配置している。規模は、全長1.10m、幅0.70mである。堆積土は、中ほどに焼土ブロックが若干確認されたが、天井部や袖に相当する部分は礫を配置しただけで粘土等の使用は確認できなかったため確実にカマドと断定するには至らなかった。

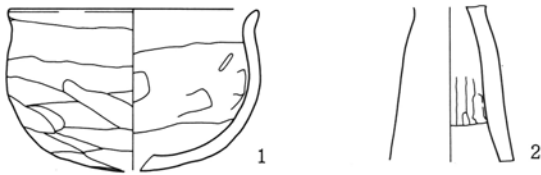
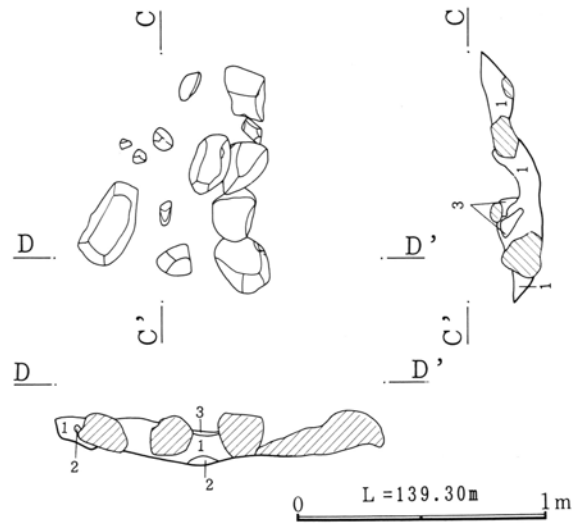
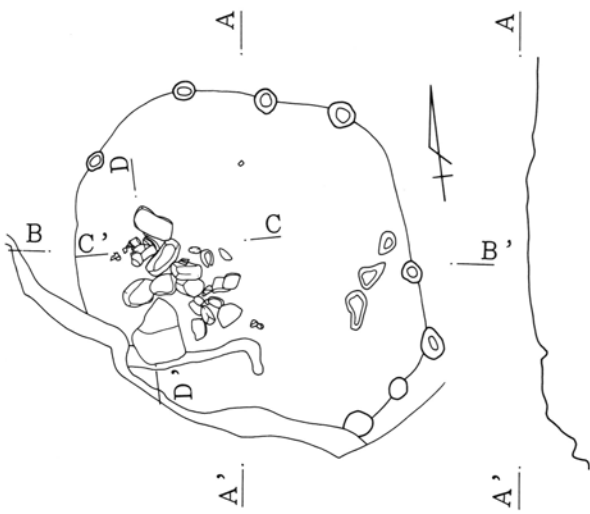
遺物は、第162図で図示した土師器杯・高杯等の小片が出土している。

3号平地建物

本遺構は、調査区の東南部、G～H-7～8グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、確認されなかった。残存状態は、南側で地割れにより壊されているため不明であるが、他は良好な状態である。平面形態は、楕円形を呈す。

規模は、長軸3.06m、短軸2.60mを測る。遺構の面積は、 6.27m^2 である。主軸方位は、 $N-37^\circ-E$ を指す。遺構周囲には、0.50～1.50mの間隔で径15～20cm、深度5～10cm前後の小ピットが配置されている。遺構内部は、1号・2号平地建物と同様に床面状を呈している。床面の状態は、中央部が周辺よ

4. 土 坑



3号平地建物カマド

- 1. 黒褐色土 浅間山C軽石を含む
- 2. 焼土ブロック
- 3. 灰褐色砂質土

第162図 3号平地建物平面・断面・カマド・遺物図

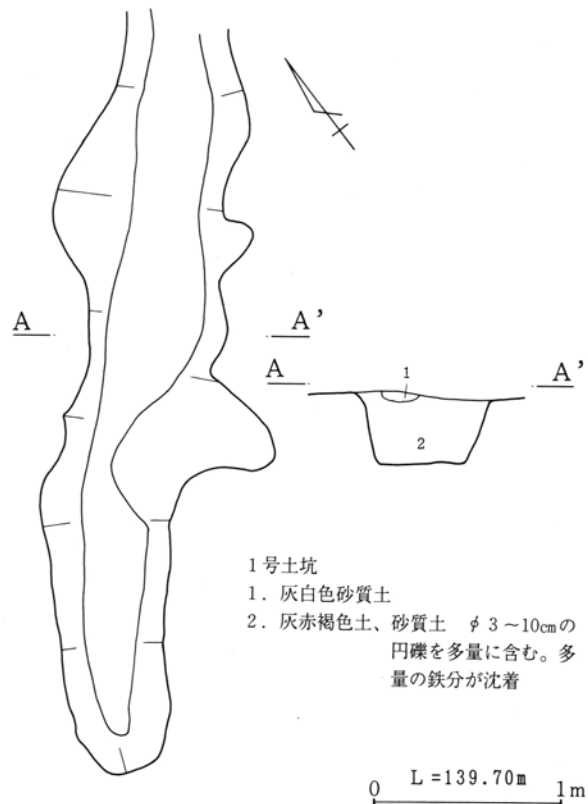
4. 土 坑

1号土坑

遺構は、中央北側、75区H-11グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、2号住居の周堤帯部分と重複する。新旧関係は、検出が周堤帯下からであることから本遺構の方が前出である。残存状態は、東辺部分が不明確であった。平面形態は、途中に凹凸がみられる溝状を呈す。規模は、全長4.10mほどで幅は0.70m前後、深度38cmである。

埋没土は、大部分が灰褐色砂質土で短期間の埋没か埋め戻しによると想定される。

遺物は、土師器の小片が若干出土しているだけである。



1号土坑

- 1. 灰白色砂質土
- 2. 灰赤褐色土、砂質土 φ3~10cmの円礫を多量に含む。多量の鉄分が沈着

第163図 1号土坑平面・土層断面図

5. 溝

10号溝

本遺構は、調査区の中央付近、75区J～K-8～11、K・L-12グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、南側で畝とそして西側で1号住居周堤帯と重複する。新旧関係は、本遺構の方が前出である。残存状態は、一部を試掘坑により壊したが、その他の箇所は良好な状態である。なお、本遺構は、北側及び南側の調査区外の両側に延びるため全貌は不明である。走行は、調査区南半がほぼ南北方向で調査区北半ではN-37°-Wに走行を変えている。規模は、幅3.50～5.05mで深度は1.50m前後である。断面形態は、両側から緩い傾斜の船底形を呈している。

埋没状態は、両側からの黒色土が流込んだレンズ状の自然堆積である。底部付近の堆積土には、黒色シルト質土や暗褐色砂質土等の砂粒や鉄分の沈殿が確認されていることから流路としての可能性が高い。

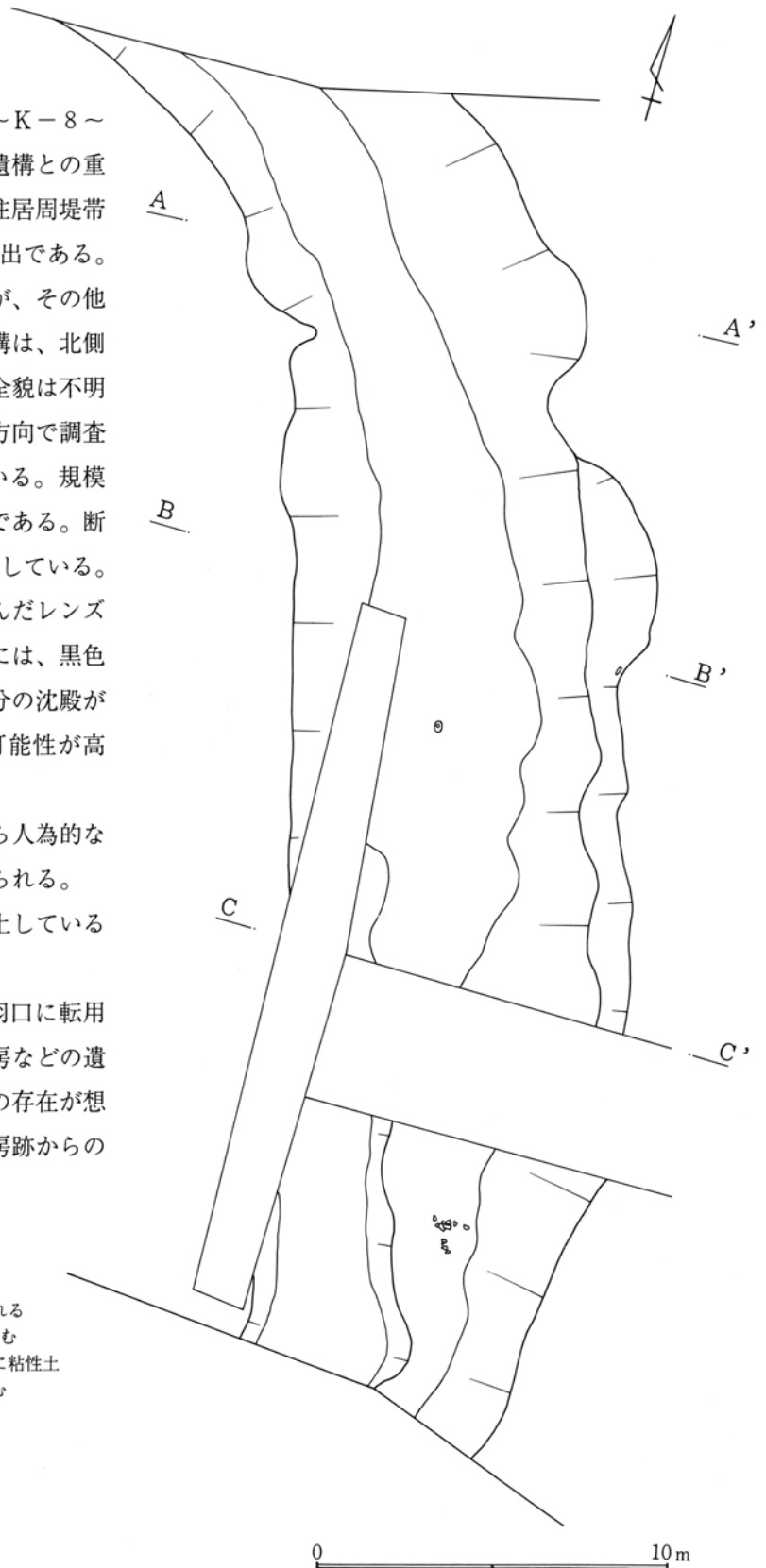
本遺構は、堆積土の状況や断面形態から人為的なものではなく一次的な自然の流路と考えられる。

遺物は、土師器高杯、埴、甕、壺が出土しているが、高杯の比率が他の遺構に比べて多い。

また、第167図-14の土師器高杯は、羽口に転用された物である。調査区内では、鍛冶工房などの遺構は検出しなかったため周囲に鍛冶工房の存在が想定される。本遺構は、こうした周囲の工房跡からの不要品の廃棄場所であったようである。

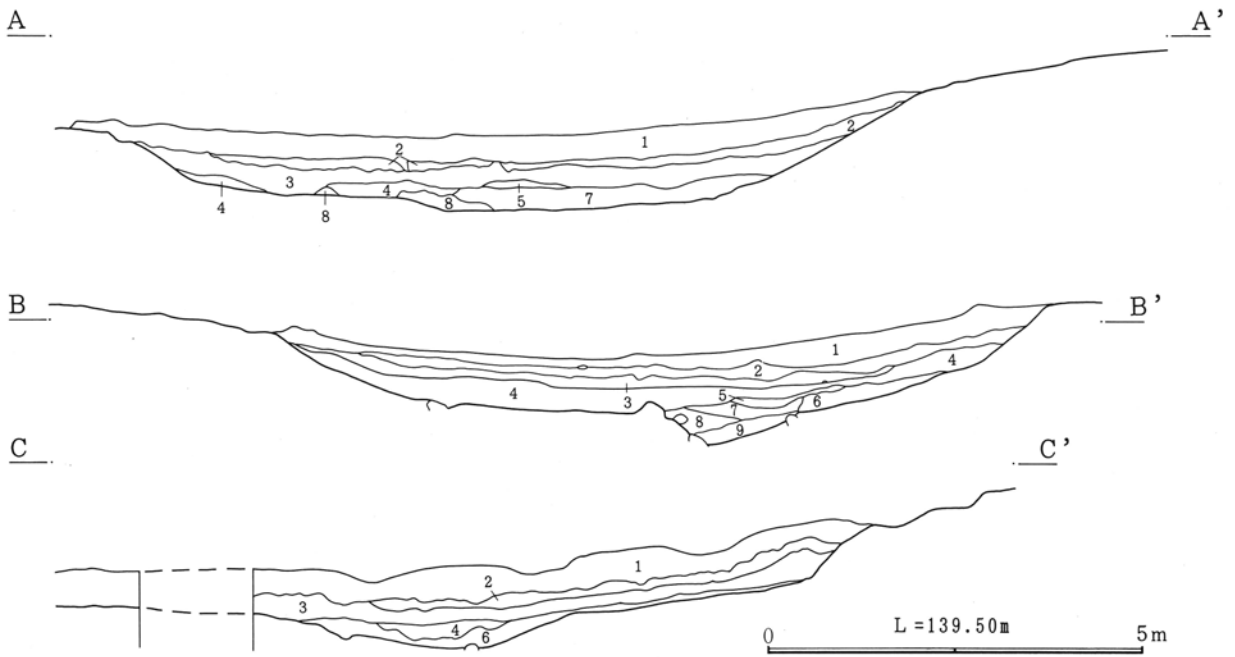
10号溝

1. 黒色粘性土 As-Cを少し含む、植物が少し含まれる
2. 黒灰色土 粘性土、明灰色粘土ブロックを少し含む
3. 暗灰色シルト質土 As-Cを僅かに含む、部分的に粘性土
4. 黒灰色シルト質土 As-Cを僅かと砂礫を若干含む
5. 明褐色砂 円礫を少しとAs-Cを僅かに含む
6. 暗褐色土 シルト質土、上面に僅かに鉄分付着
7. 黒褐色土 シルト質土、灰色砂少し含む
8. 黒色土 シルト質土
9. 暗褐色土 砂質土、下面に鉄分付着

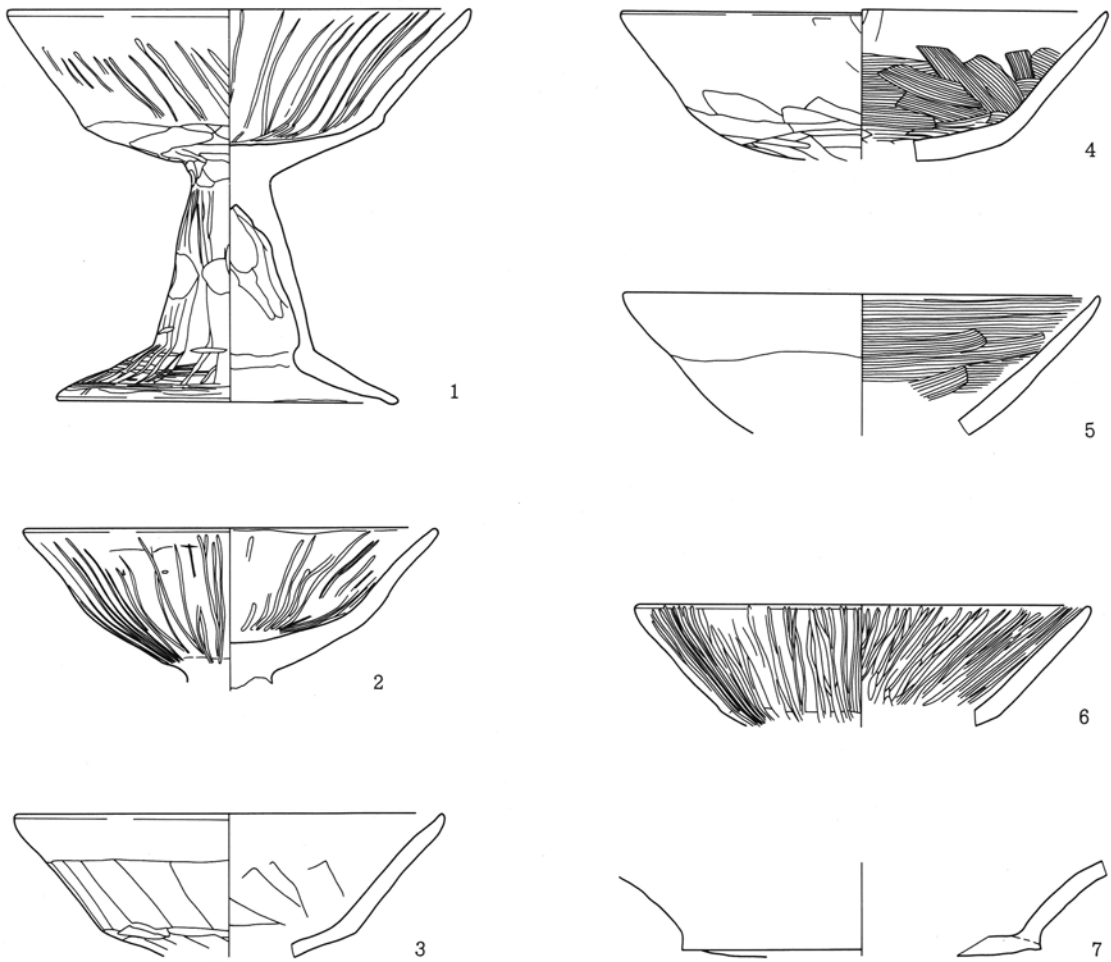


第164図 10号溝平面図

5. 溝

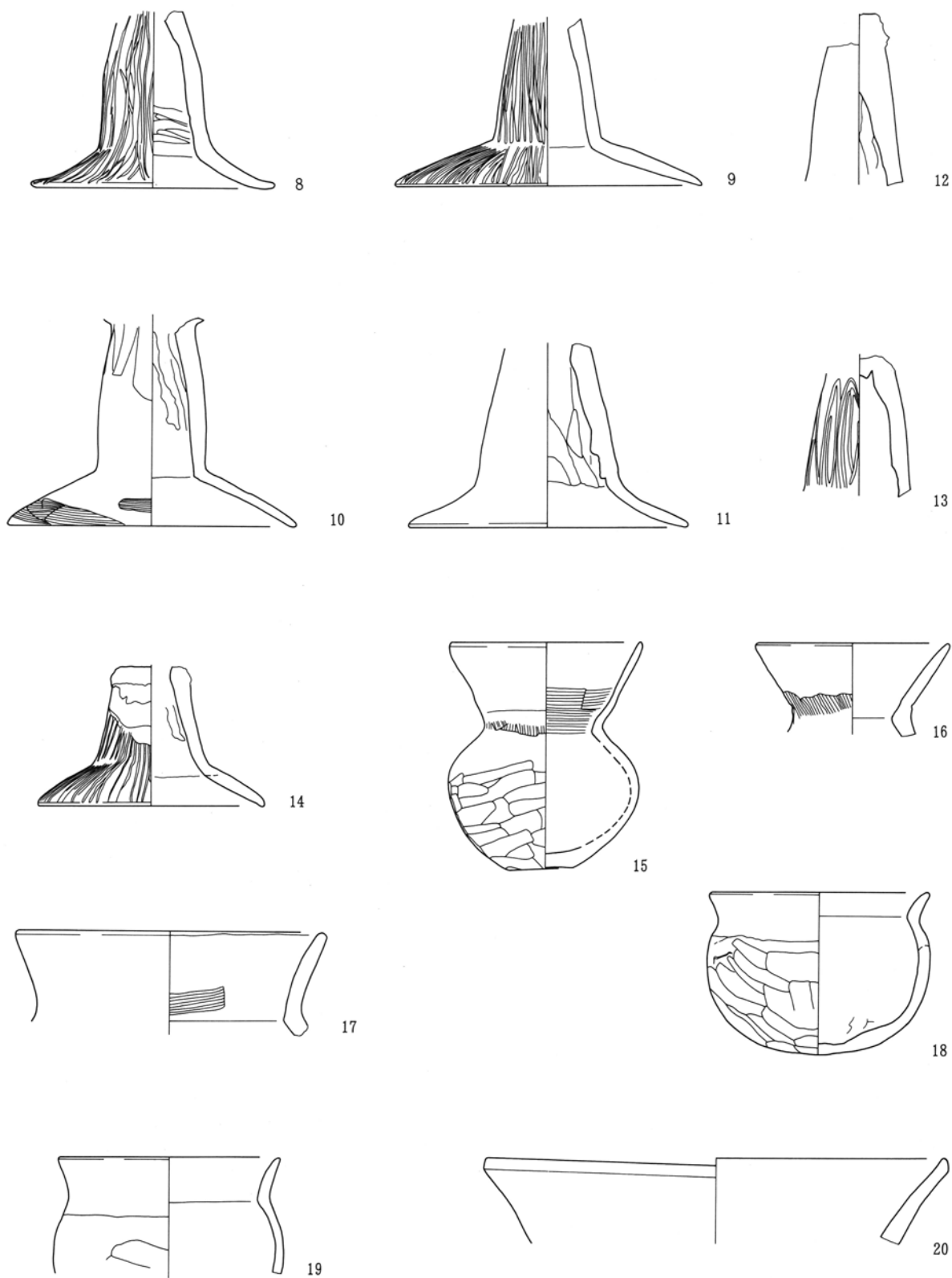


第165图 10号溝土层断面图



第166图 10号溝遺物图(1)

V 清水地区の遺構と遺物



第167図 10号溝遺物図(2)

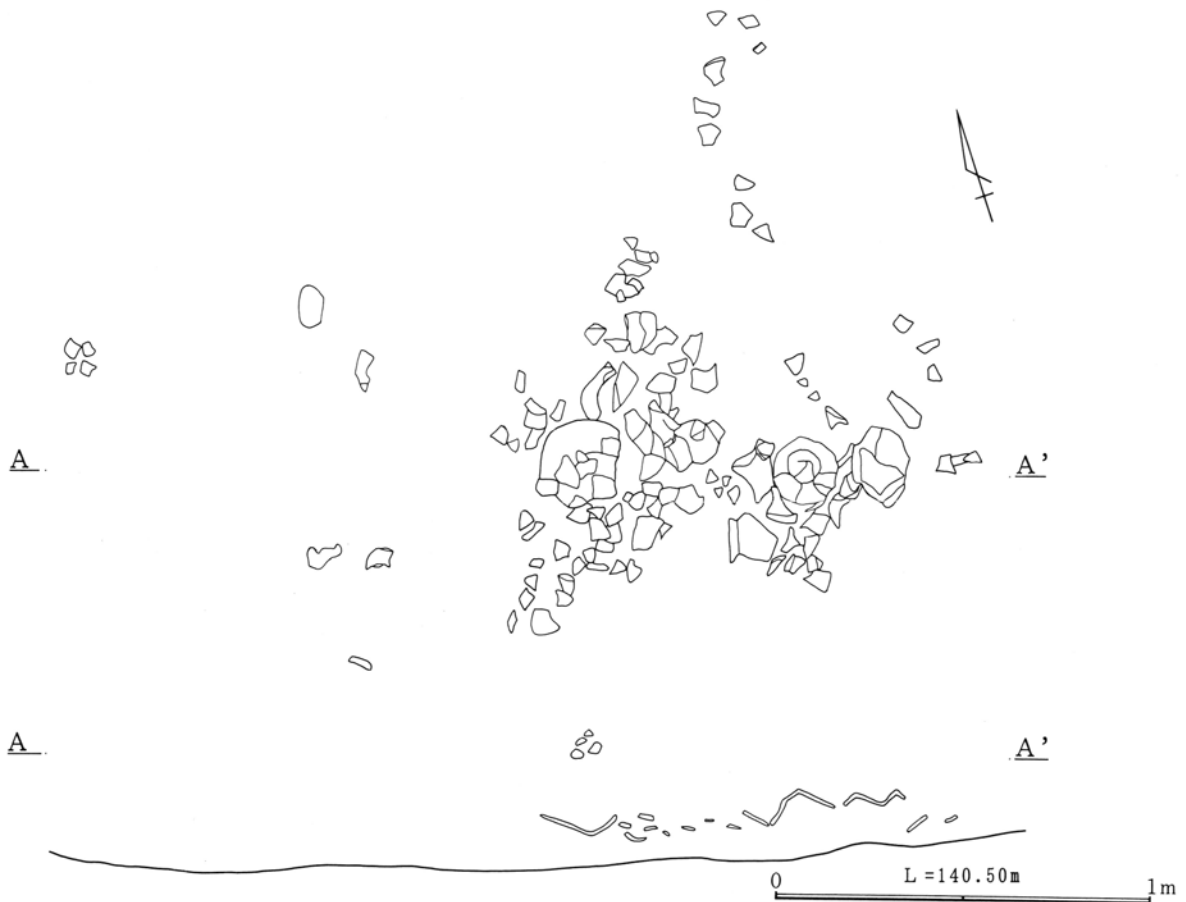
6. 土器集積

1号土器集積

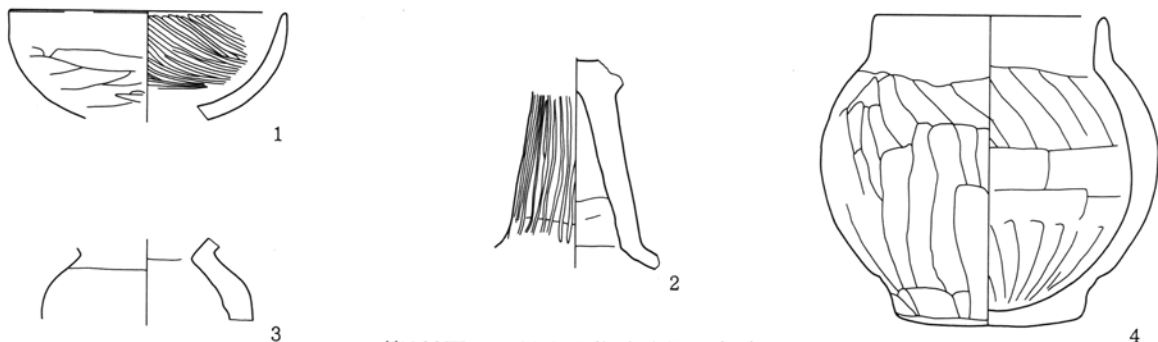
本遺構は、調査区の中央北より75区J-11グリッドに位置する。遺構は、Hr-FA層下の約1m四方に土器が散乱するような状態で検出した。遺構の状態は、五反田地区1号土器集積と同様に平坦地に土器を配置した状態である。しかし、五反田地区1号

土器集積のような石製模造品などの出土は見られないが、他の状況から五反田地区1号土器集積と同様な祭祀遺構の初期的な段階の遺構と想定される。

集積された土器は、土師器杯、高杯、埴、小型甕、甕等がある。土器は、西から7、4、6、2、5そして7と4の南に8と列べられ6の東に礫がおかれている。なお、1の杯は7の西約30cmと離れた所から出土している。

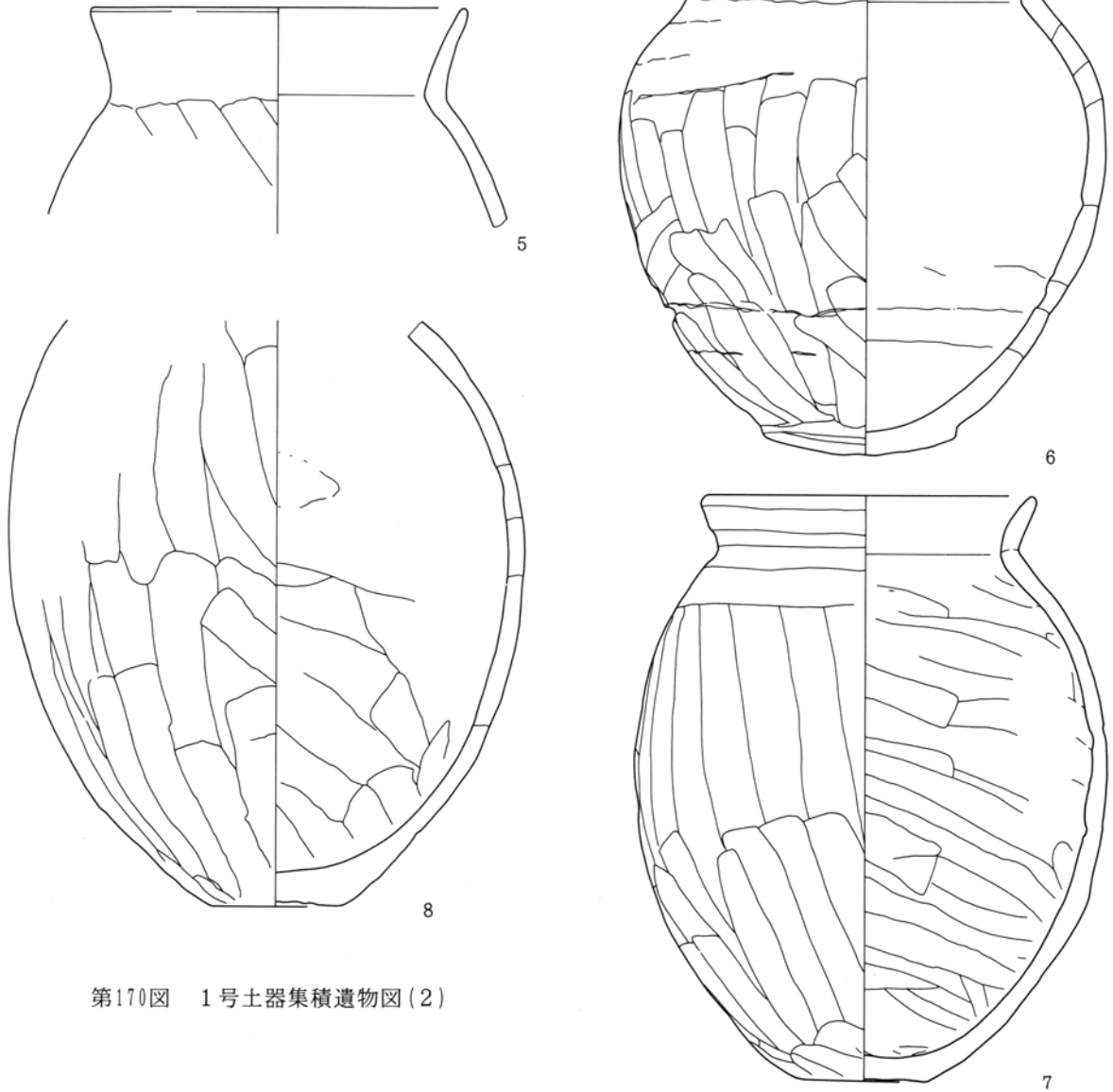


第168図 1号土器集積平面・断面図



第169図 1号土器集積遺物図(1)

V 清水地区の遺構と遺物



第170図 1号土器集積遺物図(2)

7. 畠

Hr-F A (VI)層下畠

畠は、調査区の南西部、75区J~N-7~10グリッドに占地する。畠の区画は、北側は1号住居周堤帯、東は10号溝が埋没し若干の窪みとして残存している箇所にて区画されている。南側と西側は、調査区外に延びるため不明である。区画の規模は、東西25m + α 、南北15m + α である。

区画の地形は、北から南へごく緩い傾斜であるがほぼ平坦に近い地形である。

サクの走行は、若干西へ傾いているがほぼ南北の走行である。サクは、調査区の西側で多少の蛇行や区画東側で5mほどの短いサクが見られるがほぼ直

線的に耕作されている。

サクの心々距離は、最大130cm、最小85cm、平均110cmである。サクとウネの高低差は、平均15cmでわりあいと良好な状態である。このウネ・サクの状態から耕作後短い期間でHr-F Aで埋没したと想定される。

畠面からは、埋没時に炭化した植物遺体が全面から検出された。これらの植物遺体は、分析を行ったがヒエ等のキビ族の可能性が指摘されたが明確な結果は得られなかった。(第VII章4~6を参照)

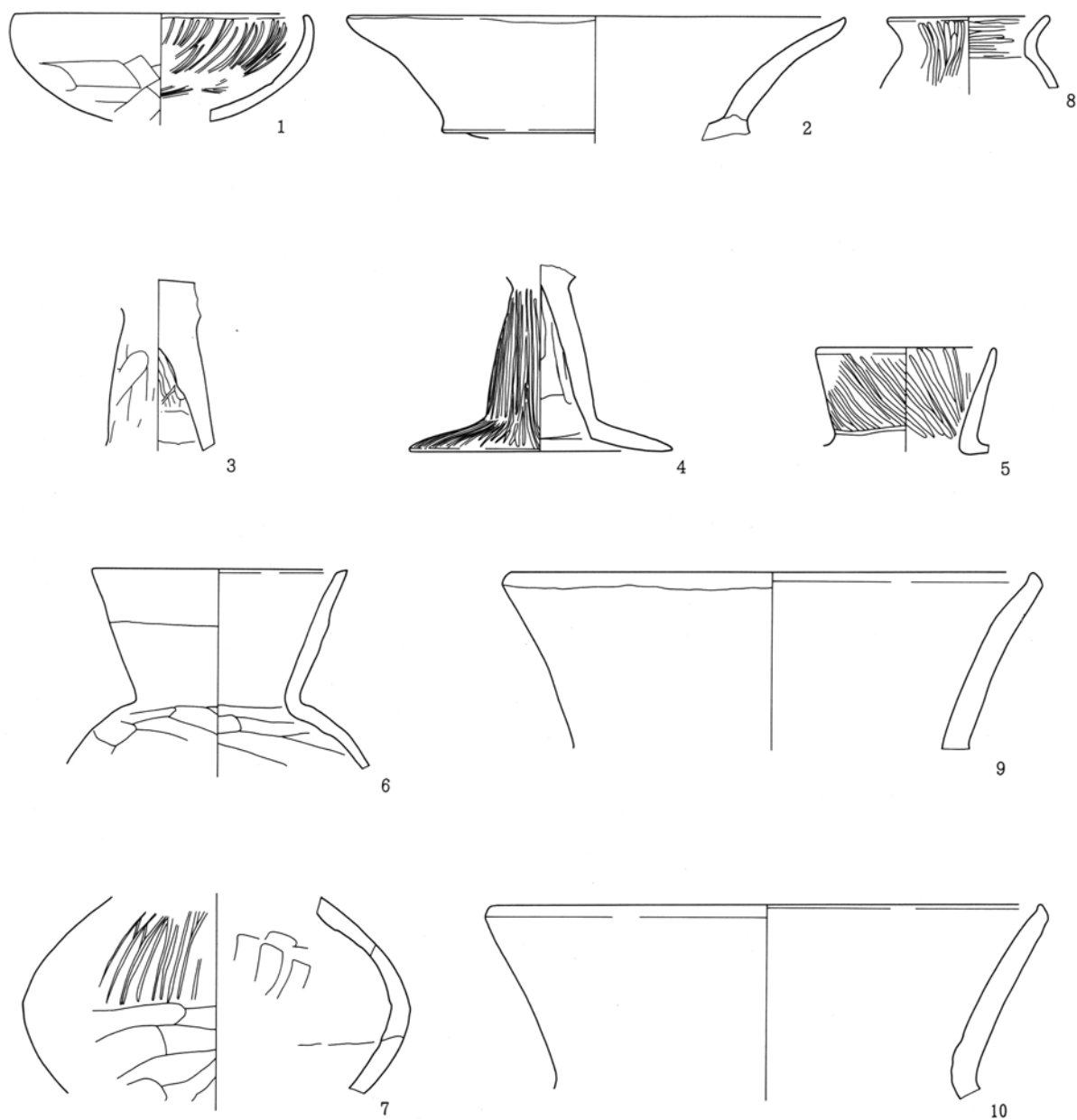
遺物は、耕作土内より土師器杯、甕などの破片が出土しているが小片のため図示できなかった。



B L = 138.90m
 C L = 138.90m

A' L = 139.40m

8. 遺構外出土遺物



第172図 遺構外出土遺物図

VI 古墳時代の成果と問題点

1. 出土土器について

1. はじめに

下芝五反田遺跡では、竪穴住居、掘立柱建物、平地建物、土坑、溝、土器集積、畠等の遺構を検出した。これらの遺構からは、古墳時代中期から後期にかけての土器が出土している。出土した土器は、土師器と須恵器があるが、そのうち須恵器は杯2点と甕の小片3点の5点だけである。それに対して土師器は、出土量の相違はあるが各遺構から多く出土している。こうした土師器は、遺構に重複関係が見られるように土器にも変遷が観られるので若干の考察を行ってみた。

土器変遷を行うにあたっては、普遍的に土器を出土している住居のものを各器種ごとに形態分類、さらにその中の細分を行い各形態ごとの流れを想定し基本的な土器組成を見ることとした。分類にあたっては、杯、高杯、柑、甌、甕、壺の各器種について行うが、変遷については杯、高杯、甕等の各住居から出土している器種を中心に行った。

2. 分類

出土した土師器には、杯、高杯、柑、甌、小型甕、脚付小型甕、甕、壺等がある。これらの土器を器種ごとのその形態の相違を観察すると次のような細分が可能である。

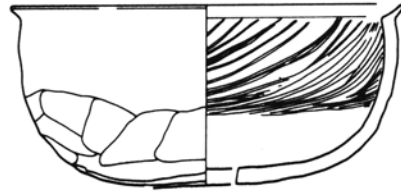
(1) 杯

杯は、その形態から大きく3形態に分類できる。その3分類は、短い口唇部が外に開く内斜口縁杯と呼ばれる形態(A)、口縁部が内側に曲がる内湾口縁杯と呼ばれる形態(B)、そして須恵器杯蓋を模倣したと考えられる模倣杯と呼ばれる形態(C)である。

① 杯A (内斜口縁杯)

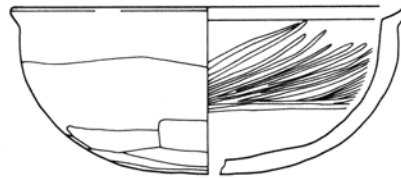
杯A (内斜口縁杯)は、外に開く短い口唇部と口唇部下から底部にかけて丸みを持ち、口縁部と底部の

A-1



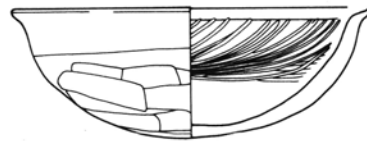
1住-2

A-2



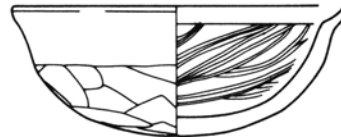
129住-2

A-3



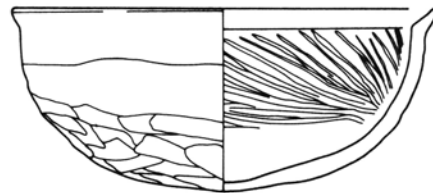
131住-4

A-4



122住-2

A-5



126住-10

第173図 杯A分類図

区分が不明瞭な点が特徴である。この杯の形態は、口縁部から底部にかけての一般的に「腰」と呼ばれる部分の屈曲状態に変化を観察できる。

内面は、ほとんど斜放射状ヘラ磨きが施されているが、一部は全面にヘラ磨きを施したものやヘラ磨きを施さないものがある。

VI 古墳時代の成果と問題点

A-1 口径に比べて器高がやや高い(器高/口径比45~)、底部がやや平底ぎみで口縁部から底部の形態がやや箱形を呈する。

A-2 A-1に比べ器高がやや低くなり(器高/口径比40~45)、底部の平底ぎみの部分は狭くなり、口縁部にかけては丸みをもつ。

A-3 A-2に比べて器高/口径比(37~39)が多少小さくなり、底部から口縁部にかけては丸みをもち一体となり境はほとんど不明瞭となる。

A-4 A-3に比べてさらに器高/口径比(35~36)が小さくなる。底部から口縁部にかけてはA-3同様に丸みをもち底部と口縁部の境も不明瞭である。

A-5 口径が14.0cm以上、器高6.0cm以上のやや法量が大きく、器高・口径比40以上の大型品。底部から口縁部にかけては半球状を呈す。

②杯B(内湾口縁杯)

杯B(内湾口縁杯)は、内側に丸みを持ちながら屈曲する口縁部と全体的に球状の丸みを持つ底部に特徴が有る。この杯の形態は、口径に対する器高と口縁部の最大径と口径の差に表れる屈曲の違いと底部および底部から口縁部下位にかけての変化にその形態変化が観察できる。

内面は、75%程度斜放射状ヘラ磨きが施されているが、その9割は左上がりである。

B-1a 器高/口径比が大きく(50以上)、口縁部の内湾も大きい(口径-口縁最大径/口径比が10以上)、そして底部がやや平底ぎみで底部と口縁部の境がある程度明確である。

B-1b B-1aよりもやや器高/口径比が小さく(50~60)、そして底部は平底部分が狭く丸底に近いもの。

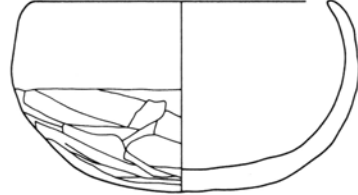
B-1c 口径が10cm以下の小型品で器高/口径比が50以上とやや深く、底部は丸底、丸底ぎみを呈するもの。

B-2 B-1にくらべて器高/口径比が小さく(40~50)、底部は丸底を呈すもの。

B-3 B-2にくらべてさらに器高/口径比が小

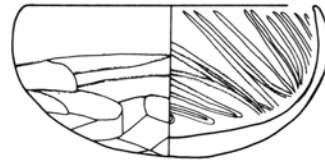
さく(40以下)、口縁部の内湾はあまり大きくない(口径-口縁最大径/口径比が5以下)、底部は丸底を呈すがB-2より緩いもの。

B-1a



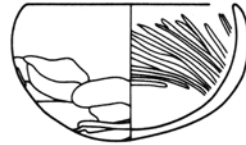
127住-8

B-1b



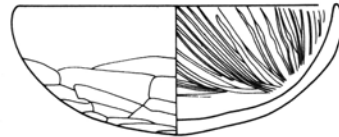
127住-7

B-1c



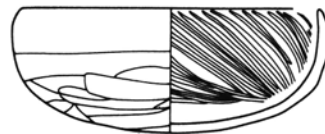
122住-14

B-2



128住-8

B-3



123住-9

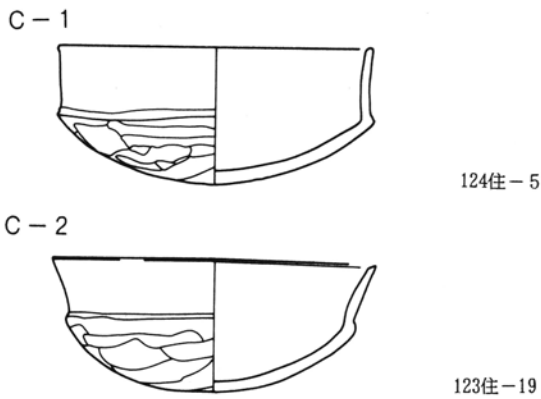
第174図 杯B分類図

③杯C(模倣杯)

杯C(模倣杯)は、須恵器杯蓋を模倣した形態である。須恵器蓋の形態を忠実に模倣した形態であるが、口縁部の形態に変化を観ることができる。

C-1 口縁部がほぼ垂直に立つ。口唇部は、大部分のものが内斜する平坦面をもつが一部には丸くなるものがみられる。

C-2 口縁部がやや外側に傾くもの。口唇部は、内斜する平坦面をもつものとまるまるものがみられる。また、例外的に122号住居-24のように内面に斜放射状のヘラ磨きが施されるものがある。



第175図 杯C分類図

(2) 高杯

高杯は、杯身の形態から7形態に分類できる。脚部は、上半が細く長い棒状を呈し、下半の裾部が明確な屈曲部をもち大きく開く高脚形態のものと接合部から弧を描きながら開く短脚形態の2形態に分類できる。高脚形態は、高杯Aにのみ伴い、短脚形態は高杯B～Fに伴うため分類は杯身形態によって行った。

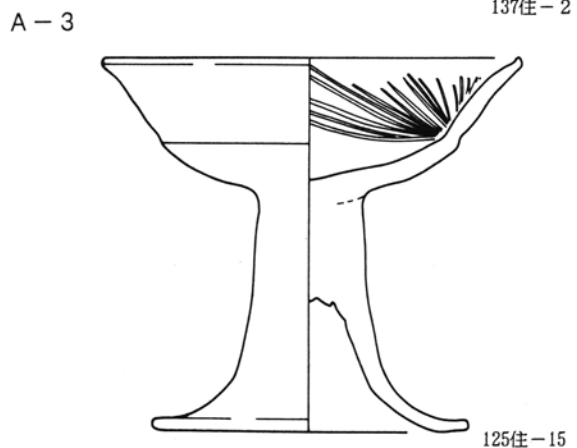
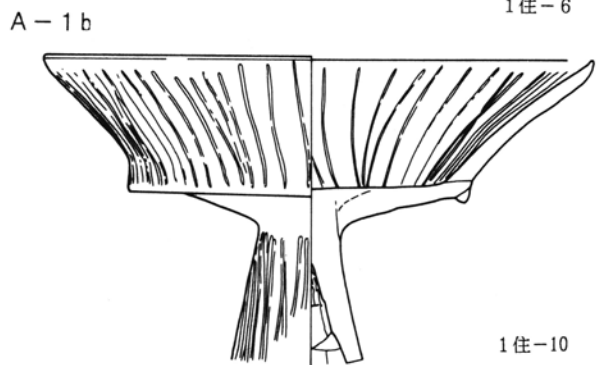
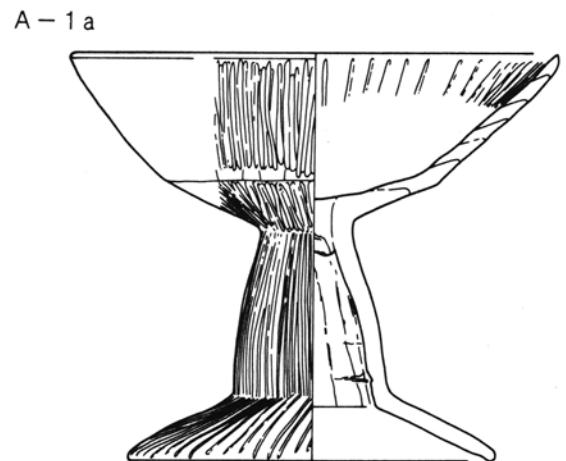
杯身は、平底ぎみの底部をもち口縁部が直線的に大きく開く形態のもの(A)、そして杯で観られる内斜口縁杯形態(B)、内湾口縁杯形態(C)、模倣杯の形態(D)、そして底部が緩い丸底を呈し、口縁部下に稜をもち口縁部がやや外反ぎみに開く形態のもの(E)、脚部接合部から直線的に開く形態のもの(F)の杯身がある。

① 高杯A

杯身部分は、平坦な底部と直線的に開く口縁部をもち、脚部は高脚で裾部は大きく開く形態。杯身部分では、底部から口縁部への変換部分、脚部では脚部と裾部の変換部分で変化を観ることができる。

高杯Aには、124号住居-8、清水地区1号住居-10のように口縁部最下部に凸帯が巡るものが僅かな稜であるが出土している。

A-1a 杯身は、底部と口縁部の間に明瞭な稜をもち、脚部は脚部と裾部の間に明瞭な屈曲点が見られるもの。A-1の口縁部は直線的に開くが口唇部は僅かであるが内湾するように立ち上がる。



第176図 高杯A分類図

VI 古墳時代の成果と問題点

A-1b A-1aと同様であるが、口縁部と底部の間に下方向きの凸帯が巡るもの。この凸帯は、粘土ひも張り付けであるが、1住-4・5のように底部端部を僅かに引き出し凸帯状に見せるaとbの中間的なものがある。

A-2 A-1aのように底部と口縁部の間の稜、脚部と裾部の屈曲部が明確でなく丸みをもちながら移行するもの。口縁部の上位は外反する。

A-3 全体的には、A-2と同様であるが、底部と口縁部の間に稜をもつもの。

②高杯B

杯身部分は、内斜口縁杯、脚部は短く接合部から「ハ」の字状に開く形態である。杯身部分は、杯Aと同様に内斜する口唇部の形態に相違が観られる。

杯身内面は、大部分に斜放射状ヘラ磨きが施されているが、一部には横方向のヘラ磨きが施されたものも存在する。

③高杯C

杯身部分は、内湾口縁杯、脚部は短く接合部から「ハ」の字状に開く形態である。高杯Cは、住居からの出土していないが、1号土器集積や2号土器集積からは出土している。

④高杯D

杯身部分は、杯Cと同様の模倣杯形態である。脚部は短く接合部から「ハ」の字状に開く形態である。住居からの出土は2個体と少ないが、脚部裾部に相違が観られる。

⑤高杯E

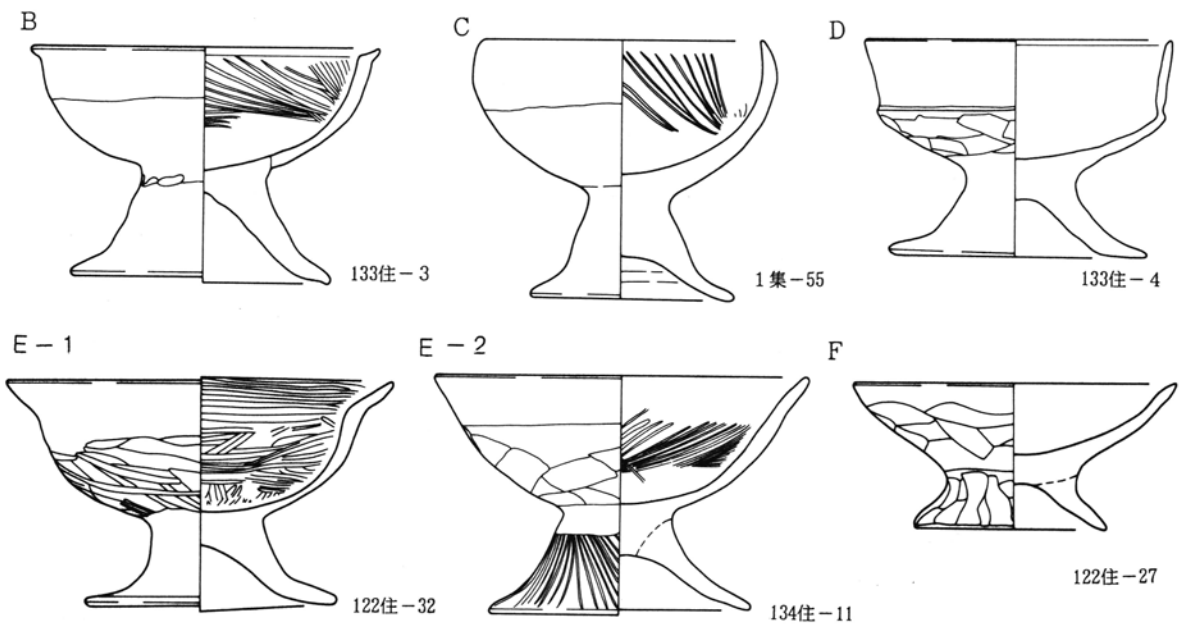
杯身部分は、底部が丸底で口縁部上位が外側に開く、脚部は短く接合部から「ハ」の字状に開く形態である。一見すると高杯Bの杯身部分と同様に見えるが、外側に開く部分の長さが高杯Bより長い。杯身部分では、口縁部の開き方に相違が観られる。

E-1 口縁部上位が明確に屈曲し内面に稜をもち内斜するもの。

E-2 口縁部上位の屈曲が鮮明でなく僅かに内斜するもの。

⑥高杯F

杯身部分は脚部接合部から直線的に開く。脚部は、短く接合部から「ハ」の字状に開く短脚形態であるが、高杯B～Dの脚部より接合部が広くより低い。住居からの出土は4個体と少ないが、脚部裾部に相違が観られる。



第177図 高杯B～F分類図

(3) 埴

埴の出土は、杯、高杯、甕に比べると少量であるが、胴部が球形状形態と肩に稜をもつ箱形状形態の2種類に分類できる。なお、胴部に穿孔をもつ甕も本稿では埴の中で扱う。

① 埴A

埴Aは、清水地区1号住居から1点出土しているだけであるが、胴部上位の肩部に稜をもち平底の形態である。

② 埴B

埴Bは、球形状の胴部と直線的に開く口縁部をもつ形態である。胴部は、底部に僅かな平底部分(B-1)をもつものから丸底(B-2)への変化が観られ、口縁部はその外傾の状態に変化が観られる。

(4) 甕

甕は、短胴形態と長胴形態の2形態に分類できる。そして長胴形態は、最大径を口縁部にもつものと甕型の形態に分類できる。

① 甕A

甕Aは、器高の低い短胴形態で小さい底部から大きく開く胴部をもつ形態である。甕Aは、その中をさらに口縁部の形態、胴部の形態から2種類に細分できる。

A-1 128号住居-17、132号住居-13にみられる底部から口縁部にかけて緩いまるみを持ちながら開く形態である。

A-2 131号住居-40、126号住居-26にみられる胴部はA-1と同様に緩いまるみをもち、口縁部は内斜するもの。

A-3 122号住居-40にみられるように胴部はほとんどまるみをもたず直線的で口縁部は僅かに内斜するもの。

② 甕B

甕Bは、清水地区1号住居-38、39にみられる胴部が球状で口縁部が開く甕型で最大径を胴部中ほどにもつ形態である。

③ 甕C

甕Cは、器高の高い長胴形態で最大径を胴部にもつ。胴部は底部から緩いまるみを持ちながら立ち上がり、口縁部は頸部からさらに開く形態である。

C-1 口縁部が明確な稜をもち内斜するもの。

C-2 胴部と口縁部の変換点が不鮮明で内斜もあまり大きくない。

(5) 甕

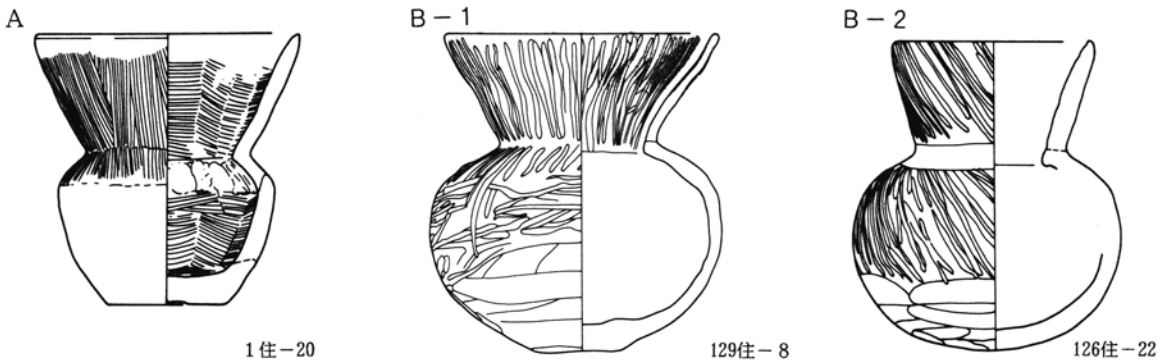
甕は、大別すると小型、小型形態に脚の付くもの、大型の3形態に大別できる。

① 小型甕

小型甕は、口径に対して器高が低い器高/口径比が150以下の形態である。小型甕は、胴部の形態や底部の形態に変化が観ることができる。

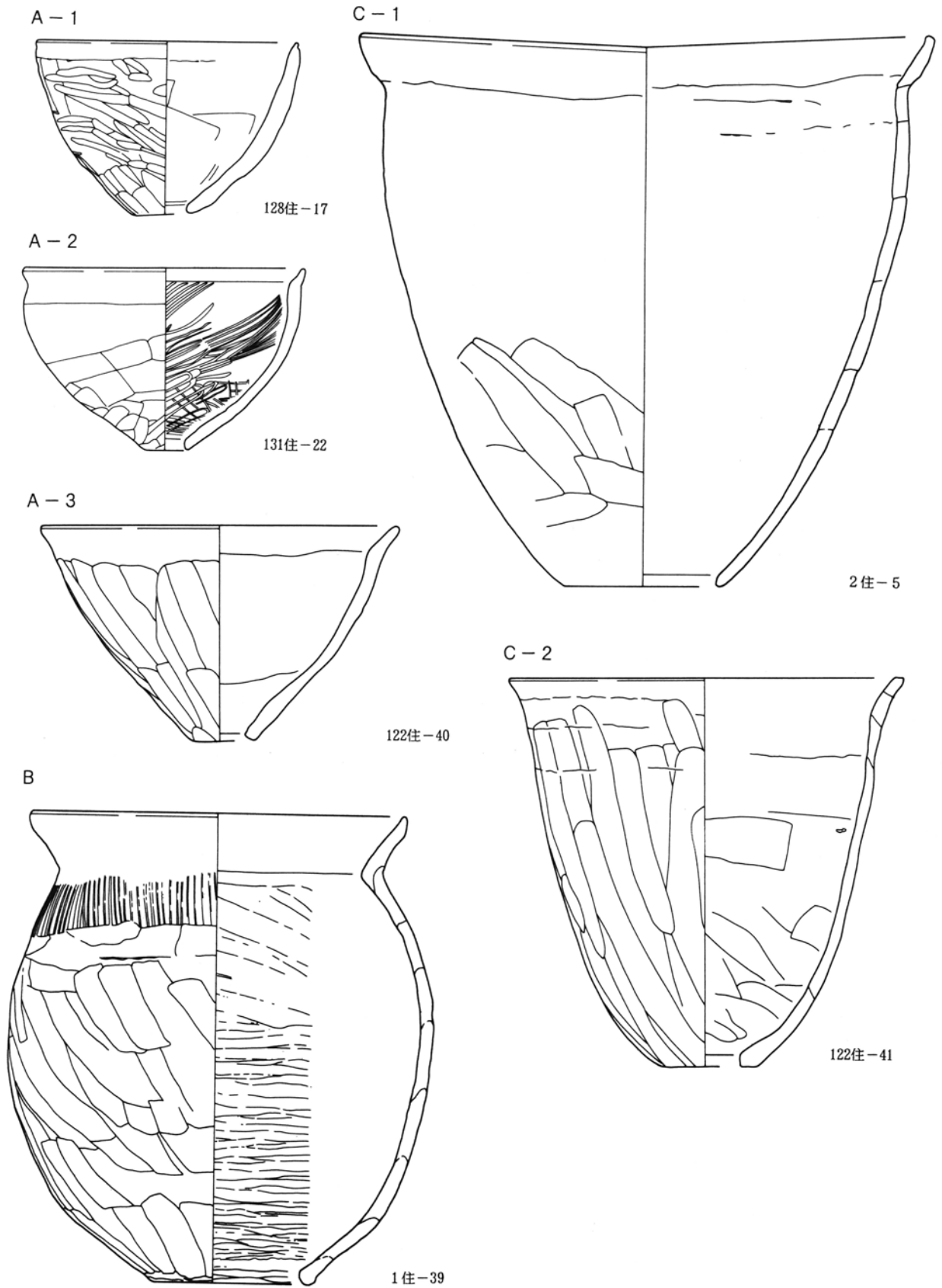
A-1 胴部から底部にかけてほぼ球状を呈する形態である。内外面の整形に清水地区1号住-30と31のようにハケ目(a)によるものとヘラ削り・ヘラナデ(b)によるものとの2種類がみられる。

A-2 平底ぎみの底部をもち胴部下位は大きく開くが、胴部上半はほとんど膨らみを持たず頸部に立ち上がる。



第178図 埴分類図

VI 古墳時代の成果と問題点



第179図 甗分類図

A-3 A-1・2が口径が器高より小さいのに対してA-3は器高より口径が大きい。そして底部から丸みもちながら頸部に向けて開き、口縁部はさらに外傾する形態である。

B-1 底部は平底で胴部との間には明確な稜をもつ。胴部は球状で器高は口径より低いものが大半である。

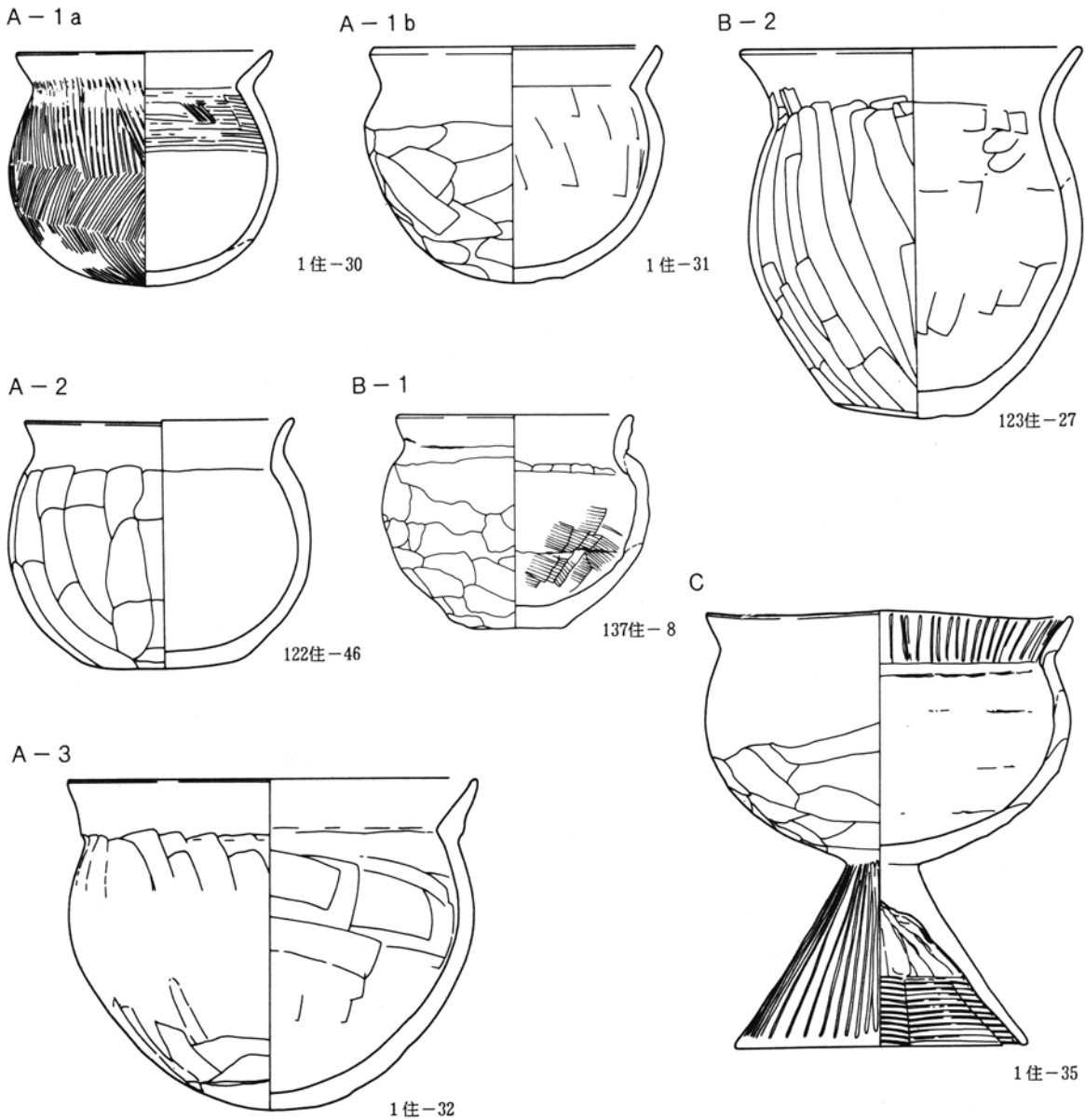
B-2 B-1より器高/口径比が高く(150前後)、胴部の膨らみはB-1に比べて少ない。

②台付小型甕

台付小型甕は、小型甕A-1の底部中心部分から直線的に開く脚部をもつ形態である。胴部の形態は、清水地区1号住居のものは全体的に球状の丸みを盛っているが、137住-5は胴部下半が直線的である。なお、小型甕は、一部にヘラ磨きが施されているものがみられる。

③甕

甕は、胴部の形態により細分ができる。特に胴部最大径の位置による区分が可能であり、口縁部等では大きな相違は観られない。



第180図 小型甕・台付甕分類図

VI 古墳時代の成果と問題点

D-1 胴部上位から下位にかけて張り出すような膨らみをもち下位で胴部最大径をもつ。

D-2 D-1と類似した形態であるが上位からと下位から中位にかけて膨らみをもち、中位に胴部最大径をもつ。

D-3 頸部から大きく膨らみ中位・下位そして底部にかけてつぼむ形態である。

(6) 壺

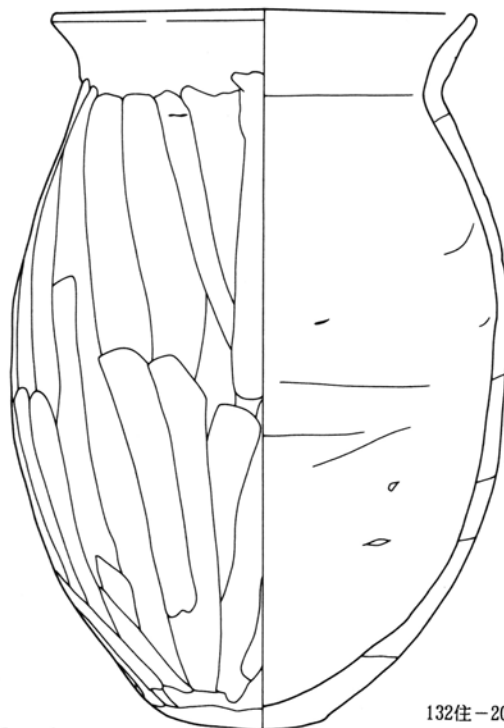
壺は、大別すると球状の胴部にやや小径の頸部を持つ形態、球状の形態ではあるがやや器高のある形態、小径の底部で最大径を胴部上位にもちやや広い頸部をもつ形態の3種類に分類できる。

① 壺A

胴部が球状を呈し、頸部径が胴部最大径の1/2前後で口縁部が直線的に開くものとやや外反ぎみに開くもの(A-1)と122号住居-55のように直立ぎみにたつ形態(A-2)がある。底部は小径の平底である。この壺は、壺の中では出土量が多いが、その形態の変化は胴部最大径の位置などに観られるがあまり

り明確ではない。

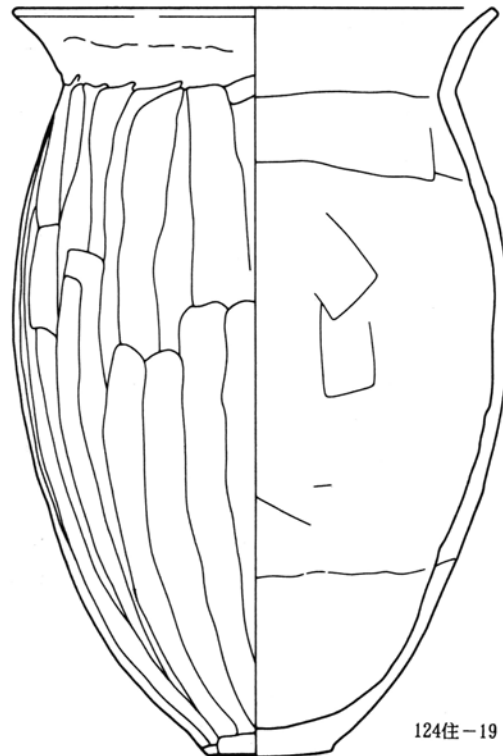
D-2



D-1



D-3

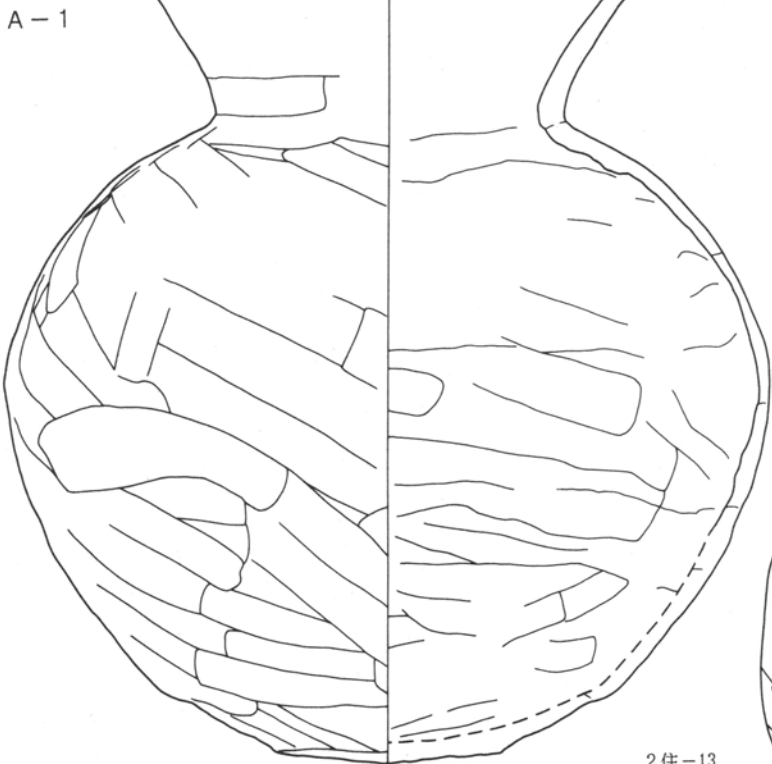


126住-28

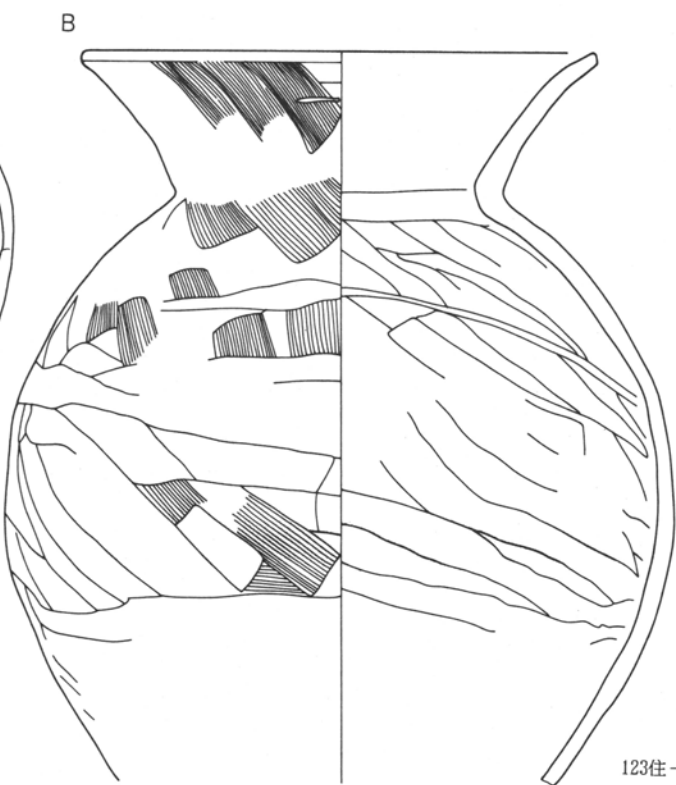
124住-19

第181図 甗分類図

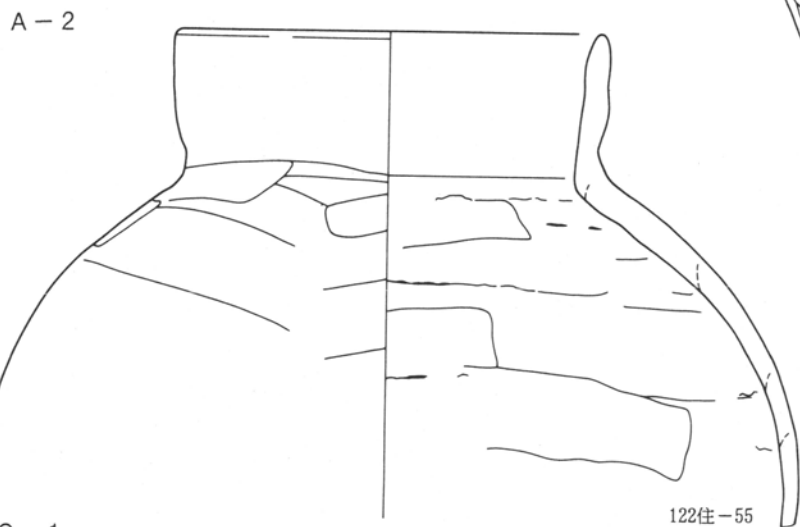
1. 出土土器について



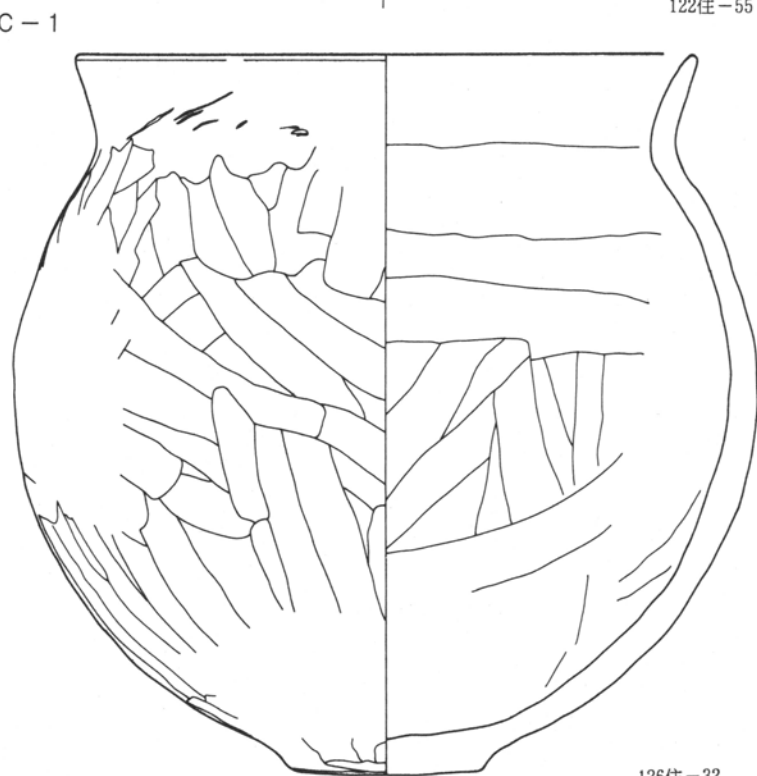
2住-13



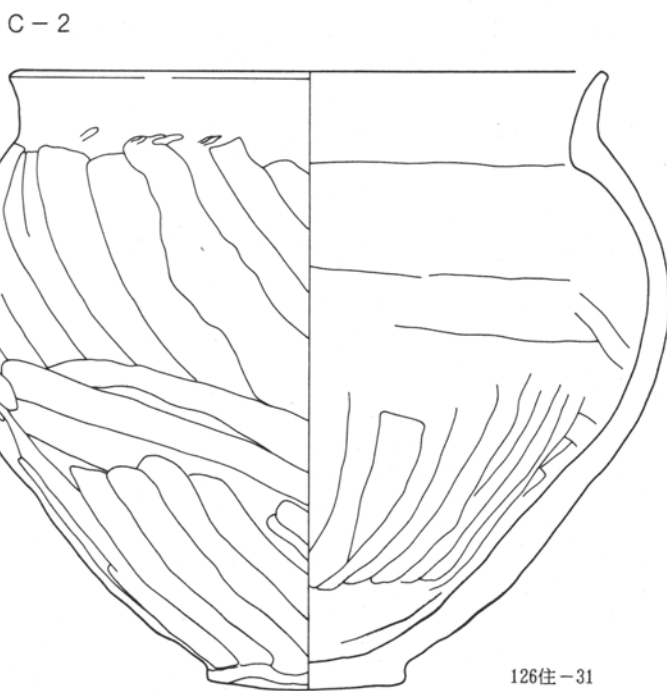
123住-34



122住-55



126住-32



126住-31

第182図 壺分類図

VI 古墳時代の成果と問題点

②壺B

胴部が壺Aに比べて細身で全体の器高が高く、口縁部が頸部から大きく開く形態である。この壺は、123号住居からしか出土していないためその変化については不明である。

③壺C

小径の平底から大きく開く胴部をもち頸部径が胴部最大径よりやや小さく短い口縁部をもつ形態である。この壺は、胴部や口縁部の形状に変化が観られる。胴部が全体的に球状を呈するもの(C-1)と上位が大きく膨らむもの(C-2)がある。

3. 各器種の住居出土頻度

「2. 分類」で行った各器種ごとの細分を基にして各住居から出土土器を分類に当てはめると第2表のようになる。

この表をみると杯A、杯C、高杯A~Fの食膳具は、住居により出土の集中が確認される。それに対して甕等の煮沸具は甕B、甕C、壺C等の例外はあるがその他の分類した各形態が各住居からそれぞれ数個体ずつが出土しているのを確認できる。

こうした結果を踏まえると下芝五反田遺跡出土の土器の変遷を考える上では杯A、杯C、高杯等の食膳具を軸に行うのが効果的であると考えられる。

第2表 住居出土頻度表

器種	分類	122	123	124	125	126	127	128	129	131	132	133	134	135	136	137	138	1	2	
杯	A 1																	▲		
	A 2	▲		△	△	▲	△	▲	▲		△	△		▲	▲					
	A 3	●	△	▲	○	△	△	▲		●			▲	▲	▲					
	A 4	▲	△	△	▲	○	△	△		△			△							
	A 5		▲		△	▲	△	△		△	△									
	B 1 a				△															
	B 1 b	▲	△					△				▲								
	B 1 c	△	▲				▲	△						▲						
	B 2	△	△						▲		△	▲		△						
	B 3	▲	○			▲	△	▲			△	△								
C 1	▲	○	▲	▲	▲			△		△										
C 2	△	△						△		▲	△									
高杯	A 1 a			△				△	▲									◎	○	
	A 1 b			△														▲		
	A 2			△													▲	△		
	A 3				△	△					△									
	B	▲	△			△		△				△	▲							
	C																			
	D		△											△						
	E	▲						△		▲				△						
F	▲	△					△													
埴	A																	△		
	B 1	△							▲									▲	△	
	B 2	△		▲		▲				▲	△						△	▲	△	
甕	A 1	△				△		△		△	△									
	A 2																			
	B																	▲		
	C	△	△	△	△	△	▲	▲		△	△								△	
小型甕	A 1	▲								△	△						△		▲	
	A 2	▲		△		△											△			
	B 1	△														▲		△		
	B 2	△	▲																	
台付甕	C															△		○		
	D 1	▲		△	△	△	△	△		△	▲						▲	△		
	D 2	△	○				▲	▲		▲	△		▲	△						
D 3	△		△	△						△						△	△			
壺	A	△		▲		▲	△	△							△			△	△	
	B		▲		▲															
	C																	▲		

△ 1 ▲ 2~3 ○ 4~5 ● 6~9 ◎ 10~

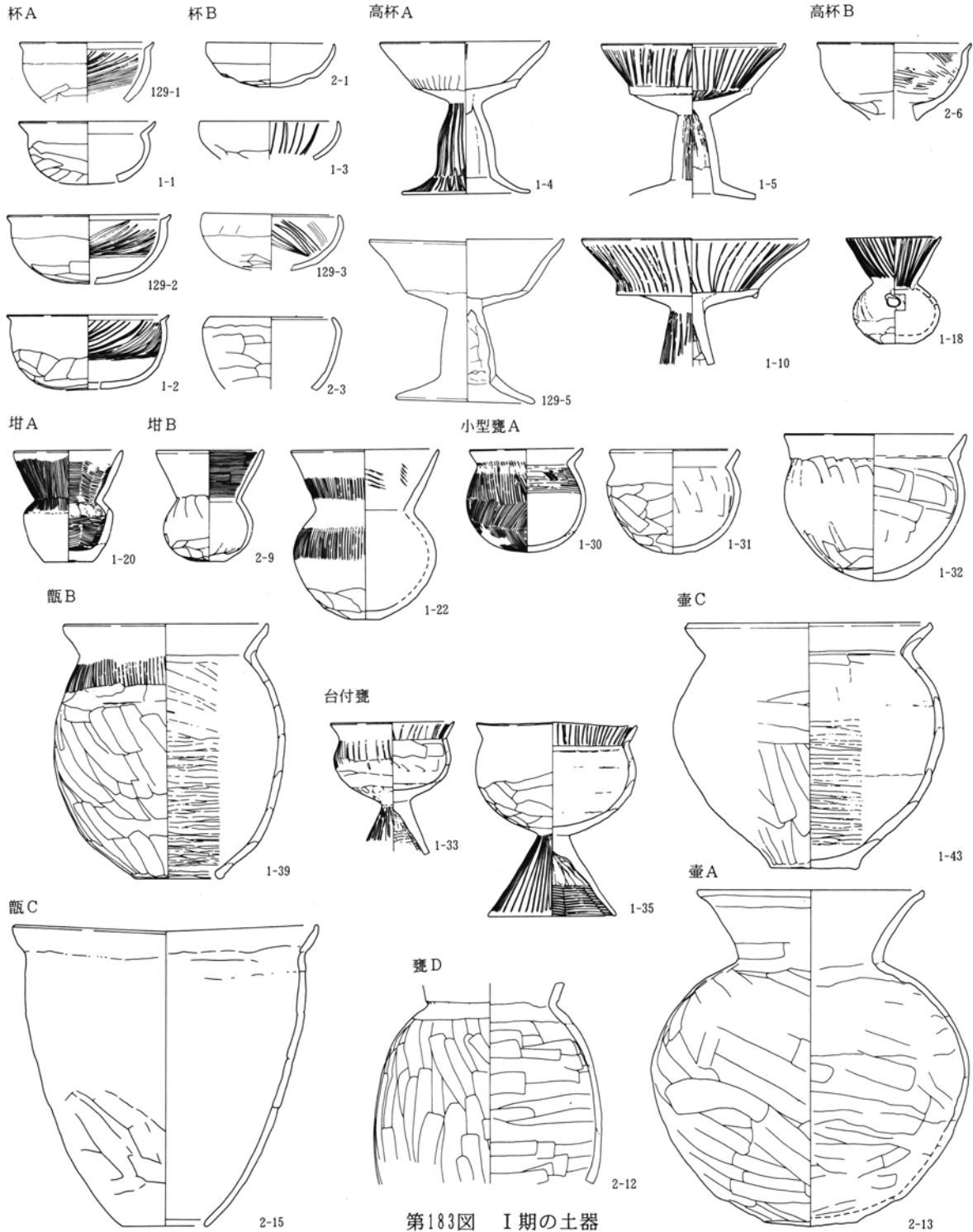
4. 変遷

土器の変遷は、I期～V期に分けることが可能である。各期の特徴は、次のとおりである。

I期

I期は、清水地区1号住居、2号住居、129号住居が該当する。I期の住居からは、杯A-1・2、

杯B、高杯A-1a・b、B、罎、甑B、小型甗A-1、台付甗C、甗D-1、壺A・Cが出土している。高杯では、Aが主体でBは2号住居で僅か出土している程度である。罎、小型甗A-1の一部には、外面にハケ目整形が行われているものがみられる。I期は、杯Cや高杯C～Fなどは供伴しない。



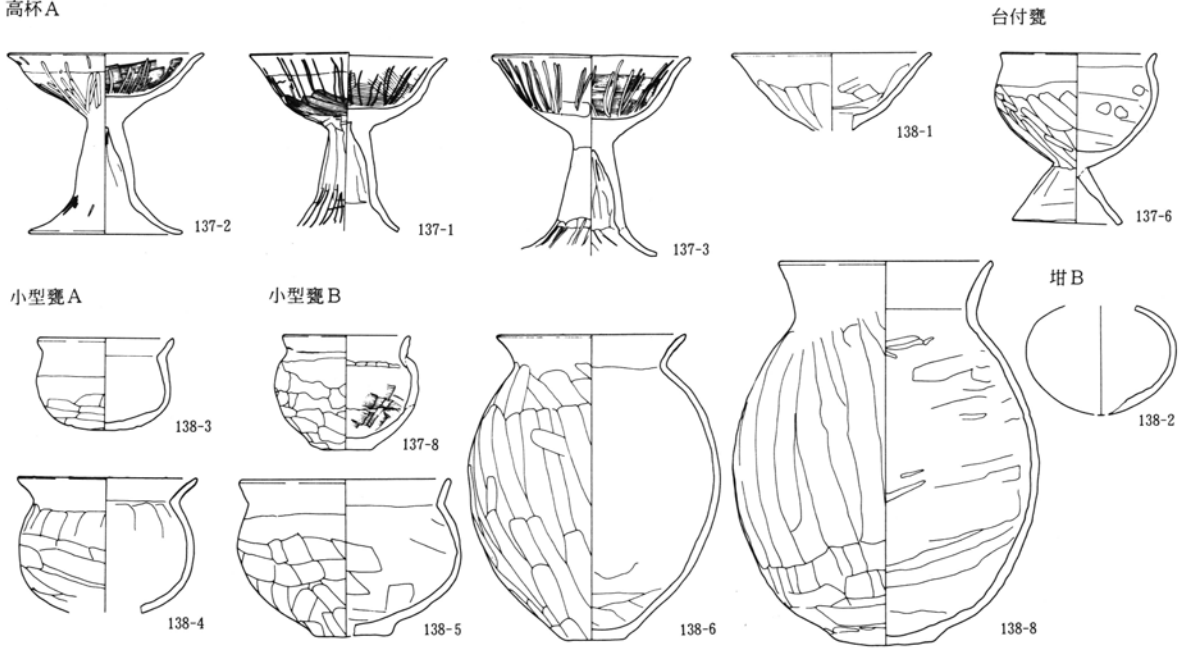
第183図 I期の土器

VI 古墳時代の成果と問題点

II期

II期は、137号住居、138号住居が該当する。II期の住居からは、高杯A-2、埴B、小型甕A・B、台付甕C、甕Dが出土している。II期の住居からの土器出土量が少ないため全貌が不明確であるが、この他に杯A、杯Bが供伴すると想定される。II期では、高杯AがA-1からA-2へ変化が観られ、台

付甕Cがこの時期まで存在する。また、前後の様相から杯Aは、A-1からA-2へ変化する暫移的な時期と想定される。また、I期まで埴、壺などに多少なりともみられた外面のハケ目整形は、ほとんどみられなくなりヘラ削り整形になる。

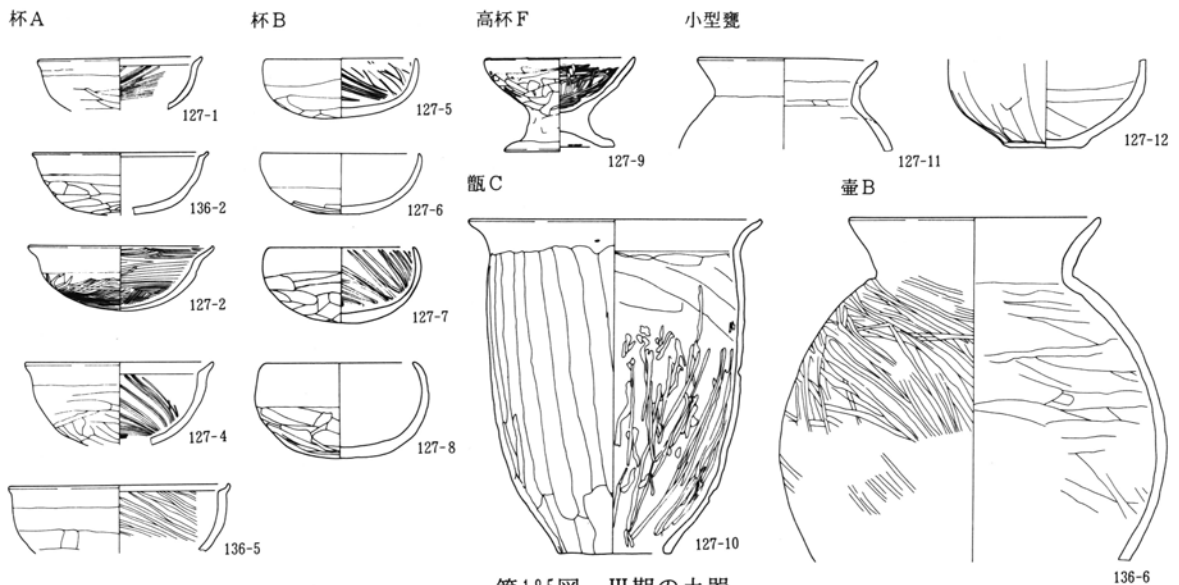


第184図 II期の土器

III期

III期は、127号住居、136号住居が該当する。III期の住居からは、杯A、杯B、高杯F、甕C、小型甕、甕D、壺Bが出土している。III期の住居からの土器

出土量が少ないため全貌が不明確であるが、この他に高杯A-2、高杯B、埴B、壺A等が供伴すると想定される。

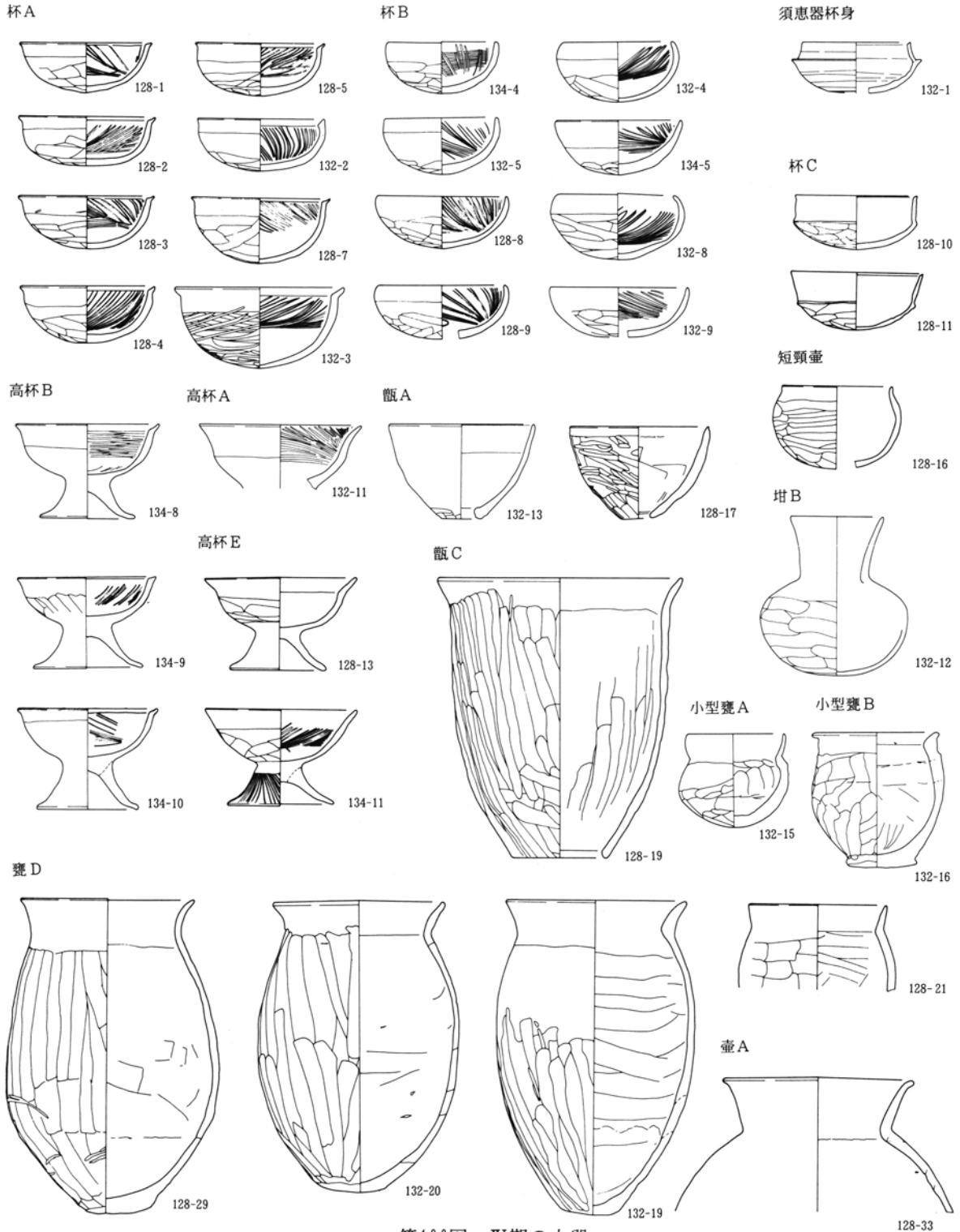


第185図 III期の土器

IV期

IV期は、128号住居、132号住居、134号住居が該当する。IV期の住居からは、杯A～C、高杯A、B、D～F、埴B、小型甕、甕、壺Aが出土している。

なお、132号住居からは、須恵器杯身が出土している。下芝五反田遺跡では、このIV期より須恵器杯蓋を模倣した杯Cが出現している。この他高杯では、高杯A-3、D、Eが供伴するようになる。



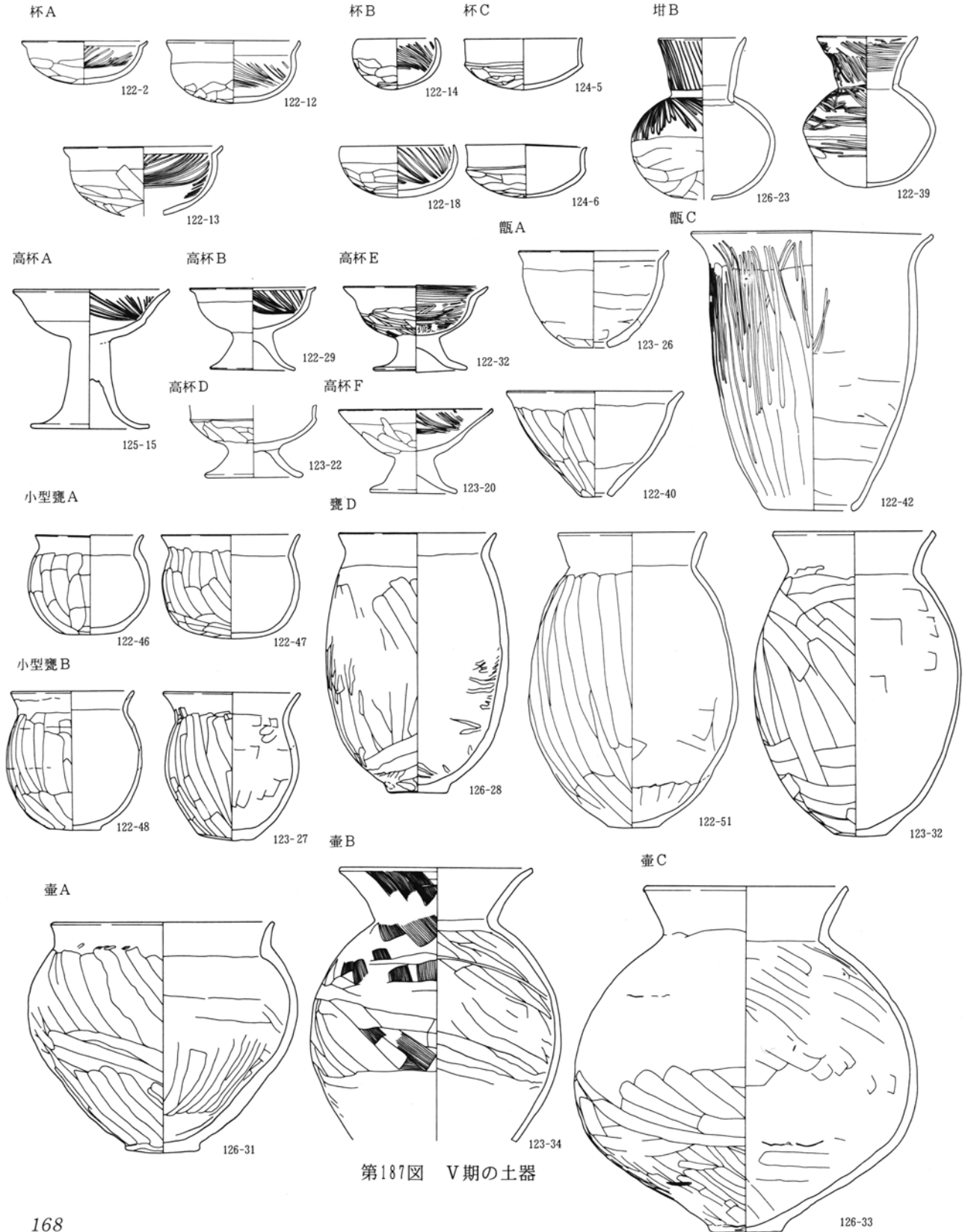
第186図 IV期の土器

VI 古墳時代の成果と問題点

V期

V期は、122号住居、123号住居、124号住居、125号住居、126号住居が該当する。V期は、杯A～C、高杯A～2、B、D～F、埴B、小型甕、甕、壺が

出土している。V期では、杯Cの割合が前期より増し、高杯Aは124号住居である程度のまとまりで出土がみられるが全体的にはごく少量になる。



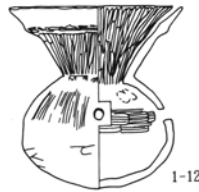
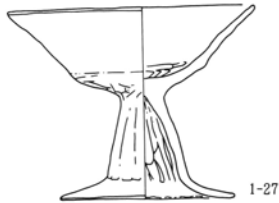
第187図 V期の土器

1. 出土土器について

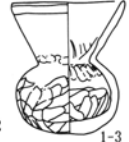
以上のように下芝五反田遺跡出土の土器について I 期から V 期の変遷を行ったが、I 期の前段階に相当する時期の土器群は行力春名社遺跡の 1 号住居～3 号住居から出土している。行力春名社遺跡では、高杯 A-1、埴 A、B-1、小型甕、台付甕、甕、

壺が出土している。このうち台付甕は、下芝五反田遺跡で分類した形態とは異なる古墳時代前期から出現する「S 字状口縁甕」の系譜の器高の高い台付甕である。

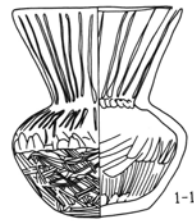
高杯 A



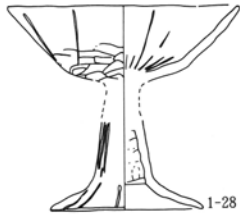
埴 A



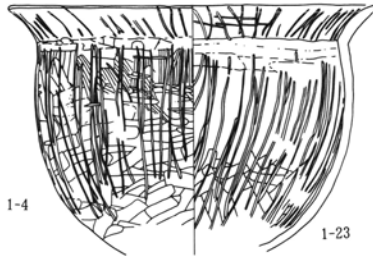
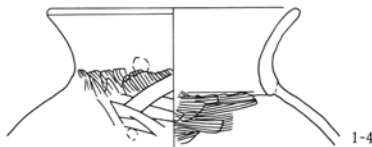
埴 B



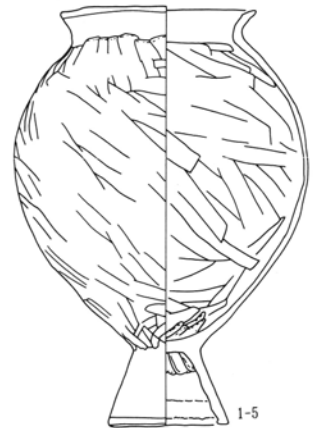
台付甕



壺



台付甕



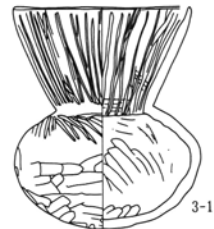
杯 A



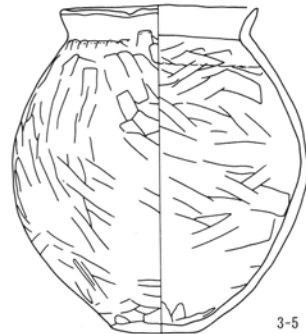
高杯 A



埴



甕



第188図 行力春名社遺跡 1 号・3 号住居の土器

VI 古墳時代の成果と問題点

5. 年代について

「4. 土器の変遷」で各期の設定を行ったが、それぞれの期の年代については、下芝五反田遺跡のなかで実年代を比定できる資料が存在しないため先学の研究を参考に想定してみることとした。

今までの群馬県における古墳時代の土器研究は、井上唯雄、茂木由行、橋本博文・加部二生、下城正、井川達雄、坂口 一、田中広明等によって行われその成果が発表されている。それらの研究成果のうち下芝五反田遺跡でもっとも年代のキーポイントになるのは、Hr-F Aの降下年代である。Hr-F Aの降下年代は、1979年の石川正之介・井上唯雄・梅沢重昭・松本浩一等がテフラ堆積住居の土師器編年から6世紀前半に位置付け、1983年に右島和夫が須恵器の編年間で5世紀末から6世紀初頭までさかのぼる見解を提示している。その後1986年坂口 一は、荒砥北原遺跡出土の土器を中心とした編年のなかで須恵器の年代観から6世紀第1四半期の年代を提示している。そしてその後の黒井峰遺跡出土の土器を中心として編年では、Hr-F A降下時期を陶邑窯田辺昭三編年のMT15時期に比定し6世紀第1四半期の時期を明示している。

こうした研究成果を援用するならば下芝五反田遺跡のHr-F A降下にもっとも近い時期である122号住居、123号住居、124号住居の属するV期は、6世紀第1四半期の年代観を与えても大きな齟齬はないと考えられる。その前時期であるIV期は、132号住居から唯一住居出土の須恵器が陶邑窯TK47の形態に近似していることから5世紀第4四半期から6世紀初頭に比定できる。そしてIV期以前のI期～III期については、下芝五反田遺跡のなかでは年代を比定できる資料はないが前記の県内出土の土器編年研究の成果を援用するならば、I期は5世紀中葉の年代に位置付けられると考えられる。

以上のように下芝五反田遺跡では、行力春名社遺跡を含めてみると5世紀前葉から6世紀第1四半期までの約1世紀にわたる土器の変遷をみることができ

参考・引用文献

- 井川達雄 1985「古墳時代・奈良時代の土器について」『三ツ寺Ⅲ遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 石川正之助・井上唯雄・梅沢重昭・松本浩一1975「火山堆積物と遺跡」『考古学ジャーナル』No.157
- 井上唯雄 1962「入野遺跡」吉井町教育委員会
- 酒井清二 1991「須恵器の編年―関東―」『古墳時代の研究』6 雄山閣出版
- 坂口 一 1986「古墳時代後期の土器の編年」『群馬文化』208群馬県地域文化研究協議会
- 1987「群馬県における古墳時代中期の土器の編年」『研究紀要』4 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 1988「東国須恵器の一樣相」『考古学雑誌』74-1 日本考古学会
- 1990「榛名山二ツ岳テフラの降下年代」『第36回企画展 火の山はるな火山噴火と黒井峯むらのくらし』群馬県立歴史博物館
- 1993「火山噴火の年代と季節の推定法」『火山灰考古学』古今書院
- 下城 正 1988「第V章3 土器の変遷」『三ツ寺Ⅰ遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 志村 哲 1982「堀ノ内遺跡群出土土器の分類と編年」『堀ノ内遺跡群』藤岡市教育委員会
- 田中宏明 1995「関東西部における律令制成立までの土器様相と歴史的動向」『東国土器研究』4 東国土器研究会
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』
- 橋本博文・加部二生 1984「古墳時代土器研究」古墳時代土器研究会
- 長谷川厚 1991「土師器の編年―関東―」『古墳時代の研究』6 雄山閣出版
- 深沢敦史 1994「古墳時代土師器について」『行力春名社遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 真下高幸 1981「温井遺跡出土土器の推移」『温井遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 茂木由行 1984「群馬県における鬼高式土器の編年」『群馬考古通信』9 群馬県考古学談話会

2. 遺構について

1. はじめに

下芝五反田遺跡の古墳時代の遺構は、Hr-F A層、Hr-F A・Hr-F P泥流層に埋没しているため良好な状態で残存していた。特にHr-F A層降下前の住居と畠については、古墳時代6世紀初頭の集落を復元する上で良好な資料を提示している。また、住居においてもその変遷は、重複関係が堅穴部分の重複だけでなく周堤帯を含めた重複関係をみることで、そのため今までの確認面まで削平する調査と異なりより広い範囲での新旧関係が明らかになった。

2. 住居の変遷について

住居は、五反田地区17軒、清水地区2軒の合計19軒を調査したが、その変遷は、前述のように重複関係、埋没状況、土器変遷から6期の変遷が行われたと推定できる。

(1) 重複関係からみた住居の変遷

下芝五反田遺跡では、Hr-F A層や泥流層により周堤帯が残存しているため今までの調査のように堅穴部分の重複関係しか確認できない調査と異なり周堤帯下での重複関係を確認できた。その結果、重複関係からみた住居の変遷は、下記に示した表のようになる。

重複関係からみた新旧関係

新	旧
122号住居	136号住居
124号住居	137号住居
125号住居	134号住居
	128号住居
126号住居	132号住居
	133号住居

(2) 埋没状態からみた住居の変遷

下芝五反田遺跡で検出した住居は、Hr-F A層を取り除くと下記のような埋没状況に分類することができる。

①122号住居、123号住居、124号住居のように僅か

な黒色土を挟んで床面に達する住居。特に124号住居では、床面の一部でHr-F Aを確認し、その上に黒色土を挟みHr-F A層が堆積していることから榛名二ツ岳の噴火時には住居が建っておりHr-F A層降下中または降下直後に倒壊したと考えられる。また、Hr-F A層下の黒色土は、子持村黒井峰遺跡や渋川市中筋遺跡の成果や122号住居でのHr-F A層下の黒色土中に多量にタケ亜科、ススキ属、ヨシ属、イネ科等の草本性の稈が炭化したものが含まれており土屋根、屋根に堆積した土の土層であると考えられる。こうした状況からこれらの3軒は、榛名二ツ岳噴火時には、存在していた可能性が考えられる。

②125号住居、126号住居のように深い窪みであるがすでに畠としての耕地化している住居。これらの住居では、住居中央部付近では耕作が床面まで達している箇所も確認され、住居倒壊後の多少の黒色土堆積状態で耕作が始まったと考えられる。

③127号住居、128号住居、132号住居のように畠として耕作されているが窪みとして確認できる住居。

④136号住居、137号住居のように畠として利用されていないが窪みとして確認できる住居。

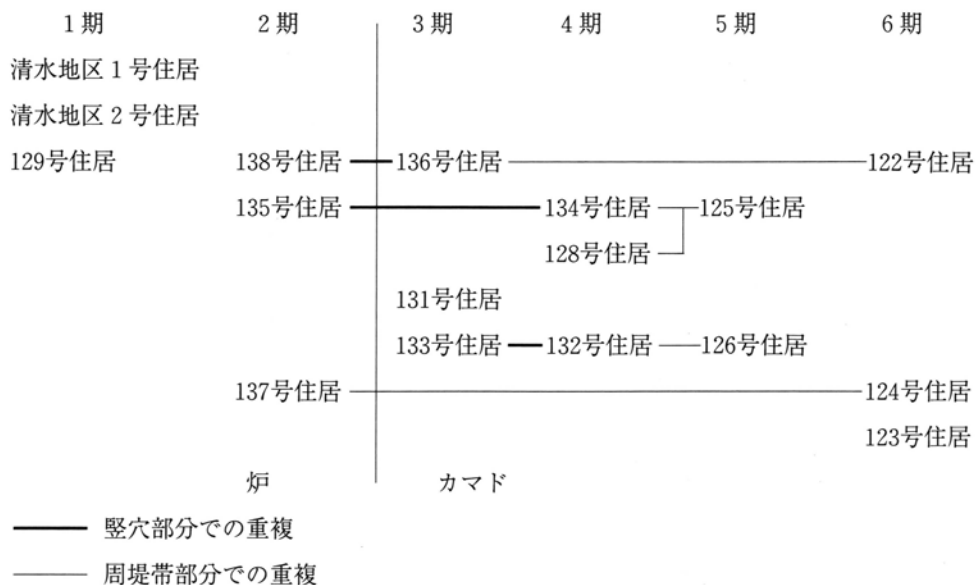
⑤129号住居、138号住居の住居廃棄後畠として利用されほとんど窪みが残っていない住居。

⑥清水地区1号住居、2号住居のように住居廃棄後利用されないため自然堆積による埋没途中である程度の窪みが残る住居。

以上のように6通りに分類できるが住居の変遷としては、新①-②-③・④-⑤・⑥旧の順での変遷が考えられる。

(3) 住居構造からみた住居の変遷

住居の構造では、大きな違いとして炉による煮沸形態をとるかカマドによる煮沸形態をとるかの違いがみられる。下芝五反田遺跡で検出した19軒の堅穴住居のうち炉をもつ住居は、五反田地区の129号住居、130号住居、135号住居、137号住居、138号住居、清水地区の1号住居、2号住居の7軒である。それに対してカマドをもつ住居は、122号住居～128号住居、131号住居～134号住居、136号住居の12軒である。



現在、一般的に煮沸形態は、炉からカマドへと移行したことが解っている。下芝五反田遺跡でも重複関係からこのことは言えることから炉もつ7軒よりカマドをもつ12軒の方が後出の住居であると言える。

この他住居竪穴部分の規模により大型、中型、小型に分類できるが、「(2)埋没状態からみた住居の変遷」で同一視した①段階の122号住居と123号住居では規模に違いがみられ⑤段階の129号住居のように123号住居より規模が大きい住居が存在することから規模による変遷は考えにくい。

(4) 土器変遷からみた住居の変遷

土器の変遷は、「Ⅵ 古墳時代の成果と問題点 1. 出土土器について」についての項で記述したように5期の変遷が確認できた。詳細については、前項を参照にしていきたい。

(5) 総合的にみた住居の変遷

(1)、(2)、(3)、(4)でみた住居変遷を総合的にみるとそれぞれ個別にみた変遷よりより詳細な住居の変遷をみると次のようになる。

- 1期 129号住居、清水地区1号住居、2号住居
- 2期 135号住居、137号住居、138号住居
- 3期 127号住居、133号住居、136号住居
- 4期 128号住居、132号住居、134号住居
- 5期 125号住居、126号住居
- 6期 122号住居、123号住居、124号住居

ただし、130号住居については、土器の出土もなく他住居との重複関係も確認できないことから位置付けができないが住居構造からすれば1期か2期に位置付けられるが、135号住居との位置関係からすると2期への位置付けには無理があり1期またはそれ以前の可能性が考えられるが不確定である。

以上のように1期から6期に至る住居の変遷をたどることができる。

3. その他の遺構について

下芝五反田遺跡では、6期にわたる住居の変遷が確認できたが、その他の掘立柱建物や平地建物などの供伴関係については土器の出土量も少なかった

りしてあまり明確にすることはできなかった。

① 掘立柱建物

掘立柱建物は、2棟検出したが位置する場所が129号住居、131号住居、132号住居、133号住居、134号住居に囲まれた所であることから1期、3期～4期の供伴は考えにくい。また、確認面がⅧ層上面であることや柱穴の状況から6期の存在も否定される。これらの消去法からすると5期、2期または1期以前の時期に存在していたと想定される。

② 平地建物

平地建物は、五反田地区では円形の溝を伴う平地建物を検出し、清水地区では周辺に小ピットと伴う長方形と円形の平地建物を検出した。こうした形状や形態の相違から五反田地区と清水地区の平地建物では、その用途や上屋の構造に相違があると考えられる。五反田地区の平地建物は、その検出がHr-F A層下畠下層であることや12～14号平地建物等の調査区北西部に位置するものを除くと122号住居の周辺や125号住居の東側に集中しておりその位置関係からみて住居周堤帯の下や縁辺に位置してしまうことから5期、6期の時期の存在は考えにくく、4期以前の存在であったと想定される。それに対して清水地区の平地建物は、Hr-F A層下であることからHr-F A降下とそれほど時間を経ていない時期に存在していたと想定される。また、清水地区3号平地建物には、カマドと想定される施設が設けられている。下芝五反田遺跡の住居では、カマドが設置されるのは住居変遷3期からであることから清水地区3号平地建物は3期以降の存在が考えられる。

しかし、清水地区1号～3号平地建物の存在する位置関係から3棟が同時にすべて存在していたとは考えにくく、清水地区の平地建物の中での変遷が想定される。

③ 土器集積

土器集積は、3基検出しているがみなHr-F A層によって直接覆われている。そうした中で2号土器集積は、Hr-F A降下前のそれほど時間をおかない時期に耕作された状態のウネ・サクの間に甕、壺を



中心に土器が置かれておりその性格が今一つ明確ではない。

1号土器集積については、集積された土器が概ね4期～6期の様相がみられる。こうしたことから土器量自体は、それほど多くはないが集積された時期にはある程度の期間継続して行われていたか5期ないし6期に集積されたと想定される。

清水地区1号土器集積は、Hr-F A層で直接覆われているが、土器は4期までの様相をみせている。

なお、土器集積遺構については、下芝天神遺跡のような大規模なものが検出されておりその形態、性格が多岐にわたるようである。

④ 畠

畠は、五反田地区では埋没河川の東側、122号住居、123号住居、124号住居の住居占地とその北西側の空間の周囲に展開している。その区画は、五反田地区7区画、清水地区1区画の8区画が確認されたが、その規模は全貌があきらかではないが大規模に違いがみられる。耕作の状態は、ウネ・サクの高低差があり耕作後の区画、ウネ・サクの高低差があまりなく前年に耕作が行われたままの状態の区画、ウネ・サクの痕跡がかすかに解る程度の残存状態の区画の3通りの状態が確認された。このような状態は、黒井峰遺跡等でも確認されている。こうした遺跡の成果から能登 健氏は古墳時代にはすでに輪換農法が行われていたと論考している。

また、五反田地区では、125号住居や126号住居のように僅かに埋没した程度の住居跡も積極的に耕作がなされているなど当時の農耕に対するあり方が注目される。それに対して清水地区では、調査区の西南部しか畠耕作が行われておらず1号住居など五反田地区より条件の好い箇所についてもそのままであるなど土地利用の面で相違がみられる。

4. 集落の変遷

下芝五反田遺跡の範囲は、この地域が厚い泥流層に覆われているため地形復元が困難な地域であったが、今回の北陸新幹線建設に伴う発掘調査は東西方

向のトレンチの役割を果たした。発掘調査の成果では、五反田地区の西側に埋没河川、清水地区と行力春名社遺跡の間に小谷津、そして行力春名社遺跡の東側にも谷津が確認された。その結果、この地域は、舌状台地状の微高地が確認され、その中の一つに下芝五反田遺跡も立地していることが解った。そして遺跡の範囲であるが、北陸新幹線や箕郷町教育委員会が行った東京電力鉄塔調査区の発掘調査の結果広範囲に広がることが解った。

また、この地域の開発は、埋没河川西側の微高地に立地する下芝天神遺跡ではAs-C層下畠が確認されており4世紀代の開発が確認されている。その後の5世紀前半代には、小谷津東側の微高地に立地する行力春名社遺跡で集落が営まれている。そして下芝五反田遺跡地域では、清水地区1号住居、2号住居や129号住居にみられる5世紀中葉頃に開発が始まったと想定される。そして6世紀初頭の榛名二ッ岳の噴火によりこの地域全域が壊滅的打撃を受け消滅している。

下芝五反田遺跡の住居については、6期の変遷を示したがこれを図示すると第190図のような変遷の位置関係がみられる。1期については、住居が五反田地区1軒、清水地区2軒と分散するため明確でないが五反田地区の調査範囲で検出した住居からも2期から3期、3期から4期、4期から5期、5期から6期へと3軒単位の移動が考えられる。こうした様相については、特に5期から6期への変化をみると125号住居から122号住居、126号住居から123号住居、そして126号住居の北東、124号住居の南東に存在したと推測される住居から124号住居へと5期の住居が北西に新たな住居を構築して移動したのではないかと想定される。また、こうした住居の動きと共に今まで住居の北西側に展開していた耕地を新たに南東に移動させたと想定される。また、こうした住居移動は、それぞれの住居があまり時間的間隔を置かないで行ったことが125号住居や126号住居の埋没土の状態から考えられる。こうした単位集団による移動については、和島誠一氏、近藤義郎氏、広瀬

-  集落・畠・祭祀遺跡
-  生産(水田)遺跡
-  墳墓
-  河川



第101区 遺跡地周辺の古墳時代様相図 (1/2,500)

和雄氏等の先学の集落論研究で指摘されていたが、それがまさに遺跡において実証されたと思われる。

こうした状況から下芝五反田遺跡における住居は、多少の時間差はあるであろうがある程度の単位ごとに移動したと考えられる。こうした移動の要因には、畠の耕作状態にみられる休耕地の確保といった問題が考えられ、土地利用の単位的移動が想定される。また、土地利用の単位としては、五反田地区のHr-F A層下で確認された3軒の住居の周囲に畠を営む形態を1単位とみることができると考えられる。そしてこの単位の中には、多少の付随する掘立柱建物と平地建物があると想定されるが黒井峰遺跡等にみられるような複数の平地建物や倉庫と言った建物は存在しないと思われる。

この状況からすると住居群+耕作中の畠+休耕中の畠が一つの単位と考えられる。そしてこの3軒の住居の住民により周囲の畠の耕作、管理などの経営が行われたと考えられる。また、こうした住居+畠の単位については、約100m離れた箕郷町教育委員会調査区でも住居変遷6期に相当する住居が検出されておりその周堤帯に近接するように畠が検出されていることからこのような形態がこの地域の農業経営単位の末端ではないかと想定される。

5. おわりに

下芝五反田遺跡では、Hr-F A層やHr-F A・Hr-F P泥流層で覆われていたため古墳時代後期初頭当時の地表面がそのまま残した状態で竪穴住居や畠等を検出できた。しかし、テフラで直接覆われた遺構は、住居と畠だけであった。Hr-F Aの20~30年後の降下であるHr-F P層で埋没した子持村黒井峰遺跡や西組遺跡等と比較すると大きな相違がみられる。黒井峰遺跡や西組遺跡は、今まで紹介された資料によると竪穴住居と高床式倉庫、平地建物を含んだ居住域を芝垣で囲んだ占有地を所有している。そして平地建物は、いくつかの形態が確認されそれらの形態から住居、納屋、作業小屋、家畜小屋などの性格が明らかになっている。こうした占有地の中は、

今日の農家が自己の塀で囲んだ敷地の中を母屋、納屋、作業小屋、家畜小屋等を配置するのと同様な状態であったことが明らかになっている。

下芝五反田遺跡では、前記のように竪穴住居3軒の周囲に平地建物や芝垣等を設けず畠が展開しており黒井峰遺跡等とは相違がみられる。こうした形態の差が地域的、社会的な要因かについては調査範囲が限定されたなかでは限界がある。

しかし、この地域は、「Ⅲ. 周辺の環境、2. 歴史的環境」をみていただくと解るように下芝五反田遺跡の古墳時代集落と同じ時期に三ッ寺I遺跡の豪族居館が存在している。また、東0.5kmには下芝谷ツ遺跡が存在している。現在、三ッ寺I遺跡の豪族居館の首長と下芝谷ツ遺跡に埋葬されている首長との関係は、三ッ寺I遺跡の首長を榛名山南麓域を支配する首長層と想定し、下芝谷ツ遺跡の首長を副葬品や下芝五反田遺跡(箕郷町教育委員会調査区)で出土した韓式系土器から外交を担当する配下の首長層ではないかと想定している。

また、三ッ寺I遺跡の豪族居館を中心とした開発については、能登 健氏、右島和夫氏、坂口 一氏等による生産史や集落、古墳の分析・研究により保渡田古墳群のなかの二子山古墳以前の首長墓が周囲に存在しないことや周辺の熊野堂遺跡、三ッ寺II遺跡、井出村東遺跡、保渡田遺跡、中林遺跡で5世紀後半代から急激に住居の増大傾向が観られることから三ッ寺I遺跡の豪族居館を築いた首長は5世紀後半に新たにこの地域を統合し飛躍的な成長を遂げた豪族であったと考えている。また、この飛躍的成長の背景を溜井灌漑や河川改修による大規模灌漑を利用した農業開発であったと考えている。また、下芝五反田遺跡の成立もちょうどこの三ッ寺I遺跡の首長が飛躍的成長を遂げるときであり右島氏のいう大規模灌漑により今まで未開の地であった下芝五反田遺跡の地域も農地化が行われたと考えられる。

こうした歴史的背景を考えるならば下芝五反田遺跡の集落は、三ッ寺I遺跡の豪族居館の大首長層、下芝谷ツ遺跡の中首長層の直接的配下にあった農耕

VI 古墳時代の成果と問題点

集落と考えられる。下芝五反田遺跡の集落はこうした首長層配下の直接的な支配集落の一面を提示していると考えられる。

こうした集落のあり方は、黒井峰遺跡や西組遺跡で検出された古墳時代の集落とは異なった様相を提示しており今後の古墳時代集落研究のうえでも重要な役割を占めており、今後周辺に位置する大規模な祭祀遺構を検出した下芝天神遺跡、Hr-F A層下、Hr-F P層下の水田跡を検出した浜川遺跡群をはじめとする同時代の遺跡の発掘調査成果をふまえて総合的に考察する必要があると考える。

引用・参考文献

- 石井克己 1991「黒井峰遺跡」『集落と豪族居館 古墳時代研究』2 雄山閣出版
1994「東国の村と生活—日本のボンベイ黒井峰・西組遺跡は語る」『東国と大和政権 古代を考える』吉川弘文館
1994「軽石噴火で埋まったムラを掘る」『黒井峰遺跡』読売新聞社
- 岩崎卓也 1992「ムラと共同体」『古墳の造られた時代古墳時代の研究』12 雄山閣出版
- 大塚初重 1990「ムラの変貌—古墳時代村落の構造—」『景観 I 日本村落史講座』2 雄山閣出版
- 大塚昌彦 1996「円形平地建物について」『土曜考古』20 土曜考古学研究会
- 小笠原好彦 1989「古墳時代の堅穴住居集落にみる単位集団移動」『国立歴史民俗博物館研究報告』22
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984「熊野堂遺跡 I」
1985「三ッ寺Ⅲ遺跡・保渡田遺跡・中里天神塚古墳」
1988「三ッ寺 I 遺跡」
1991「三ッ寺Ⅱ遺跡」
1994「行力春名社遺跡」
- 群馬県立歴史博物館 1990「第36回企画展 火の山はるな 火山噴火と黒井峰むらの暮らし」
- 坂口 一 1990「5世紀代における集落の拡大現象」『古代文化』42-2 (財)古代学協会
- 渋川市教育委員会 1988「中筋遺跡第2次」
1993「中筋遺跡第7次」
- 下城 正 1991「三ッ寺 I 遺跡」『集落と豪族居館 古墳時代研究』2 雄山閣出版
- 高橋一夫 1991「集落の形態 1 東日本の集落」『集落と豪族居館 古墳時代研究』2 雄山閣出版
- 辰巳和弘 1986「古墳時代の社会と生活」『日本の古代—前方後円墳の世紀—』5 中央公論社
- 能登 健 1983「群馬県下における埋没田畠調査の現状と課題」『群馬県史研究』17
1989「農耕集落論研究の現段階」『歴史評論』466
1990「三ッ寺 I 遺跡の成立とその背景」『古代文化』42-2 (財)古代学協会
- 広瀬和雄 1994「考古学から見た古代の村落」『日本通史』3 岩波書店
- 右島和夫 1990「古墳から見た5、6世紀の上野地域」『古代文化』42-2 (財)古代学協会

VII 科学分析・同定

はじめに

下芝五反田遺跡では、五反田地区でテフラを中心とした地質調査、122号住居の住居構築材と考えられる炭化材や128号住居、134号住居、138号住居の出土炭化材についての樹種同定、124号住居・125号住居・134号住居から出土した赤色顔料の分析を行った。清水地区では、テフラを中心とした地質調査、1号住居・Hr-F A層下畠より検出した植物遺体の植物珪酸体分析とDNA分析、Hr-F P直下の黒色土層中の花粉分析を行った。

1. 下芝五反田遺跡五反田地区地質調査

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

榛名火山南東部白川扇状地上に位置する下芝五反田遺跡五反田地区の発掘調査では、テフラ層により覆われた竪穴住居や畠などの遺構が多く検出された。そこで地質調査を行い、地層の層序についての記載を行うことになった。地質調査の対象となった地点は、125号住居址、124号住居址、85区T-6グリッド第1地点、85区T-6グリッド第2地点、86区H-18グリッドの5地点である。

2. 地質層序

(1)125号住居

竪穴住居である本遺構の覆土は、下位より礫混じり灰色砂層(層厚21cm)、成層したテフラ層、灰色石質岩片や白色軽石を多く含む灰色泥流堆積物(層厚63cm、軽石の最大径83mm、石質岩片の最大径97mm)からなる(図1)。

これらの土層のうち、成層したテフラ層は、下位より赤褐色の細粒火山灰層(層厚0.6cm)、灰色細粒火山灰層(層厚0.8cm)、暗灰色粗粒火山灰層(層厚0.6cm)、灰色細粒火山灰層(層厚0.5cm)黄色細粒火山灰層(層厚0.2cm)、黄褐色粗粒火山灰層(層厚0.3cm)、黄褐色細粒火山灰層(層厚0.5cm)から構成されている。このテフラ層は、その層相から6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ッ岳洪川テフラ層(Hr-F A, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992)に同定される。

(2)124号住居

竪穴住居である本遺構の覆土は、下位より成層したテフラ層、黒灰色土(層厚7cm)、成層したテフラ層、黄灰色泥流堆積物(層厚13cm以上)からなる(図2)。発掘調査では、床面と下位の成層したテフラ層の間および上位の成層したテフラ層の直下から炭化した材が検出されている。

これらの土層のうち、下位の成層したテフラ層は、下位より赤褐色の細粒火山灰層(層厚0.2cm)、円磨された白色軽石を含みかすかに成層した黄褐色細粒火山灰層(層厚1cm、軽石の最大径7mm)から構成されている。一方上位の成層したテフラ層は、下位より赤褐色の細粒火山灰層(層厚0.3cm)、灰色細粒火山灰層(層厚0.4cm)、暗灰色粗粒火山灰層(層厚0.5cm)、灰色細粒火山灰層(層厚0.3cm)、黄色細粒火山灰層(層厚0.2cm)、黄褐色粗粒火山灰層(層厚0.4cm)、黄褐色細粒火山灰層(層厚1.1cm)から構成されている。成層したテフラ層のうち、上位のテフラ層はその層相からHr-F Aに同定される。一方下位のテフラ層についても、その堆積構造は明瞭ではないもののHr-F Aに同定される可能性が大きい。これについては、考察のところで言及する。

(3)85区T-6グリッド第1地点

本地点では、4層準から畠遺構が検出された。ここでは、下位より灰色砂層(層厚5cm以上)、灰色軽石に富む黄色砂層(層厚9cm、軽石の最大径12mm)、灰色軽石混じり灰色砂層(層厚5cm)の連続が認められた(図3)。灰色軽石は比較的発泡がよく、斑晶に斜方輝石が認められる。このことから、灰色軽石は4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C、新井, 1979)に由来するものと考えられる。

またこれらの土層のうち、最上位の土層の上面に畠が作られている。この畠の上には層厚27cmの砂層が認められ、その中の2層準および砂層の上面の合計3層準から畠遺構が検出された。これらのうち、最下位の畠の作土は黄灰色砂層(層厚13cm)、中位の畠の作土は灰色砂層(層厚14cm)、上位の畠の作土は暗灰色砂層(層厚13cm)である。

4層準の畠のうち、最上位の畠は成層したテフラ層により覆われている。この成層したテフラ層は、下位より赤褐色の細粒火山灰層(層厚1.1cm)、桃灰色細粒火山灰層(層厚1.8cm)、暗灰色粗粒火山灰層(層厚0.3cm)、かすかに成層した黄灰色細粒火山灰層(層厚0.5cm)、黄色粗粒火山灰層(層厚0.2cm)、黄灰色細粒火山灰層(層厚0.2cm)、桃灰色粗粒火山灰層(層厚0.8cm)から構成されている。このテフラ層は、その層相からHr-F Aに同定される。このHr-F Aの上位には、灰色泥流堆積物が堆積している。

以上のことから、発掘調査により検出された4層準の畠は、いずれもAs-Cより上位でHr-F Aの下位にあることが明らかである。とくに最上位の畠は、Hr-F Aの堆積に伴って埋没したものと考えられる。

(4)85区T-6グリッド第2地点

本地点では、2層準から畠遺構が検出された。下位の畠はサクの部分のみが認められるもので、その覆土は暗灰色砂層となっている。その上位には、下位より灰色砂層(層厚9cm)、暗灰色砂層(層厚6cm)、灰色軽石混じり灰色砂層(層厚25cm、軽石の最大径9mm)が認められた(図4)。灰色軽石は比較的発泡がよく、斑晶に斜方輝石や単斜輝石が認められる。このことから、灰色軽石はAs-Cに由来するものと考えられる。発掘調査では、これらの土層の最上面に上位の畠が認められ、この畠は第1地点の成層したテフラ層つまりHr-F Aにより覆われている。一方、下位の畠については、その覆土の状況から第1地点4層準の畠のうち、最下位の畠に対比される可能性が大きいものと考えられる。

(5)86区H-18グリッド

ここでは、下位より灰色砂層(層厚4cm以上)、暗灰色砂層(層厚5cm)、成層したテフラ層、灰色泥流堆積物(層厚6cm以上)が認められた(図5)。これらのうち、成層したテフラ層は、下位より黄褐色の細粒火山灰層(層厚0.3cm)、黄灰色粗粒火山灰層(層厚0.7cm)、黄色細粒火山灰層(層厚0.6cm)から構成されている。このテフラは、層相からなるHr-F Aの上部に同定される。このHr-F Aの直下からは畠立の浅い畠遺構が検出されている。この畠ではHr-F Aの比較的下部が検出されなかったことから、Hr-F A降灰中に作られた畠の可能性も考えておかなければならない。

3. 考察—住居址覆土中に認められるHr-F Aの解釈について

下芝五反田遺跡五反田地区の竪穴住居の中には、124号住居のようにHr-F Aが2層あるように見えるものがある。124号住居では、上位のテフラはHr-F Aであることは明白であるが、下位のものについては堆積の状態があまり良くなく、厳密な議論を展開することは難しい。ただ周辺の多くの発掘調査では、これまで竪穴住居址覆土などを除いて、本遺跡周辺の平坦地に形成された土壤中に、Hr-F Aとそれによく似た別のテフラの2層が検出された例はなく、Hr-F Aのみが認められている。したがって、この地域によく似たテフラが2層堆積したとは考えにくい。両者がいずれもHr-F Aの一次堆積層であるとするならば、たとえばHr-F A堆

積開始時にすでに倒壊しかけた住居が存在し、下位のHr-F Aは直接床面に堆積したもの、また上位のHr-F Aは屋根の上に堆積したものとも考えることができるのではあるまいか。また下位のものについては、テフラの堆積構造がはっきりしないことから、住居周囲からの流れこみによる再堆積層の可能性も少しは考えられよう。いずれにしても、この問題については、発掘調査時の所見をもとに議論する必要がある。

4. 小結

下芝五反田遺跡において地質調査を行い土層の記載と示標テフラの検出を行なった。その結果、下位より浅間C軽石(As-C、4世紀中葉)の濃集層、榛名ニッ岳渋川テフラ層(Hr-F A、6世紀初頭)とそれに続く火山泥流堆積物が検出された。これらの示標テフラとの層位関係から、発掘調査により検出された125号竪穴住居と124号竪穴住居は、いずれもHr-F A降灰以前に構築されたことが明らかになった。また発掘調査により4層準から検出された畠遺構は、As-Cの直上でHr-F Aより下位にあることも明らかになった。とくに最上位の畠は、Hr-F Aの堆積に伴って埋没したものである。なお86区H-18グリッドで検出された畠については、Hr-F A降灰中に作られた可能性も考えられた。

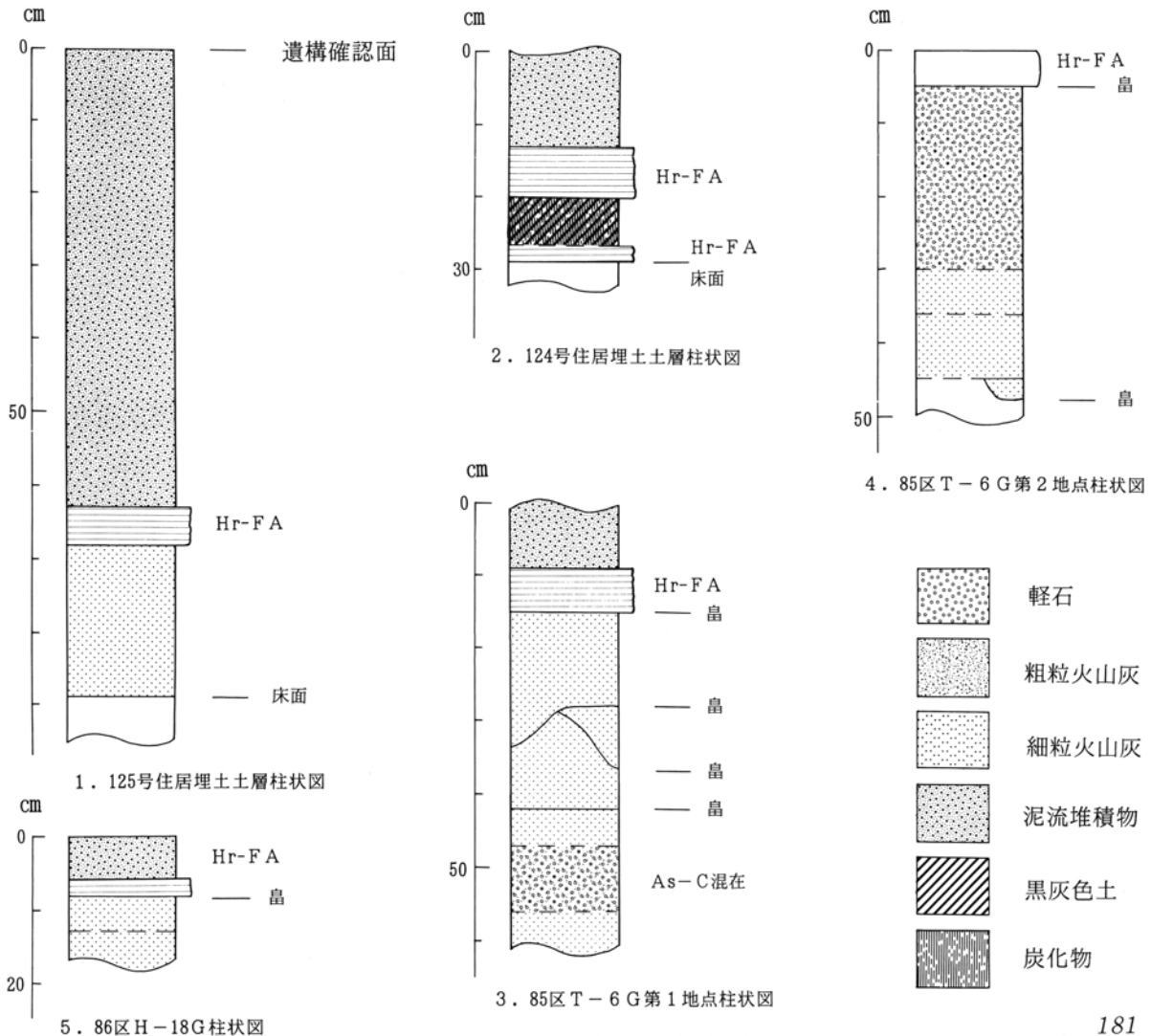
文献

新井房夫(1979)「関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層」『考古学ジャーナル』no.157, p.41-52.

町田 洋・新井房夫(1992)「火山灰アトラス」東京大学出版会, p.276.

坂口 一(1986)「榛名ニッ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器」『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団, p.103-119.

早田 勉(1989)「6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害」『第四紀研究』27, p.297-312.



2. 下芝五反田遺跡清水地区1号住居のテフラ調査

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

下芝五反田遺跡清水地区の発掘調査では、周堤帯をもつ竪穴住居が検出された。そこで基本的な土層断面で認められる土層と周堤帯を構成する盛土の土層とを比較して、周堤帯の構造に関する資料を収集することになった。また砂で充填された地割れの形成年代に関する資料を得るために、テフラ分析が試みられた。

2. 土層層序

下芝五反田遺跡清水地区の基本的な土層断面の一部が認められた1号住居の壁の土層を柱状図にして図1に示す。ここでは下位より黄灰色軽石が混じる暗灰色砂質土（層厚29cm、軽石の最大径12mm、試料番号2）と黄灰色軽石混じり灰色砂層（層厚12cm、軽石の最大径9mm、試料番号1）が認められた。

1号住居址の周堤帯の断面を図2に示す。ここでは、下位より灰色砂層（層厚8cm）、黒灰色土（層厚6cm、試料番号3）、灰色砂層（層厚8cm、試料番号2）、黄灰色軽石混じり暗灰色土（層厚15cm、軽石の最大径9mm、試料番号1）が認められた。これらの土層のうち、上位の2層が周堤帯を構成する盛土である。なおこの周堤帯は、成層したテフラ層（試料番号0）により覆われている。成層したテフラ層は、下位より褐色がかかった桃色の細粒火山灰層（層厚0.5cm）、黄灰色細粒火山灰層（層厚0.4cm）、灰色粗粒火山灰層（層厚0.5cm）、黄灰色細粒火山灰層（層厚0.4cm）、灰色粗粒火山灰層（層厚0.3cm）、桃色がかかった黄色細粒火山灰層（層厚0.2cm）の連続から構成されている。

なお下芝五反田遺跡清水地区の発掘調査では黄色砂（試料番号1）により充填された地割れが検出された。この地割れは少なくとも成層したテフラ層の下面にまで達している。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と方法

1号住居壁の試料番号2、1号住居の周堤帯試料番号1および0、さらに地割れを充填した砂の4試料を対象としてテフラ検出分析を行い、試料中に含まれるテフラ粒子の量や特徴などの記載を行った。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 80℃で恒温乾燥。
- 3) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。1号住居壁の試料番号2および1号住居の周堤帯試料番号1の中に比較的多く含まれる黄灰色の軽石は、スポンジ状によく発泡しており、斑晶に斜方輝石と単斜輝石が認められる。この軽石は、その岩相から4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間C軽石（As-C、新井、1979）に由来すると考えられる。また1号住居の周堤帯を覆う成層したテフラ層および地割れを充填した砂層中には、あまり発泡のよくない白色の軽石が比較的多く含まれている。軽石の斑晶には角閃石と斜方輝石が認められる。層相の特徴も合わせて考えると、6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳洪川テフラ（Hr-F A、新井、1979、坂口、1986、早田、1989）に由来する可能性が大きい。とくに前者については、層相からもHr-F Aの一次堆積層と判断される。

なお後者の試料からHr-F A起源の軽石が検出されたことは、砂層の堆積がHr-F A降灰以降の可能性を示

唆している。

4. 重鉱物組成分析

(1) 分析の目的と方法

周堤帯を構成する土層の起源を求めるために、周堤帯を構成する土層と、それとよく似た自然堆積の土層から採取された合計5点の試料について、重鉱物組成分析と粒度分析を行って、土層間の比較を行うことになった。重鉱物組成分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料20gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 分析篩により1/4-1/8mmの粒子を篩別。
- 5) 偏光顕微鏡下で重鉱物250粒子を検鏡し、重鉱物組成を求める。

(2) 分析結果

重鉱物組成ダイヤグラムを図3に、その内訳を表2に示す。1号住居址壁試料番号1には、量の多い順に斜方輝石(61.2%)、磁鉄鉱(14.8%)、単斜輝石(12.0%)、角閃石(7.6%)などの重鉱物が含まれている。1号住居址壁試料番号2には、量の多い順に斜方輝石(56.8%)、磁鉄鉱(21.2%)、単斜輝石(16.0%)、角閃石(3.2%)などの重鉱物が含まれている。

1号住居址周堤帯試料番号1には、量の多い順に斜方輝石(53.2%)、磁鉄鉱(30.8%)、単斜輝石(10.8%)、角閃石(4.0%)、カンラン石(0.4%)などの重鉱物が含まれている。また試料番号2には、量の多い順に斜方輝石(56.4%)、磁鉄鉱(22.8%)、単斜輝石(16.8%)、角閃石(3.2%)などの重鉱物が含まれている。さらに試料番号3には、量の多い順に斜方輝石(63.2%)、磁鉄鉱(19.6%)、単斜輝石(11.2%)、角閃石(4.0%)などの重鉱物が含まれている。

以上のように、量の多少に違いはあるものの、いずれの試料にも量の多い順に斜方輝石、磁鉄鉱、単斜輝石、角閃石が含まれており、よく似た特徴を持っている。層相のよく似た1号住居址試料番号1と1号住居周堤帯試料番号2、また1号住居址試料番号2と1号住居周堤帯試料番号1とでは、重鉱物組成上でもよく似た傾向が認められる。

5. 粒度分析

(1) 分析の方法

粒度分析は次の手順で行われた。

- 1) 試料を80℃で24時間乾燥。
- 2) 16mm-1/16mmの分析篩(1φ間隔)を用い、手動により篩別。
- 3) 電子天秤により秤量。

(2) 分析結果

粒度分析の結果を表3に、粒度分布曲線を図4に示す。分析では、Fork and Word(1957)の式に基づいて、中央粒径、平均粒径、分級度、歪度、尖度などによって試料間の比較を試みることにした。しかし実際には分析試料中に細粒の粒子(4φ未満)が比較的多く含まれているためにφ95が算出できず、分級度、歪度、尖度を求めることはできなかった。分析篩以外の方法により細粒物質の粒度を測定する必要がある。

1号住居址試料番号1、2、1号住居周堤帯試料番号1、2、3の中央粒径(Mdφ)は、順に2.53、2.24、2.36、2.07、2.79である。また平均粒径(Mz)は、順に2.53、2.24、2.43、1.92、2.81である。遺構構築前

Ⅶ 科学分析・同定

の旧表土である1号住居址周堤帯試料番号3については、他の試料と比較して中央粒径と平均粒径が小さい(細かい)傾向が伺えた。それ以外については、とくに層相の似た1号住居壁試料番号2と1号住居周堤帯試料番号1の間でよく似た傾向が伺えた。しかしもう一方の1号住居壁試料番号1と1号住居周堤帯試料番号2とでは、後者の粒径が大きい傾向が明らかになった。

6. 小結

下芝五反田遺跡清水地区の1号住居の壁で見られた自然堆積の土層と、周堤帯の盛土との比較を、地質調査による野外観察、テフラ検出分析さらに重鉱物組成分析と粒度分析を合わせた室内分析により試みた。その結果、さほど顕著ではないものの、層相のよく似た試料同士で同じテフラに由来する軽石が認められた。また重鉱物組成上似た傾向が認められ、自然堆積層をそのまま盛土に用いた傾向が伺えた。なお周堤盛土については層相のよく似た自然堆積層よりも粒度が粗い傾向にあり、盛土構築途中で粗粒の砂が混入した可能性が考えられる。

文献

新井房夫(1962)「関東盆地北西部地域の第四紀編年」『群馬大学紀要自然科学編』10, p.1-79.
 新井房夫(1979)「関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層」『考古学ジャーナル』no.157, p.41-52.
 町田 洋・新井房夫(1992)火山灰アトラス, 東京大学出版会, p.276.
 坂口 一(1986)「榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器」『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団, p.103-119.
 早田 勉(1989)「6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害」『第四紀研究』27, p.297-312.
 Fork, R.L. and Ward W. (1957)「Branzos river bar ; a study in the signi-ficance of grain size parameters」『J. Sed. Petrol.』27, p.3-26.

第3表 清水地区のテフラ検出分析結果

地 点	試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径
1号住居壁	2	++	灰白	8.8mm
1号住居周堤帯	0	++	白	2.5mm
1号住居周堤帯	1	++	灰白	7.3mm
地割れ	1	++	白	4.1mm

++++:とくに多い, ++++:多い, ++:中程度,
 +:少ない, -:認められない.

第4表 清水地区の重鉱物組成分析結果

地 点	試料	ol	opx	cpx	ho	bi	mt	その他	合計
1号住居壁	1	0	153	30	19	0	37	11	250
	2	0	142	40	8	0	53	7	250
1号住居周堤帯	1	1	133	27	10	0	77	2	250
	2	0	141	42	8	0	57	2	250
	3	0	158	28	10	0	49	5	250

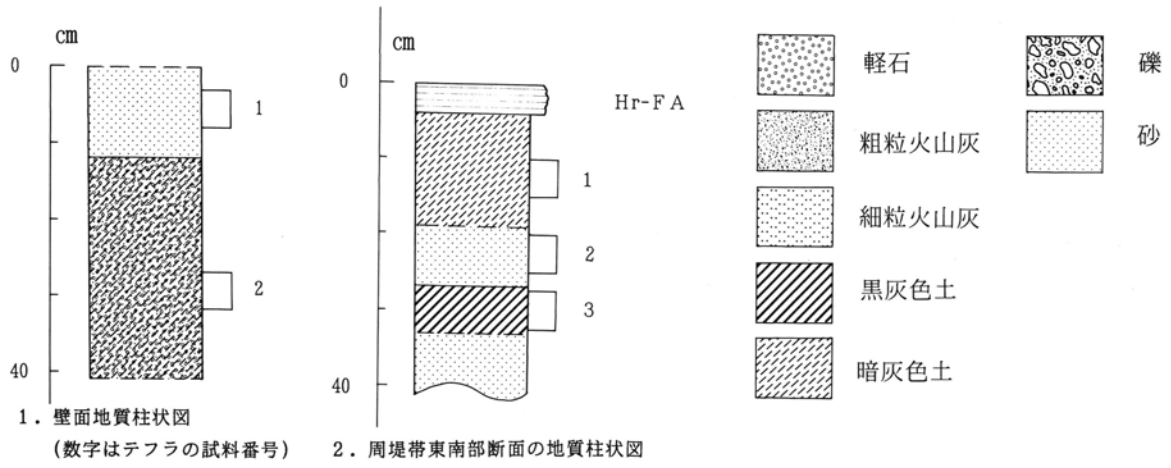
数字は粒子数.

第5表 清水地区1号住居壁の粒度分析結果

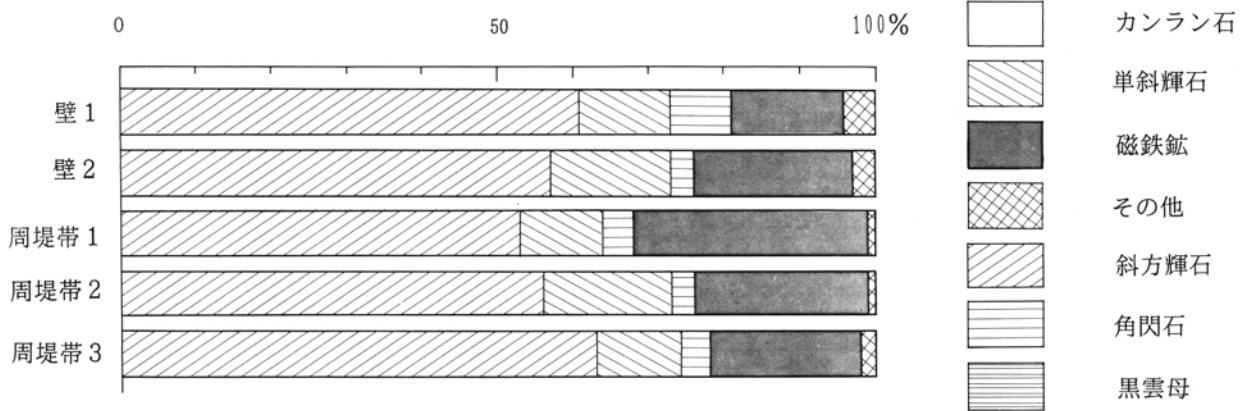
粒径/試料	1	2
-4φ (>16mm)	0.00 g	0.00 g
-3φ (16-8mm)	0.54 g	1.67 g
-2φ (8-4mm)	1.97 g	6.72 g
-1φ (4-2mm)	2.18 g	6.00 g
0φ (2-1mm)	2.58 g	5.26 g
1φ (1-0.5mm)	8.06 g	6.59 g
2φ (0.5-0.25mm)	43.91 g	23.53 g
3φ (0.25-0.125mm)	115.88 g	58.28 g
4φ (0.125-0.063mm)	48.80 g	29.32 g
<4φ (<0.063mm)	14.28 g	12.09 g
合計	238.20 g	149.46 g

第6表 清水地区1号住居周堤帯の粒度分析結果

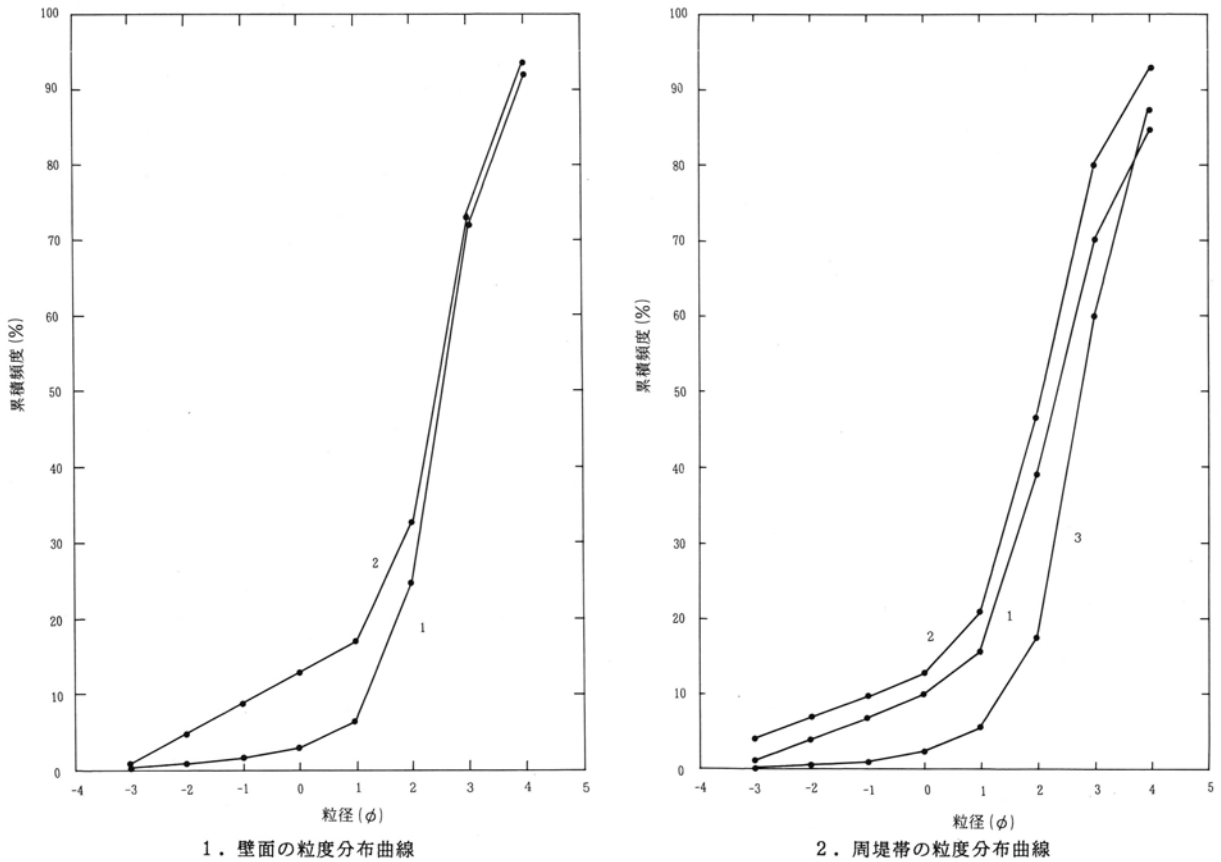
粒径/試料	1	2	3
-4φ (>16mm)	0.00 g	0.00 g	0.00 g
-3φ (16-8mm)	1.31 g	5.63 g	0.00 g
-2φ (8-4mm)	3.74 g	4.57 g	0.47 g
-1φ (4-2mm)	3.63 g	3.61 g	0.80 g
0φ (2-1mm)	3.73 g	4.48 g	1.44 g
1φ (1-0.5mm)	7.59 g	11.77 g	3.48 g
2φ (0.5-0.25mm)	28.06 g	37.38 g	13.26 g
3φ (0.25-0.125mm)	38.63 g	46.49 g	44.94 g
4φ (0.125-0.063mm)	17.92 g	18.55 g	31.38 g
<4φ (<0.063mm)	18.97 g	8.78 g	13.98 g
合計	123.58 g	141.26 g	109.75 g



第193図 清水地区1号住居土層柱状図



第194図 清水地区1号住居重鉱物組成ダイアグラム



第195図 清水地区1号住居の粒度分布曲線

3. 下芝五反田遺跡清水地区のテフラ調査

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

榛名火山南東麓、白川扇状地上に位置する下芝五反田遺跡清水地区の発掘調査では、良好な地層の断面が作成された。そこで地質調査を行い地質層序を記載するとともに、テフラ検出分析を行って示標テフラの層位を明かにした。地質調査の対象とした地点は、75区 J-12+3 m グリッドおよび75区 G+1 m-11 グリッドの2地点である。

2. 地質層序

(1) 75区 J-12+3 m グリッド

ここでは黒色土(層厚2 cm以上)の上位に、下位より成層したテフラ層(層厚3.2 cm)、礫混じり灰色砂層(層厚44 cm, 礫の最大径91 mm)、暗褐色土(層厚0.3 cm)、桃灰色砂層(層厚1.3 cm)、黒褐色土(層厚0.3 cm)、成層した灰色砂層(層厚21 cm)、白色軽石円礫を含む黄灰色砂礫層(層厚9 cm, 最大径56 mm)、灰色シルト層(層厚4 cm)、灰色砂層(層厚6 cm)、黒色腐植土(層厚0.3 cm)、灰色砂層(層厚0.6 cm)、黒色腐植土(層厚0.2 cm)、成層した黄灰色砂層(層厚3 cm)、黒褐色腐植土(層厚0.8 cm)、黄白色細粒火山灰層(層厚0.2 cm)、葉理の発達した桃灰色シルト層(層厚8 cm)、気泡が含まれる黄灰色泥流堆積物(層厚16 cm, 軽石の最大径140 mm)、葉理が発達した黄色シルト層(層厚2 cm)、気泡が少量含まれる灰色泥流堆積物(層厚147 cm, 軽石の最大径190 mm)の連続が認められた。

成層したテフラ層は、下位より褐色がかった桃色細粒火山灰層(層厚0.8 cm)、葉理が発達した暗灰色粗粒火山灰層(層厚1.5 cm)、灰白色細粒火山灰層(層厚0.3 cm)、桃色がかった黄色細粒火山灰層(層厚0.6 cm)から構成されている。このテフラは、層相などから6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳洪川テフラ層(Hr-F A, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992)に同定される。またその上位にある黄白色細粒火山灰層は、層位や層相などから6世紀中葉に榛名火山二ツ岳火口から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ層(Hr-F P, 新井, 1962, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992)の最上部の火山灰層に同定される。

これらの示標テフラ層との層位関係から、少なくともHr-F Aの直上にある礫混じり灰色砂層はHr-F A(おもにFPF-1, 新井, 1979)の堆積に伴って発生した洪水堆積物の可能性が大きい。またHr-F Pの上位にある泥流堆積物も、その層位や堆積物中に気泡が含まれている層相などから、Hr-F P(おもにFPF-2, 新井, 1979)の堆積に伴って発生した洪水堆積物である可能性が大きい。なお泥流堆積物中の気泡は、泥流に含まれていた水が、泥流中の粒子の熱により水蒸気に気化したために形成されたものと考えられる。すなわちHr-F Pに伴う泥流は、下芝五反田遺跡清水地区付近に堆積した当時、少なくとも部分的にかなり高温(100℃以上)の状態が保たれていたものと推定される。

(2) 75区 G+1 m-11 グリッド排水溝断面

本地点では75区 J-12+3 m グリッドの成層したテフラ層の下位の地層がよく観察できた。ここでは砂混じり灰色亜円礫層(層厚10 cm以上)の上位に、下位より黒褐色砂質土(層厚0.3 cm)、黄褐色軽石層(層厚3 cm, テフラ分析試料番号1)、黒褐色土(層厚4 cm)が認められた。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

75区 G+1 m-11 排水溝断面でみとめられた黄褐色軽石層について、すでに噴出年代が明らかにされている示標テフラとの同定を行うためにテフラ検出分析を行った。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料10 g を秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。75区G+1m-11グリッド試料番号1には、黄褐色軽石がとくに多く含まれている。軽石はスポンジ状に比較的よく発泡しており、斑晶に斜方輝石や単斜輝石などが認められる。軽石の最大径は9.3mmである。一方、石質岩片の最大径は2.3mmである。また黄白色でスポンジ状によく発泡した軽石型火山ガラスも少量含まれている。このテフラ層は、層位やテフラ粒子の特徴などから4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C, 新井, 1979)に同定される。

4. 小結

下芝五反田遺跡清水地区において地質調査とテフラ検出分析を合わせて行った結果、下位より浅間C軽石(As-C, 4世紀中葉)、榛名二ツ岳洪川テフラ層(Hr-F A, 6世紀初頭)、Hr-F Aの堆積に伴って発生した洪水堆積物、榛名二ツ岳伊香保テフラ層(Hr-F P, 6世紀中葉)、Hr-F Pの堆積に伴って発生した泥流堆積物が認められた。また堆積物中に気泡が認められたことから、Hr-F Pに伴う泥流は、下芝五反田遺跡清水地区付近に堆積した当時少なくとも部分的にかなり高温(100℃以上)状態が保たれていたものと推定された。

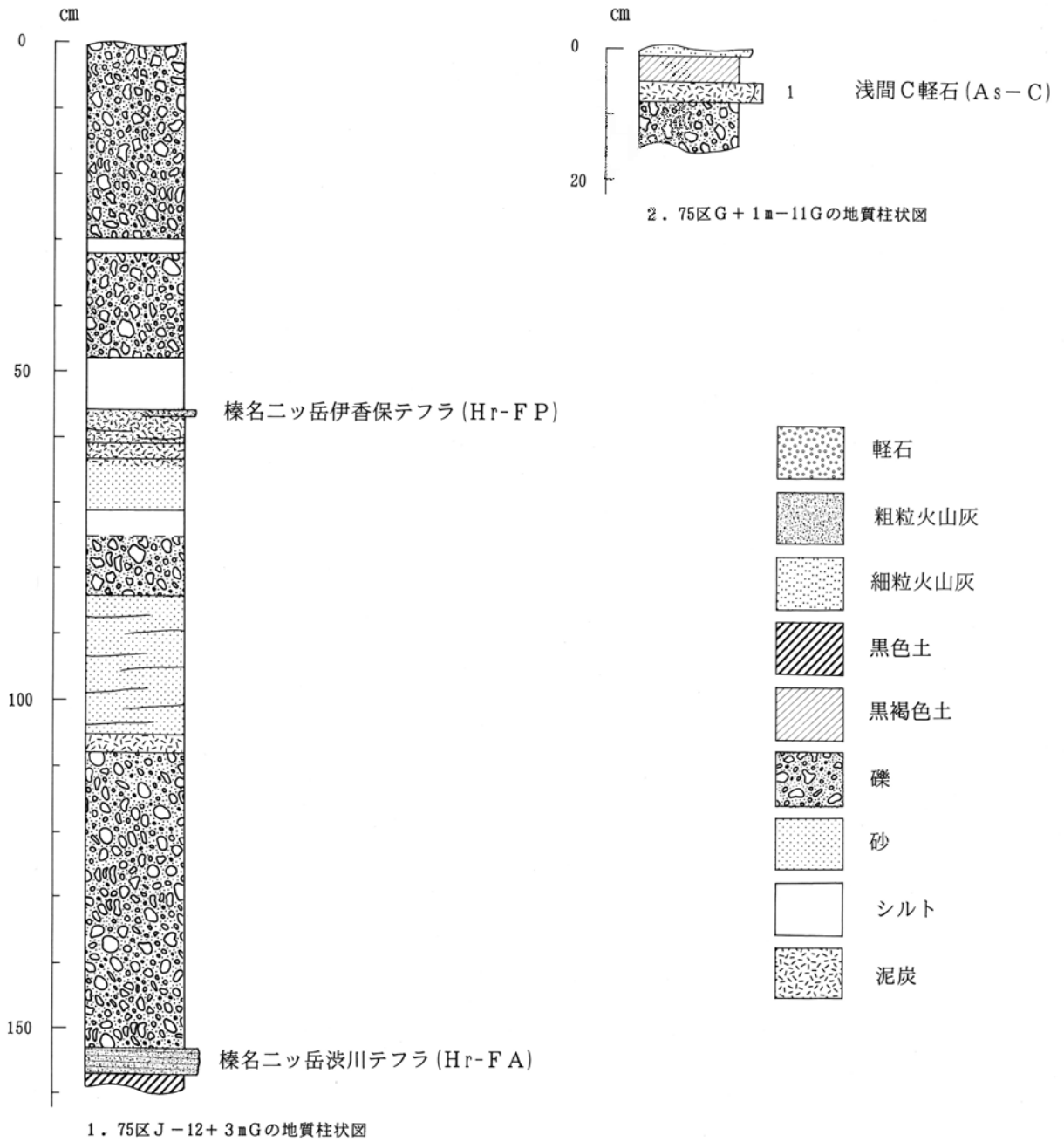
文 献

- 新井房夫(1962)「関東盆地北西部地域の第四紀編年」『群馬大学紀要自然科学編』10, p.1-79.
 新井房夫(1979)「関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層」『考古学ジャーナル』no.157, p.41-52.
 町田 洋・新井房夫(1992)火山灰アトラス, 東京大学出版会, p.276.
 坂口 一(1986)「榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器」『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団, p.103-119.
 早田 勉(1989)「6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害」『第四紀研究』27, p.297-312.

第7表 下芝五反田遺跡清水地区におけるテフラ検出分析結果

地点	試料	軽石			火山灰		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
75区G+1m-11	1	++++	黄褐	9.3	+	pm	黄白

++++: とくに多い, +++: 多い, ++: 中程度, +: 少ない,
 -: 認められない. 最大径の単位は, mm.



第196図 清水地区の地質柱状図

4. 下芝五反田遺跡清水地区畠出土植物遺体珪酸体分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸(SiO_2)が蓄積したものであり、植物が枯れた後も微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。この微化石は植物により様々な形態的特徴を持っていることから、土壤中から検出してその組成や量を明らかにすることで過去の植生環境を復元することができる(杉山, 1987)。

下芝五反田遺跡清水地区の発掘調査では、Hr-F A直下から畠跡と見られる畝状遺構が検出され、同遺構面およびHr-F A中では草本類の植物遺体が認められた。ここでは、これらの試料について植物珪酸体分析を行い、イネ科栽培植物の同定および周辺の植生復原を試みた。

2. 試料

試料は、Hr-F A直下の畠跡表面から試料No. 1 ~No. 4、同畝部断面からNo. 1 ~No. 6、Hr-FP直下から試料P1(黒褐色腐植層)の計11点が採取された。植物遺体は、畠跡表面からNo. 1 ~No. 6、Hr-F A中からNo. 1 とNo. 2の計8点が採取された。このうち、畠跡表面の植物遺体はどれもかなり炭化が進んでおり、外見から植物種の識別はできなかった。

3. 分析法

植物遺体については、電気炉灰化法(550℃、6時間)によって灰像試料を作成し、オイキットで封入してプレパラートを作成した。土壌試料については、プラント・オパール定量分析法(藤原, 1976)をもとに、次の手順で植物珪酸体の抽出・定量を行った。

- 1) 試料の絶乾(105℃・24時間)
- 2) 試料約1 gを秤量、ガラスビーズ添加(直径約40 μm 、約0.02 g)
※電子分析天秤により1万分の1 gの精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散(300 W・42 KHz・10分間)
- 5) 沈底法による微粒子(20 μm 以下)除去、乾燥
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散、プレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1 gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1 g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、この値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10⁻⁵ g)をかけて、単位面積で層厚1 cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、キビ族はヒエ、ヨシ属はヨシ、ウシクサ族はススキの値を用いた。その値はそれぞれ8.40、6.31、1.24である。タケ亜科については数種の平均値を用いた。ネザサ節の値は0.48、クマザサ属は0.75である。

4. 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。

Ⅶ 科学分析・同定

〔イネ科〕

キビ族(ヒエ属など)、ヨシ属、ウシクサ族(ススキ属やチガヤ属など)、シバ属、キビ族型、ウシクサ族型、ウシクサ族型(大型)、くさび型、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、クマザサ属型(おもにクマザサ属)、未分類のタケ亜科、表皮毛起源、棒状珪酸体、茎部起源、未分類等

〔樹木〕

はめ絵パズル状(広葉樹)、多角形板状(広葉樹)

以上の分類群について定量を行い、その結果を表1、表2および図1に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

5. イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネをはじめ、オオムギ族(ムギ類が含まれる)、キビ族(ヒエヤアワ、キビなどが含まれる)、オヒシバ属(シコクビエが含まれる)、トウモロコシ属、ジュズダマ属(ハトムギが含まれる)などがある。本遺跡の試料からはこのうちのキビ族が検出された。

キビ族は、Hr-F A直下畠跡の畝間(No. 2とNo. 4)から検出された。密度はいずれも700個/gと少量である。同族にはヒエヤアワ、キビなどの栽培種が含まれるが、現時点ではこれらの栽培種とイヌビエやエノコログサなどの野・雑草とを完全に識別するには至っていない(杉山ほか, 1988)。したがって、同畠跡でヒエなどのキビ族植物が栽培されていた可能性は考えられるものの、イヌビエなどの野・雑草に由来するものである可能性も否定できない。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、未分類等としたものの中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畠作物は分析の対象外となっている。

6. 畠跡表面の植物遺体について

Hr-F A直下の畠跡表面から採取された植物遺体(No. 1～No. 6)およびHr-F A中から採取された植物遺体(No. 1とNo. 2)の灰像について観察を行った。

その結果、畠跡表面の植物遺体(No. 1～No. 6)では、いずれの試料からも植物珪酸体(機動細胞や短細胞、結合組織、表皮毛などに由来する珪化細胞組織)は確認されなかった。したがって、これらの植物遺体は植物珪酸体をほとんど形成しない植物種に由来するものである可能性が考えられる。

Hr-F A中の植物遺体(No. 1とNo. 2)では、わずかながら結合組織や維管束などに由来すると考えられる棒状の珪化細胞組織(棒状珪酸体)が認められた。この珪酸体はこれまでに検討した標本の中ではカヤツリグサ科の一種に類似しているように思われるが、棒状珪酸体は様々な植物種で形成され、標本の検討が充分でないことから、給源植物の究明については今後の検討課題としたい。

7. 植物珪酸体群集と古植生

1) Hr-F A直下層

Hr-F A直下層では、全体的にヨシ属やウシクサ族(ススキ属など)、ウシクサ族型、棒状珪酸体などが多く検出された。また、前述のように一部の試料からはキビ族が少量検出された。おもな分類群について植物珪酸体密度から給源植物の生産量を推定したところ、ヨシ属が圧倒的に卓越しており、次いでウシクサ族(ススキ属など)が多くなっていることが分かる(表2)。

これらの結果から、Hr-F A直下層の堆積当時はヨシ属が多く生育する湿地的な状況であったものと考えら

4. 清水地区畠出土植物遺体珪酸体分析

れ、その周辺などではススキ属なども見られたものと推定される。なお、Hr-F A直下の畠跡はこのようなヨシ原を造成して作られたものと考えられる。

2) Hr-F P直下層

Hr-F P直下層(P 1)では、ヨシ属が極めて多量に検出され、ウシクサ族型やシバ属なども見られた。植物体量の推定値によると、ヨシ属は面積1 m²で層厚1 cmあたり約13kgにも達しており、圧倒的に卓越している(表2)。これらのことから、Hr-F P直下層の堆積当時はヨシ属が繁茂する湿地であったものと推定される。

8. まとめ

Hr-F A直下の畠跡表面の土壌や植物遺体について検討を行った。その結果、同畠跡ではヒエなどのキビ族植物が栽培されていた可能性が認められたものの、栽培植物種を明確に特定するには至らなかった。なお、Hr-F A直下層の堆積当時はヨシ属が生育する湿地的な状況であったものと考えられ、そのヨシ原を造成して畠が作られたものと推定される。

参考文献

- 杉山真二(1987)「遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点」『植生史研究』第2号, p.27-37.
 杉山真二(1987)「タケ亜科植物の機動細胞珪酸体」『富士竹類植物園報告』第31号, p.70-83.
 杉山真二・松田隆二・藤原宏志(1988)「機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕追究のための基礎資料として—」『考古学と自然科学』20, p.81-92.
 藤原宏志(1976)「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—」『考古学と自然科学』9, p.15-29.
 藤原宏志(1979)「プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)—福岡・板付遺跡(夜白式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ(O. sativa L.)生産総量の推定—」『考古学と自然科学』12, p.29-41.
 近藤錬三・ピアス友子(1981)「樹木葉のケイ酸体に関する研究(第2報)—双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について—」『帯広畜産大学研究報』12, p.217-229.

植物珪酸体の顕微鏡写真

No.	分類群	地点	試料名
1	キビ族(ヒエ族など)	Hr-F A直下畠	2
2	ヨシ属	Hr-F A直下畠	2
3	ヨシ属	土層断面	3
4	ウシクサ族(ススキ属など)	Hr-F A直下畠	3
5	キビ族	土層断面	1
6	ウシクサ族(大型)	土層断面	6
7	くさび型	土層断面	2
8	ネザサ節型	Hr-F A直下畠	2
9	クマザサ属型	土層断面	5
10	棒状珪酸体	Hr-F A直下畠	2
11	はめ絵パズル状(広葉樹)	Hr-F A直下畠	3
12	多角形板状(広葉樹)	Hr-F A直下畠	2

第8表 清水地区畠植物珪酸体分析結果

(単位:100個/g)

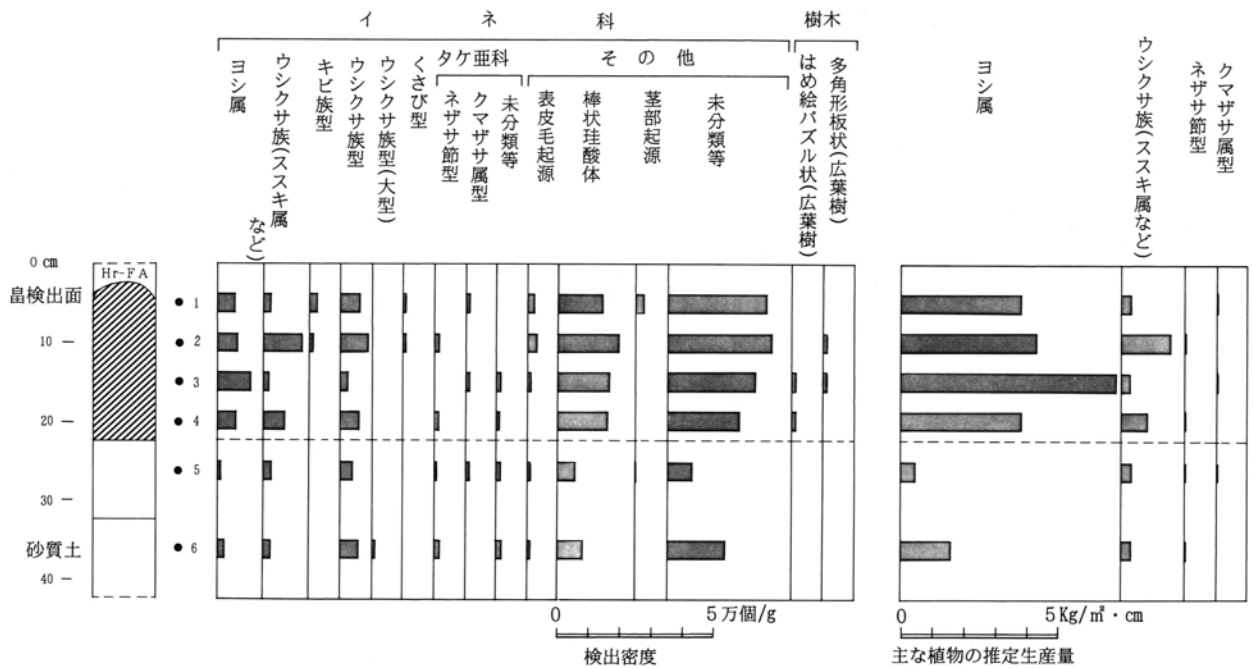
分類群	Hr-FA直下畠				ウネの土層断面						Hr-FP直下	
	1	2	3	4	1	2	3	4	5	6		P 1
	ウネ上	ウネ間	ウネ上	ウネ間	Hr-FA直下							
イネ科												
キビ族(ヒエ属など)		7		7								
ヨシ属	45	76	80	73	60	69	110	60	7	24	211	
ウシクサ族(ススキ属など)	45	55	36	7	22	123	19	67	27	24	7	
シバ属											21	
キビ族型		7	7		22	7						
ウシクサ族型	104	89	138	26	60	82	19	60	41	55	77	
ウシクサ族型(大型)				13						6		
くさび型					7	7					7	
タケ亜科												
ネザサ節型	22	7				14		15	7	12		
クマザサ属					7		6		7			
未分類等	22	14	7	13			13	7	14	18		
その他イネ科												
表皮毛起源	22	62	15	7	22	27	6		7	6	21	
棒状珪酸体	164	186	255	119	150	199	162	157	54	80	521	
茎部起源			15	7	22				7		21	
未分類等	216	275	255	132	322	343	285	231	81	190	436	
樹木起源												
はめ絵パズル状(広葉樹)	7		7				6	7				
多角形板状(広葉樹)		21		403		7	6					
植物珪酸体総数	648	799	816		697	878	634	604	251	416	1322	

第9表 主な分類群の植物体量の推定値

(単位: Kg/m²・cm)

分類群	Hr-FA直下畠				ウネの土層断面						Hr-FP直下	
	1	2	3	4	1	2	3	4	5	6		P 1
	ウネ上	ウネ間	ウネ上	ウネ間	Hr-FA直下							
イネ科												
キビ族(ヒエ属など)		0.58		0.55								
ヨシ属	2.82	4.78	5.06	4.58	3.78	4.33	6.94	3.76	0.43	1.54	13.31	
ウシクサ族(ススキ属など)	0.55	0.68	0.45	0.08	0.28	1.53	0.24	0.83	0.34	0.30	0.09	
タケ亜科												
ネザサ節型	0.11	0.03				0.07		0.07	0.03	0.06		
クマザサ属					0.06		0.05		0.05			

※第8表の値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数をかけて算出



第197図 清水地区畠断面における植物珪酸体分布結果

5. 下芝五反田遺跡清水地区1号住居出土植物遺体珪酸体分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れた後も微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。この微化石は大きさや形態が植物群により固有であることから、土壤中から検出してその組成や量を明らかにすることで過去の植生 (おもにイネ科) を復元することができる (杉山, 1987)。

ここでは、1号住居の壁で見られた自然堆積層と周堤帯の盛土について植物珪酸体分析を行い、当時の古植生・古環境の推定を試みた。

2. 試料

試料は、1号住居の壁で見られた自然堆積層から2点、周堤帯の盛土から3点の計5点が採取された。これらは、テフラ分析や粒度分析を行ったものと同一試料である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法 (藤原, 1976) をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料の絶乾 (105℃・24時間)
- 2) 試料約1gを秤量、ガラスビーズ添加 (直径約40 μm 、約0.02g)
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散 (300W・42KHz・10分間)
- 5) 沈底法による微粒子 (20 μm 以下) 除去、乾燥
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散、プレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10⁻⁵g) をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、ヨシ属はヨシ、ウシクサ族はススキの値を用いた。その値は6.31と1.24である。タケ亜科については数種の平均値を用いた。ネザサ節の値は0.48、クマザサ属は0.75である。

4. 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1、表2および図1、図2に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

機動細胞由来: ヨシ属、ウシクサ族 (ススキ属やチガヤ属など)、ジュズダマ属、ウシクサ族型、ウシクサ族型 (大型)、Aタイプ、ネザサ節型 (おもにメダケ属ネザサ節)、クマザサ属型 (おもにクマザサ属)、タケ亜科 (未分類等)

Ⅶ 科学分析・同定

その他：表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、地下茎部起源、未分類等
〔樹木〕

多角形板状（ブナ科コナラ属など）、Aタイプ

5. 考察

(1) 1号住居の壁（自然堆積層）

浅間C軽石（As-C、4世紀中葉）混じりの暗灰色砂質土（試料2）とその上位の灰色砂層（試料1）について分析を行った。

その結果、試料2ではヨシ属やウシクサ族（ススキ属など）、ウシクサ族型、ネザサ節型などが少量検出された。試料1でもほぼ同様の結果であるが、ヨシ属はやや増加しており、ジュズダマ属も検出された。おもな分類群の推定生産量（図1右側）によると、両者ともヨシ属が圧倒的に卓越していることが分かる。

以上の結果から、各層の堆積当時は、おもにヨシ属が生育する比較的湿潤な土壌条件で推移したものと考えられ、周辺などではネザサ節なども見られたものと推定される。

(2) 周堤帯の盛土

榛名二ツ岳洪川テフラ（Hr-F A、6世紀初頭）直下の暗灰色土（試料1）とその下位の灰色砂層（試料2）、黒灰色土（試料3）について分析を行った。

その結果、最下位の試料3では、ヨシ属やウシクサ族型、棒状珪酸体が比較的多く検出され、ウシクサ族（ススキ属など）やネザサ節型なども検出された。試料2では、ヨシ属やウシクサ族（ススキ属など）、ウシクサ族型などが検出されたが、いずれも少量である。試料1では試料3とおおむね同様の結果であり、Aタイプやクマザサ属型なども検出された。おもな分類群の推定生産量（図2右側）によると、試料3と試料1ではヨシ属が圧倒的に卓越していることが分かる。

6. まとめ

周堤帯の盛土と1号住居壁の自然堆積層との比較では、層相の似た試料同士で類似した植物珪酸体組成を示しており、自然堆積層をそのまま盛土に用いた可能性が認められた。

参考文献

杉山真二（1987）「遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点」『植生史研究』第2号，p.27-37.
 杉山真二（1987）「タケ亜科植物の機動細胞珪酸体」『富士竹類植物園報告』第31号，p.70-83.
 藤原宏志（1976）「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－」『考古学と自然科学』9，p.15-29.
 藤原宏志（1979）「プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)－福岡・板付遺跡（夜臼式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（*O. sativa* L.）生産総量の推定－」『考古学と自然科学』12，p.29-41.
 近藤錬三・ピアスン友子（1981）「樹木葉のケイ酸体に関する研究(第2報)－双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について－」『帯広畜産大学研究報』12，p.217-229.

植物珪酸体の顕微鏡写真

No.	分類学	地点	試料名
1	ヨシ属	1号住居壁	1
2	ヨシ属	周堤帯土層断面	2
3	ウシクサ族(ススキ属など)	1号住居壁	2
4	ネザサ節型	周堤帯土層断面	3
5	イネ科Aタイプ	周堤帯土層断面	1
6	表皮毛起源	1号住居壁	1
7	棒状珪酸体	周堤帯土層断面	3
8	多角形板状	周堤帯土層断面	1
9	樹木Aタイプ	周堤帯土層断面	2

第10表 清水地区の植物珪酸体分析結果

(単位: ×100個/g)

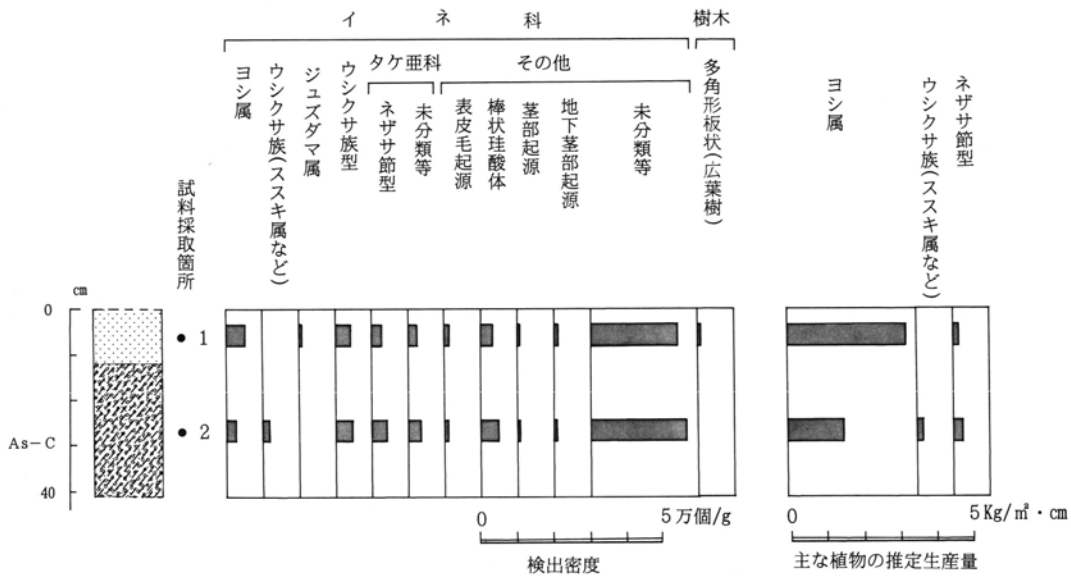
分類群	1号住居壁		周堤帯断面		
	1	2	1	2	3
イネ科	51	24			
ヨシ属		12	45	6	103
ウシクサ族(ススキ属など)			26	12	6
ジュズダマ属	6				
ウシクサ族型	45	49	116	37	77
ウシクサ族(大型)			6		
Aタイプ			13		
タケ亜科					
ネザサ節型	28	43	19		26
クマザサ属型			13		
未分類等	22	36	6	25	6
その他のイネ科					
表皮毛起源	11	6	13	6	6
棒状珪酸体	34	49	213	68	211
茎部起源	6	6	13	19	6
地下茎部起源	11	6			
未分類等	242	267	401	174	340
樹木起源					
多角形板状(広葉樹)	6		6		
Aタイプ				6	
植物珪酸体総数	461	498	893	355	782

第11表 主な分類群の植物体量の推定値

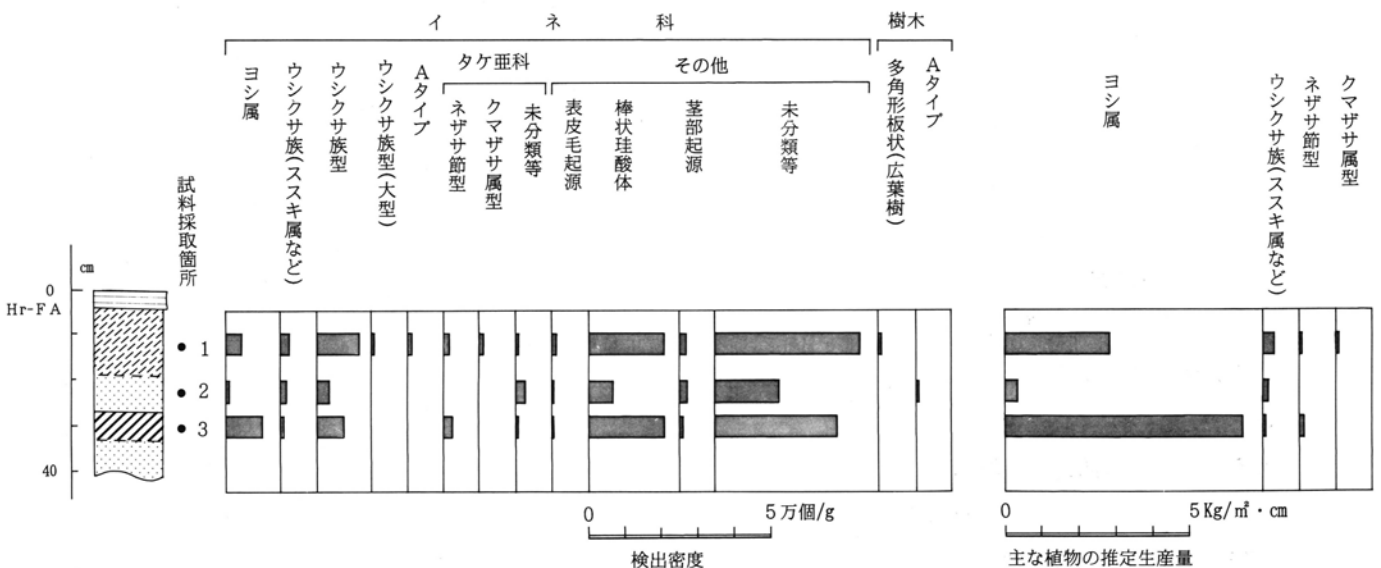
(単位: Kg/m²・cm)

分類群	1号住居壁		周堤帯断面		
	1	2	1	2	3
イネ科					
ヨシ属	3.19	1.53	2.86	0.39	6.47
ウシクサ属(ススキ属など)		0.15	0.32	0.15	0.08
タケ亜科					
ネザサ節	0.13	0.20	0.09		0.12
クマザサ属			0.10		

※第10表の値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数をかけて算出



第198図 清水地区1号住居壁の植物珪酸体分布結果



第199図 清水地区1号住居周堤帯南東部の植物珪酸体分布結果

6. 下芝五反田遺跡清水地区出土植物遺体のDNA分析

国立遺伝学研究所 佐藤洋一郎

1. 試料

試料は、清水地区Hr-F A直下の畝跡表面から採取された植物遺体(試料No. 1～No. 6)およびHr-F A中から採取された植物遺体(No. 1とNo. 2)の計8点である。これらは植物珪酸体分析を行ったものと同一試料である。

2. 方法

植物遺体から、植物組織と思われる部分を取り出しエタノールで洗浄後、所定の操作を経てDNAを抽出した。その後、PCR法によって特定部分のDNAだけを増殖させ、電気泳動法によって得たDNAのバンドパターン(バーコード様の模様のこと。以下バーコードと略記する。)を植物間および遺物と現存種の系統間で比較した。理論的には同一の個体からとった2つのDNAのバーコードは必ず全く同じパターンを示すはずである。一方、個体品種または種が違えば、バーコードのどこかに違いが生じることが期待される。

3. 結果

(1) Hr-F A直下畝面の植物遺体について

試料No. 1～No. 6(写真図版の4番～9番)のうち、No. 2からはDNAが全く検出されず、何らかの原因でDNAが破壊を受けたものと想像される。出土の状況を考えに入れると、熱変性を受けた可能性が最も濃厚である。また、No. 1では低分子側に小数のバンドを認めるにとどまった。この場合も、DNAが切断されるなど大きな損傷を受けていたことを示すものと考えられる。

残りのサンプルからはそれぞれ大きく異なるパターンのバーコードが得られた。ただしNo. 4およびNo. 6は似たパターンを示した。

これらのことから、調査を行った6試料のうち4試料は、少なくとも3つの異なる種(または属)に属する植物であると考えられる。これら4つの植物に属すると思われる遺体のDNAのパターンを他の植物種のそれと比較・検討した。しかし、現段階では種または属を同定するには至っておらず、消去法によって以下の植物種とは一致しないことが確認された。

イネ(*indica* および *japonica*)、ヨシ(静岡県菰山町・狩野川右側群落および函南町・来光川右岸群落)、ススキ(静岡県三島市遺伝研内群落)、および以下のウリ科作物(白ウリ、キュウリ、トウガン、カボチャ、スイカ、メロン、カンピョウ、ヒョウタン)。

(2) Hr-F A中の植物遺体について

Hr-F A中の2試料(写真図版の10番と11番)については、DNAを増幅させることはできなかった。Hr-F A直下の試料と比較して炭化の程度が特別に進んでいたようには見られず、DNAが火砕流による熱によって変成を受けたか破壊されたのではないかと考えられる。

3. 今後の検討課題

今後の検討すべき課題は2つあると考えられる。1つは、損傷の程度の大きな遺物から効率よくDNAを取り出す方法を改善することである。現段階では、試料の量と損傷の状況によってDNAがとれないケースが出ているが、将来これを改善してゆきたい。

もう1つは種の同定が現段階ではまだ充分でないことである。これについては現在現存のサンプルの分析を進めているところで、2～3年のうちには今回の試料を含めかなりの試料について種または亜種レベルでの同定が行えるようになると期待される。

7. 下芝五反田遺跡清水地区の花粉分析

株式会社 古環境研究所

1. 試料および方法

試料は、Hr-F P直下の黒褐色腐植層(試料Po1)である。花粉粒の分離抽出は、試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す。
- 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500 rpm 2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の同定は、島倉(1973)および中村(1980)を基本とし、所有の現生標本と対比して行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類され、その際学名は属名までで表した。複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。

2. 結果と所見

検出された花粉・胞子は、樹木花粉6、草本花粉3、シダ植物胞子2形態の計11分類群であり、検出量は極めて少なかった。検出された花粉粒は痛んでおり、他に炭化した微細な木片が多く含まれていた。結果は、花粉遺体一覧を表にまとめて示した。同定された分類群を以下に示す。

〔樹木花粉〕 スギ、クリーシイ属-マテバシイ属、エノキ属-ムクノキ

〔草本花粉〕 イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕 単条溝胞子、三条溝胞子

本試料からは、花粉粒がほとんど検出されなかったため、植生・環境を復原することは困難である。堆積物に花粉が含まれていない原因としては、1) 試料となった堆積物が著しく淘汰を受けるような堆積環境で堆積した、2) 堆積速度が著しく速かった、3) 土壌生成作用によって花粉化石が分解したなどの要因が考えられる。ここでは土層の堆積状況などから3)の要因が大きいと考えられる。

参考文献

- 中村純(1973)「花粉分析」古今書院。
 島倉巳三郎(1973)「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録』第5集。
 中村純(1980)「日本産花粉の標徴」『大阪自然史博物館収蔵目録』第13集。

清水地区花粉遺体一覧

分類群		試料
学名	和名	Po1
Arboreal pollen	木本花粉	
Cryptomeria	スギ	1
Celtis-Castanopsis-Pasania	クリーシイ属-マテバシイ属	1
Celtis-Aphananthe	エノキ属-ムクノキ	2
Aesculus	トチノキ	1
Ericaceae	ツツジ科	1
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属-ガマズミ属	1
Nonarboreal pollen	草本花粉	
Gramineae	イネ科	1
Cyperaceae	カヤツリグサ科	4
Artemisia	ヨモギ属	1
Fern spore	シダ植物	
Monolate type spore	単条溝胞子	2
Trilate type spore	三条溝胞子	1
Arboreal pollen	木本花粉	7
Nonarboreal pollen	草本花粉	6
Total pollen	花粉総数	13
Unknown pollen	未同定花粉	3
Fern spore	シダ植物胞子	3

8. 下芝五反田遺跡五反田地区出土樹種同定

植田 弥生(パレオ・ラボ)

1. はじめに

当遺跡は群馬郡箕郷町下芝字五反田に位置し、東を井野川、西を榛名白川に挟まれた標高約145mの台地上に立地する。ここではF A層下で古墳時代6世紀初頭の122号住居と畠耕作土(畠区画1)から出土した炭化材と、古墳時代5世紀末以降の128号住居・134号住居・138号住居から出土した炭化材の樹種同定結果を報告する。試料番号順の同定結果を表1に示した。122号住居からは53試料が取り上げられており、一部試料は図面に位置が記録されておりその樹種を記号で記入し産状が判るようにした。

2. 試料と方法

試料は出土位置ごとに取り上げられ紙箱に保存されている。各試料は崩れて複数の破片になっており、一箱に複数の分類群が含まれているものが多かった。試料No. 2・6・32・34は組織の保存状況が悪く同定に至らなかった。

同定は炭化材の3方向の破断面の組織を走査電子顕微鏡で観察し行った。横断面(木口)は炭化材を手で割り新鮮な面を出す。接線断面(板目)と放射断面(柁目)は片刃の剃刀を方向に沿って軽くあて弾くように割り面を出す。この3断面の試料を直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗る。試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡(日本電子(株)製 JSM T-100型)で観察・写真撮影をした。

3. 同定された樹種の組織記載

1)クマシデ属 A *Carpinus A* カバノキ科 図版1 1a-1c. (No.1 122号住居 炭化物1)

放射組織が集合する部分と小型の管孔が単独または放射方向に2~数個が複合し配列する部分とがある散孔材。道管の壁孔は小型で交互状に密在、穿孔は単一、内腔のらせん肥厚は不明。放射組織はほぼ同性、1~3細胞幅で細く、道管との壁孔は大きい。集合放射組織があり、穿孔も単一であることから、イヌシデ節に対応する。

クマシデ属は暖帯および温帯の山地に生育する落葉高木または大形低木である。イヌシデ節には山野に普通のイヌシデとアカシデ、乾いた山稜に生育するイワシデがある。

2)クマシデ属 B *Carpinus B* カバノキ科 図版1 2a-2c. (No.11 122号住居 炭化物12)

集合放射組織の存在は不明瞭で、晩材部は5~10個の極めて小型の管孔が放射方向に複合して分布する。道管の内腔にらせん肥厚が明瞭に見られる。そのほかの形質は上記のクマシデ属Aと同じである。

3)クマシデ属 C *Carpinus C* カバノキ科 図版1 3a-3c. (No.5 122号住居 炭化物5)

集合放射組織の存在は不明瞭で、晩材部では管孔の径が減じ極めて小型となるがクマシデ属Bのように管孔の放射方向の複合は明瞭でない。クマシデ属Aと同じく道管の内腔のらせん肥厚は不明瞭である。そのほかの形質はクマシデ属Aと同じである。アサダの可能性も考えられるが管孔が小型である点でクマシデ属と判断した。

クマシデ属BとCは、おもに単穿孔であることからイヌシデ節のいちタイプと思われるが、それぞれの特徴を持つ試料が複数あったので形質を分けて記載しておいた。

4)クマシデ属 D *Carpinus D* カバノキ科 図版2 4a-4c. (No.24 122号住居 炭化物25)

横断面の管孔配列はクマシデ属Aとほぼ同じであり、集合放射組織がある。穿孔は横棒が10本以下の階段状、

内腔のらせん肥厚は不明瞭。そのほかの形質はクマシデ属Aと同じである。穿孔がおもに階段状であることからクマシデ節に対応する。

クマシデ節には山地の谷沿いに多いサワシバ・クマシデがある。

5) カバノキ属 *Betula* カバノキ科 図版2 5a-5c. (No.35 122号住居 炭化物38)

中型の管孔が単独または放射方向に複合した2～数個の管孔が散在する散孔材。道管の壁孔の孔口は水平方向に流れて不規則な縞模様を開き、穿孔は階段数が10～15本の階段穿孔。放射組織はほぼ同性、1～4細胞幅。

温帯から寒帯の山地の陽地に生育する落葉性の高木または低木で、約9種がある。本州以南に分布するミズメ、岐阜県以東に分布し崩壊地に二次林を形成するシラカンバ、高山に多いウダイカンバなどがある。樹皮は薄く剥げ細工物に利用されまたよく燃えるので付け木になる。材は重硬で有用材である。

6) コナラ属 コナラ亜属 コナラ節 *Quercus*, subgen. *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版2 6a-6c. (No.11 122号住居 炭化物12)

年輪の始めに中型の管孔が配列し除々に径を減じ、晩材部では薄壁・角形で小型の管孔が火炎状・放射方向に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔にチロースがある。放射組織は単列のものと同複合状のものがある。

コナラ節は暖帯から温帯に生育する落葉高木でカシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがある。材は加工がしにくく乾燥すると割れや狂いが出やすい欠点はあるが、人里近くに普通にありまとまって材が得安いことが考えられ、用途は広い。堅果は食用となる。

7) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版3 7a-7c. (No.1 122号住居 炭化物1)

年輪の始めに中型～大型の管孔が密に配列し除々に径を減じてゆき、晩材部では非常に小型の管孔が火炎状に配列し、柔組織が接線状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状。

クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。果実は食用になり、材は耐朽性にすぐれ、縄文時代から柱材の使用例が有名である。

8) ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 図版3 8a-8c. (No.48 122号住居 埋没土)

年輪の始めに中型の管孔が1～2層配列し、その後小型の管孔が集合して接線状・斜状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は異性、1～5細胞幅の紡錘形、上下端や縁に結晶細胞があり、道管との壁孔は交互状。

ケヤキは暖帯下部から温帯の山中や川岸に生育する落葉高木である。材の用途は建築材や容器が多い。

9) エノキ属 *Celtis* ニレ科 図版3 9a-9c. (No.31 122号住居 炭化物32)

中型の管孔が1～2層配列し、その後非常に小型の管孔が多数集合し塊状・斜状・接線状に配列する散孔材。道管の壁孔は小型で交互状に密在し、穿孔は単一。放射組織は方形・平伏細胞からなる異性で縁に鞘細胞がある。

エノキ属は落葉性の高木で、本州以南の低地から山地に普通のエノキ、北海道以南の山地に生育するエゾエノキ、近畿以西の山地にまれに生育するコバノチョウセンエノキがある。果実は食べられ、材質は硬いが強くなく狂い易い弱点がある。

10) アワブキ *Meliosma myriantha* Sieb. et Zucc. アワブキ科 図版4 10a-10c. (No.9 122号住居 炭化物10)

非常に小型でやや厚壁の管孔が単独または柔細胞を介して放射方向に2個複合し疎らに散在する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔はおもに単一、階段数が1～3本ほどの階段穿孔も混じる。放射組織は異性、1～3

Ⅶ 科学分析・同定

細胞幅で背が非常に高い。放射柔細胞は薄壁で大きく放射組織の全体は粗雑である。周囲状柔組織が顕著である。

本州以南の暖帯の山地に普通の落葉高木である。枝は燃やすと切口から泡を吹き出す。

11) カエデ属 *Acer* カエデ科 図版 4 11a-11c. (No.41 122号住居 炭化物48)

小型の管孔が単独または2～3個が放射方向に複合して散在し年輪界は不明瞭、帯状の柔組織が顕著な散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔に細いらせん肥厚がある。放射組織は同性、1～4細胞幅、道管との壁孔は交互状で孔口はやや大きい。

日本全土の暖帯から温帯の山地や谷間に生育し、落葉広葉樹林の主要構成樹であり、約26種があり多くの変種が知られている。材は堅く緻密で割れにくく、保存性は中程度である。

12) トチノキ *Aesculus turbinata* Blume トチノキ科 図版 4 12a-12c. (No.20 122号住居 炭化物21)

小型～中型の管孔が単独または2～数個が複合して散在する散孔材。道管の壁孔は交互状に接合して配列、穿孔は単一、内腔にらせん肥厚がある。放射組織は単列同性で層階状に配列。道管と放射組織の壁孔はやや大きく、円形で交互状に密在する。

温帯の谷間に生育する落葉高木である。種子はアク抜きが必要だが食用となり、材は軽軟で緻密で加工し易く、材面は光沢がある。木理は不規則で耐久性は低く狂いがやすい。容器などによく使われている。

13) トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科 図版 5 13a-13c. (No.48 122号住居 炭化物48)

中型～大型の管孔が2～3層配列し、単独または2個複合した小型で厚壁の管孔が散在する環孔材。周囲状柔組織がある。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一。放射組織は同性、1～2細胞幅である。

おもに温帯に生育する落葉高木で、シオジ・ヤチダモ・トネリコ・アオダモなど約9種ある。材は重硬で弾力性があり折れ難く板材・棒・柄などに使われる。

14) ムラサキシキブ属 *Callicarpa* クマツヅラ科 図版 5 14a-14c. (No.22 122号住居 炭化物23)

小型の丸い管孔が単独または2～3個が複合して散在する散孔材。管孔の壁孔は交互状、穿孔は単一。放射組織は異性、1～2細胞幅で背が高く、直立細胞からなる単列部を介して2細胞幅部が接続する。

ムラサキシキブ属は、暖帯から温帯に生育する落葉性の低木で約5種ある。

15) タケ亜科 *Gramineae* subfam. *Bambusoideae* イネ科 図版 5 15. (No.48 122号住居 埋没土)

厚み約1.5mmのやや硬質の稈の破片。維管束は不整中心柱であり均質に分布し数も多い。原生木部・原生師部・左右にある2個の管孔の外側に帽子状に厚い厚壁細胞層がある。

いわゆるタケ・ササの仲間では12属が含まれ、中国や東南アジアから移入され栽培により広まったものが多い。ササ類は多くの野生種があり、タケ類ではハチク・マダケは日本に野生していた可能性があるといわれる。

16) ヨシ属 *Phragmites* イネ科 図版 5 16. (No.42 122号住居 炭化物49)

直径6mmの草本性の稈で節部には段がある。稈の中心部は中空、稈の外周は細胞間隙の空洞が等間隔に配列しその内側には数層の厚壁細胞層がある。この厚壁細胞層は波状で空洞と空洞の間に張り出している。維管束の外形は丸く1～2層の厚壁細胞層に取り囲まれ、散在不整中心柱をなしている。稈の内周には数層の厚壁細胞層がある。

川岸や湿地に生育する大型の多年草で3種ある。本州以南の川岸や砂質地に生育するツルヨシ、北海道以南の湿地に群生するヨシ、本州以南の水湿地に生育するセイタカヨシがあるが、稈の一部のみから識別することはできない。

17) ススキ属 *Miscanthus* イネ科 図版 5 17a-17b. (No.9 122号住居 炭化物10) 18. (No.42 122号住居 炭化

物49)

直径8mmの草本性の稈で、節部はくびれた後ややふくれ一箇所小葉がある。節を取り巻く葉鞘が残っている試料もあった。稈は中空ではなくスポンジ状の基本組織で埋まりその中に維管束が散在している。稈の外周には厚い厚壁細胞層にかこまれた維管束が1または2層並んでおり特に稈の中心部側でその層は厚くなる。それより内側に散在する維管束の周囲の厚壁細胞層は薄い。

ススキ属は大型になる多年草で一般にはカヤ(茅)と呼ばれ、約7種ある。日本全土の平地から山地の陽地に普通に見られ刈って屋根を覆く材料とされてきたススキ、北海道から九州の湿地に生育するオギ、東北部から近畿北部の山中の陽地に生育するカリヤス、関東南部以西の堤防の草地に生育するトキワススキなどがある。現時点では稈の組織から種を識別することはできていない。

4. 遺構ごとの同定結果

122号住居からは14分類群の樹木と5分類群のイネ科が出土した。これらは住居の建築材や家屋内の生活道具が炭化して残ったものと思われる当時の木材利用を知る試料となる。図1は一部の試料の産状を現したものである。炭化材は脆く割れやすい上、基は1本の材であったものが焼失時に複数に割れ散ることもありそれが発掘時に個々取り上げられている可能性がある。ここでは取りあえず各試料に含まれていた分類群をそれぞれ1点として集計してみた。

樹木で最も多かったのはクマシデ属でありクマシデ属は4形態が見られ、クマシデ属Bが8点・クマシデ属Aが6点・クマシデ属Cが3点・クマシデ属Dが1点であった。次に多いのはコナラ節とクリの各12点である。そのほかにムラサキシキブ属4点・カバノキ属とアワブキが各3点・トチノキ2点・ケヤキ・エノキ・カエデ属・トネリコ属が各1点出土した。試料に炭化材と共にイネ科の稈が混在していた。ほとんどは不完形でつぶれていたり外側や内部が破損している。保存状態のよいものを探し検討した結果、いわゆる竹・笹類にあたるタケ亜科とススキ属とヨシ属が同定でき、そのほかは草本性であることまではわかるものと、細く繊維状にわかれイネ科としか判断できないものであった。全般に草本性の稈がほとんどである。

128号住居からはコナラ節とクマシデ属が、138号住居からはケヤキとススキ属が、138号住居からはコナラ節が出土した。畠耕作土からはカバノキ属とクリが出土し、No.60は材ではなく発泡した不定形の炭化物であり特に組織構造は見られなかった。ただし1点だけ外形が豆状のものがあつたが同定には至っていない。

5. 考察

122号住居から出土したいずれの分類群も温帯の落葉広葉樹林または丘陵地に普通の二次林の主要素である。針葉樹は検出されていない。これまでの関東平野の古墳時代住居跡からはクヌギ節またはコナラ節が多用されていた傾向が知られている(山田, 1993)。群馬県の赤城山西麓末端の台地に位置する勝保沢中ノ山遺跡(鈴木・能城, 1988)の古墳時代住居跡の炭化材はコナラ節が圧倒的に多く次いでアサダとイヌシデ節そしてトネリコ属やカエデ属などが用いられていた。鈴木・能城(1988)は利用されていた樹種は関東地方の平野部から低い丘陵地帯の二次林に普遍的な分類群の材であり、古墳時代に遺跡周辺に成立していた二次林から材質を選んで用いたと考えている。当遺跡の樹種結果は勝保沢中ノ山遺跡と非常によく一致し、立地も同じ低い丘陵地であり、同様な環境と木材利用であったと思われる。

当遺跡の多くの試料にイネ科の稈が含まれていた。同定の結果、複数の分類群があり、編まれた破片もあったことから、屋根や壁面・床などにタケ亜科(竹・笹類)やススキ属・ヨシ属などのイネ科の稈が多量に利用されていたことが伺える。またこのようなイネ科が生育していた広い空間が生活域の中にあつたのだろう。

122号住居の出土炭化材の産状とその樹種を第200図に図示してある。これを見ると12・13・14・15はコナラ

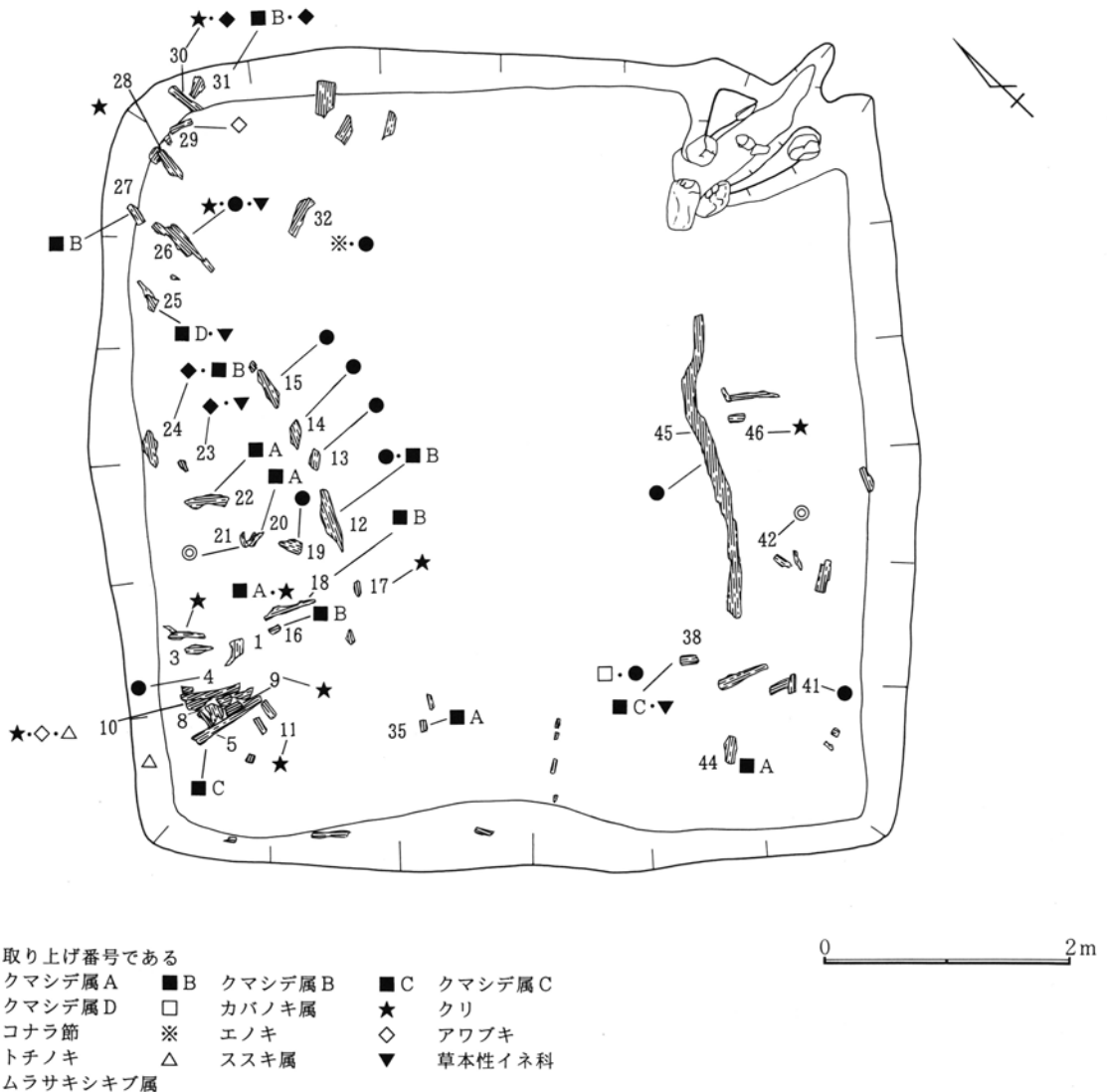
Ⅶ 科学分析・同定

節でありその産状を見ると元は一本の材であった可能性がある。また23・24のムラサキシキブ属、1・3・9・10・11のクリ、12・16・18のクマシデ属B、20・22のクマシデ属Aは近くに分布しており、一本の材が分割したかその部分で集中的に使用されたことが予想される。ススキ属も東部角部と北部角部から多く検出された。今後もこのような産状分布と同定結果をあわせ検討することから、住居の姿がより目に浮かぶものとなってくると思われる。

引用文献

山田昌久(1993)「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成—用材から見た人間・植物関係史」『植生史研究』p.242. 植生史研究会。千葉県佐倉市。

鈴木三男・能城修一(1988)「群馬県勝保沢中ノ山遺跡出土炭化材の樹種」『勝保沢中ノ山遺跡Ⅰ』p.180-192. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団。



第200図 五反田地区122号住居の炭化材の産状とその樹種

第12表 下芝五反田遺跡出土炭化材の樹種

No.	遺構名	取り上げ番号	樹種	時代・時期	備考
1	122号住居	炭化物 1	クマシデ属A・クリ	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
2	122号住居	炭化物 2	不可	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
3	122号住居	炭化物 3	クリ	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
4	122号住居	炭化物 4	コナラ節	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
5	122号住居	炭化物 5	クマシデ属C	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
6	122号住居	炭化物 7	不可	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
7	122号住居	炭化物 8	ススキ属	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
8	122号住居	炭化物 9	クリ	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
9	122号住居	炭化物10	クリ・アワブキ・ススキ属	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
10	122号住居	炭化物11	クリ	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
11	122号住居	炭化物12	コナラ節・クマシデ属B	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
12	122号住居	炭化物13	コナラ節	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
13	122号住居	炭化物14	コナラ節	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
14	122号住居	炭化物16	クマシデ属B	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
15	122号住居	炭化物15	コナラ節	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
16	122号住居	炭化物17	クリ	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
17	122号住居	炭化物18	クマシデ属B	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
18	122号住居	炭化物19	コナラ節	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
19	122号住居	炭化物20	クマシデ属A	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
20	122号住居	炭化物21	トチノキ	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
21	122号住居	炭化物22	クマシデ属A	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
22	122号住居	炭化物23	ムラサキシキブ属・草本性イネ科	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
23	122号住居	炭化物24	ムラサキシキブ属・クマシデ属A・イネ科	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
24	122号住居	炭化物25	クマシデ属・草本性イネ科	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
25	122号住居	炭化物26	クリ・コナラ節・草本性イネ科	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
26	122号住居	炭化物27	クマシデ属D	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
27	122号住居	炭化物28	クリ	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
28	122号住居	炭化物29	アワブキ	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
29	122号住居	炭化物30	クリ・ムラサキシキブ属	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
30	122号住居	炭化物31	クマシデ属B・ムラサキシキブ属	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
31	122号住居	炭化物32	エノキ・コナラ節	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
32	122号住居	炭化物33	不可	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
33	122号住居	炭化物35	クマシデ属A	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
34	122号住居	炭化物37	不可	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
35	122号住居	炭化物38	カバノキ属・コナラ節 クマシデ属C・草本性イネ科	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
36	122号住居	炭化物41	コナラ節	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
37	122号住居	炭化物42	トチノキ	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
38	122号住居	炭化物44	クマシデ属A	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
39	122号住居	炭化物45	コナラ節	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
40	122号住居	炭化物46	クリ	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
41	122号住居	炭化物48	カエデ属・草本性イネ科	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
42	122号住居	炭化物49	コナラ節・ヨシ属・ススキ属	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
43	122号住居	炭化物50	草本性イネ科	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
44	122号住居	炭化物51	草本性イネ科	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
45	122号住居	炭化物53	クマシデ属B	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
46	122号住居	埋没土	カバノキ属	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
47	122号住居	埋没土	クリ	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
48	122号住居	埋没土	クマシデ属C・ケヤキ・トチノキ トネリコ属・タケ亜科・ススキ属	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
49	122号住居	埋没土	クマシデ属A・ススキ属	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
50	122号住居	埋没土	クリ・ススキ属	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
51	122号住居	埋没土	クマシデ属B	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
52	122号住居	埋没土	アワブキ	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
53	122号住居	埋没土	カバノキ属	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
54	128号住居	No.72土器内	コナラ節	古墳時代5C.末～	
55	128号住居	埋没土	クマシデ属C	古墳時代5C.末～	
56	134号住居	1	ケヤキ	古墳時代5C.末～	
57	134号住居	3	ススキ属	古墳時代5C.末～	
58	138号住居	1	コナラ節	古墳時代5C.末～	
59	畠	耕作土	カバノキ属・クリ	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下
60	畠	耕作土	不明炭化物	古墳時代6C.初頭	Hr-F A層下

9. 下芝五反田遺跡五反田地区出土赤色物質について

菱田 量(株式会社パレオ・ラボ)

1. はじめに

下芝五反田遺跡五反田地区は、群馬県群馬郡箕郷町に所在する。本遺跡の古墳時代の竪穴住居から、塊状の赤色物質が出土した。ここでは、これらの赤色物質に含まれる元素を、蛍光X線分析によって明らかにした。さらに、各試料において、含まれる元素の違いについて、若干の考察をおこなった。また、これらの赤色物質は、赤色顔料の原材料、あるいは製造過程において産した物質である可能性がある。従来、赤色顔料の種類として、水銀朱(HgS)、ベンガラ(Fe₂O₃)、鉛丹(Pb₃O₄)が知られている(たとえば市毛,1984)。こうした状況で、分析結果から、出土した赤色物質がどの種類の赤色顔料に由来する物質であるのかを検討した。

なお、土器などの遺物に塗布された赤色顔料と比較する場合があるので、分析はすべて非破壊でおこなった。

2. 試料

肉眼的特徴

No.1：全体にシルト質である。塊状、土状で、比較的軟質である。最大粒径0.5mm程度の砂粒が少量含まれる。やや鮮やかな赤色を呈する。

No.2：全体にやや砂質からシルト質である。塊状である。最大粒径1.0mmの砂粒が含まれ、もろく崩れて、粉末状になりやすい。鮮やかな赤色を呈する。

No.3：全体にシルト質である。塊状、土状である。No.1,2と比較すると、赤色の色調は、ややくすんでいる。

No.4：砂質で、細粒砂がめだつ。最大粒径2mmの砂粒が含まれ、淘汰が悪い。塊状であるが、砂質であるため、軟質で崩れやすい。赤色の色調はまばらで、不明瞭である。全体に橙色に見える。

3. 分析方法

出土した赤色物質について、エネルギー分散型蛍光X線分析計を用いて、非破壊による分析をおこない、含まれる元素を定性的に明らかにした。

分析装置は、セイコー電子工業(株)製卓上型蛍光X線分析計 SEA-2001L である。X線発生部の管球はロジウム(Rh)ターゲット、ベリリウム(Be)窓、X線検出器はSi(Li)半導体検出器である。測定条件は、測定時間300秒、照射径10mm、電圧50kV、試料室内は真空である。

結果については、各試料の蛍光X線スペクトル図を示し、蛍光X線のピークから、含有する元素を明らかにした。なお、ここでの試料は、検出される元素として、Fe(鉄)が顕著にみられるので、蛍光X線の強度比として、Fe/Siの値を示して比較した。また、参考データとして、上記の条件の中で、電圧15KVにして測定し、Fe₂O₃(全Fe)を定量した。定量値は、通産省工業技術院地質調査所の岩石標準試料を用いて、ファンダメンタルパラメーター法により求め、%で表した。なお、この定量値は、試料を非破壊で測定したものであるため、他の分析方法でおこなわれた定量値とは若干異なる。

4. 結果

図1～4に試料の蛍光X線スペクトルを示す。これらの試料には、主な主成分元素としてFe(鉄)が顕著に検出され、その他にAl(アルミニウム),Si(ケイ素),S(硫黄),K(カリウム),Ca(カルシウム),Ti(チタン),Mn(マンガン)などのピークがみられる。また、微量元素としてSr(ストロンチウム),Zr(ジルコニウム)などが認められる。なお、Hg(水銀)のピークは、どの試料からも見い出されない。以下に個々の試料の結果にみられる、

第13表 分析試料一覧表

No.	遺構	時代	色調	備考
1	124号住-25	6世紀初	赤色(10R4/8)	塊状
2	124号住-27	6世紀初	赤色(10R5/8)	塊状
3	125号住-40	6世紀初	明赤褐色(2.5YR5/8)	塊状
4	134号住-17	5世紀後半	橙色(2.5YR6/6)	塊状

上記以外の特徴的な点について述べる。

No. 1：この試料では、Feのピークが顕著にみられる。また、Sのピークが非常に明瞭にみられることが特徴的である。Tiのピークも比較的顕著である。No. 2～4と比較して、Siのピークは小さく不明瞭である。蛍光X線の強度比 Fe/Si は、193.29である。Fe₂O₃ は、47.1%であり、No. 2～4より高い値である。また、やや不明瞭だが、Pb(鉛)の小さいピークがみられる。

No. 2：Feのピークが顕著である。Sのピークが比較的明瞭である。蛍光X線の強度比 Fe/Si は、7.95である。Fe₂O₃ は、15.5%である。

No. 3：Feのピークが顕著である。Sのピークが比較的明瞭である。蛍光X線の強度比 Fe/Si は、7.69である。Fe₂O₃ は、15.9%である。

No. 4：Feのピークが顕著にみられる。No. 1～3と比較して、Sのピークはほとんどみられない。Kのピークも不明瞭である。蛍光X線の強度比 Fe/Si は、7.73ある。Fe₂O₃ は、11.8%である。

5. 考察

先にも述べたように、赤色顔料の種類として、水銀朱(HgS)、ベンガラ(Fe₂O₃)、鉛丹(Pb₃O₄)が知られている。分析をおこなったNo. 1～4の試料の色調は、比較的鮮やかな赤色を呈しており、状況的には、赤色顔料に関連する物質とみなされる。分析結果からは、どの試料にもFe(鉄)のピークが明瞭に認められ、Hg(水銀)のピークは検出されない。また、No. 1ではPb(鉛)のピークがみられるものの、ごくわずかである。赤色顔料の1つであるベンガラは、鉄の化合物である酸化鉄(Ⅲ)、すなわちFe₂O₃が主な成分となっている。そのため、ここでのNo. 1～4の試料は、ベンガラの原材料、あるいは製造過程に関係する物質であると考えられる。

ベンガラは、古代においては、鉄分に富んだ土壌(たとえば褐鉄鉱を含むものなど)を焼いてつくられたと考えられている(山崎, 1987など)。もちろん、天然の赤鉄鉱などの鉄鉱石を採取して製造した場合もあるだろう。また、北野(1994)によると、近世においては、上記の他に、硫化鉄(磁硫鉄鉱: FeS, 黄鉄鉱: FeS₂)が風化して形成された緑礬(りよくばん, 硫酸鉄(Ⅱ): FeSO₄ · 7H₂O)を原材料とし、これを焙焼して酸化鉄(Ⅲ)を製造し、ベンガラを生産していたことが知られている。さらに、矢彦沢ほか(1995)は、黄鉄鉱を含むグライ土層の堆積物の風化過程において、含水酸化鉄(Ⅲ)(Fe₂O₃ · nH₂O)が沈積することを確認し、これがベンガラの原材料になる可能性を示唆している。

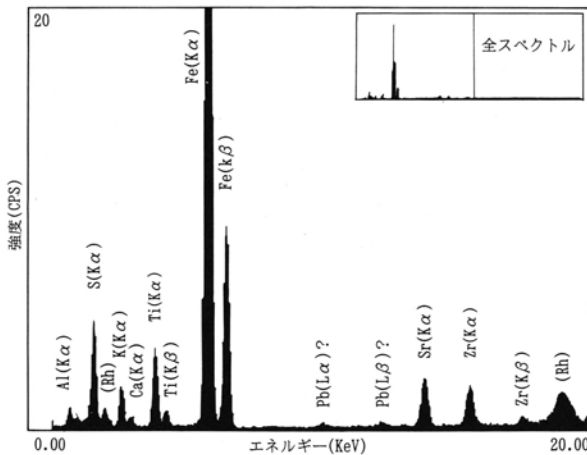
このように、ベンガラの原材料や製法については、いくつかのものが示されている。今回分析した赤色物質の中でも、Fe以外の元素で、特徴的なものが見いだされている。特に、No. 1はS(硫黄)のピークが非常に明瞭にみられ、他の試料とは明らかに異なる物質である。この試料には、硫黄の化合物が多く含まれているとみなされ、純粋な赤鉄鉱などとは異なる。また、No. 2とNo. 3およびNo. 4は、ほぼ類似した特徴を示しているが、No. 4はSのピークがほとんど認められない。こうしたことから、ベンガラに関係する物質の中でも、性質が異なるものがあることが示唆される。

現段階では、データが少ないため、これらの物質に含まれる元素の有無だけで、原材料なのか、製造過程のものなのかを明確に分類することはできない。しかし、今後、土器などに塗布されたベンガラとの比較、あるいは、出土状態など、考古学的状況をふまえて総合的に検討していくことにより、明らかになるものと考えられる。

Ⅶ 科学分析・同定

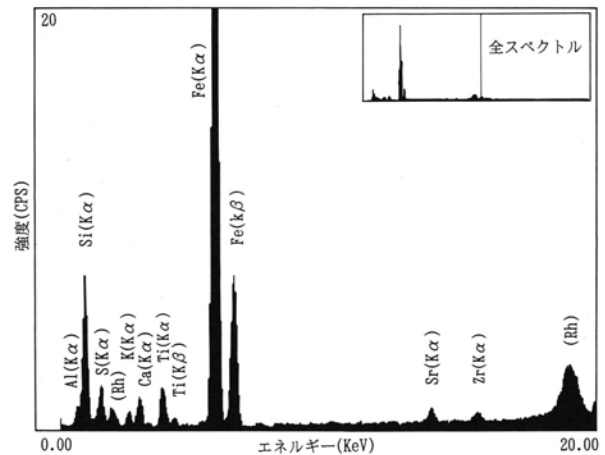
引用・参考文献

- 新井房夫(1964)『群馬県の地質と地下資源 20万分1群馬県地質図説明書』,内外地図株式会社。
 市毛 勲(1984)『増補 朱の考古学』,第2版,考古学選書12,雄山閣出版, p.324。
 北野信彦(1994)「近世出土漆器資料の保存処理に関する問題点Ⅱ—文献史料からみた赤色系漆に使用するベンガラの製法について—」
 『古文化財の科学』39, p.93-102。
 小山正忠・竹原秀雄編(1967)『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修,日本色研事業株式会社発行。
 永嶋正春(1985)「縄文時代の漆工技術—東北地方出土土藍胎漆器を中心にして—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第6集,国立歴史民俗博物館, p.1-54。
 永嶋正春(1987)「北江古田遺跡出土赤色漆塗り遺物の塗膜構成について」『北江古田遺跡発掘調査報告書(2)』,東京都中野区・北江古田遺跡調査会, p.557-564。
 永嶋正春(1995)「古代漆の源流」『古代に挑戦する自然科学』第9回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編,クバプロ, p.82-93。
 矢彦沢清允・両角秀俊・藤松 仁・村上 泰・森嶋 稔(1995)「弥生式土器の塗彩に使われたベンガラの由来—フォッサマグナ東端地域を中心として—」『考古学雑誌』80, 4, p.75-87。
 山崎一雄(1987)『古文化財の科学』思文閣出版, p.352。



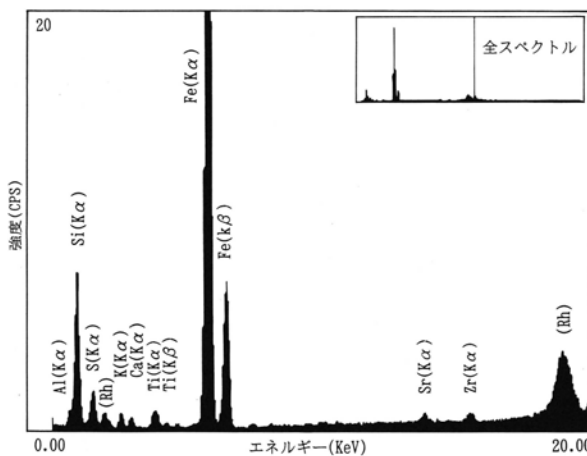
1. 蛍光X線スペクトル図(1)試料NO.1

Al:アルミニウム Si:ケイ素 P:リン S:硫黄
 K:カリウム Ca:カルシウム Ti:チタン Fe:鉄
 Pb:鉛 Sr:ストロンチウム Zr:ジルコニウム
 (Rh):ロジウム(X線管球ターゲットから)



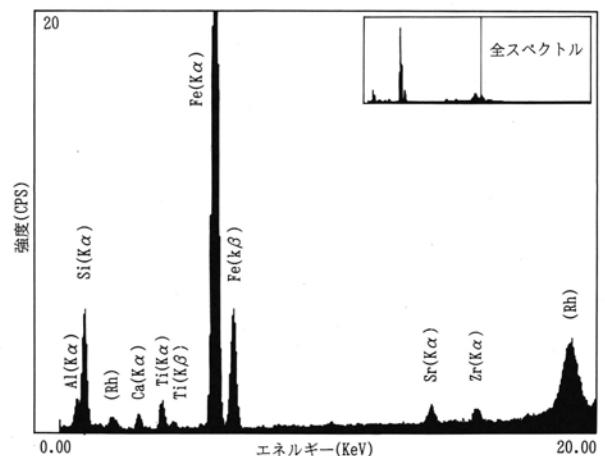
2. 蛍光X線スペクトル図(2)試料NO.2

Al:アルミニウム Si:ケイ素 S:硫黄 Ca:カルシウム
 Ti:チタン Fe:鉄 Sr:ストロンチウム Zr:ジルコニウム
 (Rh):ロジウム(X線管球ターゲットから)



3. 蛍光X線スペクトル図(3)試料NO.3

Al:アルミニウム Si:ケイ素 S:硫黄 Ca:カルシウム
 Ti:チタン Fe:鉄 Sr:ストロンチウム Zr:ジルコニウム
 (Rh):ロジウム(X線管球ターゲットから)



4. 蛍光X線スペクトル図(4)試料NO.4

Al:アルミニウム Si:ケイ素 Ca:カルシウム Ti:チタン
 Fe:鉄 Sr:ストロンチウム Zr:ジルコニウム
 (Rh):ロジウム(X線管球ターゲットから)

第201図 赤色顔料蛍光X線スペクトル図

遺物觀察表

凡 例

計測値の項目の数字・略称について

- ① 口径
- ② 底径
- ③ 器高
- ④ 脚径

最大 杯Bの口縁部最大径

稜径 杯Cの稜部最大径

胴径 甕胴部最大径

単位は指定のない限りcmである。

五反田地区

122号住居

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	計測値	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
1 第16図 P L 37	土師器 杯	甕 完形	① 13.2 ③ 5.1	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
2 第16図	土師器 杯	甕 1/4	① 13.3 ③ 4.6	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部上半は横ナデ、下半から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
3 第16図 P L 37	土師器 杯	甕 完形	① 13.4 ③ 5.1	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部上位は横ナデ、中位にナデ部分が残る、中位から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
4 第16図 P L 37	土師器 杯	甕 ほぼ完形	① 13.5 ③ 4.7	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部上位は横ナデ、中位にナデ部分が残る、中位から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
5 第16図	土師器 杯	甕 1/3	① 13.6 ③ 4.8	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下半から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
6 第16図 P L 37	土師器 杯	甕 完形	① 13.7 ③ 5.2	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部上位は横ナデ、中位にナデ部分が残る、中位から底部は不定方向のヘラ削り。内面は口縁部中位に粗い斜放射状ヘラ磨き。	
7 第17図 P L 37	土師器 杯	甕 ほぼ完形	① 13.5 ③ 5.4	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部上位は横ナデ、中位から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
8 第17図 P L 37	土師器 杯	甕 完形	① 13.8 ③ 5.4	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部上半は横ナデ、下半から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は下部で折り返す斜放射状ヘラ磨き。	
9 第17図	土師器 杯	甕 1/4	① 14.0 ③ 5.2	①粗砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部上半は横ナデ、下半はナデ、底部は不定方向のヘラ削り。口縁部上半は斜放射状ヘラ磨き。	
10 第17図	土師器 杯	甕 1/2	① 14.0 ③ 5.6	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部上位は横ナデ、中位から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
11 第17図 P L 37	土師器 杯	甕 完形	① 12.8 ③ 5.7	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下位から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
12 第17図	土師器 杯	床上6cm 1/2	① 14.0 ③ 6.7	①細砂粒 ②良好 ③にぶい褐色	口縁部上半は横ナデ、下半はナデ、底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
13 第17図 P L 37	土師器 杯	床直 3/4	① 16.8 ③ (7.3)	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下位から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
14 第17図 P L 37	土師器 杯	甕 ほぼ完形	① 8.4 最大 9.6 ③ 5.4	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
15 第17図 P L 38	土師器 杯	埋土 3/4	① 10.2 最大 11.2 ③ 5.7	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部上位は横ナデ、中位にナデ部分が残る、中位から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
16 第17図 P L 38	土師器 杯	甕 完形	① 9.6 最大 11.4 ③ 6.5	①粗砂粒、褐色粒 ②良好 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半から底部は不定方向のヘラ削り。	
17 第17図	土師器 杯	甕 1/2	① 11.6 最大 12.6 ③ 5.6	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下半から底部は不定方向のヘラ削り。内面の口縁部上半は斜放射状ヘラ磨き。	
18 第17図 P L 38	土師器 杯	甕 完形	① 12.0 最大 12.4 ③ 5.5	①粗砂粒、褐色粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部上位は横ナデ、中位はナデ部分が残る、中位から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
19 第17図 P L 38	土師器 杯	床直 3/4	① 12.2 最大 12.6 ③ 5.1	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部上半は横ナデ、下半はナデ、下位から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	

遺物観察表

20 第17図 P L 38	土師器 杯	竈 完形	① 11.0 最大 12.8 ③ 5.7	①細砂粒、褐色粒 ②良好 ③橙色	口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下位から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。
21 第17図 P L 38	土師器 杯	床上10cm 3/4	① 13.0 最大 13.2 ③ 5.3	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部上半は横ナデ、中位にナデが残る、下半から底部は不定方向のヘラ削り。
22 第17図	土師器 杯	竈 1/2	① 13.0 最大 13.6 ③ 5.8	①粗砂粒、褐色粒 ②良好 ③にぶい褐色	口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下半から底部はヘラ削り後粗いヘラ磨き。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。
23 第18図 P L 38	土師器 杯	竈 ほぼ完形	① 11.8 稜径 12.0 ③ 5.4	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部は不定方向のヘラ削り。
24 第18図 P L 38	土師器 杯	埋土 ほぼ完形	① 11.8 稜径 11.0 ③ 5.3	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部は横ナデ、稜下に無調整部分が残る、底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。
25 第18図 P L 38	土師器 杯	竈 ほぼ完形	① 12.8 稜径 11.8 ③ 5.3	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部は不定方向のヘラ削り。
26 第18図 P L 38	土師器 杯	竈 ほぼ完形	① 12.8 稜径 12.6 ③ 5.4	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部は不定方向のヘラ削り。
27 第18図 P L 38	土師器 高杯	竈 完形	① 12.6 ④ 7.4 ③ 5.9	①粗砂粒、褐色粒 ②良好 ③橙色	杯身口縁部上位は横ナデ、中程は横方向のヘラ削り、脚部との接合部は横ナデ、脚部は縦方向のヘラ削り。
28 第18図 P L 38	土師器 高杯	周堤帯 脚部下半を 欠損	① 13.6	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口唇部に輪積痕残る。口縁部は上半が横ナデ、下半は斜め方向のヘラ削り。内面は口縁部上半が斜放射状ヘラ磨き。
29 第18図 P L 38	土師器 高杯	竈 ほぼ完形	① 13.4 ④ 9.0 ③ 8.9	①細砂粒 ②良好 ③橙色	杯身口縁部上位は横ナデ、中位・下位はヘラナデ、脚部は横ナデ、内面杯身は斜放射状ヘラ磨き。
30 第18図 P L 38	土師器 高杯	竈 ほぼ完形	① 13.8 ④ 10.2 ③ 9.0	①粗砂粒、褐色粒 ②良好 ③明赤褐色	杯身口縁部上位は横ナデ、中位・下位はヘラナデ、脚部は横ナデ、内面杯身は斜放射状ヘラ磨き。
31 第18図 P L 38	土師器 高杯	竈 ほぼ完形	① 13.8 ④ 9.4 ③ 9.5	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	杯身底部の突起を脚部に差し込み接合。杯身口縁部上半は横ナデ、下半は横方向のヘラ削り、脚部横ナデ。内面杯身は斜放射状ヘラ磨き。
32 第18図 P L 38	土師器 高杯	竈 完形	① 15.2 ④ 9.6 ③ 9.3	①細砂粒 ②良好 ③赤褐色	杯身内面は黒色処理。口縁部は上半が横ナデ、下半がヘラ削り後部分的なヘラ磨き。内面杯身は全面にヘラ磨き。
33 第18図 P L 38	土師器 高杯	埋土 2/3	① 15.0	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	杯身内面黒色処理。杯身口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、脚部との接合部から脚部端部は横ナデ。内面は杯身に横方向のヘラ磨き。
34 第18図	土師器 高杯	埋土 脚部	④ 9.4	①細砂粒 ②良好 ③橙色	杯身内面黒色処理。脚部は縦方向のヘラ磨き。
35 第18図	土師器 高杯	竈 脚部片	④ 9.5	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	杯身内面黒色処理か。脚部は横ナデ。内面杯身はヘラ磨き。
36 第18図	土師器 高杯	埋土 脚部片	④ 10.8	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	杯身内面黒色処理。脚部上半は縦方向ヘラナデ、下半は横ナデ。
37 第18図	土師器 高杯	竈 脚部片	④ 10.2	①細砂粒 ②良好 ③橙色	杯身内面は黒色処理。脚部は横ナデ。
38 第18図 P L 39	土師器 罎	竈 口縁部の大 半を欠損	① 7.4 ② 2.8 ③ 7.7	①粗砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部は横ナデ、胴部は下位に横方向のハケ目の他はナデ、底部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。
39 第19図 P L 39	土師器 罎	埋土 胴部の一部 欠損	① 10.7 胴径 14.6 ③ 16.1	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部は横ナデ後、胴部はヘラ削り後やや粗いヘラ磨き、底部はヘラ削り。内面は口縁部上半に横方向のヘラ磨き。
40 第19図 P L 39	土師器 甔	竈 完形	① 18.6 ② 3.0 ③ 11.3	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部は横ナデ、胴部は縦方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。

41 第19図 P L 39	土師器 甌	竈 ほぼ完形	① 20.4 ② 5.0 ③ 20.3	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	内外面に輪積痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部は縦方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。						
42 第19図 P L 39	土師器 甌	竈 ほぼ完形	① 25.4 ② 9.0 ③ 29.8	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部は横ナデ、胴部は底部から頸部へのヘラ削り後粗い縦方向のヘラ磨き。内面胴部はヘラナデ。						
43 第19図 P L 39	土師器 甌	竈・周堤帯 ほぼ完形	① 9.6 胴径 13.2 ③ 12.8	①粗砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部は横ナデ、胴部は上位が縦方向、中位が斜め方向、下位は横方向、底部は不定方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。						
44 第19図	土師器 甌	竈 1/2	① 10.6 胴径 12.8 ③ (10.5)	①細砂粒 ②良好 ③橙色	内面黒色処理。口縁部から頸部下は横ナデ、胴部は横方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。						
45 第19図 P L 39	土師器 甌	床直 1/2	① 11.2 ② 5.4 ③ 10.6	①細砂粒 ②良好 ③赤褐色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部は上位がナデ、中位・下位が斜め方向のヘラ削り、底部もヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。						
46 第20図 P L 39	土師器 甌	竈 胴部の一部 欠損	① 11.4 ② 5.0 ③ 10.6	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部は横ナデ、胴部は縦方向のヘラ削り、底部は不定方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。						
47 第20図 P L 39	土師器 甌	竈 3/4	① 14.8 胴径 14.6 ③ 11.1	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部は横ナデ、胴部は縦方向のヘラ削り、底部は不定方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。						
48 第20図 P L 39	土師器 甌	竈 胴部の一部 欠損	① 13.2 ② 5.6 ③ 11.1	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部は横ナデ、胴部は縦方向のヘラ削り、底部は不定方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。						
49 第20図 P L 40	土師器 甌	竈 ほぼ完形	① 16.4 ② 6.4 ③ 24.2	①粗砂粒、褐色粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部は横ナデ、胴部は縦方向のヘラ削りであるが底部周囲は横方向のヘラ削り、底部もヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。						
50 第20図 P L 40	土師器 甌	竈 ほぼ完形	① 18.4 ② 5.6 ③ 28.8	①粗砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部は横ナデ、胴部は上位・中位が縦方向、下位は横方向のヘラ削り、底部もヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。						
51 第21図 P L 40	土師器 甌	床直 3/4	① 15.6 ② 5.5 ③ 31.1	①粗砂粒 ②良好 ③淡黄色	内面に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部は底部から頸部へ向けてのヘラ削り、底部もヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。						
52 第21図 P L 40	土師器 甌	竈 3/4	① 19.0 ② 6.1 ③ 33.2	①粗砂粒 ②良好 ③にぶい黄褐色	口縁部は横ナデ、胴部は上位が縦方向、中位が斜め方向、下位は横方向、底部は不定方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。						
53 第20図	土師器 甌	竈 口縁部～胴部 上位片	① 16.4	①粗砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部は横ナデ、胴部上位は横方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。						
54 第20図 P L 40	土師器 甌	竈 口縁部～胴部 中位片	① 16.0 胴径 18.4	①粗砂粒 ②良好 ③明赤褐色	輪積痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部は縦方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。						
55 第21図 P L 40	土師器 壺	竈・床上10 口縁部～胴部 上位	① 19.4 胴径 31.6	①粗砂粒 ②やや軟質 ③浅黄色	内面に輪積痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部は横方向のヘラ削りであるが単位等は不鮮明。内面胴部はヘラナデ。						
56 第18図 P L 41	土師器 手捏ね	床直 ほぼ完形	① 6.2 ② 4.3 ③ 4.3	①細砂粒 ②良好 ③浅黄色	外面に輪積痕が残る。口縁部・底部ともナデ。内面はヘラナデ。						
挿図番号	図版番号	種類	器種	出土位置	残存率	計 測 値 (単位 cm、g)				石材	
57 第21図	P L 41	土製品	土玉	埋土	完形	長 1.00	径 1.00	孔 0.10	重 1.0		
58 第21図	P L 41	石製品	管玉	埋土	完形	長 1.68	径 0.61	孔 0.25	重 0.9		滑石
59 第21図	P L 41	石製模造品	白玉	埋土	完形	長 0.65	径 0.70	孔 0.25	重 0.3		滑石
60 第21図	P L 41	石製模造品	白玉	埋土	完形	長 0.42	径 0.61	孔 0.23	重 0.2		滑石
61 第21図	P L 41	石製模造品	白玉	埋土	完形	長 0.44	径 0.63	孔 0.20	重 0.2		滑石
62 第21図	P L 41	石製模造品	白玉	埋土	完形	長 0.36	径 0.65	孔 0.25	重 0.2		滑石
63 第21図	P L 41	石製模造品	白玉	埋土	完形	長 0.41	径 0.67	孔 0.20	重 0.2		滑石
64 第21図	P L 41	石製模造品	白玉	埋土	完形	長 0.34	径 0.61	孔 0.25	重 0.1		滑石蛇紋岩
65 第21図	P L 41	石製模造品	白玉	埋土	一部	長 (0.35)	径 0.63	孔 0.20	重 0.2		滑石
66 第21図	P L 41	石製模造品	白玉	埋土	完形?	長 0.20	径 0.76	孔 0.25	重 0.1		滑石

遺物観察表

123号住居

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	計測値	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
1 第25図 P L 41	土師器 杯	周堤帯・埋 土 ほぼ完形	① 13.4 ③ (4.7)	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下位から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
2 第25図 P L 41	土師器 杯	竈 完形	① 14.0 ③ 6.8	①粗砂粒、褐色粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下位から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
3 第25図 P L 41	土師器 杯	床上9cm 完形	① 14.2 ③ 6.5	①粗砂粒、褐色粒 ②良好 ③橙色	口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下位から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
4 第25図 P L 42	土師器 杯	周堤帯・埋 土 完形	① 14.4 ③ 5.7	①細砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下位から底部は不定方向のヘラ削り。内面は口縁部上半に斜放射状ヘラ磨き。	
5 第25図 P L 42	土師器 杯	床上18cm 完形	① 16.0 ③ 7.2	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下位から底部は不定方向のヘラ削り。内面は口縁部上半に斜放射状ヘラ磨き。	
6 第25図 P L 42	土師器 杯	周堤帯・埋 土 ほぼ完形	① 8.7 最大 9.3 ③ 5.0	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下位から底部は不定方向のヘラ削り。	
7 第25図 P L 42	土師器 杯	埋土 ほぼ完形	① 9.5 最大 10.2 ③ 5.2	①細砂粒 ②良好 ③暗赤灰色	口縁部上半は横ナデ、下半から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
8 第25図 P L 42	土師器 杯	周堤帯・埋 土 2/3	① 9.9 最大 11.0 ③ (5.2)	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部上半は横ナデ、下半から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
9 第26図 P L 42	土師器 杯	周堤帯・埋 土 ほぼ完形	① 11.8 最大 12.6 ③ 5.0	①細砂粒、褐色粒 ②良好 ③橙色	口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下位から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
10 第26図	土師器 杯	周堤帯・埋 土 1/3	① 11.8 最大 13.2 ③ (6.7)	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下位から底部は不定方向のヘラ削りと部分的な縦方向のヘラ磨き。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
11 第26図	土師器 杯	埋土 口縁部片	① 12.0 最大 12.6 ③ (4.5)	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半から底部は不定方向のヘラ削り。	
12 第26図 P L 42	土師器 杯	周堤帯・埋 土 2/3	① 12.0 最大 12.6 ③ 6.7	①粗砂粒、褐色粒 ②やや軟質 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半から底部は不定方向のヘラ削り。	
13 第26図	土師器 杯	周堤帯・埋 土 1/3	① 13.0 最大 13.8	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下位から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
14 第26図	土師器 杯	埋土 1/2	① 13.6 ③ 5.4	①細砂粒 ②良好 ③明褐色	口縁部上位は横ナデ、中位にナデ部分が残る、中位から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
15 第26図 P L 42	土師器 杯	周堤帯 完形	① 12.0 稜径 12.4 ③ 4.9	①細砂粒、褐色粒 ②良好 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部は不定方向のヘラ削り。	
16 第26図 P L 42	土師器 杯	周堤帯・埋 土 完形	① 12.0 稜径 12.0 ③ 5.0	①細砂粒、褐色粒 ②良好 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部は不定方向のヘラ削り。	
17 第26図 P L 42	土師器 杯	周堤帯 完形	① 12.0 稜径 12.2 ③ 5.4	①細砂粒、褐色粒 ②良好 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部は不定方向のヘラ削り。	
18 第26図 P L 42	土師器 杯	埋土 3/4	① 12.0 稜径 11.6 ③ 5.9	①細砂粒、褐色粒 ②良好 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部は不定方向のヘラ削り。	
19 第26図 P L 42	土師器 杯	竈 ほぼ完形	① 12.8 稜径 11.2 ③ 5.3	①細砂粒、褐色粒 ②良好 ③橙色	口縁部は横ナデ、稜下に無調整部分が残る、底部は不定方向のヘラ削り。	

20 第26図 P L 42	土師器 高杯	周堤帯・埋 土 口縁一部欠	① 16.2 ④ 9.0 ③ 12.0	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下位から底部 は不定方向のヘラ削り、脚部は横ナデ。内面杯身 は口縁部上半に斜放射状ヘラ磨き。		
21 第26図	土師器 高杯	周堤帯・埋 土 杯身2/3	① 12.7	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	杯身底部に突起を設け脚部と接合。内面黒色処理。 口縁部上半は横ナデ、下半は斜め方向のヘラ削り。 内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。		
22 第26図	土師器 高杯	埋土 2/3	④ 9.8	①細砂粒 ②良好 ③橙色	杯身に脚部を接合。口縁部は上半が横ナデ、下半 はヘラ削り、脚部は横ナデ。		
23 第26図	土師器 高杯	周堤帯 脚部片	④ 10.0	①細砂粒 ②良好 ③明褐色	脚部は横ナデ。		
24 第26図 P L 43	土師器 高杯	埋土 脚部片		①細砂粒 ②良好 ③褐色	脚部はナデ。内面は杯身底部に放射状ヘラ磨き、 脚部は縦方向の強いナデ。		
25 第27図	土師器 甌	床上9cm 胴部下半	② 8.0 胴径 24.0	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	胴部は縦方向のヘラ削り。内面はヘラナデ。		
26 第27図 P L 42	土師器 甌	竈 底部欠損	① 14.0	①粗砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部に輪積痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部は 底部から頸部へのヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。		
27 第27図 P L 42	土師器 甌	竈・周堤帯 2/3	① 14.2 ② 6.0 ③ 15.7	①細砂粒 ②良好 ③褐色	内面に輪積痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部は縦 方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。		
28 第27図	土師器 甌	周堤帯 完形	① 14.4 ② 7.5 ③ 21.4	①粗砂粒 ②良好 ③橙色	内面に輪積痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部は上 位が縦方向、中位・下位は斜め方向、底部は不定 方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。		
29 第27図 P L 43	土師器 甌	周堤帯・埋 土 口縁部 ～胴部中位	① 15.6 胴径 20.6	①細砂粒 ②良好 ③明褐色	胴部に輪積痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部は縦 方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。		
30 第27図 P L 43	土師器 甌	周堤帯・埋 土 底部欠損	① 17.0	①粗砂粒 ②良好 ③明赤褐色	内外面に輪積痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部は ヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。		
31 第28図 P L 43	土師器 甌	周堤帯・埋 土 ほぼ完形	① 18.0 ② 6.4 ③ 32.0	①粗砂粒 ②良好 ③浅黄色	口縁部は横ナデ、胴部は上位が横方向、中位・下 位は斜め方向のヘラ削り、底部もヘラ削り。内面 胴部はヘラナデ。		
32 第28図 P L 43	土師器 甌	ほぼ完形	① 17.0 ② 5.4 ③ 32.4	①粗砂粒 ②良好 ③にぶい黄褐色	口縁部は横ナデ、胴部は上位と下位が横方向、中 位は斜め方向のヘラ削り。底部もヘラ削り。内面 胴部はヘラナデ。		
33 第28図 P L 43	土師器 壺	周堤帯 1/2	① 19.2 胴径 26.8	①細砂粒、褐色粒 ②良好 ③にぶい橙色	口唇部は横ナデ、口縁部は縦方向のハケ目、胴部 は横方向のハケ目。内面は口縁部が横ナデ、胴部 はヘラナデ。		
34 第29図 P L 43	土師器 壺	2/3	① 20.2 胴径 26.4	①細砂粒、褐色粒 ②良好 ③橙色	口縁部は斜め方向のハケ目、胴部はハケ目後ヘラ 削りか。内面は口縁部が横ナデ、胴部はヘラナデ。		
35 第29図	土師器 壺	竈・周堤帯 胴部下半片	② 5.0 胴径 26.8	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	胴部は斜め方向のヘラ削り、底部は不定方向のヘ ラ削り。内面胴部はヘラナデ。		
36 第29図	埴輪 円筒	埋土 小片	凸帯径 18.8	①粗砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	断面角形の凸帯を貼付。外面はハケ目(12条～)。 内面はナデ。		
挿図番号	図版番号	種 類	器 種	出土位置	残存率	計 測 値 (単位 cm、g)	石 材
37 第29図	P L 42	石製模造品	白玉	埋土	完形	長 0.38 径 0.70 孔 0.30 重 0.20	滑石
38 第29図	P L 42	石製模造品	白玉	埋土	一部欠	長 0.37 径 0.70 孔 0.30 重 0.10	滑石
39 第29図	P L 42	石製模造品	白玉	埋土	完形	長 0.38 径 0.80 孔 0.23 重 0.30	滑石
40 第29図	P L 42	石製模造品	白玉	埋土	完形	長 0.25 径 0.72 孔 0.20 重 0.20	滑石
41 第29図	P L 42	石製模造品	白玉	埋土	完形	長 0.23 径 0.70 孔 0.20 重 0.10	滑石
42 第29図	P L 42	石製模造品	白玉	埋土	完形	長 0.35 径 0.72 孔 0.23 重 0.20	滑石
43 第29図	P L 42	石製模造品	白玉	埋土	1/2	長 0.27 径 0.71 孔 0.20 重 (0.1)	滑石

遺物観察表

124号住居

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	計測値	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
1 第34図 P L 44	土師器 杯	床直 完形	① 12.6 ③ 6.3	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半はナデ、下位から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
2 第34図 P L 44	土師器 杯	埋土 完形	① 13.2 ③ 5.2	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下位から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
3 第34図 P L 44	土師器 杯	貯蔵穴・竈 ほぼ完形	① 13.6 ③ 5.1	①細砂粒 ②良好 ③黒褐色	口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下位から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
4 第34図 P L 44	土師器 杯	床上5cm 完形	① 13.8 ③ 4.7	①細砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下位から底部は不定方向のヘラ削り。内面は口縁部上半が斜放射状ヘラ磨き。	
5 第34図 P L 44	土師器 杯	周堤帯 完形	① 12.4 稜径 12.6 ③ 5.4	①細砂粒、褐色粒 ②良好 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部は不定方向のヘラ削り。	
6 第34図 P L 44	土師器 杯	床上6cm 口縁部の一部欠損	① 12.9 稜径 12.7 ③ 5.8	①細砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部は横ナデ、底部は不定方向のヘラ削り。	
7 第34図	土師器 杯	竈 1/2	① 13.0 稜径 13.0 ③ 5.0	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部横ナデ、底部は不定方向のヘラ削り。	
8 第34図 P L 44	土師器 高杯	周堤帯 口縁部	① 20.0	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部下に1条の凸帯が貼付。口縁部は斜め方向のヘラ磨き。内面口縁部は斜格子状ヘラ磨き。	
9 第34図 P L 44	土師器 高杯	周堤帯 杯身下半～ 脚部片	④ 13.0	①細砂粒 ②良好 ③灰黄色	杯身は口縁部から底部にかけて粗い縦方向のヘラ磨き。脚部は上位から端部にかけて縦方向のヘラ磨き。内面杯身も粗い縦方向のヘラ磨き。	
10 第34図	土師器 高杯	周堤帯 脚部片	④ 14.0	①細砂粒 ②良好 ③にぶい黄色	脚部上半は縦方向のヘラ削り、端部は横ナデ。内面は縦方向のナデ。	
11 第34図	土師器 高杯	周堤帯 埋土 脚部片	④ 14.0	①細砂粒 ②良好 ③褐色	脚部は横ナデ、外面に斜放射状ヘラ磨き。	
12 第34図 P L 45	土師器 埴	床直・周堤帯 胴部一部欠	① 9.0 最大 13.5 ③ 15.3	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	内面に輪積痕が残る。口縁部縦方向、胴部上位斜め方向、頸部に2条のヘラ磨き、胴部下半は不定方向のヘラ削り。内面口縁部に斜放射状ヘラ磨き。	
13 第34図 P L 45	土師器 埴	床直 口縁部欠損	最大 14.8	①細砂粒 ②良好 ③褐色	胴部上半は斜め方向のヘラ磨き。下半から底部は不定方向のヘラ削り。	
14 第34図 P L 45	土師器 小型壺	周堤帯 1/2	① 9.5 ② 6.0 ③ 8.6	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部は横ナデ後横方向のヘラ磨き、胴部・底部はヘラ削り。内面は上半が横方向、下半が格子状ヘラ磨き。	
15 第35図 P L 45	土師器 甗	貯蔵穴 完形	① 15.4 ② 3.2 ③ 19.6	①粗砂粒 ②良好 ③にぶい黄褐色	口縁部は横ナデ、胴部は縦方向のヘラ削り後粗いヘラ磨き。内面はヘラナデ。	
16 第35図 P L 46	土師器 甗	貯蔵穴 ほぼ完形	① 22.8 ② 8.7 ③ 21.7	①細砂粒 ②良好 ③明褐色	胴部に輪積痕が残る。口縁部は横方向、胴部は縦方向のヘラ削り後底部周辺を横方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
17 第35図	土師器 甗	周堤帯 口縁部～胴部 上位片	① 11.8	①細砂粒 ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部は頸部下にナデが残り、上位は横方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
18 第35図	土師器 小型甗	床直・埋土 胴部下半片	胴径 13.8 ② 5.2	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	胴部は中位が横方向、下位が縦方向のヘラ削り、底部もヘラ削り。内面はヘラナデ。	
19 第35図 P L 45	土師器 甗	貯蔵穴・竈 床直 ほぼ完形	① 19.2 ② 5.0 ③ 29.7	①粗砂粒・褐色粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部は横ナデ、胴部は底部から頸部へのヘラ削り、底部は不定方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	

20 第35図 P L 45	土師器 甕	竈・貯蔵穴 床直 一部欠損	① 18.8 ② 5.5 ③ 30.9	①粗砂粒 ②良好 ③浅黄色	成形時の歪みが大きい。口縁部は横ナデ、胴部は縦方向のヘラ削り、底部は不定方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。		
21 第36図 P L 45	土師器 壺	周堤帯 口縁部～胴部上半片	① 24.2 胴径 33.6	①細砂粒 ②良好 ③黄褐色	口縁部は横ナデ、胴部上半は横方向・斜め方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ、中位に粗いヘラ磨き。		
挿図番号 22 第36図 23 第36図	図版番号 P L 46	種 類 石製品 石製模造品	器 種 紡錘車 白玉	出土位置 埋土 埋土	残存率 完形 完形	計 測 値 (単位 cm, g) 径 4.16 径 1.95 厚 1.81 孔 0.65 重 39.9 長 0.30 径 0.66 孔 0.20 重 0.20	石 材 蛇紋岩 滑石

125号住居

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	計 測 値	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
1 第41図 P L 46	土師器 杯	埋土 ほぼ完形	① 13.4 ③ 5.2	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部上半は横ナデ、下半はナデ、底部は不定方向ヘラ削り。内面は口縁部上半に斜放射状ヘラ磨き。	
2 第41図 P L 46	土師器 杯	埋土 ほぼ完形	① 13.4 ③ 5.2	①細砂粒 ②良好 ③赤褐色	口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下位から底部は不定方向のヘラ削り。	
3 第41図 P L 46	土師器 杯	埋土 2/3	① 13.5 ③ (4.7)	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下位から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
4 第41図 P L 46	土師器 杯	周堤帯 2/3	① 14.0 ③ 5.0	①細砂粒 ②良好 ③赤褐色	口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下位から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
5 第41図 P L 46	土師器 杯	竈 3/4	① 13.8 ③ 5.3	①細砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部上位は横ナデ、中位から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
6 第41図	土師器 杯	竈 1/2	① 14.0 ③ 5.3	①細砂粒 ②良好 ①橙色	口縁部上位は横ナデ、中位にナデ部分が残る、中位から底部は不定方向のヘラ削り。内面は口縁部上半に斜放射状ヘラ磨き。	
7 第41図 P L 46	土師器 杯	床直・竈 2/3	① 14.3 ③ 5.3	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	内面黒色処理。口縁部上半は横ナデ後横方向のヘラ磨き、下半から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は横方向のヘラ磨き。	
8 第41図	土師器 杯	竈 口縁部片	① 13.2 ③ 7.1	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部上位は横ナデ、中位にナデ部分が残る、中位から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
9 第41図	土師器 杯	埋土 口縁部片	① 11.8 最大 12.6 ③ 4.4	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部上半は横ナデ、下半にナデ部分が残る、底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
10 第42図 P L 46	土師器 杯	掘り方 1/3	① 13.0 最大 13.6 ③ 5.0	①細砂粒 ②良好 ③赤褐色	内面黒色処理。口縁部上半は横ナデ、下半はナデ、底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は粗い斜放射状ヘラ磨き。	
11 第42図 P L 46	土師器 杯	床上11cm ほぼ完形	① 11.8 最大 13.0 ③ 6.4	①細砂粒 ②良好 ③赤褐色	口縁部上位は横ナデ、中位・下位はナデ、底部は不定方向のヘラ削り。内面は口縁部上半が粗い斜放射状ヘラ磨き。	
12 第42図 P L 46	土師器 杯	周堤帯 1/3	① 12.6 稜径 12.6 ③ 5.4	①細砂粒 ②良好 ③におい橙色	口縁部は横ナデ、底部は不定方向のヘラ削り。	
13 第42図	土師器 杯	埋土 口縁部片	① 13.8 稜径 11.6	①細砂粒 ②良好 ③黄褐色	口縁部は横ナデ、底部は不定方向のヘラ削り。	
14 第42図 P L 46	土師器 杯	周堤帯・埋土 2/3	① 16.4 稜径 17.2 ③ 8.4	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部は横ナデ、底部は不定方向のヘラ削り。	
15 第42図 P L 47	土師器 高杯	竈 1/2	① 16.4 ④ 12.5 ③ 14.3	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	杯身口縁部は横ナデ、底部はナデ、脚部は縦方向のヘラ削り、端部は横ナデ。内面は口縁部に斜放射状ヘラ磨き。	
16 第42図	土師器 高杯	埋土 口縁部片		①細砂粒 ②良好 ③赤褐色	杯身口縁部は横ナデ、底部はナデ。内面は口縁部上半に斜放射状ヘラ磨き。	

遺物観察表

17 第42図 P L 46	土師器 高杯	埋土 126住埋土 脚部	④ 13.6	①細砂粒 ②良好 ③橙色	杯身は脚部に差し込み状に接合。接合部は縦方向へラ磨き、その下位は横ナデ。		
18 第42図 P L 47	土師器 鉢	床直5cm 口縁部の一 部欠損	① 12.0 ② 5.2 ③ 5.6	①細砂粒 ②良好 ③にぶい褐色	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部の整形は不明。内面体部は横方向のハケ目。		
19 第42図 P L 47	土師器 椀	竈・床直 1/2	① 16.8 ② 8.0 ③ 10.5	①粗砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は中心部に凹みをもち周囲をへラ削り。		
20 第43図 P L 47	土師器 甌	周堤帯 口縁部～胴 部中位	① 24.6	①粗砂粒、褐色粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部は横ナデ、胴部は頸部へ向けてのへラ削り。内面胴部はハケ目。		
21 第42図	土師器 甌	周堤帯 胴部下位片	② 9.2	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	胴部は縦方向のへラ削り。内面は横方向のハケ目。		
22 第42図 P L 47	土師器 小型甕	周堤帯 3/4	① 11.7 ② 6.5 ③ 10.3	①粗砂粒 ②良好 ③にぶい黄褐色	口縁部は横ナデ、胴部は縦方向、底部は横方向のへラ削り、胴部最下部に1条の強いナデ。内面は頸部に横方向へラ削り、胴部はへラナデ。		
23 第42図 P L 47	土師器 甕	竈 1/2	① 12.4 胴径 14.0	①粗砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部は上位がナデ、中位・下位は縦方向のへラ削り。内面胴部はへラナデ。		
24 第43図 P L 47	土師器 甕	竈 口縁部～胴 部上位片	① 13.2	①細砂粒、褐色粒 ②良好 ③橙色	口縁部は横ナデ、胴部は頸部へ向けてのへラ削り。内面胴部はへラナデ。		
25 第43図 P L 47	土師器 甕	竈 口縁部～胴 部上位片	① 16.4	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部は横ナデ、胴部は斜め方向のへラ削り。内面胴部はへラナデ。		
26 第43図 P L 47	土師器 甕	竈 口縁部～胴 部上位片	① 16.8	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部は横ナデ、胴部は縦方向のへラ削り。内面胴部はへラナデ。		
27 第43図 P L 47	土師器 甕	竈 口縁部～胴 部中位片	① 18.0 胴径 24.2	①粗砂粒(2~5 ^μ) ②良好 ③褐色	口縁部は横ナデ、胴部は上位が横方向、中位が斜方向のへラ削り。内面胴部はへラナデ。		
28 第43図 P L 48	土師器 甕	竈 口縁部～胴 部中位片	① 17.7 胴径 21.8	①細砂粒 ②良好 ③にぶい褐色	口縁部は横ナデ、胴部は縦方向のへラ削り。内面胴部はへラナデ。		
29 第44図 P L 48	土師器 甕	床上12cm 竈 一部欠損	① 18.7 ② 7.2 ③ 34.4	①粗砂粒 ②良好 ③明褐色	口縁部は楕円形(17.0~18.7)。口縁部は横ナデ、胴部は縦方向のへラ削り。内面胴部はへラナデ。		
30 第44図	土師器 甕	埋土 底部	② 7.6	①粗砂粒 ②良好 ③橙色	胴部・底部はへラ削り。内面はへラナデ。		
31 第44図 P L 48	土師器 壺	埋土 口縁部～胴 部上半片	① 13.8	①細砂粒 ②良好 ③明褐色	口縁部は横ナデ、胴部上半は横方向のへラ削り。内面は頸部が縦方向の指ナデ、胴部はへラナデ。		
32 第43図 P L 48	土師器 甕	床上12cm 胴部片	胴径 20.6	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	胴部上半は横ナデ、下半は縦方向のへラ削り、底部もへラ削り。内面はへラナデ。		
挿図番号	図版番号	種 類	器 種	出土位置	残存率	計 測 値 (単位 cm, g)	石 材
33 第44図	P L 48	石製品	玉	埋土	完形	長 0.72 径 0.80 孔 0.17 重 0.40	滑石

126号住居

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	計測値	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
1 第48図	土師器 杯	埋土・周堤帯 1/4	① 13.2	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部上位は横ナデ、中位から底部は不定方向のヘラ削り。	
2 第48図	土師器 杯身	掘り方 1/2	① 13.2 ③ 6.0	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下位から底部は不定方向のヘラ削り。内面の口縁部上半は斜放射状ヘラ磨き。	
3 第48図 P L 49	土師器 杯	周堤帯 2/3	① 13.6 ③ 5.3	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部上半は横ナデ、下半はナデ、底部はヘラ削り後粗いヘラ磨き。内面は口縁部に斜放射状、底部に粗いヘラ磨き。	
4 第48図	土師器 杯	埋土・周堤帯 1/4	① 14.0 ③ (4.7)	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部上位は横ナデ、中位から底部は不定方向のヘラ削り。	
5 第48図 P L 49	土師器 杯	周堤帯 3/4	① 14.0 ③ 4.3	①粗砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下半から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
6 第48図 P L 49	土師器 杯	埋土 1/2	① 14.0 ③ 4.9	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下半から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
7 第48図 P L 49	土師器 杯	床上17cm ほぼ完形	① 14.0 ③ 4.6	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下半から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
8 第48図 P L 49	土師器 杯	埋土 3/4	① 13.5 ③ 5.7	①粗砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下位から底部は不定方向ヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
9 第48図 P L 49	土師器 杯	床直 ほぼ完形	① 15.0 ③ 6.1	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部上位は横ナデ、中位から底部は不定方向のヘラ削り、口縁部上半に斜め方向のヘラ磨き。内面口縁部に斜放射状ヘラ磨き。	
10 第48図 P L 49	土師器 杯	周堤帯 完形	① 16.6 ③ 7.2	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下位から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
11 第48図 P L 49	土師器 杯	周堤帯 ほぼ完形	① 9.0 最大 10.2 ③ 6.0	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	内面黒色処理。口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下位から底部は不定方向のヘラ削り。	
12 第48図 P L 49	土師器 杯	床上16cm 完形	① 10.0 最大 10.9 ③ 5.9	①細砂粒 ②良好 ③赤褐色	口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下位から底部は不定方向のヘラ削り。内面は口縁部に斜放射状後底部中央より放射状のヘラ磨き。	
13 第48図	土師器 杯	周堤帯・埋土 口縁部片	① 13.6 最大 14.4 ③ 5.1	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	内面黒色処理。口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下位から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
14 第49図 P L 49	土師器 杯	周堤帯 3/4	① 12.6 稜径 12.0 ③ 5.2	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部は不定方向のヘラ削り。	
15 第49図 P L 49	土師器 杯	周堤帯 3/4	① 13.0 稜径 12.5 ③ 5.4	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部は不定方向のヘラ削り。	
16 第49図	土師器 杯	周堤帯 口縁部片	① 13.0 稜径 12.6	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部は不定方向のヘラ削り。	
17 第49図	土師器 杯	埋土 口縁部片	① 13.8 稜径 13.6	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部は横ナデ、底部は不定方向のヘラ削り。	
18 第49図 P L 49	土師器 高杯	周堤帯 1/2	① 13.6 ④ 8.2 ③ 8.8	①細砂粒 ②良好 ③橙色	杯身内面黒色処理。杯身口縁部は上位が横ナデ、中位がナデ、下位が横方向のヘラ削り、脚部は縦方向のヘラ磨き。内面杯身は斜放射状ヘラ磨き。	
19 第49図	土師器 高杯	周堤帯 口縁部片	① 15.0	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部上半は横ナデ、下半はヘラナデ。	

遺物観察表

20 第49図	土師器	埋土 脚部	④ 8.6	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	杯身底部と脚部との間に接合痕。脚部は横ナデ。		
21 第49図 P L 49	土師器 高杯	埋土 脚部	④ 9.4	①細砂粒 ②良好 ③橙色	脚部上半は縦方向ヘラナデ、下半は横ナデ。		
22 第49図 P L 49	土師器 埴	周堤帯 完形	① 7.6 胴径 10.6 ③ 12.4	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部は横ナデ後斜め方向のヘラ磨き、胴部はヘラ削り後斜め方向のヘラ削り、底部は不定方向のヘラ削り。内面胴部はナデか。		
23 第49図 P L 49	土師器 埴	周堤帯・埋土 胴部の一部 欠損	① 9.0 胴径 15.2 ③ 12.2	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部は横ナデ後、斜め方向のヘラ磨き、胴部は横方向のヘラ削り後上半に下部で折り返す斜め方向のヘラ磨き、底部は不定方向のヘラ削り。		
24 第49図 P L 50	土師器 小型壺	周堤帯 完形	① 7.8 ② 2.6 ③ 11.6	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はナデ、底部の整形は不明。内面は口唇部が横ナデ、その下位はヘラナデ。		
25 第49図 P L 50	土師器 小型甕	周堤帯 1/2	① 9.8 ② 6.0 ③ 10.6	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部は斜め方向のヘラ削り、底部は不定方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。		
26 第49図	土師器 甕	周堤帯 胴部の一部 欠損	① 15.8 ② 3.7 ③ 10.2	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部は底部周辺だけヘラ削りて他はナデ。内面はヘラナデ。		
27 第50図	土師器 甕	竈・貯蔵穴 口縁部～胴 部中位片	① 24.0	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部は横ナデ、胴部は縦方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデと部分的なヘラ磨き。		
28 第50図 P L 50	土師器 甕	周堤帯 3/4	① 16.6 ② 6.3 ③ 17.1	①粗砂粒、褐色粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部は上位にナデが残り底部付近に横方向のヘラ削りの他は縦方向のヘラ削り。内面胴部下半に粗いヘラ磨き。		
29 第50図	土師器 甕	周堤帯 口縁部～胴 部中位片	① 19.6 胴径 22.2	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部は横ナデ、胴部は縦方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。		
30 第50図	土師器 甕	竈 口縁部～胴 部上位片	① 20.0	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部には粗いヘラ磨き。		
31 第51図 P L 50	土師器 甕	周堤帯・耕土 埋土 1/2	① 23.0 ② 7.6 ③ 24.4	①粗砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部は横ナデ、胴部は中位が横方向の他は縦方向のヘラ削り、底部は不定方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。		
32 第51図 P L 50	土師器 甕	埋土・128住 1/3	① 24.4 ② 7.6 ③ 28.4	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部は横ナデ、胴部は概ね縦方向のヘラ削り、底部は不定方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。		
33 第52図 P L 50	土師器 甕	周堤帯・埋土 1/2	① 21.0 ② 7.4 ③ 39.6	①粗砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部は横ナデ、胴部は上半がナデ、下半は概ね斜め方向のヘラ削り、底部は不定方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。		
34 第50図 P L 50	土師器 壺	周堤帯 口縁部～胴 部上位片	① 23.6	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部は横ナデ、胴部は横方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。		
挿図番号	図版番号	種 類	器 種	出土位置	残存率	計 測 値 (単位 cm、g)	石 材
35 第51図	P L 51	石器	砥石	床上 7 cm	完形	長 10.09 幅 3.41 厚 0.64 孔 0.82 重 56.90	頁岩
36 第51図	P L 51	石製模造品	剣形	周堤帯	完形	長 4.50 幅 3.10 厚 0.50 孔 0.20 重 11.90	滑石
37 第51図	P L 51	石製模造品	剣形	周堤帯	完形	長 4.40 幅 2.50 厚 0.55 孔 0.20 重 10.10	滑石
38 第51図	P L 51	石製模造品	剣形	周堤帯	完形	長 4.62 幅 2.30 厚 4.50 孔 0.23 重 8.50	滑石
39 第51図	P L 51	石製模造品	剣形	周堤帯	完形	長 4.05 幅 2.90 厚 0.53 孔 0.23 重 10.90	滑石
40 第52図	P L 51	石製模造品	剣形	周堤帯	端部欠	長 4.10 幅 2.70 厚 0.50 孔 0.20 重 8.20	滑石
41 第52図	P L 51	石製模造品	剣形	周堤帯	完形	長 3.95 幅 2.15 厚 0.36 孔 0.20 重 5.40	滑石
42 第52図	P L 51	石製模造品	剣形	周堤帯	一部欠	長 4.30 幅 2.30 厚 0.60 孔 0.35 重 8.60	滑石
43 第52図	P L 51	石製模造品	剣形	周堤帯	1/4	長 2.75 幅 1.45 厚 5.20 孔 0.15 重 2.80	滑石
44 第52図	P L 51	石製模造品	剣形	周堤帯	1/3	長 2.50 幅 1.80 厚 0.40 孔 0.20 重 3.00	滑石
45 第52図	P L 51	石製模造品	剣形	周堤帯	1/5	長 4.70 幅 1.60 厚 0.50 孔 0.20 重 1.60	滑石
46 第52図	P L 51	石製模造品	円形	周堤帯	完形	長 2.90 幅 1.70 厚 0.45 孔 0.40 重 4.60	滑石
47 第53図	P L 51	石製模造品	白玉	周堤帯	完形	長 0.38 径 0.70 孔 0.20 重 0.30	滑石
48 第53図	P L 51	石製模造品	白玉	周堤帯	完形	長 0.40 径 0.73 孔 0.23 重 0.30	滑石
49 第53図	P L 51	石製模造品	白玉	周堤帯	完形	長 0.29 径 0.62 孔 0.20 重 0.20	滑石
50 第53図	P L 51	石製模造品	白玉	周堤帯	完形	長 0.42 径 0.62 孔 0.20 重 0.20	滑石

175 第53図	P L 51	石製模造品	白玉	周堤帯	完形	長 0.385 径 0.70 孔 0.22 重 0.20	滑石
176 第53図	P L 51	石製模造品	白玉	周堤帯	完形	長 0.405 径 0.65 孔 0.25 重 0.20	滑石
177 第53図	P L 51	石製模造品	白玉	周堤帯	完形	長 0.35 径 0.67 孔 0.23 重 0.20	滑石
178 第53図	P L 51	石製模造品	白玉	周堤帯	完形	長 0.37 径 0.675 孔 0.20 重 0.20	滑石
179 第53図	P L 51	石製模造品	白玉	周堤帯	完形	長 0.39 径 0.56 孔 0.17 重 0.10	滑石
180 第53図	P L 51	石製模造品	白玉	周堤帯	完形	長 0.45 径 0.66 孔 0.20 重 0.20	滑石
181 第53図	P L 51	石製模造品	白玉	周堤帯	完形	長 0.25 径 0.67 孔 0.30 重 0.10	滑石
182 第53図	P L 51	石製模造品	白玉	周堤帯	完形	長 0.27 径 0.65 孔 0.25 重 0.10	滑石
183 第53図	P L 51	石製模造品	白玉	周堤帯	完形	長 0.50 径 0.57 孔 0.20 重 0.20	滑石
184 第53図	P L 51	石製模造品	白玉	周堤帯	完形	長 0.48 径 0.70 孔 0.25 重 0.30	滑石
185 第53図	P L 51	石製模造品	白玉	周堤帯	完形	長 0.48 径 0.70 孔 0.20 重 0.30	滑石
186 第53図	P L 51	石製模造品	白玉	周堤帯	完形	長 0.47 径 0.65 孔 0.23 重 0.30	滑石
187 第53図	P L 51	石製模造品	白玉	周堤帯	1/2	長 0.15 径 0.64 孔 0.20 重 0.10	滑石
188 第53図	P L 51	石製模造品	白玉	周堤帯	完形	長 0.25 径 0.69 孔 0.19 重 0.10	滑石
189 第53図	P L 51	石製模造品	白玉	周堤帯	完形	長 0.40 径 0.64 孔 0.20 重 0.20	滑石
190 第53図	P L 51	石製模造品	白玉	周堤帯	完形	長 0.49 径 0.67 孔 0.20 重 0.30	滑石
191 第53図	P L 51	石製模造品	白玉	周堤帯	完形	長 0.47 径 0.59 孔 0.20 重 0.30	滑石
192 第53図	P L 51	石製模造品	白玉	周堤帯	完形	長 0.56 径 0.70 孔 0.20 重 0.30	滑石
193 第53図	P L 51	石製模造品	白玉	周堤帯	完形	長 0.28 径 0.70 孔 0.20 重 0.20	滑石
194 第52図		石製模造品	白玉	周堤帯	1/4	長 0.14 径 孔 重 0.10	滑石
195 第52図		石製模造品	剝片	周堤帯		長 1.87 幅 1.34 厚 0.24 重 0.80	滑石
196 第52図		石製模造品	剝片	周堤帯		長 2.50 幅 0.82 厚 0.50 重 1.40	滑石
197 第52図		石製模造品	剝片	周堤帯		長 2.85 幅 1.12 厚 0.52 重 1.80	滑石
198 第52図		石製模造品	剝片	周堤帯		長 0.45 幅 0.30 厚 0.36 重 0.20	滑石

127号住居

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	計 測 値	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
1 第56図	土師器 杯	掘り方 口縁部片	① 13.0	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部に輪積痕が残る。口縁部上位は横ナデ、中位にナデ部分が残る、中位から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
2 第56図 P L 52	土師器 杯	床直 3/4	① 14.6 ③ 5.2	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	内面黒色処理。口縁部上位は横ナデ、中位にナデ部分が残る、中位から底部はヘラ削り後ヘラ磨き。内面は全面にヘラ磨き。	
3 第56図	土師器 杯	床直 口縁部片	① 12.8	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部は上位が横ナデ、中位はナデ。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
4 第56図	土師器 杯	埋土 口縁部片	① 14.9 ③ (6.6)	①細砂粒 ②良好 ③赤褐色	口縁部上位は横ナデ、中位にナデ部分が僅かに残る、中位から底部は不定方向のヘラ削り。内面は斜放射状ヘラ磨き。	
5 第56図 P L 52	土師器 杯	床直 底部の一部 欠損	① 11.8 最大 12.4 ③ 4.8	①粗砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、中位はナデ、下位から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は粗い斜放射状ヘラ磨き。	
6 第56図 P L 52	土師器 杯	床直 1/2	① 12.4 最大 12.8 ③ 4.8	①細砂粒 ②良好 ③赤褐色	口縁部上半は横ナデ、下半はナデ、底部は一定方向のヘラ削り。	
7 第56図 P L 52	土師器 杯	床直 完形	① 11.7 最大 12.6 ③ 6.1	①粗砂粒、褐色粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部上位は横ナデ、中位から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は下端で折り返す斜放射状ヘラ磨き。	
8 第56図 P L 52	土師器 杯	床直 完形	① 11.8 最大 13.7 ③ 7.6	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	内面黒色処理。口縁部上半は横ナデ、下半から底部は不定方向のヘラ削り。	
9 第56図 P L 52	土師器 高杯	床直 ほぼ完形	① 12.0 ④ 8.6 ③ 7.4	①細砂粒 ②良好 ③橙色	脚部内面は黒色処理。杯身口縁部は上半が横ナデ、下半はヘラ削り、脚部は上半がナデ、下半は横ナデ、内面口縁部はヘラ磨き。	
10 第56図 P L 52	土師器 甌	貯蔵穴 ほぼ完形	① 22.9 ② 8.7 ③ 26.4	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部は横ナデ、胴部は底部から口縁部へのヘラ削り。内面胴部はヘラナデ後縦方向の粗いヘラ磨き。	
11 第56図 P L 52	土師器 甕	貯蔵穴 口縁部～胴部上位	① 14.0	①細砂粒 ②良好 ③赤褐色	内面に輪積痕残る。口縁部は横ナデ、胴部上位もナデ。内面はヘラナデ。	

遺物観察表

12 第56図	土師器 甕	竈 床直 胴部下半	② 6.2	①粗砂粒 ②良好 ③橙色	胴部は縦方向のヘラ削り、底部は不定方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。		
13 第56図 P L 52	土師器 壺	床直 胴部下半	最大 15.6	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	内面に輪積痕が残る。胴部下半は縦方向、底部は不定方向ヘラ削り。内面はヘラナデ。		
挿図番号	図版番号	種類	器種	出土位置	残存率	計測値(単位 cm、g)	石材
14 第56図	P L 52	土製品	玉	埋土	完形	長 1.00 幅 1.32 孔 0.20 重 1.20	

128号住居

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	計測値	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
1 第60図	土師器 杯	竈 1/4	① 12.8 ③ 4.9	①細砂粒 ②良好 ③橙色	内面黒色処理。口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下位から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部に粗い斜放射状ヘラ磨き。	
2 第60図 P L 53	土師器 杯	竈 1/2	① 13.2 ③ 4.9	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下半から底部は不定方向ヘラ削り。内面口縁部は粗い斜放射状ヘラ磨き。	
3 第60図 P L 53	土師器 杯	床上 4 cm 完形	① 13.2 ③ 5.2	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下半から底部は不定方向ヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
4 第60図 P L 53	土師器 杯	床直 完形	① 13.0 ③ 5.6	①細砂粒 ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下半から底部は不定方向ヘラ削り。内面は斜放射状ヘラ磨き。	
5 第60図 P L 53	土師器 杯	南貯蔵穴 埋土 ほぼ完形	① 12.4 ③ 6.1	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部は横ナデ、中位はナデ、下位は横方向・底部は不定方向ヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
6 第60図 P L 53	土師器 杯	床直 ほぼ完形	① 13.8 ③ (4.5)	①粗砂粒 ②良好 ③明褐色	口縁部上位は横ナデ、中位にナデ部分が残る、下半から底部は不定方向ヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
7 第60図 P L 53	土師器 杯	竈 2/3	① 13.6 ③ 6.4	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下位から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
8 第60図 P L 53	土師器 杯	南貯蔵穴 完形	① 12.6 最大 13.0 ③ 5.1	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
9 第60図	土師器 杯	南・北貯蔵穴 竈 1/4	① 12.4 最大 13.2 ③ (5.2)	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下位から底部は不定方向のヘラ削り。	
10 第60図 P L 53	土師器 杯	南貯蔵穴 床上41cm 完形	① 11.8 稜径 12.0 ③ 5.3	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部は不定方向のヘラ削り。	
11 第60図 P L 53	土師器 杯	床直 床上32cm 3/4	① 12.8 稜径 11.6 ③ 5.6	①細砂粒、褐色粒 ②良好 ③明褐色	口縁部は横ナデ、底部は不定方向のヘラ削り。	
12 第60図 P L 54	土師器 高杯	竈 脚部の一部	① 13.6 ④ 8.8	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下位はヘラ削り、脚部は横ナデ。内面は杯身口縁部に斜放射状磨き。	
13 第60図 P L 54	土師器 高杯	床直 3/4	① 14.8 ④ 9.4 ③ 9.1	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部上半は横ナデ、中位にナデ部分が残る。下半は横方向のヘラ削り。脚部は横ナデ。	
14 第60図	土師器 高杯	床直 口縁部片	① 17.0	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部は横ナデ、内面は斜放射状ヘラ磨き。	
15 第60図	土師器 高杯	床直 1/4		①細砂粒 ②良好 ③橙色	杯身内面黒色処理。杯身下半はヘラ削り。内面杯身は一部にヘラ磨き、脚部はヘラナデ。	
16 第60図 P L 54	土師器 短頸壺	南貯蔵穴 底部欠損	① 10.6 最大 12.6	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部は横ナデ、口縁部下にナデ部分が残る。体部は横方向のヘラ削り。	
17 第60図 P L 54	土師器 甌	南貯蔵穴 完形	① 13.6 ② 2.8 ③ 9.1	①粗砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口唇部は横ナデ、胴部は縦方向のヘラ削り後粗い横方向のヘラ磨き。内面はヘラナデ。	

18 第61図 P L 54	土師器 甌	床上7cm・ 11cm ほぼ完形	① 23.1 ② 8.7 ③ 24.2	①細砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部は横ナデ、胴部は上位にナデ部分が残る横方向、中位縦方向、下位横方向のヘラ削り。内面胴部は縦方向のヘラナデ。
19 第61図 P L 54	土師器 甌	竈 北貯蔵穴 1/3	① 24.0 ② 9.2 ③ 27.6	①粗砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部は横ナデ、胴部は大半がヘラ削りであるが一部横方向のヘラ削り。胴部は縦方向のヘラナデ。
20 第61図	土師器 甌	竈・床上31cm 胴部下位	② 8.0	①細砂粒、褐色粒 ②良好 ③橙色	胴部は縦方向と部分的な横方向のヘラ削り。底部孔の周囲もヘラ削り。内面は縦方向のヘラナデ。
21 第61図	土師器 甌	貯蔵穴 口縁部～胴 部上半片	① 13.4	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部は横ナデ、胴部は横方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。
22 第61図	土師器 甌	床直 ほぼ完形	① 17.2 ② 7.1 ③ 31.6	①細砂粒 ②良好 ③淡黄色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部は上位が横方向、中位は縦方向、下位は横方向、底部は不定方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。
23 第61図	土師器 甌	竈 完形	① 16.7 ② 6.2 ③ 33.5	①細砂粒、褐色粒 ②良好 ③橙色	口縁部は横ナデ、胴部は縦方向のヘラ削り、底部は不定方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。
24 第63図 P L 54	土師器 甌	床上7cm 底部欠損	① 17.0	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部は横ナデ、胴部は底部から頸部へのヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。
25 第63図 P L 56	土師器 甌	床直 口縁部～胴 部上半	① 16.0	①細砂粒 ②良好 ③明褐色	口縁部は横ナデ、胴部は縦方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。
26 第63図 P L 56	土師器 甌	竈 口縁部～胴 部中位片	① 16.6	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	胴部に輪積痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部は頸部へ向けてのヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。
27 第63図 P L 56	土師器 甌	竈 南貯蔵穴 ほぼ完形	① 15.1 ② 5.0 ③ 26.0	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	内外面に輪積痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部は底部から頸部へのヘラ削り、底部は不定方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。
28 第62図 P L 56	土師器 甌	南貯蔵穴 3/4	① 16.8 ② 5.4 ③ 21.4	①細砂粒 ②良好 ③褐色	内面に輪積痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部は底部から頸部へのヘラ削り、底部は不定方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。
29 第62図 P L 56	土師器 甌	床直 3/4	① 16.5 ② 6.4 ③ 30.8	①粗砂粒 ②良好 ③明褐色	内面に輪積痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部は底部から頸部へのヘラ削り、底部は不定方向のヘラ削り。
30 第62図 P L 56	土師器 甌	床直 3/4	① 16.6 ② 4.4 ③ 27.3	①細砂粒 ②良好 ③橙色	内面に輪積痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部は底部から頸部へのヘラ削り、底部は不定方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。
31 第62図 P L 55	土師器 甌	竈・床直 ほぼ完形	① 17.0 ② 6.7 ③ 34.0	①細砂粒 ②良好 ③橙色	内面に輪積痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部は底部から頸部へのヘラ削り、底部は不定方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。
32 第64図 P L 55	土師器 甌	床直 口縁部～胴 部中位片	① 22.2	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	輪積痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部は縦方向のヘラ削りであるが単位等は不明。内面胴部はヘラナデ。
33 第63図 P L 55	土師器 壺	竈 口縁部～胴 部上位片	① 18.2	①細砂粒 ②良好 ③橙色	胴部内面に輪積痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部は横方向のヘラ削りであるが単位等は不明。内面胴部はヘラナデ。
34 第63図 P L 55	土師器 壺	竈 胴部下位	② 7.6	①細砂粒 ②良好 ③明褐色	輪積痕が残る。胴部下位は縦方向のヘラ削り、底部は不定方向のヘラ削り。内面はヘラナデ。
35 第64図 P L 55	土師器 杯	埋土 ほぼ完形	① 12.7 ③ 5.2	①細砂粒、褐色粒 ②良好 ③褐色	口縁部上半は横ナデ、下半はナデ、底部は不定方向ヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。
36 第64図 P L 55	土師器 杯	埋土 完形	① 13.5 ③ 4.7	①細砂粒 ②良好 ③明褐色	口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下位から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。
37 第64図	土師器 杯	床上31cm 1/5	① 13.8 ③ (4.0)	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。
38 第64図	土師器 杯	埋土 1/4	① 12.8 ③ 5.0	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下位から底部は不定方向のヘラ削り。

遺物観察表

39 第64図	土師器 杯	床上27cm 1/3 欠損	① 13.8 ② 4.0 ③ 8.6	①細砂粒 ②良好 ③明褐色	口縁部上半は横ナデ、下半から底部は不定方向のヘラ削り。
40 第64図	土師器 杯	床上11cm 1/4	① 13.0 最大 13.6 ③ 5.3	①細砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部上半は横ナデ、下半はナデ、底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。
41 第64図	土師器 杯	埋土 口縁部片	① 13.6 最大 14.0 ③ (4.3)	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部上位は横ナデ、中位から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。
42 第64図	土師器 杯	埋土 口縁部片	① 12.0 稜径 11.0	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部は横ナデ、底部は不定方向のヘラ削り。
43 第64図	土師器 杯	床上29cm 口縁部片	① 12.0 稜径 11.6	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部は横ナデ、底部は不定方向のヘラ削り。
44 第64図	土師器 杯	床上39cm 1/4	① 12.0 稜径 11.8 ③ 5.0	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部は不定方向のヘラ削り。
45 第64図	土師器 杯	床上29cm 口縁部片	① 12.5 稜径 11.9	①細砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部は横ナデ、底部は不定方向のヘラ削り。
46 第64図 P L 55	土師器 杯	床上43cm ほぼ完形	① 12.0 稜径 12.1 ③ 5.0	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部は不定方向のヘラ削り。
47 第64図 P L 55	土師器 杯	床上43cm ほぼ完形	① 12.0 稜径 11.4 ③ 5.1	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部は不定方向のヘラ削り。
48 第65図 P L 55	土師器 杯	床上14cm・ 23cm ほぼ完形	① 12.0 稜径 12.2 ③ 5.8	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部は不定方向のヘラ削り。焼成時の歪みが見られる。
49 第65図 P L 55	土師器 杯	床上42cm 完形	① 12.2 稜径 11.9 ③ 5.4	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部は不定方向のヘラ削り。
50 第65図 P L 57	土師器 杯	床上33cm 完形	① 11.8 稜径 11.8 ③ 6.1	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部は不定方向のヘラ削り。
51 第65図 P L 57	土師器 杯	床上20cm 完形	① 11.8 稜径 12.0 ③ 5.7	①細砂粒、褐色粒 ②良好 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部は不定方向のヘラ削り。
52 第65図 P L 57	土師器 杯	床上29cm 完形	① 12.0 稜径 12.2 ③ 5.8	①細砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部は横ナデ、底部は不定方向のヘラ削り。
53 第65図 P L 57	土師器 杯	床上25cm 完形	① 12.6 稜径 12.0 ③ 5.4	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部は不定方向のヘラ削り。
54 第65図 P L 57	土師器 杯	床上39cm 完形	① 12.8 稜径 11.6 ③ 5.5	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部は不定方向のヘラ削り。
55 第65図 P L 57	土師器 杯	床上20cm 完形	① 12.1 稜径 12.0 ③ 5.7	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部は不定方向のヘラ削り。
56 第65図 P L 57	土師器 杯	床上15cm ほぼ完形	① 14.4 稜径 14.8 ③ 7.5	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部は周辺部がヘラナデ、中心部が不定方向のヘラ削り。
57 第65図 P L 57	土師器 杯	床上26cm 脚部欠損	① 13.4	①細砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、中位にナデ部分が残る、下半から底部は不定方向のヘラ削り、脚部は横ナデ。内面は口縁部上半に斜放射状ヘラ磨き。
58 第65図 P L 57	土師器 高杯	埋土、125住 1/2	① 16.9 ④ 11.9 ③ 14.8	①細砂粒 ②良好 ③赤褐色	脚部に杯身を接合。杯身口縁部は横ナデ、底部はヘラナデ。脚部は端部が横ナデの他は縦方向のヘラナデ。内面杯身は口縁部に斜放射状ヘラ磨き。
59 第65図 P L 57	土師器 高杯	埋土18cm 脚部	④ 10.0	①細砂粒 ②良好 ③橙色	脚部は横ナデ、内面はヘラナデ。

60 第65図 P L 57	土師器 高杯	床上27cm 脚部	④ 9.4	①細砂粒 ②良好 ③橙色	杯身底部に脚部を接合。脚部は横ナデ後斜放射状ヘラ磨き。		
61 第65図	土師器 高杯	床上42cm 脚部片		①細砂粒 ②良好 ③橙色	脚部は縦方向ヘラ削り後粗い縦方向のヘラ磨き。内面端部はハケ目。		
62 第65図 P L 57	土師器 罎	床上11cm 胴部1/2	頸径 6.2 胴径 11.4	①細砂粒 ②良好 ③橙色	内面に輪積痕が残る。胴部上位は横ナデ、中位から下位は横方向のヘラ削り、底部は不定方向のヘラ削り。内面はヘラナデ。		
63 第65図	土師器 甗	埋土 胴部下位片	② 8.8	①粗砂粒 ②良好 ③明赤褐色	胴部は縦方向のヘラ削り。底部孔の周囲もヘラ削り。内面は縦方向のヘラナデ。		
64 第66図 P L 57	土師器 甗	埋土 129住埋土 胴部下半片	② 9.0	①細砂粒 ②良好 ③橙色	胴部内面に輪積痕が残る。胴部は縦方向のヘラ削り。底部孔の周囲もヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。		
65 第66図 P L 57	土師器 甗	床上31cm 完形	① 16.7 ② 7.3 ③ 16.8	①粗砂粒 ②良好 ③にぶい黄褐色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部は上位が横方向・中位・下位は斜め方向、底部は不定方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。		
66 第66図 P L 58	土師器 甗	埋土、129住 口縁～胴部 中位片	① 21.2	①粗砂粒、褐色粒 ②良好 ③橙色	口縁部に輪積痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部は縦方向のヘラ削り。内面胴部は横方向のヘラナデ。		
67 第66図 P L 58	土師器 甗	床上27cm・40 cm口縁部～ 胴上位片	① 17.4	①粗砂粒、褐色粒 ②良好 ③橙色	口縁部は横ナデ、胴部は縦方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。		
68 第66図	土師器 甗	床上6cm・ 14cm・40cm 口縁一部欠	① 17.0 ② 8.1 ③ 34.5	①粗砂粒 ②良好 ③にぶい黄褐色	口縁部は横ナデ、胴部は大半が横方向のヘラ削りであるが下半の一部に縦方向のヘラ削りが見られる。内面胴部はヘラナデ。		
69 第66図	土師器 甗	床上40cm 口縁部～胴 部上位片	① 20.0	①粗砂粒 ②良好 ③浅黄色	口縁部は横ナデ、頸部は縦方向のヘラ削り、胴部上位は横方向のヘラ削り。内面胴部は横方向のヘラナデ。		
挿図番号	図版番号	種類	器種	出土位置	残存率	計測値(単位 cm、g)	石材
70 第65図	P L 57	石製模造品	白玉	埋土	完形	長 0.30 径 0.76 孔 0.20 重 0.10	緑色珪質岩
71 第65図	P L 57	石製模造品	白玉	埋土	完形	長 0.45 径 0.66 孔 0.25 重 0.20	滑石蛇紋岩

129号住居

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	計測値	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
1 第68図	土師器 杯	埋土 口縁部片	① 12.8	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	内面黒色処理。口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下位から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
2 第68図 P L 58	土師器 杯	埋土 1/2	① 15.8 ③ 6.6	①細砂粒 ②良好 ③明褐色	内面黒色処理。口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下位から底部は不定方向のヘラ削り。内面は口縁部上半に斜放射状ヘラ磨き。	
3 第68図	土師器 杯	埋土 1/4	① 13.0 最大 13.8 ③ (5.4)	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下位から底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は斜放射状ヘラ磨き。	
4 第68図	土師器 杯	埋土 口縁部片	① 12.4 稜径 12.4	①細砂粒 ②良好 ③明褐色	口縁部は横ナデ、底部は不定方向のヘラ削り。	
5 第68図 P L 58	土師器 高杯	床直 杯身1/4欠	① 18.7 ④ 13.5 ③ 15.8	①細砂粒 ②良好 ③橙色	脚部を杯身に差し込み接合。杯身口縁部は横ナデ、底部はナデ、脚部は横ナデ。	
6 第68図	土師器 高杯	埋土 杯身底部～ 脚部上位		①細砂粒 ②良好 ③橙色	脚部は横ナデ。内面口縁部に斜放射状ヘラ磨き。	
7 第68図 P L 58	土師器 高杯	埋土・127住 脚部	④ 12.8	①細砂粒 ②良好 ③橙色	杯身底部はナデ、脚部は上半が縦方向、下半が放射状ヘラ磨き。	
8 第68図 P L 58	土師器 罎	床直 完形	① 10.8 ② 3.3 ③ 12.6	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部は横ナデ後縦方向のヘラ磨き、胴部はヘラ削り後上半にヘラ磨き。内面口縁部は縦方向のヘラ磨き。	